國文注釋全書



文學博士　本居豊頴
文學博士　木村正辭　校訂
文學博士　井上頼圀

國文註釋全書

東京
國學院大學出版部刊行

源氏物語

岷江入楚

下

岷江入楚第卅六　柏木

四十八歳　匂宮二歳

正月衞門督病重事

衞門督奉文於女三宮事

致仕大臣請葛木山驗者事

衞門督與小侍從語事

見女三宮御返事

女三宮生男子事　薫大將是也

女三宮對面源氏望出家給事

山御門俄渡六條院給奉見女三宮給事

女三宮落髮事

御物氣現形事　六條御息所

衞門督任權大納言事

大將君見權大納言病事

一條宮事申付大將給事

二月柏木大納言事

三月若君五十日事

源氏見若君誦樂天詩事

四月大將渡一條宮給事

母御息所對面事

大將參致任大臣殿給事

奉見一條御息所歌事

四月大將又渡一條宮事

御息所對面給事

秋若公匍匐給事

柏木 花巻名以ニ詞幷歌ニ弄聞

河かしは木に葉守の神はまさすとも人ならすへきやとの木末か 花源氏四十八歳の春より秋までの事見えたりことし薫誕生し侍り弄 秘源氏四十八歳の四月より秋の末まてかけり 若菜下は四十七歳の十二月までなり私詞にはかしは木と楓ともあり

衛門のかんの君 河衛門を柏木と云 秘病れこたり給はて年かへりぬるとなり 弄源四十八歳なり

れとゝ北の方おほしなけく 秘此以下柏木の心也聞

つみおもかるへき父母に先たちて物思ひをさせん事なり

心は心として つみおもかるへき事を思ふ心は心にてありなからよく思へはをしからぬ身そとなりその理をさきへいひのふるなり

なのめならす思ひのほりしかと 秘摂政にも成ぬへき事也 私是はたゝ大かた心たかゝりし事歟

ひとつふたつのふしことに 花まつひとつは女三宮の御うしろみに位なとまたあさきほとにてめしよせられさりし事也 秘女三宮をとりはつしゝ事なと也弄

なへての世中すさましう 「河古今大方のわかみひとつのうきからになへての世をもうらみつる哉 聞引歌用之秘弄無引歌

野山にもあくかれん 「河古今何くにか世をはいとはん心こそ野にも山にもまとふへらなれ 聞用此歌秘弄無之仍此外の歌略之

世に立まふへくもおほえぬ 女三の御事又それゆゑに物思ひともそふ成へし

たれもちとせのまつならぬ 河六帖奥入うくも世に心に物のかなはぬはたれもちとせの松ならなくに 小町

人にもすこしうち忍はれぬへき 秘今なく成たらは女三宮もわか事ゆゑとおほしあはする事もやあらんすらんと也

なけのあはれをも 花女三宮の事なり 秘ふかく思はぬ人のあはれといへり弄同

一つ思ひにもえぬる 「河古今夏虫の身をいたつらになす事もひとつ思ひによりてなりけり 秘弄聞用此歌

われも人もやすからぬみたれ 秘我身のため女三宮の御ためかた〳〵なからへては然へからすと思ひ

とり給ふなり
なめしと心をは　源の無禮におぼさん事も死後には
直るへしと也　花 源氏の無禮也と思給はんこと也
いまはのとちめには　死期に臨ては人の恨も殘らし
との事なり
うちかへしいとあちきなし　弄 妙なり云々　秘 妙な
る語なり源もさすかに覺しいたす（めイ）へきとなり
なとかくほともなく　秘 程へてもあらはれさること
もこそあれとなり
枕もうきぬはかり　河古今 涙川枕流るゝうきねには夢
もさたかに見ねすそ有ける　聞 用此歌弄秘不引
之
かしこに御ふみ　女三宮へなり
今はかきりになりにて侍る　秘 小侍從方への文なり
聞 女三宮へ文の詞　私女三への文成へし小侍從
かたまてつかはす成へし
れもふ事もみなかきさして　秘 病者のさまなり
柏木 いまはとてもゑん煙もむすほゝれたゑぬ思ひの猶や
のこらん　河 むすほゝれもゑん煙もいかゝせん君た
にこめよなかき契を　此世をも後をもいかにいか

ゝせんもゑん煙のむすほゝれつゝ　秘 終焉の煙も
此世にとまりぬへき思ひなり云々　聞 思ひのけふ
りは消はてしと也
あはれとたにの給はせよ　御憐愍の一言あらはわか
冥暗の光にもせんとなり
侍從にもこりすまにあはれなる事　弄 柏木のめのと
のめひなり　侍從へも別に文ありとみえたり
この人もわらはよりさるたよりに　侍從なり柏木の
めのとは姨なれはかくいふなり
おほけなき心　女三宮に心かけし事
われもけふかあすかの　秘 宮の御詞なり花　河 人の
世の老を果にしせましかはけふかあすかもいそか
さらまし　聞 引之弄秘無之　女三の御身もけふか
あすかのやうにおほす故に世間の無常のあはれは
かりはおほししるとなり
御本上のつよくつしやかなるにはあらねと　秘 草子
地也　聞 草子地歟云々　河 つしやかならぬはねそ
おもしからぬ心なり
はつかしけなる人の　秘 源歟
をり／＼にまほならぬか　源の折々ほのめかす事也

かしこにまゐりぬ　柏木のもとへ侍從か行なり
れと丶は　秘父おと丶也
かつらき山より　葛城山大和七高山の一也河或物語
云役君小角住於葛城山相傳云能使神鬼汲水採薪若
不用命即以呪縛之云々文武天皇の代の人追此事歟
心つきなき山ふしなとも　致仕大臣寺々山々の奥殘
さす驗者なとをめす事なり
わつらひたまふさまの　これより柏木のわつらひの
さまをかくかゝるくま〳〵をも尋ね給ふなりけり
と云まて草子地歟
おんやうし　河陰陽師定家卿幷親行本にはおんみや
うしと書也伊勢物語にはおんやうしと書けり宇津
保物語云宮おとゞに聞え給ふ此はとかくわつらふ
を物とはせつれは女のりやうとなんいひける
このひしりも　弄おと丶の今對面し給ふを云也　秘
かつらき山よりまゐるひしりなりおと丶のいま對
面し給ふをいへり
まふしつへこましくて　弄おそろしき心也　秘つへ
〳〵しきといへる詞なりおそろしき心なり　聞河
まふしは目なり

たらにの聲たかきは　河陀羅尼花世繼物語時平公三
男敦忠中納言心ちわつらひける時藥師經をよませ
侍けるに十二神の內くひら大將と云を聞てわか首
をくゝれと云そと聞て其儘死給ぬ臆病の人に云傳
へたり　秘時平公三男敦忠中納言天慶六年三月七日
薨卅八歳彼病惱の時十二神の名號軍比羅大將と云
を聞てくびをくゝらんと聞なして絕入給事あり弄
同　私此事は敦忠卿の兄八條大將保忠の事と北野
緣起には見えたり猶可勘之其上此卷の末に右將軍
か塚に草始めて靑しと夕霧の誦し給ひしも保忠卿
の事也柏木保忠卿に思ひ寄てかけるかと覺ゆ如何
れと丶はさもしり給はす　柏木の侍從にあふを致仕
はしり給はぬなり
物わらひし給ふ　おと丶のつねならは斯樣のおかし
けなる物共とむかひ給ふへきにあらねと柏木を大
切に思ふ故に實々しくなりてあひしらひ給ふを云
かゝる物ともと　秘させる貴僧ならぬ驗者にはむか
ひ給ふこともなきを此柏木を大切に思ひ給ふゆゑ
にかく對面ある事尤あはれなり　弄させる貴僧な
らぬ驗者ともにむかひ給ふ心哀なり

かれき丶給へ　柏木の詞なり父おとゝの詞を聞て小
侍従にかれとのたまへり
さる御しうの身にそひたる　女三の宮の靈ならはう
れしかるへきとなり
身をもかへりみぬたくひむかしの世にも　伊勢物語
に云かゝるほとにみかと聞し召つけて此をここを
はなかしつかはしけれは此女のいとこのみやす所
女をはまかてさせてくらにこめてしほりけれはこ
もりてなく「海士のかるもにすむ虫の我からとね
をこそなかめ世をはうらみし　弄業平二條后をゐ
てかくしなとせし事也聞同
なほけはひわつらはしう　秘源の御威光は一段なる
と也
けにこと成御光成へし　弄命もたえす覺ゆるは源氏
のいかめしき光なれはといへり
みあはせたてまつりし　試樂の時の事也　弄あやま
ちもなきに是は酒の座敷にてのこと成へし惣して
のあやまちにあらすとなり
玉しひの身にもかへらす　河「戀わひてよる〳〵ま
とふ我玉は中々身にもかへらさりけり　聞引歌是

也弄秘無之
むすひとゝめ給へよ　河「思ひあまり出にし玉の有
ならんよふかく見えはたまむすひせよ　聞秘弄無
之
うちしめりおもやせ給へらん　柏木の女三の御さま
を思ひやる也
いまさらにこの御事よ　秘あはれなるなり
この世はかうはかなくて　弄一念無量劫也
なかき世の御ほたし　弄女三宮の御ほたしにと也
私一念五百生繫念無量劫の心歟
心くるしき御事を　弄懷妊の事なり平安なるをきゝ
たきと也
みし夢を心ひとつに　秘猫の事也弄　花見若菜卷下
かつはいとうたておそろしう　秘女三宮の御ためお
そろしきと小侍從か思へるなり
あはれはえしのはす　小侍從か心也
御かへりみ給へる　秘宮の御返事也
心くるしうきゝなからいかてかはたゝおしはかりの
こらんとあるは　秘文の詞衛門督の病躰をおしはか
りのこすことはなしとなりとあるはとは草子地な

りと云　是古來の說なり今案心くるしうきゝなか
らはいかてかはおしはからてはとなりのこらんと
あるはとは前の柏木の歌にたえぬ思ひの猶や殘ら
んとあるをうけてなるへしさて此歌に煙くらへと
はよめるなり然は只草子地とはみすして悉皆文の
詞にみるへしと云々　弄女三宮文の詞なりおしは
からぬ事はなしさなり柏木の病氣を心くるしく聞
なからいかてかおしはかり殘すへきとなりよくお
しはかると云心なりとあるはの詞は双紙のこと葉
なり文の詞をかくあるといへり云々　此とあると
云詞双紙の詞と云事如何是は此文の詞の如此ある
を柏木のさても〳〵忝きと思ひ給ふ心をこめて書
たる物なりきと〳〵此義秘以上弄　聞たゝれし
はかりと切て見るへし殘らんとあるは前の柏の歌
の末に猶や殘らん云をうけていへり歌の次にをく
るへしはやはといふにて猶よくきこえたり　私此
義秘の今案又聞の義面白し　又私云心くるしう聞
えなからは柏木の病氣の事いかてかはとは女三の
方よりいかてかすゝみとふらはんとにやたゝおし
はかりとは只心中に推量して思ひやるはかりそこ

なりのこらんとあるはとは柏の歌の末にたえぬ思
ひの猶やのこらんとあるをいへりさて歌と末の詞
とにてきこえたり此義如何

返女三宮 たちそひて消やしなましうきことをおもひみたるゝ
けふりくらへに　私柏の終焉の煙に女三も立そひて
消たらは柏のたえぬ思ひの猶や殘らんとよみ給へ
ともともにきへは思ひの殘る所はあらしとの心歟
是にて殘らんとあるはといふとかめたる所きこえ
たる歟如何おくるへうやはといへる詞もきこえた
り煙くらへは思ひをあらそふ心歟　秘 内裏順德歌
合に行路柳を定家卿「道のへの野原の柳もえそめ
てあはれ思ひのけふりくらへや此歌を院後鳥羽御
覽せられて禁忌なりとて定家卿暫勅勘ありけり云
云 井蛙抄にも記せり
いてや此煙　此歌こそ此世の思出にて侍れと也
御かへりふしなからうちやすみつゝ　秘 又御かへり
を申給ふなり
詞のつゝきもなう　詞さへしとろなるなり
あやしき鳥の跡のやうにて　私云是はたゝ病者の筆
跡のたゝよはしきをいへるなり　河 蒼頡觀鳥跡作

文字　史記帝王世記曰蒼頡又取像鳥跡始作文字史官之作盖自此始記其言行以來而藏之名曰書契

又返柏木 ゆくへなきそらの煙と成ぬともれもふあたりをたちははなれし　歌はありのまゝなるへし　弄秘不注なり

夕はわきて　秘引歌なし只煙とならん夕の心有へし

聞　引歌なし只夕は煙の時分なり　弄引歌ある歟みねすと也云々夕はわきて此歌可然哉鳥邊野にこよひも煙立ぬめりと云てなかめし人もいく程此歌古歌とて人の語るなり大かたは煙とならん時節に叶へり以上弄

とかめきこゑさせ給はん人めをも　我身なくなりなは人めもくるしからすとなり

かきみたりて　これまて文の詞とみえたり

よしいたうふけぬさきに　小侍従にかへり參れと柏のすゝむるなり

いまさらに人あやしと　秘此事ゆゑと人の思ふへきにとてなり

れいはむこにむかへすへて　河無期なり　秘無期は盡期もなく抑留する心なり

ことすくなにてもと思ふる　侍従か心なりことの外よわり給へりとみるなり

御ありさまをめのとも　秘侍従か姨なり　侍従にかたるなり

なにか猶とまり侍るましき　秘柏木の詞

その御けしきと　秘御産の氣なり

おとゝにも　源なり

御心のうちには　秘源の心なり

けしきもらさしと　弄源氏のおろそかにし給はゝ人の思ひたとらんとて殊に御祈なとを心に入給ふなり

うまれ給ひぬ　「秘薫誕生なり弄

いちしるきかほつき　秘柏木によく似てはとなり

かはるの男君なるを源のくるしくおほすなり

又かく心くるしき　花心やすきかたとはをのこゝをいふなり　秘男子はなほさりにしなし給ふもくるしからぬ方ありと源の思ひかへし給ふなり女ならはあつかひおろかにし給ひかたしとなり弄

さてもあやしや　花冷泉院の御事也　秘源の思ひつつけ給へるなり我身の因果にて有けるとなり此物

語一切むくいをかけり弄
この世にてかくおもひかけぬ事にむかはり　秘此世
にてむくいをみれは後世はさりともとたのもしき
ことなり
心ことなる御はらにて　秘ことの心をしらぬ人のお
もへるなり
五日の夜中宮の御かたより　弄秋好中宮よりなり聞
同　弄此中宮明石中宮にや末詞におほやけ事にと
あり　私云秋好中宮なり大やけ事とは面むきにこ
とことしきを云なり末の詞に院の殿上人とあり是
冷泉院なり
御かゆどんしき　河圍碁　屯食等事勘若菜巻云々
弄此かゆ如何云々
ところ／＼のきやう院のしもへちやうのめしつき所
河所々饗　廳の召次所　私是は源氏の院司とも
なり
宮つかさ大夫より　秘中宮大夫なり弄同　河宮司中
宮職大夫亮進以下なり
院の殿上人　秘冷泉院なり
内より　今上なり

ちゝのおとゝ　柏木の所労故に大かたの祝儀はかり
を申さるゝとなり
御あそひなとは　御遊はなしとなり
宮はさはかりひはつなる　是は女三の心中をかけり
さはれ此ついて　河さらはなり
むつかしけにおはするなとを　秘下心はあしく思ひ
給ふなり　かをるを源のわりなくみんともし給は
ぬなり
におはしますを　似おはしますは源に似たると心し
らぬ人のみるなるへし又ゆゝしきまてにおはしま
すをとよむへきか如何
かたみゝに　宮のかた耳に
さのみこそ　さうのみこそなり源のおろかにおはし
ますといふをほの聞給ひて源の心を察するなりさ
て此次に尼にならんの御心つき給ふなり
世中のはかなきを　秘源の詞なり
らうかはしき心地　産所なとは物むつかしき事とあ
れはおこなひなとにまきるゝ故にうと／＼しきと
いひなし給ふなり
猶えいきたるましき　秘宮の御詞なり

かゝる人はつみもおもるなるを　産の道なとにて死
ぬる人はつみふかしといへり
それにやいきとまる　出家の功徳にていきもやせん
となり
なくなるとも　うせ給はゝ勿論の事なり
つねの御けはひよりは　物はかなきさまのし給へる
かこゝにては女三の躰をとなく／＼しきとなり
いとうたてゆゝしき　秘源の詞なり
かゝる事はさのみにて　産のことなり
御心のうちには　秘源の心中なり　此御出家の事源
も心には然へく思ひ給ふなり
心おかれ給はん　秘女三宮の源氏に心おき給はんと
なり弄同　私是は源のかたより物ことに心おかれ
んとなり　秘弄の義如何我なからも之思ひなほす
ましうといふにてきこえたり
おろかに人のみとかむる　女三の女にておはせは時
時はとまり給ふ事もなくてはいかゝなり又さは之
あるましきほとに人のみとかめんなり
院なとの　朱雀なり
猶つよくおほしなれ　秘源の詞なり

かきりとみゆる人もたひらかなるためしちかけれは
秘紫上なり　ちかきためしなり弄同
山のみかとは　朱雀なり
さはかりよわり給へる人の　女三宮の産後の御さま
なり
院のいと戀しう　私年來へたていて給へる時よりも
御賀の時御對面ありていよ／＼ゆかしくおほすと
なり　女三の朱雀へ今一度御對面もなくやとかな
しみ給ふなり
つたへそうせさせ　朱雀へ女三の御心をつたへ奏し
たるなり
いとたへかたくかなしと　朱雀の御心中なり
よにかくれいてさせ給ふ　闇夜にかくれなり　河李
部王記云延長八年九月廿八日申刻法皇御加持院奏
訪上先是上詔侍臣令辨備法皇御座用大床子二脚鋪
物上加褥『奉詔役上』法皇臨御座傍腸息加薄及諸靈
男女別々なれと法皇臨幸加持事勅相似歟此時御法
名事あり
あるしの院　源なり
世中をかへりみすましう　秘朱雀院の御詞也

たうりのまゝならて　聞老少不定なれはなり道理は
老定少不定なり
この世のそしり　當時の人のそしりなり
うらやましくみたてまつり給ふ　朱雀院の御出家の
さまを源のうらやましく思ふとなり　弄涙おとすも
源なり
わつらひ給ふ御さま　秘源の詞なり
御丁のまへに　女三のれはする御帳の前に朱雀の御
座を敷なり
宮をもとかう人々つくろひ　女三わつらひ給へは人
人とかくつくろひたすけて御丁のゆかの下へおろ
し申なり朱雀への御禮なり
よゐかちのそらの　秘院御詞　夜居　加持僧
またけんつくはかりの　河驗付寛平法皇御加持の事歟
たゝおほつかなくおほし　聞驗者なとのやうに加持
のためにはあらて心もとなきの御心はかりをさな
から御らんししれとなり
宮もいとよわけに　女三のさまなり生へくもあらね
は出家ありたきよしを朱雀へ又申給へるなり
さる御ほいめくは　秘院の仰なり

ゆく末とほき人は　秘行末にみたれあらはかへりて
人のそしり給ふへしと也　私今を命の御かきりな
らは然へしもしかきりならすは行末とをくてみた
りかはしき事なと有てはと也朱雀の御用捨なり
おとゝの君にかくなんすゝみの給ふを　源氏へ女三
の心中を朱雀の仰らるゝなり　河源氏院號以後な
り此卷にもあるしの院とあり又おとゝとも多くあ
りたゝ女房なとの日來申つけたるまゝに申たるよ
し歟殿の心なり古物語の中にもかやうの事はおほ
し　私すゝみの給ふとは女三の發起しての給ふよ
しなり
そのたすけ有へき　聞出家の功徳後世のたすけと成
へき歟
日ころもかくなんの給へと　秘源の詞なり
さけなとの人の心たふらして　邪氣也　物のけのを
しへかと源の詞なり
物のけのをしへにても　秘院の御詞なり物のけのい
へるともあしかるへき事にてもあらはこそとなり
御心のうちには　弄朱雀院の御心のうちなり秘同
さしも心さしふかゝらす　源の年ころも女三へ疎遠

なりし事をおほすなり
色にいて丶うらみきこえ　源のうと〳〵しきを朱雀の色に出してうらみん事にてはなし乍去世間に思ひいふらん所もくちをしくおほせしと也
か丶るをりにもてはなれ　秘今さらには又何とせらるへきそなれはなり
世をうらみたるさまなして　秘今出家し給はん事はかた〳〵然へしと也　私よのつねの時出家なとし給ひては源へ述懐めかん所外聞いか丶なるによき時節とおほすなり
大かたのうしろみには猶　秘大かたにうしろみ申へき人はあまた有しかと源をはおやさまにおほしめしてたのもしかりしにそのかひもなきとなり　私云此秘の義いか丶いま女三宮の出家し給ふとも大かたのうしろみをは源のたのまれぬへきさまとおほすなり
たゝあつけおきたてまつりし　弄女三宮源氏をそむき給ふやうにはなくてとなりそれをあつけおきししるしにとなり　秘源をそむき給ひそとなり　私たゝあつけおきししるしには出家し給ふとも猶大かたのうしろみおほさんとなり
御そうふんにひろくおもしろき宮　秘三條宮なり薫のおはせし所なり　私朱雀より女三へ御處分なりかのおとゝも　源なり
さいふともいとおろかに　さはかり心にいれすとも大かたの御うしろみに源の疎略はあらしと也
その心はへをもみはてん　御存生のうちに源の心さしのほとを御らんしはてんとの朱雀の御心中なり
いむ事うけ給はんをたに　秘戒をうけ給はんを聞て結縁に請すへきとなり
うしとおほすかたも　源の女三へのうらみも出家のことに忘る丶なり
なとかういくはくも侍るましき　秘源内へ入て女三へ申さる丶なり
かつはつくろひ給ひてこそ　源の女三をさま〳〵こしらへ申さる丶なり
かしらふりていとつらうの給ふと　女三のさまなり源の申給ふことをうけ給はぬなり結句あしくの給とおほす也
つれなくてうらめしく　弄女三宮のつれなきやうに

て源氏を心にはうらみ給ふ心ありと也
とかうきこえかへさひおほしやすらふ　源の再往おしかへしいさゝめ給ひなと思ひやすらふ程に夜の明かたになる也
かへりいらんに道も　朱雀院の仰なり
たふときかきりめし入て　女三の出家なりめし入ては簾中なり
おとゝはえしのひあへ給はす　源氏のさまなり
院はたもとより　朱雀院は別して女三宮を御愛子にておはしませはしほだれ給ふなりかねては人にすくるゝやうにておほして源を御うしろみにし給ひしなり
かくてもたひらかにて　出家にてもせめて平安におはしませとなり
明はてぬに　朱雀の御歸寺の躰なりあはれなるさまなるへし
宮は猶よわう　女三の御さま也
えみたてまつらす物なともきこえ給はす　朱雀へ女三の御いとまこひの躰なり
むかしおほへたるみゆきに　聞　前に朱雀六條院へみゆき有しことなるへし
え御らんせられぬ　秘源のかしこまりたる御禮をえ見え參らせぬとなり弄同
らうかはしき　亂かはしき躰なり
ことさらに　わさと御山へ參りて申さんとの給ふなり
世中のけふかあすかに　朱雀の御詞也　かの御出家のみきりの事なり
またしる人もなくて　秘女三宮をあつけ給ふへき人なくてとなり弄
御ほいにはふらさりけめ　源氏の望にはなかりつらめともとなり
さまことにかはりて　秘尼になり給て此院の内に住給ふへきこともいかゝとなり又今さら山さとなとに住給ふへきにもあらすと也
さまにしたかひて猶おはしはなつましく　何篇にも樣にしたかひて疎略あるなと源へ仰らるゝなり是はちと朱雀も下心のある仰の躰也
さらにかくまて　秘源の詞なり　源のともかくもあひしらひ給はす女三の御出家のことに心もみたれ

て何事もえわきまへぬとあるも朱雀の御心中を尤と察してかやうに申給ふにや女三の御ひかことをしり給はて朱雀のおほすは御理りなるへし
ごやの御かぢに御物のけいてきて　河後夜御加持也御息所の怨霊也八ひとりをはとりかへしつとは紫上のことをいふ歟
かしこうとりかへしつと　秘紫上をいへり　弄紫上とりなほし給ふたることと六條御息所の靈なり
いまはかへりなんとてうちわらふ　河榮花物語に小一條院女御顯光公女の邪氣にて御堂の御女久しくわつらひ給ひてつひに御くしおろさせ給ふその時邪氣人につきていまこそうれしけれとて手をうちてわらひくるふよしみえたり此事歟
いとほしう心くやしう　女三の御出家も物のけのさせるなるへしさてかくいへり
宮すこしいき出給ふ　物のけのさりぬるなるへし
いふかひなうおほゆれと　出家し給へはなり
かうてもたひらかに　御出家にても御命のあれかしとなり
かゝる御事を　女三御出家のことを柏のきゝていよいよ煩のおもきとなり
女宮の　秘落葉宮なり弄同
こゝにわたり給はん事は　落葉の宮の致仕の御方へわたり給はん無用なり柏の父おとゝ母北方なとのつねにそひゐ給へは見給はんほとにと也又此きはゝわたり給はんはかろ／＼しき事かた／＼也
かの宮にかくしていま一たひ　弄柏木の女三宮の御方へ參りて見え參らせんとなり　秘柏木一條宮へ今一たひ參るへきと云々
さらにゆるしきこえ給はす　秘父母ゆるし給はさるなり
たれにも此宮の御事をそきこえつけたまふ　河兄弟なとにも　私落葉の御事を柏の誰々にもいひおくとなり
母みやす所は　秘系圖になし
このおとゝのゐたち　ゐたち居起なり　致仕大臣の懇に申給へる故に朱雀もゆるし給へるなり　秘致仕大臣なり
二品の宮の御事をおほしみたれ　弄朱雀の女三宮の事をの給ひし事也　秘女三宮の御事御心にもかな

はさるやうなれはかく思ひさため給ふなり
かたしけなう思ひいつ　柏木の心なりかく病のきはまりたる時の給ふなり
さま〳〵にいとほしけれと　落葉の事柏の心なり
たえぬちぎり　秘不堪契なり弄
御心さしありて　秘柏木此宮の事を母上へも申給なり
いてあなゆゝしおくれたてまつりて　秘柏木におくれてはゐるへきにてもなしとなり
左大辨の君にそ　秘後に紅梅の大臣といへる人なり弄　私母此方はたゝなきにのみなき給へはくはしくもえ申おかぬ成へし
心はへのとかに　これより柏木の心もちよかりし事を云也
にはかに權大納言になさせ給へり　柏木大納言人のおもくせし程あらはれたり病中任官例
よろこひに思ひおこして　任大納言の悦に心もつよく成て今一たひ參内もあらんかとおほしめしたれとそのしるしもなきなり
おもきおほえを見給ふにいよ〳〵かなしう　秘かく權大納言に御推任などあるおほえをおもへはいよいよあたらしきと也
大將君　弄夕霧或本左大將と云々轉任事等未見云々但若菜上に見えたる歟私以上弄　私たゝ右大將なるへし
御よろこひにも　秘昇進を賀せらるゝなり
このおはするたいのほとりこなたのみかとは馬車　是も昇進を賀する人のつとひたるさまをことのついてにかきたるなるへし
おきあかる事も　柏木の病のおもきことなり
おも〳〵しき御さま　夕霧のあなつりにくき躰なるへし
みたれなからはえたいめんし給はて　柏木の平臥の躰にては對面ならぬ故久しく逢給はすとみえたりされともあまり病の重りたる故に今一たひ逢ひ給はんとの對面なるへし　弄はしちかくなとは對面しかたしと也　河榮花物語粟田殿御病の中に關白になり給御よろこひに小野宮殿まゐり給へりけるを母屋の御すおろしてよひいれたてまつり給へりふしなから御對面ありてみたり心ちいとあしう侍

てとにはまかりいてねはかくて申侍るなり年比は
かなきにつけても心のうちによろこひ申ことなく
侍つれとさせることとなきほとはこと〳〵くにもえ
申侍らてなんいまはかくまかりなりて侍れは公私
に付て大小の事をも申合せんと思ひ給ふれは無禮
をもはヽからすらうかはしきかたに案内申つるな
とこまやかにの給へとここと葉もつヽかす御いきさ
しなさいさくるしけなり風のみすを吹あけたるは
さまよりみいれ給へは御いろもたかひてきよらか
におはする人ともみへすことの外に不覺に成給へ
り病中の任官臥なから客人に對面こと以下あまた
相似たり
はやうよりいさヽかへたて給ふことなく　秘　幼少よ
　りなり柏木夕霧の中なり
おやはらから　親類よりも大切なる也
けふはよろこひとて　秘夕霧の心中なり
なとかくたのしけなく　秘夕桐の詞弄
けふはかヽる御よろこひに　任官の悦に心ちもよか
　らんと夕霧の思ふにさもなきをなけくなり
いとくちおしう　秘柏木の詞なり

えほうしはかり　白衣にて烏帽子はかりきたるへし
おましの御あたり物きよけに　病中にもその用意奇
　特なり
やせさらほひたるしも　髐荘子　弄　損したる心髐
ひさしうわつらひ給へる　秘夕霧の詞也
おくれさきたつへたてなくてこそ　河新古すへの露も
　とのしつくや世中のおくれさきたつためし成らん
遍昭　私諸抄不及引歌
何事にておもり給ふと　病のさまをたにたしかにき
　かぬと也
心にはおもくなるけちめも　秘柏木の詞なり
月日もへてよわり侍りにけれは　程もなくかやうに
　よわくなりたるとなり
いまはうつし心も　河現心
祈願なとのちからにや　祈禱立願なとにて命はかヽ
　るかとなりされは御祈は身のためにとてもいきま
　しき物ゆゑくるしけれは柏の心と死期をいそく心
　ちするとなり
さるはこの世の　され共又さりかたき事は多しとな
　り　身なから口をしきこととなりと末へいひのへた

るなり
おやにもつかうまつりさして　父母にさきたては孝行をつくすへき事もならぬなりさて結句愁歎をかくる事也
君につかうまつる事もなかはの程にて　河五十を强仕と禮記にいへりなかはゝ柏木權大納言今年廿五六の程歟　河海說いかゝたゝいまなかはの程にてうせ侍ると也弄
身をかへりみるかた　私是は世間立身の事なるへし此三段のかき樣面白し孝經云夫孝始ニ於事レ親中ニ於事レ君終ニ於立レ身 開宗明義(證イ)章第一 此心おのつからみえたり以上今案也
又心のうちに　是より柏木の源へのかしこまりを夕霧に云のふるなり
何かはもらすへきと　今はのきはに中々申さしと思へともなり
これかれあまたものすれと　弄柏木語なり兄弟なとにもらしかたき事なり夕霧にこそかたりもせめとなりさま／＼なる事なれはとなり
心のうちにかしこまり　柏木の心中にあやまりあるなり
世中心ほそう　源へおそれ申ゆゑの心なり
がくそのこゝろみ　樂所　御賀試樂日也
御ましりをみたてまつり　源のそら醉をしての給ひし時の事也
いとゝ世間になからへん事も　前に心ほそうとあれはいとゝとかけり
人かすにはおほしいれさりけめと　秘源は人かすとはおほすましけれともとなり
いかなるざうけんなとの　河讒言弄秘同
ろなう(イナシ)かのちの世のさまたけ　今生に思ひ殘す事なれは勿論後世のさはりともなるへしと也
あきらめ申させ給へ　夕霧に源へ申ひらき給へとなり
なからんうしろにも　死たらん後にも也
このかうしゆるされたらん　河考辭　勘事
心のうちにおもひあはする　弄夕霧はほの心えなから女三の懷姙なとの事まて中々思ひよらさるへし
いかなる御こゝろのおにゝかは　秘夕霧の詞
かくおもり給へるよしを　柏木危急の躰を源もなけ

き給ふと也
なとかくおほす事あるにては　源は何の意趣もなきさまなり去なから柏の心に思ふ事あらはとくの給はさりしそとなり左右方申ことわるへき物をと也
とりかへさまほしうかなし　源へのかしこまりゆゑ病のおもりたると柏の宣ふゆゑに夕霧の別して後悔に思ふなり
けにいさゝかもひまありつる　秘柏木の詞弄
けふあすとしもやはとみつからなからしらぬ命のほとを　河「伊行釋つひにゆく道とはかねて聞しかと昨日けふとはおもはさりしを　今日不レ知レ死明日不レ知レ死何故造ニ作栖一安穏無常身雪山鳥唱曰也
私此事を引に不及者歟弄秘引歌もなし聞にはあり
御やういくはへ給　夕霧はその心もちは推し給とも人にはもらし給ふなと也
一條にものし給ふ宮　秘落葉宮也
院なとにもきこしめされ　朱雀院の御事
出させ給ひねとてかききこえ　手掻也柏の物をはいはて手にてまねをしたるなりよわりたるさま也
なくなくいて給ひぬ　夕霧のかへり給ふなり

女御をはさらにもいはす　秘冷泉院女御也　弄柏木のいもうと　弘徽殿なり
大將の御かた　秘雲井の雁なり弄
右の大殿の北の方　弄髯黒の室玉かつら　秘玉鬘也
やむくすりならねは　河「われこそはみぬ人こふる病すれ（あふより外に）あふひならねはやむくすりなし　弄秘以下諸抄載之
女宮にもつひにたいめんしきこえ給はて　秘落葉宮也弄
あわのきえいるやうにて　柏木の終焉也　河世皆不ニ牢固ナラ一如ニ水沫泡焔一 法花經　幻世春來夢浮世水上泡 白氏文集
としころしたの心こそ　花是は女二宮の事也　秘柏木と女二宮との中のこと
つらきふしもことになし　うらむへきふしもなしとなり女宮の御心也
とかくみしかゝりける　弄柏木の命なかゝるましき人にて女宮ともうときやうにもありしかなと思ひ出給ふなり
御息所もいみしう人わらへに　秘落葉の母みやす所

なり　私皇女なとの御うしろみまうけ給ふさへ有ましきことなるに結句みしかき御契をみやす所の思ひなけくなり

おとゝ北の方なとはましていはんかたなく我こそさきたゝめ　花　或説云致仕大臣は清愼公の御事に准してかくと覺え侍りかの右衛門督は敦敏の少將の父おとゝにさきたちてうせ給ひにしとを思へり末の御子紅梅の右大臣は廉義公の昇進に似たり廉義公は辨少將右大辨をへ給ふとみえたり世繼云あつまのかたより敦敏の少將のうせ給ひ侍ともしらで馬をたてまつりけれはおとゝ清愼公後撰にまたしらぬ人も有けり東路にわれも行てそすむへかりける

あま宮はおほけなき心も　秘　女三宮なり柏木をうたてしく思ひ給ひしかともとなり弄

わか君の御事を　薫を柏木のゆかしく思ひたるなるへし

うちなかれ給ひぬ　女三宮の御さま也

この君のいかのほとに　秘　かはるなり

物かたりなとし給ふ　秘　嬰兒のうちゑみなとするなり弄　まことの物語にはあらす

御心ちさはやかに　秘　源の詞なり

れいの御ありさまにて　秘　さまをもかへ給はすはうれしかるへき物をとなり弄

日々にわたり給ひて　源の性奇特なる也

御いかにもちひまゐらせ給はんとて　河　五十日餅

大鏡云延喜の御時そかし村上のみかと生れさせ給へる御五十日の餅殿上人いたさせ給へるに伊衡中將の歌つかうまつり給へるはとておほゆる也　ひととせに今夜かそふる今よりはもゝとせ迄の月影をみん　御返しみかとのせさせおはしましけるかたしけなさと　いはひつることたまならは百とせの後もつきせぬ月をこそみめ

かたちことなる御さまを　秘　尼宮にてましますをいへり

院わたらせ給ひて　源也

なにか女にものし給はゝこそ　秘　男子なれは此御祝の席にも尼のすかたくるしかるましきなり

おなしすち　女子ならは女の出家したるは同しすちにていまんとなり

もとの心をしらぬ　本の心なり　根本のやうをしら

ぬ也
いと心くるしうまはゆき　河六條院入道の宮のわか君右衛門督の子なるにかやうにもてなさるゝをまはゆきといへる歟一説云たとひ柏木の子なりとも女三宮の御腹致仕大臣孫なりあなかちにさほとまはゆかるへきにあらすいまた右衛門督の五旬の中なるにかやうの祝の義あるを冥加のため心くるしくとある也　秘河海兩説共に然るへし　私これはたゝ源の御實子ならぬを人のしらてかやうにもてなす體の源の心中にかくまはゆきやうの心もみえたり

御くしのすゑの所せう　花さけ尼のさまなり髪をゆはぬ物なれは也　昔は垂尼とて今世の喝食なとのやうにひたひ髪をも又末をもはさむと見えたり下詞云御くしはをしみ聞えてなからそきたりけれはうしろはことにけちめもみえ給はぬほとなりきぬなとの色は花やかなるをは不用にひ色きかちなる紅なとはきるとみえたり

木丁をひきやりてゐ給へは　源のさまなり

いとゝちひさう　女三宮のさまなり

御くしをはをしみ　河垂尼なり　女三の御くしよしと見えたり

すき／＼みゆる　秘次々也　弄過々なりかさなりたる衣の體　私次々にても　聞次々なり　又透々なりしからはすき／＼なるへし

いまやう色なと　河今様色紅なり　聴色とも今やう色ともいふなり紅にならへてはゆるし色と云紅に擬する時はいまやう色といふなり　水原抄　弄上にあり紅梅よりはこく又深紅よりはうすし近く出來たる色なれはなり

うつくしきこともの　うつくしきちてなとのやうなるなり

いてあなこゝろう　秘源の詞

すみそめこそうたて　花にひ色を墨染といふなり
秘にひ色ならかくなり給ふかうたてきとなり

めもくるゝ　秘くらき心なり　にひ色によれり弄

ふりかたうわりなき心ちするなみたの　秘涙のふりもせて今もたゆますおつる心なり弄　私涙の事舊もせて今におつるとなり

とりかへす物にもかなやと　河とりかへす物にもか

なや世中をわりしなからのわか身と思はん　闇此
引歌あり　秘かの不思儀なる事をとりかへしたき
と也
いまはとておほしはなれは　秘かく尼になり給とて
源を一向におほしはなれ給ひそとなり
御心といとひすて　源をいとひすてんための女三の
御出家そと思はゝはつかしく心うかるへきこと也
かゝるさまの人は　秘宮の御詞なり世をそむきはて
たる身なれはとなり
かひなのことやおほししるかたも　秘源の詞也柏木
の事下心にあり弄
あはれのこりすくなき世に　秘源の老者なれはなり
躬恒か歌に「いまさらに何おいつらん竹の子のう
きふししけき世とはしらすやの心あり　私云横笛
巻に薫のたかんなをもてあそふことありこゝに合
せて見るにおもしろし
大將なとのちこおひ　夕霧のをさなたちにはにぬと
也
女御の御宮たち　秘明石の女御はらの宮の事也弄
わうけつきて　秘王相あるなり　河王氣付或王家お
はしませはおはしますなり
思ひなしにや　秘柏木にゝたる也
まなこゐのとかに　眼の中なり弄　河　眼子遊仙窟又
肝腰（腰イ）　横波　眼尾なとゝかけり
宮はさしも　女三の宮は御らんしわかぬ也
たゝひとゝころの　源の心中にはかりさま〲思ひ
給へる也
けふはこといみ　かをゐの五十日の祝なり
しつかにおもひてなけくにたへたり　秘樂天か句な
り河海にみえたり　河五十八翁方有レ後靜思堪レ喜
亦堪レ嗟持レ盃祝願無二他語一愼勿二頑愚似一二汝爺一白樂
天自嘲詩樂天は子なくして老にのそむ人なり五十八
にして始て男子を生すむまれたることおそきによ
りて生遲と名付それに向ひて作りける詩なり源氏
四十八にて薫大將を生するなり五十を十取捨たる
とある本あり僻說なり　伊行釈云靜に思ひていと
ふにたへんとかきて白氏文集の此身何足レ厭一聚
虛空塵と云句を載たり
五十八をとをりすてたる　秘源氏四十八歲也　弄樂
天か詩河海にみえたり源氏四十八歲をいへり

いと物あはれに　源の心中なり
汝かちゝにともいさめまほし　弄楽天か何を引て柏木のことを下にの給へる薫に對して父に似たる事なかれとなり　弄楽天か何を引て柏木のことを下にの給へり薫に對して實父に似そことおほすらんと草子地のおしはかりていへるなり此かききまなとこそ此物語の第一ともすへけれとなり
この事の心しれる　秘女三と柏木との媒なり弄
ふたつわかん（いはん）には　秘わかためよりは女の御ためくるしと也源のいひいたし給はぬ殊勝なり弄同　あへなんとは有なんなり二をいはゝ男のためよりも女の御ためふひんなりと云なり今一つの義不相叶略之　源氏の我身のとかとは御名のあやまりに人のおもはん事をはさておきてとなりあへなんといへるは此心なり女の御ためをの給ふ也
いとなに心なう　秘薫也
心しらさらん人は　秘人の思ひよらぬことなれはにたりといふ人もなしとなり
おやたちの子たにあれかしと　秘致仕大臣柏木の母上なとに也

はかなきかたみ　弄私のこしおくかたみの子たに云云源より後の歌にや心能合ひたり　私云本歌のさたなくて可然歟以上弄
思ひあかりをよすけ　柏木の存生のさまを源のおほすなり
人々すへりかくれ　秘御祝なとはてゝなり
この人をはいかゝ見給ふや　秘源の詞也
かほうちあかめて　女三宮なり
（源氏）たか世にかたねはまきしとひとこはゝいかゝいはねのまつはこたへん　河「梓弓いそへの小松たか世にか萬代かけてたねをまきけん　弄に引く此歌なとより出たる歌なり秘同　此歌を引その種はたかまきしといふへきそとなり　面白き歌なり
ひれふし給へり　河蹀臥　女三の御さまなり
ことわりとおほせは　秘源もことわりと思ひ給ふなり
いかにおほすらん　秘宮の御心に柏木をはいかゝおほすらんと源のおもひ給ふとなり
たゝにはと　弄女三宮かなしう此事は思ひ給ふへしと也

大將の君は　秘こゝより夕霧柏木の遺言のことを思
ひ給ふなり
すこし物おほしたる　弄柏木よわりたりしとき也
をりあしういふせくて　末期にて有しかは分明に聞
給はぬなり仍不審なるなり
はらからの君たちよりは　柏木の連枝なり
女宮のかく世をそむき　弄夕霧心なり　秘夕霧の心
中に思ひあはせ給ふなり
二條のうへのさはかり　紫上の出家をはかたく源の
制し給ひしなといかさまやうあるへしとさま〳〵
に思ふ也
思ひくたくに　こま〳〵思案をめくらす也
猶むかしよりたえすみゆる心はへ　秘柏木女三に心
かけ給ひし事也　弄柏木のはやうより思ひかけし
ことありと思ひやり給ふなり
いとようもてしつめたる　秘柏木の體を云夕霧の貞
心にてかく思ひ給ふなり紫上を見給て物思ひしか
とあやまちなかりし事なるへし
よわき所つきて　秘大丈夫の心なくては身をもてそ
こなふ事ある物となり

さるへきむかしのちきり　秘因果なるへしとなり
女君にたに　秘雲井の雁也弄
御けしきもみえほし　柏の遺言を申出して源の御氣
色も見たきとなりそれにて又しられぬへき故也
はかなく過る月日も　河「物思ふと過る月日もしら
ぬまに雁こそ鳴て秋もつけゝれ　私不及此歌
御わさのほうふ御さうそく　法事の時の法服さう
そくは僧の布施なと也
君たち御かた〳〵　兄弟姉妹なと也
右大辨の君　紅梅也
われになきかせそ　秘致仕大臣也　弄父母の心をま
とはすは不孝なるなり
みちさまたけ　冥途のさはりにもとなり弄
一條の宮には　弄女二宮柏木室也　秘柏木に臨終の
對面なき事也
したしうつかひなとし給ひし人は　柏木へしたしく
奉公の人はかり時々おとつれ申なり
このみ給ひしたか馬　河大鏡云延喜相撲節のとまら
んか口惜きにと仰られつれと九月にうせさせ給て
九日の節はそれよりとゝまりけるなり其日左衛門

陣の前にて御鷹ともはなたれけるなり
そのかたのあつかり　馬鷹のあつかりなり
みなつく所なく　秘馬屋の長鷹飼等所役なき體也弄
ひはわこんなとの緒も　かやうの時は絃をはつす事
なるへし
ねをたてぬ　弄諸人涙にくらしてうもれたるなり
こゝにとまりぬる　此門の前まてさきをおひてやみ
ぬるをいふ
あはれことの　秘さふらふ人々のいへるなり　故
殿は柏木をおもひ出ていへるなり
大將とのゝおはしたるなりけり　秘草子地也　弄注
の心なりいつくにも此語類あり
辨の君宰相なとの　秘柏木の兄弟也
御みやす所そ　秘落葉宮の御母なり弄　夕霧のあな
つらはしからぬ人ときこえたり
いみしき事をおもう給へなけく　秘夕霧の詞弄
さるへき人々にもこえて　兄弟親にも過たるとなり
されとも他人は制すへきやうなければよのつねに
おなしきこ也
いまはのほとにものたまひおく事　秘一條宮の事を
遺言ありつる事也
たれそのとめかたき世なれと　秘われも人もとまら
ぬ世なれと我身のあらんかきりは奉公申へしと也
おくれさきたつほとのけちめ　柏木のさきたち夕霧
のおくれたるほとはとなり
神わさなと　日本紀云神態なり　秘二月は神事なと
しけき比なり　弄二月年中行事にみゆ
たちなからはた中々に　立なからこゝへ參らんもい
かゝとて今迄延引したると也
おやこの道の　弄況や女二宮の御心中はといへり
かゝる御なからひ　秘夫妻の事なり
なつかしうなまめいたり　夕霧の樣體也
あはれなることは　秘御息所の詞なり　弄無常のな
らひと思ひさまするとなり
としつもりぬる人　御やす所のわか身の事をいふ
さらにおほしいりたる　秘落葉宮の御さま　弄女二
宮歎の事
いまゝてなからへて　御息所の命の（落葉の宮イ）なかきとなり
かくかた／＼に　弄柏木の事と又北方のあやふく成
給ふとなり

おのつからちかき御なからひ　秘柏木と夕霧とをいふ弄

はしめつかたうけひききこえさりし事を　秘此宮を柏木にあつけ給ふこと御本意にてなかりしことゝなり　弄柏木のかたへはすゝまさりしと也　私此前の詞御息所の承引なかりしとあり此次の詞にもみえたりこゝは御息所の承引なかりし事をの給ふなり

みつからの心おきて　秘御息所の心のおよはぬにやと思ひしなり弄　致仕の懇切に申給ふゆゑ朱雀も御同心なりさらは我分別の及はぬなるへしと思ひて後には御息所も同心申せしと也

みつからの心のほとなん同しうはつようも　秘いまちと心つよくいひとゝめ申さんする物をとなり

それもかやうにしも　秘それもかく早世有へきとかねて思ひしにはあらすとなり弄

みこたちは　秘たゝみこたちはあなかちよすかさたまり給ふこと本儀と思はさる昔の心にてまをせしはかりそとなり

いつかたにも　秘中そらなるなり

何かはかゝるついてに　此思ひのついてにむなしく落葉のなり給ひてもくるしからぬことゝなり外聞を思ふ故なり

御とふらひたひ／＼に　秘夕霧の参り給ふ事は今はしめなり然れと此程人してたひ／＼尋給ふとみえたり弄

さらはかの御ちきり　花故右衛門督と二宮との御中思ふやうにもみえさりしをいまはのきはに二宮の御事なと遺言有しをきゝ給へはうきにもうれしきせはましり侍りけるとて御息所なき給へるなり

秘柏木存生の時は此宮を思はれたる様にはあらさりしなりかく人々に遺言し給へるをきけはありかたき事となり

うきにもうれしきせはましり侍りけるとていといたうない給ふ　河「うれしきもうきも心はひとつにてわかれぬ物はなみた也けり　私此引歌に不及なり

あやしう　花是よりは衛門督のことを大将の語給ふなり　秘夕霧の詞　弄柏木の性を云なり

こよなうおよすけ　秘柏木の性をいふおよすけはおとなしきなり

かゝるへうてや　早世あらんとてのことかと思ひ合するとなり
あまり世のことはりを思ひしり　花督のいつとなく物思ひかほにみえしは世間のことをふかくなけき給へるとおほえしなりすみすきては法にはつれたる心なり　秘無常の道理にて世間の榮に心をおかぬ人となり
すみ過てかゝるためし心うつくしからす　秘過不及なり　河とにかくに物は思はすひたゝくみうつ墨繩のたゝ一筋に　水原抄云大なる心なり　案之本文はまことに大きなることにいひたれとも本意はよき事もあまりすきぬれはかへりて不中用なるよしなり　私説あり以上河海
かへりてはあさやかなるかたのおほえうすらく　花かゝるためしとは上にいふ事なり心うつくしからすはよくもなき心なり道心はおこしやすくてさめやすき物といふ樣にあさやきたるとはふかき心ならぬなりかならすうすらくならひなれはさのみには心にかけ給ふなといさめし事を夕霧のかたり給ふ也　秘明なる樣なる方なり道心はおこりやすくてさめやすき物なれといさめしとなり　聞すみ過ては人とほくすさましきさまなりさやうなる人ははなやかに人ちかく和氣のなき故に至たる躰はかりにて普通のおほえなき物といふなり
心あさしと　秘夕霧をは心あさき人とおもはれし也
よろつよりも人にまさり　秘たれにもまさりて女二宮おほしなけくらんとなりかく申出すもひんなけれともなり
かの君は五六年　秘柏木は夕霧よりも五六年の兄なり弄同　聞五六ねんいつとせむとせとよむへき歟但いつれにても云々此前に二三年とあり同前なり
あいたれて　河なよひ過たるけはひをいふ歟
これはいとすくよかに　夕霧なり　健は物のつよき心也
をゝしき　弄男々しきなり秘
ことしはかりいと　河「ふか草の野への櫻し心あらはことしはかりは墨そめにさけ
いま〳〵しきすちなりけれは　弄夕霧心に女三宮をねんしたるに依て事いみしたる心なりされはあひみんことはとの給へり聞

あひみんことはと　秘こそしはかりはの歌いま〳〵しき故にすんしかへ給ふなり（逢みん事はといへりイ）夕霧の心は落葉を念（れん）するによりて（ころするイ）あひみん事はといへりあはんといふかたはかりにとる也　河「春ここに花のさかりは有なめとあひみんことはいのちなりけり　私此両首の引歌諸抄一同に載さてはしめのこそしはかりはの歌は心にうちおもひ給るへはかりにていまいましと思ひて口すさひ給はすとみえたりさて後の歌を口すさひ給へり又いま〳〵しきとは今年はかりはの歌は深草のみかさかくれ給へる時よめる歌なれは禁忌にていへる歟如何

（夕霧）時しあれはかはらぬ色に匂ひけりかた枝かれにし宿のさくらも　弄かた枝かれにしとは女二宮と柏木と二人の一人枯たるなり　秘注なし

わさとならす　夕霧のよみかくるともなくうちすんし給ふなり

（返御息所）この春の柳のめにそ玉はぬくさきちるはなのゆくへしらねは　（河古今）「淺みとり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か　私今一首畧之抄に不引也　秘御息所の歌なりめにそとは目に涙をよせてよめり弄花の行へをしらす涙はかりにてくらすとなり

いとめやすくかとありとは　秘昔更衣の中にはきこえことならぬ人なれと只今返歌し給へるやうたいめやすしとなり

ちしのおとゝ　夕霧の一條の宮より致仕大臣をすくにとふらひ申さるゝなり

御いてゐ　出居　秘つねの殿也弄

ためらひて　愁歎ゆゑ心に對面もありにくきをやうやうにして出給ふ心なり夕霧なとを御らんしては殊にあはれまさるへし

おやのけうよりもけに　河けには勝也　秘これは子の事なれはかくは有ましきことなり親の喪にこそかたちつくらぬ事にてあるなれとなり惣して此大臣は三條の宮にも實に孝をいたされぬ人也さるによりてかくかけるなるへし　弄親の孝にはおろかなりし人なれはかくいへり　河孝經曰孝子之喪親也（父母歿斬衰居憂謂之喪親也）哭弗依禮亡（已イ）容（之哭斬衰）其聲若往而不返無依遠餘音也喪事質素元容儀所以主於長也　親の喪にかたちつくろはすとみえたりそれよりも猶今前後相違の歎にやつれたりとなり一説云致仕大臣をは

三條宮の六條院に對面の時も大様なるよしを申されたりされは母宮の孝養の時よりも此時の猶なけきやつれたりといふ歟

見たてまつり給ふより　夕霧の致仕を見て別して柏木を思ひいつるなり

御中よくものし給ひし　致仕の心夕霧柏木との中よかりしことなり

一條の宮にまうてたりつる　夕霧のかたり給ふなり

軒のしつくにことならす　涙のさまをいへり

たゝんかみに　御息所の返歌はたゝうかみにかき給へるなり

なこりなう人わろし　常はほこりかに和氣ある人とみえたり

玉はぬくとあるふしの　致仕のなみたに思ひしり給ふなり

えためらひ　涙おさへやらぬ躰也

君の御はゝ君の　秘致仕大臣の詞葵上の事なり弄とあることもかゝる事も　女はおもてへ出ぬ物なれはことにふれて思ひ出る事のすくなき也

はか／＼しからぬと　柏木の事をいふ

つかさくらゐにつけてあひたのむ人々　秘我は官位のことは思はすとなり　私此義後の詞の注なり仍滅之　是は柏木は執柄たる人の息なれは官位の望につけて人のおほえ執奏をたのむなり攝關へ家禮の家とて奉公するはかやうの事也

おところきくちをしかる　柏木をたのみし人の思ふさまなり

かうふかきおもひは　弄柏木のことをふかく歎くは官位にも何にもよらすたゝことなくうらゝかなりしを戀給ふとなり

つかさくらゐ　秘我は官位の事なとを思はすと也

空をあふきてなかめ給ふ　弄私「大空はこひしき人のかたみかは物思ふことになかめらるらん　河引歌あり不用之　私只打あふき空なとなかむるは物思ふ人のさまなり

夕くれの空のけしき　河夕くれの空のけしきをみるからになかめしと思ふ心こそつけ　此歌に及はす

けふそめとゝめ給ふ　秘夕霧の御いてによりてとなり　弄夕霧のとふらひ給ひし日すこしもなかめ給ふと妙なり／＼

この御たゝむかみに　秘みやす所の歌のそはにかき
そへ給ふなり
致仕大臣
木のしたの雫にぬれてさかさまに霞の衣きたる春か
な　秘子の服なり嫡子たるによりてなりかすみは墨
によせたり　弄墨の心によせたり問云子の服衣を
親の着する事定りたる法にや一答親の子の服を着
する事勿論なり今も其分なり　聞木のした子によ
せたり
返夕霧大將
なき人もおもはさりけん打すてゝ夕のかすみ君きた
れとは　秘柏木も思ひかけ給ましきとなり
辨の君　弄紅梅のおとゝなるへし
うらめしやかすみの衣たれきよと春よりさきに花の
散るらん　秘我身のせんとの春をもうちすてたるな
り　聞たれきよとゝは子もなき心歟
大將殿の北方　秘雲井雁也
殿は心ことに　秘夕霧也　弄夕霧の北方と殿とを對
してかけり大將殿とは惣なり次の對たる語は別也
かの一條宮にもつねにとふらひ給　落葉宮を夕霧の
とふらひ給ふなり
ひとつ色なる四方の木末　おしなへたる新緑の時分
なり
れいのわたり給へり　秘夕霧也　弄夕霧一條宮へわ
たり給ふなり
庭もやう／＼あをみ出る　秘あるしもなきやと也
物のかくれ　秘かたはらのかけなり弄
一むら薄もたのもしけに　河古「君かうへし一村薄
虫の音のしけき野へともなりにける哉　私此歌利
基中將なくなりてかのさうしのさまをみてよめる
よし詞書にあり面白し
虫の音そはん秋　私前の引歌は虫の音しけきのへと
いへり　いまは夏なれは虫のねそはん秋を思ひや
りてかけるおもしろし只薄のしけりたるはかりさ
へ物あはれなれは虫のねしけからん秋はいかなら
んと也尤おもしろし／＼　秘果守僧正の歌に
「夕立の一むら薄露ちりて虫のねそはん秋かせそ
ふく
いよすかけわたして　河伊與簾　芦簾　秘服者の簾
弄服者の所の様なり問云いよすかけわたし柏木
巻に落葉宮にての事也服者の家のゆゑにや如何一
答喪家にかくのことき也

猶めおさろかるゝ色　秘衣かへしてはあれとも鈍色なれはなり
けふはすのこにゐ給へは　弄夕霧以前には内に入給はぬ如何自然の義也　聞けふは涼風をうけん爲にはしにゐ給へる歟
とかくきこえまきらはす　御やす所のわつらはしくておそく出給ふほととかくあひしらふ也
かしは木とかへてと　連理なる也　弄夕霧女宮に心をかけたるによてなり　連理の心なり　任地願爲連理枝　長恨歌
夕霧
ことならはならしの枝にならさなんは守の神のゆるしありきと　花ことならは如此ならはなりならすはなるゝ心なり葉守の神は衛門督にたとふるなり
秘如此ならはとなり柏木と楓との樣になるゝ技にてあらは右衞門督のゆるしありしと申へきとなり
葉守の神柏木に有と基俊說云々
新古
時しもあれ冬の葉守の神無月まはらに成ぬ森の柏木　弄ことならはゝ如此ならはなりならしの枝なるゝ枝になれんとなり　聞後撰枇杷大臣としてこかもとへの歌とてよめり

聞葉守の神のゆるしとは柏木の遺言をもちてよめり　河「柏木に葉守の神のましけるをしらてそ折したゝりなさるな後撰　河大和物語云枇杷殿左大臣仲平よりとしこか家にかしは木のありけるを折にたまへりけりをらせてかきつけてたてまつりける「我宿をいつかは君かならのはのならしかほには折にこせる俊子　返し「柏木に葉守の神のましけるをしらてそ折したゝりなさるな通左大臣　此贈答の心歟葉守の神は樹神の名なり　基俊云葉守神はなへての木をは非ㇾ守唯柏木をのみ守なり弘仁式の三綱柏木の所に委見云々雖然古人皆余木に詠之如何　與儀集俊成卿自筆の本には柏木定家卿本にはかしは木と有如何
なよひすかた　秘夕霧はかくなよひたる方もありけるよと也
返御息所歟女二歟
かしは木に葉守の神はまさすとも人ならすへきやとの木すゑか　弄柏木を思へり此歌御息所の歌なるへき歟　私云女二なるへし以上弄　聞返し落葉宮なり　秘御息所の返事なるへし此宿はやもめすみにて葉もりの神まさすともゆるしは有ましきと也後

撰枇杷左大臣の贈答をもつてかけり　私此返歌は
落葉宮の歌と見えたる歟
うちつけなる御ことの葉　聞此ほとの御音信か風流
なるかたからなれる淺き事となり　私薬守の神の
ゆるしありきとおとしつけて詠し給へるをうちつ
けなりといふなるへし少將君のつたへていふ詞な
り落葉宮のいとこころみゆ御息所のめひなり
うき世中を　秘御息所の詞
ほれ〳〵しくて　思ひにしつみて月日を送るしるし
となり
おもほしなけくは　秘夕霧の詞なり
よろつの事さるへきにこそ　秘いかなるなけきもか
きりある物なるをと也
さすかにかきりある　私云「こひしさのかきりたに
ある世なりせはつらきをしひてなけかさらまし此
の歌の心を以てさすかにとかけるにや以上弄
以下附箋イナシ『此宮こそきゝしよりは心奥みへ給へし
黄むへ心あさき事をはあふなき給云へり心の奥ふ
かき心にや
あはれいかに人わらはれなることをとりそへておほ

すらんとは柏木の女三におもひくつほれし事を云
歟柏木の逝去のかなしきに氣そへていへる成るへ
し
みるめにより人をも思ひあき　念此に志ふかき人の
思ひわけをれよといふ心歟あとわとかよへりわか
れをあかれと云あたりをわたりと云例なり
さるましきに心をまとはすへきそさまあしきや心さ
しもさのみふかゝらぬ人に云むつはれなんとせん
はさまあしきといへるにや
條々管見の僻案也心を明人吟味を加へらるへし』
この宮こそきゝしより　花夕霧のおもふ事なり　秘
夕霧の心なり　弄女二宮の事を夕霧の心におもひ
てかねてとひきゝ給ひし事なり
あはれけにいかに人わらはれなる事を　秘中そらな
るへきとなり　聞夕霧の心中に落葉の心をおもひ
やるなり
かたちそいとまほにも　秘女三よりもかたちはおと
り給はんとなり
なとてみるめにより人をも思ひあき又さるましきに
心をもまとはすへきそさまあしきなり　花みるめか

たちの不足なるによりて人をあくことはあるましきなり心はせこそ本にてあれとなり又さるましきにとは猶みるめをえらふへきなとはそゝろに心をまとはすことはあるましきなり一かたにさたまらぬをさまあしやといへり　秘　世間の人をいへりみるめと心はせとの二なり此二ならは心こそ本なるへけれとなりさまあしやとはさま〳〵のことをいへるはさまあしかるへしとなり　私に花鳥の義いさゝか心得かたき所ありみるめによりて人を思ひあくもわろしとなり又さるましきにとは人のぬしあるなとのさもあるましきをみるめよしとて心をまとはさんもさまあしきなりたゝいひもてゆけは心はせ肝要なりしと夕霧の思ふとなり此義如何

いまは猶むかしに　弄　此語は當座いひ給ふなり　闇　むかしにとは柏木には思ひなすらへ給ふとなり

たけたちもの〳〵しうそゝろかに　弄　たけすこし高きなり　河　たけたかき姿なり

かのおとゝは　闇　柏木なり　弄　源氏の事　秘　源氏の事と云々今案之柏木と云々かの殿といはんためなりおとゝといふにつきて源と思はるゝなり是は柏木の事にて勝るへし此院の女房は源を見たてまつることは有ましきとなりかた〳〵柏木なるへしと云々　花　院の御事をかのおとゝといへり源の御事なり

これはをゝしう　弄　夕霧なり　夕霧なり柏木はたゝたをやかになつかしう愛敬つきたるへしこれは物物しくにほやかに和氣のある躰なり

おなしうはかやうにても　落葉宮と夕霧をならへてみたく人々の思ふなり

右將軍かつかに草はしめてあをし　弄　當座庭の氣色をみてすんし給ふ此句時平のおとゝの男保忠の事也秋なりとあるを青しと取かへて吟し給ふと云々見河海　保忠の事を大將軍と作るは大將の唐名をは將軍と號して羽林大將軍幕下云々大將云々とも云又右衛門督を唐名に金吾將軍といへりこゝにあひたりと云々　花　右衛門督をも唐名に金吾將軍といへは右將軍と云に相違なきにや　秘　草初秋とあるを青しと吟しかへ給なり前に庭もやう〳〵あをみ出るわか草見えわたるとありさてかくいひかへ給ふなり柏木は金吾將軍なれはかくいへり　河天

與二善人一吾不レ信右將軍墓草初秋紀在昌 本朝秀句と云書に有
八條右大將保忠事を作れる詩なり 左大臣時平息母本康親之女 仍
近代と云也此韵字本詩は秋と有を今あらためて青
と誦せられたり其心優美なる者歟卯月の比なれは
秋の字にて季節相違也青の字にて時分も物にかな
ひ本詩の心もたかはす眼前の景氣も浮（侍イ）へり詞に庭
はやう〳〵あをみ出るわか草見えわたりこゝかし
この砌のうすきもの〻かくれ〳〵のかきはよもき
もところえかほなると如此事又准據（核イ）なきにあらす
四條大納言公任撰の和漢朗詠に陰森枯柳踈槐春
無二春色一猴（誰イ）落花牖（鋪イ）懐宇秋有二秋聲一とあるは公乘信
か連昌宮賦の中の一句なり賦には東韵の列にて有
秋風と有を色と風竜對に思はれけるにや聲の字に
取かへられたり色聲の對もこまやかに風の心もあ
りとて興あるよしいひつたへたり此物語にも霜花
重を白と誦したる所も有大方郢曲も實にかやうの
事た〻中比の先達の所爲なれとも是も定上古より
の口傳たる歟大納言成通齋院に參りて御遊ありけ
るに植木をせしことはうくひすなかせんとにも非
すくつ〳〵ほうしをなへすへてときやうせさせん
とそ思といふ今様を當座にうたひかへてかうなき
めをなめすゑてそめかみよませんとうたひたりけ
るを時の人感しけるといへり妙音院相國出家の後
は昔爲京洛盤華客といふ朗詠の下句をは江湖潦倒
僧たりとせられけり本文をかへて景氣を誦する事
不可勝計

それもいとちかき世の 秘承平六年の事なれはなり
弄私勘 大納言正三位陸奥出羽按察使繁行右近衛
大將藤原朝臣保忠承平六年七月十四日薨四十七號
八條大將時平公之一男本朝鳳笙（筆イ）元祖始歟保忠事此
物語の時代にちかしそれはさておきて惣して遠く
近くはかなき事ともをみする世中にとりわきて此
人ををしむといへり 私ちかうとほう保忠のこと
をも夕霧の見給へるやうにかきなしたり奇特なり
又若菜下に右大將の病して辭し給けるとあり其か
はりに夕霧右大將になり給へりその人なとを保忠
卿に思ひよせてかく歟是今案之義也 秘ちかうと
ほうとは今古をしむ物となり

あたらしからぬ 河惜アタラシ

うへ〳〵しきかたをはさる物にて 花うへ〳〵しき

かたとは藝能のことなり　聞 實々しき事なり　私
うへ〳〵しきは有職才幹なとの事なるへし
なさけをたてたる　私人になさけらしき體也
うへには　秘 今上の御琴の師なり　弄 今上の御事な
り柏木は今上の御琴の師なり
あはれ衛門のかみのこ　秘 そこいひつけたるまゝに
いへり
月日にそへておほかり　源は大かたの世にをしくも
又女三の御こと薫なとのことおほしいつることお
ほきとなり
このわかきみを　秘 かほる也
はひゐさりなと　秘 例のかきとめなり　若菜下の書
とめと同しきなり

蜆江入楚第卅七　横笛

四十九歳　薫君二歳
二月柏木權大納言一周忌六條院修御誦經給事
朱雀院獻筍野老入道宮給事
源氏見宮御返事給事
若君提筍給事
秋大將訪一條宮給事
御息所對面之事　大將彈和琴給事
女二宮引筝給事　贈物笛之事
大將歸我殿夢見右衞門督事　笛之事也
大將若君哯吐母君腹立給事
大將爲衞門督修誦經珍皇寺事
大將參六條院給事
三宮三つはかりにてと有匂宮ことし三歳に成給ふなり紫上の御方にましますなり
大將奉抱三宮參女御御方給事
大將奉見若君思右衞門督事
大將參六條院語申一條宮御事
又語申笛夢事

横笛 以歌爲卷名 秘云詞には只笛と計有之

河「よこふゑのしらへはことにかはらぬをむなしくなりしねこそつきせね 花源氏四十九歳の時也かほる二歳なり 秘源氏四十九歳二月までの事有柏木の卷は四十八歳の秋迄の事薫二歳匂宮三歳計といへり弄同 箋云横笛常の笛なり惣してふき物をは笛と云籥笙篳篥 聞云笛は滌也スカスノツクス、ク悪氣を除く心なり

故權大納言のはかなくうせ給ひにしかなしさを 秘柏木の薨せること前の卷にみえたり 聞柏木昇進の官をかけり 故の字班固か傳より出たりふるく成たる物をいふなり云々可勘之 箋大中納言に限りて權官か正官なり餘の官は權正差別有也

大かたにつけてたに 秘源は大かたの人をさへおしくかなしくし給ふ御心なるにまして柏木のことは一しほにおほしめすなり

いかにそやれほしいへる（ついイ） 秘女三の宮の御事なり 箋女三の事一ッこそきすにてあれ源なとのやうに天下の爲を思ふへき人はをしむへし 求二大美一者不レ瑾二小瑕一

御はてにも 秘今年二月一周忌なり 花去年二月衛門督卒去今年一周忌也六條院令修誦經給

よろつもしらすかほに 秘薫二歳なり

御心のうちに又心さし給て 秘かほるのためなり 箋聞河薫の爲に柏木の追善を別にせらるゝなり

こかね百兩をなん 河李部王記云天慶十年三月十九日御八講結願 太皇太后御柏殿設法花八講 參入于時夕講也余修諷誦調布百端南侍沙金百兩納瑠璃壺等一品（一口小イ）講（寺イ）畢薫大將のために柏木大納言追善を別にせらるゝなり

おさゝは心もしらて也 秘父おとゝ薫は實子なることを夢にもしり給はぬことなり 私致仕は源の下心をしらて只御懇切なると悦ひ給ふとなり

大將の君も 箋夕霧なりとりもちてといふも夕霧なり

一條宮をも 落葉宮なり夕霧のねんころなるなり

はらからの君たち 紅梅大臣以下なり

おとゝうへも 秘おとゝは致仕大臣うへは落葉の宮の母うへなり 箋致仕大臣同しく北方なり 私箋の義然へし一條宮のことにかきらす柏木のことを

夕霧の心にいれ給ふを父母のかんし悦ふとなり
なき跡にも世のおほえ　箋なき跡にても柏木のおほえおもきにて父母のおもひいよ〳〵てうすとなり
山のみかとは二宮もかく　箋朱雀の御心也二宮は落葉也河
入道の宮も　秘女三宮なり
此世をおほしなやましと　朱雀の後世のつとめはかりをとおほすなり
おなし道をこそ　秘女三も尼になり給へはなり箋弄
同　聞同し蓮との事なり云々
ぬき出たるたかうな　弄たかな有例　箋女三宮女にておはしましゝ時はかやうの山里ひたることはえし給はぬなり今は世をそむき給へるしるし成へし（抽イ）
河　逆筍未抽鳴鳳管　盤根纔點臥龍文　朗詠　尋泉上山遠看笋出林遅　白氏文集　大宮日記云延長六年亭子（のイ）院よりたかうなたてまつり給へり御使よしふかいねりの大うちき給ふ詞花に冷泉院へたかうなたてまつらせ給ふとてよませ給ひける花山院御製「世の中にふるかひもなき竹の子はわかへむとしをたてまつるなり　御返し　冷泉院御製「年へぬる竹のよはひはかくしてもこのよをなかくなさんとそ思ふ
山にほれるところ　河拾遺第十六春ものへまかりけるにつほさうそくして侍ける女とものの野へに侍けるをみてなにわさするそとといひけれはところほるなりといらへけれは賀朝法師延喜比定額和導師「春の野にところもとむといふなるはふたりぬはかりみえたりや君　返し
よみ人しらす「春の野にほる〳〵みれはなかりけり世に所せき人のためには
はしに　秘御文のはしにかき給ふなり弄
春の山（野イ）は霞もたと〳〵しけれは　弄春の末より笋も有へき歟
世をわかれ入りなん道はおくるともおなしところを（朱雀）君もたつねよ　秘女宮はすてにさまをかへ給ふ御身なれはあなかち山住なとしたまはすとも後世の無上菩提の道にはおくれ給ふそとなりれなしとところとは後世菩薩也　弄入りなん道とは六道父子の道各別の心（心イ）なり同し所は極楽浄土の事なり　箋世をわかれは此世を去ことなり入なん道は出家の事なりいつれも女三は朱雀よりおくるへしさりなから同し所を尋て一（十イ）佛法へ生れ給へとなり悪道にまよ

ひては互に生所知かたし同し所へ生れて互にしら
ん事は佛法ならては有ましきゆへなり
いとかたきわさになん　河地藏本願經云父子至親岐路各別縱然相逢無肯代受　秘河海に地藏本願經をひけりいかゝ是は只佛道の難解難入の心也いさめ給ふ御詞なり弄　箋是も歌の心をいひ違たる詞也
らいしともを　河罍子又疊子[畳イ]名[和]櫑子[僤イ]同上　罍音雷　又罏玉罍[選伯玉]　韓詩云天子以玉飾諸侯大夫皆以黃金士[土イ]以梓是等者皆酒器也然而我朝權模形與詩合罍とあるは酒餝なりもたひと訓せり禮記云山罍其形似壺[壺イ]容一斛刻而畫之爲雲雷之形也云々たかつきのすかたにて上はぬりをけのふたをあをのけたるやうなるものなりおきふちをたかくしたる物なり内は朱漆外は黑漆なり螺鈿樣々なり菓子なとを入らるゝなり內藏寮に被納之　秘菓子なと入る物なり河海にみえたり　箋罍子なり河海にありらいしに非すと云々文の禮紙懸紙と云
けふかあすかの　箋不及引歌　秘朱雀院の御文の詞まへに春の山はかすみもたと〳〵しけれとゝあるはし書也

おなし所の御ともなひ　女三とゝもにある御歌の心なり
ひしりことはなれと　箋前の歌佛法にかけたるを心得させんとてかくかけり　秘ひしりたちたれと面白き詞なり
われさへおろかなるさまに　源の心なりおろかなるを御覽して朱雀の彌女三をたよりなからんと覺すへし其故におなし所の御ともなひもふかゝるへしとなり
かきかへ給へる　秘かき替給ふなり書そこなひ給へる成へし　箋かきそこなひて書なほし給へるとなりさなけれは此御かへしはこゝにはみえましきなり　花入道宮の御返事書損し給へるかあるを院源の御覽するとなり
[返女三宮]
うき世にはあらぬところのゆかしくてそむく山ちにおもひこそいれ　河拾「世中にあらぬ所もえてしかな年ふりにたるかたちかくさん　弄秘箋皆用此引歌　箋朱雀のおこなひ給ふ山路へ思ひ入となり御歌とも皆面白し云々
うしろめたけなる御けしきに　箋此六條院をうき世

さの給ふはいかゝと也
此あらぬ所もこめ給へる　秘六條院をはなれ給はんことをうらみ給ふなり　弄源の心面目なしさなり
いまはまほにもみえ給はす　箋女三の尼になりたまふとまた柏木のことの故に源にまむきにならぬなり
つみえぬへく　秘尼になしたてまつることとなり
女三宮の尼に成給ひしことを源のをしく思ひ給ふなり
またいさこよなうけさほく　秘宮の御方よりは尼に成給ひて後は一向にへたてはて給へり源の御かたよりはかけはなれてはおもはさると也　箋尼に成給ふとてきは〳〵とへたて給ふにはなき也是は末に鈴虫巻にきつかりと隔てゝゐ給ふをかゝんとての筆法なり
わか君は　秘薫なり
御そてを引まつはし　秘源の御袖なり
しろきうす物に　箋文紗なとの類歟
からのこもん　秘唐の小紋也　弄唐小文云々　問云からのこもんのこうはい唐のおり物たるへき歟如何　一答可然箋からあやの紅也
すそいさなかく　箋うちきなり
うしろかきりに　うしろにひかれてたまるゆへに前のあらはなるなりをさなき體なり
ろひやかに　箋たけたかきさうなるなり
柳をけつりてつくりたらんやうなりかしらはつゆ草して　河楊柳を白糸（色イ）にたさへ鴨頭草（イナシ）花を青き色によそへたりともに現量歟
まみのひらかに　河展眉物思ひなき體なり惣して柔和の姿なり云々　秘柔和の相なり箋
いとよく思ひ出らるれと　秘源の心に柏木に似たりと思ひ給ふなり
かれはいとかやうに　秘柏木なり
宮にも似たてまつらす　女三にも薫のにぬとなり
わか御鏡のかけにも　源のわか子といひてもうてぬとなり
あはたゝしう　かほるのとりちらすさまなり　河うつほの物語にいぬ宮ははひいて給ひ物ともにとりかゝり給うてつかみこほし給へは父君の人こそいさまさなけれかゝるわさはせぬ物そや

くひものにめとゝめ給ふ也　源の戯れ宣ふなり
かきいたき給ひて　源のかほるをいたくなり
いとけしきあるかな　何とやらんたゝならぬ所のあるなり
いとけはひことなるこそわつらはしけれ　箋今より一かとある人に生れたらんするとみゆるとなり
女宮ものし給ふめり　弄明石腹の宮たちなりたはふれ事也　秘明石中宮腹の宮たちなり此薫美男たるへきとなり
かゝる人おひいてゝ心くるしきなり　聞柏木に似たらは好色ならんことをふくみての給ふなり
おの／＼のおひゆくすゑ　宮たち此かほるなとを各と云なり
花のさかりはありなめとゝ　河一春毎に花のさかりは有なめとあひみんことは命なりけり　弄柏木巻に夕霧の此歌を吟せし同歌なから心はかはれり爰にては命たのみかたしと思ひ給ふ心にて口すさひたまふなりをさなき御子たちのさかりは有へけれとゝ也　秘此歌柏木巻に夕霧のすし給へるは同歌なから心かはれりあひみんことを詮にされり爰にては命たのみかたしと思ふ心にて口すさみ給ふなり箋秘の義同しかやうにれなし歌をあひちかく引出しても心かはれる所寄(奇イ)特なり是本歌をとることの手本にしたるなり
うたてゆゝしき　秘さふらふ人々の詞也
しつくもよしと　箋よたれなとの體なり
いとねちけたる　弄源詞薫のことなりねちけたるはよからぬよしなり　秘源の詞薫のことなりねちけたるとはよからぬなと云心なり筍をくひ給ふさまなり色好かなと行末に好色をたつへき人なるにとたはふれての給ふなり　花鳥の説いかゝ箋　花昔の衛門督のことを云なり又薫のをさなたちを云か重案若君の行末の事をの給ふは猶勝説成へしねちけたるは口きゝかましき心なり好色の道につきていひことのおほかるへき心なり　色このみとは前にいまよりけはひことなるこそわつらはしけれ女宮のものし給ふ所になとの給ふるにつけてなるへし
源うきふしも忘すなから呉竹のこはすてかたきものにそありける　秘柏木の事は忘れかたけれとゝなりお

もしろき歌なり 弄うきふしも柏木のこと也花に
うきふしは柏木の事竹の子は若君なり 箋柏木の
事をは思へとも薫は愛らしきとよみ給へり 孟子
云孺子入井の事をひけり可勘之 河「今更に何生
いつらん竹のこのうきふししけき世とはしらすや
ゐてはなちて 箋笋を引とる心歟 又薫を云歟 秘
笋を引たる心歟又薫を引とるにても有へし 源の
いたき給へるを下に置き給ふをゐてはなつと云ふ
なり 又笋の事にてもあるへし 私薫の事にて然
るへし
はひおりさはき給ふ 箋是にていたき給へるをれろ
しおき給ふとみえたり
月日にそへて 秘草子地なり
この人のいてものし 秘源の心なり一世ならぬ宿縁
となり
のかれかたなる 箋因果のむくゆる事をいへり順現
業順生業順業なり 薄雲の事薫の事浮舟の事なと
なり
みつからの御すくせも 秘源の何かと思ふやうなる
に女方に心をつくし給ふとなり 弄源も不満足の

事ありとなり紫上も野分なり又女三宮に御抑事あ
りと也
あまたつとへ 紫上も式々にむかへ給はさるをいへ
り
この宮をこそ 秘女三宮なり
れもふにゐかぬ所なく 思ふに不足なる事のなきは
此女三なり
過にしつみゆるしかたう 秘柏木女三宮等の罪也罪
箋かほるをみる時は柏木の事か思ひゆるさるゝ也
又女三の上にて思ふ時はつみゆるしかたしとなり
大將の君はかの今はのとぢめに 秘柏木の遺言を源
へ申あきらめたきの心なり
ほの心えて 大かたはかりはれしはかるなり
秋の夕の物あはれなるに 秘秋へうつしてかける奇
妙なり 秋は夕霧のいかならんつゐてもかなと柏
の事を申さんと思ひわたり給ふとかきて季節をう
つしたる面白し
ふかくもえとりやらす 秘樂器とも成へし
ゐさりいりつゝ ひさしなる人のおくへ入體成へし
わか御とのゝ明くれ 花夕霧のわか御殿雲井の腹に

御子ともおほきをの給ふなり　秘夕霧の三條宮の事也弄
すたきあはて給ふに　河多集萬葉潜同上
虫のねしけき野へと　河藤原利基朝臣右近中將にてすみ侍ける曹司の身まかりてのち人もすますなりにけるに秋の夜ふけてものよりまうてきけるつゐてにみいれけれはもとよりありしせむさいもいとしけくあれたりけるをみてはやうそこにはへりけれは思ひやりてよめる　御春有助　「君かうゑし一村薄虫の音のしけき野へとも成にけるかな　秘柏木巻にも一條宮をとふらひ給ふ所に一むら薄もたのもしけにひろこりて虫のねそはん秋思ひやらるゝとあり引合てみるへき歟　柏木巻に虫のねそはん秋とかきたる末を合てここには野へとみたれたるとかきたり面白し
りちにしらへられて　秘秋のしらへおりにあへる律は女によれり弄
かやうなるあたりに　弄うつほの物語に此類あり
秘夕霧の心なり我身の實法なる所をいへり
故君のつねに　花あはれいとめつらかなるねとは柏木のひき給ひしことのねなり　秘此器は柏木の平生もてならし給ひしとなり　箋柏木和琴の上手也
この御ことにもこもりて侍らん　秘女二宮の御ことの音にそ柏木の名殘はこもり侍らんとなり弄
ことのをたえにし後より　花一條のみやす所のいらへなり女二宮の御事をの給ふなり　秘御息所の詞弄同知音をさへいへるにまして夫妻のあはひにてはいかゝひき給ふへきことにてもなしと也　河後拾なき人は音つれもせすことのをゝたちし月日そめくりきにける　昔伯牙鐘子期といひて二人の琴の好手ありけり鐘子期死して後今は聞知人有ましけれはよしなしとて伯牙琴の絃を絶てひかさりし事也
院の御まへにて宮たち　花朱雀院の御前にてのことなり　秘女二宮はことなとよくひき給ふときゝしとなり弄　箋朱雀院も女宮たちの御琴には女二宮の御ことなとよしと御さため有しと御息所の夕霧にかたり給ふなり　私弄秘聞等には夕霧の聞及ひしやうにありいかゝ
よのうきつまにといふやうに　河淺茅生の小篠か原におく露そ世のうきつまとおもひみたるゝ　秘引

歌右の歌を用る弄箋同　只今は和琴なとひかんも
柏木の事を思ひ出るつまとなるへしとて物うくし
給ふとなり女三宮の事萬事如此怨者其吟悲にて事
にふれてあはれを催す物なれはと御息所女二宮の
御心をおしはかりての給なり　箋秘の義に同しあ
さちふの小篠か原は此一條宮のあれたるさまかけ
ていへり
いとことわりの　秘夕霧の詞也
かきりたにあると　河いかて世中うらみはつへき伊
行釋としへて物はおもはさらまし奥入「こひし
さのかきりたにある世なりせはつらきをしゐてな
けかさらまし　秘こひしさのしつらきをしゐてな
けかさらまし弄同　かきりもなき物思ひとなり夕
霧の心に二あり柏木を思ふ心にて下には女二宮を
思ふ心あり弄同　箋引歌　年へて物はおもはさらま
し　去年の柏木のわかれなれはかきりは有物なら
は忘れんする時分そとなり夕霧の詞下には落葉を
おもふ心あり
ことはをおしやり　花夕霧のひき給ふことをおしや
り侍るなり

かれ猶さらは　花御息所の詞なり
こゑにつたはることもやと　秘御息所夕霧にひき給
へとすゝめ給へるなり　弄以樂傳情事あり　夕霧
は柏木と知音の事をいへり　箋器に殘りたる聲な
らは昔にかはらぬ聲をやつたへんとなり
耳をたにあきらめ　河如聽仙樂耳暫明琵琶引　秘弄
箋引之
しかつたはる中のをは　河和琴第二絃なり　花夕霧
の詞なりみすのもとにおしよせたるは宮にひかせ
奉らせ給へとの心なり箋　秘夕霧詞夫妻の御中な
れは何としても宮の御ことのねにこそつたはるへ
けれと也箋　弄柏木より女二宮へつたはるへきを
きかんとなり中のを又中といはんとてなり見河海
しひてもきこえ給はす　秘用意あるさまなり
月さしいでゝくもりなき空にはねうちかはす雁かね
もつらをはなれぬうらやましくきゝ給らんかし
河古白雲にはねうちかはしとふ雁の數さへみゆる
秋の夜の月「秋風につらをはなれぬ雁かねは春は
くるともかへらさらなん　秘雁不亂行之心也弄
花女二宮今は獨ねの時分なれはかくいへる也　箋

うらやましく落葉の心を思ひやる夕霧の心なり
さうのことをいとほのかに　御息所ひき給ふなり 聞
秘 和琴をはひき給はておりふしの感にたえすして
箏を引給ふなり　箋 さうのことは和琴なとのやう
にこと／＼しくはなきなり　私此箏女二宮のひき
給へるやうにみゆ夕霧のとまりはてしなとあるも
女二宮とみえたり

ひはをとりよせて　夕霧の和琴をはみすのもとへさ
しよせたれはそのまゝをきて琵琶をひき給ふなり

さうふれんをひき給ふ　河 想夫戀平調也　花 夕霧の想
夫戀をひきてきこえ給ふ詞なり思ひをよひかほな
りとは女二宮の御心をいふなりことゝはせ思ふへ
くやとてとは此曲をは昔をおほしいてゝもしもや
とくはへ給ふとそ思ひよりてひき侍ると也　秘 夕
霧ひはをは彈し給ふなり　箋 想夫戀又相府蓮の說
あり　柏木をしたふ心面白し

おもひおよひかほなるも　秘 夕霧卑下の詞也弄同
箋 夫をおもふといふ事をこなたからすゝめ參らす
るは柏木の事なかゝら我身にかけたる樣なりといふ
なりなき人をしたゝ樂にてはなし夫をおもふにつ
きてなり　聞 こなたから女二宮の御心中を推量し
かほなるはいかゝとなり此義然へし

ことゝはせ給ふへくや　弄 柏木の事を思ひて想夫戀
にくはへ給へとなり

ましてつゝましき　花 想夫戀は女のおもふさまにひ
くましき曲なり　秘 猶はち給ふ心のあるなり　弄
柏木のゆへはち給也私只ことをひくさへなりまし
て想夫戀はとなり

夕霧 ことに出ていはぬもいふにまさるとは人にはちたる
けしきをそみる　河 心には下行水のわきかへりい
かて思ふそいふにまされる　花 夕霧の讀侍りこ
とにいてゝいはぬは想夫戀を引給はぬ心也　秘 夕
霧の歌なり云ぬはいふにます心にてことくはへ給
はぬとなり　弄 女二宮の柏木のことにはち給ひて
ひき給はぬこと歟云ぬか云にまさると云心にてさ
しいらへもなきとなり人にはちたるけしきはとな
り　引歌 心には下行水云々　箋 ことにいてゝは琴
をかるなり人にはち給ふけしきをみれはいはぬは
いふにまさる御心ふかきのいよ／＼しらるゝと也

たゝ末つかたを　秘 樂のすゑつかたなり　箋 今の歌

にて末つかたをすこしひき給ふなり　花女二宮和琴をひきて想夫戀の末つかたをいさゝかつけ給へるなり　箋和琴をひき給ふなり

返落葉

ふかき夜のあはれはかりは聞わけとことより外にえやはいひける　花女二宮の返歌なりことのねにうつる外にさらに詞をはかはさぬと也　弄大かたの時節に感しなからとなりことより外に言にいいててはいかゝあらんいはぬをまさるといふ心にてはなしとなり　秘大方の時節を感してかく樂の末つかたをもひくより外の心はなしとなり下の句の義弄同し　箋ふかき夜のあはれは月さし出羽うちかはす雁かねはたをむき秋風なとの時節の感也このあはれを言に出せはあはれはなき物なり心には聞わきたれとも詞にはのへられぬと也

ふるき人の心しめて　秘想夫戀のことなり夕霧の心にしめて思へるなり　花是も想夫戀のことなり　秘和琴ならは柏木のてなれし琴といへりそれをふるき人の心しめてと云ふ歟

うらめしきまて　秘夕霧の心なり

すき／＼しさをさま／＼　夕霧の詞なり　箋これは打くつろき過て風流めきたるさなり　私さま／＼ひき出とは和琴琵琶を夕霧のひきし事歟

むかしのとかめやさ　花故右衛門督のあらはとかめらるへきことをいふなり　秘柏木の事也弄

この御ことゝものしらへかへす　箋夕霧のかさねてまいらん時も今夜のことく打くつろかせ給へといふなりしらへかへすは心の事をかけていふ也明石巻にもみえたり

ひきたかふる事も　花是も琴をかけていふ歟落葉の事をもまはならすうちにははすとなり

こよひの御すきには人ゆるしつへく　花人ゆるしきこゆるとは女二宮の御琴もてつくし給ふへかりし事をいふなり殘りおほくてなんとていふまては夕霧の詞なり　秘草子地なり花鳥の説いかゝすきすきしきをさまさまにと云詞をうけたり今夜のあはれさには誠にすき／＼しきも人ゆるすへしと草子地のことわり事也　弄御息所の詞也禪閤云夕霧の詞云々　今夜の面白さには夕霧の樣も人ゆるすへしとなり只人々の思ふよし可然歟　私云人ゆる

しとある花鳥のことく夕霧の詞玉のをと云までなり玉のをと云はいつれに琴の縁にていへる詞なり又云是をみやす所の詞に悉皆して今夜の面白さには夕霧のこゝもとにての物の音も入ゆるすへきをいにしへ語にまきらはして打とけても夕霧のひき給はねは玉の緒にせん程もなきとなり此時は戀にあらすたゝ命のふる程もあらはさぬ（そイ）となりなんとてはおくり物といふへきも可然哉　以上弄　私弄花の後の義尤悬案にかなへりすき〳〵しさをさまさまひきいてゝも御覧せられぬるかなと夕霧の宣へは御息所の返答にかやうのすき〳〵しさはたれもゆるしたてまつらむとなり此以上弄花の義尤然へき歟

そこはかとなき　秘夕霧の詞御物かたりにおもひまきれたるなり　弄いにしへかたりにおもひまきれたるなり　私此段右に弄花の注する分よし然は御息所の詞なり　箋は前にみへたり

玉のをにせん　河「かた糸をこなたかなたによりかけてあはすは何を玉のをにせん　秘引歌用之　只大かたの御物かたりのみにて心の程のあらはれすはとおもふ心もまきれぬるとなり　かた糸ををによれり」あはんことまては思はすされはのこりおほしとなり　私是も先の注のことし此両段秘弄の義相違あり先段の注を用へし然らは引歌にをよはさるなり

御おくり物に笛をそへて　別におくり物あるにそへたるなるへし　花

これになんまことにふかき事も　御息所の詞也前に夕霧の詞に此琴にもこもりて侍りむかしとある詞をうけたり　此巻の末に此笛の由来を源のの給ひしなり陽成院より傳たるよしありそれをこと〳〵しく女房のゝ給はんも似あはぬやうなれは心にこめての給へり　花向秀過山陽舊居聞隣人吹笛作思舊賦

かゝるよもきふに　花蓬生のやとにうつもれんにとおほして奉るとなり

御さきにきほはんこゑなん　河いまの笛の音の大將のさきの聲にあらそふへきといふ也きほふはあらそふなり　秘御さきの聲にあらそひて笛の聲のせんをきかまほしさとなり弄箋

につかはしからぬ随身　花御前のこゑとはみやす所のの給ふにつきてにあはぬ随身とは夕霧の申給ふなり笛を随身してまかへる心なり　秘さきの聲との給ふにつきて随身といへり身にしたかふへきもいかゝとなり箋弄

よとゝもに身にそへて　秘柏木の秘藏せし物そとなり　箋前の和琴に對してこれもけに也と云々

これかねのかきりは　花故右衛門督のの給ひし事をいまおもひ出したるなり　箋此笛は器の音の分際（限イ）そのこりなく吹いたす事はならぬと柏のいひしとなり

おもはん人につたへてしかな　箋笛をよく吹て執心する人に此笛を相傳したきといひしとなり

はんしきてうのなからはかり　盤涉調　なからはかりは盤涉の調子なるへし

むかしをしのふひとりことはさてもつみゆるされ侍けりこれはまはゆく　河ひとりことは琴によそへたるなりまはゆくは昔の右衛門督の笛の音に思ひくらへられんはまはゆしとなり　秘和琴をひきし事はゆるされ侍るへし此笛の音はえ吹とほささるよし柏木のゝ給ひし物をまはゆしとなり　弄柏木を忍ふによりて和琴ひきしことはゆるされ侍へし此笛をつたへん事はいかゝとなり

御息所　露しけきむくらの宿にいにしへのあきにかはらぬむしのこゑかな　弄御息所歌也　秘笛を虫になしてよめる妙なり八雲にもこゝをのせ給へり箋　虫の聲に笛の音を比するなり八雲御抄にもひかれ侍り
文選長笛賦云蜂如聚蟻如集同衆音猥積云々

返夕霧　よこ笛のしらへはことにかはらぬをむなしくなりしねこそつきせぬ　河横笛一聲天地秋　弄柏木の事をむなしく成しと云也　秘柏木は所作の音聲は盡せす忘れかたしとなり　箋笛は中の空虚なるなりけれは空しく鳴しといふ心なり音こそ盡せねは夕霧の我事をいふ　花國史云仁明天皇承和元年正月辛未内宴於仁壽殿是夕初授正六位上大戸首清上外從五位下清上能吹横笛故預此思粹　今案横笛二字の出所なりむなしく成しねは笛のねにわかなくねをそへたるなり

此宮に心かけ　夕霧は落葉宮を心かくるよし雲井雁に人のつけたるなり

ねたるやうにて　秘雲井の雁なり
いもと我といるさの山のと　秘催馬樂也　河いもと
我といるさの山のやあらゝきてなとりふれそやか
はまさるかにやとゝまさるかにや催馬樂呂 妹與我　弄見河
海いもと我をうたふ心如何　私云只今雲井の雁の
所へ歸たれはいもと我とゝいふをうたふにや聞
箋夕霧と雲井の雁と歟　下の心は落葉宮歟云々
こよひの月をみぬさとも　弄里とかける殊勝なり
秘里といへる殊勝なり人と云へきを人さいひては
優ならさるへし
はしちかくふし給へり　秘名殘あかぬ心なり
かゝる夜の月に心やすく　秘弄箋河の引歌を用　河古
「かくはかりおしと思ふ夜をいたつらにねてあか
すらん人さへそうき
聞しのひ給ふ　箋聞しらぬやうになり
君たちのいわけなく　秘夕霧の御子たちなり
ありつる所のさま　秘一條宮なり
この笛をうち吹　おくり物の笛なり
いかなれは故君　秘柏木の心にもいれ給はさりしを
いへり　弄柏木の女二宮をあしらひ給ひし様をい
へり
みおとりせんことこそ　秘ちかくてはいかゝとなり
弄御かたちのすくれぬとなり　夕霧も落葉をみそ
めたらは柏木のやうにうさ〱しくならんすらん
となり
大かたの世につけても　秘世間萬事かくのことき物
なり　弄かきりなく聞てみおとりすることもあり
となり　箋大かたの世につけてもとは世間のいひ
ふらしたる事は曾て跡かたなき事（イナシ）はなき物なりさ
れは落葉の御かたちすくれぬと聞及ひたるはさて
あらんとなり
わか御中の　弄雲井の雁と夕霧との中なり
おこりならひ給へるも　弄夕霧の貞心にてこのみつ
る女の外は又別の心なきによりて雲井の雁のおこ
りえんせらるゝ事あるを云也　秘ならひなきこと
なる故に加樣のありきこさも雲井雁はあるましき
ことさえんし給へるなり
すこしねいり給へる夢に　秘夕霧の夢なり
たゝありしなからのうちきすかた　柏木病中に對面
のさまなり

夢のうちにも　夕霧の夢心なり
わつらはしう　秘夕霧の心なり　笛の聲をたつねて
と夢に思ふなり

夢中に柏木歌

笛竹に吹よる風のことならは末の世なかきねにつたへなん　花右衛門督の夢中に聞えたる歌なり思ふかたにことに侍りきとは女二宮をもうしろみ給へとのこゝろにや　秘夢中柏木の歌なり此しらへの如く風につたはる物ならはわかれもふかたへ傳へたきと也　弄風とは息にて吹ゆくなりみな風なりことならはとは音律はみな聲の詞に付て吹傳ることなりその如くならはわかつたへんと思ふ薫につたへよとなり末のよなかきはかほるの方へ傳むとなり次第かあるへきやうならはなり思ふ方ことに花鳥女二宮の事とあり不可然歟
思ふかたことに　秘花鳥に女宮の事と云ゝいかゝ
箋それをわたしたき方のあるといふなり
とはんと思ふほとに　そのつゝきをと夢心に夕霧のとはんと思ふなり
この君いたうなき給ふて　夕霧の夢をさましたる若君なり

つたみなとし給へは　河哯咀　花順和名云哯吐（つたみ）　小兒口哺乳冷熱不調所致也　今案小兒の乳をあますことなり弄　秘哯吐　唐旬胡典功小兒歐乳也又不顧面吐也
うへも御となふら　雲井の雁なり
みゝはさみして　弄髮を耳にはさみたるなりいやしきさまなり雲井雁の體也
いとよくこえて　秘雲井雁也
御ちはいとかはらかなるを　弄乳のいてさるなり秘
うちまきちらしなとして　箋散米のことなり　仔細のあることなり大嘗會にもある事也
なやましけにこそみゆれ　秘雲井の雁の詞也
いまめかしき御ありさまの　箋落葉のことを思ひてさま〳〵にかこちなし給へるなり
うちわらひて　夕霧のさまなり
あやしき物のけのしるへや　夕霧の詞なり
いたりふかく物をこそ　子のおやになり給ふから分別のあかりたると呼したるやうにの給ふなり
いて給ひぬ　秘雲井雁の詞也　むさとしたる體を火のさやかなれはさすかにはちてかくのたまふなり

まことにこの君なつみてむつかり　河煩（ナツム）萬葉也　誠にそれよりわつらひ給ふなり　柏木の夢に來りしによりて何となくおそはれ給ふなり

人の心とゝめて　箋人の執心をとゝめたる物はつたへのちかふてあしきことのある也さしてこれは女の方よりの御相傳なれは柏木のいかゝと思ふらんとなり

かの今はのとちめに　秘臨終の一念に生處は定るといへり

おたきにすきやう　秘柏木の葬も此所にや諸人の葬所なれはなり　箋おたき也　河とちめは閇眼の時分なり臨終一念生處是定經文也　貫之集云世中心細くおほえてつねの心ちせさりけれは源公忠朝臣の許に此歌をなんよみておくりけるあひたことに病重くなりてむなしく成にけり「手にむすふ水にうつれる月かけのあるかなきかの世にそありける返しせんとおもひしもせぬほとにうせにけれはきゝおとろきてあはれかりてかのおくりし歌のかへしにくはへておたきに誦經させて深草にてやかせけるとそ

又かの心よせの寺にも　箋柏木の別して歸依の寺なるへし　秘致仕の大臣方の寺成へし極樂寺なとに准す藤うら葉にあり

たちまちにほとけの道に　秘僧に施せんもいかゝとなり　箋誦經の布施にもと思へとも名物なり又人の執心ありてつたへたく思ふ物なれはそれも道理にかなふましきとなり　花康保四年七月村上天皇六七聖忌小野宮被修諷誦和琴横笛等爲衆僧布施菅三位諷誦草云有一龍笛盖希代之名物也云々

六條院に　夕霧の源へまゐるなり

女御の御かたに　秘明石の女御なり弄

三宮みつはかりにて　秘匂宮なり　花三宮は匂宮の事なり女御の御かたにましますなり

こなたにそ又とりわきて　秘紫上也　弄三宮は匂宮也紫上の女一宮をも猶子にし給ふこと也夕霧紫上のかたへ參り給へるなり

大將こそ　秘三宮大將をよひての給ふなり弄

宮いたきたてまつりて　三宮の我との給ふなり

あなたへゐておはせ　花あなたは入道宮の御方をいふおなし西對にましますなり　私云是は源の女御

の御方に座すをしらて夕霧の紫上の方へ參り給へは三宮のいたきて女御の御方に源のおはするゆゑ行給へとの給ふなり花鳥の義いかゝ

みつからかしこまりて　弄三宮のすこしかしこまり給ふなり　秘我身と御身をかたしけなけにの給ふなり

うちわらひておはします　夕霧のさまなり

みすのまへをはわたらん　秘紫上の方の御まへなり

いときやう〳〵ならん　弄夕霧の御前をわたらん事さまあしとの給ふなり輕々なるへきと也

まろかほはかくさん　箋我とわかかほはかくさん夕霧のくるしからすとなりをさなき體と云々　秘大將のかほを人のみぬやうにかくさんと也弄　私箋の義いかゝ秘弄の義然へし

こなたにも　秘明石の女御の御方へわたりてのこと也

二宮のわか君とひとつに　河二宮は今上御子蜻蛉巻に式部卿若君は薫大將也　花此わか君はかをるのことなり入道の宮の御方に二宮とあそひたまふ也　弄六條院のたつみの方紫上也南のしん殿女三宮也その中の程の間明石女御の御方歟其御方にてのさまなり秘

すみのまのほとに　花大將三宮をいたきまゐらせてすみのまのほとにすゑたてまつり給ふ也

あか大將をやとて　匂宮の吾大將をやとの給ふなり

院も御覽して　源なり　花の義わろし略之

おほやけの御ちかきまもりを　河近衞大將なり隨身も近衞の被官なれはわたくしの隨身といふ歟　秘面白き書さまなり幼少の時よりよく敎訓すへき事みえたり

このかみにきほひ申　弄三歳の御子をもいさめ申給ふなるへし

このかみ心に所さり　二宮からは御用捨のあるとなりおそろしきまてはたゝをさなき人の心かしこきといふ成へし二宮の事也

うちゑみて　秘源なり弄

公卿の御座なり　秘源氏夕霧の事をの給ふ也弄

わたり給はんと　秘源氏紫上の御方へわたり給はんとなり

宮のわか君は　秘薫なり　花かをるの事也女三宮の

わか君なり弄
宮たちの御つらにはあるましきそかしこ　箋源の御心中也太上天皇の御子なれは宮たちと別のちかひは有ましきをおこしてもてなし給はゝ柏木の事ゆゑろと也女三の御心のおにゝや思ひ給はんとけちめなくあひしらひ給ふなり私源の御孫宮たちのやうにいとほしくは有ましきなりされは女三の思ひとかめ給はんかとけちめなくいとほしみ給ふといふなり如何
此君をよくもみぬかなと　薫の事なり夕霧のいまたよくみぬとなり
二あゐのなほしのかきり　河二藍直衣のかきりをきてことはをさなき人も衣裳をはぬきすてゝ直衣はかりをきてといふなり帯しとけなき姿なり　花をさなきわらはのきるを直衣といふなりかをる二歳はかりの時の事也　秘河海にみえたり　弄問云薫二歳にてのことなり如何　一答をさなき時の直衣は指貫ひとへなとをはきすしてちひさきくひ紙の入たる物を小袖のやうにきするなりかきりといふは色はかはれとも直衣をはなれぬ心なり

なまめとまる　秘夕霧の柏木の事を心にもちてみ給へるなり弄
まなこゐなと　秘眼中なり　箋又眼ゐをかけり
今すこしつよう　かをるは柏木よりも眼に精のあるなり
いとよくおほえ給へり　花柏木の目つきに似たるを云ふなり
おとゝはかならす　源の薫の柏木に似たるをおほしとかめんとなり
もしうたかふゆゑも　柏木の子と推量に思ふ事也
ちゝおとゝのさはかり　秘致仕大臣なり
ことなのりいてくる　河子なり
いていかて　秘夕霧の心に打かへし思ひ給ふなり弄
心はへさへ　かをるの心はへよしとなり
たいへわたり給ひぬれは　秘紫上の御かた也弄
よへかの一條の宮　秘夕霧の源へ物語あるなり
ほゝゑみて　秘夕霧のすき心を思ひ給ふなり
むかしのことは　秘ふるき事歟いらへ給ふなり弄
かのさうふれんの心はへは　花是は源氏に夕霧の一條の宮にてのことかたり申給ふに女二宮のさうふ

れんの末つかたをつけ給ひしこともかたりきこえたるにやそれを源氏の批判し給ふなり想夫戀をひくほとの用意ありてこそ相應せめの心なり　秘源の語なりまことにあはれなるへき折からのことなからとなり　弄源の語なりいにしへのためしにもとは想夫戀の心にやあはれ成へき折からなからとなり想夫戀の由來にやいにしへの事を思へり

女はなほ人の心うつるはかりの　落葉の想夫戀ひき給へるもひき給はぬよりはおとれりと源のおほす心歟

過にしかたの心さしを忘れす　秘夕霧をゝしへて源のゝ給ふ語也弄

人にしられぬとならは　しられぬはをはんぬなり畢なりしられたるとならはなり

おなしうは心きよく（戀イ）て　箋柏木の遺言をたか（らイ）へしとの落葉宮への怨ならは風流の心なくて然へしとなり

さかし人のうへの御を（へイ）しはかりは（さからイ）　花これは夕霧の思ひ給ふ事なりさかしはさよかしなり源氏君の人のうへのことはもとかしく思ひ給へとも御身の上のことはさもなきよしなり　秘夕霧の心中なり源も御身の上にてはさも有ましきとなり

何のみたれか侍らん猶つねならぬ世のあはれを　秘夕霧の語なり大かたの世の常ならぬあはれなとをかたらひ申はかりなるを心みしかくてとは中絶なとしてはとなり

心みしかく侍らんこそ中々よのつねのけんきありかほに　花上の詞に過にし方の心さしをわすれすかくなかき用意なと源氏君のゝ給へるにつきて心みしかく侍らん人とはいつしかに昔をわすれたるを心みしかきとはいふなり　秘今たえ／＼ならは結句人もとかむへきとなり　箋けんきとは嫌疑ゆひをさしうたかふ事也箋聞

さうふれんはさし過て　秘夕霧のすゝめ給ひしによてひき給へることなれはにくからぬことゝなり　弄みつからすゝみ給はゝこそあらめさのみはとなり人により事によりたるをよしとなり

よはひなともやう／＼いたうわかひ給ふへきほとにものし給はす　箋落葉の年齢のことなり又そのおりさまなとをも夕霧の申給ふなり　秘年の程もさ

のみわかひ給はされはさし過てもくるしからさる
事と也
又あされかましくすき〳〵しきけしき　秘　わかみの
實法なるによりてつゝましからすし給へるかとな
り　私落葉の御年もわかゝらす生得の實々しきゆ
ゑに加様のさしいらへをも結句つゝましからすし
たるかとなり又の義夕霧の實法にて風流めかぬ故
につゝましからす打とけたるさ云歟此兩義如何猶
詞のつゝき落葉の實法なるにて可然歟　箋　夕霧の
かく申されたるは女三の宮の御事を十分ならぬや
うに思ひてかくいふなり
すこしちかくまゐりより給ひてかの夢かたりを　花
すこし近く參りよるとは夕霧の源氏の御前近く參
り給ことなり一條の御息所のおくり物に笛を給り
し後柏木の夢にみえて歌なとよみたることをかた
り申給ふなりかの聲は笛の事なり
おほしあはす　箋　源の心也　秘　源此笛をこひ給ふ也
その笛はこゝにみるへき　花　是よりは源氏のかたり
給ふ詞なり
彼は陽成院の御笛也それを故式部卿の宮　河　此式部
卿宮誰人平陽成院の御傳とあれは彼皇子歟然は元
長親王（二品式部卿母王氏）元利親王（三品式部卿母同）兩人の間歟但此人
人強管絃之名譽不聞如何案之南院式部卿貞保親王
事歟此大（文イ）王絲竹之長者陽成院御弟也尤有其寄歟
又云此式部卿宮は権齋院父桐壺御門の御弟事歟彼
を貞保親王に擬する歟　花　南院式部卿貞保親王は
笛の達者也清和の御子母二條后陽成院の御弟也そ
れを紫上の父式部卿宮になすらへてかく爰にみる
へき故ありとの給ふ也　秘　桃園成へし花鳥に紫上
の父と云々いかゝ紫上の父はいまた薨せす故式部
卿とはいふましきと也　弄　貞保親王の事（見河海）　桃
園式部卿と云々萩の宴せられしとなり貞保にたと
へての給ふなり此物語いつくも如此有之又云此陽
成院者桃園相違歟　花　式部卿紫上父有故云々但薨
事如何　箋　先帝の式部卿紫上父是に准すること有
故云々猶可聞之云々
萩のえむ　河　式部卿宮萩の宴の事可勘之　弄　桃園に
て宴有しと心得へし
女の心はふかくもたとりしらす　御息所の母儀にさ
ほとの重寶ともしり給はてむさとつたへ給へると

源のおほすなり
末の世につたへは又いつかたにとかは　秘源の心なり　花夢中の歌に「笛竹に吹よる風のことならは末のよなかきねにつたへなんと有してと也　箋源の心に此笛を薫へつたふよとおほすをいへり
この君もいたりふかき　秘夕霧も此心あるへしさ源の推し給ふなり
その御けしきをみるに　花是よりは夕霧の心なり
とみにもうち出きこえ給はねと　箋夕霧の薫のことを知ながらそらしらをして向ひ給ふと源のおほす御けしきのあるに憚りてとみにもえ申いてぬとなり
せめてきかせたてまつらんの　箋しひてといふ心なり柏木の夕霧にいひおきしことゝなり
いましもことのついてに　花夕霧笛のことをことの次に物語申給ふおほめかしうもてなしてたしかに申給はぬ心なり其次に衛門督の今はのきざみに物かたりせし事ともを源氏にかたり申給ふなり　秘今思ひ出たるやうにて申給ふなり　箋笛をよきついてそとなり
今はとせしほとに　秘柏木終焉のみきりにとなり此事柏木巻にみえたり
されはよとおほせと　花源の心なり　秘源の心なり
されはよ夕霧はしり給ひたるかとなり云々箋聞
しる人のうらみとまるはかりのけしきは　秘源の語也　夕霧の語也　私源の語歟以上弄
さていましつかにかの夢は　花かの夢は思ひあはせてきこゆへきとは笛の事をの給ふて夕霧のとひ申給ふことをはさは〳〵ともいらへなきとなり
よるかたらすとか　河孫眞人云　夜夢不順説　女のつたへとは夢を信する兒女子やうの者の所為歟
弄孫眞人　見河海　又此文ならすとも
つゝましくおほしけるとそ　秘とそとは又例の作者の筆法なり　弄紫式部か作とみせしとなり　源氏のなまいらへにし給ふ故に夕霧の申出たるをいかにおほすにかと恐怖の心也

岷江入楚第卅八　鈴虫

五十歳　薫三歳

入道宮夏供養持佛事

入道宮住三條宮給事 朱雀院御處分也

秋入道宮六條院寢殿作秋野放虫事　閼伽具等事

十五夜入道宮詠月給折節源氏君參給事

松虫鈴虫品定事　源氏琴引給事

兵部卿宮大將君等參宮御方給事

源氏戀故衞門督給事

同夜冷泉院遣御消息於六條院則參冷泉院給事

有和歌作文興事

六條院於中宮御方御物語事

中宮爲六條院御息所修繕事

鈴虫　花巻名以歌并詞　秘又詞に鈴虫のふり出たる共あり　河歌に「大方の秋をはうしとしりにしをふりすてかたき鈴虫の聲　私云詞には鈴虫は心やすくいまめいたるこそらうたけれ又源の歌に「心もて草のやとりをいとへとも猶鈴虫の聲そふりせぬ　花源氏君五十歳横笛の次の年也竪の並なり河同　秘源氏五十歳の夏より秋までの事なり竪の並なり　弄竪の並なり源氏五十歳の秋までの事なり夕霧卅歳也

夏ころはちすの花のさかりに　秘六條院の池の蓮なり

入道のひめ宮の　秘女三宮なり

御ぢぶつとも　御持佛也平生歸敬し給ふ佛を云也持經といふにおなし

此たひはおとゝの君の御心さしにて　秘御持佛をはおかれけれともいまた念誦堂は出來さる故に六條院にて源の悉皆し給へるなり

やかてしつらはせ給ふ　前にこしらへ給ふ持佛を只今念誦堂の具にくはへてかさらるゝなるへし

はたのさま　よのつねの佛前にかくる幡也

むらさきのうへそ　源よりし給ふ事をは紫上の悉皆したて給ふなり

花つくゑのおほひなとのおかしきめそめと　花机覆縑文紗目染也　應和元年五月十八日御記曰經櫃各置花足下机加花文綾覆二色綾地敷

めそめもなつかしう　秘染つくるものなり　聞今の世のかの子なとやうの物なり唐の織物なり只からあやなとに染つくる計なり

よるの御丁のかたひらをよれもてなからあけて　河四面也　花御帳の四面の帷をあけてうしろの方に法華曼荼羅をかけらるゝ常の法會の儀也　弄問云夜の御帳の樣如何一答夜の御帳は常の帳臺なり夜ぬるによりて夜の御帳とはいふなり四方にきぬのかたひらをたれたる成へし　秘佛壇に構へたり　聞此佛壇は前の持佛堂にあらす女三のつねにおはする夜の御帳をかまへたるなり　弄秘によおもてなからとは四方の帷をあくるなり

付紙あり

またら　河曼陀羅也　秘曼荼羅名義第七　滿荼邏　黄ムの本またらに

こと／＼しき花の色は　秘蓮花なるへし　弄同

みやうかうにはからの百ぶのくのえかうを　河百歩香也　弄昔は唐の方を用る也　花百ふのくのえか(ナシイ)うとかきたる本もありえかうも薫衣の心なるへし　秘唐の方にてあはせたるなるへし

あみた御けうしのぼさつ　河阿彌陀佛脇士菩薩は觀音勢至也　秘同　花觀音經云无量壽佛住立空中觀世音大勢至是二大士侍立左右云々　二大士者脇士也　秘同　河唐太宗大武皇帝爲太祖元皇帝元貞皇后造旃檀等身像三軀　延喜式云盧舍那佛幷脇侍菩薩白旃檀一龕

あかのぐ　河閼伽具也　梵語也

あをきしろきむらさきのはちす　阿彌陀經に靑黃赤白の蓮あり是はつくりはなとみえたり　弄是は花を作てあかざらに入てをくなり今もある事なり猶可尋之

かえう(よい)のほう(はい)を　秘是は日本の方なり弄同　河荷葉方也蓮花によそへらるゝ故に此方を合せらるゝ歟

みちをかくしはゝろげ(ろゝけてイ)に　秘蜂蜜なりたき物には蜜のいるをみつをのそきたるゆゑにほろ〳〵こしたるなり　弄蜂の氣をのそくなり　聞佛前なれは生るをいむ故なり蜜をとゝめて抹香のことくにたかるゝなりほゝろ(ろゝイ)けはほろ〳〵としたるなり　ひとつかほりに匂ひ　荷葉の方と池の蓮とかほりあひたるなり

六道衆生(ロクダウシユジヤウ)のために六部かゝせ給ひて　聞六部は女三宮かゝせ給ふとあり　私人してかゝせ給へるなり

みつからの御ちきやうは　秘女三宮の御持經也　私源氏自筆に書給ふなり　花天暦九年正月四日村上天皇爲母后被供養宸筆法花經有八講也

これをたにこの世のけちえんにて　秘源と女三宮と今生の契はうすく成たるによりてなり　弄

さてはあみた經　阿彌陀經是も源氏かき給ふとみゆ

はしをみ給ふ人々　秘かつ〳〵見るよりなり　弄同

けかけたるかねのすち　河計　又堺金也

すみつきのうへにかゝやく　聞けかけたるかねの光よりも源の墨つきは猶かゝやくとなり

これはことにちんのけそくのつくゑに　河沈花足机也

佛のおなしちやうたいのうへに　おなしは頂なり　ちやうたいは頂戴なり　一説云同帳臺なり經の机

を佛の頂上に安すへからさるなり此卷始にもよるの御帳のかたひらを四おもてなからあけて法花の曼陀羅かけられたりと云々佛のおはします同御帳の內に經机を安置せられたる歟云々　花御帳臺の上に佛とおなしく經の机をゝかれたるへし河海自餘の說はみなあやまりなり下の詞におましをゆつり給へは佛の御しつらひとある帳臺に佛經を安置せられたるよし分明なり　秘源の自筆の經は前に別イをくこなり其外のは導師のまへに有へし　弄沈の花足の机にすゑて今も木を廣さ三寸厚さ二寸はかりに是をけつり付て木の面を丸く穴を所々にくほめて其(それ)にしきみをも又花なと入て手向るなり則佛壇なとのかさりなり是を沈にてせらるゝにや或は又護摩の檀にもするなり

堂かさりはてゝ　法會をおこなはるゝ道場なり

かうじまうのほり　講師

ぎやうかうの人々　弄又御行道の人々とあり云々

秘行香可然也　河行香事見賢愚經云々　關白朝座夕座中間結願朝暮兩座訖彼行之諸公卿人數或八人或四人

院もあなたにいて給ふとて　源也法會のあるかたへ出給ふなり

かりの御しつらひ　女三のつねのおはする所を道場になされたるゆへなり

けふたきまてあふきちらせは　そらたきのことくしきさまなり

そらにたくはいつくのけふりそと　秘そらたきのやうを教給ふなり

ふしのみね　諸抄にもなし只けふりの事まて也

かうせちのおりは　秘講說也人々ひそかにして聽聞あるへしとなり

人のけはひしつめてなん　人々に下知し給ふなり

れいの物ふかゝらぬ　弄女三宮のかたの人々のさまを云也　前々の卷にあまた處に此心あり

おかしけにてひれふし給へり　弄すこし物にかゝりなさし給ふなるへし　女三なり暑氣の時分のさまなり

わか君らうかはしからん　薰なり　源のかくの給ふなり

北のみさうしもとりはなちて　源の御聽聞所を廣く

なし給て物ふかゝらぬ人々なとをは女三の御聴聞
所とは各別になしたるとみゆ
しつめて宮にも物の心　秘まへは人々の用意をゝし
へこゝよりは女三宮へ聴聞有へき事共を申きかせ
給ふなり
おましをゆつり給へる佛の御しつらひ　秘女三宮の
よるの御ましを佛壇にしなし給へるを云也　弄
もろともにいそかん物とは　源の心也女三宮は源よ
りも跡にのこりてこそ世をもそむき給はんに源の
現存の時かゝるへしとは思ひ給はさりとなり
よし後の世にたに　是は今生にては女三の源をいと
ひすて給ふとかこつ心なり
かの花の中のやとりに　河五會讃云一々池中花盡滿
花々惣是往生人各留半座乘花葉待我閻浮同行人
源 はちす葉をおなしうてなと契置て露のわかるゝ今日（のイ）
そかなしき（さイ）　秘五會讃云一々池中云々といへりとは
別々なるを露のわかるゝとはいへり　弄
源女三宮 かうそめなる扇　香染扇也　秘尼の扇なり　弄同
へたてなくはちすのやとをちきりても君か心やすま
しとすらん　弄女三宮の歌なり源の心は此世に心と

め給ふへきと云くたし給ふなり弄　私云へたてな
くとは行末の事を契りたりとも源は我と一蓮には
住給ふましきといへる心可然哉　明源は佛道へ入
たゝすと云なり又我とは一蓮にはすましとうらむ
る心もある歟云々
いふかひなくもおもほしくたす　源の詞なり
猶あはれと物をおほしたる　源のさまなり
ほうもちのありさま　捧物也
七そう（敬イ）のほうぶく　河七僧法服　講師讀師咒願三禮
唄散花堂達謂之七僧　秘同載之　御記云天德四年
六月九日丁丑此日理子内親王家於園城寺修四十九
日御法事其佛經具及七僧法服斷物等預給令調修使
左近少將伊渉誦經布施調布二百端又差侍臣五六人
宛行香役
みしる人は世になへてならすとめてけりとや　弄ぬ
ひやうなと見しりたる人なり
むつかしうこまかなり　秘草子の地なり
さかりをいとひはなれゐて　秘女三宮御出家の事也
なかきよゝにたゆましき御契　源と女三との事なる
へし

ゆたけきさきらを　秘辯舌あるなり　弄同　河寛ゆ
だけき　辯舌の事なり　此講師當時才ある人とな
り
これはたゝしのひて　秘内々の事となり
内にも山のみかとも　花御誦經の役なり内裏よりも
院よりもたてらるゝとなり
院にまうてさせ給へる　秘六條院にもなり　弄同
そくさおほしゝかと　秘省畧なり
ゆふへの寺に置所なけなるまて　河蒼茫露雨之霽初
寒汀鷺立重疊烟嵐之斷處晩寺僧歸　閑賦　花名僧
とも御布施捧物なともちかへりておのか寺に置所
なきまてつみおけるなり僧ともはかへりけるとい
ふ詞につきて夕の寺とはかけりいとおもしろし
秘御布施のおほきをいへり講説をはりぬる時分の
さまおもしろきかき樣なり
いましも心くるしき　秘さまをかへ給ふによりてか
く心にいれ給ふとなり
院のみかとはこの御そうぶんの宮に　花院のみかと
は山のみかとの事也御そうぶんの宮とは女三宮に
ゆつり給へる三條宮にうつり給ふへく思ひ給ふな
り　秘朱雀院なり三條宮をもよくつくりなからい
またうつしたてまつらすしておき奉給ふなり
よそ〳〵にてはおほつかなかるへし　朱雀院はつね
には女三のすみ給ふへき宮なれは三條へうつり給
へとあるを源氏のかくの給ひつゝかけとめていま
た六條院におはするなり
けにありはてぬ世　河一ありはてぬ命まつまのほとは
かりうき事しけくおもはすもかな　此歌に及はす
かの宮をもいさこまかに　秘三條宮なり　三條宮事
女三宮のうつり給ふへき所なり
三條の宮のみくらにおさめ給ふ　河令諸國輿田部長
倉　日本紀
院の御そうぶん　朱雀の女三宮へ御處分のたから物
なり
わか御あつかひにて　弄源氏させ給ふと也
秋のころにしのわたとのゝまへ　弄女三宮のわたり
給ふ方の西のわた殿なり
御でしにしたひきこえたる　秘尼になりたるなり
心さたまりたるかたにて　後まて出家をとくへき人
をえりてなさせたまふなり

尼に成たるは十餘人なり
十餘人はかりのほとそかたちことにて　弄尼にならぬも有とみゆ心のさたまらぬかましりては惣のためあしきとなり源の分別なり

夕くれにわたり給ひつゝ　源の女三宮のかたへおはするなり

猶おもはなれぬ　源の女三宮の方へとかくおもひはなれぬさまをの給ふとなり

れいの御心はあるましき　秘女三宮なり　弄女三の御心也　源のかやうにいひなやまし給ふを尼なれはかやうの事もあるましき事なるにと女三のむつかしく思ひ給ふなり

人めにこそかはることなく　女三の心なり　是より女三の女にておはせし時の事を思ひ出給ふなり源氏のおもてには見せ給はさりしかとも柏木の事をよくしりて心中のことの外かはりしなりそれゆへ女三もかさねて見え奉らしの心にてかやうに思ひたち給ひし事なりさて出家し給へは今は心やすきに猶源のかくいひなやまし給へは三條宮へもうつりたくおほせとさすかにさし過てさもえの給はぬとなり

十五夜（ジヤウゴヤ）の月のまたかけかくしたるに　秘これより又うつしてかけり前の段とは別なり　弄八月十五夜にかきうつしたり

ならすあかつきのおと　聞あかつき　かくのことし花さらなり

れいのわたり給ひて　源の女三の方へれはするなり

むしのねいとしけうみたるゝ夕かな　おもしろき時分又かきさま思ふへし

あみだの大（ダイ）す　河阿彌大咒也　尼君たちのよむ歟

秋の虫の聲いつれとなき中に　秘源の詞なり

中宮のはるけき野へを　花秋好中宮の御事なり　弄同　秘秋好なり過にしかたの事なるへし

たつねとりつゝはなたせ給へるしるく鳴つたふるこそ　秘野なとより放たせ給ふしるしにいちしるく啼へきにさもあるはなしとなり

名にはたかひて命の程はかなき　秘松虫をいへり

へたて心ある虫になん有ける　秘うちとけ心なき虫となり人け遠きとなり　弄松虫の人けに遠き事をいへり　聞人けにとをきなと女三の事をふくませのたまふなり

女三宮
おほかたの秋をはうしとしりにしをふりすてかたきすゝ虫の聲　秘いまめきたる源のゝたまふをうけていへり　花鈴虫の聲に御心をとゝめ給ふを思ひの外なる御事とは源氏のゝ給ふなり　聞心あらはなり下に源の心をいへり下句義なし

いかにとかや思ひの外なる　秘源の詞也かく鈴虫を執し給ふとは初てしるとなり

返源
心もて草のやとりをいとへともなをすゝ虫のこゑそふりせぬ　秘女三宮を鈴虫に比していへりわれはすてはてさるものをとなり　花鈴虫に女三宮をたとへ給へり草のやとりをいとふは此世をはなれ給ふ心なり　河草舎クサノヤトリ　聞三條宮へわたり給はんとあるを源のうらみてかくよみ給ふなり

めづらしくひき給ふ　琴をめして源のひき給ふなり

宮の御ずゝひきをこたり給ひて　秘琴をは源にならひ給ふ故に心とゝめてきゝ給ふなりかきさま殊勝なり〳〵

月さしいてゝ　まへにまたかけかくしたる夕くれとあるをうけてみるへき歟也イ

れいよりもあはれなるねに　弄逸者其聲樂と云を引へくや　源の御心に世間の盛衰時節の景氣のこもれる故に琴の音にも感慨あるへし

れいの御あそひにやあらんと　折からなれは六條院に御遊もやと兵部卿宮參り給ふなり

大將君も殿上人のさるへきなと　弄夕霧も人々くしてまいり給ふ　殿上人のさるへきとは御遊なとのつきなからぬ人々なるへし

こなたにおはしますと御ことのねを尋て　弄女三宮の御方なり

いとつれ〳〵にて　秘源の詞也弄同

物のねなときかまほしかりつるひとりことを　源の御心にも御遊なともありたくてかやうにことをひきならし給ひしとなり

うちのおまへにてこよひは月のえん　河延喜御時八月十五夜弘徽殿の萩さきて藏人所のをのこども月の宴して侍りける時の歌拾遺にあり藤原經信

これかれかんたちめなと　兵部卿宮夕霧なとの參り給ふを聞て又々まいりつとふなり

月みるよひのいつとても　河「いつとても月みぬ秋はなき物をわきてこよひはめつらしき哉　秘同用

此引歌　源の詞也
こよひのあたなる月の色には　河三五夜中新月色
二千里外故人心白楽天詩也秘同
故權大納言　秘柏木なり　私云「ある時はありのすさみにくかりきなくてそ人は戀しかりける
此歌を引て可然歟　已上弄　私云前の詩を引心尤面白し詞にわか世の外まてとは二千里外にかなへりさて柏木の事をいひ出し給ふは故人心といふに奇特なるものなり
大やけわたくし物のおりふしの　公事よりはしめてわたくしさまゝてよろつにつけてをしきよしを源のゝ給ひ出るなり
いとうるさかりし　秘うるはしきなり　弄麗の字
御ことのねにも袖ぬらし給ひつ　柏木の管絃の達者と見えたり
みすの内にもみゝとめてや　弄女三宮柏木のことを聞給ふとなり　秘源の心なり女三宮御心ををしはかり給ふなり
内なとにもおほし出ける　弄主上も柏木をおほしめしけるとなり

御前の御あそひにはかにとまりぬるを　秘是よりは冷泉院より御せうそこありける程を草子地に書り
左大弁式部大輔　左大弁は紅梅の大臣式部大輔は系圖に無し　河此人々冷泉院へ参り給ふなり
きこしめしてなりけり　弄此詞冷泉院より御せうそこの有し後なり　私此義いかゝ前の秘の義にてきこえたり
冷泉 雲のうへをかけはなれたる住家にも物忘れせぬ秋の夜の月　秘院にてましませは物忘れせぬとは月も忘れぬ心あり　弄月も忘れぬ心あり
おなしくはときこえ給へれは　あたら夜の月と花とをおなしくは心しれらん人に見せはや　あたらよの月とは見しらん人にみせはやの心ありおなしくは源氏にまいり給へかしとなり
なにはかり所せき身のほとにも　源の語なり源はさほとこと〳〵しき御身のほとにもあらすと卑下しての給ふなりまた冷泉そ院にておはしませは細々参り給ふへき事なるをさそなきをほいなくおほしめしあまりての御せうそこなれはと参りたまへるなり

返源月影はおなし雲井にみえなからわか宿からの秋そかはれる　河心見に外の月をも見てしかな我宿からのあはれなるかと　花山院　弄御返しの心妙なり源卑下の御心とみゆ又別の心あるにや可尋之　冷泉院御位をさりましませとも同し御心もあるにや　聞云　秘御返し妙なりこゝろみに外の月云々　花山院御製なり此こゝろあるにや

昔のいまの御ありさまの　前の源の御返し註也草子地也

御使に盃給ひてろくいとになし　河祿最無二也

人々の御車したい(ひイ)のまゝに　秘鈴虫の宴にてあかさんと有つれとも俄にまいり給へるなり

院の御車にみこたてまつり　源氏と兵部卿宮御同車なり

大將左衛門督藤宰相なと　河藤宰相不入系圖　秘左衛門督致仕大臣の子なり系圖になきよしの說もあり　私系圖には左衛門督なし致仕の子藤宰相の註は又鈴虫に六條院にしたかひて冷泉院にまいりしも此人にや云々但兩人なからの事歟猶左衛門督をは鈴虫卷系圖の外の人に載之藤宰相をは不載之

下かさねはかり　直衣布袴事　西宮抄云上臈者直衣着下襲隨使不常事歟　私是は源氏と兵部卿宮と二人はかりの事歟

ふえなとわさとなく　弄車のうちにて吹なり　源氏と人にしられぬやうの御心つかひなり

うるはしかるへきをりふしは　秘源の樣體をほむるなり　弄

たか人さまに　源のこよひの御參りのさまなり

ねひとゝのへ給へる　秘冷泉院の御さまなり　弄冷泉院卅三歲なり　聞夕霧卅歲也

心はへふかうおもしろく　詩も歌もありとはみえたり　秘さかりなる御世をすてゝしつかにすみ給へる心はえともなり

かたはしまねふも　聞前に歌なと有し故にこゝをはこまかにかゝぬなり尤面白し

中宮の御かたに　秘秋好なり弄

いまはかうしつかなる御すまゐに　秘源の詞也

なにゝもつかぬ身のありさま　秘院號なとかうふりて何にもつかぬと卑下の詞なり　弄源氏卑下の詞也

かた〳〵につけておくれゆく　源よりも年齢のおさ
りたる人々の出家し早世なとの事を云仍かた〳〵
といへり出家は朧月夜權女三宮早世は柏木なと也
世はなれたるすみか　隱遁の心なり
さき〳〵もきこえつけし心たかへす　弄中宮へ申給
ひしなり　秘我（門イ）心ひろけ給へと申せし事なり悉皆
わか方さまの事は心にかけ給へとなり
れいのいとわかうおほとかなる御けはひにて　花秋
好中宮の御事なりこゝのへのへたてふかうあるま
ては中宮の御返答なり
こゝのへのへたてふかう侍りし　弄中宮の御返事な
り　秘秋好の詞禁中よりも今はひまもなくて六
條院へも細々に參り給はぬとなり
おほつかなさのまさるやうに　河拾「なかめやる山へは
いとゝかすみつゝおほつかなさのまさる春哉　私
不及引歌今は冷泉院たゝ人のやうにてそひおはす
る故に秋好の御いとまなきとなり
いとおもひの外にむつかしうて　弄冷泉院におりさ
せ給うてのとかにて中宮にも御ひまなき心なり
私秋好の本意ならすとなり

みた人のそむきゆく世　齋宮女御集「みな人のそむ
き果ぬる世中にふるのやしろの身をいかにせん
秘開用此歌　私云秋好は齋宮女御微子に比したる
事おほし此歌も彼集に在云々自然に相當おもしろ
し
その心のうちを　何事も源をたのみなから此心をは
いまた申さぬとなり弄　私何事にも源をたのみな
から此出家の本意をは申談せぬ所かいふせきと次
なから本意をのへ給ふなり花弄同
けにおほやけさまにては　秘源の詞也花弄同
かきりある御ことゐ　冷泉院御位の時はあまたの女
御更衣にて御暇なとも定りあるとなり
さためなき世といひなからも　秘世間は大かた無常
をは誰も知なから無意趣にてはいひ（りイ）かたしとなり
さしていとつらき事なき人の　弄さしたる事なくて
世をそむくも有かたき物となり
心やすかるへきほとにつけてたに　弄ほたしあるま
しきと思ふ身さへほたさるゝ事もありてくるしき
となり
おもひかゝつらふ　秘たゝ人さへかゝつらふ事おほ

きものとなり
なさかその人まねにきほふ　秘まへにみな人のそむき給世をいとはしう思ひなる事も侍へりといへるにかゝれり
ふかうもくみはかり給はぬなめりかしと　秘中宮の心也弄
故御息所の御身のくるしう成給ふらん　弄六條御息所なり　花是は中宮の御心と思ひ給ふ事なり　秘六條御息所也靈に出給ふ事を源はふかくかくし給へともれきゝ給うての給ふなり
かのの給ひけんありさまの　秘物のけのいひつる事きかまほしとなり弄
たゝなき人の御ありさまの　秘御息所なり弄　花是は中宮の源氏に申給ふ詞なりものゝあなたはあの世の事なり
さるしるしあらはならても　秘物のけなとならても罪は源のふかく有へき事そとなり弄
ものゝあなた思ひ給へやらさりけるか　弄後世の事也　秘只わかれのかなしさのみにて後世のくるしさをは思ひもやらさりしよとなり

いかてよういひきかせん人　秘かやうの道理をもよくときゝかする人のことはをきゝたき事となり
みつからたにかのほのほをも　秘出家なとしてなり弄
つもるになんおもひしらると　年のつもるなり　弄年齢の事なり
けにさも覺しぬへきことゝく　秘源の心也　花源氏の御返答なり
そのほのほなんたれものかるましき　秘源の詞也　私誰ものかるましきといへる源の詞奇特なり御息所のつみはふかきを秋好のかなしみ給ふをたすけてかの一人にかきらすとの給ひなすなるへし
朝露(アサツユ)のかゝれるほと　秘命のことなり弄　河涅槃經云　亦如二朝露一勢不レ久停(トヽマラ)　蘇子曰人生一生若朝露之託於桐葉耳其而幾何豈不惑哉云々後漢書列傳第三十九王堯(充イ)傳 本云檢此詞無此語　私右の語共他の諸抄に不載之
もくれんかほとけにちかきひしりの身にて　河目蓮救母經にみえたり　目蓮母地獄に隨せしをすくひて次第に餓鬼畜生道より天上に生せし也　孟蘭盆

經云免一切餓鬼之苦目連具云摩訶目健蓮羅耶那唐云宋蔵氏盂蘭盆經云落餓鬼中目蓮救母生天經云在大焦熱地獄中二經參差する歟但救母經は大藏目錄外也 花 目蓮はしめて六通をえたるを佛にちかきとはいへり又佛に親近する心もあるにやその母の餓鬼道におちたるを救ひ度せし事盂蘭盆經にとけり

弄 羅漢はほとけに遠しといへとも授記にあつかりしことなとあり 秘 目蓮救母經は僞作の經なり只盂蘭盆經によれりちかきとは佛に親近する義なり

ためしにもえつかせ給はさらん物から 聞 つかせのつの文字清也

やう／＼さる御心さし 弄 出家はなくてやう／＼なり 秘 かたちをかへ給はすとも漸々に心にしめ給へとなり

しか思ひ給ふる 弄 源氏も出家の心ありとなり 秘 源もさおもふこ也 私云此しか思ふとは源も御息所の御とふらひをせんと思ふと也 私の義然へし

みつからのつとめにそへて 弄 源の詞歟 可了見歟

弄 みつからのつとめにそへて今靜に世をそむかんされもひなからも萬のつとめに取亂して此事過してしつかにと思ふははかなき我心なりとの給ふなり 私云此義未了解如何 私今は六條御息所の御とふらひの事もしつかなるいとまなければ世をそむきてから源の我つとめとひとつにとふらひをもすへしと思ひてたゆむは心そをさなきとなり

猶やつしにくき御身の有さまともなり 秘 草子地なり 私秋好と源との御有さま也

よへはうちしのひてやすかりし御ありき 秘 六條院の夜明てかへり給ふ時上達部なとおほく供奉し給へるなり

春宮の女御の御ありさま 弄 明石女御夕霧もいかめしきを源氏のみ給ふにも冷泉院をことにおほしめしけるなり 秘 明石女御も忍ひ給へとも冷泉院をは女御夕霧よりも大切に思ひ給ふとなり

院もつねにいふかしう 秘 冷泉院なり弄同

かう心やすきさまにて 冷泉院の御位をさり給へる事も源に心やすく御對面をもあらんためにいそかせ給へるとなり

中宮そ中々まかて給ふ事も 秘 秋好なり

何事も御心やれる　秘秋好中宮の滿足なり弄同

たゝかのみやす所の　秘秋好中宮の御孝心おはする

事よく見えたり御出家の本意は人のゆるさぬ事な

れは源氏のの給へるこそくよろつに功德の事をつ

くしいとなみ給ふとなり御心中にも世中をふかく

思ひ入給ふとなり

岷江入楚第卅九　夕霧

五十歲　私鈴虫卷の同秋より冬までの事あり
大將念一條宮給事
一條御息所煩物氣移小野給事
大將送僧布施淨衣等於小野二宮有返報事
八月廿日大將向小野訪御息所病事
押入宮御方給對面事
明日還六條院東御殿給事
大將遣消息於一條宮事
阿闍梨律師語中大將事於御息所事
御息所右少將君問大將殿事少將君陳答事
夕霧御息所與宮御物語之事
大將奉文於一條宮御息所見給事　御息所有御返事
大將殿渡三條殿與雲井雁物語事
雲井雁奪取御息所御返事事
明日大將求出彼文於席下見之事
大將依次日不出小野先遣文事大夫將監爲使
一條御息所思煩宮御事俄絕入事
自處々訪一條宮給事
御葬送日大將出給又歸京事

九月十三日大將渡小野給事
歸京之次通一條故宮前給事
歸三條宮又遣文於小野事　宮有御返事
六條院聞大將與一條宮御中事
大將君參六條院之次問一條御息所御忌給事
此卷の詞云一條の御息所のいみはみちぬらんな昨日けふと思ふほとに三とせのあなたになる世にこそあれと云々柏木衛門督去々年さりて三とせのあなたとの給也
一條宮可移住一條故宮事　大將召大和守仰付事
一條宮移徙事
大將住東對南面給事
三條殿人々聞此事驚歎事
大將暫住六條院花散里御物語給事
大將歸三條殿雲井雁怨給事
雲井雁號御方違渡父大殿給事
大將渡三條殿留守所給事　次參大殿給事
大殿獻消息於一條宮給事藏人少將爲使
藤內侍送文於雲井雁許事
藤內侍雲井雁二人御腹男女君達數多事

夕霧

花 巻名以歌號詞には只霧とはかり有箋
同　河「山さとのあはれをそふる夕霧に立出ん空もなき心ちして　花 鈴虫巻は八月十五夜の事にさとまり此巻は同廿日より冬までのことみえたり源氏五十歳なり　秘 源氏五十歳鈴虫巻は八月十五夜までをかけり此巻は鈴虫の巻の末より十二月までをかけり　弄 源氏五十歳鈴虫巻の末の秋より此巻にうつる冬までのことあり

まめ人の名をとりてさかしかり給大將　河 展季（ヤスヒト） 文選 又眞人　秘 夕霧實法なる名をとり給へるを云り　私さかしかり給ふ大將とは夕霧の柏木のうへなとをもときしこと共前にみえたり

むかしを忘れぬよういにみせつゝ　河 用意也　柏木の遺言を忘れぬよしなり

みやす所もあはれにありかたき　秘 落葉宮の母御息所なり

はしめよりもけさうひても　秘 夕霧の心中なり

みつからなときこえ給ふことは　秘 女二宮のきこえ給ふことはなしと也弄

思ふことをもまほにきこえしらせて　夕霧の心也

小野といふわたりに山里も給へるに　花 此物語の手習巻に彼夕霧の御息所おはせし山さとよりはいますこしいりて山にかたかけたり家なれはと有山城國に小野の里と云所二あり　宇治の郡に小野里あり又愛宕郡に小野あり此小野は愛宕郡の名所なりひえの山横川のふもとたか野といふ所なり　秘 花鳥にしるせりひえの山の麓惟喬のみこの住給へる所のあるなるへし箋　河 伊勢物語に惟喬のみこかしちおろしてをのにすみ給ふと也うつほの物語に年景の大臣おほく子をうしなひて後山さとの心ほそけなることのまうけ給ひてこのわたりはひえのあはれにきこゆる所なり

はやうより御いのりの師にて　秘 河海惠心僧都の事をひけり此義に及へからす只平生歸依の人なるへし　弄 誰ともたとへさるもよし聞　河 惠心僧都千日山籠の間に安養尼所勞有けるにさかり松まてをりあひて對面の事有摸此事歟小野は比叡坂本也今の大原なり　箋 律師准據惠心僧都千日籠山の時安養所勞事あり　私箋は用河海義なり

むかしのちかきゆかりの君たちは　秘 柏木の兄弟を

いへり弄
辨の君はた思ふ心なきにしもあらて　秘柏木のさしつきの弟なり柏木の遺言せし人なり紅梅のおとゝ也弄　河柏木權大納言舍弟紅梅右大臣なり

清愼公——敦敏少將　藏人母時平公女早世天暦元年十一月十七日卒年卅父公歎事見後撰一またしらぬ人もありけり東路に我も行てそ住へかりける云々
　　　└賴忠　右大臣謚廉義公母同敦敏天慶五年十二月十七日侍從其年四月廿二日春宮亮九年五月十六日左兵衛佐天慶二年正月廿日右少將卜年三月十四日權左中辨天德四年四月廿二日右大辨

是准紅梅右大臣也
辨少將右大辨右大臣等事秘同し　箋用此義也
聞辨の君は落葉宮に心をかけしとなり
ことのほかなる御もてなしなりけるにしひてえまうて給はす　秘辨君ははしめよりけさうめきて申よりし故にとの外にもてなされしかはしひてみまひなさもえし給はぬと也　私秘にはことのほかなりける御もてなしにはしひてまうてとふらひ給はすとあり　予按之伊勢物語に伊勢國にゐていきてあらんと云けれはとありゐてとはわさとなと云心なるへし事のついてならてはと也天文廿一六八記之以上秘　私三家本に詞かくの如き歟不審愚本少々校之處別義なし尙追て三家本をみるへし但此秘の義には及へからさる者乎
この君はいとかしこうさりけなくて　秘夕霧なり弄
同　夕霧はけさうたちておのつからいひよりたるなり
そうのふせしやうえなさやうの　河布施　淨衣　箋修法なとの時下々の者淨衣をきるなり
なへてのせんしかきは　箋今の世に仰せ書といふ事なり
ものしとおほしぬへく　夕霧あなつりにくき人なるへし
宮そ御かへりきこえ給ふ　秘女二宮御息所にかはりてかき給ふなり弄
いよ〳〵みまほしう　秘夕霧の心也　箋落葉の手然るへくみえたり
北方けしきとり給へは　秘雲井の雁なり　弄雲井の雁の推量し給ふなり
わつらはしくて　秘夕霧の心なり
八月中の十日はかりなれは　河横笛鈴虫同し秋歟奥入箋すゝむしに八月十五夜まてかきたる也然は廿

日比の事なる歟　弄禪閤御說廿日の事なるへし云云又云たゝ中の十日はかり成へし
山さとのありさまのゆかしけれは　夕霧小野をおもひやり給ふ也
御前こと〳〵しからて　箋大將はあまたの雜色武士を供するなりそれ（邊イ）を略せられたるとなり
松かさきのお山の色　秘松か崎はひえの山の麓氷室のある所也　河松崎山城國也
さるいはほ（ゐイ）ならねと　箋ふかき山ならぬともと也
秋のけしきつきて　秘此けしきつきてと云にてよみきりてみるへしこれまては道すからをいへり　箋四時不變の巖も秋のけしきにもてはやされたるなり
都にになくとつくしたる家居には　秘これよりは小野の山庄なり　弄小野の里の事也
はかなき小柴かきも　箋小野の體なり
しんてんとおほしき　箋本式の寢殿とはつくらねともその所にてのしん殿なるへし仍しんてんとおほしきと也
とゝめたてまつり給うけれは　秘落葉は京にましませとの給ひしと也
人にうつりちるを　秘物のけのことなりさてすこしへたてゝゐ給へるなり
宮の御かたのすゝまへに　秘簾前也河同　箋落葉のおはする簾の前へ夕霧をいれたてまつるなり
御せうそこきこえつたふ　箋是は夕霧より御息所へのせうそこなり詞はみえす
いとかたしけなく　秘御息所の人つての詞なり　弄箋是は夕霧へ御息所の返答なり　私此段箋（常イ）の義は御せうそこきこえ傳とかきていとかたしけなくといふより御息所より人つてのせうそこの詞とみるなり　箋の義は夕霧のせうそこを人々のきこえつたふるなり　さていとかたしけなくといふより御息所の返答なりさて又おしかへし夕霧わたらせ給ふといふよりせうそこの詞なり云々此兩義を案するに先御息所より人つてのせうそこありてわたらせ給ひし御おくりといふを夕霧の返答とみて可然となり
このかしこまりをたに（しイ）　夕霧のねん比にましますを此まゝむなしくなりては御禮をさへ申すましきと

思ふ故に今すこし命をもかけとめたき心のつきたるとなり

わたらせ給ひし御送りにもと　秘夕霧の詞供奉すへき物をとなり心中よりは疎略なるよしをのへ給ふなり

こと〳〵しからぬ旅の御しつらひ　弄小野の山庄の事也　秘かりそめの旅所のさまなり

さはかりなか（ゝイ）りさきゝゐ給へり　秘女宮と推量し給へり

あなたの御せうそこかよふほと　秘みやす所の御方ほと遠しとなり弄同

れいの少將の君なと　秘小少將なりみやす所のおひの大和守かいもうとなり落葉宮といとこなるへし

かうまゐりきなれ　秘夕霧の詞なり

こし此といふはかりに　秘柏木の後三年になり侍るなり箋弄聞同

ふるめかしきさまに　弄好色の人なとならはかくはうとからしとなり

よはひつもらすかろらかなりしほとに　箋若年也淺宮の時の事なり

（ほのすきイ）まのまきたるかたに　秘夕霧すゝろここにもなれさるによりてかくさしはなたせ給ふことはあるましきことゝおもふとなり

さらにかはかりすく〳〵しうをれてとしふる人そ　箋情を折なり　自讃の詞をれてのて文字清てよむへし　箋聞我心なりおるなりすく〳〵しうは直の字の心なるへし　秘をれてのて文字古抄に濁てよめり宮の御心と云々いかゝ是は夕霧の自歎なりかやうに情を折て堪忍する人は有かたきよしなり　私此兩義尤可用之然共猶諸抄の義爲後學注之也　河すく〳〵しうをれて　健々しうはをれざる也　花不（シテ）折年ふる人とは宮の御心を云るにや　弄女二宮事云々　禪閤云又說夕霧の事と云々　聞をれて濁て心得るなり又をれてを清は思ふ心をまけてをれてゐると云一義もあり

されはよと中々御いらへ　箋まつさう思ひたるとなり　秘そはより御返事中へき事にてはなかりけるよと人々の中なり　私前に文の返事の時なへてのせんしかきはなとゝありしにかけてみるへし

みつからきこえ給はさめゐかたはらいたさに　弄是

よりは宮の御詞也　秘　落葉の御詞なりみつからと
は御息所の事なり
かはり侍るへきを　弄　御やす所のかはりに申へきを
となり
いとおそろしきまて物し給　弄　御やす所の物のけを
みて宮もなやませ給ふとなり此詞人して女宮のの
給ひ出したるなり
こは宮の御せうそこかとゐなほりて　秘　夕霧なり
弄　夕霧居なほりて女二宮の御消息を聞てかく心を
いたすも女宮を思ふ故と也　箋　落葉の御せうこそ
かと居直りたる夕霧のうるはしき人也とみせてか
きたり
心くるしき御なやみを　花　是は夕霧の返答なり物を
覺ししる御ありさまなと〻は宮の御心なり　秘　夕
霧の詞也　夕霧此御なやみを身にかふはかりなけ
きすくすもなにゆゑにかといひきるへし宮の御た
めにてこそあれとなり
かたしけなけれと　秘　みやす所の御事を何かと申も
女二宮への奉公にてあるとなり
物をおほししる御ありさまなと　秘　宮の夕きりの志

をおほししるまてはとなり　弄　物をおほししると
は女二宮柏木の事をなけき給ふ事なりはれはれし
き方とはさやうの思ひさむるまて御息所たひらか
にと思ふも宮の御ためになるを御息所への事にな
し給ふとうらみ給ふなり物をたほししるとは御息
所のことなりはれ／＼しからんまて女二宮たひら
かにて然るへからんとなり是は後義なりあるかな
きかの心ちに成てとは宮のの給ふに付て夕霧の返
事なれはたひらかとは宮の御返事可然但花鳥に物
を思ひしるを宮となり
たひらかに通し　箋　落葉のわつらはしきよしの給ふ
故なりはれ／＼しきかたは御やす所の事なり
た〻あなたさまに　秘　我身の心さしを御やす所のか
たへのみとりなし給へるはかひなしと也弄　私此
段いさゝかむつかしくきこゆ　心くるしき御なや
みは御息所のこと身にかふはかりなけくは夕霧の
なけく事也なにのゆゑにかとは落葉故との事此末
に其仔細をいひのふることかたしけなけれともと
は落葉の事をとかく申は恐れあれともとの事物を
おほししる御有様なとはれ／＼しきかたにもみた

てまつりなほし給まてはとは落葉の柏木の事なとの御なけきもはれ〳〵しくみなほすまてはとの事たひらかに過し給はんこそとは落葉の御心はれはれしからんまては御息所のたひらかならんはよからんとの事たれか御ためにもたのもしき事には侍らめとおしはかりきこえさするによりなんとは落葉の御ためも御息所の御ためもよからんと推量申によりてなん心をつくすとなりたゝあなたさまにおほしゆつりてとは本意は落葉の御爲なるを御息所への志にはかりしなしたまふとの事此分如何但又いさゝかいふかしき所あり物をおほししる御ありさまなとゝきりて心うへし其故は落葉の御せうそこにあるかなきかの心ちになりてといふをうけて恐れたる申ことなれともさやうに物をおほししる御ありさまなとはいらぬことそとなり其時ははれ〳〵しきかたにもみたてまつりなほし給ふまてはとは又御息所のはれ〳〵しくならんまてはとなりたひらかに過し給はんと（こイ）そといふか又落葉の事なり此前後の義は前におなし此兩義の內にて了簡すへし愚意は猶奥可然なり此巻はすら〳〵とかきたる故に又むつかしき所をませたる筆法なり

けにと人々もきこゆ　さふらふ人々のいふなり

日いりかたになり行に空のけしきもあはれにきりわたりて山のかけはをくらき心ちするに日くらし鳴しきりてかきほにおふるなてしこのうちなひけるいろもおかしうみゆ　此景氣言語道斷といふへし
河古「日くらしの啼つるなへに日はくれぬと思ふは山のかけにそ有ける　六帖「日暮しの聲もいとなくきこゆるは秋夕暮（のゆふへイ）になれはなりけり　同「われのみやあはれとおもはん日晩のなく夕かけのやまとなてしこ
同「あな戀し今もみてしか山かつのかきほにさける山となてしこ　箋我のみやあはれと思はん云々
此外諸抄引歌なし

松のひゝき木ふかく　箋風の名殘を久しく殘す物は松の聲なり

ふたんの經よむ　箋聲たえす間もなくよむなり

時かはりてかねうちならす　時々かはる〳〵よむなり　箋時々かはりて也　聞時かはり也　又は時じとよむ

たつこゑもゐかはるも　秘不斷經時をひきてよむさ

まなり
いて給はん心ちもなし　秘夕霧なり
りしかちするおとして　箋願の加持は高聲なるなり
陀羅尼いとたふとく　箋是は千手陀羅尼なるへし
いさくるしけにし給ふなりとて　みやす所のわつらひ給ふなり
そなたにつとひて　みやす所の御かたなり
たひ處にあまたもまゐらさりけるに　惣別は小野に人すくなゝるにみやす所の御方へ參て落葉の御そはには人もすくなきなり
思ふことをもうちいてつへき　夕霧の心中なり
霧のたゝこののきのもとまて　秘山さとのさまなり
河漢書陰陽みたれて霧となるといへり
まかてんかたもみえす　秘夕霧の語也
夕霧 山さとのあはれをそふる夕霧にたちいてんそらもなき心ちして　秘此歌巻の名となれり夕霧の歌には秀逸也　弄此歌を巻の名とせり　弄此歌より夕霧大將といへり　河「夕霧に衣はぬれぬ草まくらたひねするかもあはぬ君ゆへ　雖愁夕霧埋人枕只愛朝雲出馬鞍山生秋望江相公　箋夕霧は朝霧よりはおとれる詞なりされとも是は當意なれは不及異論也　夕霧に衣はぬれて云々引之　聞前の詩をも引惣別夕霧は儒者にて和歌には達せられぬなりこれらか秀逸と云々
返落葉宮 山かつのまかきをこめてたつ霧もこゝろそらなる人はとゝめす　秘女二宮の返歌なり心そらなるとはつねに云るとはかはれる也夕霧のかく有ましき心のありけるをいへりさやうの人をはとゝめしとなり
弄聞　箋こゝに心をとめたる人ならは霧のまかきにてもとまらんするをたちいてんそらもなきとあるはかへるさをいそく人なりさやうに心そらなる人をはとゝめすとなり　私此兩義おくの義は心おもしろしされとも夕霧をとゝめたるやうの心ありされははしめの義おもしろかるへき歟如何
まことにかへるさわすれはてぬ　河曹公と云人雲夢澤に行て大霧に逢て道を迷失と云々「山里に霧のまかきのへたてすは遠かた人の袖はみてまし好忠
私諸抄引歌なし又此義は不相當然共暫載之
中空なるわさかな　秘夕霧詞霧のふかき空をいへり
やらはせ給ふ　河逐ヤラフ　日本紀　秘追儺をおにや

らひといふかことし箋 秘追出し給ふと也
つきなき人はかゝることこそ 秘かやうのことにならはぬ身にはつきなしと也 私よりつく所もなきと云歟 以上秘 箋つきなき人か參りたらんにこそ逐ひ給ふへけれと也 私好色につき〳〵しからぬ人はかゝることくるしきとなりいひよることのつきなき故そと云歟如何
とし比もむけに 秘宮の御心なり
いたうなけきつゝ心のうちに 夕霧のさま又心中也
人をめせは 秘夕霧立いてゝ人をめしての給ふなり
御つかさのそうよりかうふりえたる 河右近の大夫將監なり 右近將監の叙爵したるを右近太夫將監と云なり 私御つかさとは夕霧右近大將なるを云そうは將監なりかうふりは叙爵なり叙爵したる人をは大夫と云なり
此律にかならすいふへきこと 弄はかりことなり
こしんなとに 箋護身也 是も加持なり
かのゐたるかた 律師の居たる方也
これかれさふらはせよ 箋誰にはこゝにさふらへなとなり

くるすのゝさうちかゝらん 箋山城國愛宕郡の內小野鄕は上賀茂領なり栗栖鄕は下社領なり寛仁二宮符又宇治郡にも小野栗栖野あり是は別なり 箋云小野鄕栗栖鄕なるを詞の艶に就て小野と云字をそへたる成へし一說夕霧は在所不案內にて栗栖野他所の事を云誤れると云々 花可奉寄賀茂上下社鄕之事
上社賀茂鄕 小野鄕 大野鄕 錦部鄕 上社也
下社 栗野鄕 蓼倉鄕 上栗栖野鄕 下社不審也
出雲鄕今案山城國愛宕郡の內小野鄕は上賀茂領なり栗栖鄕は下社領なり寛仁二年十一月廿五日陣定ありて宮符をなされをはりぬこの物語にくるすのの御ざうちかゝらんといふは此所なり又宇治郡にも小野栗栖野ありそれをいふにあらす 以上花
河海にのせらるゝ所の名同之 秘未開のことなりくるす野は勸修寺の邊なり花鳥河海にも沙汰有一說夕霧の在所の遠近をも分別せすして小野といふにつきての給へりと云々されは花鳥にくはしくしるさる是可然歟 弄一義云賀茂人の文書に賀茂ちかくるす野といふ所よりと云々大かたは心得かたし東のくるす野にては有へからす一說夕霧の在

所の遠近をもしりたまはて小野といふ所につきて
御そうなれはの給ふ歟云々花鳥に宇治郡の小野栗
栖野ならて賀茂領に小野とくるすありと有是は北
の小野くるすなり然は不審なきにや　聞くるす野
こゝよりは遠し夕霧の所をしらすして大やうにて
の給ふと也云々　私河海に處をのせられたり了簡
の段は箋の義を尤用へし花鳥に小右記寛仁二十一
廿五陣（評イ）定の事をのせらる繁にして要なし仍略之
あるやう有へしと　右近の將監か推量也
みちいとたと／＼しけれは　弄夕霧語也
あさりのおるゝ程まて　阿闍梨は律師をかく宣ふ歟
ことさらめきてかるらかに　みやす所御かたへ御出
　あらんもいかゝとなり
御せうそこきこえつたへに　秘みやす所より宮人の
　御せうそこなり　箋夕霧の宮へ人して御せうそこ
して跡につきていりたるなり　私夕霧のせうそこ
　然へき歟
あさましうてみかへたるに　秘御せうそこつたへし
　人なり弄花・
あなたよりさすへきかたなかりけれは　箋かけかね
　はこなたにおるなるへし
水のやうに　弄あせのさまなり
さすかねは　かけかねの事歟
なきぬはかりにきこゆれと　弄女二の詞也　私さふ
　らふ人々なり弄に女二の詞なりといへる如何
かはかりにてさふらはんか　秘夕霧の詞也
くやしうかくまてとおほす事のみ　落葉の心に是は
　とちかつかれぬるを口をしくおほすなり
いと心うくわか／＼しき　秘夕霧の詞也
御心ゆるされては　御ゆるしなきにれしたちたるこ
　とはあらしとなり
千々にくたけ侍る思ひに　河「君こふる心は千々に
　くたくれとひとへもちらぬ物にそ有ける　箋用此
引歌聞同
いひしらぬ御けしきの　秘いふへきかたなしとなり
弄同
さはいへとことにみゆ　秘外聞はかたちよしとはき
　こえさりしなりさはいへと然るへしとなり　弄世
　のきこえよからぬよりはとなり
やせ／＼にあえかなる　箋是はたゝうちみたる體也

うちとけ給へるまゝの　秘うち〱の御姿なり
弄かやうのことは思ひかけさることなり
風いと心ほそうふけ行よのけしき　此段の景氣詞の
つゝき言語にのへかたし
たゝありのあはつけ人　箋たゝ大かたの物思ひしら
ぬあは〱しき人もとなりこれまて夕霧の心中を
思ひやるへきやうにかきなしたり
かうしもさなから入かたの月の山のはちかき程　秘
御格子をもまゐらさるなり　箋かうしをもわけな
からなり詞のつゝき奇妙なる者歟
猶からおはししらぬ　秘夕霧の詞也
よつかぬまてしれ〱しき　弄夕霧の語也　秘好色
の道によつかぬなり障子のへたてなとこのまゝ有
ことなり
何事もかやすきほとの人こそは　秘夕霧の詞人數な
らぬ物こそしらぬよしにておくことのあれ御身に
こそよれなとゝいへるなり
えなんしつめはつましき　秘かやうなれは我も思ひ
のとめかたしとれとしたるなり
世中をむけにおはししらぬ　秘柏木になれ給へは世
中を思ひ知り給はぬにてもなきとなり
いかゝいふへきと　落葉宮の心也
世をしりたるかたの　秘落葉の御心なり
めさましう　弄うたてしうはつかしきなり
うきみつからのつみを　秘落葉宮の詞也弄箋　落葉
宮の柏木にそひたる事をいふなりそれを思ひしる
につけてもあさましけれとも又いかに思ひなせと
いふ事そとなりそれを我心ならすすへきかたのな
けれはとなり
落葉宮　われのみやうき世をしれるためしにてぬれそふ袖の
名をくたすへき　秘前に世中を無下におほししらぬ
にしもあらすと夕霧の申給へるをいへりわか身の
心れほき名をそふへしやとなり聞：私うき世をし
るとは柏木にそひ給へることなりぬれそふとは夕
霧のことなりさて夕霧の柏木になれたるをさへ世
を思ひしるこの給ふに又夕霧にみえたらは落葉の
みうき世をしれる人のためしになりてうき名をく
たしはてん事はいかにとなり　弄なをくたすへき
名なり
わか心につゝけて　秘たしかにもきこえさるを夕霧

のつゝけ給へるなり箋　弄夕霧の吟したるなり
いかにいひつるこそそと　聞此歌を思ひもあへすいひつると落葉のおもふとなり　秘女二宮のおほすなり弄　花宮の我のみやうき世をしれるとよみ給へるは夕霧の世を知たるかたの心を折々ほのめかすとあるにかくよみ給へるはうけなかしたるやうに侍れはいかにいひつることそとくゐ給ふなり
けにあしうきこえつかし　秘夕霧の詞也世中をおほししらぬにもあらしなと申せしことなり　聞それを申過したると思ふなり云々　弄私云世中を無下におほし知ぬやうにと云し事を歌によみ給へるを夕霧の誦したるを宮の後悔のやうなれは我すんしたる事をあしうと也又花鳥の義あり如何　又世を覺し知ぬ樣にはと云し事をあやしうきこえつかしとも以上弄　私秘聞の後の義一決して然るへし

返夕霧
おほかたはわれぬれきぬをきせすともくちにし袖の名やはかくるゝ（くたくらんイ）　秘猶申くたし給ふなり　弄夕霧の歌に面白云々　柏木の事にくちにし袖なれは夕霧のぬれきぬをきせすとも御名かくれしとなり
ひたふるにおほしなりねかし　前の歌の心をつゝけてみるへしくちにし袖の名はかくれぬ程に一向に我にも逢給へとなり
かはかりたくひなき心さしを　無理におしたちたる事はあらしとなり
霧にもまきれす　箋霧はふれともたへまさやかなるもの也おもしろし
こきみの事も　故君也　秘柏木の事也　弄花鳥
過にしかたにおほしおとすをは　秘柏木にはおとるとおほすとうらむるなり
御心のうちにもかれは　秘宮の御心なりかれはさは柏木なり　弄女君御心に柏木の事を思ひ給ふ也
よそにきくあたりにたに　花夕霧の北方は柏木の連枝なり
大殿なとのきゝ思ひ　秘致仕大臣也　夕霧もむこなり　弄致仕大臣の事也
院にもいかに　秘朱雀院也弄同
かうつよう思ふとも　實事のなき事又落葉の心つよきことを人のしらさらんを口をしくおほすなり
みやす所のしり給はさらんも　弄一向にしり給はさらんとつみえかましきと也

やらひ給ふより外のことなし 聞又やらひをかけり
あさましやことありかほに 秘夕霧の詞也
猶さらはおほししれよ 夕霧の心さしのほとを向後
おほししれとなり
かうおこかましきさまを 秘向後猶はるかにもてな
し給てはとなり
かしこうすかしやりつと 弄夕霧をすかしてかへし
つと女宮のおほすとも夕きりの思ひより侍らんき
はゝしらぬこと〳〵とけしからぬ心つかひすへし
と女宮をおとし給ふ詞なりしらぬこと〳〵とはこ
とをかさねていふにや
しらぬ事々と 秘我心なからも何ともしらぬことゝ
ちとおとして申給ふなり 箋落葉の夕霧をかしこ
う只今すかしやりたりとおほしてかさねて御厭却
あらは其時は我心をもえおさめしとなり只今は夕
霧の用捨そとなりしらぬ事々とはかさねて御厭却
あらん時は日ころの夕霧にては心も有ましきほと
に我はしらぬこと〳〵となり向後厭却させ奉らん
との用心にかくおとし申さるゝなり惣別夕霧の實
法なる故にかくのことし

まことにならはぬ御心 秘まめ人なれはなり
わか御みつからも 秘夕霧の自の心なり弄
夕霧
おき原や軒端の露にそほちつゝやへたつ霧をわけて
行へき 秘心はこゝをたちわかれなは八重たつ霧を
へたつる心なるへしとなり 箋こゝを出る時は荻
の露にぬれ行末は八重たつ霧を分けんことよと難
堪をいひたてゝ落葉へうれへ申也 聞荻原やは朝
露の體なり八重たつ霧をわけ行は心のへたてあら
んことといへり又朝露の上に霧を分んよとなり花
鳥の引歌能叶へり 六帖「夕霧に衣はぬれて草枕たひ
ねするかもあはぬ君ゆへ
ぬれきぬは猶えほさせたまはしかうわりなうやらは
せ給ふ御心つからこそはとさきこえたまふ 秘かくよ
くいひこしらへて出し給へともと也 河六帖「よと共に
わかぬれ衣になる物はわふる涙のきするなりけり
「諸ともに君もほさなんぬれ衣かゝるうき名は我
のみそたつ 箋此兩首をひけり花鳥には夕霧に衣
はぬれて草枕云々前にあり 私此詞につきていさ
さか今案ありぬれきぬの事爰にては此歌につゝけ
てみるへし荻原や軒はの露又八重たつ霧なと皆衣

をぬらす物也　さてかくよめり其心はかうわりなうやらはせ給ふ御心つからこそといへり事ありかほにやらはせ給ふ故にこそ結句後朝めきて荻の露八重たつ霧をわくるほとにぬれきぬをはきてかへれこれは夕霧のきるぬれきぬにあらす落葉のみつからき給ふぬれきぬそとなり御息所をとふらひまいらせたるほとにつねのことく露もきえ霧も晴てかへりたらは人の不審はたつましきものをといふ歟如何　箋落葉へ夕霧の參りよりたることは人しるへしされ共事實のなけれはぬれきぬとはいふなり

心のとはんにたに　河後「なき名そと人にはいひて有ぬへし心のとはゝいかゝこたへん　箋弄聞引歌用之　秘實事たになくはと宮はおほすなり

返落葉宮
わけゆかん草葉の露をかことにてなをぬれきぬをきせんとや思ふ　秘凡人はぬれ衣をほさんとこそする物なるをかなたよりきせんとし給ふは心のほかとなり　箋道の草葉の露をわけぬれきぬをわれにかけんとはめつらかなることかなと詞へかけてみるへしかことはかこつけの心なり

人にたかへる心はせ人になりて　花夕霧の心に思ひ給へる事也　秘世の人にかはりて心はせある人にて又すき／＼しくなるとなり弄　私是は心はせあり用意ある心なるへし

あなかちにしたかひきこえても後をこかましくやと　聞かやうに落葉の心にしたかひて出たらん行衛もつれなくはおこかましからんと思ひみたれつゝかへる也是も實法なる心なり

とのにれはせは女君の　夕霧の殿三條なり女君は雲井の雁なり

六條院のひんかしのおとゝ　秘花散里の御方也花

また朝きりも　みやこさへいまた晴ぬ也

ましてかしこには　秘小野の霧を思ひやり給へるなり弄箋聞　花雲井のかりの事なり

夏冬ときよらに　秘花散里にかやうのかたよく沙汰しをき給へり

御まへにまいり給ふ　源氏の御前へなり　花花ちる里の御前なり

かしこに御ふみ　花女二の宮の御方小野へ御ふみまいらせ給ふなり　秘小野へなり

にはかにおさましかりし　是より落葉の心なり
かけてしり給はさらんに　箋是を自然はづれ〳〵に
もみしり給ふ程ならは思ひへたてたるとみおさし
給ふへきさなり又物いひかくれなき世なれはおの
つからきゝあはせ給ふやうもあらんとなり
たゝならぬふしにても　弄たゝならす物思ふけしき
にてなり
人々ありしまゝにきこえもらさん　秘何となくみや
す所へ申人の侍れかしとなり弄　箋様體をみやす
所へまつすくに人の申せかしさなり落葉の心なら
ぬ事又事實のなき事をふくにつよく思ひ給ふ故な
り
おやこの御中ときこゆ　秘かやうのことは親にはか
くすこと常のならひなりされともこれははやく人
の口よりきこへめさゝるさきに申せとおほすなり
むかし物かたりにも　弄さのゝ舟橋なとのこと三日
のよのもちひはくはし眞方詠等此類也躬恒歌「三
日のよのもちゐ(いイ)はくはしわつらはしきけはよどの
にはゝこつむなり以上弄　私弄にいへる先例に及
さることと歟只常のまゝに心うへし

こともありかほに　實事なともなきを申いてゝな
にかさおほしてはさ人々は用捨して申さぬさなり
弄人々はなにかはほのかにきゝ給ふてさは御息
所のきゝ給ふにや又云人々の宮に申詞なり御のか
に夕霧の事を聞入そめ給うて何かはことありかほ
にさ也是は女房なとの宮へ申事なるへし心は御息
所きゝ給ふともくるしかるましきことありかほに
と女二のおほしみたるゝさなくさめ申心なり　私
云此弄の兩義皆相當せす前に注することなく女二
宮はみやす所へ此事をありのまゝに申せかしとお
ほす也又人々はみやす所へ此事をありかほに申し
て病中に物をおほしみたれてはいかならんと思ひ
てみやす所へ申さぬさ也
あやしう何心もなきさまにて　秘宮の御詞也　箋落
葉のうちとけたる常のすかたにて夕霧にみえし事
也
みつからのあやまち　さやうに何心もなくてゐたり
しは落葉のわかあやまちにはおもひなせ(おイ)ともさ也
思ひやりなかりしあさましさも　弄夕霧のをしたち
て入たりし事也　わかあやまちはかりにても又な

きなりさりとては夕霧の無骨なりしと也
さるはにくけもなし　秘文のさまなり　花夕霧の文
の詞をいふなり　箋たつる事かなきなり
夕霧玉しゐをつれなき袖にとゝめおきて我心からまとは
るゝかな　秘こゝろならす魂もあくかれて行となり
箋玉しゐをとゝめんとゝめしは我心からなりさ
てとめてまとふはわか心からとなり　河あかさり
し袖の中にや入にけんわか玉しゐのなき心ちする
箋此歌を用也
外なる物はと　河「身をすてゝいにやしにけん思ふ
より外なる物は心なりけり　秘弄箋聞用之
昔もたくひありけりと　聞箋かくいふ歌あれは昔も
たくひあとる也
ゆくかたしらすのみなん　秘夕霧の心やるかたなし
となり弄　聞心のうかるゝなり
れいのけしきなり　つねの後朝めきたる文にてはな
しとか又此程かよひつる文の體にはかはりてけさ
うたちたるといふ歟猶案之つねの文よりはけさう
たちたると思ふなるへし　聞實事ありとはみえす
となり如何

何事につけても有かたう　秘夕霧の御心さしの切な
るをいへり弄
かゝるかたにたのみきこえてはみをとりなり　秘い
もせのかた也弄　みおとりはよそ／＼にての懇切
ほとなくてはなとゝ今よりいふなるへし一義落葉
の御かたちの事と云々心はかよふへけれとさし過
たる思ひやりなるへし　弄夕霧のすき心ならは也
物おほえ給ひたる　御息所のわつらひのひまなり
あさりひとりとゝまりて　秘律師なれとも修法阿闍
梨なといふなり
大日如來そらことし給はすは　秘律師の自嘆なり
あくらうはしうねきやうなれとこうさうにまとはれ
たり　河悪靈　興盛迷纒歟　花こうさうは業障也
河海にあやまれり　秘花鳥の説可然業障なり
ゆくりもなく　箋思ひこめもなきなり
そよやこの大將は　秘思ひこめもなくふといひ出し
給ふとなり
まいりかよひ給ふそと　聞密通の事也
さることも侍らす　みやす所の詞なり柏木とよき中
にて遺言ありしをたかへしと懇なるとなりさてわ

か類をもとふらひにおはしたると也
いてあなかたは　秘法師の語のさまなり　弄我身に
なかくし給そとなり
なにかしはえみわい　なにかしは律師の自稱するな
りみわいは見合なり
いとせちにもわらぬ事なり　河大切ならぬなり弄秘
箋勿體なきことなとゝいふなり　閑然るへから
ぬ事をいふなり
人はいというぞくに物し給ふ　夕霧をほむるとなり
故大宮のゝ給ひつけし　秘夕霧の祖母の事弄
いとやくなし　箋無益なり　いらぬ事となり河
はんさいつよく　河本妻也　秘雲井の雁なり
さる時にあへそうるい　河孫類也　秘そうるいは親
類なり　秘族類也
えみこの君をし給はし　花女二宮を云也　秘弄箋同
雲井雁の威を落葉のえおし給はしとなり
女人のわしき身をうけ　箋女人は地獄の使といへり
長夜のやみにまよふとは　後世の冥闇なるへし
人の御いかりいてきなは　秘物えんしなとの事なり
弄箋依嫉妬好鬪諍といへり

もはらうけひかすと　河事なり承引せぬことゝなり
心にうけぬよしなり箋
いとあやしき事　秘御息所の詞也　不審なるよしな
り
心ちのまとひにしかは　みやす所のみにわつらはし
かりしなり此注前也
大かたいとまめやかに　秘夕霧の事なり弄此注後
人のそしりあらんことははふきすて　秘省畧なり
かへりみる心也又省略の心もあり
心ゆるさぬことはあらしと　心ゆるさぬ事をしたる
ことはあらしとうちとけしとなり
律師の立ぬるのちに　みやす所の方へ少將君をよひ
てとひ給ふなり
けさの御ふみのけしき　さりけなき文の體實事なき
さまを申へし
宮もほのかにの給はせつる　秘ありのまゝに申せと
の給ひしことなり　私ありのまゝに申せかしとは
おほしたるとみえたりたしかにの給へるとはみえ
さる歟然らは玉しゐをつれなき袖の歌のまいりし
時の給へる事なるへき歟思ひやりなかりしわさま

しさ又えみすとをいへとのたまへる事なり如何
物ものたまはて　秘御息所なり
みたてまつるもいと〳〵ほしう　秘少將の御息所の
さまをみたてまつるなり
さうしはさして　箋障子もへたてゝなとゝよきやう
に申なほすなり
とてもかくても　秘みやす所の詞なり弄
何のやうゐもなく　箋つねのうちとけたる體を云也
心きようおほすとも　眞實の事は人にいひわけかた
しと也
けたかうもてなし　秘此宮を何とかしてけたかくし
なしたきと也　箋柏木の事さへつゐにみやす所は
同心なかりしよし前にみえたり其後悔さへあるに
今からたにもけたかうもてなさんと思ひ給へるな
り人から心ふかくきこえたり　聞柏木のことをさ
へ無念に思ふとなり
かうすこし物おほゆる　秘御心ちひまあり只今こな
たへ御いてあれとなり
そなたへまいりくへけれと　箋みやす所の方からこ
そ参るへけれともとなり病中にさへ禮をいたさる
ゝなり用意ある人とみえたり
まいりてしりなん　御使みやす所のかた（わイ）り給
へとの事はかりを申て夕霧の事をきゝ給へるをは
申さぬとなり
ひとへの御そほころひたる　弄よへの名殘なり
この人々もいかに　落葉の御心中なり
えしり給はて　みやす所のしり給はて也
つれなくてありしよと　秘女二宮の御心なり　今し
り給はて後にきゝ給はゝ其時しらぬかほして有し
よと思ひ給はゝいかゝと也
な（ヤイ）かてなほらぬさまにも　落葉の詞このまゝむなし
く成たらはよからんとなり身をむさともてなした
るとおほすゆへなり
あしのけ　秘脚の氣なり
物をいとくるしう　秘あしのけのゝほれるゆへにか
きのぶるなり
少將うへにはこの御ことほのめかし　秘みやす所し
り給ふよしを申給へり　箋うへにはさはみやす所
なり落葉へ内々しらせ申也
すこしこそそへて　すこしことをくはへてけさやか

に申なしたるとなり
なけい給へるけしきをはきこえいてす　秘みやす所此事に又なけきくはへ給ふるよしをは中のこしたるなり弄　落葉に又なけかせたてまつらしとなり
されはよといとはゝしくて（いひわひしくてイ）　秘女官（房イ）の御心なり
この事にのみあらす　秘柏木のことにも心をつくし給ふへしとなり弄
身のおもはすに　是も柏木の事也
この人はかうてもやまし　秘夕霧なり　花この人は夕きりをいふなり
まいていふかひなく人のことによりて　花辨の君の思ひかけし事也　秘夕霧をいひのかれても又いかなる人も心をかくることのいてきてはといさゝかは思ひなくさみ給ふとなり人のことゝは人言なり　箋夕霧よりも下の人ゆへに又名のたつことかあらはとなりされは夕霧のことをすこしはれほしなくさむるかたもあれとそれもかろ〳〵しきことはおほすなり聞　弄人のことは人言なり　少しおほしなくさむるとは實事なき事を心やすく覺しけるなり　私花鳥に辨君をさしていへるも不審なり又弄の義もいかゝ
かはかりに成ぬるたかき人の　秘皇女なとは一人にたにみえ給ふことは有ましきに此夕霧のことさへいてきてはとなり
おほしくして　覺し屈してなり又は苦してなり
中のぬりこめの戸あけあはせて　秘閑道よりわたり給へり　弄中のぬりこめ　見花鳥御法卷　寢殿なとのかたはらに壁ぬりまはしてつま戸をたてゝ調度なとをく所なり帳臺なとならすにいたる道の心なり　私あけあはせてとはこなたとあなたと前後に戸のあるをあけてわたり給ふなるへし
をみたらぬとなり
つねの御さほうあやまたす　病中なれとも平生の禮をみたらぬとなり
いとみたりかはしく侍れは　秘みやす所の詞也
この二日三日はかりみたてまつらさりけるほとの　河一日不見如三日毛詩
のちかならすしもたいめんの侍るへきにも侍らす　秘來生再會は有かたしと也　河親子は一世の契といふ歟　河萬五　一世には二たひみえぬちゝはゝをおきてやなかくあかわかれなん　箋此歌を引り

又めくりまゐるこもかひやは侍るへき　秘又生れあふとも互にしりしらるへからすとなり弄同

あなかちにならひ侍にけるも　弄「思ふとていさしも人にむつれ（まイ）けんしかならひてそみねは戀しき此心よくかなへり聞同

くやしきまてなん　秘あまりへたてなかりしも今はくやしきとなり

ものつゝみをいたうし給ふ本上にて　秘宮の御本性をみやす所の思やり給ふなり弄

御たいなとこなたにて　落葉宮の御膳也

物きこしめさすとて　落葉の不食し給ふなり

てつからまなひなをし（どイ）　みやす所の思ひあつかひ給ふさまなり

たゝ御心ちのよろしうみえ給ふに　秘みやす所の御病膳のひまあると也　弄みやす所のよろしきなり

むねすこしあき給ふ　落葉の御むねのあくとなり

かしこより又御文あり　夕霧よりなり

心しらぬ人しもとりいれて　夕きり落葉の間の事をもしらぬ人なり

少將の名とて御ふみありといふそ又わひしきや　わひしきは落葉の御心歟

人しれすおほしよわる御心もそひて　秘夕霧のねんころにもあらはこみやす所の心のうちにいさゝかゆるし給てしたまち給へるなり聞　弄おほしよわるみやす所の心なり　箋此時夕霧のおはしたらはゆるさんとみやす所のまち給へるとなり

猶きこえ給へ　秘御返事をし給へとなり弄

人の御名をよこさまにいひなをす人は　弄ある事をなきやうにいひなほすはよこさまなる事なり　私云よこさま（イナシ）にいひなほす（をイ）の時は無別云々　已上弄

私此段無別條只よこさま（イナシ）にいひなほす（をイ）人こ三本にあり

心うつくしきやうにきこえかよひ給ふてなほ有しままならんこそよからめ　花是は夕霧の文のことなりうちくのことはともかくもあれうへにはうつくしくけんきはなれたる樣にもてなし給はんこそ人めよからめいつしかあまへたるさまなる文なるへしこ御息所思ひ給ひめしよせてみ給ふ也　私あいなきあまへたるさまこはいましも御返事なくは人めかへりていかゝあらんあまへたるさまなるへし

と御返事をすゝめ給ふなりさて文のやうもゆかしくおほしてみやす所のとりよせ給ふなるへし　弄

御返事なくは中々となり

くるしけれと　秘此御ふみをみやす所へ奉つる也

あさましき御心のほとを　弄夕きりの文の詞也秘

花是は夕霧の文の中の詞也

ひたふる心も　つれなきから又まけし心のつくなり

夕霧 せくからにあさくそみえん山川のなかれての名をつつみはてすは　秘夕きりをいとひたまはゝかへりて御名はあらはれぬへしとなり　弄夕霧をいとひ給ふとなり　箋山川はあさき物なれともせかれてはふかくなる物也され共なかれての名をつゝみはて給はすはかへりてあさくはみえんとなり夕霧をせき給ふとも名のなかるゝをせき給はすはやかてあさく人のしるへきとなり所詮なかれん末の名をよくつゝまんとおほしめさは心やすくわれに打とけ給となり　聞せかれたりともかへりて名かたゝんとなりまけしは心のそふ故なりたゝ名をよくつゝみて心やすくわれに打とけ給へかへりて名はたゝしとなり

詞もおほかれと　花御息所も此文を見給ふてけさやかなる文章にも非す心ちよかほにてことよひもつれなきを淺ましと思ひ給へると也

めさましけに心ちよかほに　聞この文もけさやかなるけしきにもあらてめさましけにとは此間のやうに公界むきにてなく又ねんころにもみえぬかめさましきなり心ちよかほとはわか物にしたる體也とみやす所のおほすなり　私心ちよかほは前の歌にわれにとくうちとけ給へしからすは結句御名のたちて山川のあさくみえんなとゝ理りけにいひたることなるへし

ことよひもつれなきを　秘みやす所の心なりたゝ大かたの心さしにてありけるよとなりことよひもつれなくては夕霧のおはせぬ事なり

とかんの君の御心さまのおもはすなりし比　柏木の女三に心をみたりし比のことなるへし

大殿わたりに思ひのたまはん　秘雲井の雁なとの思ひ給はん所なり

猶いかゝの給ふとけしきをたにみんと　みやす所いまーたひ夕霧の體をみんとおほして心ちのあしき

をおさへてかへりことかき給ふなり　弄みやす所夕霧のかたへかき給ふなり秘

たのもしけなくなりにて侍る　秘文の詞也　秘折ふし女二宮みやす所のかたにましますとなり弄

とりのあとのやうに

そゝのかし　弄女宮に返事をすゝめ給ふなり

返御息所　をみなへししほる(なイ)ゝ野へをいつことて一夜はかりのやとをかりけん　河秋のゝにかりそくれぬる女郎花一よはかりのやともかさなん　箋此歌引　箋しほ(なイ)るゝ野へとは人のもてはやさぬ所といふなり

御物のけのたゆめけるにやと　秘物のけのまつたゆめてとり入んとするかとなり　弄たゆむるは油断さする也

猶わたり給ひねと　秘物のけをそれて君をかへり給へとなり

御身のうきまゝに　落葉のうき身なれはおくれしとなけき給ふなり

三條殿におはしにける　弄雲井の雁のかた也

ことしもありかほに　弄先夜實事なき心をいへり私たゝ事のけちめあるやうなりしと思ひとまり給ふなり是は今夜の小野への無音の事をいひ給ふなり

ち(へイ)ゝに物おもひかさねて　河ちゝに或本ちへにとあり　河「心にはちへに思へと人にいはぬわか戀つまをみんよしもかな　箋用此歌也　弄引歌歟歌までもなし

北の方はかゝる御ありきのけしきを　雲井雁也　小野へのことをほの〳〵しる也

よひ過る程にそこの御かへり　小野よりの返事なり

とみにもとき給はて　鳥のあとのやうなる文灯下にてみにくき也

六條院のひんかしのうへ　秘花散里なり

さてもなほ〳〵しの御さまや　河直人のやうなるといふなり　聞平人なとのやうなるといひおとし給ふなり

ひこしろひ　引しろふなり

さすかにふともみてもたまへり　夕霧にいひはちしめられて見すしてもち給へるなり

とし月にそふるあなつらはしさは　秘雲井雁の詞也夕霧のとし月にそへてあなつるとの給ふは御心

ならひなり夕霧こそ雲井雁をあなつり給へとなり
とはかりかくうるはしたち給へるにはゝかりて　箋
夕霧のしはしくすみて實めになりてれはすする氣色
にはゝかりて雲井雁はたはふれにいひなし給ふと
なりとはかりとは暫なり　私箋の義尤然るへしさ
れともいさゝか愚案ありとはかりとは暫にはあら
すと許也其故は夕霧のかくうるはしたち給へるに
はゝかりて雲井雁の年月にそふるあなつらはしさ
は御心ならひなへかめりとはかりわかやかにおか
しきさましての給へはと心えて然るへし　氣色に
はゝかりていはんことをいひのこしたるをとはか
りといふなり但如何
うちわらひてそはともかうもわらんよのつねの事な
り　秘夕霧なり　箋夕霧の返答なり互に道理は難辨
となりよのつねのことなりとは普通にたれもいふ
ことそとなり
又あらしかし　箋我ことくなる人は類あらしとなり
弄
よろしうなりぬるおのこの　箋夕霧は官爵もなりの
ほり我はと思ふ人なり

かくまかふかたなく　秘人ひとりをまもりたる心也
弄　別心なきをいふ也
物おちしたる鳥のをうやうの物　河鷹のこと也小は
雄大は雌也雌鳥奢雄鳥は病といへり女はおごり男
はまけたるにたとへたるなり　箋兄鷹は雄なり弟
鷹は雌なり
さるかたくなしき　夕霧の我身のことをの給ふなり
御ためにもたけからすや　雲井雁の爲にもたけきこ
とにはあらすと也
あまたか中に猶きはまさりて　秘あまたおほき中に
てすくれたるこそ一段の事なれと也
かくおきなのなにかしまもりけんやうに　河かくや
姫を竹取の翁後（復イ）得ん事を守りたる事歟　一説韓府
外傳に守株而伺兎とある事歟　水原云赫焚姫の空
にのほりし時かねて守しかと翁時にのそみてはほ
れたりしことなりと云々　秘竹取よりは守株こと
然るへきか　箋韓非子守株事而伺兎（莬イ）冀復得　弄竹
取の心也　花竹取のおきなかくや姫のことを古抄
に出せりそれは夫婦の故事にあらすことにはあひ
かなはす別になをたつぬへし　聞竹取の事をひけ

る相違なり只男女のめつらしからすさしむかひたる體をいふなり
をれまさひたれは　秘愚痴の心也　をれ〳〵しき心なり愚痴心也
おこつりとらんの心にて　河誘(チコツリ)(マシラフ)　摅(チコツル)　箋秘了簡してとなり弄同
いとにはひやかにうちわらひて　秘雲井雁なり
ふりぬる人くるしや　秘ふりたる物こそとなり　箋ふるされたる我身そと雲井雁のゝ給ふなり　弄雲井雁卅二夕霧卅七云々　夕霧十二雲井雁十四の時逢給ふ然は此年相違也源氏廿一葵巻に生然は此巻源氏五十歳なり夕霧卅なるへし雲井雁卅二なるへし
かねてよりならはし給はて　河「かねてよりつらさを人にならはさて俄に物をおもはする哉　秘かねてよりつらさを云々弄箋聞同
俄にとおほすはかりは　秘夕霧詞也　弄何事の出來ぬるそとなり　聞前の引歌をかけていへり何事の物を思はするそとなり
まろをはゆるさぬ　聞かのみとりの袖なとの事なりよからす物きこえしらする　秘口きゝたる人あるらんとなりめのとなとのことをあたりての給ふ心あるにや
みとりの袖や名殘あなつらはしきに　今も猶あなつらはしくて雲井雁を夕霧と引へたてたてまつらんとて色々のこといひいつるにやなと結句こなたよりの給ふなり　河大夫乳母六位宿世といひし事也
あいなき人の御ためにも　秘女二宮の事をいふなるへし花　弄女二宮の御ためいとほしくと夕霧のゝ給ひなから又つゐにあるましき事にもあらすと覺すなり
終にあるへき　弄夕霧の心さはやかにあらかはすと也秘
大輔のめのといとくるしときゝて　秘雲井雁のめのと六位すくせといひし人なり弄同
せめてもあさりとして　河求なり捜也　箋求なりあさるきゝすも求食といふ事なり　秘不求取なり弄求心なり
つれなく御とのこもりぬれは　雲井雁但夕霧歟
むねはしりて　河「人にあはん月のなき夜は思ひお

きてむねはしり火に心やけゝり　小町　聞引此歌歟
不及此歌歟　私むねなとのさわく心歟
ひめ君は君たちにおとろかされて　雲井雁のさま也
いまおき給ふやうにて　秘夕霧只今はしめておきたるやうにし給へるなり　弄夕霧はしめよりおき給ひなからいまおき給ふけしきをし給ふとなり
もとめんとも思給へらぬをそ　夕霧の文をあなかちにもとめぬ故に小野よりの文とは思はぬなり
文の事を思ひ出給はす　弄雲井の雁の心也
かしこにとくきこえん　小野への事なり
よへの御ふみは何事かありし　夕霧の詞也
六條にもえまいるましけれは　花ちる里をもえとふらふましと也
ふみはれこかましう　弄雲井雁の心無用の文をとりつと也
一夜の深山風に　秘宮と云事下心にあり　河一夜の云々大將なやましうてと有を三條上あさけりて一條の宮によそへてみやま風といへり尤切也　箋雲井雁のあさけりての給ふ也　小野の山風をひきてなやましきとの給へりと云心也上の詞に夕霧のなやましくて六條院にもえまいるましとある所をうけたる詞なり　取かくされたる文は花散里の文と申給ひし故なり
いてこのひかことな　秘夕霧の詞也
世人になすらへ　秘夕霧を世の好色なみになの給ひそとなり弄
この女房たちも　弄人々も夕霧はまめ人なるをかやうにの給ふと思ふらんとなり夕きりの詞なり
日くらしのこゑにおとろきて　聞これにて山中を一入思ひやるなり此前におはせし時日くらしの鳴し事あり
いかになしてしにか　硯にはむかひ給へともよへの文をみ給はぬは文言の心にうかまぬさまなり
かう心くるしき　秘女郎花の歌ある也弄　花みやす所の返事に一夜はかりの宿をかりけんとある事也
一よの事を心ありて　落葉へいひよりし事心ありとははや逢給ふとおほすかとなり
いふかひなうかきまきらはし　みやす所の返事のさまを云也
あたへかはして　河あたにとりかくしての心なり

花あた〳〵しと云心にや　秘心のあた〳〵しくさ
れたる心也弄同　箋雨抄の分はあた〳〵しきと云
云と然はあだえと濁へきなり
いてやわかならはしそや　弄雲井雁を夕霧のならは
し給ひし事也　聞雲井雁の夕霧をあなつらはしく
し給ふ事也
心やすくたいめんも　秘まいりても對面なくてはと
なり　聞落葉の心やすく逢給ましきかと也
人もかくの給ふ　秘御息所はゆるしかたにの給へと
けふは坎日なれは憚ありと也
かん日にもありけるを　河坎日弄箋　花九坎日不可
出行云々九諸事憚之日也
猶よからん事をこそ　弄「いかにしていかによから
ん小野山のうへよりおつる音なしの瀧　聞引之他
抄不引之
いとめつらしき御ふみを　秘夕霧の文の詞なり
此御とかめ　秘一夜の枕の事なり
夕霧
秋の野の草のしけみをわけしかとかりねの枕むすひ
やはせし　秘實事なしとなり　弄分入しはかりにて
枕をむすひし事はなかりしと也　私小野への道の
草のしけみをは分しかともかり枕をはむすはすと
也
あきらめきこえさするも　實事なきよしを申分るは
無用のことそとなり行末をかねたる心よりなり
聞是をよき次にすへきをかやうに申ひらくもかへ
りていかゝなりされともよへ參らぬ罪を無意趣(ヒタヤコモリ)に
てやと陳するそといふにや
よへのつみはひたやこもりにやとあり　秘先夜わた
り給はぬをひたやこもりに罪を得ぬへき也無意趣
に罪をかくる事也弄　花「うきによりひたやこも
りと思へ共あふみの海は打いてゝみよ和泉式部　今
案御息所の歌も一夜はかりのやとはかりけんの詞
につきていへり一夜のとかめはひたやこもりにて
つねにまいらぬをとかめ給ふにやといひなせりさ
すかにあらかはぬ心なり
宮にはいとおほく　落葉への夕きりの文也
みやまにあしとき馬にうつしおきて　河駿足馬也
花移の鞍は隨身ののる馬におくなり大將は隨身を
めしつかふ故也
一夜の大夫をそ　秘つかさのせうといひし人なり弄

よへより六條院にさふらひて　夕霧の小野へおはせぬことのさはりをつくりことにいひをしへたまふなり

かしこにはよへもつれなく　小野の事なり

のちのきこえをも　秘みやす所のかたより文にてすすみの給ひしなときこゆやあらんすらんと也弄

いといたうなやみ給　みやす所の物思へる故なり

さうしみの御心のうちは　秘女二宮は何ともおほさぬなり弄　實事なければはうしともおとろき給はすと也

かくいみしうおほいたるを　弄みやす所の心のうちを女二宮の心におもへり

れいよりも物はちしたる　落葉宮のさまなり　惣別物つゝみし給ふと前にあり

物をのみおほしそふへかりけると　秘御やす所の心なり夕霧ゆへに物思ひをし給ふへきと也　私おほしそふとは柏木の上に又夕霧のことなり

いまさらにむつかしきことをは　秘みやす所の宮に申給ふ詞也弄

おもはすに心おさなくて　落葉の心をさなくおはすとの教訓なり

かすならぬ身なからも　みやす所の我事をいふなり

そなたさまはうしろやすく　此ほとまてはや御分別につきたると心やすくやう〳〵思ひしとなり

つよき御心おきてのなかりけることゝ　夕霧の事なとをおもへはまたいわけなくつよき御心はなしと思ふに今すこしみやす所の命をもかけとゝめたきとなり

たゝ人たにすこしよろしうなりぬる女の人ふたりとみる　河忠臣不事二君貞女不見二夫

思ひのほかに心にもいらぬ（つかイ）　秘柏木にあひ給ひしことも心につかすと也

院よりはしめたてまつりて　花これは女二宮を柏木にむことり給ひしことなり院は朱雀院ちゝおとゝは致仕大臣をいふなり弄

わか御あやまちに　秘院のさため給ひし事なれはなり

大そらをかこちても　河身のうさを世のうきとのみなかむれはいかに大そらくるしかるらん　花柏木にはやくわかれ給ふ事也　或云おほそら大惣也已

上河海　私云此儀いかゝ天道を仰て落葉はしり給はぬそといふ心なり

いとかう人のためわかため　秘夕霧の事なり

よその御名をは　弄御息所語なり夕霧の女二宮へかよひ給はゝよその名のたゝむ事はかなしよのつねにねんころならましかはとなり

よのつねの御ありさまにたに　秘夕霧のねんころにたにもあらはとなり

こよなうなさけなき　花夕霧の事を云なり　秘夕きり此二夜三夜とふらひ給はざる事也

いとわりなく　落葉の宮の御心也

おしこめての給ふを　秘實事の有無をはおしこめての給ふなり　弄實事ありしやうにおしての給ふなり聞

おほとかにらうたけなり　落葉のさまなり

うちまもりつゝ　御息所の落葉の宮をみたてまつりて思ふさまなり人にはおとるましきと思ふに物思ふすくせのあることよなと思ひみたるゝまゝにくるしく成まされるなり

たんてほちてかへりいらん事の　秘大日如來そらことし給はすはなといひしかと其驗もなきなり定業はかきりあることなり此物語にかく給かたにも成就不成就をよくかけり然皆世間のありさまなり

佛もつらく　弄此物語に成就不成就さま〳〵かきたり可見也

なにゝわれさへ　秘一夜はかりの宿をかりけんの歌の事なり御やす所の心

やかてたえ入給ぬ　弄臨終の人さしもおもはしなれともたとへてかけり

れいのことゝり入たる　弄物のけにつねに絶入給ひし也

さらなることわりを　ことふりたる事を今さらのやうにいふなり

さるへきかきりかたへこそ　弄籠居の僧はとまりぬへし

宮はこの御せうそこにそ　秘山の御門の御消息也弄

日ころもなやみ給ふと　秘是より御ふみの詞也弄

思ひなけい給ふらんありさま　みやす所のなくなれるよりも落葉のなけきをおほしやるなり

常にさこそあらめと　秘みやす所の遺言に久しくの

こしおくへからすやかておさめよとありしなり弄
ゆゝしけなる程にそ　葬送の出たちの程なるへし
けふよりのち日ついてあしかりなんと　秘夕霧詞也
弄　いそきおはせんとてかくの給ふとなり三條宮
にての給ひしなり
ほとさへとほくて　秘心にいそくゆへなり
ゆゝしけにひきへたてめくらしたるきしきのかたは
　秘穢氣を引へたてたるなり　私葬送すへき出た
　ちのかた歟也イ
涙もろにおはせぬ　夕霧の體也
つねなき世のありさまの人のうへならぬもいさかな
しきなりけり　秘殊勝の語なり
よろしうれこたり給ふさまに　秘これより夕霧の詞
也　箋夕霧の詞也少將にの給ふなり
夢もさむる程侍るなるを　秘常は夢を短事にはいへ
りこれは夢よりもみしかきよしおもしろき詞なり
おはしたりしさまこれにおほくは御心もみたれ　秘
大將のこと故おほくは心をみたり給ひしと宮はお
ほすなり　弄おほしたりしさまは御息所の心中な
り　聞おほしたりしさまとはみやす所のさまを宮

の思ひ出し給へる體也　秘弄の義然へし　花故み
やす所は大將の御事ゆへいよ／＼御心もみたれて
はかなく成給へるかと女宮の大將をつらき事にお
もひ給へるなり
いかにきこえさせ給ふとかきこえさせ侍るへき　秘
　さふらふ人々なり
かくふりはへ　弄わさとなり
たゝおしはかりてわれはいふへきこともおほえす
　少將におしはかりて申せとなり仍句をきりて心う
　へし
なき人とことならぬ御ありさまにて　なんと讀きる
へし　返事の給はぬもことわりなれは少將君の申
　なるへし
わたらせ給へるよしはきこえさせ侍りぬ　秘是より
夕霧へ申詞なり　私此義如何たゝいまはなき人と
ことならぬといふより夕霧へ少將君の申詞也　弄
御ありさまにてなんわたらせ給ふとは女二宮の事
にや又私云なんにて切てわたらせ給へるとは夕霧
のことをきこえさせつと云義なり　此義可用
きこえやるへきかたもなきを　弄夕霧の語也

みつからも思ひのとめ　夕霧の我身の事也
かのおもほしなけきしありさまを　弄みやす所の夕きりと女二宮との中のことを思ひ歎き給ひしとなり　秘夕霧の事を思ひ歎き給ひしとなり　夕霧の返事なとなかりしを歎しと也
かこちきこえさするさまに　夕霧をかこち申へきこともあれともけふは心みたれて申たかふる事もやなといふなり
おほしまとへる御心ちも　落葉の御愁傷もかきりあらんと也
けにこそやみにまとへる　夕霧の詞也
きこえなくさめ給ふて　落葉をきこえなくさめ申せと也
とよひしもあらしと思ひつる　秘葬禮なり
みさうの人々　夕霧の家領の人々なり
人かすなともそひて　夕霧のとふらひ故なり
おやときこゆるとも　親子もあまりしたし過たるは
かくのことしとなり
この御事を又ゆゝしう　落葉の事也
かく心ほそくては　秘御出京あれとなり

西のひさしをやつして宮はおはします　奉皇太子及群臣舉哀　河延暦八年十二月皇太后宮　崩天皇錫紵避正殿御西廂箋引之是國史之語也
命さへ心にかなはす　河命さへ心にかなはぬ物ならはしにはやすくそあるへかりける　弄引之
すゝろにあさましきことを　夕霧のことをよるひる御心におほしなけきて故みやす所のうせ給ひしとおほし出る也
のちの世の御つみにさへや　秘みやす所の罪障なといへり
此人の御ことは　夕きりの事なり
こと事のすちに　秘異事のすち弄　私別事猶可然歟
わか心にあはれとおもひ　わかおもふ事を同し心に人のとひなくさむるはうれしき物なるとなり夕霧の心也
大宮のうせ給へりしを　秘葵上の母なり夕霧の昔のことを思ひ出給ふなり弄　箋夕霧の葵上の御母のことなり此一段はわか愁歎を哀とも問人はむつましき物也其證據を引て心一つに思ひ給ふなり
ちしのおとゝのさしも思ひ給へらすことわりの世の

わかれにおほやけ〳〵しき　箋致仕大臣は母の孝をも面むきはかりにて内心にしみ〳〵とはなき人となり　花おほやけ〳〵しきはわたくししびれすさしさたまれることをいふなり

六條院の中々ねんころに　秘致仕大臣よりも源はねんころなりしとなり

そのをりに故衛門督をはとりわきて思ひつきにし　秘致仕大臣よりも柏木はかなしく思ひしとなりわかかなしく思ふことに心おなしくする人はうれしき物をとなり　箋柏木は一段と祖母のかなしみ深かりしそれ故夕霧の深く知音し給となり

女君猶この御中のけしきを　秘雲井雁也　この御中とは夕霧落葉とのことをみやす所と二かたに思ひうたかふなり

雲井雁
あはれをもいかにしりてかなくさめんあるや戀しきなきやかなしき　秘あるは女二宮なりなきはみやす所なり花鳥

にけなのなきかよそへやと　弄御みやす所の事をはおもはぬ物をとなり聞　秘おろかなるよそへやとなり

返夕霧
いつれとかわきてなかめん消かへるつゆも草葉のうへとみぬ世を　秘きえかへるとはとゝまれるなりきえやらぬ露も草のうへに終にひかりとゝまらさるなりいつれもおなし世となりはかなきのみとなり
弄　弄古今「わか宿の菊のかきねに置霜の消かへりてそ戀しかりける消かへる心しるへし　花夕霧の返歌のきえかへる露は消殘る心なりそれとても始終草葉の上にとまるましきあたし世のことをいへり

猶かくへたて給へる　花雲井雁の猶我にへたてゝありのまゝにの給はぬと思へるなり　箋雲井雁の心なり夕きりの隔心をうらみ給ふ義なり　弄夕霧の心也花鳥云雲井雁の心とあり　夕霧の心なり　箋かくへたて給へるとは女二宮のことなり露の命はみやす所のことなり又云露のあはれ（命イ）をはさしおきてとあれは歌の事とみゆ然は雲井雁の心歟　私雲井雁の心勿論なり但能々末の段をかけてみれは夕霧の心なり雲井雁の返歌をはなほさりかてらにしなして猶女二宮のおほしへたつることを思ひつゝみやす所のことをはさしれきてとやかくと思ひ居

るとみえたりさて次の詞にかくおほつかなく覺し
わひて又わたり給へりとあり夕霧の心然へし
れほつかなきにおほしわひて　花夕霧の又をの小野へ出
給ふとなり
御いみなと過して　秘待とをなれはまつおとつれ給
ふ也
この御なき名の　秘虚名にはなすましと也
たゝよつきて　秘とりもちて女二宮をはくゝむへき
と也　弄ひたすらちきりの事を思ひたち給ふ也
北のかたの御思ひやりを　弄雲井雁の事也花　秘あ
るや戀しきなきやかなしきの歌の事也
さうしみはつようおほしはなるとも　弄女二宮はお
ほしはなつともみやす所の文をとらへ所にてはか
こちよらんとなり
一夜はかりの御ふみ　秘をみなへししほるゝ野へと
ありしみやす所の御ゆるしをとらへ所にての給へ
り　箋故みやす所の歌に一夜はかりの宿をかりけ
んのことなり夕霧の一夜のとかめはと返事にかき
給へるも此事なり
讀經のこゑはかすかに　小野の體なるへし

山田のひたにも　引板歟
色こきいねともの中に　穀穗黄　白氏文集
うれへかほなり　秘我心より愁をもそふるなり弄
人の思ひにたよりあり
なほしに色こまやかなる御そのうちめ　色こき紅の
きぬなるへし
おくに人やあらんと　箋夕霧の用意眼をつくへし
猶ちかくてを　秘近くことなり弄
なはち給ひそ　夕日にさしむかひたるみやす所の内
を少將のおもはゆき體なる故にの給ふとみえたり
霧もいとふかしとの給ひ山のかたをなかめたるな
とみな夕霧の用意とみゆ
かたわけ入心さしは　箋はる〳〵小野まて分入給ふ
深切の心さしをは少將のみ知て隔心は申ましきこ
とそとなり
霧もいとふかしや　弄少將夕霧にはちたる心也
山のかたを　箋用意殊勝なり　少將の立出るをみぬ
かほにて心やすく出し給ふなり
なほ〳〵とせちにのたまへは　秘まいりよるへきよ
しなり

やまとのかみのいもうとなれはきぬ色いとこくて
弄みやす所のめひなり　少將事也　秘服を着たる
なり
つるはみのもきぬ　花橡順和名［トヲクリ］黒色なり是にて黒服
を染なり又四位已上の袍をも是にて染る故につる
はみの衣と云國々より打橡をたてまつる格にみえ
たり奥に注箋同之
かくつきせぬ御ことは　秘夕霧の詞なり花弄　箋故
みやす所の事なり
きこえんかたなき　箋宮の御心をいふ
みる人ことにとかめられ　箋毎人なり　弄私に「忍
れと色に出にけり我戀は物や思ふと人のとふまて
此心なり
かの今はの御ふみも　箋夕霧詞也
この人もまして　箋少將なり
その夜の御かへりさへ　秘少將の詞也弄　花是は少
將君の御いらへなりろのよの御かへりは夕霧の文
の返事のをそかりし事をみやす所の心にかけ給ひ
しことをかたるなり
すきにし御毒にも　秘柏木逝去の時も此女宮のおほ
す所をおほして心つよくしてまし〳〵たるなり箋
弄聞
この御なけきをおたまへにはたゝわれかの御けしき
秘二義あり御まへとは御息所と云々夕霧のかよひ
たえ給ひしことなり又の義は女二宮の御ことなり
みやす所なくなり給へる事也　箋此御なけきは故
みやす所のこと也　弄夕霧のかよひたえたること
をみやす所の歎給ふとなり女二宮はおほし入ぬな
り御まへ御やす所云々私云不審あり以上弄　私此
御なけきは故みやす所逝去事おまへとは女二宮の
事とみえたりわれかの御けしきとは夕霧へ一くた
りの御返事もなき故に少將のかく申なりさて此次
の夕霧の詞にてよくきこえたり
われかの御けしき　河「夢にたに何かもみえすみゆれ
さも（はやイ）われかもまとふ戀のしけき（けしイ）に　箋引此歌
そよやそもあまりにおほめかしう　聞そよともそよ
と抑へていへり　弄夕霧の語也　秘さのみかくま
てなけき給ふましきことゝなり此時は御まへとは
女二宮の心にてよき歟となり　私落葉のわれかの
けしきにておはするこ少將の申につきて夕霧のか

くの給ふ也
いまたかたしけなくとも　秘今はよる所のなき御身なるへしと也
御山住もいとふかき嶺に　秘朱雀院なり
よろつのことさるへきにこそ　夕霧にうちなひき給へといふことをの給ふなりさてきこえしらせ給へとなりうき世のならひをとなり
まつはかゝる御わかれの御心にかなはゝ有へきことかは　弄みやす所別のこと　秘世中の心にかなふ物ならは柏木にわかれ給ふことの出来ぬへきかとなり又はみやす所の別となり　私柏木の事に及へからす先さしあたりてみやす所のことはかりにては然へし
うちなけきつゝ　少将の君のさまなり
われおさらめやとて　河「秋なれは山とよむまて鳴しかに我おさらめや獨ねる夜は弄秘箋開引之
夕霧
さとゝをみ小野のしの原分てきてわれもしかこそ聲もおしまね　秘小野の篠原こゝにては名所にあらす草の原をいへり箋同　河あさちふの小野の篠原とは近江國の名所なり小野を小野のしのはらともいふなりしけき心なり　能宣集「山城のをのゝ山への里とをみかりのやとりをかりそかねつる　私われもしかこそはさこそなりさうといふ義なり鹿をこめたるなり
返少将君
ふち衣露けき秋の山人は鹿のなくねに音をそへつる　秘少将君歌也弄　心あらはなり
よからねとをりからは　此段草子地歟
いまはかくあさましき夢の　秘女二宮の御返事也弄
たえぬ御とふらひも　夕霧のたえすとひ給ひし事也
十三日の月いとはなやかに　九月なり　日本には名月に用る歟但ふるき集なとにみえすいつ比より賞することにか
小倉の山もおとるまし　河「秋の夜の月の光しきよけれはくらふの山もこえぬへらなり　秘引歌に及はすくらき所も有ましきとなり　箋不及引歌くらふの山の類なり淸きにとるなり　弄引歌不用小倉山もくらからしとなり　本歌のくらふ山を小倉山と書たるにや然は面白哉「いつくにか今宵の月のくもるへき小倉の山も名をやかふらん　聞此歌にてかけり云々

はる〳〵とおろしこめて　御格子のさまなり
大納言こゝにてさそひなと　秘柏木の事也
夕霧
みし人の影をみはてぬ池水にひとり宿もる秋の夜の月　河後撰に侍らすなりにし人の家にまかりて
「なき人の影さへみえぬやり水のそこは涙をなかしてそかし伊勢
殿におはしても　秘三條殿也
さもみくるしう　秘夕霧のさまをいへり
うへはまめやかに心うく　秘雲井雁也　雲井雁の心也
六條院の人々をともすれはめてたきためしに　花是も雲井雁の心に思ひ給ふ事なり六條院の御思ひ人たちは互に思ひあひ給ふて物ねたみなとし給はぬ事を夕霧のゝ給へとそれとてもありつけたる事ならはさもこそあらめさるにても夕きりをはまめ人と申てえんなるためしめやすきあやかり物にせられ給へりし人のあり〳〵て恥かましきことやあらんと歎き給ふなり　弄六條院のかた〳〵あまたなたらかなるをと夕霧の常に宣ふと也
あいたちなき物に　聞愛のなきなり　弄雲井雁を夕霧の思ひ給ふをわりなしやと也
人めもなれて　さやうにありつけたらは人のみるめもはちかましかるましきなりなきことのいてきたる故に面目も有ましきとなり
世のためしに　弄思ふ事なき御中と人もいひしをとなり
あえ物に　弄あやかり物にと人もいひしなり
そむき〳〵に　弄一所にふしなからそむき〳〵てなり
いと心つきなしと　秘雲井雁なり
はひ給はす　雲井雁もいまは眞實に思ひつめてたはふれのやうにはしなし給はぬなり
夕霧
いつとかはおとろかすへき明ぬ夜の夢さめてとかいひし一こと　秘今はかくあさましき夢の世をと前にある詞をうけていつとかなり夕きりの心にまち給ふを夢覺めてとかとはよめり　弄思ひしつまりてと女二宮のゝ給ひしことを夕霧の待給ふを夢さめてとかとよめり　箋下句は宮の御詞にてあさましき世をすこしも思ひさますおりあらはといへる其御一言と云心也其御約束の一言はいつとも定めて

まちもみるへきことなり
うへよりおつるさやかい給へらん　河いかにしてい
かによからん小野山のうへよりおつる音なしの瀧
秘引歌いかにして云々雲井雁のかくきこゝなし給へ
るなり　箋いかてよからんなとの給ふを雲井雁の
聞とかめて文の内を推し給ふ也　花うつほの第三
すみわたりけるそのわたりはいえさかもとをの、
わたりをさは川近くて瀧のをと水のこゑあはれに
きこゆる所なり今案をとなし川は紀伊國にあり音
無瀧は小野山にありうつほにをとは川を小野山ち
かきといへるをとなしの事にや箋　弄小野山の歌
をや夕霧の文にかき給けんとおしはかる雙紙の詞
歟いかてよからんと夕きりの吟し給ふによてなり
　私草子の詞にはあらす秘箋の説尤然へし
なこりもいかてよからんなと　花歌の中の詞をすん
し給ふなり　なこりは宮の御事なり　私なこりと
は文をゝしつゝみてつかはし給ふ跡まていかてよ
からんなとくちすさみ給ふにて雲井雁のうへより
おつると文にかゝれたるへしとの推量也
御返事をたに　秘雲井雁の心也弄

日たけてそもてえいれる　小野よりの返事なり
かのありつる御ふみにてならひすさみ　秘夕きりの
　文に手習し給へるなり
中にひきやりて　夕霧の文をひきやりたるを少將の
　文の中へ入ておこするなり
めにはみ給ふてけりと　秘御覧し給ひたるよとなり
　秘女二宮のみ給ひしと夕霧より給ふ　花みる事は
　み給へるとなり
みつけ給へれは　弄引割たりし紙なるへし
落葉宮の手習
あさ夕になくねをたつる小野山はたへぬ涙や音なし
の瀧　花宮の御手習にし給ひつる歌なり　此歌に音
なしの瀧とあり夕きりの文にいかにしての歌の詞
　ありとみえたり弄
とやとりなすへからん　弄夕霧の方よりの文にかき
そへ給ひやり給ひしをとりつゝけて夕霧の御覧し
けれはかやうにやとみえたるなりひきやりたる文
なれはつきあはせて見也暫時かきはつる事にも心
をつくへきをしへ也　箋手習してかきけち給ふを
　心をつけてみるにはかやうに凡推量せしなり
御てなとも　秘見所あるなり　弄手習のやうにかき

給ひしなり　弄たゝかき捨給ひしを夕霧の見給ふにみ所ありとなり大方世の人のかきすてん物も心つかひすへき事なりと示（教イ）したるなるへし

うつし心ならぬことに　秘本心にてはなきとなり慚愧の體なり

いとおとなしう　是より夕霧の實人なりし事を源のおほしの給ふなり

いつかたにも心くるしき事なり　弄雲井雁の心にもくるしかるへし致仕大臣の方にも心よかるへからすとなり柏木のもとの北方なれは落葉宮をもよろしからす思ひ給ふへきをいとほしと源氏の宣ふなり

おとゝなともいかに思ひ給はん　秘致仕大臣の方にも心よからさることゝなり雲井雁のかたにも心くるしかるへし

さはかりのことたとらぬにはあらし　夕霧のさほとの分別なきにはあらしとなり

女のためのみこそいつかたにも　いつかたにもとは落葉宮と雲井雁とをいふなり

さまておくらかし給ふへきにやと　秘紫上の心なり

女はかり身をもてなすさまも所せう　秘紫上の身上を思ひ給故に大かたの世のこと（女イ）を思ひ給へり弄

ひきいりしつみなとすれは　秘あまり物のあはれをもしらぬやうにすれはおやのそたてたる所もいかゝと思給ふなり又あはれをもしりかほなれはうき名たつ物なりとにかくに大事なることなり

無言太子とかこ（イナシ）ほうしはらのかなしきことにする

秘河海にみえたり無言の行もこれより出たり　弄法師なと行にする　無言のくるしきことなり

河（定家釋）無言太子波羅奈王之太子其名体魄容端正生而十三年不言人不聞聲諸臣婆羅門道士等誹謗地下作城欲埋之時大臣伏其車前重悲此事太子云我得不言生而欲埋將言怖入地獄自全身不害（容イ）欲救魂朦（航イ）苦誘我不言者皆欲生聾盲于時國王夫人行迎太子云々曰我昔先身爲國王以正道雖治國有所過法墮地獄六萬餘歳苦難（忍イ我イナシ）忍我怖地獄餘苦不言遂請出家父母聞之許之入深山求道命終生兜率天太子者釋尊因位也太子体魄經　箋此義をのす　又或經にうゑたる烏蛤をくはへて食とせんとするに不破童子是をみて云石におとしかけて破へしと云々烏をしへのまゝにして

食とす太子其罪によりて墮惡道のちに皇子と生する無言太子これなり生れて十三年まて物いはす仍土にうつまんとするに太子のいはく言當罪不言當答と云々　太子は釋迦如來なり　見妙樂釋

よきほとにはいかてたもつへきそと　箋右一段惣別の女の心用の大事なることを明す物の哀をしるも風流に近し叉木石なるへきもはえなし　此過不及の誡也　中庸をいへるなり女の一生を無事にておくらん事はありかたき事となり

今はたゝ女一宮の御ためなり　箋曰女一宮の御ためなりとある處無言太子の故事を引用る下心面白き取合なり　女一宮今上第一の皇女也明石女御の腹也紫上とりわきてやしなひ申給ふなり

大將君まゐり給へるついてありて　夕霧の源氏の御かたへ參るなり

けしきもゆかしけれは　夕霧のやうたいを源のゆかしくおほす也

宮す所のいみはてぬらんな　秘源の詞也

三とせよりあなたに　秘柏木のうせ給て三年となり　弄箋花鳥閧　イ本三十とせとあり朱雀院の御在位の時をさせりと云々　此頭書すへし秘勘　みとせあまり或本にみそとせのそ文字なし花鳥にも三年の外に釋せられたり柏木第三年云々河海に一日不見如三年の文を引り何れも誤れり青表紙には三十年とあり尤然へし其故は源氏今年五十歳也葵巻二十二歳の時朱雀院即位ありて世々花々としたる時分也其比此御息所もはなやき給ひし物をと悉皆御息所の事を思出し給ふ也されは世にこそ有けれと書る也花に青表紙可然此よし天文十九年十一月廿九日誤之弄

ゆふへの露のかゝる程の貪りに　秘樂天か朝露貪名利の心にて夕の露と書なせり弄同　箋引此詩也

いかてこのかみそりて　弄源氏物語也

さものとやかなるやうにても　秘けふ過あすとうち過るをいへり

まことにをしけなき人たに　秘夕霧詞をしけなき人たにも何とかはなれかたき事おほき世なるとなり　弄夕霧の詞答也世の人事を引ての給ふ也

四十九日　秘かくのことし　弄なゝぬかと讀むし

院よりもとふらはせ給ふらん　秘源の詞也弄

かのみこ　弄落葉宮の事也
ことにふれてきゝみるに　御息所のやうたい然へしと聞及ひ給ひしかをしき人なりとの給ふ也
院もいみしう　朱雀院もおとろき給ふとなり
かのみここそはこゝに物し給ふ　秘女二宮なり夕霧の心をみんとてとひ給ふとなり
入道宮よりさしつきに　弄落葉の宮の事を夕霧にさはまほしき心にて先女三宮のさしつきにはなとの給へり
御心はいかゝそのし給ふらん　花更衣はことさもなかりし人と夕霧の御返事也女二宮の御事は一からしらぬよし申給へり　秘夕霧の詞なり　私夕霧の源へ申給ふなり　弄落葉宮のことを夕霧の源へ申給ふ詞なり　私云源夕霧の宣ふにや以上弄
みやす所はこともなかりし　弄夕霧の詞也
宮の御事もかけす（はイ）　落葉の御事を夕霧のさりあはぬなり
いとつれなし　弄源氏の心也　是は只夕霧の落葉の御事をかけてもいはぬをつれなしさいへるはかりなり

かはかりのすくよか心に　秘源氏の心也或説つれなしといふより源の心とみるなり　私生れつきの心の實人なる故なり
われさかしらに　源のわれかしこたてに異見も無用となり
かくて御法師によろつとりもちて　夕霧なり　御やす所の法事なり
女かたの心あさきやうに　秘致仕大臣も不審し給て夕霧は實人なれは猶女宮の御方の心あさきなるへしと思ひ給ふなり弄　箋落葉の御難にのみ致仕大臣は思ひ給ふとなり
かの日は昔の御心ゐれは　致仕大臣柏木のゆかりにとふらひ給ふなり　弄御やす所の御はての日なり柏木のゆかりなれは兄弟の人々も致仕大臣もす經なとし給ふ也
これかれも　秘紅梅の大臣なとなり　箋紅梅以下の人々なり
時の人のかやうのわさに　秘世に用らるゝ人とひとしきなり　弄時を得たる人の佛事なとにもおこらすと也

宮はかくてすみはてなんと　秘此小野にすみはて給ふへきとなり

おほしたつ事有けれと　秘出家の心さしなり弄いとあるましきこと也　落葉の出家し給はんことをなり朱雀のかく仰らるゝとなり

けにあまたとさまかうさまに　秘出家の事也　弄女三宮にうちつゝき尼になり給はん事と云々　弄あまたこさまかうさまとは女二の柏木の後夕霧になひき給はん事いかゝと院もおほしめせとうしろみなき人は然へからさる事出くれは夕霧をいとひ顔に出家然へからすとなり　私弄の後の義可然歟與の草子地にてきこえたり

こゝにかく世をすてたるに　朱雀の御身の事

三宮おなしこと　女三宮也

やうのことくあらそひ給はんも　又落葉の出家ありてはいかゝとなり　秘同しやうの事となり弄　河同様の物といふ心なり朱雀院も御出家あり女三宮又おなし御さまなれは女二宮の同様になり給はんをとゝめ給ふなり

世のうきにつけて　秘人きゝ然るへからすとなり

このうきたる御名をそ　秘草子地なり夕霧の事也弄うし給へはと　物うんしゝたる事なり　秘かやうの事に物むもひうんし給へるかさなり

さやうの事のおもはすなるに　弄夕きりの事ゆゑに尼になり給ふなときこえあらんはよろしからすとなり　私夕きりとはゝや實事のありと世には沙汰すへしさて跡の懇切ならぬやうの事は尼になり給ふと世のきこえあらは夕霧にあひそひておはせんよりもかろ〳〵しきことなるへしとおほすなるへし

さりとて又あらはれて　秘夕きりの事なり　朱雀の御心のうち也しかるへからぬ事なから夕霧の事をしろしめしたりとあらははつかしと覺しぬへけれはしらぬよしゝてかく仰らるゝなり

かの御心に　秘宮の御心になり

みやす所の心しりなりけると　秘故御息所のかくしるし給へるといひなすへきとなり

なき人にあさきとかはおほせて　秘みやす所なり

さえかへり　秘夕霧は今まてはかやうのすき〳〵しきことをもせて過しつる物をと也　私今さらこさ

のはしめになしてすきありかんもいかゝと也押つけてはやありそめし事にしなさんとの義なり
一條にわたり給ふへき日　秘一條にわたし給ふなり
さこそいへとも女とちは　秘此一條宮横笛巻にもうちあれたる心ちすれとあてにけたかく住なし給ふとありされとも女とち住給ふによりて草ふかくあれたるなるへしよくさこそといへり　弄上の詞に一條宮をよくすみなしたる心ありそれに付てさこそいへ草しけくなりぬとなり
かの家にそ　大和守か家にてするなり
われはし給ひて　秘夕霧一條宮におはするなり
くにの事も侍り　秘大和國の事なり　弄大和守なれは國務の事をいへり
かくよろつにおほしいとなむを　夕きりの事を大和守か申なり
けにこのかたにとりて　弄夕きりの志をけさうの方にて思へは必有へき事ならねともなり　箋皇女なとのよすか定り給ふ事はあるましき御事なり
さこそはいにしへも御心にかなはぬ事　箋女二宮の御身にても柏木の事又皇女にもいか程かさやうの事も有來れるなり　秘柏木の事も十分ならさる事となり弄
一ところやは世のもときをも　箋落葉の御身ひとつにはかきらぬなり
女の御心ひとつに　秘かたき事となり
君たちのきこえしらせ　秘さふらふ人たちなり
かつはさるましき事をも　秘無用の文なとをとりつき給ひそめし事なり弄同
右近少將をせむ　秘二人の女房達なり　弄落葉方の二人の女房なり
みつからの御心には　秘人々はよろしくみたてまつれともさもおほさぬとなり　弄人々は此御くしをよろしくみたてまつるに自からはおとろへぬると思ひ給ふ上根下根の心に何事にもかゝる物なり
夜もふけぬへし　秘時とりたかふへしとなり弄
落葉宮
のほりにし嶺の煙にたちましりおもはぬかたになひかすもかな　河「すまのあまのしほやく煙風をいたみ思はぬかたにたなひきにけり　帝王の崩し給へるを昇霞なとゝ云儀歟　秘すまのあまの鹽やく云々此歌を引かへたるなりみやす所の煙と成しおな

しけふりともなりたきとなり　弄御はさみやうの物は　秘自然髪をそき給ひなとしてはとてなり

かくもてさわかさらんにたに　花人々のもてさわくをしりなから忍ひかくれなとせは中々をこかましくわか〳〵しかるへし人きゝも夕霧はなにの人きゝも聞給ふましきと覺せは中々ほいのこともえし給はぬとなり　秘女二宮の御心なりかく背心かつひをするをも心にはうけ給はさるなり我身のことはあるもなきもおなしことゝなり　弄落葉の宮をくもてなさすともをしからぬ身にこそあれわかわかしく身をあつかひはちしらひなともすへきなら人々色々にもてさわきまほりたてまつる心さしかすとなりそれをひきしのはんといへり　私秘の義よくきこえたり

うたておほすましかるへき　おほすましかるへきとは人きゝもうたておほすましかるへきわさをと也朱雀院も今はかひなきことゝおほすへし人きゝをうたてとおほすましと云々落葉宮の事　又云落葉宮の心には今はゝや身もいたつらに成たる樣なりされは人きゝをいかゝなと思ふへきまてもなし又云落葉宮の御身體を卑下してい給ふ心なり尼になり給ふまてもなしとなりさるによりてとりわき尼にならんなと思ひたち給ふ心も曲もなけれはさなり院もいまはあたらしき事とも又人きゝもうたてくもおほすましきことなりとおほしめしてもとてもかくてもおなしことゝ思給て尼にならん共中々し給はすとなり院の御心の事前後の詞にみえたりされともおほすましきと云にてそ朱雀院の御心をおしはからせ給ふと心うへし　又本におほすましき明なり

ほいのことも　弄されは出家なとを思ひいそき給はぬ心也身をとかくもてあつかふも人かましきと思ひ給ふなるへし

なく〳〵御車にのり給ふも　弄故みやすところと小野にわたり給ひし事を思ひ出給ふ心なり

うちわたり給ひし時　秘此小野へわたり給ひし時のことなりみやす所の御心のわつらはしきうちにもかきなてつくろひ給ひしとなり

御はかしによそへて　經はこをそへたるか　秘女も

まもりにもちたるなり　花まもりかたなは女房も
もつこと也
落葉 戀しさのなくさめかたきかたみにて涙にくもる玉の
はこかな　歌の心あらはなり
くろきもまたしあへさせ給はて　花服者の手はこな
とは墨塗(蝶イ)にして蒔繪らゝんなとはなき故なり　弄
見花海と云々　秘服者の調度は皆墨塗なるへけれ
といまたとゝのへあへす又此物一つはみやす所の
御かたみと思ひ給へはとゝめ給へり
すきやうにせさせ給ひしを　秘草子地也　弄誦經に
施し於ふへきよしありしをかたみにとてのこし給
ひし也
うらしまのこかこゝちなん　花一條宮にかへり給ふ
を浦島の子か故郷に歸りしにたとへたるなり玉の
はこにつきてうら島の子といへるなり　秘河海の
說なり　弄河海にみえたり　たとへは一條宮のう
ちしつらひみかきなと人々もやうかはりてみしに
もあらぬ心をいへり母御息所の箱を形みにもち給
ふ心よりうら島か子を取出しいへるなり　聞浦島
は故郷のあしき所へかへるこれはよき故郷へかへ

りたれとも心にかなはぬゆゑにあしきなり　浦島
子　河丹後國風土記曰　浦島子傳記曰　浦島子獨
垂(乘カ)釣魚舟常游(於舊)江浦釣魚之所曳得靈龜化作神女是遂
萊山仙侶也任昔爲夫婦而今汝爲地仙予爲天仙感宿
昔之緣今隨俗境宜向蓬萊將遂變(得イ)時之志(忠イ)而須臾之間
向蓬萊山雖成仙宮遊宴有還鄉之思茲賜玉匣裹以錦
繍(イナシ)綵以萬端之金玉而誡浦嶋子曰若欲見再逢之期莫
玉匣開緘嶋子歸舊里之時桑田變改里人稱曰矣古老
相傳先世有水江浦嶋子云者去歲今經三百歲於此時
忽思神女撫玉匣不堪戀慕開此匣子時雲氣出於匣」
飛去子斯拭淚歌曰「とこよへに雲たちわたり水の
江の浦嶋の子かことまちわたる　神女飛芳音歌曰
「やまとへにかせふきあてゝくもはなれおきせ
りともに和をわするな　一云水江浦嶋子者不知何
時人蓋上古仙人也此傳記延喜廿年作之云々七言二
十四韻以三百八十字成篇名浦嶋子記云々　又丹後
風土記曰卑(早)部首先祖名筒川嶋子爲人姿容秀美水
江浦嶋子者也緣朝倉宮天皇御世乘釣舟云々　箋
曰女二宮の御息所にはなれ給ふて小野より一條宮
へ歸り給うてもみしに面かはりして相木もなく御

母もましまさぬは浦嶋の子か舊里に歸りしに同しき也形見の玉手箱奇特の取合なり末の詞にあらぬさまなりといへる此語勢なり　河元長のみこのすみ侍りにける時にてまさくりになに入て侍りけるはこにかありけん下おひしてゆひて又こん時にあけんとて物のかみにさしおきていて侍にけるのちつねあきらのみこにとりかくされて月日久しく侍てありし家にかへりてこゝの箱をもとながのみこにおくるとて　「明てたに何にかはせん水の江のうら嶋かこを思ひやりつゝ

おはしましつきたれは　秘一條宮におはしつきたるなり

故郷とおほされす　弄浦嶋子か心を合せたり

あらぬさまなり　秘此宮のしつらひかゝやきみゆるにて人々もやうかはりてみしにもあらぬ心をいへり　箋浦嶋か子につきたる語勢なり

とのはひむかしのたいに　秘夕霧なり

三條とのに　秘雲井雁のかたなり

なよゝかにおかしはめる事を　秘夕きりは好色たつことをはきらひ給ふ也

ゆくりかなる事に　秘ふと俄なる心もいてきぬるとなり

されと年へにけることを　秘年ころもありしことなりさま／＼いへり

かく女の御心ゆるひ給はぬ　秘女二宮の御心ゆるびなきことゝはたれも思はさるとなり

とてもかうても宮の御ためにそ　秘草子地也

御まうけなとさまかはりて　秘服中なれは嫁娶の儀式やうかはりたるとなり弄

みなしつまりぬるにわたり給て　夕きり落葉の御方へなり

御こゝろさまことに　秘少將君の語也

中々たちかへりて　落葉の故郷へ立かへりてなり

なにごとも身のためこそ　秘少將のいふなり人に身のためにてこそ申せ御心にちかひては詮なしと也

あやしうれしはかりきこえさせしに　秘夕きりの詞心得かたき御心となり

いてやたゝいまは　少將君の詞也

あか君とかく　秘我君も夕霧をさしていへり

またしらぬ世かな　弄または又也　秘または又なり

少將の語なり女宮の御心も又夕霧のゝ給もいつれも一義なり　只夕霧の語にて可然となりかやうのことは世にたくひあらしとなり　箋夕霧の少將君に對しての詞なり聞

いとほしうもあり　秘少將君の心也

またしらぬはけに　秘少將君の語なり心はまたしらぬとはかく此宮へうつし參らせ給ふ御心かまへはいまたしらぬことなれはいつれかますへきとなり　花是は少將君の詞なり夕霧の人にもことわらせてとの給ふ返事なり　弄少將語なり事の心をわきまへしらぬ身は女宮のよつかぬふるまひをけにもとことわるへきにもあらす又夕霧の心もいとほし批判はいつれにとも定かたしと也又云またしらぬは夕霧の詞にあたりて云也よつかぬ心かまへとは夕霧のさまか又女君にても　私案またしらぬは夕霧の語歟可尋以上弄　箋またしらぬはげに少將か申詞夕霧またしらぬ世かなと宮に心を恨み給ふはけにと理を着る也よつかぬ御心かまへのけにこそはとは人遠く世に隨ひ給はぬは宮の御心くせと也けにとは氣の字也けにもと云詞にあらす何かたにかはよる人侍らんとすらん上の詞にいかて人にもことわらせんと夕霧の宣へる返答也か樣に夕霧の有ましき事をわりなく思ひかけ給ふか道理か又宮の御心に有ましき事とのかれ給ふか無理か二つを人に批判させは何方へか人は方人申へきそと少將か戯ていへる成へし

ぬりこめにおましひとつしき給て　たゝみ一てう敷たる心なり

これもいつまてにかは　秘宮の御心なり

かはかりにみたれたちにける　秘さふらふ人々もとなり

山鳥の心ちそ（にイ）　河「あし引の山鳥のをのしたりをのなか／＼し夜をひとりかもねん人丸　「ひるはきてよるはわかるゝ山鳥のかけみる時そ物はかなしき　秘夜雌雄一所にねさる鳥なり獨宿のことをいへり　弄

かくてのみことゝいへは

ひたおもてなるへけれは　河面つれなきやうなる心歟　私直面の心なるへし

たゝいさゝかのひまをたにと　秘物なときこえんと

也　私只すこしかけ給へと云義なるへし

夕霧 うらみわひむねあきかたき冬のよに又さしまさる關の岩かと　秘關の岩門はさし籠り給ふを云り又は空の明かたき事にいへり．またさしまさるとは前につれなかりしに今夜又ぬりこめに籠り給へは重てさしまさるなり岩かとは天の岩戸也　箋關の岩門はぬりこめに閇こもり給ふことをよせたり　聞小野にては障子のへたてあり今夜はぬりこめの戸有仍またさしまさるといへる歟關の岩かとは相坂を心にもたせたる也　私むねのあきかたきと云に對して又さしまさるともいへり

ひんかしのうへ　花散里なり

一條のみやわたし　秘花散里の詞也

大とのわたりなとに　弄致仕大臣邊なり　花散里

御木丁そへたれと　秘花ちる里のさまなり

さやうにもなほ人の　秘夕霧の詞人のいひなす事も有へし

こみやす所はいと心つよう　秘こみやす所遺言有しとなり

ながらん後のうしろみにと　夕霧のそらことに宣ふなり前になき人にすこしのつみはおほすへきよしの心ありこれら也

もとよりの心さしも　夕きりも生得心さしはありしとなり

かのさうしみなん猶よに經しと　秘女二宮なり

思ひむすほゝれ給ふめれは何かは　何をさる聞書出家せんとふかくおほせは夕霧の物にもなにかはならんといふ歟

こなたかなたに　弄何かはこなたかなたに女二宮の出家の心さし誰もにくゝなとはあらねと又尼になり給ともみはなちては故みやす所の遺言にたかふへしとなり　私雲井雁と落葉との間の事歟

けんきはなれても　河嫌疑也　秘尼になり給ひても同しことなるへし

院のわたらせ給へらんにも　秘源にもかく申給へ度イとなり

人のいつはりにやと　秘花散里の詞也

三條の姫君の　秘雲井雁なり

のとやかにならひ給ひて　夕霧の年月實人成し事らうたけにも宣はせなす　秘夕霧の詞也

なとてかそれをもおろかには　雲井雁の事
御ありさまともにても　秘源の御かた〳〵をいへり
にくけにあきたしや　秘人にあく心つくなり　弄な
たらかにしてあるよしとなり
みなみのおとゝの　秘紫上なり
この御かたの御心　秘花散里なり
物のためしに　花散里の詞也
身の人わろきおほえ　数ならぬ故にかまはぬ心なり
さておかしき事は院の　花これも花ちる里のかたり
給ふことなり　院は源氏なり
いさゝかあた〳〵しき　秘夕霧の事をのみの給うて
源のわか御うへをはさしおき給ふ事よとなり
さかしたつ人の身のうへしらぬやうに　河賢人も身
上の是非をはしらさるなり
さなんつねにこの道を　花夕きりの返答なり　秘夕
霧の詞まへの巻にも此道の教訓有しなり　弄
おまへにまゐり給へれは　秘源のおまへなり
かのことはきこしめしたれと　落葉事源の心也
ねひまさり給へる　弄夕霧の容色なり
物おもひしらぬわか人のほとにはたおはせす　いま
た年わかく分別なとのたらぬ程にもおはせすよき
盛となり
わか御子なからも　此一段夕霧の事を源のおほす心
なり
日たけて殿には　秘三條宮なり
いつことておはしつるそ　秘雲井雁の詞也　私いつ
ことてとはこゝをいつこと思ひておはしたるそと
いふ歟
まろははやうしにき　おにと宣へはなりはてんとて
とかこち給ふなり
御心こそおによりけにも　秘夕霧の詞也
めてたいさまに　秘雲井雁の詞也
かく心をさなけにはらたちなし給へれはにやめなれ
て　秘夕霧の詞也　私詞にはあらす夕霧の心なるへ
しめなれてと云まて
このおにこそ　これより夕霧の詞也
かう〳〵しきけを　かう〳〵しき本　弄かう〳〵し
きは又神々しきなり　秘神々しきなり
なにこといふそ　秘雲井雁過言なり
おいらかにしに給ひね　秘直にとなり弄

こまやかにわらひて　夕霧なり
ちかくてそみ給はさらめ　夕霧の詞也
さてもちきりふかくなる世を　秘雲井雁の夕霧にもともに死給ひねとの給へはちきりふかきかたにとりなし給ふなり弄
にはかにうちつゝくへきよみちのいそきは　河日本紀云　泉門ヨミト　さいへりちとこゝ五音通する也或又黄泉ヨモツクニ　又泉津平坂　又泉守道者
さこそはちきり　後世までの契なるへし
心うつくしうらうたき　雲井雁の心さまなり　秘雲井雁は心あさき人となり
なほさりことゝはみ給ひなから　花夕霧の心なりと如何　聞雲井雁を夕霧のこしらへなくさむるをなほさり事とは雲井雁の思ひつゝ心はうつくしき人なれはなこむるなり夕霧の心にはあらす
なこみつゝ　河やはらきつゝと云心なり　和の字なり
かれもいとわか心をたてゝ　秘女二宮なり
けふも御返事たになきよと　秘夕きりより女二宮へ御ふみまゐらせられたりしとみえたり弄

昨日けふ露もまゐらさりける　花雲井雁の事なり　秘雲井雁のことなり夕霧のまします故なり　弄夕霧思ひによりて物もまゐらさりしとなり但雲井雁の事にて可然歟云々可用也
昔より御ためにこゝろさしの　秘夕霧の詞也
すゝみけしきはみし　秘あなたこなたよりけしきはみしにも雲井雁一人に心をとめたりし事なり
女たにさしもあらしとなん　弄夕霧の雲井雁にへたたり給ひし比人々のむこにとらんとの心ありしを心つよく聞過しをは人々も貞心ありとかへりてもときしことなり女こそ両夫に嫁せすといへとも此夕霧のことくはあらしと也
おほしすつましき人々　秘御子たちのあるとなり
女もむかしの事を　雲井雁の心也
なよひたる御そともぬき給うて　夕きりの出たつさまなり
雲井雁なるゝ身をうらむる（みんイ）よりは松しまのあまの衣にたちやかへまし　河「松嶋やをしまかさきにあさりせしあまの袖こそかくはぬれしか重之　諸抄不引之　弄夕霧のことなり馴たる人のつらきをうらみんより

はことなり海人の衣もなれたるを人に馴たるによするなり人をうらみんよりは尼にならんとよめり又云なるゝ身は雲井雁自身の事歟なるゝふりたる心歟　秘五文字二義ありなるゝ身とはなれたる人のつらきをうらみんよりはとなり夕霧をさして云り又の義は自身の事なりなるゝとはふりぬる我身をいへりうらみてあらんよりはさまをもかへて有へしとなり二義共に用るなり　箋説々あり夕霧をうらみんよりは中々に雲井雁のさまをかへはやとなり又は雲井雁の我身を云衣のなるゝはしほなるゝ心なれはなり

猶うつし人にては　秘引歌無益也

さも心うき　秘夕霧の詞也

夕霧
まつしまのあまのぬれ衣なれぬとてぬきかへつてふなをたゝめやは　秘夕霧をなれて心よからすとおもふとも又こと人にやは思ひかへ給ふへきその名をとり給はんことはよろしからすとなり弄同　箋此なれぬとては夕霧の我身を云なれ衣と云はしほたるゝ心なれは我をいとひてぬきかへ給はゝそなたの御心おほき御名こそ立へけれと也　花夕きりの返歌なり衣のなるゝとはしほれて身にまとはるゝことをいへりされはとて今さらぬきかふへき名をはいかてかたて給ふへきとなり　私此義下句の心然るへからす

うちいそきていとなほ〳〵しや　秘いそきてよみ給へはよからすと也弄　箋此一句は草子地なり宮へいそき出給ふ心はかりにてしみ〳〵とも沈吟なきよし也

かしこには猶さしこもり　秘一條宮なり　花女二宮はいまたぬりこめにさしこもりて出給はぬと也
私花鳥には詞をいとなほ〳〵しやかしこにはとかけり是はなほ〳〵しきを猶さしこもり給へるかたにみるは如何

れいの御ありさまにてあるへき事をこそ　箋常のいつものことくとなり　私常の御ありさまにて其上夕霧にしたかひ給ふましきならはそのことをあるへきやうにこそ仰らるへけれ然るへからぬ御ふるまひと申すなり

よそのきこえをも　箋外聞一つ也

過にしかたをも　箋柏木の後又人にみえ給ふへき道

のちかひたること二つ
うらめしかりける人のゆかり　箋夕霧の事ゆゑ御息
所は逝去ありつること曲もなく思ひしみ給ふ是一つ
　秘みやす所夕霧の事をなけき給ひて俄になくな
り給ひしゆかりとなり弄
たはふれにくゝ　箋夕霧の詞也一端二端とこそあれあ
まりのことゝなり
いさゝか人心ち　箋是以下つゝき物にと云まて宮の
御詞なり
此御ふくのほと　箋御やす所一周忌まてなり
しらぬ人なく　秘世間にはかく人のしることになれ
るを今夕霧のなけき給ふなり　弄此事しらぬ人な
く成たるを女宮のつらくおほしめすと夕霧へいふ
なり　私弄の義然へし
つらき物にきこえ給ふときこゆ　箋夕きりへ人の中
由なり
思ふ心は又ことさまに　箋夕霧詞なり　かくはと云
より夕霧の詞と云は非なり　又ことさまとは夕霧
は世間普通の人の心には各別に實法なるそとなり
あまたの年月をも　箋上の宮の御詞に御ふくの程は
と有しをうけて云也
猶かゝるみたれに　箋宮の御詞也みたれとは喪の中
の事なり夕霧の用捨なき由をおほすなり
人のきゝ思はん　箋外聞口惜事の御身に取ての所を
はさておきぬとなり
ことさらに心うき御心かまへなりと　箋此一條宮に
入居給て悉界をは聊らはゝかり給はぬ夕霧の心を
恨給ふなり宮の御名はたゝはたてのやうなる故な
りなれとのとの字清てよむへし然るなりと云本あ
り　秘たはかりて小野より出し給ふことなり　私
箋の義然へし
さりとてかくのみやは一句　箋さありとてかくのこ
とくにてはつへき歟と也
人のきゝもらさん　箋是は宮の御心の隔てはて給て
面目なき外聞のことなり
ことわりと　箋と云は人の口にかゝらんも餘義なき
道理そとなり上の詞に人の聞思はんこともと宮の
の給へるは二夫をみ給ふへき道理外聞をいたみ給
へり　此夕霧の詞は宮の眞實にいとひはて給ふな
らは面目を失うて外聞迷惑との心也仍次の詞にこ

この人めもとあり大和守か思ふ所も如何となり
こゝの人めも　秘さふらふ人々もなり弄
うち〳〵の御心つかひは此の給さまにかなひても
秘心をやふる事はあらしとなり弄　箋御服の程は
との給ひしかは暫くは亂れたることまてはなくと
もいつものことくなさけ〳〵敷おはしまさはなれ
とも一向格別のやうに御覽しはなたるゝ事か誠に
分別なきことなりよつかぬとは公界をしり給はぬ御
さまとなり　私此よつかぬさまとは夕霧のこゝに
ありつかぬ體のうたてあるほとに内心は打とけ給
はすともおもてむきは有へきさまにしたきといふ
心歟
又かゝりとてひきこえまゐらすは　弄夕霧の思ひか
けしか又すてたてまつると人々のきこえは然へか
らすとなり　箋さらは我面目を失ひたるとて一向
に音信不通にならは宮の御爲には猶御名の立へき
となり
ひとへに物をおほしてをさなけなるこそいとほしけ
れ　箋偏と云所字眼なり善悪にわたりて一偏なるは
然るへからさることなりなき人のかなしみも又身
の愁も法令のかきりあるへきことなり
この人をせめ給へは　弄少將の事也
けにとも思ひみたてまつるも　秘少將の心なり夕霧
の心をもけにと思ふなりみたてまつるは女宮の事
也
これよりまさる　秘此夕霧ほとになき人をも皆とり
つきつへき心なるへしと也
いとかういはんかたなき　秘夕霧の詞也花
何のたけき御名にか　秘むら鳥の立にし我名の心と
いへり弄　箋心きよくおほしめしあかるとも御名
をあけらるへきにあらすとなり
心さしをふかき淵に　河「世の中のうきたひとに身
をなけはふかき谷こそあさく成なめ」身をすて、
深き淵にも入ぬへし底の心のしらまほしさに道濟
いとうたていかなれは　夕霧の心也
岩きより猶なひきかたき　河人非木石皆有情 白氏文集
儀歟不動の心なり　花いはきは木石のたとへ猶ま
されり　河海の磐城は詞艶ならさるにや
ちきりとほくてにくしなと思ふやうあるを　箋是は

公界の人のことなり眞實に緣の熟せぬ人は夫を嫌て厭却するためしおほき物なりもし此宮もさやうの類にやと夕霧の思ひうんし給ふなり

三條の君い　雲井雁なり

つらき物のあはれなり　夕霧の心中なり

故君のことなる事　秘柏木なり

御かたちはほにはおほせすと　落葉の御かたち十分ならすと柏木の思ひしことをたゝいま落葉の心中に思出給ふなり

わか御心をこしらへ給へる　弄萬を思召にうちとけんこといかゝとおほしとる心にや

をりさへもいと心うければ　秘御服の中なり

れいの御ましのかたにまゐれり　箋ぬりこめより出給ふなり　秘つねの御方なり　女宮の御かた也弄

ひたかしおもては　弄服者の具をいみてしつらひへたてたるなり

かうそめの御几丁　箋香染は吉にも服にも用へき色なり

ことくしきやうにみえぬ物　秘繪のやうな事々しからぬ物なり

山吹かいねりこきゝぬあをにひ　弄陪膳の人衣裳歟にひ色なとうすくなしなとしたる歟　箋かいねりはうす紅梅こききぬは紫なり大略たゝこき色と云は紫なり

女所にてしとけなく　花女のよろつはからふを女所といふ大和守色々にいひとゝのへなとするなり

秘みやす所はかりすみ給へはなり

この人ひとりのみ　大和守なり

もとつとめさりけるけいし　御息所の御時疎畧したる家司も夕霧におそれてまゐれるなるへし

かくせめてすみなれかほつくり　箋落葉の心はとけぬとも無理に住つきかほを夕霧のし給ふなり結句心とけ給はぬ故にかくするなり

三條殿　雲井雁なり

世をこゝろみはつる　弄實人の心うつるは又かはることかたしと人のいひしをいま心みはて給へるとなり

大殿へかたゝかへんとて　花雲井雁の父の大殿に渡り給ふ女御は弘徽殿の女御の御ことなり

女御の御さとにおはする程　弄致仕大臣御女なり

れいのやうにも　女御の御かたに御對面ありて雲井
雁のゐ給ふへきかたへいそきわたり給ふなり
此おとゝも　致仕大臣なり
いとひきゝりに　河急に心みしかき様なる風情歟
ひきゝりたましひともいふなり
三條殿にわたり給へれは　夕霧のこと也
君たちもかたへはとまり　夕きりの御子達なり
みつけてよろこひ　夕霧を君たちのみつけてよろこ
ふなり
うへをこひたてまつりて　雲井雁をしたふなり
おとゝのみきゝ給はん　致仕大臣也
みつからまゐり給へり　致仕大臣にて雲井雁の居給
ふかたへ夕霧のおはするとなり
しんてんにおはするとて　弄女御のおはするかた雲
井雁の事
れいのわたり給ふかたは　秘雲井雁里にてすみ給ふ
かたにはゐ給はさるなり　弄雲井雁里にてつねに
ゐたまふかたには女房たちはかりおきて女御の御
かたにわたり給ふなり
いまさらにわか〳〵しの　秘夕霧の詞也

ふさはしからぬ御心のすちとは　秘此句決前生後の
詞なり
はかなき一ふしに　箋今度落葉事也
何事も今はとみあき給ひにけり　秘雲井雁の返事也
なにかはとてか　箋こゝに何をきりて心うへし
あやしき人々は　秘君たちのことなり
なたらかの御いらへや　秘夕霧の詞也
たか名かをしきとて　河「いひいてはたか名かをしき
信濃なるきそちの橋のかけし絶すは　弄開引此歌
秘引歌におよふへからさるなり
かしこに又いかに　秘女二宮なり
いかなる人かうやうなること　秘心つくしなること
なり夕霧はなれ給はさることなれはなり
かきりとの給ひいては　秘眞實に思ひさため給かと
なり
かしこなる人々も　をさなき人々なり
思ひすてかたき　君たちを夕霧のかたへみな給へと
なり何となりともせんとなり
すか〳〵しき御心にて　秘一條宮へひきくして行給
うてはと也弄　すか〳〵しき夕霧のことをいふ歟

夕霧はかくおとしての給ふなり
ひめ君をいさ給へ　夕霧の三條へつれてゆかんとなり
は丶君の御いらへには　夕霧の姫君にをしへ給ふなり雲井雁の心に似給ふなとの給ふなり思ひうることなくとは物に心得ぬ事成へし
れと丶かゝる事を　弄致仕大臣なり
しはしはさてもみ給はて　箋雲井雁へ致仕の教訓なり聊爾なるせられやうとなり
おのつから思ふ心物せらるらんものを　箋夕きりは何とそ分別の有へきとなり
よしかくいひそめつとならは　箋既にはや色をたてらる丶うへはちからなしそのすちめをとほされよとなりこゝか致仕大臣の性となり
この宮に　秘落葉の宮なり
藏人少將の君を　致仕大臣の六男歟系圖に藏人少將（致仕大臣）とあり．
ちきりあれや君を心にとゝめおきてあはれとおもひうらめしときく　箋致仕より落葉宮へとなりとにかくに宮は我に契ふかきなり其ゆゑは柏木のことにあはれとおもひ又今は雲井雁のことにうらめしと聞となり　秘あはれとおもふは柏木なりうらめし（思イ）と聞は夕霧になひき給ふましきことなり（逢ひ給ふ事なりイ）とにかくに契あたりをはなれ給ふましきことゝなり　花鳥弄同之
猶えおほしはなたし　秘此あたりをははなれ給ましきことゝなり　弄柏木のゆかりのことをかき給へり　箋縁ふかき宮なれはやはかよそには思食さるへきなり
た丶いりに入給ふ　秘内外なきさまなり
まいりなれにたる　秘少將の詞也
われはさらに　落葉なり
せんしかきはた　秘せんしかきは然へからすと也
こうへおはせましかは　秘宮の御心なり
（迄落葉宮）なに故かよに数ならぬ身ひとつ（なイ）もうしとは思ひつらしともきく　箋身のかすならぬは悲しともうしとも人に思はるへき道理無よしなり　秘身ひとつをさま／＼にの給ふはいかゝしたることそとなり
少將は人々と　藏人少將なり
いまよりはよすかある　秘夕霧のましますほどにとな

り　蔵人少将夕霧とはいとこ又少将のあねむこ也
内外ナイケなとも　是もみな打あたりて云なり
いとゝしく心よからぬ御けしきあくかれまとひ　箋
夕霧のことなり宮の御心とけかたき愁を云　私い
とゝしくとは致仕なとの文よりの文なとにイに落葉宮いよ〳〵とけ
かたかるへき故なり
大殿の君は　秘雲井雁なり
おほしなけく事しけし　落葉の御心とけかたき故に
夕霧のあくかれまとひて雲井雁へ無音なるへし
内侍のすけ　花惟光か女夕霧の思ひ人乙女巻にみえ
たり　秘藤内侍なり乙女巻にみえたり
われをよそともに　秘雲井雁いつも此内侍のすけを
ねたみ給ふほとに今此宮の御ことをきゝて雲井雁
をとふらへるなり
藤内侍
かすならぬ身にもしられまし世のうきを人のために
もぬらす袖かな　秘わか身数ならは身のうへにもぬ
らすへき袖なるを今は雲井雁のためにぬらすとな
り花
なまけやけしとは　秘わつらはしとなり　弄尤の字
也もともいふ義もあり又わつらはしき心なり

返雲井雁
人のよのうきをあはれとみしかとも身にかへんとは
おもはさりしを　秘我身はひとのうへまては身にか
へては思はぬとなり　弄雲井雁返歌なり人のうへ
のうきことは哀とはみれとも身にかへんとは思は
ぬを此内侍の歌は身にかへて人のためにとよめるいふイ
ことをよめり　又大かたの人の世のこと歟今の身
にあたりたるうきもこゝるへし　箋凡そ世間の人
のうへにうきことを哀と思ふ人は有しかとも身に
かへてまては我は思はさりしを人の為にもぬらす
袖かなとよめるは奇特によく思ひ入られたる事と
感したる心なり
あはれにみる　藤ないしのすけはあはれとみるなり
むかしの御中たえ　箋雲井雁を引取て致仕の御方に
おかれし其たえまの事なり
ことあらためて後は　箋藤裏葉に雲井雁をゆるし給
ての後を云
この御はらには　雲井雁はらなり
三の君二郎君はひんかしのおとゝにそ　秘花ちる里
の御かたなり
院もみなれ　源氏なり

紫式部
弄 とそ 此御中らひのことゐひやるかたなく
か語なり 巻々如此 箋 落葉宮は今まては心をと
け給はぬか末いかなりしともしらす又雲井雁もい
また致仕大臣の方におはしつるか何とかとおほめ
きてかける紫式部か用捨の筆法なり 秘 例の作者
の語なり

岷江入楚第四十　御法

五十一歲　薰四歲

紫上病惱不本復請出家暇給事

三月十餘日紫上供養千部法花經於二條院有此事

紫上送消息於明石御方事匂宮爲御使

法會畢各還六條院給事

夏二條院病惱明石中宮行啓事

住二條院東對給事

紫上與匂宮御物語事

源氏君中宮等御物語事

八月十四日明石方紫上卒去事

六條院仰大將令落紫上御髮事

大將奉見空骸事

紫上葬送事

六條院出給事

致仕大臣訪六條院給事

秋好中宮訪六條院給事

御法　花 以歌爲卷名

河「たえぬへき御法なからぞたのまるゝ世々にとむすふ中の契りは　秘 源氏五十一歳の春より秋まての事なり花弄　花 紫上此秋うせ給へり

紫上いたうわつらひ給ひし御心ちの後　秘 一とせわつらひたまふ事若菜下に見えたりその以後とにかくにわつらひ玉ふなり

おこたる／＼しうはあらねと　さしあたりたる煩にはあらてむさとなやみ給ふなり大事のわづらひのさまなり

院のおもほしなけくこと　源の色々心をつくし給なり

しはしにてもおくれきこえ給はん事は　秘 源の御心なり

みつからの御心ちには　秘 紫上の御心中なり弄

うしろめたきほたしたに　箋 紫上に御子のなきは心安けれとも源氏の思ひ歎き給はん所をかなしみ給ふなり　秘 御子のなきをいへり河弄

おもひなけかせたてまつらん　弄 聲をたにきかてわかるゝの歌の心歟聞

ほいあるさまに　秘 さまをかへたきとなり

さるはわか御心にも　秘 源の御心なり紫上のそむき給はゝそれをよきついてなるへしとなり

おなしはちすのざをわけんと　河 各留半座乘華葉待我閻浮同行人　法照禪師五會讃 箋

こゝなからつとめ　世を捨て此世にて行ふ時の事也

おなし山なりともみねをへたてゝ　かやうに別々におこなはんと思ふか後世の一蓮たのもしく思ふ心なり

いと心くるしき　秘 紫上の心くるしき也

たゝうちあさへたる　河 あさへたるは古人釋云あされたるなり今案あさきはへは例のやすめ詞なり幻卷に六條院遁世の事を明石上いさめ申さるゝ詞に左樣にあさへたる事はかへりてかろ／＼しくもとかしされとも立いてゝと有返事に院さまておもひのとめん心ふかきこそあさきにおとりぬへけれと云々同心なり　花 あさへたるは猶あされたるこいふ詞とれなしかるへしたとへはしとけなき心なり花宴にあされたる大君すかたと有河海にはあさき心に釋せられ侍り　弄 淺云々さ文字清歟　秘 花

鳥にはあされたるさ云詞と云々河海には淺心こい
へり河海説然るへき歟箋聞同　箋河説は淺き心な
り云々花説はあされたるさ同ししさけなき心なり
云々　抄云河の説可然云々箋同し然はあさへかく
してと夕霧の文の事を云りあさ〳〵しき心といふ
へき歟さへの字不得其意違て可了簡又幻卷にさや
うにあさへたることはとあり
御ゆるしなくて心ひとつに　箋源のゆるしなくては
こなり女は夫の命にそむかぬ物なり三從の理なり
わか御身をもつみかろかるましきにやさ　秘御子な
しされは罪おもしとなりまへにはうしろめたきほ
たしたにましらぬ御身なれはさいひしかさもこゝ
には又かくいへりさてさまをかへて後世をつとめ
たきよしなり弄聞　箋此出家をゆるし給はぬ事を
紫の心に罪障ふかき故にかく妨のあるかさおもふ
のよしなり　私秘弄等の義如何箋の註然るへし
ほけきやう千ぶ　箋紫の逆修なり千部は人にかゝせ
られたるへし七僧事鈴虫卷にあり
こさ〳〵しきさまにも　秘源はかねてもしり給はさ
るなり

內春宮さいの宮たち　秘后たちさあるは一人は秋
好なり一人は明石女御なるへし明石女御立后の事
こゝにてはしめてみえたり　弄后たちさあるは明
石女御中宮等なり后のあまたとはみえす內は今上
朱雀の皇子春宮は明石姬君の御腹の皇子也后宮た
ちは秋好さ明石中宮となり明石女御立后の事はし
めてかき出せり
いそのかみのよゝへたる御願にやとそみえたる　秘
ふりにたる願ひといはんためなり箋弄同　花いそ
のかみはふるき御願と云心なり一本云けにちりの
かすの世々へたる御願にやとゝ見えけるとあり見
河海　箋一本に塵の數の世々へたる御願さあり五
百塵劫の事と河海に見えたり箋云あまりにこさ
ことしきにや
花ちる里と　箋物見なさにわたり給ふ事前にきかす
是も紫上のわたりの義と見えたり
南ひむかしのとを　秘二條院なり
にしのぬりこめ　秘紫上の聽聞所なり　秘廂に壁を
ぬりこめて調度なとおく所なり
佛のおはする所のさま遠からす　箋穢土草庵密嚴佛

國土之義也　又者去此不遠なれは極樂の莊嚴を思
ひやる義なるへし
ことなる（ふかきイ）心もなき人さへ　秘大かたの結緣する人も
功德ふかし（床敷さなりイ）となり
たきゝこるさんたんの聲も　箋八講は五日十座なり
五卷の日と云は中日にて此薪の行道あり行基菩薩
の歌を聲明にして行道ある事也　一法華經をわか
えし事は薪こりなつみ水くみつかへてそえし提婆
品に採薪及菓蓏隨時恭敬歟（與イ）さんたんと云は讃歎（嘆イ）な
り一品々々の大意を讃歎（嘆イ）分別とて法則にいひあら
はすなり　私此外別事なし仍諸事略之
そこらつどひたるひゝき　箋見聞の雜人群集の體を
云其なりのしつまりて讃歎（嘆イ）の聲の殊勝に聞えたる
也　秘うちやすみは法事の末つかたなり紫上心ほ
そけにて羊のあゆみちかくれほすへし
三の宮して　秘匂宮なり弄同
をしからぬこの身なからもかきりとて薪つきなんこ
とのかなしき　このみは採菓汲水の心なくこの身を
菓によせたりよのつねは卑下していへるを只今打
むきていへるおもしろしとなり　弄この身菓によ
せたり　箋此身に採菓汲水の心ありたゝありなる
歌也常にかはれり方便品に入無餘涅槃　如薪盡火
滅佛化の緣盡て涅槃に入のたとへなり　箋薪こる
所に心かつきて明石上への歌なり紫の上の歌は此
薪は千歲給仕の薪にはあらす如薪盡火滅のたきゝ
なりといふなり
御かへりの心ほそきすちは　秘大事の返歌となり心
ほそきすちとはいま〳〵しきと人の褒貶もいかゝ
と中てまきらはしてよめり
返明石上　たきゝこる思ひはけふをはしめにてこの世にねかふ
法そはるけき　河採菓汲水　拾薪設食于時奉事經於
千歲提波品　心ほそきすちは後のきこえも心おくれ
にと斟酌して千歲給仕の昔のことくにこの世なか
ら久しくねかふへしとたきゝつきなんの歌を同經
文にて祝の心にとりなされたる心詞尤たくみなる
歟　秘于時奉事經於千歲提婆品　千歲給仕の心なり
千歲の給仕をしたる樣に今日をはしめにて千歲の
齡をもたもち給ふへきと祝したるとなり
たふときことにうちあはせたるつゝみの聲　箋此鼓
は擊鼓宣令提婆品文の心にて絲竹をとりはなしてい

へる歟此つゝみは佛の法華經をとき給時聽衆をあつむるとての事なり
霞の間より見えたる「山櫻かすみのまよりほのかにもみてし人こそ戀しかりけれ　弄聞自餘に無之也
猶春に心とまりぬへく　秘紫上平生春に心をとめ給へる歟　弄紫上の心跡までも春にとまるへしとなり　猶の字力あり
百千鳥のさへつり　箋樂の事なるへし　引歌滅之「百千鳥さへつる春は物ことにあらたまれとも我そふり行
れうわうのまひてきうになるほと　河陵王一名羅陵王古樂長曲荒序八帖拍子名一（各イ）合拍子八破拍子十六終帖加拍子舞入時吹安摩序三切破三切ある舞也而破四切中古より絕（八イ）也通典曰大面出於北齊蘭陵王長恭才武而（オイ）貌美常着假面以對敵掌擊周師金墉城下勇冠三軍齊人壯之爲此舞以効其指麾刺之容謂蘭陵王入陣曲　尾張濱主云高野天皇倒好此曲仍奏御前還入時又吹沙陀調入有勅以安摩爲入音聲此古老所傳也案之陵王に急なし只早を急になるといふ歟緩急の急の心なり　或說新羅陵王急歟作曲急上太鼓也　秘河海兩說共可用之箋弄破急歟
みな人のぬきかけたる　箋舞人のさうぞくの體なり舞の圖に肩ぬきたる有之抄秘なり　聽聞衆事云々花鳥には御衣かつきの事云々非なり以上箋也　秘見物の人々なるへし
殘りすくなしと身をおほしたる　秘紫上の心中なるへし
とし比かゝる物のをりことに　此段皆紫上の心中なり心ほそきさまなり
まして夏冬の時につけたる　秘六條院にていひかはし給ふ明石上花散里なとを云り　花花散里明石上の事をいへり箋　聞女樂なと有し事とも（こもろイ）なるへし箋同
事はて、おのかし、　箋御八講はてゝとなり
遠きわかれめきて　箋是かきりならんとなり
たえぬへきみのりなからそたのまるゝよゝにとむすふ中のちきりを　（紫上）秘御法は身をそへたり聞法の値遇は生々にもわするましきとなり今日の縁をむすひぬれは我身世をさりぬとも聞法の契はたゆましきとなり　花一二の句身とうけたる計歟世々にと結

ふ法に値遇の心もある歟たえぬへきは末世の法の心にや又如何可尋　箋御法に身をそへたり聞法値遇の縁は生々絶ましきなり（終イ）　師我生々見諸佛世々恒聞深妙典恒修不退菩薩行 以上箋　弄花散里と紫上と御中よかりきと也

返花散里 むすひおく契はたえし大かたののこりすくなきみのりなりとも　秘明石上は思惟をして後人のそしりを思ひて祝してよめり此歌はありのまゝなり是花ちる里の性なり　弄花散里は明石上にはかはりて思ひめくらさすたゝありによき人也此歌も其心みえたり　箋花散里の性さしめなれは歌もありのまゝなると云義なり明石は祝言を詠せしをこれはさもなき也但箋曰大方の殘り少きと云は花散里の年ふけ給へる人なれは我身の事を詠せしにや　箋聞

このついてふたんのと經せんほうなと　箋不斷讀經懺法

所々寺々　箋本寺本山の坊々にて祈念あるへし是は不斷の外也由斷なり

れいのあつさにさへ　紫上病中の體をかけり　箋此卷幻卷なと四季の折々又月々なとをこまかにかけり此卷は紫上の病惱のよわるさまをみせてなり

中宮此院に　花明石中宮也爰にはしめて中宮とみえたり二條院に行啓あり弄　箋明石中宮なり　箋立后の事此前に后たちとあり明石中宮は紫上の養子なる故なり

東の對におはしますへけれはこなたにはたまちきこえ給ふ　花二條院の東對を中宮の御休所とさせるなり寢殿にならへて東につくれり中門南階なとありこなたは寢殿なり紫上すみ玉ふなり箋　弄二條院の東のたいは中宮の御休息所なるへし紫上の寢殿にまち給ふなり紫上は西對なり又紫上西對へと云々可然歟共にかなふへし紫上方は二條院西の對也　紫寢殿には紫上のましますなり東にはいつも中宮のましますなりされは東對にて中宮を待給ふなり説々あれとも此義可然歟　私こなたにとはしん殿に紫上の待玉ふとみえたり

この世のありさまをみはてす　弄源なとよりさきたつ心歟又宮たちなといまたをさなくましませはの心歟

なたいめんをきゝ給ふにも　名對面也　箋行啓に供

奉の公卿の名乘する事なり 花名謁は行啓の時あり行啓は先寢殿へなるによりて紫上もなたいめんに供奉の公卿なとの名のりするをきゝ給へるなり河中宮行啓儀北山抄云六府次將以下一員近衞等供奉裝束同行幸其外宮司兼中少將者帶弓箭供奉入御之後王卿名對面宮司問之諸衞不脫弓箭著饗座矣以上弄之分註之

久しき御たいめんの 弄明石中宮と紫上と寢殿にて先たいめんありしなり

今宵はすはなれたる心ちして 秘源氏中宮の御前へわたり給て又わか御方へわたりたまふなり 評弄こよひは中宮とかたりておはする故にわか御方に源氏のやすみ給ふをすはなれたるといふ歟

おきゐ給へるを 紫上中宮とめつらしき御たいめんに御物かたりなと有ておきゐ給ふとなり

かた〳〵におはしまして 花中宮御詞なりかくの給ふてしはしは寢殿におはします也紫上語也中宮なとわたり給ふを紫上の御方へわたり玉はんはかたしけなしとなり花弄 秘花鳥に中宮の御詞といへるいかゝこれは紫上のことはなり中宮のわか御方に御出あらんはひんなし又紫上のまゐり給はんはわつらはしき故にしはしこゝにましませとなり 箋抄に紫上詞なり此かた〳〵といふは紫上は寢殿中宮は東對とはなれ〳〵に御座ありては直の御對面成にくきよしなり 私箋の義可然あなたにわたらせ給はんもとは中宮東對から寢殿紫上方へさいさい御出あらんも過分也紫の東對に參る事は病中なれは不相叶仍先御逗留あれとて寢殿に其まゝおはしますなるへし箋聞

うへは御心のうちにおほしめくらす 箋紫の御心中なりおほしめくらすは沒後なとの事なるへしされともさかしけにもおほしとゝめて心(ひきイ)にこめて萬にあはれなるさまの御物かたりあるなり紫のすくれたる性をかきて見せたり

宮たちをみたてまつり給ふて 秘明石中宮腹の宮たちなり

なとかうのみおほしたらんと 秘中宮の御心中なり何とてかくまてよわくはましますそとなり弄同

ゆゝしけになとは 秘こゝにてはこと〳〵しき心なり 弄ゆゝしけになきはこと〳〵しからぬなり

箋事のついてのやうに何となく官女なとの事を中
宮へ申おき給へるなりちともあはれからせてはの
給はぬなり是を哀傷の歌の心もちひにするかよき
なりこゝの心にて逍遙院は歌を詠せられしを後柏
原院叡感ありしなりと云々
御と経なとによりてと　河中宮季御讀經
れいのわか御かたに　花わか御方とは東の對なりか
なたにて季御讀經の事おこなはるゝなり　秘中宮
季御讀經なり此事にさきらはしとて紫上我方にか
へり給へり　箋曰花鳥説可然中宮の歸り玉ふは二
條院への事なり三光自筆也　箋花鳥東對也中宮の休
息所へうつり玉ふなり云々箋曰六條院へ歸給ふな
り末の詞にみゆ是又三光自筆　箋聞季の御讀經は六條院
にてし給ふ也云々　私此末の詞に宮は參り給ひな
んとするを云々　中宮の又紫上のかたへわたり給
てつひにむなしく成給ふ時まてそひれはしたりと
みゆ然は此御讀經の時も二條院の東の對へかへり
給へるなるへしれいの我方御イといふにて聞えたる歟
如何但此末の宮は參りなんとする箋に御里の六條
に御移りと注する也イ
院御調下するなり

三宮はあまたの御中に　秘匂兵部卿宮なり五歳なる
へし　箋悉耆紫上のやしなひたて給へり
まろか侍らさらんに　紫のわれとの給ふなり
まろはうちのうへよりも宮よりも　匂宮の御詞也
内のうへは今上なり　箋宮よりとは中宮なり　は
はをこそ紫上なり　箋はゝ淸てよむ聞同し
おさなになり給ひなはこゝにすみ給ひて　秘紫上の
詞なり　匂宮後に二條院に住給へり
さるへからんをりは佛にもたてまつり給へと　秘紫
上我身にとはの給はぬ心抄なり　西行か歌に一期
には櫻の花をたてまつれわかのちの世を人とふら
はゝとよめるも此心なるへし箋弄　河若人散亂心
乃至以一華供養於畫像漸見無數佛法華經　曾菲補處
思元亮爲是花時供世尊　菅家
なり弄
この宮とひめ宮と　箋此宮は匂也ひめみやは女一宮
猶こともすれはかことかまし　秘かこつけかましきな
り　ともすれは秋風をひきなとし給ふなり
さるは身にしむはかりの　河秋ふかはいかなる色の
風なれは身にしむはかり人の戀しき　和泉式部　秘

箋聞引之

中宮はまゐり給なんとするを　箋内裏へ参り給はんとするなり　箋御さとの六條院に御座也

今しはし御らんせよとも　私紫上の心には久しくはあるましき程にとゝめ申たきとおほせともさかし

過たると覺してさは申給はぬとなり

内の御つかひの　内裏よりめさるゝ御つかひなり

あなたにもわたり給はねは　秘紫上中宮の御方へもまゐり給ふへきやうもなきなり

宮そわたり給うける　秘紫上の御かたへわたり給ふなり　箋六條院に中宮は御里住なり紫上の御對面ありたきも病中なれはさる故に二條院へ又中宮の行啓あるなり宮そわたり給へるといへる此義なり

二條院へ中宮の御出あるとなり

かたはらいたけれと　箋紫上の頒諸自由の體なれともこなたへ中宮を申入らるゝなり

こよなうやせほそり　秘紫上の體なり箋

きしかたあまりにほひおほくあさ〳〵と　箋あさ〳〵と前はあまりにほひのおほかりしなるへし

あさ〳〵とは物のあざやかなる心敷

この世の花のかをり　弄襟に二所まてたとへたる事さもなるへし

風すこし吹いてたる　箋中宮と御物かたりし給ふなり

この御まへにては　秘中宮の御前也　源の詞なり

前にも中宮と御物語して起居給ふ事ある歟如此歟

見給ふも心くるしく　秘紫上の心なり

ついにいかにおほしさわかんと　箋妙なるかき様なり

紫上

おくとみる程そはかなき（ろけイ）ともすれは風にみたるゝはきのうはつゆ　箋おくとみるは起る心をそへたり弄

秘はかなき身にて有物を御心もはれ〳〵しけなりなとの給ふをいへりいきるとよそへたりけにそをれかへり　箋枝のかよわききさま病者によくかなへり　箋現在の前栽のさまなりそれにけにそといふなり　弄庭前折節の風をみたる也源のみ給ふ心なるへし

よそへられたるをりさへ　秘かくいへる折ふし風の吹いてたるをいへり　歌によそへられたる如く現量の萩の露もこほるゝをあはれに見給ふなるへし

源氏 やゝもせはきえをあらそふ露の世におくれさきたつほどへずもかな　河一末の露もとの雫や世中のおくれさきたつためしなるらん 和泉式部 「やゝもせはきえそしぬへきとにかくに思ひみたるゝ刈萱の露　箋 引歌やゝもせは云々　秘 源の歌なり紫上におくれ侍ましきとなりきえをあらそふへきとなり　箋 露の中にもきゆるとこほるゝと前後かあるなりそれをうき世のさまにみたるなり下の心は紫と源となり　やゝもせは　動やゝもすれはなり

明石中宮 秋風にしはしとまらぬ露の世をたれか草はのうへとのみ見ん　河 曉のつゆは枕におきけるを草葉のうへと何思ひけん 馬内侍 箋 引之　秘 中宮の御歌なり世間の無常をいへり我身も草におかぬはかりをといへる歌の心なり

きこえかはし給ふ御かたちども　源中宮紫上なと也

かくて千とせを過す　花後拾「たのむるに命をのふる物ならは千とせをかくてあらんとや思ふ　箋 引此歌　秘 不常住の心なり

今はわたらせ給ひぬ　秘 紫上中宮へ申給ふ詞也

いとなめけに侍りや　秘 終焉まて禮をみたらさる心つかひありかたし弄同

さき／＼もかくていきいて給ふ　箋 物のけの故なとにて生かへり給ひしこと前にもあり

宮もかへり給はてかく見たてまつりたまへるをかきりなくおほす　秘 今はのとちめを見給ふを中宮はかきりなくうれしく思ひ給ふ也　聞 かきりなくとは此終焉をみ給へる事うれしくも又一入かなしくもおほしめすとなり

明くれの夢に　箋 世上の無常のならひある事とも思はれす只此事はかりの樣に思ひ給ふとなり明くれは明闇なり　秘 夜の明る時分なり

さかしき人　秘 心をさめたる人なきとなり

かくいまはのかきりのさまなるを　源氏夕霧にの給ふ詞也

としころのほいありて　箋 紫上出家の本意なり

そのおもひたかへて　清 紫の本意にたかへるなり

ことわりにかなしく見たてまつり給ふ　夕霧の源を見給ふ心也

御物のけなとの　秘 大將の詞也　箋 物のけなとの出家の事をも覺しめしよらする事もやあらんとなり

御ほいの事はよろしきことに　是は受戒の事也するゑにみゆ
一日一夜もいむ事のしるし　河一日一夜受持八齋戒一日一夜持沙彌戒一日一夜持具足戒以此功德回向願求生極樂國　觀經　花一日一夜齋戒を持によりて安養界一日一夜の果報を受るなり　往生禮讃云中輩中行中根人一日齋戒處金蓮　善導　秘出家の功德の事なり
まことにいひかひなくなりはてさせ給うて後の　秘御心もなくなり給ひてはかひなき事となり
御いみにこもりさふらふへき　秘されとも僧をはめし出給ふ也
この君そおこなひ給ふ　秘これにて源の前後不覺の處は見えたり
さしころなにやかやとおほけなき　秘夕霧の心なり夕霧の紫の上に心のかゝる事はなかりしなり
ありしはかりも　秘野分のあしたなり
御こゝろをたにきかぬ事なと　河「聲をたにきかてわかるゝ玉よりもなき床にねん君そかなしき　弄こゝろをたにきかて云々　此歌を河海に引か本歌はいきてある人の聲をきかてむなしくなる事なり本歌のとり樣面白し
ひきあけて見給へは　是は夕霧の木丁を引あけてみるなり
おほとなふらちかうかゝけみたてまつり給ふに　秘源氏の紫上の御さまを見給ふなり　是は木丁の內なるへし
この君のかくのそき給ふを　秘夕霧なり
かくなにことも　秘源の詞なり
しひてしほりあけて　弄しはる心なり　しをるとよむへし
心まとひもしぬへし　箋夕霧の心なり
つや／＼と　秘光字なり弄
とかくうちまさらはす　秘つくろふ事もなきをいへり
しにゐる玉しひのやかてこの御からにとまりなんと　秘おもしろき詞なり夕霧の心なり箋
院そ何事も　源のすこし心をしつめ給へるなるへし
いにしへもかなしとおほす事　花夕かほの上葵上の事なとをいふなり秘箋弄同

おりたちていまた　箋前後始末の事を身にかけてしり給ふ事なりそれに彌此事をはたくひなきかなしさとおほすなり

やかてその日とかく　葬送の事なり

からを見つゝも　河「空蟬はからを見つゝもなくさめつ深草の山けふりたにたて　箋此引歌面白し云々

弄此引歌からを見てなくさむとあれと是はさもなき心おもしろくや（也イ）

はる／＼とひろき野　葬送の地のさまなり

いかめしきさほうなれといとはかなきけふりにてあはれなるさまなり

空をあゆむ心ちして人にかゝりて　秘源氏かちにて野に出給ひしとみえたり弄　箋葵上の時も野に出給へり

いつかしき御身　箋源氏太上天皇にておはすれはなり

大將の君の御は、君　葵上のうせ給ひし時の事を覺し出るなり

月のかほの明らかに　秘葵上は八月廿日葬送なり

弄葵上の時は歌なともよみ給ひしなり

十四日にうせ給ひてこれは十五日の曉なりけり　河十四日に終焉十五日曉葬送なり或抄十四日は昔の葵上十五日は紫上とある僻事なり　弄十四日紫上なり葵上の葬は廿日頃なり日數をふる說あれと月のかほの事葬送の夜とみゆ　秘紫上は十四日にうせて十五日にやかて葬れるなり爰の註にかけるなり古人の註わつらはし只此義よしとなり

日はいとはなやかに　歸洛のさまなり

野邊の露もかくれたるくまなくて　箋野邊の露ものもの文字にて袖の露は見えたり又露ははかなき物なれは世中おほしつゝけられてかける歟

むかしよりの御ほい　源氏御出家の事也

心よわきのちのそしり　かやうの時世をそむくはかろ／＼しき事なり

よろつになくさめ　秘大將の孝行なり

風野分たちて　秘野分のやうなるなり　秘大將の心なり

むかしの事　箋野分めきたる風につきて昔の野分の朝をおもふなり

又かきりの程の夢の心ちせし　秘終焉の時見給ひし

事なり
あみたほとけ〳〵とひき給ふすゝのかすにまきらはしてそ涙の玉はもてけち給ひける　河念珠に涙の玉をひきよせたる尤有興也　秘殊勝の詞なり　花より合て鳴なる聲を糸にしてわか涙をは玉にぬかなん　不及此歌歟
夕霧 いにしへの秋の夕の戀しきに今はと見えしあけくれの夢　秘有し野分の夕を今はのきはに思ひ出給ひし事なり　弄明くれの夢もなこりさへ歌より詞にかきつゝけたる又詞より歌につくもあり　私いにしへ秋の夕はいにしへのは實は野分の後朝也　紫の存生にて御面影の名殘戀しかりしはかり也此最後の明くれの夢は名殘さへそうかりけるといふ跡の詞なりなくなり給ふをふかくかなしみたる義なるへし　聞いにしへ見給ひしは野分の朝なりされと明暮に對してかくいへり
そなこりさへ　秘歌より詞にかゝれり
さたまりたる念佛　四十九日の程定たる作法成へし
ふしてもおきても涙の　花これは源氏君の御事なり
いにしへより御身のありさま　秘源の心なり

鏡にみゆるかけをはしめて　弄すまへの時紫上の鏡をみてもとの給ひし事と云説あり可了見　秘すまへの時紫上鏡を見てもとの給ひし事と云説ありされとたゝこれは我身のうへをつく〳〵と思ひつゝけて我なから誇たる詞なるへし　箋かたちのすくれたる事なりそれをはしめて人にはことなる身そとなり
いはけなき程よりかなしくつねなき世を　花源氏君三のとし母君におくれ給ふ事なり　秘母更衣外祖母桐壺帝なとにわかれ給ふ事也　私此外夕顔上葵上薄雲女院なと也
佛なとの思ひしらすへく　世の無常を思ひしれとの佛の方便かと思ふほとなる身そとなり
ためしあらしとおほゆるかなしさ　佛の思ひしらするやうなる世をつれなく過し故かやうの事に又あふたるとなり
やゝましきを　秘心やましきなり
内をはしめたてまつり　内裏より以下なり
れいのさほうはかりには　おもてむきの御とふらひはかりならすさま〳〵ねんころにとふらひ給ふと

なり
おほしめしたる心のほとには　箋源の出家の事なり
おほしたつ心のほとはすゝめとも此物思ひのまき
れに出家し給はゝ後難あるへしとおほしとゝまる
なりそれによりて又これさへ御身を心にまかせぬ
なけきあるとなり
ちゝのふさゝあはれをもおり過し給はぬ　箋致仕大
臣かやうの事をもして過さぬ人なりかとめいたる
所おはする故なり
昔大將の御母うへ　箋葵上なり　致仕のいもうとな
り
この比の事そかし　秘八月なれはなり
かの御身を、しみきこえ給ひし人　秘葵上をゝしみ
給ひし父母もいまはなくなり給へるなりうせ給ひ
し人々の數おほきよしなり
おくれさきたつ程なき　弄末の露もとのしつくや此
歌引へくや
御（致仕大臣）この藏人少將し　致仕の六男はかり歟
いにしへの秋さへ今の心ちしてぬれにし袖に露そお
きそふ　秘いにしへは葵上をいへり弄同　箋いにし
へは葵上なり今の心ちして紫上の事に我もゝよほ
されて今の心ちするとなりぬれにし袖に葵の事な
り露そおきそふは紫の事也
返源氏
露けさはむかし今ともおもほえす大かた秋の世こそ
つらけれ　秘世間の無常のかなしきことをいへり
弄世上なり　私葵上紫上といつれも別の勝劣はな
し大かた秋といふものか露けきとなりともに八月
にうせ給つれはなり葵上の時は物の（おほえ給ひしにやイ）おなしくにや
月のかほのおほえしとありされともこれは葵上の
兄致仕大臣への返歌なれは勝劣なしとはよみ給へ
るなり
御心のまゝならんは　秘愁傷もなほこま〳〵とわり
たきをもつゝみてのこし給へるなり歌にもみえた
り弄同　秘御心のまゝならはとは源の思ひのまき
れに心のまゝならは返事をみたりかはしくし給ひ
てはいかゝとなり
待とり給ひては心よわくもとめとゝめ給ひつへきお
とゝの御心樣なれは　源の御返事みたりかはしくは
致仕大臣待とり給ひてさても源氏の御心よわくと
りみたれたるやとめとゝめ給ふへき御心そとなり

かこめいたる人なる故なり
めやすきほとにそたひ〳〵なほさりならぬ御とふらひかさなり　其所をかく源の分別し給て心をしつめてたひたひの御とふらひのねんころなるほとをもこまこまと心をつけて御返事かき給へるとなり
花待とり給ひては心よわくもめとめ給ふへきおとゝの御心さまなれは注也過にしかなしさをさらにもとめて心にとゝめたまふへきおとゝの御心さまなり此一段の詞は夕霧大将藏人少將にかたりたる詞と見え侍り大將君明くれちかくさふらひ給ひてよろつになくさめきこゆと上にも見えたれは藏人少將の御使の時もやかて申つかはれて御返事のつゐてにかたり給へるかとおほえ侍り　私此義あやまれる歟但暫載之
うすゝみとの給ひし色よりはいますこしこまやかにて　河介第九云主君父母夫服一年　葵卷に葵上うせて後六條院われさきたゝましかはふかくそ染給はましとありしこの事なり歌にかきりあれはうすゝみ衣あさけれとゝあり　花妻二等三月服暇廿日なり　秘輕服なり　弄妾（妻イ）服事葵の時うたに「かきりあれはうす墨衣あさけれと涙そ袖をふちとなしける　弄私こまやかは濃也色のこき也輕服のうち心さしのふかき故にちとこくそめたるへし
世中にさいはひありめてたき人も　箋或は人にそねまれ或はよけれは心のかきりおこりて人の苦となる者あるなり此より紫上をほむる詞なり
さしもあるましき　是につき人の紫上をゝしみ申事を三段にかけり
おほよその人さへ　是は大かたにうちきく人もあはれと涙おとさぬはなしとなり
ましてほのかに　又ほのかにも紫上を見し人は扨もさてもとおもひいてゝなくさむへき世もなしとなり
年ころむつましくつかうまつりなれたる　紫の女房なとなり此内には或は尼になり又はふかき山すみなとするもありと三段にかけり
れいせい院のきさいの宮　秘秋好中宮也　私明石中宮ましませは秋好は皇太后なとにておはしますへきなりいつれもきさいの宮なるへし但前（サキ）の中宮歟
秋好 かれはつる野邊をうしとやなき人の秋に心をとゝめ

さりけん　秘春秋のあらそひのことなり　河引歌
「霜枯の野へをはうしと思へはやかきほの草と人
のみるらん　花紫上は春に心をとゝめ給ふ冷泉院
の后の宮は秋を好み給へりしか只今枯はつる野邊
のけしきを見れはあはれなる物の人の心をつくす
時なりけりと思ひ給て紫上の秋に心をとゝめ給は
さりけるはことはりなりと思ひしり給へる心むけ
をよみ給へるなり　箋大略おなし　私かれはつる
こは紫上のうせ給へる事をいふなるへし
今なんことわり　秋をきらひ給へるを今思ひ合せた
るとなり
うちかへしをきかたく見給ふ　花源氏の心なり　箋
此まきれにも奇特なる事を思ひよせ給へると源の
心に感してうちをきかたく見給ふとなり
いふかひありおかしからんかたの　かしつき心はせ
ある事には此秋好はかりこそとおほすなり
返源氏のほりにし雲ゐなからもかへり見よわれ秋はてぬつ
ねならぬ世に　花のほりにし雲ゐとは紫上のことを
いへりむなしくなるをは雲ゐにのほるといふなり
秋をあきはてぬと取なしたるは秋好中宮の返歌な
れはかくはよみ給へりさるから又紫上にをくれた
るも秋の時なれはいまよりのちいく年をかさねぬ
とも此世にあらんかきりは秋を忘るましきとよみ
給へり兩方をかねたる心はせ比類なくきこえ侍り
秘煙とのほり給ひし紫上も我秋はつる心をはか
へり見そし給ふらんとなり秋好をはさしおきて面
白き歌なり　弄花鳥にのほりしとは紫の事と又あ
きはてぬとあるを秋好への返歌なれはとあり是又
如何秋好へ秋はてぬとはおほつかなし　私云のほ
りにしとは后の御位の事なるへし秋はてぬとは此
わかれ故世にあきはてたる事をあはれみおほしめ
せとにや　私云此弄の義可然箋聞同之
おしつゝみてもとはかりうちなかめておはす　御返
事をつゝみてもしはらく打なかめて御使にもつか
はされすとなりさて源のわれなからことのほかほ
れ〱しきと思ひしり給ふなりすくよかにも御心
をはたさもたんと思へともさもなきなり
女かたにそおはします　弄源氏の心すきたる方には
あらす　秘ほれ〱しさに外さまをはゝかり給ふ
なり幻にも見えたり

佛のまへに入しけからす　女かたにてもあまたには
見え給はぬとみえたり
今はちすの露もこと〱に　れなしはちすの事也
こと〱毎事と云々又別事歟
されと人きゝを　箋外聞はゝかりて出家なき事也三
所にある歟是も愁歎のあまりなり
御わさの事とも　追善の事なり
の給ひおきつる事　源のしか〱と仰られぬといふ
歟
けふやとのみわか身も　河わひつゝもきのふはかり
は過してきけふやわか世のかきりなるらん　箋引
之　弄世をのかるゝ事をけふや〱と思ひ給ふ也
秘同　箋源の我身の事をけふやかきり〱と思ひ
給ふ事かしけきなり
はかなうつもりけるも　箋月日の事なり　弄年のく
れたる心なり　次の春にうつるへし
中宮なともおほしわするゝ時のまなくこひ聞えたま
ふ　秘明石中宮なり
弄奥勘羅陵王　古樂之有舞中曲舞次第先小亂聲次亂聲次轉
三度畧時一度又二度用之次中曲次嗔序　次音取荒
序次入破次安摩急此時舞入又三度用之
應安三年三月八日右近將監豊原英秋仲自筆之譜元
正端午於御前寫之今私寫之也

岷江入楚第四十一　幻

五十二歳　薫五歳
春螢兵部卿宮參六條院給事
六條院思往事給事
中納言局中將局候御前事
中將君爲紫上御形見事
二月對前紅梅盛事
匂宮愛二條院櫻花給事
六條院渡入道宮御方給事
若宮與若君遊給事
夕方渡明石御方給御物語事
明日遣消息於明石御方事
四月一日自花散里献更衣御裝束事
祭日與中將君贈答歌事
五月十四日夜大將君候御前給事
六月見池蓮給事
七夕詠前栽之露事
八月十五日紫上周忌供養極樂曼陀羅事
中將君扇書歌給事
九月見菊綿給事
十月時雨空雁鳴渡事
十一月五節日大將君頭中將藏人少將等參六條院事
破舊反古等給事
歳暮六條院歌逐素有其儲事
佛名之事

幻　花 以歌爲卷名

河「大空をかよふまほろし夢にたに見へこぬ玉の行衞たつねよ　花御法の次の年源氏五十二歳の時の事なり此卷は正月より十二月まて月をかゝさす次第にのせたり餘卷にはいまたあらさる筆法なり六條院の愁歎の事日々月々に忘れもやらてむらさきの上をしたひ給ふこゝろをあらはせるなり　薫は源氏四十八のとき生れ侍りてことしは五歳になり侍るへし　秘卷名歌にて號源氏五十二歳の正月より十二月までを次第にしらせり紫上をわすれかたき心日々月々にたえまなき心をあらはせり弄箋云此卷年中十二ヶ月を具に載て前の御法卷四季を次てゝ紫上の病惱の次第々々に死期にちかき事を示すといへともこの卷は四季の移るに隨て彌愁歎の甚たしき事を云なり自餘卷には此事無之幻は眩メクルメク　此字に通すと云々

春の光を見給につけてもいとゝくれまとひたるやうにのみ　秘「百千鳥さへつる春はものことにあらたまれともわれそふり行　箋右の歌の心こもれり

私春は紫上の事に賞し給ひし時なればなり

かなしさのあらたまるへくあらぬに　春の光はあらたまれとも六條院の御心のうちのかなしさはさらにたへぬ心なり

とにもれいのやうに　弄外なり　秘御法卷にも女かたにそおはしますとあるなけき給さまを人につゝみ給なり

兵部卿宮　秘螢なり

うちとけたるかたにて　源の外へは出給はて螢を内へよひ申給ふなり別してしたしき故なり

源氏 わかやとは花もてはやす人もなしなにゝか春のたつねきつらむ　なにゝこの色そめかへて匂ふらん花もてはやす人もこなくに　聞引之　秘春を兵部卿に比していへり

返螢兵部卿 香をとめて來つるかひなく大かたの花のたよりにいひやなすへき　秘源をなくさめんかためにきたるなり大かたの春にてはなしとなり

こうはいの下にあゆみ出給へる　秘兵部卿宮の御さまなり　秘蜻蛉日記云八日にひつしの時はかりにおさゝのおはしますとのゝしれは紅梅のたゝ今さ

かりなる下よりさしゐゆみたるにけなくもある
よしうち見ゐけてあな面白やといひつゝゐゆみの
ほりぬ
これよりはかにみはやすへき人なくやと 箋不及引
歌源の歌に花もてはやす人もなしとはの給ひつれ
ともこの兵部卿宮はかりはもてはやすへき人にや
といふなり
とし頃へにけるは 秘その外の人は服をあらためた
る心なり 弄
まきれなくみたてまつるを 秘源の出頭なき故に人
々たえすみまいらするをなくさめにするなり
ふましのゐたりひきさけつゝ 秘けの字清濁兩義ゐ
り濁てよむ時は次の間なとに引さくるなり清てよ
む時は引避るなり兩說共可用之
なくりぬき（こそなイ）御ひしり心 源のをこなひ許にて女かた
なとみ入給はぬ事をかくいへり 弄
さしもゐりはつましかりける事に 河女三宮の折の
事也 花中比むらさきの上いまたおはしましゝ時
女三宮朧月よなとに心をかよはし給ふ事なり 秘
紫上の心みたり給ひし事

たはふれにても これは大かたの風流なり
まめやかに心くるしき 是は女三宮なとの事なるへ
し
ひとゐたりつゝは 秘権齋院朧月夜なとの事なり
むねよりもあまる 河憂喜塡胸なと云心なり
そのたりのことの心をもしり 秘さふらふ人々なり
入道宮のわたり給へりしほと 花此一段は若菜上巻
にありし事ともなり 秘女三宮なり若菜巻に猶の
これる雪とすし給ひし時の事なり
色にはさらにいたし給はさりしかと 紫上大かたの
事をそとはうらみ給ひしなり女三の御事は密々し
き事なれは中々色に出し給はさりしとなり
夢にても又はいかならん世に 秘ゐふ事もいまはな
きねの夢ならていつかは君を又はみるへき 上東門院
此歌諸抄になしおもしろし
覺しつゝけゝる明ほのにしもさうしにおるゝ 河曹
司也しもはおりしもなり 弄つほねへなり 秘暦
にしも此しもの字にあたりてみるへし
源氏 うき世にはゆきゝえなんとおもひつゝ思ひの外にな
をそほとふる 河「うき世にはゆきかくれなんかきく

もり月は心のほかにもあるかな　私勘古一世中のうけくにあきぬ奥山の木の葉にふれる雪やけなまし　ゆきえなんは雪をもたせたり行かくれなんも行きゆるも同心なり　秘そのきわにも源は身をすてんとおほせしを人めをはゝかりて打過ぬる由也

れいのまきらはし　かたはらさひしくねられ給はぬまきらはしなり

御ひをけ　河火桶也

かくてもいとよく過しつへかりける世を　源の世をすてかねたると思ひしり給ふなり

われさへうちすてゝは　さふらふ人々のうへをおほすなり

よろしう思はんことにてたに　秘なほさりに思はんことにてたになり

袖のしからみせきあへぬまて　秘源の詞也　河「あすか川心のうちになかるれは袖のしからみいつかよとまむ　秘箋弄此歌をひけり

この世につけてはわかす思ふへき事　花これよりは源氏の御心なり　秘源の詞なり　私御法巻に鏡のかけより云々此段の心とおなし事なり　源の愁歎のふかき故此事をくり返し〳〵思ひ給心を見せてあまた所にかけるなり

佛なとおきて給へる身なるへし　河掟　秘無常をさとさんためなり

めならす人々のいまはとて　秘さふらふ人々なり　箋目なるゝ人となり御身近き人々なり

御めおしのこひかくし給にまきれんすやかてこほるる御なみたを　私拭ニ却千行一更萬行涙の事をつくれる詩あり

おしなへてはおほしたゝさりし　中納言君中将君なと歟

中將の君とてさふらふはまたちひさくより　花中將君をは二條のうへのまたおさなかりし時よりそたて給へるを六條院のしのひてみ給ひしかとも中將君うへにはち奉りて院のめせともまいりちかつかさりしを二條の上うせ給ひて後この人々をかたみとおもひ給へる事をいへり

心とゝめおほしたり　紫上の中將君をねんころにおほしめしゝ也扨源の今あはれとおほすは心かけ給ふにはあらてかたみに見給ふとなり

うなゐ松におほえたれと（ろイ）　弄文選句也中將を紫上のかたみと云り墳（塚）上の松をなき人のかたみにみる心にたとへたり　秘花鳥に見えたりなき人のかたみとみるよしなり　花河海にもおほくひかれ侍れとしはらく詮要をとりて申侍へし文選に馬鬣松とかきてうなゐ松とはよみ侍り馬鬣は馬のたてかみのことくさきをするとにつきたるつかをいふ也そのつかに生たる松をうなひ松とは云りたとへはつかの松をなき人のかたみにみるか如く中將君を紫上のかたみと見る心なり心はせもかたちもめやすきゆへうへの御けはひにれほえたると云る也　河文選曰馬鬣松青蔟　禮記曰 弓檀 孔子之喪有自燕來觀者倉（舍イ）於子夏子夏曰聖人之葬人與聖人也子何觀焉（人之葬也何觀焉イ）昔者夫子言之曰吾見封之若堂者矣（封築爲壟形四方而高）見君坊者矣見若覆夏屋者也（覆荚謂也夏屋今之門廡也尼其形太方屋而畢）見若斧者矣（斧形旁欲双上而長）從若斧者（イ）（孔子以（双上）雖壹秋（登扶イ）又爲于上易爲切）馬鬣封之謂也俗間名　本朝文粹第二云菅贈太相國詔書巨勢爲時作馬鬣年深蒼烟之松難老龍光露暖紫泥之草再新太平御覽云周景式廬山記曰石門巖即松林也　南臨石門洞中仰視之離々駢塵尾號爲塵尾松西嶺異然如馬鬣又葉五粒者名五粒松　豫章記曰徐孺子墓在郡南時杜守徐與於墓邊種松（童賢頌碑）　廣州先賢傳曰項琦（至）孝母喪獨立墳歷年乃就居喪踰制種松栢成行　鬣廣韻云毛長也良涉切也又常陸國風土記云香島郡内二童子女松原と云事あり起緣と物語の心には不相叶仍略之　水原抄云大國には人の墓のしるしに小松をならひうゝる事ありと云々若は又峯のつゝきなみ木なとにもひとしくおなしすかたなる松を馬鬣松と號する歟此松を馬のたてかみにたとへたりたとへはたけひとしかるへき心歟しからは紫上のたけすかたに中將の君おもひよそへられてたゝならましよりはらう／＼しとある歟如何　此事俊成卿難義也と云々　按之紫上中將君のたけすかたおなしほとにおもひよそへらるゝゆへにうなゐ松と號すといへるは然へからさるもの也詞にこゝろはせなともめやすくてうなゐ松におほえたるけはひとありすてにこゝろはせまたけはひといへりたけたちにあらす文選のうなひ松の訓は分明なり不審あるへからす禮記に馬鬣は墓のかたちと見えたりこれはもし異朝に墳にはかならす松をうゑたる事な

れはそのかたち馬のたてかみに似たれはいふ歟
或文に童男女髫髪或は垂髪なとかきてうなゐとも
よめはいまた小松の心歟所詮陵墓上の松をなき人
のかたみと見るかことくに此中將君を紫上のかた
みにおほしたるなり云々　此外無別儀歟
うとき人にはさらに見え給はぬ　花外人不見令應笑
白氏文集
人にむかはんほと計は　秘人に對面なきいはれをか
きのへたり
かたくなしき　河頑也
おもひほれてなん　秘世間の用意なり
おもひやることとのかたはなるよりも見くるしきこと
のめにみるは　見と聞とは事外差別あるなり
かく心かはりし侍るやうに　秘愁傷ゆへに心も平生
にかはりたる事なり　弄源氏の心本性にかはりた
る事也
なみたの雨のみ　河古「墨染の君かたもとは雪なれ
やたえす涙の雨とのみふる　秘引此歌聞同
きさいの宮は内に　秘明石中宮御歸參なり
三宮をそ　匂兵部卿宮なり

はゝのの給ひしかはとて　秘紫上の遺言をの給へり
いとあはれと　源の御心なり
きさらきなれは　二月にうつせり
かの御かたみの紅梅　河萬「わきもこかうゑし梅木
みるからに心たえつゝなみたなかるゝ　六帖「み
るからに袖そひちぬるなき人のかたみに見よとう
ゑし花かは
うくひすのはなやかに　花聲華　朗詠下
源氏
うゑてみし花のあるしもなき宿にしらすかほにてき
ゐるうくひす　河「こちふかは匂ひおこせよ梅花あ
るしなしとて春な忘れそ　秘鶯は花のあるしのゆ
くへをはいつくへ行たそとなりこの歌よみたまふ
まては二條院にての事也　弄二條院なり此卷より
六條院なるへしと云々　私云御法の時の花の事は
二條院なりといへるは六條院なり六條院の梅をも
三君のゝ給ひしと心うへしさなくては如何なり
以上箋弄
春ふかくなり行まゝに　秘是より六條院の事なり
三月にうつせりと見えたり
おまへの有さまいにしへにかはらぬを　六條院の春

のおとゝなるへし
めて給ふかたにはあらねと　花にも源の貪着はなし
紫のかたみそとなり
この世のほかのやうに　源の心なり　弄源氏の心なり鳥のねもきこえさらんとは又まことの山を思ひやり給ふなり　河「とふ鳥の聲もきこえぬおく山のふかき心を人はしらなむ
かはさくらはひらけ　河朱櫻　和名樺櫻
そのおそくとき花の心を　秘かくしなく〳〵をよくわきてうゑおき給ふなり　弄又六條院の事とみゆ如何
わか宮まろかさくらはさきにけり　弄三宮の事也幼稚の心二條六條無分別歟二條院に似たり如何　秘此語にて二條院事と見るもありされと此六條院のはなをもまいらせ給歟となり又は六條院二條院の分別なくしての給ふ幼稚の心なるへき歟
木のめくりに木丁をたてゝかたひらをあけすは風もえふきよらしと　河共愁日照芳難(維イ)駐仍張帷幕乘陰涼　白氏文集　牡丹芳　花唐穆宗毎二宮中花開一以二重頂帳一蒙二被欄檻一置二惜花御史一掌レ之號曰二枯香一　今案三宮の思ひより給へる御心はせは唐穆宗の惜花御史をおけるにことならすおほふはかりの袖もとめたる人の智惠よりはまさり給へるとなり
おほふはかりの袖もとめけん人よりは　河「大空におほふはかりの袖もかな春咲花を風にまかせし
秘引歌河同此歌はありかたき事を云り此木丁をたてめくらすへき事はやすき事なれはかしこういへりと判し給ふとなり
君になれきこえん事も　秘三宮にむかひて隠遁あるへき事を申給へり
いのちといふ物いましはし　花たとひいのちはいましはらくありとも世をそむきなは對面はあるましきと三宮に申給ふなり
ものしとおほして　秘三宮の心なり弄
はゝのゝ給ひし事を　秘紫上のゝたまひしやうに又源ものこりすくなしとの給ふをいま〳〵しとなり
弄
まか〳〵しう　河枉　日本紀　禍　同
御その袖をひきまさくりなとしつゝ　弄三宮の源氏の御袖をひきまさくりたるなり又云宮のわか御袖

にもや　秘御ぬしの袖にても又源のにても有へし
すみのまのかうらんにおしかゝりて　源の御さまなり
御かたみの色かへぬ　いまた主君の爲に着服の人なり
れいの色あひなるも　秘餘服したる人なり　かやうの人々も花やかなる色をはきぬなり
みつからの御なほしもいろはよのつねなれとことさらにやつしてむもんをたてまつれり　秘平絹の直衣をき給へるなり志の淺深によりて心喪の服は用るなり　弄平絹の直衣なり　河或人云妻服は一期中に一度着之云々六條院葵上の時已に着服の儀有何そかさねて着せらるへき哉云々　案之着服の淺深は志の厚薄によるへしされは主君の服を一生着する人在之異朝の趙武は程嬰か服を三年まて着しけり此院宮仕の義にあらす悲歎切なるによりてかさねて着し給ふとも何事あらんや　物忌令曰本妻は嫡子生妻也服三十日服一年子不生當妾（妻イ）暇廿日服三月云々若は妾（妻イ）の義にて三月の服歟次年の春みつからの御直衣も色はよのつねなれとと見えたり又ここにも同く色はよのつねなりと見えたり無文の直衣は凶服ならても前官宿老大臣なとは着也此院もすまにて被着之顯露の着服ならてことさらにやつして着せらるゝと也　花紫上は七八月にかくれ給へり源氏の君本妻の服をさらに着し給ふとも三ヶ月なるへししかるに明る年の春まてもむもんの御なほしをき給るは餘哀忘れかたきによりてよのつねのさくら色なれともあやをはき給はて平絹をき給へるなりむかし重明親王は延喜の御門の御ためかきりある一暮の服をのそきても猶三年の間はわたくしの衣裳に綾羅美色を着せす食器も朱漆をもちゐ侍らぬよし彼記にみえたりわたくしのこゝろさしは法の外の事なり　私箋兩說共に戴之

源氏 今はさてあらしやはてんなき人の心とゝめし春のかきねを　紫上の心とゝめて木草をもうへたまひし所をわか身の世をのかれなはあらしやはてんといへり

入道宮の御かたにわたり給ふ　二條院にての事こゝまてあり二條院より六條院へわたり給ひしと心うへしわか宮も人にいたかれてとあり二條より六條

へ只今わたり給とは見えすいかさまにも六條院に
ての事とみるへし
わか宮も人にいたかれて　匂宮なり
こなたのわか君と　私こゝにてたしかに六條院と見
えたり
宮はほとけのおまへにて經をそよみ給へる　秘　女三
宮なり
なにはかりふかうおほしとれる　女三宮の御事を源
の思ひ給ふ心なり
かくあさへたる　花　御法卷にも此詞あり　秘　淺き心
なり　弄　河　さもし濁歟云々如何私云さもし清歟
あかの花の夕はへ　秘　時花を佛の供養にをりませた
り弄
春に心よせし人　秘　紫上なり
たいのまへの山ふきこそ　花　六條院の東對は紫上の
すみ給ひし所なり
うゑし人なき春とも　河　「うゑてみしぬしなきやと
の櫻花色はかりこそむかしなりけれ　古「色も香
も昔のこさに匂へともうゑけん人のかけそ戀しき
秘　色もかもむかしのこさに云々　箋　河の引歌二首
なから載之猶用後歌　弄　うゑけん人の歌の心歟
谷には春もと何心もなく　秘　女三宮の御返事なり何
となくの給へとも物思ひもなしといへる所源の耳
にたちてきゝ給ふ也　光なき谷には春もよそなれ
はさきてとくちる物思ひもなし　女三は身を卑下
しての給へとも物思ひもなしといふ所か耳にたつ
なり　弄　さきてとくちるの歌の心なさけなしとな
り
そのことのさらても有なんかしと　秘　これにつけて
も紫上の事を思ひいて給ふなり一ふしさらに思ふ
にたかふと思ひしことのなかりしと也和泉式部か
「今はたゝそよその事と思ひいてゝわするはかり
のうきこともかなといへる心とおなし　弄　紫上の
事を思ひ出給ふかくまてなくともと思ふ事にもた
かふ事なくてやみえ給ひしと也　花　さきてとくち
るものおもひもなしと女三宮はわか身を卑下して
の給ふと思ひ給へともをりからなさけなき御詞也
と院はおもひ給てことしもこそあれ心うくもとお
ほさるゝにつけて故紫上はよろつにたかふゝしも
なかりし事を思ひ出し給ふなり

まつそのをりかのをり　紫上の御心つかひのすくれたりし事ともをつく／＼と思ひいたし給ふさまなり

又かうさまにはわらて　秘又紫上を思ひ出給ふなり　弄紫上の事を思ひ出給ふ明石上にも又まさり給ひしなり　私明石上を然るへき人とおほすに又紫上の心はかはりたる所の有て猶すくれたるなるへし

こなたにてはのとやかにむかし物かたりなと　明石上は物おもひしりたる人なれはむかし物かたりし給なるへし女三宮よりはやかてかへり給ふとみえたりかやうの所を思ふへし

人をあはれと心とゝめんは　秘是より源の語也　花これより源のあかしの上にかたり給ふなり

大かたの世につけて身のいたつらに　花すまのうらへうつろひし時をいふなり弄　秘すまへくたり給ひし事なりわかゝりし時は命をはかろく思ひしなり

いのちをもみつからすてつへく　河「身はすてつ心をたにもはふらさしついにはいかゝなるとしるへく　聞引歌同し

さしてひとつすちのかなしさのみには　秘紫上のことひとつのやうにはの給はさるなり　源氏のこゝろ紫上のことのみなれとさはいひなしたまはぬなり

いとほしくみたてまつりて　花明石上の心詞なり

大かたの人めにはなにはかりおしけなき人たに　秘明石上の返答なり　弄大かたの人めにとは世上の人の事也　箋公界のよのつねの人を云それも分際すてかたき世そこなり

ましていかてかは　源氏の御事を云也

さやうにあさへたる　箋卒爾の御道心はいかゝとなり　これも淺き心とみゆ

おほしたつほとにふきやうに　河鈍ニフキ　遅鈍の心なり　六條院世をそむき給ふへきよしをの給ふに明石上大方の世の人もはしめて道心思ひたつ時はにふき心なくすみやかなれとおのつから心にかゝるほたしおほえ侍るはこゝろもすみはてぬ事もあるにやこの宮たちのおとなひ給ひうこきなかるへき御ありさまにみたてまつりなし給てみたれなくおほしたつへきにやといさめ申さるゝなり是を此

頭其にの字を上によみつけて不義やうに侍らんや
とよみて上にしたるはさることろ也或又物狂にな
といふ義侍りしほどに委くしるしつけ侍なり　箋
中宮の御一類の事に御心の殘らぬ事はあるましき
となり

つゐにすみはてさせ給ふかたふかう　花始終道心さ
めすして世中をすみはつる心也住はつるは所に隨
て世に住はつる心も有へし是は世の外にすみはつ
る心なり
おもひやられ侍てこそ　句也箋世のかへりみなき時節
か至るへきなりこそといひて上を決する也
いにしへのためしなとを　秘道心はおこりやすくて
又さめやすき物なり花鳥に花山院の御事をひけり
遍昭なとの類はまれなる事なり
思ふよりたかふふし　箋世を恨るを道心の基とする
人多しとなり　弄思ふにたかふ事也
それは猶わかきことに　花おもふ人におくれてかな
しさのあまりに遁世なとするはかならす末とほら
ぬ物なりにふきやうなれとよく〱心しつかに思
ひめくらして道心をおこすはそのまゝにとほるわ
さなり花山院法皇は弘徽殿の女御爲之女におくれ
させ給て俄に位をさり花山にいらせ給しかとも後
にはうき世にかへらせ給てはなやかなる御ふるま
ひともありしなり道心はおこりやすくてさめやす
きものなるへしとなり
猶しはしおほしのとめ　秘思惟有へき事となり
宮たちなとも　秘今上の宮たちなり
うこきなかるへき　秘御即位ありてとなり　弄明石
中宮腹の宮も位にもつき給ふへき事也
さまて思ひのとめん　秘源の詞也　花
故きさいの宮　秘薄雲なり花　弄薄雲三月に崩す
心あらはと思ひし　河「深草の野への櫻し心あらは
ことしはかりは墨染にさけ　秘箋開引之
それは大かたの世につけて　秘いひまきらはし給ふ
なり

みつからとりわく心さしも　薄雲の御事をかく思ふ
へきゆへなれは了見をくはへての給ふなり　秘公
界の事にも道心はおこる物となり
としへぬる人におくれて　秘紫上の事なり花
かゝる中のかなしさ　秘いもせの中をいへり

れさなきほとより　幼少よりおほしたてゝやう〳〵老ぬる末まて馴て打捨られたるかゝなしきとなり

かた〳〵そふことの　箋藤つほなとをはしめて其人かの人の事とりあつめたる御思ひのよしなり

かくてもあかしつへき夜をと　秘こゝにとまり給ふへき事となり

女もゝのあはれに　聞草子地也　此もの字影略して見るへし源もと云心有也

わか御心にも　弄源氏の心也

雁なく〳〵も歸りにしかなかりのよをいつくもつゐ（ひイ）のとこよならぬに　秘雁かりによせたり三月の事なれはなり弄　河おきもせぬわかとこよこそかなしけれ春かへりにし雁も啼なり　赤染　鴈のとこよす須磨巻に載す是は床によせたるなり　聞とこよ床によせたり

よへの御ありさまはうらめしけなりしかと　花よへあかしの御方へたま〳〵わたり給て夜中に我御方へかへり給ひし事なり御けしきを見給ふに心くるしさに我身のうらみは次になりて御ためになみたをなかし侍るよしなり　秘明石上の我身をはさしおかれて源のなけき給ふをかなしくおもふとなり

返明石上 かりかゐし苗代水のたへしよりうつりし花のかけをたにみす　秘源を鴈に比したるなり源の今は花にもめて給はさるとなり我身もおなし心にて花みんことも思はさるとなり又の義は紫上の後は源の御影をも見る事のなきとなり　花かい詞なり鴈のゐしといふ心なりかりかねもかりの聲なり後撰　秋のよにかりかねも鳴てわたるなりわか思ふ人のことつてやする　たのむのかりのかへるに源氏君をたとへたてまつりて苗代水のたえしよりうつりし花のかけをみぬは明石上もおなし御心になりて花みん心もなきといへるなり　ふりかたくよしあるかきさまとはあかしの上をほめ給ふこと葉なり

箋源を鴈に比す　箋には紫上の後には源の影をもみぬとなり　弄私苗代水を紫にたとへ鴈を源にたとへて紫上なく成給ひしより源もうとき心なり源を花と鴈とにたとへて水と云縁にてうつりしと云なりうつるとはこゝは明石のかたへ源の契うすき心にて前の歌は鴈に源の事なれはなり　弄花にもめてぬ心と云々　かりかゐし黄む雁を源にたとへ

たりしと有たとへたる心ゆかぬ様なり雁かゐしと
は女一宮匂宮なとを紫のおふしたて給ひしをおも
ひて云歟苗代水に花に源をたとへたるへしさて心
は紫のおはしまさらねは源の御かけをも見ぬとい
へるか付紙にかくなり

なまめさましき朝に（物イ）　秘初は紫上あかしの上をはめ
さましき物に心をき給ひしとなり

末の世にはかたみに心はせをみしる　むらさきの上
もあかしの上もやかて心をみしるとちにてよくお
もひわ（あイ）ひしとなり

又さりとてひたふるにはたとけす（うちけすイ）　花あかしのうへ
をは院の心のやすきかたにはうちたのみ給ひしか
たも又一かうに打（イナシ）とけすこゝろをき給へりしこゝ
ろをきてを紫上をはさしも思ひ給はさりしとなり
人とは紫上をの給ふなり

人はさしてもみしらさりき　秘人は見しらさるへし
源のよく見しりたるとなり　花鳥の説いかゝ　箋
源ひとりみしり給しとなり

たゝ大かたにうちほのめき給ふおり／＼　是は明石
上の御かたへはさう／＼しきおりなとはかやうに

時々おはするといふなるへし　昔物かたりなとも
よしありてし給ふゆへなるへしなこりなくとは立
とまりなとし給ふ事はなしとなり

鴈かゐし苗代水のたえしより　黄むの此歌鴈と花と
を源にたとへたりとあり一首のうちに二色をたと
へたる心ゆかぬやうなり鴈かゐしとは　母宮匂宮
なとを紫のおほしたてりしをおもひていふ歟　苗
代水に紫をたとへ花に源をたとへたるへしさて心
は紫のおはしまさねは源の御影をもみぬといへる
歟

なつの御かたより　花散里也　夏にうつしてかけり
花花（イナシ）は四月になるはしめなり

（花散里）夏ころもたちかへてけるけふ計ふかき思ひそすゝみ
やはせぬ　花衣かへするにつけてけふは一入ふかき
思ひの色もたちかへり給はぬ事は有ましきといふ
心をすゝみやはせとよめる也　秘けふはかりとは
けふはといふ心なりふかき思ひもすゝみ侍へしさ
なり紫上かやうの衣裳なと調し給ふ事時節につけ
て思出し給ふへきとなりすゝみやはせぬとは増進
すへしと也　弄けふはかりとはけふ程の心にやけ

ふは殊にふかき思ひもすゝみぬへしとなり紫上の事を衣裳なと調したるに付ても思ひ給ふへき時節なりすゝみやはせぬとはすゝまぬ事はあらしの心也古き思ひとは紫上物をうつくしくせさせ給ひし也然はけふはかやうの事にてもむらさきの上のまし〳〵たる時のやうにおもひまきらはしてなくさみ給へとのいさめなりたゝ是に付てもおもひ出し給ふへきとはさらにわすれたまはぬをいふ歟如何それにてはけふはかりといふ心あはす如何　私秘の義然へし

返源氏 はころものうすきにかはるけふよりはうつせみの世そいとゝかなしき　花うつせみの世はむなしき世なり羽衣のうすきは蟬の羽ころもなり夏のひとへ衣をいふへし　秘公界へかけてよみ給へり殊勝の歌なり　聞空蟬の世はかりをいへり贈答にかゝはらすと云々

さとにしのひていてゝ見よかしなとの給ふ　秘源の仁恕ある心なり

くれなゐのきばみたるに　花紅のはかま黄氣のそひたるなり　秘柑子色なり服者のはかまの色なり

弄紫上に心さしふかくて服の色かへさるなり

火さういろのひとへ　花萱草色は服者の用る色なり中將君の主君の服をきたるなり主君の服をは一非の間きるなり

いかにとかやこの名こそ忘れにけれ　花葵はあふひなり中將君にたはふれ給詞なり　秘逢といへる心なり　聞あふ日人に逢事をいへり

中將君 さもこそはよるへの水に見くさゐめけふのかさしよ名さへわするゝ　河「さもこそはよるへの水に影たえめかけし葵を忘るへしやは　秘よるへの水の事河海にくはしくしるさる　此歌はよるへはたよりの心なり祭の日なるによりて神社に事よせていへり中將の君は紫上をよるへにしてさふらひ侍しなりみ草ゐるとは今紫上ましまさすしてたよりをうしなひたるなりされは葵のかさしなともわすれたり源もあふひといふ事をは忘れ給ひぬるよと也

箋上句おなし義なり下句は源のはるかなる事をほのめかすなるへし　弄二の心あり引歌河海に有むかしの人を忘るへからすもし忘れは神社の前の水に水草もゐぬへしとちかひしを其人の心程なくか

はりて又かの水にもみ草のゐたりし事をいへり一義よるへはたより也中將は紫上をたよりにして過しにかくれ給ひしを水草ゐめとよそへたりされは葵のかさしなとも忘れたりと也此義よろしと云々　花鳥に瓶水の說末決便心葵に無緣歟　祇云中將名さへ忘るといへるをあふ事に心得ぬれはわろくも成侍へしよるへの水にみ草ゐるとはよるへは便りなりみ草いるはあせたる心なり紫上うせ給ひて後はけふのかさしの心をも思ひ入られぬ故に名さへわするゝといへりなけきの心なるへし定家卿僻案にもよるへの水の事見えたり　清輔說によるへの水は社頭に神水とて瓶に入たる水をいふと云々定家說はよるへは緣なりたよりの水也神社にかきるへからす古今歌によるへなみ身をこそ遠くへたつれと云々此よるへおなしきよし僻案抄にのせられ侍り但源氏の歌賀茂祭の日なれは神社のかたへもかよひ侍るへきやむらさき式部の心いかゝとおほつかなし中將君のうたのこゝろはよるへの水は二條のうへにたとへ侍りみくさゐるは影たえたる心なりさりともけふのかさしの名をは忘れ給ふ

ましきにそれさへはやわすれたまふとよめるなり河此よるへの水の事先達色々に申めり或は賀茂一社にかきると云々或又餘社にも有と云々八雲御抄にも社頭にある水歟云々　嘉應住吉社の歌合に社頭月を清輔朝臣　詠之　月影はさえにけらしな神垣やよるへの水につらゝゐるまて　判者俊成卿云よるへの水と云事は源氏物語にそ賀茂祭の日の歌にさもこそはよるへの水にみくさゐめとよめるとみゆるなりさらては古歌にも見及侍らす此水おろおろ承にたとへはいつれの社にも侍らめと當社の御前の月には海の面氷をみかき濱の沙玉をしらけんをはをきてよるへの水はかりに向て月をさしにけりと思はん事いかゝと云々　清輔朝臣陳云よるへの水なとはいつれの社にも侍る事そ又歌によめる事源氏のみにはあらす　和泉式部か集なとは御覽せさりけるにやと云々和泉式部か集云　稲荷祭見しにかたはらなる東のちまきなとゝり入てみくるしきを東にとりいれしときんのふの少將藏人の少將いひけるさ聞しを一日祭見るとて車の前を過る程ゆふかけてとり入させし「いなかにもいへる

と聞しなきことをけふはたゝすの神にまかする
返し　何ことゝしらぬ人にはゆふたすきなにかたゝすの神にかくらんといひたれはみてくらのやうにかみをしてかきやる　「神かけて君はあらかふ誰かさはよるへにたまる水といひけん　此歌を袖中抄に顯昭源氏の歌とていへり俊成卿の申されたるは源氏みさらん歌よみにや　袖中抄にはよるへの水といへり顯輔卿の說と云々　顯昭云よるへの水とは神社にかめ（かめイ）をゝきたるにたまれる水なりその水をよるへといふは神にはよりへと云（いひ說イ）事おほかり託宣には神の人の口によりてつきの給ふ事なりよりきとみこを申も神のつきて物をおほせらるゝ物也されはよるへの水といふも此かめの水に神のたより給うて神水とてのみつれは有事なき事のたしかにあらはるゝなり又物つきをよりまし（へイ）といふ也同心なり又寄占と書てはようらとよめり神のより給ふ占にこそ萬葉に神に依板にするすきといふ歌あり　古歌云「神さひのふるえにたまるあま水のみくさゐるまていもをみぬかも　雨なとのふり入てたまる水の事なり天水の心歟奥義抄云神社に瓶をゝきてそれなる水をなき事をおひたる物は神水とてこれをのむなりたゝすの社なとに今もありと云々

返源氏 大かたはおもひすてゝし世なれともあふ日はなほやつみおかすへき　花 源氏の歌あふひは草なれはつむといへり中將君はかりにはいまた草の名も忘れ給はぬにや　弄 摘と罪との心あり　句の面は摘置なり　箋 下句摘によせたり　秘 中將ひとりにはあふひといふ名をもけかさるへしとなり　罪を摘によせたり

さみたれはいとゝなかめくらし給ふ　五月にうつれり　秘 時節をうつしてかけるさまおもしろし

十餘日の月　弄 十四五日の比となり

千世をならせる聲もせなんとまたるゝほとに　河「色かへぬ花橘にほとゝきす千代をならせる聲きこゆなり　弄 引歌見河海　時鳥を待なり　秘 箋 開引之　時鳥の鳴聲をまつこゝろなり千世をならせるはいはひ事なり

にはかに立出るむら雲の　五月雨のはれ間の體眼前に見るやうなり景氣殊におもしろし

まどをうつこゑなど　河耿々殘灯背レ壁影　蕭々暗雨打レ窓聲　白氏文集　秘箋聞引之　私云前の詞に灯ろも吹まどはして耿々殘灯也そらくらき心ちする雨にそひて蕭々暗雨なり二句をさながらおもしろくかきなせり　箋上の詞に灯籠も吹まどはしてとは灯の事をいへり餘情あり

いもかきねにおとなはせまほしき　河「獨してきくはかなしき時鳥いもか垣ねにおとなはせはや　弄引歌河海　秘箋聞同引之　秘紫上にきかせましかはとなり夕霧の心なり弄同　花是も源氏の御こゑをほとゝきすになつけていへり下の詞にひとりすみといへるはいもか垣ねにつきたることとなり

ひとりすみはことにかはる事なければ　秘源の詞也

こゝにくた物など　弄大將にむかひてのくた物などなり

心にはたゝそらをのみながめ給ふ　秘源の御さまなり　大空は戀しき人のかたみかは物思ふことにながめらるらむ　此歌然へくや　此心にはとは夕霧の心中なり

かくのみおほしまきれすは　秘夕霧の心中也　弄夕霧の心に源氏をみ給ふ也

ほのかにみし御おもかけたに　箋大將の思ひ給ふなり　秘野分のあしたの事なり

昨日けふと思ひ給ふるほとには御はてもやう〳〵　秘夕霧の詞八月の周忌もちかつくよしなり　弄八月の忌なり　箋八月の一周忌ちかつくを云　花鳥七月と云々非なり

なにはかりよのつねならぬ事をは物せん　源氏の詞なり　よのつねならぬ事をはものせんとは別に普通にこえたる事をはせしとなり

かの心ざしおかれたる極樂のまんたら　河極樂曼陀羅之事　白氏文集云繡西方幀贊幷序六十（以下廿二行文略抄文也）私云第廿二又有繡彌陀贊　有女弟子弘農郡君姓楊號蓮花娃發弘願捨淨財繡西方阿彌陀佛像及本國土眷屬一部奉爲故李氏長姊楊夫人滅宿（殊イ）殃（冥イ）追宣祐也乃至讃曰金方刹　金色身　資聖力　福幽魂　造者誰　弘農君　受者誰　楊夫人　當麻寺極樂曼陀羅緣起云右大臣藤原號中將姬豊成女厭離穢土之志不淺欣求淨土之望是深晝夜戀慕極樂依正二報戀慕渴仰之餘手自書寫稱讃淨土經一千卷不願禁中之交遊遂背人

間之榮耀爲比丘尼受如來戒天平寳字七年六月十五
日發一誓願一食長齋參籠當麻寺我不見生身阿彌陀
如來者永不出此寺懇念無貳稱名不退也信心切々故
感應是不空纔經五ヶ日同月廿日一化尼來曰欲見生
身彌陀者可調設蓮莖百駄許言畢去是故申下宣旨於
近國募年貢設蓮莖同廿三日化尼又來伴(伊イ)端嚴女人其
齡卅許也化尼化女取蓮莖縿糸去寺乾六町許乃至化
人令(女イ)堀彼清淨之池靈水忽涌出漫蓮糸於其水染爲五
色化人即以五色蓮糸廿三日夜自亥剋至寅剋織極樂
曼陀羅織之間寺乾角有織機之音聞化尼與發心禪尼
相對爰化女織出曼陀羅置両人前懸之奉禮極樂變相
也其分量高一丈三尺廣一丈三尺三寸也化女放光明
入雲雨去化尼暫留敎變相之歸(功イ)能於禪尼權化之開導
聞法銘肝文略抄　極樂のまんたら女人のために故和
漢の先蹤ある歟仍紫上も心さしおかれたるなり
經なともあまた　これも紫上のしおかれたるなるへ
し
かの僧都のいはんにしたかひて　秘誰ともなし
かやうの事もとよりとりたて(いひイ)ゝ　夕霧の詞曼陀羅經
なとの事を紫上はよくたてゝおき給へは心やすしさ(も)

なりうしろやすきわさなれとよみきりて此世には(とよりイ)
といふより段をたてゝみるへし　紫上の佛法かた
の事をおほしおきてたりし事なりなれとゝよみき
りて此世にはといふより一段のやうに心うへし
かたみといふはかり　紫上の御はらに子のなかりし
事なり
それはかりそめならす　弄源の我身つからの宿世な
きと也　源の詞紫上に限らすいつかたにも御子す
くなしと也　命なかき　年久しく見給ふにも御子
なしとなり
そこにこそはかとはひろけ給はめ　河于公高門事歟
夕霧大臣の子息多なり　夕霧の御子たちのあまた
あるをの給へり
過にしことはいたうも　紫上の事をいひ出給へは御
心よわき体のみゆるほとにつゝましくてさのみえ
宣ひ出ぬなり
いかにしりてかと　河「いにしへのことかた(かイ)らへは
時鳥いかにしりてかふるこゑになく　引歌いにし
へのことゝまへの詞にいたうもの給ひ出ぬにとか
きたる妙なり　弄源の萬端愁傷の心中いひもやり

給はさる折ふしのさまなり　箋此引歌言語道斷なり上の詞に過にし事はいたうもの給ひいてぬにこありいかにしりてかと云あたり所本歌と一向各別なり奇妙なり　私本歌は事かたらへはとありそれさへいかにしりてかといへり是はいたうもの給ひ出ぬをいかにしりてかとは一重ちかひたる所妙所なり〳〵

源氏
亡人を忍ふるよひの村雨にぬれてやきつる山郭公

こゝなる義なきなり折のあはれなるさまなるへし

夕霧
ほとゝきす君につけなむ故郷の花橘はいまそさかりと　弄「なきひとのやとにかよはゝ時鳥かけて音をのみなくとつけなん　此歌を引可然也　以上弄

心きこえたる歟　秘君とは紫上をいへり　女房なとゝは草子地なり

おはせし世は　秘紫上の在世をいふなり

いとあつきころ　秘六月なり

いけのはちすのさかりなる　六月をかけり　河時移事去樂盡悲來每春之日冬之夜池蓮夏開宮槐秋落長恨歌傳　河海時移事去云々　是は蓮の事は少しなれ共總の心よく相當に依て引之歟

いかにおほかるなと　河「かなしさそまさりにまさる人の身にいかに多かる涙なるらむ　花河海の引歌こゝには不相應也如何法照禪師五會讃云一々池中華蕊滿花々總是往生人此心にかなひたる歌有へきなり　秘花鳥の義尤然へし　箋同　弄蓮の露を見給ひていかにおほかると覺し出たるへし妙なり

花鳥には五會讃

ひくらしのこゑはなやかなる　河「我のみやあはれとおもはん日晩のなく夕かけのやまとなてしこ　秘引歌同ひとりのみ見給ふとかける我のみやあはれと思はんの心おもしろし弄　私けにそとは引歌をうけてかける詞なり妙也云々

源氏
つれ〳〵とわかなきくらす夏の日にかことかましき虫の聲かな　秘日晩を虫といへるおもしろし心はわか至極なきくらしぬるに日晩さへかくなきくらすよとなりかことかましきはわかなくといふ心也

弄かことゝにてはわかなくに又詞をそへてなくとよめり　河日くらしをたゝ虫の聲といへる後撰には蟬を夏虫ともよめり

夕殿にほたるとんて　夕殿ニ螢飛思悄然　秋灯挑盡未タ

レ能レ眠長恨歌　秘　楊貴妃の心あり
源 よるをしる螢をみてもかなしきは時そともなきおも
ひなりけり　花　蒹葭（葭イ）水暗螢知レ夜朗詠箋同　秘　我身の
みきゆる時もなきと也　弄　私螢は晝夜をしる我か
思ひは晝夜の差別もなき心にや
七月七日（フツキナヌカ）れいにかはりたる事おほく　例年にかはり
て物さひしき七夕そとなり
ほしあひみる人もなし　河　金谷園記云七月七日夜酒
掃於庭露施机莚甘菓酒醂兼散香粉於庭上以請河鼓
織女言此二星歡會夜也俗人候之或見天漢中見熒々
白氣壽（歲客反 美容也）光耀五色以爲徵應見者使拜而願乞富
乞壽乞子
源 たなはたの逢瀬は雲のよそにしてわかれの庭に露そ
おきそふ　秘　わふせは雲ゐはるかにて紫上にわかれ
しときのこゝろはたえさるとなり　逢事は雲井は
るかのよそなるに今朝のわかれの庭の露は一入お
きまされりとなり紫上のわかれをこれにもおもひ
出たる故なり
風の音さへたゝならす　弄「秋は猶夕まくれこそた
たならね荻の上風萩のした露　河　此歌のこゝろも
あり
いまゝてへにける月日よと　河「人の身もならはし
物を今まてにかくてもへぬる世にこそ有けれ　秘
箋聞引之
御正日にはかみしもみないもゐして　河　正日とは四
十九日をいふなり但是は周忌なりいつれも佛事の
日をいふなり　齋（イモヰ）齋食なり總しては正日と
は四十九日をいへりこゝには周忌をいへり箋同之
よゐの御おこなひに御てうつ　よゐのおこなひは初
夜なり待夜なるへし御手水也
中將君 君こふるなみたはきはもなき物をけふをは何のはて
といふらん　「我身にはかなしきとのつきせねは昨
日をはてとおもはさりけり道信朝臣（任イ）　私かきりあ
れはけふぬきすてつ藤衣はてなき物は涙成けり
源氏 人こふる我身も末になりゆけはのこりおほかるなみ
たなりけり　我身は末になりたるに涙はのこりおほ
きなり中將君の歌を扇にかきつけたるをとりて御
らんして源のかくかきそへ給ふなり
源氏 わたおほひたる菊　弄　此故事可勘之
もろともにおきゐし菊の朝露もひとりたもとにかゝ

る秋かな　河「（同五）あくるまておきゐる菊の白露（しイ）はかりの世思ふなみたなりけり「（後撰）もろともにおきゐし菊の露はかりかゝらん物と思ひかけきや　ことなる義なし

ふりしかとひとりこちおはす　秘弄箋聞引歌河海に同　河「神無月いつも時雨はふりしかとかく袖ひつるをりはなかりき

雲井をわたる雁のつはさも　箋雁のつらをはなれぬを云秘

（源氏）おほそらをかよふまほろし夢にたにみえこぬ玉のゆくへたつねよ　花雁の使を方士に比するなり　此歌俗の名なり　河まほろしは幻術の事なり幻術者をまほろしといふなり　花此歌の心は蜀の方士か楊貴妃に尋ね逢たりし事なり方士幻術士の總名也雁のつはさもうらやましくといへるも彼方士か碧落をきはめて奔こと電のことしといへる心歟箋　私長恨歌に魂魄曾來夢不ㇾ入とある心なり　秘雁ををまへて幻術士に比するなり方士は飛行自在なる事をいへり貴妃か心なり

五節なといひて　十一月になれり

殿上し給て　秘童にて昇殿なり

おなしほとにてふたり　箋二人なから雲井雁腹也一人は源宰相中將一人は童と云なり七郎君也

御たちの頭中將藏人少將　致仕大臣男頭中將五男藏人少將六男同紅梅弟也　秘雲井雁の弟たちなるへし

をみにてゐをすりのすかた　河小忌靑摺　山藍摺なり　花十一月中の卯日新嘗會辰日豐明節會には山あゐにてすれる小忌といふ物を着するなり一代一度の大嘗會にてかくのことし

いにしへおやしかりし　河乙女卷にむかし御めのとまりしをとめすかたと有し事なり　筑紫の五節の事なとなり箋　秘つくしの五節に文やり給ひし事也箋　弄五節女の事すまに音つれし人さすかに覺し出るは萬思ひ捨給へともとなり

（源氏）みや人はとよのあかりにいそくけふ日かけもしらてくらしつるかな　秘日蔭のかつらによせていへり我身は月日の行ゑもしらさるなり　弄日蔭のかつらによせて月日の光もくれたるとなり日かけはかつらによせて糸をむすひて付るなり

いまはと世をさり給ふへきほとちかくおほしまうくるに　聖人避世事和漢之先蹤不可勝計光源氏隱居の事此詞等に見えたり　花　光源氏隱居の事此詞等に見えたり　秘　嵯峨院に隱退し給へる事宇治宿木卷にいたりてみえたり箋

やれはおしとおほしけるにや　秘箋弄閒引歌同「やれはをしやらねは人に見えぬへしなく〳〵も猶かへすまされり

かの御てなるは　秘　紫上の手跡なり

千とせのかたみにしつへかりける　河　六帖「かひなしと思ひなわひそ水莖の跡そ千とせのかたみなりける　私箋弄閒引此歌

過にし人の跡　弄　清少納言枕草子にむかし戀しき物にゐかけり

御なみたの水くきになかれそふを　涕與翰俱悲歎且吟曰黃壤詎知我白頭徒念君唯將老年淚一灑故人文　集元少尹文集序　文集一九十八　箋聞引之

源氏してのの山こえにし人をしたふとて跡を見つゝも猶まとふかな　河　してのの山四天の闇なりみとまと五音通するなり云々　十王經文云死天山門集鬼神云々花

鳥にあとは筆跡の事なり　うつほの物語菊のえんに私箋同之「古の跡をみつゝもまとひしを今行すゑをいかにせよとて

それとほの〳〵みるに　紫の手跡を女房なともみしりてかなしむなり

この世なから遠からぬ御別　箋　すまの事なり

せきあへぬかなしさ　イ本　すまのせきあへぬかなしさありて紫上の御文ともすまにての事なれはかくはかけるなりとあり　三本すまの字無之

めゝしく　河　月たゝしく歟或云女々し　秘　女々しきなり　弄箋聞　花　やとりきの卷にも此詞あり

源氏かきつめて見るもかひなしもしほ草おなし雲ゐの煙となれ　秘　かきあつめてなり　紫上のおもし雲井の煙となれとなり

御佛名もことしはかりにこそは　河　光仁天皇寶龜五年始之云々　見官東事須自十九日至廿一日或撰吉日　或天長七年十二月始有佛名　或仁明之承和二於淸涼殿修之　貞觀格云太政官府應行佛名懺悔事　佛名經記云並禮一切十方三世諸佛三塗苦息國豐民安云々　以上箋秘

黃ム之佛名經庄嚴劫千佛賢劫之星宿劫之以上三卷

あり
しやくちやうのこゑ〳〵なと　河錫杖經曰錫杖亦名
智杖彰顯聖智也又名德行功德本故也　佛名夜初日
後夜御導師着禮盤唱佛名畢錫杖又第三夜錫杖彼藏
人受取内侍出綿被於御導師弟子僧等箋載之
ゆく末なかきことを　秘佛名の導師の源氏の行末を
祈る聲なり
佛のきゝ給はん事かたはらいたし　源のやかて御世
をそむかんとおほす故なり
たうしのまかつるをおまへにあらて（めしてイ）さか月なと　河
禁中御佛名第二夜被被着柏梨第三夜内藏寮酒肴薯
蕷等なり箋　花禁中佛名の第二夜に柏梨の勸盃と
いふことあり昔左近中將和氣某以攝津國柏梨庄寄
左近府官人の酒料にあてたりこれにて佛名の夜左
近府にて勸盃の事あるなり　箋
ことにろくなと給はす　花延喜十九年佛名導師雲晴
律師賜御阿古女天暦四年佛名導師淨藏三禮之間自
簾中給御衣　箋
かしらはやう〳〵色かはり　秘白頭夜禮佛名經の心
あり　弄樂天句也

時によりたる物うちすし　秘朗詠なとなるへし　箋
源氏　はるまての命もしらす雪のうちに色つく梅をけふか
さしてん　秘色つく梅は漸ひらくるなり　まことや
とは忘れてふと云出したるなり
返御導師　千世の春みるへき花といのりおきて我身そ雪とゝも
にふりぬる　源氏を祝して我身そふりぬるといへる
なり　三條右大臣集延喜十九年十二月十九日内の
御佛名の御導師にて雲晴法師まいりて侍けるか其
夜御遊有けるにめしいたされて侍けるを賀して御
かさしたてまつられけるついてに奏しける「雪の（のイ）
うち山のふもとに雲晴てさきたる花はちるよしも
なし　御門この歌を雲晴に給はすとて「あちきな（下イ）
し春をみるとてかへるさに道やまとはん山のしら
雪　貫之集屏風歌佛名のあしたに導師のかへるに
人々あつまりて雪梅をもてあそふ法師をとこれり
たちてある程に雪ふりかゝれる梅をゝる「梅花折
しまとへはあし引の山ちの雪のおもほゆるかな
その日にいてゝ給へる　秘此程はこもり居給へるか
けふはしめてとさまにいてゝ給ふとなり　弄箋
わか宮の　秘匂ふ宮なり

なやらはんにれとたかゝるへき事　河 爆竹驚燐鬼驅儺聚小兒東坡　追儺儀禁中　亥一剋左右近立陣即開承明門不開長樂永安　儺人等參陰陽師奠祭讀呪文畢方相先作儺聲以戈擊楯如此三反群臣相承和イ叫呼追之侍臣相分殿內并四方驅逐尤靡方也相入自仙華門經御殿出自北廊畢羽林抄　內藏寮儺木振鼓を奉る剋限殿上の男女房にわかち給いさゝか動搖あり委見紅葉賀卷註榮花物語之圓融院のうへわらはにおはしませはつこもりのついなにふりつゝみしてまいらせたれはふりけうし給・

源氏 物思ふと過る月日もしらぬまに年もわか世身イもけふやつきぬる　河「物思ふと過る月日もしらぬまにことしもけふにはてぬとかきく　秘 敦忠歌の上句其まま用るなり　箋 上句敦忠歌に同古歌を取なして誦せし心なり

ついたちのほとの事つねよりことなるへくとおきてさせ給ふみこたち大臣の御ひきいて物しな〳〵のろくともなとになうおほしまうけてとそ　河 六條院拜禮の事歟今年世をさり給へき名殘にことに結搆せられける歟　聞 これは來年の事をかねていふなり

秘 院の拜禮今年はかりなるへしとて用意あるなり
箋の義おなし

岷江入楚第四十二　雲隠

此巻は有其名無其詞源氏君崩し給ふ事を此巻にこめ侍るなり㭨紫明抄に六條院を頓滅といへるは僻事なり幻巻に世をさり給ふへき心まうけをし給へる事うたかひなきうへやとり木の巻に故院二三年の末に世をそむき給へる嵯峨院といへり六條院さかの院にうつりすみ給へる事かれこれその證據分明なり其趣は河海抄なとにもあらあらしるしつけられ侍り源氏君の事は今年にとゝまりぬこれよりのちはかほる大將の事を年立にかき侍る成へし

薫

六歳
七歳
八歳
九歳
十歳
十一歳
十二歳
十三歳

かほるの六歳より十三までの事は物語の中に所見なし六條院隠居嵯峨院事並光かくれ給へる事此八ケ年の中にこもり侍るへし

雲隠　有二巻名一無二其詞一義諸抄に見えたり

河巻名雲隠と名付る事　匂兵部卿宮巻に光かくれ給ひにしといへる其心歟

一雲かくれと名つくる事　此巻はもとよりなし只名をもて其心をあらはす也此名題にて六條院光かくれ給ふ心しらるゝ也此詞代々の集にもあまたあれとゝ萬葉集に人の逝去するをみな雲かくれといへり萬一弓削皇子薨時置始東人歌「大君は神にしませはあま雲のいほへのしたにかくれ給ひぬ　萬二大伴皇子被死時作歌「もゝつての岩ねの池になく鴨をけふのみゝてや雲かくれなん　神龜六年左大臣長屋王賜死之時作歌「大君のみことかしこみわほあらきの時にはあらねと雲かくれます　天平七年大伴郎女新羅尼理願死去悲嘆作歌「とゝめえぬ命にしあれは敷妙の家より出て雲かくれにき　此外ふなし作者の歌にも此詞あり逝去の事にあらさ(まて本)るなり「めくりあひてみしやそれともわかぬまに雲かくれにしよはの月哉

一名はかりを聞て巻をみぬ事　天台所立四教三蔵教通教別教円教例　四門　有門空門非有非空門亦有亦空門　有門の得道は毘曇論に説り空門得道は成實論にあかせり非有非空門は迦旃延經に説亦有亦空門は毘(勒イ)勒論にあかせりときけとも此經論天竺にとゝまりて漢土に持來せすしかるを大(よイ)師有門空門の義にとりていまた經論を見さるに圓別の二教を判し給ふ不思議是なり今の雲隠の巻も作者の胸中にとゝまりて世につたはらすやなりにけん詮する所六條院崩御をあらはにいはすして此巻の名にこめたる猶甚深の義たるにや凡上古の名賢の中に終のやうを人しらさる事武内大臣以下其例おほし本朝の神仙傳なとにもおほくみえたり又好色の道の先達業平朝臣芳野川の河上の石窟てんの川に入定しけるよし彼所の縁起にみゆと云々

箋云源氏不知終とは不可謂之此例あたらす

一六條院頓滅の事　黄帝の天にのほりしに比擬すると中古の先達申ける物語のおもてに所見なし今案ときこえたり宿木の巻には薫大將の詞に故院うせ給ひて後二三年はかりの末に世をそむき給ひし嵯峨院にも六條院にもさしのそく人の心をさめんかたなくなん侍りけるといへり世をのかれて嵯峨院に隠居し給ふときこえたり且雲隠巻とて一帖あ

る上はその卷中の文をはかりかたし其間に朱雀院螢兵部卿宮致仕太政大臣髯黑大臣以下の人々多うせられたり何とて六條院はかりを頓滅とはいふへきにや又兵部卿宮薫中將幻卷の春無下に幼稚とみえたり三四歳（十四歳にてイ）歟匂兵部卿卷に皆元服あり中將侍從とみえたり是らにておもひあはすへし　箋此河の義正說也　花云此卷は名のみありて其詞はなしもしその詞あらは六條院の昇遐の事をのすへきによりて雲かくれとはなつけたり幻卷の終に越年の用意ありしか其程に六條院は頓滅し給ふをかの卷にしるせるよし紫明抄には申侍れと宿木卷に六條院世をそむき給ふて二三年はかりさかの院に隱居し給へるよし見えたれは此詞にて頓滅の事は河海にやふられをはりぬ幻卷には薫大將は。（四イ）五歳の時也匂兵部卿卷の始にひかりかくれ給ひしのちといふ詞あり匂宮の卷にはかほるは十四歳なり故に薫の六歳より十三までの間八ヶ年の事は物語のおもてにはみえ侍らすしからは雲かくれの卷の中にさかの院に二三年隱居して其後崩御し給ふ事を此卷に詞あらはししるすへき也抑此卷の名はかりありて詞をみぬことは天台の四教の法門を例に引たれとなほ物ときほき心ちし侍り俗書をもていはゝ毛詩の小雅の中に南陔白華々（稱イ）黍由庚（康イ）崇丘由儀の六篇は篇の名のみありて詞はなし是は逸詩といひてもとは詞ありしかうせたるなりこれによりて東廣微といひし人詞をつくり入て補亡の詩となつけ文選の第十九の卷にのせたり朱晦菴は笙の詩といひて樂曲の名なれはその詞はもとよりあるへからすと釋し侍りいかさま篇の名のみありて其詞なき事は雲隱の卷の名のみありて其詞なきとおなしかるへし

箋毛詩第九南陔は孝子相戒て以養也白花は孝潔白也花黍は時和歲豐にして宜黍稷也有其義而亡其詞也曰庚は萬物得由其道也崇云萬物得極其高大也由儀は萬物之生各得其宜也

一弄云雲隱は有卷名無之其詞儀諸抄にあり　河に卷名匂兵部卿卷にひかりかくれ給ひにしといへる其心歟是より前のイ本になし

弄雲かくれとは人の逝去をいへる詞なり萬葉に人の逝去の時の歌「留めえぬ命にしあれは敷妙の家よりいてゝ雲かくれにき　もゝつての岩ねの池に

なく鴫をけふのみ見てや雲かくれなむ　此外不可勝計されは此巻雲かくれと云名は源氏薨しましましゝことのは（こゝろを以てイ）をもつて付る名也隠居雲かくれ同事なり源氏のみならす幻と匂宮との巻の間八ヶ年の内にあまたの人うせ給ふ事を皆此巻にこめたりさて其巻の名はかり有て詞みえぬ事は天台に有門空門亦有亦空門非有非空門此四門の有門の得道は毘曇論にあかせり空門の得道は成實にあかせり非有非空門の得道は迦旃延經に説亦有亦空門の得道は毘勤論にあかせりといへとも迦旃延經毘勤論は天竺にとゝまりて漢土に不來然を大師有門空門の義に執ていまた經論をみさる事をゝくはしくあかし給へり又毛詩の小雅の中に南陔白華々黍由庚崇丘由儀の六篇は篇の名のみありて詩の詞はなしこれは逸詩といひてもとは詞ありしかうせたるなりこれによりて東廣微といひし人詞をつくりて補亡の詩と名つけ文選の第十九（ナイシ）にのせたりいまの雲隠巻も作者の胸中にはあるへし然とも六條院の崩御をあらはにいはすしてこの巻の名にこめたる所甚深奇特の作者心歟凡上古の名賢の中に終のやうを人しらさる事武内大臣以下其例多し本朝神仙傳なとにもおほくみえたり又好色の道の先達業平朝臣は芳野川の川上石窟てんの川に入定しけるよし彼所の縁起にありと云々然らはかやうの心にても終をあらはさすやされは此物語好色をあらはし花鳥風月をもてあそふといへとも仁義禮智信を専にして人の善惡のをしへたり又天台空假中と亦有門亦空門の四門を底にふまへて盛者必衰の理をあらはし桐壺の御門より初めてとり分紫上源氏一期の間御榮花かきりなしといへともはては雲隠なり只此心をもて諸人に佛道をすゝめん爲の義此物語の本意と云へきにや天台所立四教一には三藏教二には通教三には別教四には圓教なり此内三藏は界内の事を教通教は界内の理を教別教には界外の事を教圓教は界外の理を教と心うへし是從淺至深の次第也是は法門の心得也源氏の事に非す此四教は華嚴阿含方等般若法花涅槃五時を四に分て沙汰したるを四教といへり六なれとも涅槃を法華に入る也法相には五時を三に分る也四教に有門空門非有非空門亦有亦空門をあつる也三教にいつれにも四門なから

ありといへともとり分て其時は三藏敎に有門の心あり通敎に空門圓敎に非有非空門別敎に亦有亦空門有門得道は毘曇にあつる也然に空門の得道をは成實と云にあかせり非有非空門は迦旃經に說り亦有亦空門は毘勒論にあかせりと聞けとも此經論は天竺にとゝまりて漢土に將來せす然を大師有門空門の義に取ていまた敎論を見及はさるに敎を判し給ふ是不思議なり

又同弄花匂宮卷の端に遮二隱居一（雲隱イ）今書此所了　又云雲隱と名付る事萬葉歌に有　有名無實事天台四門に譬之在河海　空假中事有源氏物語中此物語作物語なれは空道也又比延喜等者二假締なり　雲隱は中道也釋尊五時敎同此物語示レ人意也又五十四帖皆亦空之意也又源氏雲隱之後嵯峨院に住（佛イ）給ふともいへり是は又亦有亦空也　此物語先書好色道終示仁道之意可見水波之譬有之　又云雲隱事此物語中（說イ）貴人美色等無常之體哀情多之自故桐壺至紫上既事盡了故ニ光源氏之終焉（定イ）不言之若書之者可爲言語道斷也又無珍氣仍雲隱卷々中讓之也云々又秘抄に幻卷與此卷の間九年成へし薰の年幻卷まて五歲也六歲より十四歲まて九年なり云々又秘抄雲隱事別に不註之匂宮卷端に聊載之今此所に書加之　抑第廿六に雲隱卷あるへき事古人は難義とせり然れとも別義河海花鳥にくはしくしるさる雲隱といふ事人の逝去の事にのみ古來用來れり禁忌すへき詞なり但作者の式部歌に雲かくれにし夜半の月かなとよめるはあなかち哀傷にあらさるなり凡此物語は河海にもいへることく天台の法文にてかけり作物語なる故に空道なり桐壺帝を延喜帝に比する等の類は假締也此雲隱は中道也釋尊五時の敎此物語のうちにそなはれり五十四帖皆亦有空門の心也好色の道も終には佛道に歸するなかたちなりと也畢竟此雲隱は名はかりにて不書之說最可然其故は先物語一部の中哀情をかける人さま〳〵にて事つきたり此外に源氏崩御の御事をしるさは言語も及ふへからす又おなしさまの事なるへし仍畧之作者の趣向玄之玄なる者也幻卷と此匂宮卷との間九年成へし此卷よりは薰八年齡にて年紀を立る也幻卷にては五歲也今年十四歲にて元服の事有六歲より十三歲迄の事は雲隱の中にゆつりたる也總して寄生の卷にて

年紀雜亂せり別に記せり花鳥に十四歳より十九歳までを載たりとあれとも廿歳の春迄の事みえたり
イ又秘抄に雲隱の事別に不注之匂宮の巻に抑載之今此所に書加之
箋此抄同しく匂兵部卿宮卷の端に被載之又今書加之畢　薫自六歳至十四歳八ヶ年之事漏脫了　此九匂宮卷なりヶ年之事可有雲隱卷之中也其故は幻卷は廿五此卷は廿七也此中間に第廿六雲隱と云卷の題號を立て爰には其卷を不書是則筆者の妙術也源氏一世の行狀德厚く譽高く才智人に勝れ繁華世に越たり然は其身終之有樣普通の義を以ては不可符合也司馬遷班固范曄溫公も筆力不レ可レ及縱或木食草衣隱遁修行之儀雖レ如二佛在世之時一無其奇特若又現二神變不思議一者人不可信之或入滅之時聖衆如星列紫臺の雲を引て親來迎の相を示さんも其は目馴て尋常の物語に似たるへし八天悲を成し五十二類悲號啼泣の想は佛の涅槃に盡たれは是又事舊たり若又登仙換骨の共に形骸不レ留と云共頗可レ似二虛誕一依之同文を所レ不レ及一言之處却而尼善盡美者也惣別此物語哀傷及數人桐壺更衣夕顔上葵上柏木六條御息所紫上大君等也薄雲桐壺帝本になし私入之是等に皆事盡たれは大方の筆力にては不可符合乍去此上をも一

廉の文章を輝すへき事は式部か手の裏に有と知へし筆不及して文を闕すとは不可見一切の事不言の處に妙處有と云事を示す義也維摩一默則千言萬答是也　有二卷名一無辭之例　花鳥毛詩第九　南陔は孝子相戒て以養也白華は孝子潔白也　華黍は時和歲豐宜黍稷也有其儀而亡其辭也　由庚は萬物得由其道也　崇丘萬物得極其高大也　由儀は萬物之生各得其宜也　有其義而亡其辭也　花鳥此六篇有レ名無辭此曰二逸詩一古有レ辭而紛失致レ之東廣微作補亡詩　文選第十九詩中云　補亡詩六首東廣微作注東晳字廣微陽平人晳與同業之疇人之鐘備卿欽然所詠之詩或有義亡辭音樂所節闕而不修於是遙想既往存思在昔補著其文以綴舊制晉書云晳覽周武王詩有其義亡其辭惜其不修故作辭以補之云々　花鳥來晦菴は爲樂曲之名故元來其詞不可有之と釋すと云々
河海聞レ名不見卷事　天台四教三藏通別圓　四門有空非有非空亦有亦空　有門の得道は毘曇　空門得道は成實を明す非有非空門は迦旃延經說亦有亦空門は毘勤論に明す　此經論天竺に留て漢土に不持來然るを大師有空義に依て未レ見二經論一之以前に圓別二教を判し

給不思議也云々　弄花云此〈比イ〉空假中三諦〈締カ〉事依ニ作物語ニ無實是空締也以桐壺帝比延喜之類是假締也此雲隠巻無言無説之處是中道也　一代五時之教此物語之深意也　河上古名賢の中に不知其人之終事

武内大臣　本朝神仙傳其例多云々　業平朝臣芳野川上石窟中に入定之由見縁起云々　箋源氏は不知終とは不可謂之此例不當也

又一説云六條院は頓滅し給ふ也黄帝の天に登しに擬すと云々

河海云此説中古先達の今案也不可用之宿木巻ニ薫大將の詞故院うせ給うて後二三年はかり末に世をそむき給ひしさかの院にも六條院にもさしのそく人の心おさめんかたなくなん侍けると云々世を遁て嵯峨院に隠居し給ふときこえたり然れは雲隠巻の中の久近測り難し此巻の中に　朱雀院の崩御兵部卿宮蛍仕相國髯黒大臣以下薨去然は六條院崩を頓滅と云へきに非すと云々箋云此河の説正義也

雲かくれと云詞事・此詞多くは人の逝去の事に古來より用ひ來れり禁忌の詞成へし但此作者式部か歌に「めくり逢てみしやそれともわかぬまに雲かくれにしよはの月かな　此歌非哀傷　又金葉第九堀川院の御時源信重か式部丞申ける申文にそへたる歌「日の光あまねきそらのけしきにも我身ひとつは雲かくれつゝ此歌又非哀傷　所詮吉凶共に用る詞と見えたり然共此雲隠巻に於ては哀傷心に用たり其例繁多也　河萬葉　弓削皇子薨時東人歌「大君は神にしませはあま雲のいほへの下にかくれ給ひぬ　河同　大伴皇子被死時「もゝつての岩ねの池になく鴨をけふのみゝてや雲かくれなん河同　神龜六年左大臣長屋王賜死之時「大君のみことかしこみ大あらきの時にはあらねと雲かくれます河同　天平七年大伴郎女悲歎新羅尼理願死去作歌「とゝめえぬ命にしあれは敷妙の家よりいてゝ雲隠れにき　此外繁多　私箋聞書此雲隠巻其詞なき故に何程ありとも知かたし先は八ヶ年の間にあまたの事をこめたり凡此物語は六十帖といひならはせりさて流布する處は五十四帖なり然れは此巻に若菜なとのことく上下有へきやらん又上中下と有へきやらんもしらすさて雲隠の一二なと冊數あまたあらんもしりかたし又の夢のうきはしもかきさ

したるやう也されともこゝにあまたのことをこめ六十帖の數をも思ふへしことに毛詩のその名ありて辭なき篇六篇也此物語も六册かけたり其心もおもしろきかゝやうの事をは心にこめてこゝにかきあらはさぬ所の作者の筆法物語の餘情をよく〳〵思ふへしとそ侍し其外は諸抄に計書のせられたる外の事なけれはもらしぬるになん

岷江入楚第四十三　匂兵部卿宮

私云此卷より以薫君年立也
十四歳　四位侍從　匂宮十五歳
光隱後御方々御處分事
三宮御元服之後號兵部卿宮事
夕霧右大臣奉渡一條宮於花散里艮町事
一條宮與三條殿每月十五日通住給事
薫君爲冷泉院御猶子於院元服事
十五歳
今年二月任侍從事
十六歳　秋任右近中將又任宰相
秋源侍從任右近中將事秋は秋の除目に任中將也十四の年の秋にはあらさるへし
院御給加階事
源中將冷泉院中設曹司事
母女三宮修念佛御行事
源中將疑吾身非六條院御子之事
源中將靈香事
匂兵部卿宮愛花香給事
十七歳
十八歳
十九歳　秋任中納言
薫宰相中將敍三位事
此卷の詞に云十九になり給ふとし三位の宰相にて猶中將もはなれ給はすと云々此心は宰相中將にて此ほとありしか三位になり侍れは宰相も中將も猶もさのことくのよし也そのゆゑは宰相は四位の相當の官なる故也宰相の中將といはれし事は橋姬の卷のはしめに見えたり
匂宮思念院女一宮給事
薫中將參三條宮給事
夕霧右大臣以藤內侍腹六君爲一條宮養子事
於六條院被行賭弓還饗事于時夕霧大臣兼左大將也

匂兵部卿宮　或匂宮一名薫中將以詞爲卷名河海に物語にれいの世人はにほふ兵部卿宮かほる中將とききにくくいひつゝけて云々箋依之有二兩樣之名一　花鳥に雲隱の後は薫大將の年齡をもて年記を立へし此卷にはかほる十四歳にて元服して始て侍從に任し十九にて宰相中將といはれしまて六ヶ年の事をのせ侍り　秘に卷名以詞號之兵部卿宮とも又薫大將なともいへり抑第廿六に雲隱卷有へき事古人は難儀させり然れとも無別義河海花鳥等にもくはしくしるせり雲隱といふ事人の逝去の事にのみ古來用來れる禁忌の詞とすへき也但作者の式部歌に雲かくれにし夜半の月かなとよめるはわなかち哀傷にあらさる也此物語は河海にもいへることく天台の法文にてかけり作物語なる故は空道なり桐壺帝を延喜帝に比する等の類は誂（假締イ）譸也此雲隱は中道也釋尊五時の敎此物語のうちにそなはれり五十四帖皆亦有門亦空門の心也好色の道も終には佛道に歸する中たちなりと也畢竟此雲隱は名はかりにて不書の說可然其故は物語一部のうちに哀傷をかける人樣々にて事つきたり此外に源氏崩御の事をしるさは言語も及へからすまた同しさまの事なるへし仍略之作者の趣向玄之玄者也　幻卷と此匂宮の卷との間九年なるへし此卷よりは薫の年齡をもて年紀をたつる也幻卷にては五歳也今年十四歳にて元服の事あり六歳より十三歳までの事は雲隱の中にゆつりたる也然（惣イ）してやとり木の卷まて年紀雜亂せり別にしるせり花鳥には十四歳より十九歳まてをのせたりとあれとも廿歳の春までの事見えたり　弄花此卷幻卷の次年より薫二月に元服とあるまて九ヶ年也薫は幻に五歳此卷の始に十四歳とあり此卷の末は廿歳のはるの事也薫十四歳にて二月元服その秋中將に任す又十九歳にて三位宰相に任する事あり以下の並卷並宇治に置ては此卷に混亂せる所あり別に抄物あり先雲隱卷の事をの給ふ　此儀別に一冊に載之仍略之又秘にあり

光かくれ給ひし後　河六條院崩給なり箋　深草のみかとの御國忌に文屋康秀　古「草深き霞の谷に影かくしてる日のくもるけふにやはあらぬ　花光君嵯峨院に隱居し給うて二三年後つゐに昇遐し給ひしことをいへり箋　秘源崩御の後をいへり　箋尊號

の後は崩御といふなり
その御かけに立つき給ふへき人　花　源氏君の容儀才能心操德化を請つくへき人御子孫の中に無之なり
箋
そこらの御末々に　秘　夕霧の御末なり　箋　夕霧の御子多けれとも及へき器量は一人も不及見なり
おりゐのみかとをかけたてまつらんはかたしけなし
花　是は冷泉院の御事なり源氏の御子といふ事此詞にも見えたり　秘　冷泉院を源氏の御末と申さんは隱密の事なれは是をさしおくとなり箋弄
當代の三宮　箋　匂宮なり　源の御孫　明石中宮腹也
おなしおとゝにておひ出給ふ宮の君　秘　女三宮腹の薫なり　箋　薫なり二品宮の御腹なれは宮腹（たちイ）につゝきて宮の若君と稱するなりれなしおとゝは六條院を云也匂も薫も一所に養育といふなり　花　三宮は匂宮なり宮の若君はかほるなり二品の宮の御腹なるによりて宮の若君と云りともに六條院にておひ出給へるなり三君は源氏の御孫宮の若君は御まゝ子なれは系圖には御子のつらにかきのせ侍るなり
河　おなしおとゝとは同殿也

いとまはゆきゝはには　箋　今の世には拔群なれとも昔源の世に比校せは可爲雲泥となり是も作者の批判の語なりよきにもすくれたることなり　秘　拔群の人にはあらすとなり
たゝよのつねの人さまにめてたくあてになまめかしく　箋　此匂とかほるとは普通にすくれたる人さまなれはあしからぬを根本として源の御末々はいか樣一かと有へしと思ふゆゑに源氏の幼少におはせし其時よりも世のおほえはまされるなり
さる御なからひに人の思ひきこえたる　秘　源氏御末なとゝ人の思ふ故に源の幼少の御時よりは人のおほえこよなしとなりこれも源氏の御威光故となり
いにしへの御ひゝきけはひよりも　花　源氏君のきりつほのみかとの御時の御もてなしよりはまされりといへる也　弄　源をは太后なとのそねみ給ひし故なり　源はもちて出たる德なりされはそねむ人もあり又おほえのある事もおほかりしなり是は源の御末なる故におほえはまさりたるなり其人の德にはあらす源の威光のなこりとなり
おほえからなん　弄　まつは人のおほえからにもいつ

くしさなり　箋此一句奇妙なり源のなき跡まて威光か殘りて人のおほえのあると也匂薫の自分の德の厚にはあらすとなり　桐壺卷にかゝる人も世に出おはする物なりけりとあさましきまてめをおとろかし給ふと云々此ことくには匂も薫もおはせぬに世のおほえのまさるさまなるは彌末かするゑまて源の威光のつよきと云へき爲也　總別世上もかくのことし名を得る事は苦身を積て後の事なるを名賢の跡を相續の人は其まゝ世のおほえをうる物なり是は先賢の德のかうはしき故なり後人の手からにあらすと也

春宮をはさるやんことなき　箋朱雀院の御孫今上第一皇子明石中宮御腹

みかときさきいみしうかなしう　今上明石中宮なり　弄匂宮をとりわき御愛子のよしなり秘

心やすきふるさとに　秘二條院なり

女一宮は六條院のみなみの町の東のたいに　花女一宮は東宮と御一腹紫上にやしなはれ給うて六條院の東の對に其世の御しつらひあらため住給へるなり　弄紫上の御方に女一宮のおはしますなり

朝夕にこひしのひ　紫上の事又源なとにても有へし　箋式部卿宮なり

二宮もおなしおとゝのしん殿を　秘匂宮の同胞の兄なり弄　花二宮も東宮も御一腹梅壺を御曹司にて時々六條院の寢殿を御休所にして夕霧の右大臣の中君をむかへ給へるとなり　秘中君は雲井の雁はらなり

右のおほいとのゝ中（イナシ）ひめ君　秘夕霧なり弄

つきの坊かねにて　河后かねなと此物語にもあり其器用なり　花今の春宮御位につき給はゝ此二宮又坊にたち給ふへきなりかねは后かねなといふかことし　弄夕霧なり

大とのゝ御むすめは　秘夕霧也　箋夕霧女子六人あり

ついてのまゝにこそはと　秘此匂宮へもまいり給ふへしと人々思へり　弄大姬君は春宮へまいり中君は二宮へ參る其次なり

きさいの宮も　明石中宮なり

此兵部卿宮は　弄匂なり　十五六歲にや　夕霧の息女の事なり

わか御心より 秘 好色の故なり 箋
おとゝも何かはやうの物とうるはしう 箋 同様の物といふなり秘 花 様の物は様の字なりためしともよめりうつは物に様器と云は本様の器なり正本のあるにつけていへるなりおなしものといふにその心たかはすたとへはそのやうにといへるかことし上の詞によりて見るへきなり 弄 うるはしくは實にあるへき事をいふ様に用る事あり其心なるへし 秘 まことに有へき事なといふかことし
又さる御けしき 又されとも御所望あらんを參らせすはわらしとなり
六の君なんそのころの 花 夕霧の御女内侍のすけの腹なりやとり木の卷に匂ふ宮の北方になり給へるなり 秘 やとり木卷に匂へ參らせ給へり 箋 大臣女兄弟三人　主上の御連枝相並祇候之例

右丞相師輔公
　├安子中宮　村上后
　├登子尚侍　重明親王上
　└三君　高明公室

さま〳〵つとひ給へりし御かた〳〵 花 六條院につとひ給ひし源氏の御おもひ人たちを云 秘 六條院の人々なり弄
おはすへきすみかともに 人々ちり〳〵に住はなれし事を云
ひんかしの院 秘 二條院の東院なり弄 弄 源氏の時うつせみ末つむなとありし所なり 箋 最前に花散里のすまれし所なり
入道の宮は三條の宮に 女三宮なり 秘 三條宮は朱雀院より給はり給へり前に見えたり
今きさきは内にのみ 秘 明石中宮より秋好にまきらはさしとて今の字をくはへたるなり弄
院のうちさひしく 箋 六條院なり
いにしへのためしをみきくにもいけるかきりの世に心をとゝめてつくりしめたる家ゐ 箋 花清宮之類漢家本朝一榮（樂イ）一盡みなかくのことし 其中（內イ）にも東六條の融公の河原院を思ふなるへし
世のならひもつねなく 秘 門前零落鞍馬稀也の心なり
うしとらのまちにかの一條の宮を 落葉宮なり 秘 花散里の住給ひし方なり箋
三條殿と夜ことに十五日つゝ 秘 雲井雁なり 夕霧

三條宮に住給ひしなり　花夕霧のおとゝの雲井雁と落葉宮と十五日つゝかよひ住給ふ事なりうつほの物語櫻のうへの巻云左のおとゝはいとうるはしうこそ十五（日イ）夜つゝおはしつれと云々　箋此うるはしくといへるはまめ人の名をとりてといへるに合て見るへし

たゝひとり末のためなりけりと　秘明石上方の人はかり殘り給ふつる宿縁なりけりと弄にみえたり二條院には匂宮六條院には女一宮二宮なとの住給ふる事なり花同　但人ひとりとは明石中宮也云々箋曰中宮ならは御ためとあるへし是は明石の上なりとあり　秘次の詞に明石の御かたとあり

大ゐとのはいつかたの事をも　夕霧なり源の御おきてのことくに偏頗なしとなり

たいのうへのかやうにて　秘紫上のあかしの上なとのことくしてましまさぬ事くちをしく思ひたまふなり箋

とにかくにつけても　河左右（トニカクニ）史記箋

世はたゝ火をけちたるやうに　河佛此夜滅度如薪盡火滅　法花經箋

かきりなき御事をはさる物にて　箋源の御事は中々申にをよはすとなり

またかの紫のさまを心にしめつゝ　箋こまかなりし御心さまは源よりも猶人のし（思イ）のひつへきにや

春の花さかりはけになかゝらぬにしもおほえまさる物となん　河古「殘りなくちるそめてたきさくら花ありて世中はてのうけれは　花鳥同引之　秘同引之　弄河海花鳥に殘なくちるの歌を出す如何「まてといふにちらてしとまるものならは何を櫻に思ひまさましまさると云詞あれは此歌もまさるとあれはなり　私弄の引歌如何殘なくの歌可然歟　箋花もし住常ならは誰賞ㇾ春乎　古引歌殘なくちるそめてたき云々　古「いさ櫻われもちりなん一さかりありなは人にうきめみえなん　「よしさらは散まてはみし山さくら花のさかりを面影にして爲家　箋此詞おもしろくかけり

二品の宮のわか君は　秘かほるなり

院のきこえつけ給へりしまゝに　源の冷泉院へ申おき給へるなり

后のみやもみこたちなとおはせす　秘秋好なり　源

氏薫の事を申おき給ふなり
十四にて二月に侍従になり給ふ　花薫元服し給うて十四歳の二月に侍従に任す中將には十六歳にてなり給へるよし末の巻にみゆ爰の詞に同年の様にかきたれと昇進の次第をかうかへ侍れはまことは十六歳の秋除目に中將に任し給へる也　秘花鳥に十六歳の秋除目に中將の任すと云々いかゝこれは竹川巻にて年紀の相違ある故なり但十四歳の秋中將に任する義可然かとなり
秋右近中將になりて　弄中將とかきて又兩三年をへて後の巻に侍従とあり不審未決の事なり　一義中將になりたるをもいひつけたるまゝに侍従とはいふ歟別に註あり　箋自侍従任右近中將例　粟田關白道兼天元二十二侍従寛和二七十六右中將　自侍従年中任羽林例　宇治關白頼道長保五二廿元服同廿八日侍従　黄ム頼道公侍従の任の日はかりありて羽林の事不書之記落字歟
御たうばりのかゝいなと　河冷泉院御給なり　秘冷泉院御給なり　四位に叙するなり弄花鳥同
いつこの心もとなきにか　箋きしろふ人もなきに早速の昇進となり秘
おとゝちかきたいをさうしに　秘冷泉院ちかき對にすませ給ふとなり弄同　花冷泉院の中の對を御曹司にし侍なり
みつからは御らんしいれ　箋冷泉院なり
うへにも宮にも　弄冷泉院秋好中宮の事也秘箋
院のうちを　冷泉院の中なり
こちゝの大いとのゝ女御ときこえし御はらに　秘冷泉院は御子すくなし女宮一所なり柏木の妹冷泉院へ參りて弘徽殿ときこゆる御腹なり花弄
かきりなくかしつき給ふ　箋冷泉院の女一宮の御事也
おとらす句　箋如此句をきるへし薫を大切にし給ふ事女一宮に勝劣なきなり
きさいの宮の御おほえの年月にそへてまさり給ふけはひにこそは　花秋好中宮の御おほえの年月にまさり給ふにくらふれはかはるのおほえはさしもなきと思はるゝと也　秘冷泉院の女宮をかしつき給ふにもおとらす又秋好中宮もかほるをもてかしつき給ふ事をなとかさしもとまて人のみたてまつると

なり　弄花鳥の說いかゝ云々　箋薫をは秋好の御子のごとくし給ふを冷泉院の皇女のなみに勝劣なく御自愛ある事も併秋好の御寵愛の次第にふかくなりぬる故そとなりてこそと句をきる

なとかさしもと　箋公界の目には是ほとまてはなくともとおもふ程なるとなり　花鳥の秋好にくらふれは薫はさしもなきと思はるゝと云々非なり

はゝ宮はいまはたゝ御おこなひを　秘女三宮也　朱雀院御女

此君のいて入給ふを　薫君なり

いとあはれにて　女三宮の薫をたのもしき物に思ひ給ふをかほるの心にあはれに思ふとなり

つき／＼の宮たち　箋春宮の御兄弟には常陸宮はかり他腹にておはすれ式部卿宮匂宮中務宮皆明石中宮の御はらなり

いかて身をわけてし　箋院東宮かた／＼へめしていとまなき故に母宮への孝心をもつくさねは身を分たくとかほるの思ふとなり

をさな心ちにほのきゝ給ひし　河薫中將爲柏木權大納言子事聞及歟　例聞ほのきくとは髣髴にきゝたるなり　箋實父は柏木そと内々人の知せ申けるにや

宮にはことのけしき　女三宮へはほのきゝしともしらせ參らせまほしき事あれは心ひとつに思ひなけくとなり

せんげうだいしのわか身にとひしさとり　秘他流本にくい太子とあり善巧は羅睺羅の別名成へし未決事也　いかさま柏木の事たしかにしりたきの由也　弄せんけう當流本には如此或くい太子と云々可用歟云々瞿夷也瞿夷と云も善巧の同名歟耶修多羅之因位瞿夷也羅睺羅生時之事見河海也善巧可尋我身に問けんさとり花鳥に爲長子と說給時羅睺羅覺得たる心也云々我身に問猶以不審なり　河耶輸多羅比丘尼之子羅睺羅尊者佛出家之後經於六年誕生大臣疑之耶輸多羅於（抱イ）兒放火投之至不燒是則誓言也　此因緣出未「樂化經云々　瞿夷太子羅睺羅也佛出家の後六年に生れ給ひし故に人うたかひけると云々「太子の我に問得けんさとりも佛の御子羅睺羅のことゝ云々」　花耶輸多羅をは然燈佛出世の時瞿夷女といひし故なり羅睺羅の我身にとひけんさとり

は別の因緣有へきにや然らすは法花會上に至て二乘成覺のさとりひらきて未來の記別を授け給ひし時我爲太子時に羅睺爲長子我今成佛道受法爲法なと偈を說給へるにて佛の御子とは定れることを我身にとひけるさとりといへるにや云々　箋瞿夷此云明女　舍夷長者女長者名水光其婦名餘明婦居近城生女之時日將沒餘明照其家內皆明因立（定イ）字云瞿夷即太子第一妃也第二妃云羅云名耶檀（和イ）亦名耶輸其父名移施（陁カ）長者第三妃名鹿野其父名釋長者太子以三妃故立之時殿　大論云釋迦父菩薩有二夫人一名瞿毘耶二名耶輸陀羅羅睺羅母也瞿毘耶是寶女故不孕子疏記第二云　大論十九云　耶輸陀羅菩薩出家時自覺有娠菩薩六年苦行故懷妊亦六年也乃今諸釋有疑因佛還國羅　以一器百味飲食及勸喜丸以上於佛今（令イ）變五百羅漢與佛不殊（妹イ）羅云送食直至佛所諸比丘空鉢而坐　箋曰我身にとひけるさとりと云は此事なるへし羅睺羅の父そと人もをしへぬにさしにさして供養をなされしことくかほるも實父をしりたきさと云なり　以上箋　箋此さとりと云は佛法のさとりにはあらす物をわきまへ覺る智惠をいふなり

薰　おほつかなたれにとはましいかにしてはしめもはてもしらぬ我身は　花薰の心に思ひ侍るは六條院の御子と思へはさもなきといへるはしめをしらぬなり柏木の子といはんとすれは又六條院の御子のつらに世に用られ侍りこれ又はてをしらぬなり又按に無始無終の道理心地の法門にかなへれは我身にとひけるさとりと云に相應せること葉なりすなはち此下にいらふ（なすらふイ）へき人もなしといへるも法門にいひなせは誰能答者といへるに同心なり　秘出生以來の事をいひきかす人もなきをうちわひたるなり　箋薰の一世の上を以て無邊の生死無始無終の道理を法文に顯はして云なり面向は六條院の御子なれとも內證の實父は仔細ありけなれは薰の生所難辨と思ふより見れは一切衆生皆かくのことし

いらふへき人もなし　花誰能答者箋　秘面白きかきさまなり佛法にいはゝ無始以來生死のありさま無分別となり

わか身につゝかある心ちして　花つゝかとは恙字をつゝかとよむ人の心をくふ虫をいへり病の心なり　箋　弄恙なりたとへは病ある心也恙は虫の名なり

食心臓と云々
宮もかくさかりの御かたちをやつし　秘女三宮也箋
思はすなりけることのみたれに　薫の實父のまきれ故にさかりの御かたちをもやつしたまへるなるへしと推量なり薫の心なり
おほとき給へる　箋おほときは穏の字なり
女の御さとり　箋耶輸陀羅　紫華色又云名聞悉達次妃也夫人知識出家しては爲尼衆之主云々　名義集
女三宮俗諦の時は天人知識にも勝劣なきに似たるへし御出家の後耶輸陀羅の如くに修行成就はし給はさるへきなり羅睺羅のことく御子の疑のあるは似たれとも佛法の修行は雲泥ならんかしとなり
いつくのなにかしも　秘五障なりさはりといはすしてなにかしとかける餘情たくひなし　私前の巻にしるす
かの過給にけんも　河過去なり　柏木もえんけふりもむすほゝれし事なり　秘柏木なり箋弄
世をへてもたいめん　箋世々をへてもなり　私薫一生涯此心あり末々の巻におまた見えたり
内にもはゝ宮の御かたさま　秘今上は女三宮連枝にてまします故なり箋弄
きさいの宮かたひとつおとゝにて宮たちおなしく
箋明石中宮なり　花此きさいの宮は明石中宮なりひとつおとゝはかほる中將とおなしく六條院にておひいて給ひし事なり　私かほるは明石中宮はらの宮たちとひとつにおひ出たるなり
すゑにむまれて　秘薫の事を源のゝ給ひしとなり
院のおほしの給ひしを　箋源氏なり末に生れては薫なり
右のおとゝも　箋夕霧なり
むかし光君ときこえしは　源氏の事也
そねみ給ひし人うちそひ　秘弘徽殿太后一(ニイ)條大臣なとなり弄箋
れほしなたらめし　源の性をいふなり　箋なたらめは宥字なり　箋曰素盞烏尊の悪事を日神のすこしも敵對なくありしことくに源の心もちは平心(タイラカナルコヽロ)に宥(ナタラカ)なると也
終にさるいみしき世のみたれも　花きりつほのみかとの朱雀院の東宮なりしを引こして六條院を坊にたておはしますへき御心むけのありし事をいふな

り　秘左遷の事なり　歸京ありては恩にて仇を報するやうに更に恨をのこし給はぬをいへり身を全くし給へる殊勝の事となり　花鳥説いかゝ箋弄同
のちの世の御つとめ　秘嵯峨の院に隱居し給へるよし見えたりをくらかし給はすとはあらましの末のおこたり給はさるをいへり弄
この君はまたきにし　秘薫なり　美譽芳聲もはやくきこゆるとなり
けにさるへくて　箋薫を云因縁ありて世に出現の人なるへしとなり
かりにやとされるかとも　花佛菩薩のかりに化胎して人界に生する事をいへり秘同之
香のかうはしさにこの世のにほひならす　秘大品經廿七八十隨形好云々四十二者毛孔出香氣四十二〔三十八イ〕口出光上香箋　箋聖德太子之事　一抱太子數月懷香故後宮爭欲抱及妃亦如抱　異朝有例　大宋之太祖皇帝之事也
まことに百歩の外も　河百歩香也
うちしのひたちよらん　秘打ふるまひ給ふ匂ひもしるかりけりとなり

もの丶くまもしるきほのめきに　花物のかくれもしるく木の間の月のほのめきたることく薫の立より給へる所はつゆにてもしらさる心は有ましき心となり
をさ〳〵とりもつけ給はねとも　秘にほひなともし給はねともとなり　弄不自粧なり
御から〔ふイ〕ひつにうつもれたる　弄薫香をもてはやし給はすとなり
はかなく袖かけ給ふ梅か香は　花「にほふ香の君おもほゆる花なれはをれるしつくに我そぬれぬる伊勢　箋弄引之河海に二首花鳥に一首あり不當仍略之　箋はかなく〳〵の詞心有何心もなくなり
春雨のしつくにも　箋香にめつる故に春雨のしつくをもいとはぬとなり
秋の野にぬしなき藤はかまも　河「ぬしゝらぬ香こそにほへれ秋のゝにたかぬきかけし藤はかまそも　箋引歌ぬしゝらぬを主なきこ置かへ中の五文字を上へ置て本歌よりも吟味あり此處妙を思ふへし
もとのかほりはかくれて　秘匂ひのふかき書樣妙なり

おひ風匂ことにをりなしなから　ことには他にことと
なるなりをりなしはかはるの手ふれ給ふ故に花も
まさるなり

人のとかむる香にしみ　河梅花立よるはかり有りし
より人のとかむる香にそしみぬる箋

すくれたるうつしをしめ給ひ　花うつしはたき物を
いふなり弄箋　秘薫物なり　荷葉梅花なといふか
ことし

春は梅の花その　是より兵部卿の宮の香にめて給ふ
事を云也

世の人のめつるをみなへしさを鹿のつまにすめる萩
の露　箋「女郎花吹過てくる秋かせ（もイ）はめには見えね
と香こそしるけれ　萬「秋田かるかりほのやとり
匂ふまてさける秋萩見れとあかぬかも　かやうに
はよめれともまことに薫草にはあらす仍心をうつ
し給はぬとなり花鳥にをさ〳〵御心うつし給はす
文字を清て心をうつし給ふなりといへるは非也
秘花鳥給はすは給ふと云心なりと云へり（すイ）然はすの
字清て讀へきなりいかゝ只その字濁へきなり花鳥
の心は女郎花吹過て云々又萬葉には秋田もるかり
ほの庵云々なといへれは皆香山（香は山イ）にとりてかへし給
ふと見えたり女郎花萩なとは蘭菊なとのことくに
は匂ひもなき物なれは心をはつけ給はぬと見へき
歟されは下の詞にわれもかうなとは此はの字にて
よくきこえたり

老を忘るゝ草に（菊イ）おとろへ行藤はかま　河みな人の老
を忘るといふ草（菊イ）は百年をふる花にそありける　前
頭更有蕭條物　老草衰蘭三兩叢　白樂天

物けなきわれもかうなとは　花狭衣「むさしのゝ霜
かれにみしわれもかう秋しもおとる匂ひなりけり

かゝるほとにすこしなよひやはらき過て　匂宮は風
流めきて艶に好色すきたると世間の人のいふとな
り

むかしの源氏はすべてかくたてゝ　箋いつしか昔と
いへるあはれなり　あまりこと〳〵しく人の目に
たつ事を業としたるも十分ならぬ義なり是人のい
ましめなり

源中將此宮には　秘かをるなり　此宮は匂なり　弄
かをる匂へ參り給ふなり

わかきとち　河若其　薫大將此卷十四侍從十九三位

宰相
やうことなき　秘やんことなきなり
わさと御心につけて　箋匂宮の御心よせなるあたりはなきとなり
ことになかりけり　箋殊更なり　此巻は殊にの字おほし
冷泉院の一宮をそ　箋女一宮なり　御母は致仕大臣の女弘徽殿と申也弄
いとしのひかたく　箋匂宮の心也
中將は世中をふかくあちきなき物に　箋世中をいとふ心ふかけれは見すてかたきよすかなとありてきすなとやならんとの用心なり
さしあたりて心にしむへきことのなき程さかしたつにや有けん　秘草子地なり　箋此以下一段を草子地と云説あり不可然是は薫中將の心中なり　かやうに行さきの爲を思ひて世にひかれしと思ふも眞實に身にしめて心のとまる人なき故かとなり
人のゆるしなからん　箋ましてわりなくもとむる心はなしとなり
十九になり給ふとし三位の宰相にて　秘薫十四より十九までの事こゝに見えたり次の巻は又立かへりて先年の事あり箋弄　弄次の紅梅巻は又立かへりて此以前の事を書なり但並なる故に年紀の雜亂勿論なり　此昇進かをる三位中將なりしか宰相に任して宰相中將になりたるなり
みかときさきの御もてなし　今上は薫の伯父明石中宮は姉の心なり
たゝ人にては　河凡俗日本紀　凡人とも書也
身をおもひしる　實父をたしかにしらぬなり
おのつからおよすけたる　秘柏木の事心にあるによりて心操もおのつから實法に見え給へるなり箋
三の宮の　匂宮なり
院のひめ君の御あたり　箋冷泉院の女一宮なり
ひとつ院のうちに明くれ　花薫と女一宮と冷泉院立なれ給ふなり　秘かほるは冷泉院にのみさふらひ給ふなり弄
かやうならん人をこそ　箋此世に心とゝむへくは此宮なとをえたてまつりてこそとなり
ひめ宮の御かたさまのへたては　箋物ふかくおはしますさま奇特なり

ましらひ　河交参日本紀
わかゝく人にめてられんとなり給へる　秘天然の風
情なり人もなひきやすなる物〔故イ〕に忍ひ所もおほかる
へきにも心をはとめ給はさるなり　箋薫の身に自
然とあい行相の生れつかれたるなりなり給へると
云これなり　弄かをるの事なり但心よりめてられ
んとするにはあらす自然の風流なり
人のためにこと〳〵しく　箋是こそ薫の御かよひ所
とも人の知るやうにもしなし給はす取わきて時め
かし給はぬなり
いさなはれ三條の宮にまゐりあつまり　弄かをるに
心をよせてなり　河引卒　箋薫へおもひよれる人
は我心のひくかたにさそはれて母宮の御かたへ宮
つかへに出たつ人々のあるとなり
つれなきをみるも　箋三條宮にさふらふとてもこと
なる事なけれは結句心やましきとなり
さもあるましきゝはの　弄近き便なき人也　又宮つ
かへせましき人なとも身をさけて宮つかへにいつ
るなり
さすかにいとなつかしう　箋かほるの温和の徳を持
たる人なれは打むかふにも恨を忘るゝとなり
心にはからるゝ　秘かひなき事かと思ひなからなり
宮のおはしまさん世のかきりは　秘女三宮なり薫の
心中におもへるなり弄
御らんせられ見えたてまつらんをたにも覺しのたま
へは　箋此段めつらしき筆法なりのたまへはと云末
をさすかにと前の段へかけて見るへし
右のおとゝも　夕霧なり　箋是より又各別の事なり
されとももの字にて前段をうけたり
あまたものし給ふを　箋右のおとゝわか御女をにほ
ふにもかをるにもむことりたく思ひ給ふとなり
弄いつれをもありつかせんの心なり
さすかにゆかしけなき　花いつれも夕霧のはなれぬ
御中を云也　弄夕霧のためにかをるは弟なり
やんことなきよりも　秘雲井雁の腹をいへり
一條宮のさるあつかひくさも給へらて　秘落葉宮な
り　箋御子のおはせぬは幸の儀となり　弄落葉宮
の夕霧の六君を養し給ふなり
いつくしうはもてなし給はす　花さのみおくふかく
いつくしうはもてなし給はて此君たちにはわさと

はなくてみせたてまつらまほしく思ひ給ふなり
秘さのみおくふかならすし給へるなり　弄普通の
いつくしさをはをしへなし給はすとなり　「一物こ(イナシ)
のみなさことにをしへて人の心をよせんさなり」
箋いつくしきは嚴儀の心今めかしくおかしきさあ
れは古代のふるめかしき様にはあらて花やかに人
の心うこきぬへくしなさせ給ふなるへしものこの
みさは男方の心をいふなり
のり弓のかへりあるしのまうけ六條院にて　秘薫廿
歳の正月なり此時夕霧右大臣にて左大將かけ給へ
るなるへし　弄かをる十九にて宰相中將に任す翌
年廿歳の春の事なり　花鳥に十九歳と云る如何
河かへりあるし還饗(ティ)　人をもてなすをいふなり
賭射　清和天皇貞觀三年正月十八日始て賭弓は天
子弓場殿に幸して弓を御覽するなり　仲春の日弓
を見る事禮記より出たり四府(左右近衛 左右兵衛)舍人射之左右
大將射手の奏をとる事はてゝ後大將射手に饗を給
ふなり近衛の管領なる故なり　花正月賭弓はてゝ
かち方の大將里亭にして還饗といふ事を行ふなり
此時夕霧右大臣左大將にて六條院にて是を行ふま

け方の人はかならす早出する例なりかをる宰相中(シヤ)
將は右のまけ方なり　箋凡射に種々の義あり　射
禮(レイ)　正月十七日或三月十三日於建禮門行之觀射さ
も云代始豐樂門院(經建禮不老門御清暑堂)弘仁二年正月始也　賭
弓は　正月十八日或延引十八日　於二弓場殿一被レ行
レ之四府舍人射之大藏省進二昨日射遺(イノコリノカケモノ)物一出居次
將着座出御警蹕次將召王卿云々着座取弓矢大將進
奏文(置弓挿矢 腰取奏技)　御覽之後大將以文給一座上卿云々召
(今日射手交名なり)左右少將右の奏をは左へ左の奏をは右少將に給次(着イ)
懸的(木工寮)判者次射矢取渡面(延喜式)人數は左右近(各十人)
兵各七人勝方將行罸酒(十度射)王卿愛重內(里イ)膳次供御
膳御簾中先供御膳射手垂袖跪居供之立勝方(亂聲)次
舞(持射時左右若之 舞羅陵王納蘇利)的付將等　說度數　文付上卿　勝
方大將奏可終祿饗由持之時は不設かへりあるしさ
(かへりあるしさ云是なり)云是也かへりあるじは還饗なり　勝方の大將次將(左イ)
を引卒して里(セハ)方にて(亭歟)行之無其儲之時申以障(チ)不參
若依召參入早出故實なり云々　かへりあるしさ云
事相撲にも有之　河後撰に相撲のかへりあるしに
女郎花を折てあるしの御子かさしにさすさて二條

右大臣「をみなへし花の名ならぬ物ならは何かは
君かゝさしにもせん　私云かへりあるしの事のり
弓の後大將方のすけを引て我亭にて種々の饗應儀
式ありあるしとは饗と云字をよめり又亭と云字は
遊仙窟にあはらやと云よみあり仍吉事には此亭の
字を避へし方のすけとは左大將ならは左中將左少
將右大將ならは右中少將これなり　還饗　河北山
抄曰賭射還饗大將先着座垣下座上儲菅圓座親王來着次將上　次將着奥
座賭弓には不儲土敷圓座佽菅卒也相撲時敷土敷圓座或筵上敷也　次垣下公卿着座相對次將奥イ
次立机或次將机先立　三獻訖有絃歌之曲給祿有差或命東遊
將監以下舞天祿例也　少將臨檻　相撲之時三獻之後
亦次將召相撲八等事少將用仰手番云々少將臨檻召
相撲所將監仰之數巡也後有相撲布引　河延喜三正
十八　御記云賭弓訖左大臣向其第而左近官人以下
籌賭弓勝卒至其亭云々
きさいはらのはいつれともなく　秘明石中宮の御腹
なり　みなさふらひ給ふとは禁中へ宮たち參り給
ひし事なり
れいの左あなかちにかちぬれは　秘此物語左右にわ
かてる事大略左勝なり繪合韻ふたき皆左の勝なり

させれいのとかけり弄　凡物合は皆左の勝を本と
すされは歌合も第一の左に勝の字を付るを故實と
す此物語にも繪合韻ふたき各左の勝なり然れは今
多分の例に任て例といへり
とく事はてゝ大將まかて給ふ　夕霧大將也　箋弓場
殿ことに還りあるしの由を奏して退出定れる義な
り
兵部卿宮常陸宮后はらの五の宮　匂兵部卿常陸　四
宮　五宮中務卿明石中宮腹
宰相中將は　秘薫は右のまけ方なる故にかへりある
しの亭へはむかはさるなり
おしとゝめ　秘車なり
御子の衞門督嫡男母三條上二男母藤内侍　權中納言右大辨母三條
上三男　夕霧の君たちなり
ものゝねおかしきほとに　箋かへりあるしに絃歌あ
り
つねのことみなみむきに中少將つきたり　河如常
花ひさしの座中少將奥の方につき親王公卿は端に
つく是をは垣下の座といふ中少將を饗應する請伴
の心なり弄

ゑんかのみこ　河 垣下えんかをえかとよめり　秘 垣
下なり請伴なり
もとめこまひて　秘 風俗のやをとめをもとめこさか
ける也箋　箋 かへりあるしの時もとめこを將監以
下舞なり　河 八乙女風俗二段 拍子各六合十二　やをとめは
わかやをとめそたつや八乙女たつや八乙女二段　神
のますこの御社に神のやすこもうたふなり　多好
方說（祝イ）求子の歌　拾遺集云はしめて平野祭りに男使
たてし時うたふへき歌とてよめる大中臣能宣朝臣
「千早振平野の松の枝しけみ千代も八千代も色は
かはらし
かよれるすかた　河 ひるかへる心なり　花 かよれる
はそてをひるかへす也かへりあるしのとき求子（女イ）
將監以下舞事なり　弄 舞のさま明なり神事の舞の
事なり
やみはあやなく心もとなき程なれと香にこそけに似
たる物なかりけれ　河 古今「春のよのやみはあやな
し梅の花色こそみえねかやはかくるゝ　拾 貫之
「降雪に色はまかひぬ梅花かにこそ似たる物なか
りけれ　秘　箋　弄　皆用兩首　かほるのさまも

夕暮はさたかならぬと女房のいふなり
みたれぬさまに　秘 かをるのしつほうふりしたるを
いふなり
右のすけも　秘 夕霧の詞薫はまけかたなれとこの亭
にては別してとりもち給ふへきそとなり箋　弄 か
をるにもよほし給ふなり
まらうとたゝしや　客人めきたるとなり
にくからぬほとに神のますなと　河 一方の大將かへ
りあるしの日風俗の神のますといふ歌をうたふ定
れる事なり　花 神のますは求子の二段なり右のす
けはかをるの聲くはへたるなり此結句は若菜下卷
のおなし筆法也　弄 神のますは　求子歌　未決
又云風俗云々なと　若菜下の終のことし　秘 神の
ますは求子第二段のはしめなり　なとゝは例の作
者の詞なり若菜下まかひるさなのとかける筆法に
おなしきなり　箋 八乙女の二段めをかをるの助音
なり河海云かへりあるしの日一方の大將風俗の神
のますといふ歌をうたふ事定れる事なりと云々
なとゝは作者の詞也　箋云つゝと云詞の類なりな
との詞の中にかへりあるしの一會の儀式各の祿物

以下の事善盡し美盡せりと推量すへし　箋云源氏一部のかきとめの内に若菜の下巻と此巻の書とめと一つなり尤妙なり々々云々

岷江入楚第四十四　紅梅

按察大納言室家幷子達事本室無系圖有女子二人麗景殿女御中君母儀也當腹柀柱君有男子一人相具兵部卿之時女子一人有之匂宮之心（懸イ）つくし給へる人なり

姫君參東宮給事 歳十七八云々 麗景殿女御也

中君與宮姫君一處遊態給事　此卷に薫を源中納言といへるはあやまりなり源中將とかくへきなりその故は夕霧右大臣任左大臣按察大納言任右大臣事は此秋薫任中納言時事也それに夕霧を右大臣とかき紅梅のおとゝをは按察大納言とかき侍れは昇進前の事なりされはいまた源中納言とは申へからすされとも同年の事なるによりて源中納言とはかけり物語つくる事はみなのちに人のかく故なり　私此年立は必如此しるされたり所詮おほくの抄物に委書のする故に此卷には薫の年をもしるさゝるなり

按察大納言折梅花以御子若公爲御使獻兵部卿宮事

兵部卿宮念懸宮姫君不承引中君事給事

按察大納言獻梅歌於兵部卿宮事

兵部卿宮色々献事

念懸宇治八宮姫君給事

匂兵部卿宮念八宮姫君給事は薫中將物かたり申されしのちの事なり物語の事は去年の秋の事なり

紅梅　箋匂宮並花以詞爲卷名或竹川紅梅と並
云々　河按察大納言折紅梅獻兵部卿宮
此卷別して按察大納言傳と見えたり仍川竹と並の
一二をも定かたし薫中將竹河には始四位侍從中央
に宰相終に中納言なり此卷には始より權(源イ)中納言と
ありしかれは竹河の次かとみゆるに又竹川の末に
按察大納言右大臣になること丶には又按察大納言と
いへり所詮此卷は竹川の中卷(間イ)たるへし此其と云詞
誰人と不指其心也之は橋姫の卷の初に其比世にか
すまへられ給はぬといふ同時分としらせん爲也薫
中將を源中納言といへることと竹川終(始イ)椎本秋中納言
に任す兵部卿宮宇治の姫君に通ひ給ふといへる事
等なり與(具イ)にみえたり所詮此卷宇治橋姫椎本總角同
時なり　花幻宮兵部卿卷に薫宰相中將とみえたり
十(二イ)九歲の正月の事をしるせり此卷に源中納言とい
へり十九歲の秋なり故に竪の並なるへしまた宇治
八宮の姫君に心をかよはし侍る事此卷の末に見え
たり椎かもとの卷と同時の事なるへし　弄此卷は
竪の並なり春の事あり匂宮の卷の當時の事にはあ
らす　秘匂宮のまきの並の一なり或說竹川を一の

並とせり其故は薫幼少の時よりの事あるによりて
なりされとも紅梅竹川と次第したるよき也幷此卷
は竪の並となんいへるよし但し横の並ともいふへ
きにや薫廿三歲の事なり花鳥三ヶ年の異あり幻卷
と此まきとは十七ヶ年の間なり　箋薫廿一歲の事
也　花鳥に三ヶ年の相違あり　箋幻卷より此卷と
は十七八ヶ年の間なり　河海には此卷は別に按察
大納言傳なり
箋云此卷義金言也然る時は年紀の雜亂一向に手を
付へからすこれをさしおくへきなり　但年紀の混
亂一往取要させしむへきなり
一竹川紅梅と可有次第と云事
一紅梅竹川と一二を可立といふ事
右兩說なり其故は竹川の始中程終薫四位侍從宰相
中納言
此卷の最初より薫頭源中納言と有然は竹河の次か
とみる所に竹川の終に按察大納言任右大臣然時は
紅梅は一並也所詮此兩まきに年紀の紕明は入へか
らす此卷は紅梅の大臣の傳竹川は竹川左大臣の列(別イ)
傳也然れとも其時代を引合て可見ならは此卷は竹

川の中央橋姫椎本總角と同しきとなり
此卷次第前後の事
法華囑累勸發兩品經中末相違論義あり　このまき
此下心なり囑累流通あるゆゑなり
そのころあせち大納言ときこゆるは故致仕のたと〻　秘
の二郎なりうせ給ひにし左衛門督のさしつきに
此時は紅梅右大臣也されと前の官按察大納言にて
ありし故に人のいひならはす分をかけるなり　箋
秘の義あやまれるか紅梅右大臣の列傳なれは按察
大納言たる時代よりの事をいふへし年紀のさた一
向にこれを略すへし　弄後號紅梅右大臣　按察大
納言は任大臣以前の事なり此卷末に右大臣に任す
同時夕霧左に轉す薫中納言になるなり是は竹川の
末にも椎本の末にも同時なり別に註す　箋此發端
を三所にかけり紅梅橋姫手習なりその心みなかは
れり佛の所説の經に爾時といへるかことし此三所
にかけるは佛の會場を心にふくみてかくと也云々
箋致仕大臣薨去の事こゝにはしめて見えたりこの
紅梅は致仕の二男柏木のさしつき母は二條相國の
四君也

わらはよりらう〳〵しう　箋良々しう也　秘榊卷に
高砂うたひし人なり
もとよりのはなくなり給ひて　秘誰ともなし箋
後のおほきおとゝのみむすめ　髯黑大臣なり　後の
太政大臣野道太政大臣兩說なり野道太政大臣髯黑
大臣の一名也素舜抄云野道の號人こゝにおほつか
なきよし申さるれとも重代の本に書おきて侍るう
へ行成卿自筆本に野道とかゝれたりしかは仰て信
を取侍き雙岡大臣夏野一名野道大臣と號と云々鳶
說には後のおほきおとゝなり今上御世の比ほひ太
政大臣二人なり致仕太政大臣若菜下致仕（藤裏葉に任之）　髯黑大臣
紅梅卷に太政大臣に任是也仍後にと云歟惣して此物語の中の太
政大臣五人也引入大臣二條太政大臣六條院致仕大
臣髯黑なり其中に後なり古今集に忠仁公をさきの
おほいまうち君とかけるは前官の義にあらす延喜
の比太政大臣只二人也　河雖不辭官前後の由に書
之若此品々の義歟右大臣　花清原夏野公小倉王の
第五男なり號並岡大臣又號野路大臣並岡は仁和寺
にあり嵯峨野の道なるによりて野路といふにや
秘髯黑を云り野路と後と兩說あり河海に忠仁公を

ささのおほきおほいまうち君とかけるありされと
ものちの義尤しかるへくや 箋准延喜之例乎然は
後の義を可用なり 弄後の義を用るなり
まきはしらはなれかたく 箋まき柱はわれをわする
なとよみし人也
式部卿宮にて 秘眞木柱の外祖父なり箋
故兵部卿の宮 箋螢なり 此宮薨去始て此巻にみゆ
秘
忍ひつゝかよひ給ひし 河鬚黒大臣の女(ムスメ)は故兵部卿
の室也有女子 秘紅梅大臣かよひ給へるなり箋
御子は故北方の御はらに女二人 秘紅梅大臣の子な
り箋

紅梅大臣—┬麗景殿女御 此巻に春宮に参り給ふ
　　　　　└中君 西の御かたと申す也

此二人女君也故北方の腹也
今の御はらにはをとこ君ひとり 箋大夫これなり此
まさに童にて匂宮いもうとの君の事尋給ひし人也
こ宮の御かたに女君ひと所 秘螢の宮也箋 花槙柱
君兵部卿具(ニ)し給ひし時女宮一人まうけ給へりのち
に匂宮の心つくし給ふよしみえたり紅梅大納言に
そひ給ひてこの御はらに男君一人まうけ給へると
なり 箋女みこは宮の御かたと申せし人紅梅のか
たに住給ふ匂宮心かけ給ふ也
おなしことおもひきこえ 同しことくなり
おの〳〵御かたの人 秘御まゝこなれは也箋 弄母
にまゝこともなれはつき〳〵の人くね〳〵しきと
いへとも北方のよくもてなし給ふとなり
わか御かたにくるしかるへき事 秘人のをしへにか
けり
はれ〳〵しくいまめきたる 箋世上の人むきなとの
よき心なり 箋枝柱の性一段と可然人と聞ゆ女の
性はさやうならぬ物なるをこのかきさまにて知へ
し
君たちおなしほとにすき〳〵 紅梅の姫君二人宮の
御方いつれも次々おなしほとなるへし
南おもてに大納言とのゝおほい君 秘あね君なり
弄嫡女なり 箋後に麗景殿の女御也
西に中の君 此二人故北方の腹也 箋麗景殿の妹弟
尋(イナシ)ある故に中君と云也
東に宮の御方 兵部卿宮の姫君なり弄 箋寝殿四方

の内東は外様にて晴のかたなり又賞翫の心もある
へし
父宮のおはせぬ　これより宮の御かたの事をいふ也
こなたかなたの御たから物　秘父宮曾祖父宮よりの
御ゆつりあるへし　箋先父螢式部卿宮（此姫君の曾祖父歟）鬚黒
は（此宮北方外祖父也）　然れは此三ヶ所より御寶物とも參りあ
つまるなるへし
けはひあらまほしう　女君のけはひなり
きこえ給ふ人おほく　たのみをかくる人おほきなり
内には中宮　秘明石の中宮なり
春宮には左のおほいとのゝ女　秘夕霧の女なり弄
箋三條上の腹也
さのみいひてやは　句人にまさらんと思ふ女子（チンナコ）を　さ
のみ人をはゝかるべきにあらすとなり
十七八のほとにて　秘紅梅の嫡女なり弄　箋麗景殿
と申す
中君もうちすかひて　弄おひすかひなり次第々々な
り
兵部卿の宮のさもおほしたらは　匂宮也箋
このわか君を内にてなと　秘眞木柱の腹の君なり匂
宮めしまつはし給ふとなり弄　箋紅梅の一子後に
大夫君と云々
せうとをみてのみは　秘匂の詞也　箋兄弟の姫君た
ちをゆかしとなり
さなんときこゆれは　秘紅梅大臣にかたり申なり箋
弄
いとかひありと　秘紅梅大臣の心なり
春宮の御事を　大君春宮のまいりの事なり
かすかの神の御ことわりもわか世にやもしいてきて
河閑院左大臣冬嗣以來代々藤氏執政の臣帝の外祖
たる事なり上古は外祖外舅として攝政する也　花
源氏のうちしきり立后の事は乙女卷わかなの下卷
に記しをはりぬ春日大明神の御うつたへの事は後
朱雀院の御宇長暦三年四月春日大明神被訴申大神
宮の度々官幣不請之依非藤氏皇后なり依之内大臣
教通公一女可入内之由被宣下之其年十二月内大臣
女眞子（直イ）入内爲女御今案長暦の訴は物語以後事也然
に物語に載たる事おほつかなし若度々に及て御答
のありしやらん　弄君臣の約神代よりの事也秋好
の中宮に立給ひし時も致仕大臣なとものの給ひし心

ありしなり又伊勢宮にあひ殿とて同宮の中にあり
と云々　祕秋好なとの中宮に立給ふ事也乙女にも
源氏のうちしきり給ふへき事をいへり伊勢大神宮
のましま す所にはあひ殿とて必春日大明神ましま
すことくに后にはかならす藤氏の人有へきなり君
臣の約神代よりの事なるよしなり　箋君臣台體の
約神代よりの事也依之大神宮の御座所にはあひ殿
とて必す春日大明神ましま す互にはなれ給ふ事な
し然間后宮には必藤氏の人入内すへき事なり然る
に紅葉賀に藤壺立后乙女に秋好中宮若菜新イ下に明石別イ
中宮打つゝき源氏立后なり　花長曆之訴事申前に
あり略之
こおとゝの院の女御の御ことを　花致仕大臣の御女
の院の女御にて弘徽殿ときこえしかとも秋好中宮
におされて立后のことなかりしをむねいたくれも
ひ給へりし事なり　箋故おとゝ紅梅の父致仕相國院冷泉女御弘徽
殿
なくさめの事　箋事なり
北のかたそひてさふらひ給は　箋眞木柱君なり女御
の繼母なり明石の中宮藤のうら葉に春宮へ參り給
ふ時繼母紫上相具して三ケ夜とゝまり給ひし事あ
り
とのはつれ〳〵なる心ちして　祕紅梅なり槇柱の君
春宮參り給へれは也　弄紅梅のつれ〳〵なる也箋
西の御かたは　祕中の君なり　弄西の御かた南の御
方とひとつにならひしなりつれ〳〵なるは父大納
言のこゝろなり西の君東の君もほとちかくみゆ
東のひめきみ　祕螢兵部卿の御女なり
よろつの御ことならひ　よろつの事歟宮の姫君にイ箏の事歟
こなたをしのやうに　河師也　祕匂君に中君なとの
ならひ給ふなり
物はちをよのつねならす　祕宮の姫君なり　箋宮の
御かたの然るへきさまをいふ物はちをはし給ひな
からもうき〳〵と御心のおもからぬなりほめてか
けり
此内參りやなにやと　祕紅梅大臣の用意わか實子は
かくイ
かりをもてあつかふやうなるもいかゝとなり
さるへからんさまに　弄母君は大君につきて春宮へ
參りし也　こゝにてはそれよりさきの詞をかけり
又後の詞に内に居給ふ心みえたり　祕紅梅大臣詞

まき柱の君への給ふなりこれはまへの事なり
おなしことゝ　おなし如くはわろし　秘實子に差別あるましきなり
さらにさやうの　秘母君の詞也箋
たゝ御すくせにまかせ　弄夫婦の契にはかきらぬ詞なり
のちそあはれなるへけれと　箋北方の一期の後は何とならせ給ふへきそとおもふにもその時は道心の方にてもおしさまなる御名をとられすして過し給へかしとなり
うちなきて　箋後そあはれなるへきといふ詞にかけてみるへし
いつれもわかすおやかり　秘紅梅の心
御かたちをみはや　秘物ふか（はイ）きさまみえたり箋
うへおはせぬほとはたちかへり　秘母上の御留守なるにはとなり
おほしわくる　箋繼父實母の差別由（曲イ）なしとなり
わか御ひめ君たちを　箋紅梅の息女たちの事也
世中ひろきうちは　秘我女まさる人もありけりとそねみたるなり弄

いとゝいふかしう　箋此大君麗景殿春宮へ參り給ふ以前より夕霧の嫡女も春宮に參り給へり此人におされやせましの恐怖なり
同（月イ）ころ何となく物さわかしきほとたに　秘紅梅大臣の詞箋同　私大君の春宮參りなとにとりまきれしなるへし
にしのかたに　秘中君なり箋
さもまねひとりつへくや　河こもまねふへくやとありてこもとはわれもといふ心歟　吾の字なりと註せり　花さもとあり
なまかたほにしたるに　秘琵琶を評してかけり　箋未熟なる琵琶はきかれぬものそとなり樂器によりて初心なれとも大かたなるある也
御心とゝめてをしへさせ給へ　箋上の詞にこなたを師のやうにとあり
おきなはとりたてゝ　箋紅梅みつからおきなといふなり
そのかみさかりなりし世　箋此詞一切に通達して殊勝の語なり全盛の世にそのみち〳〵の名匠の所作音樂を見及ひ聞及ひ時節はあなかち鍛練せされと

も自然にうる所のあるなり
きゝしはかりの にイ 弄伯牙か心もあり又歌有
何事にもいとつれなくは きイ 箋諸道の事ときこえたり
ときく〳〵うけたまはる 箋宮の姫君の琵琶の事
故六條院の御つたへ 源氏なり
左のおとゝなん 夕霧なり 弄夕霧のことにや左に
なほすへし 私此文いかゝ以上箋
源中納言 秘薫の昇進こゝにてみえたり 紅梅も大
臣たるへし
兵部卿宮 匂宮 弄薫は中納言のよし竹川の末にみ
ゆその時紅梅も右大臣に成給ふされとこゝにては
いまた大納言とのみかけりまた椎本の中程にも 前イ
あたれり匂宮巻より椎本まて五条混亂せり別に註
せる物有之
てつかひすこしなよひたる 弄なよひたるはつよか
らぬなるへし次の詞なまめかしう聞えたるなん女
の御ことにて中々ゆかしかりけんと有心うへし
私云小町か歌のことくつよからぬは女の歌なれは
なりといふはほめたりこれにおなしこゝにて引出
て可然以上弄

おとゝにはおよひ給はす 箋琵琶は撥にてあらくあ
たるものなれはやはらきひくへき事上手のものな
るへし今の匂薫はてしなはかりはいにしへにもま
さるへけれとひきしつめてやはらかなるむくやき
は夕霧におよはれぬとなり
この御ことのねこそ 箋琵琶をことゝ云 一切の管
吹物をは笛と云かくふえといふも笙の事なり 一
切の絃をことゝ云きんをさうのことゝ名をいひか 琴箏
へたり四絃は胡の琴といふにつきて猶もつてこと
の名をえたり
いとよくおほえ 上手の琵琶におのつからよくかよ
へるとなり
ひはゝわれしてのしつやかなるを 河押手也 箋左の
手の熟して手きゝなるを云也
ちうさすほとはちおとのさまはかり 河柱チウ 撥ハチ也
弄ちうをおしはなちする事也 箋左の手に心いる
故に右の手を忘る事を云女にしてもちたるもにく
きものなるほとにしとけなきか中々興はあるなり
御ことまいれ 箋琵琶を云御うつはものを御前へま
ゐらせよとなり

みえたてまつらしと思ふはしも心にまかせてゐたれは　箋ゐもふはなりしもはたすけ字なり云々　箋云しもの字眼なりしもの詞けふしも折しもなとの類なり時こそあれにてさうさかくのことしと云ふ處の詞なり紅梅へ宮の御方の女房たちはゝちかゝやくこともなきを若き上﨟なとはかくれ申へきの心なるに折しもふと紅梅の參り給ふゆゑに心にも任すしてみえたてまつれりとなりての字濁へし　勘入またしもの字助字にみるときはての字を淸てよむそれは隨意にかくれゐ給ふと云義也劣說なり難用之　秘勘入思ふはまてなりしもはつけ字なり心にまかせてゐたりとはゐとゝの御前へ出へき事なれとさしてみえたてまつらしの心ありて隨意なるなり奥の詞にもおまへにはしもとありこれもおまへにはといふはかりなり

さふらふ人さへ　秘大臣の詞也

わか君内へまいらんと　箋紅梅の子系圖には大君夫イとあり枝柱上腹也

とのゐすかた　河宿衣姿　秘直衣姿なり　箋直衣なり此時は髮をさきかくるなり

わさとうるはしきみつら　花殿上の童は束帶の時總角する也これをみつらといふ也とのゐすかたは直衣を云也其時はみつらにはゆはすたゝときかくるなり

れいけい殿に御ことつて　弄北方へのことつけなり如何　秘紅梅の嫡女の春宮へ參りし人也　箋こゝにはしめて麗景殿とかけり　花東宮の女御の事なり

ゆつりきこえてこよひも　秘北方にゆつるなりまたは若君にゆつるなり　箋兩說なり云々北方とみは春宮の女御にあひそひて參り給ひしまゝいまた歸宅なき分にみるへき歟しからは上の段にさるへからんさまにおほしさためてし是は螢宮の姫君を可然よすか定奉らん由を北方へ談合の詞なり然らは春宮より北方のはや歸宅と心得へき歟但又暫時のやうには往還と心得へき歟北方を歸宅と見は此段にて北方へゆつるの義は立へからす所詮自然としてはかりにかへり給ふ時のある分に分別すへきなり奥に至て北方のまかて給へりとあり此所實に退出なりよく眼を付へし　私に此義不審ことつては

麗景殿へなりゆつるは北方へなりさるへからんさまにおほしさためてとは此段女御の春宮へ参り給ふへきいそきのうちにの給へる事也前の事をのちに書たるなり其段抄にも前（別イ）にあり又北方うちよりかりそめの往還はあるへからす又只今もうへおはせぬ程は立かへりと宮の御かたへ紅梅申給へり北方留主はしられたり此義は前の事を一段中へかきくはへたるゆゑに此不審ありよく〳〵みるへし

御前の御あそひに　箋御まへ御せん兩點につけたり

わかきふえをこ　箋わらは笛なるへし

そうてうふかせ給ふ　春の調子なり

物にあはする　細々合奏なとある心なり

猶かきあはせ給ふ　箋宮の姫君へ紅梅の申さるゝなり

つまひきわいとよく　河爪彈也　箋うるはしくは彈し給はぬとなり　弄琵琶はつまひき如何

かはふえふつゝかになれたるこゑして　秘嘯なりうそふきしやうかなとして拍子とり給ふなるへし箋弄うそふく用之紅梅の調子に合せ給なり　箋皮笛嘯なりふつゝかはふとしといふ心歟　太（フトシ）　九條殿記云天慶五年正月七日雖甚雨依無止例尚張（引イ）青馬今日酒盃十一巡王卿有酒氣吹皮笛式部卿敦定親王云年來更不有如此之時今日似古事（時イ）甚威（感イ）悦多云々　原事簡要云在李部王記爲嘯なり云々　早職事之皮笛新猿樂記云中古自異朝笛を渡せり以皮嚢（葬イ）上左近將監大神武賢成皮笛之疑云々　胡角一聲霜（裹イ）後夢胡角は則皮笛なり云々以上河海私かはふえはうそふくなりなれたる聲はしやうかの義なるへし

東のつまに軒ちかき紅梅　河春風北戸千莖竹曉日東簷一樹花（白氏文集）　秘巻の名となれり拾遺物名に紅梅あり

しる人そしるとて　河「君ならてたれにか見せん梅の花色をも香をもしる人そしる　秘弄箋皆引之

あはれ光源氏と　秘昔の事をいひ出し給ふなり

わらはにてかやうにて　箋さか木巻に高砂うたひし事上にみえたり　私に紅梅の大臣此若君の比源氏へましらひなれし事をと兵部卿宮のことといふ事をかやうにてはとの給ふなり

此宮たち　今上の宮たち源氏の御孫宮なり

はしかはしにも　箋當時を昔のおもかけもなきと思

ふは見し世の春（昔し事イ）にひゐきのつよきかとなり
けちかき人のおくれたてまつりて　箋むかしの光源氏にしたしかりし人の今まて此世に殘るはなほさりならす命つれなき人そとなり此段法文なり奥に註之以上箋
いかゝはせん昔の戀しき御かたみには此宮はかりこそは　箋此一句奇妙なり昔は忍ふとてもかへらはこそあれよし／＼さしおく所そとなり匂宮を源氏の御名殘にはとなり
佛のかくれ給ひにけん御名殘には阿難か光はなちけんを二度いて給へるかとうたかふさかしきひしりのありけるを　大論云釋迦佛入涅槃之後阿難登高座結集諸經之時其形如佛仍衆會疑佛再出給私載之　阿難は未證四果之人也仍羅漢等不用之其時阿難自然現瑞四果とは羅漢の位四ある事也をなし羅漢の位なりひしりとは阿難を云なり　箋阿難陀尊者は佛叔父白飯王の次の子也以佛成道二月八日生即調達之弟也面如和淨滿月眼若青蓮華年八（三イ）歲從佛出家得皐羯磨具足戒多聞第一之年三十一爲佛侍者（開イ）聞持法藏至法華會上佛告阿難汝於來世當作佛號山海慧自在通王佛滅度後大迦葉結集法藏選千（于イ）阿羅漢令阿難升外師子座宣說諸經
迦葉告言佛所說法一言一字忽使有闕時阿難最初出經（經イ）　第一胎化藏　第二中陰藏　第三摩阿方等藏　第四戒律（經イ）藏　第五十住菩薩藏　第六雜藏　第七金剛藏　第八佛藏　是爲經法具足時阿難發聲唱言我（則イ）如是一時佛住一所妙居處迦葉大衆皆悉墮淚咄嗟老死如幻如化昨日見佛今日已稱我聞處胎經（則イ）　阿難身（毋イ）與佛相似短佛三指初登高座衆起三疑或疑世尊重出或疑他方佛來或疑阿難成佛及唱我聞三疑俱遣妙句
上の詞にあはれ光源氏といはゆるしもけちかき人のおくれたてまつりていきめくらふはおほろけの命ならさるらしかし　此段底の心甚深なり　舍利弗目犍（揵イ）連不忍見佛涅槃遂先入滅七萬（百イ）阿羅（羅イ）漢亦同時入滅時四輩八弟子莫不荒亂如來以神通力化作二弟子在佛左右衆生歡喜憂惱即除薩婆多論右已上箋
きこえれかさんかし　秘申おかしてみるへきとなり
（紅梅大臣）心ありて風のにほはすそのゝ梅にまつ鶯のとはすや（證イ）有へき　河先也待なり　案之兩說ともに諸本に聲を

させり而猶先の心相叶歟「あらたまの年たちかへる春はたゝまつ鶯はわかやとになけ　秘まつ鶯とありまつの字兩義歟待と先となり　弄待と先と兩義歟意各同し　箋はなの香を風のたよりにたくへてそ鶯さそふしるへにはやる　此心也　紅梅の中君を參らすへきの詞なりまつ鶯待と先との二つなり濟濁兩樣なり待の字正説にや　箋梅に自然に香しき德は有なから風のさそはすは遠くはしられしとなり是は風の心ありてにほはするむめなれは鶯のとはぬにはあらしとなりこれは待鶯の義なりまた先鶯の時は風のにほはする梅なれは餘木よりも先鶯のとはんとなり猶待鶯を用へしとあり　風のにほはすは中君の事をにほはする心なり

なれきこえまほしと　秘匂宮へなれまほしきよしなり

中宮のうへの御つほねより　秘匂宮の中宮より出給へる折ふしに參り給へるなり弄

昨日はなといとゝくはまかてにし　匂宮の詞昨日若君の早出の事をとひ給ふなり

とくまかり出侍りにし　若君の返答なり

內ならて心やすき所にも　秘二條院なり箋

かたらひ給へは　弄匂宮の御とのゐ所へなり

春宮にはいとますこし　秘匂の詞なり

ときとられて（息イ）　秘あぬ君のまいり給へる事なり　弄紅梅の君を春宮のまつはし給ひしかあね君の女御にまいり給ひしよりいとまありと也　箋紅梅の若君を春宮に平生召おかれていとまなかりしか姉の女御に時とられて隙こそあるらめと嘲哢しての給ふなり　弄あねに時をとられてとなり

まつはせ給へりしより　秘若君の詞　箋纏なりまつはれなり昵近の心也

れまへにはしもと　秘匂宮のおまへにはさふらひよしとなり弄　箋匂宮の御前には有よしとなり幼少の人の魂に奇特の用意なり春宮のしたしくめし入らるゝをくるしきと申せは此宮人も同前にやおほしめすへきとの用捨なりしもの詞まて此卷の文章なり

われをは人けなしと　秘匂の詞紅梅大臣をうらみ給ふなり箋弄

ふるめかしきおなしすちにて　秘故兵部卿宮の姫君

の事也紅梅の咲たる東のかたに住給ふ　秘れなしすちとは宮にておはしけるをの給へり

東ときこゆなるはあひ思ひ給てんや　箋紅梅の大臣をうらみ給ふやうなるは宮の姫君に御心よせぬるゆゑにまつかくのことくてたてにの給ふなり　秘螢兵部卿の御むすめの事なり

この花をたてまつれは　紅梅の大臣の折しはなゝり花たゝむかみにとりそへたる歌なり

うちゑみて　秘匂宮なり

うらみてのちならましかはと　箋引歌可尋　弄此詞は可有引歌未見云々　自面「恨みてのゝちさへ人のつれなくはいかに云てかねをもなかまし此歌如何恨てのちならはたのみもあるましきに是はいまた御文もつかはされねはたのみある心にやはとの給ふ也然は此引歌可然哉以上弄

枝のさまはなふさ色も香も　箋枝ふり英色香一にはあらす

そのに匂へる紅の色にとられて香なん白き梅にはおとれるといふめるをいとかしこくもとりならへても　弄園にゝほへるは詞なり　箋園にゝほへる紅の引歌あるへし　秘梅を許しての給へり紅梅は必にほひおくれたる物なり此枝は色も香も具したるとなり　河後撰「紅の色にとられて梅の花香そこと〳〵に匂はさりける躬恆　秘弄箋各載之　箋とりならへてとは色に香を具したるとゝ也梅の評奇妙也御心とゝめ給へる　匂宮の巻に梅を賞し給ふ事見えたり

こよひはとのゐなめり　箋匂宮内に御宿直なれはとて此若君をめしとゝめ給ふなり

東宮にもえまいらす　麗景殿へ紅梅大臣の御ことつてありしにもえ参らぬなり

花もはつかしく　花匂宮の袖の香をいへるなり

このはなのあるしは春宮にはなと　秘宮の君の事なり匂宮不審し給へり箋弄

しらすはあらん（心しらんイ）人にこそ　秘若君の詞也　箋子細は存せぬよしなり　弄是先しらすとこたふ　花信明集「色も香もまつわかやとの梅をこそ心しれ（られイ）らん人は見にこめ　箋「あたら夜の月と花とを同しくはあはれしれ（られイ）らん人にみせはや　秘弄同引之　河云伊行釋奥入載之此歌猶不相叶歟云々　あはれし

られイ
れらんを心しれとかけり　私心しれらん（られイ）と此歌ある本ある歟　弄花鳥の引歌をも載之
わか方さまには思ふへかめれと　秘紅梅大臣はわか實子の中宮を匂へたてまつるへきの心あるとなり
箋同　弄紅梅の心は中君實子を匂宮へと思へともなり匂宮は宮の君にと思ひしみ給ふなり　箋思ふへかんめれとのとの字清きゝあはせ給へとの字濁なり思ふへかめれとは大納言は中の君を參らせんと思ふとなり
（イナシ）おもふ心はことに　秘匂宮の心は宮の君にふかく思ひしみ給へり　箋聞あはせ給へと匂宮の心は宮の君を思ひ給へはちゝの聞あはせ給へかしと思ひしみ給ふと也　私聞あはせ給へと兵部卿ふたりの姫君達の事を聞合せ給へと御心に宮の姫君とおほしめすとなり以上弄　私此弄の義始に註せるは其心得かたし次に私と云義は一義あるに似たり此時は思ふへかめれと此との字濁きゝあはせ給へと此との字は濁る此儀なり心はきこえたり但前の箋の義可然なり又弄の始の註思ふへかめれと此との字濁きゝあはせ給へと此との字清也　此義如何

御かへり事けさやかにもの給ひやらす　秘宮の君に心ある故に中君のかたをはけさやか（分明にも）にもの給はさるとなり箋
なほさりなるやうにて　箋心にしみ給はぬ體なり
（返匂宮）はなのかにさそはれぬへき身なりせは風のたよりを過さましやは　秘よその事にいひなし給へり　箋數ならぬ身は花の香にもさそはれかたきよしなり
箋云花の香にさそはれぬ所を身の數ならぬに取なし給へるなり
さて猶いまはおきなともに　秘大臣なとへしらせたてまつりてみちひくへきよしをわか君にかたらひし給ふなり　箋宮の姫君の御事を此紅梅の若君を道しるへに匂宮のたのむへきよしをかたらひ給ふなり　れきなともは紅梅大臣母北方にもしらせしとなり
さかしらをさせて　箋ての字濁しらせすしてなり
この君もひんかしのは　花匂宮も東のひめ宮をは思ひまし給ふとなり　箋此君は紅梅の若君なりもの字は匂宮へかけていへり宮の君と此若君とは同腹の兄弟なり仍よしみふかし　麗景殿や中君は別腹

にてしたしからぬにや
このかたの姫君は　箋女御中君とは種一つの他腹の
兄弟なり
いとおもりかにあらまほしう　箋宮の君おもく〳〵し
くおくふかくよしあるさまそとなり
かひあるさまにて　秘若君の心に此宮の君を匂へ參
らせはやと思ふとなり弄箋
春宮の御方のいとはなやかに　秘麗景殿の女御を寵(てう)
し給ふ事なり弄箋
おなしことゝは思へと　弄春宮へも宮の君を參らせ
はやと思ひしとなり　箋若君の實の兄弟の參り給
へは同しことなれとも此螢の姫君をとてもの事な
らは春宮へ參らせ申へきをとなり
この宮をたに　箋此宮の姫君へ匂宮の御立入もあれ
かしとおもふゆゑに此はなのついてを若君の心に
うれしくおもふとなり
これは昨日の御かへりなれはみせたてまつる　秘父
へ參らせ給ふなり　箋見せたてまつるといひすて
たる若君の心をいへり假令御返(カヘリ)ことなれはまいら
するまてよとなり中君を匂へとの事は若君の心に

もさのみとりもちてはおもはぬとなり
ねたけにもの給へるかな　秘大臣の詞也　かまはぬ
體なる御返事をいへり
左のおとゝわれらか見奉るには　秘夕霧なり紅梅大
臣のみたてまつる所にては實法をたて給ふとなり
花　秘右のおとゝ夕霧也左なるへし　箋紅梅なと
の前には實法をたて給ふ故に御返事をうはつらの
御斟酌かとまたかさねて歌を奉り給ふなり
あた人とせんに　河他人日本紀　越人孟子　他心日本紀　同異
意日本紀
しゐてなめたち給はんも　匂宮のふるめき給はんに
たくひたるさまを無理に實法をたて給はんは見所
なからんとなり
しりうこちて　河後言しりうごと
けふもまいらせ給ふにまた　若君今日も參内ある次
にまた按察(父イ)より匂宮へ御ふみあるとなり
紅梅大臣 もとつかのにほへる君か袖ふれは花もえならぬ名を
やちらさん　河本の香なり萬葉に本人とあり　秘匂
宮は天然のにほひある人にてましませは梅も匂ひ
をますへしとなり猶中君たてまつるへきよしなり

箋 花「もさつ香のあるたにあるを梅花いとゝ匂ひのそはりぬる哉 箋えならぬはえもいはぬの心なり何ともいはれぬなりえは告(吉イ)の字也或艶の字なりならぬの字不審猶可勘之是は縁ならぬの心なりえならぬ五葉枝にと今のえならぬと同し體なりえならぬはえもいはれすすくれたる事なり

まことにいひならさんと 箋紅梅の重てかくのことく申さるゝをさては眞實に思ひいれて申さるゝよと御自愛なり

はなの香をにほはすやとにとめゆかは色にめつとや人のとかめん 秘是も公界にいひなし給へり 箋はなのあたりはたつねまほしけれともはなもえならぬ名をやちらさんとある時は色にめつると人のとかめもやあらましとむかひをとかめての給ひのかるゝなり

猶心とけす 箋紅梅の心なり

北方まかて給うて 秘まき柱なり 春宮より退出なり

内わたりの事 箋内春宮の御事つもりたる物語なり

わか君の一夜とのゐして 箋匂宮にさゝめ給ひし時の事なり

人はなほと思ひしを 秘天然の若君のにほひと人は云なり花

宮のいとおもほしよりて 秘宮とは春宮なり御推量ありしとなり北の方のかたり給ふなり弄

うへわれをはすさめたる 弄荒の字心なり歌には此心に用たるはまれなり 箋宜なりいつしか春宮をはよそにみ奉るとうらみ給ふなり

こゝに御せうそこやありし 弄北方の詞兵部卿御せうそこやありたるさはみえさりしかさもやありつるとなり

さかし梅のはなめて給ふ 花紅梅大臣の詞さる事ありしとなり

はなましらひ 箋はなましらひと云本もあり又一向に此字無之してましらひし給はん女と計有本も有此分しかるへく也

源中納言は 箋薫なり人からこそ一本人香こそ薫の事は一向凡人にあらす過去の宿執そとなり

おなし花なれと 秘梅は天然奇特なるにほひのあるとなり源中納言の匂ひよりいひ出し給ふなり箋

弄匂かほるの天性の奇特なるを思ふ心より花の種性をも批判するなりまたかほるの天性に薫し給ふに梅をたとふ　花梅は根よりかうはしき花なり是を源中納言にたとふるなりはなはかりかうはしきをは匂宮によそへ奉るなり

この宮なとの　秘匂宮梅を愛し給ふことわりと也弄はなによそへても　箋匂宮へ中宮をまいらせんの心あれは何事にもまつ匂宮の事をいひ出給ふとなり

宮の御かたは　花紅梅の東の姫宮の御事なり　秘宮の君の事也　箋年齢も物おほしわくほとゝなり

さしむかひたる御かた〳〵　秘此宮の君は父宮ましまさゝるによりてのそみ申人もなくて紅梅大臣の御女のみ人も申かゝり給へりされと此匂宮はあなかちに宮の君に御心さしねんころなるとなり

宮は御ふさいのかたに　河ふさいとはわかおもふすちなる耳よりなる心なり縁あるやうなる事をも云歟　秘匂宮はわか身にふさいたるへしと思ひ給ふなり箋　弄祥の字心に叶ふなり匂宮はふさいたるへしと思ふなり時の人は紅梅の實子をのみもてあつかふに似たり匂宮の御心なり

大納言君ふかく心かけ　秘紅梅大臣あなかちにわか御むすめをと心かけ給ふなり弄同

心つくし給ふをみるに　箋北方のみるなり

なけのこと葉　箋なほさりなり匂の文のことあるましき詞といふ歟

まけしの御心そひて　匂宮の心なり

何かは人のありさま　秘北方も然へき事には思ひ給へり

おひさきとほく　弄匂宮の事を思ふ也

八の宮の姫君にも　河宇治八宮桐壷帝第八御子　兵部卿宮通宇治宮の中君事總角巻也但椎本より宇治中宿有いつれも同し時分也　弄宇治のうはそくの宮の姫君への事椎本巻に有其時の事をこゝにもかけりしけうまうて有き給ふと有橋姫には一度也椎本巻に有巻に混亂せる書様也されは此詞の時分は椎本巻に有と同時也別(前イ)くはしく註する也　秘宇治の中君の事也此あたりの巻に雜亂せりしけうかよひ給ふ事は椎本巻にあたれり　箋しけうといふにて椎本の邊にあたる是を年紀雜亂とは思ふへからす列(別イ)傳れは先代の事も末代の義も一つにしるすへし

まめやかには　箋宮の姫君の事を眞實に紀（狀イ）怖申されんことは思ひとゝまり給へるなり

かたしけなきはかりに　弄匂宮のねんころにの給ふをとなり

陸君そたまさかにさかしらかりきこえ給ふ　秘母君時々返事を申給へり　弄しのひてといふ詞はたしてとけましき事なれは深く隱密のよしなり　さかしらかりは御かいしやく過るとなり

岷江入楚第四十五　竹河

十四歳　薫その比十四五はかりにていときひはにお
りとみえたり
髭黒大臣薨逝後玉鬘内侍上事
玉鬘御腹姫君達自方々望給事
薫君為四位侍従事　その比十四五はかりとあり
十五歳　四位侍従也
正月一日右大臣以下之人々參尚侍御許事
夕霧右大臣與玉鬘君御物語之事
同日參入道宮三條宮給事
夕付而四位侍従參尚侍給事
宰相君詠梅歌事　小侍従勧酒事
同廿餘日四位侍従渡藤侍従許事
藏人少將來會事
四位侍従彈和琴事
相似故致仕大臣爪音事
藤侍従歌竹河事
翌日四位侍従送文於藤侍従事
三月尚侍之姫君姉君與妹君打碁給事　藤侍従見證
事也
以櫻樹爲碁懸物事　右勝之事
藏人少將垣間見事
藏人少將念姉姫君事
藏人少將來藤侍従許憂姉姫君事
又來中將局述懐事
四月上臈達於尚侍御前申念人事
中將御許執申藏人少將事
九日玉鬘腹姉姫君參冷泉院事
母君同參給事
廿六イ
其日藏人少將送消息於中將御許事尚侍右返歌私但姉姫君之返歌也
源侍従常參冷泉院事
見藤花事
藏人少將姉妹姫君事
御門召中將逆鱗姉姫君入內事　中將申尚侍給事
自七月冷泉院御息所姫宮懐姙事
源侍従參院候御遊給事
十六歳　秋薫任右中將又任宰相
正月男踏歌事　參冷泉院事
源侍従參冷泉院事

院渡御息所御方源中將參御供給事
侍從與女房達昔物語事
御遊之事
四月院之御息所誕生女宮事
中將君入內讓與侍從職事
玉鬘上有出家之志事
十七歲
十八歲
十九歲　秋任中納言
薫爲宰相中將事　詞云その中に源侍從とていとい
みしうまひ(きイ)はなりしとみしは宰相中將にてとあり
云々薫十六歲の秋までは源侍從といふそのとしの
末に宰相中將とみえたり
三位中將嫁竹川左大臣女事　此三位中將は藏人少
將事也夕霧右大臣の御子なり三位中將にいつの程
になり給ふとはみえす
人々昇進事　夕霧右大臣轉左大臣　按察大納言任
右大臣兼左大將　薫宰相中將任中納言　三位中將
任宰相　以椎本卷考之此除目は當年秋事也
源中納言參玉鬘前尙侍申慶事

前尙侍慰院御息所不安御事給事
里居給事
紅梅右大臣大饗請申兵部卿宮給事
前尙侍謂(ノタマワ)紅梅右大臣與棟柱君間事
大饗翌日宰相中將參前尙侍御許事　宰相中將廿七
八歲也

竹河　匂宮並二　巻名歌并詞に有之

河四位侍從経藤侍從歌
藏人少將與冷泉院女房贈答歌
又正月四位侍從藤侍從同音歌此曲
上件の並は人ひとりの列傳なり史記には同傳に五人も三人もこれをあむ此物語同傳の列傳いまたなし仍此巻に玉鬘の一類と竹川の右（左イ）大臣とを同傳にのするなり

年紀の事法度のことく薫の年をもていはゝ薫十四歳はかりよりおこりて次の年の正月より七月にいたる又次の年の事あり又年ころと云て年のうつる心みえたり

河前の匂宮巻に薫侍從十四歳同秋中將加階十九歳此巻の始四位侍從終中納言是をもて可思合云々

花此巻の末に中納言に任す椎本の時代也然らは十四歳より十九歳にいたりて六ヶ年の事此巻にあり匂宮巻に十四歳より十九歳に至りて六ヶ年此巻の末は紅梅と同時なり横竪の沙汰の時は先大度は横なり匂宮巻にあつれは横なり末は又竪の並歟　此巻の末には薫中納言に任す匂宮巻には中納言の事みえす然らは竪の並なり

箋曰所詮當流のならひ並の巻に年紀の義不用之人人名々之依爲列傳也　諸抄の趣一往註すといへともこれをけつるへきなり

私諸抄の沙汰を皆會して箋に註せらるゝ間其旨を註す仍河花弄箋にましへ被載之仍別に不書之　秘巻名以歌並詞號之横の並也又は末は竪のこさし薫十四歳はかりと云て次の年正月より七月まてに書て又次者年の事ありて又年ころありてとあるにて年年うつるとみえたり　弄の義大略同之

これは源氏の御そうにもはなれ給へりし後の大殿わたり　花のちの大いとのはひけ黒の事なり前の巻にみえたり御そうは御孫なり鬚黒の大臣は源氏の御子孫にはなれたりといふなり玉かつらの内侍のかみ源氏の御子にあらさるゆゑなり　弄凡此物語を紫式部作ともみせす其意なり巻の始にかく事これ始なり源氏の御そうにもはなれとは鬚黒を源氏にはなれたる孫といふにあらすたまかつらの事なりそのゆゑは鬚黒の室なれはひけくろのあたりとかけりこの類おほし玉かつらは源氏の猶子なり實子

にあらぬよしなり鬚黑太政大臣の薨後の大殿なり
致仕大臣につひてなり野路説不用也　秘此後端業
式部か作とみえすよその人のいへる事の樣にかけ
り源氏の御そうにもはなれとは花鳥の説いかゝ鬚
黑をいふにあらす玉かつらをいへり其故に鬚黑の
室なれはひけくろのあたりとかけり是は源氏の猶
子なり實子にあらぬよしなり　箋これはとは玉か
つらの事なり此卷の本意玉かつらの子孫の行末を
かくへきの用なり仍竹河左大臣と同傳にこれを記
す源氏の御そうにものそうは孫なり族なり光源氏
の御一族にはなれたる鬚黑のおとゝと云なりこれ
は源氏のと引つゝけてみるゆゑに違ひあるなり花
鳥を秘に破せられたれとも秘も誤れり所詮これは
と引放して源氏の御そうと云より鬚黑の事に心得
へし其故は源氏と致仕大臣とはいとこなり然れは
たまかつらを源氏の一族に離るとはいふへからす
鬚黑は一向源氏へゆかりのなき人なり諸抄の沙汰
あやまれり後の大殿に鬚黑也此義紅梅卷にあり
秘のちの大殿前にみえたり
わるこたち　河惡後達なり

紫のゆかりにもにさんめれと　秘紫上をは源の猶子
にて後には北方なり玉鬘は猶子にて後にかけはな
れたまへりやうたいかはりたりさて似さめりとは
かけり花鳥の説いかゝ弄箋　花紫のゆかりとはた
とへは匂宮女一宮なとはあかしの中宮の御はらな
れと紫上のやしなひ申されし事をむらさきのゆか
りとは云りかやうの事はさらにまきれぬ事なれは
わ（かイ）るこたちのとはすかたりはそれをいふにはあら
しと云る事をにさめれとゝはかける也　河鬚黑大
臣を光源氏のゆかりにもあらすと云歟されはかの
大殿わたりの後達の物語をもとゝ僻事にやと云歟
かの女とも　わ（かイ）るこたちのおちとまれるを指て云也
源氏の御すゑ〳〵にひかことゝものましりて　河い
つれかまことならんとあり此卷の始より此詞にい
たるまていたく何の故ともきこえさるにやさため
て意趣ある歟若物語の時代人の准據なとその人と
はみゆれとも一篇に其行跡を守らさる事おほきゆ
ゑに其難をのかれんために如此云歟桐壺帝准延喜
帝光源氏比西宮大臣事等なり　花此ひか事といふ
はたとへは冷泉院を桐壺のみかとの御子と系圖な

とにもつり侍れと誠は源氏君の薄雲の女院に通し給ひてまうけ給へりといふ事ありその事を匂宮の巻のはしめに光かくれ給ひしのちかの御かけにたちつき給ふへき人そこらの御すゑ〳〵にありかたかりけりおりゐのみかとをかけ奉らんことはかたしけなしこわりこのおりゐの御かとは冷泉院の御事なり又玉かつらの君は致任の大臣の御むすめなれと夕顔上の事によりて源氏の御子のつらにあつかひ給へり又薫大將は女三宮のうみ給侍れはおしなへて源氏の御子のふんに系圖なとにものせ侍り給へと誠は柏木の衞門督のたねをまきける岩ねの松といへりこれらの事をひか事とものましりてきこゆるとはかけるなりさりなからたしかに人のしらぬ事なれは人のひかおほえにやとおほめきてかきなせる此一段のこと葉あひかねて凡慮およひかたし河海の說あやまれりといひつへし　弄かほるの實父なと源冷等なりこの事とも也見花鳥　秘花鳥にくはしくしるさる可然　箋ひかことは花鳥に冷泉院のかくれたる御事かをる源氏の實子にあらさる事夕かほの上の事ゆゑ玉かつらを息女のことく養育の事かくのこときこと共ふる物語する人のあるとなりこれ則薫の元來をふる人のかたり申せしと宇治をかくへきの序なりされは人は千歲の後の名をおそるへき事なりこれ教誡の義也　『此藤以下イナシに藤中納言次郎君眞木柱の上の三人は先帝式部卿女御の御はら也紫のゆかりにも似さめれと眞ふ云云似よりたる事にても有ましきと云ふ事を源氏の御そうなと云たよりに紫なと詞の句に云るにや』

われよりもとしの數つもりほけたりける　河孟也ホケ　秘老たる女房とものいひけることはなり

あやしかりけるいつれかはまことならん　箋老のひかみにてすちともなき事か一定やらん又老者は物のおほえも中々つよきものなれは眞實にて有やらんたしかに治定しかたきとなりこの一段紫式部か五十四帖の本意を申あらはす也　秘前を決して式部かけるなり　弄此詞は紫式部か決したる語なり古きことゝ見えたり紫式部か作せさる心なり

內侍のかみの御はらに　秘此以下玉かつらの事をかけるなり　弄玉かつらの事をかゝんための事三獻共なり玉かつらの腹に子五人ありことはらに二人な

れさこ三人女ふたり

箋 鬚黒相國――右兵衛督若菜下女樂笛院御賀陵王をまふ源氏若菜下院御賀試樂
　　　　　　├右大辨
　　　　　　├頭中將
　　　　　　├冷泉院女御此卷冷泉院へ參夕霧子藏人少將心を盡す人
　　　　　　└尙侍母上此卷に內侍のかみをゆつる

此外に藤中納言　次郎君　眞木柱の上　此三人は先帝式部卿の御女の腹なり

あへなくうせ給にしかは　秘 鬚黑の薨し給へるなり

花　弄 鬚黑うせて後の關白は誰ともみえす　箋 ひけ黑薨の事こゝにはしめてみえたり雲隱のうちにあるへきなり

いそきおほし　秘 內まなりの事なり弄人の心さきにのみ　河 人心好惡太不常ハナハタ白氏文集

らうし給ふところ〳〵　河 領し給なり

かんの君の御ちかきゆかり　弄 ひけ黑の子孫なり如何　秘 致仕大臣かたの事なり花鳥　箋 致仕大臣方紅梅大臣一家の繁昌する事をいへり

中〳〵やんことなき御なからひのもとよりもしたしからさりし　鬚黑のおはせしさきは結句權勢をあらそふ心もありてしたしからさりしなるへし今は又紅梅の威勢つよくて又いひかよひ給はぬ歟

もとよりもしたしからさりし　秘 鬚黑は致仕大臣かたへはへつらひ給ふ事もなかりしとなり　箋云此義如何云々

故殿のなさけすこしおくれ　秘 巧言令色なきとなり

箋 秘に巧言令色なきなりさ云々然らは言の字にや如何　箋曰故殿なり是より鬚黑の性をいふなり通屈なく木すくなる人さ前に見えたり情おくれしとはにこやかに世にしたかふかたのなきなり

むら〳〵しさ過給へる　秘 おくれたる所あるなり

箋曰秘の義如何義と箋をたてゝ物に用捨もなささまなり　弄 或人にはよく又はさもあらぬなり

心おかれ給ふ事もありけるゆかりにや　箋 玉かつらも鬚黑にひかれてうさ〳〵しきとなり

なほむかしいかにはいす　秘 玉鬘に處分ありし也弄

中宮の御さしつき　秘 明石中宮なり

右の大とのなとは　秘 夕霧も大切にし給ふなり

おとこ君たちは　箋 右兵衛督右大辨頭中將なり

あはれなる事もあれさ　官位の昇進なとちかふへし

ひめ君たちを　秘玉かつらの心なり
おとなひ給ひぬらんさし月を　秘おとなひ給ふほと
　をはからひてもよほし給ふなり
中宮のいよ〱　秘明石中宮なり箋弄
みな人むさくに　花無德なりおところへたる心なり
はるかにめをそはめられ　河已被二揚妃遙側一レ目白氏
　文集　上陽人箋　秘上陽人の詞
むかしほいなくて　箋玉かつらを鬚黒にとられ給ひ
　し御遺恨なり
いさはましてさた過　貴ムさたのたを濁聲をさせり　ありイ
　秘冷泉院よりの御詞なり位をさり給ふ事なり
いかゝはあるへき事ならん　秘玉かつらの心なり箋
みつからのいとくちをしき　箋玉かつらの宮つかへ
にこそ思ひよりつるをおもひの外鬚黒への宿世を　参りし事
うらみたるなり　也イ
この世の末　箋子の世の下心なり
右の大殿の藏人少將　箋夕霧の五男源宰相中將也雲
　井鴈はらなり
人からもいとほしかりし　秘箋にかりしのし文字過
去のし文字なれとも當意の事なり

いつかたにつけても　秘夕霧の息藏人少將は玉かつ
　らのおひなり玉かつらは源氏の猶子なれはなり弄
　箋
かんの殿もおほしたり　秘玉かつらなり弄箋
はゝ北のかたの　秘雲井鴈なり箋　弄少將の母の事
　也
かろひたるほとにはへめれとおほしゆるすかたも
　秘淺官なるをいへりおほしゆるすかたとは親昵な
　るをいへり箋
おとゝもきこえ　箋夕霧も所望あるなり辭せられか
　たき事なり後に夕霧も雲井鴈もうらみ給ふなり
ひめ君をはさらにたゝのさまにも　弄たゝ人にはあ
　はせしとなり　秘玉かつらの返答なりあね君は父
　大臣も遺言にて内參りの事をあなかちにの給ひし
　なり次のをは藏人の少將昇進もあらはゆるすへし
　となり箋
ゆるし給はすはぬすみもとりつへく　箋少將の造意
　なり
こよなきことゝおほさねと　秘有ましきことゝは思
　ひ給はされともとなり

きこえつゝ人をも　秘自然ぬすみとり給ふへきかたの事をもかたく制止をくはへ給ふとなり　箋是はやかて玉かつらの身上にて思ひとり給へるなり鬚黒の事かくのことしと也

くたされてなん　花腐なり又下すなり

六條院の御すゑにすさく院の宮（三宮イ）の御はらに生れ給へる君　花是はかをる大將の事なり十四にて元服して侍従に任するなり　秘此以下かをるの事なり

箋巻々の中混亂せるゆゑに四位侍従とふと（書イ）云てはしりかたき故にくはしく系圖をかくなりことあたらしきは此ゆゑなり

四位侍従　秘薫なり十四五はかりとあるは匂宮の巻の始にあたれり弄

この殿はかの三條宮と　秘この殿とは玉かつらの殿三條宮は女三宮の在所なり花弄

君たちにひかれて　箋鬚黒の子たちに友なひて薫のこゝへおはするなり

かたちのよきは　箋夕霧の御子の藏人少將（たるイ）なり

心はつかしけになまめいたる（めたるイ）　箋媚ける姿は薫そと女とものさたむるなり

六條院の御けはひちかうと　秘薫は源にちかしと思ひなすゆへとなり箋弄

なつかしう物きこえ　弄玉かつら物こしなとにかたり給ふとなり　秘玉かつら兄弟の思ひなをし給ふなり

院の御心はへ　箋源の御事なり

む月のついたち比　秘玉かつらのかたへ參り給ふなり弄

かんの君の御はらからの大納言　花紅梅の大臣此比大納言なり

たかさこうたひし　秘此大納言の註にかけり

藤中納言故大殿の太郎　花藤中納言は鬚黒の御子母はまきはしらの巻に火とりのはひかけし人式部卿宮の御女なり　秘是も藤中納言の註にかけり弄

此藤中納言は紅梅の北方の披柱上と一腹の兄弟なり

御かたちよりはしめて　秘夕霧をいへり

としのほとよりはつかさ位もすきつゝ　秘夕霧の君たち各昇進も早速なるとなり

かしつかれたるさま　弄藏人の少將の事なり

おもふことありかほなり　秘　姫君の事をいへり
おとゝは御木丁へたてゝ　箋　夕霧と玉かつらとなり
そのことゝなくて　秘　夕霧のこと葉箋
うちまゐり　參內の事なり
わかきをのこともは　河　男共チノコトモ　傍人チノコトモ　遊仙窟
いましめ侍る　箋　誡なり　私物をいひをしふる心歟
秘　奉公すへきよしを申となり
今はかく世にふる數にも　花　玉かつらの返答の詞なり秘箋弄
過にし御事も　源氏の御事なり　秘　源なりかやうにとふらひ給へるも源氏の遺德となり箋
院よりのたまはすること　秘　冷泉院より姫君の事の仰なり箋弄
内におほせらるゝこと　秘　夕霧の詞箋弄
女一宮の女御はゆるしきこえ給ふなり　花　冷泉院女一宮の御母女御こき殿は玉かつらのあね君にあたるなり　箋　こき殿へ用捨あるへき事を夕霧の不審イナシなり　弄　弘徽殿たるへし冷泉院女一宮母の御事なり不審弘徽殿歟云々　私云こき殿は則女一宮の母女御なり不審如何

女御なんつれ〳〵に　秘　玉かつらの詞也箋
これかれこゝにあつまり　弄　玉かつらの方になり箋
三條宮に參り給ふ　弄　女三の宮なり　秘　女三宮の御かたなり夕霧に供奉して人々もまゐり給ふなり
すさく院のふるき心ものし給ふ人々六條院のかたさまのも　秘　是は注なり朱雀院又源氏いつかたにつけても女三宮をは人々心にいれたてまつるなり弄
このとのゝ左近中將左中辨侍從君　花　是は皆鬚黑の子達なり右大臣の御ともして三條宮に參る中將辨は下の恭の所にけんそしたる人なり　箋　中將右兵衛督三男也　辨右大辨四男也　侍從頭中將五男也
秘　玉かつら腹の鬚黑の御子三人なり弄
ゆふつけて四位侍從　秘　薫玉かつらの御かたへ參り給へる也　箋　晩してといふなり　弄　かをる玉かつらの殿へわたり給ふ也大納言藤中納言なとの後に此侍從わたり給ふなり　花　夕つけてかをる君玉かつらの殿へ參り給ふ也是よりは三條宮の事にあらさるなり
にほひかと　河　匂香なり　秘　にほひと香となり箋
ひめ君ときこゆれと　弄　をさなくともかをるには心

ひくらんとなり　秘世をしらぬひめ君も心はひくへきとなり箋
ひむかしのはしよりのほりて　弄念誦堂の階なり
いとすかせたてまつらまほしき　秘あまり實法なるさまのしたまへれはとなり
宰相君をりてみはいとゝ匂ひもまさるやとすこし色めけ梅のはつ花　秘色しきそへはやとなり箋
くちはやしときゝて　秘ちと口とき人なりと思ひてなり
匂薫よろにてはもき木なりとやさたむらん下ににほへる梅の初はな　秘もき木は枝もなき木なり我身色香なきやうなれともとなり　花「かれはてゝもき木になりし昔よりたき捨られん日をそかそふる俊頼「我といへはあたこの山にしをりするもき木の枝のあちきなの世や同　河野宮歌合顯か判の詞云ちくさにゝほふ花のあたりにはもき木のやうにてましりて侍れと云々　歌の心は梅は本來の根さしてもちて出たるを色香なれは木つき枝さしは物けなくとも根本のかをりはうせましきとなり　以上箋の分注之　河杌（秏ズッヘイ）ゴツ廣韻云樹無枝なり

さらはそてふれて　秘袖ふれてみ給へかし不審ならはとなり箋
色よりもと　秘是よりは人々のいふ詞なり弄　河「色よりも香こそあはれとおもほゆれたか袖ふれし宿の梅そも　箋こゝの女房達の云なり引歌色よりも香こそ云々　花さらは袖ふれてみたまへはかをるの詞なりまことに色よりもといふは後達の返答なり古今一首の歌の心をもていへりかをるはそのかうはしき事たくひなきにたよりて色よりもといへるは取あはせて妖艶にきこえ侍る
おもなけれ　河つれなけれなりおもてつれなくなといふ心なり
まめ人とこそつけられたりけれはとくしたり　河苦くるしき心なり　秘屈したるなり　秘かをるのほのかにきゝ給ふなり
あるしの侍從殿上なともまたせねは　秘昇殿もいまたせさる人なりまへに三條宮へは夕霧のおくりはかりに參り給ふなり所々の參賀もせてひまあるなり箋弄
せんかうのをしき　河淺香折敷

おとゝひねひまさり給ふまゝに故院に　花おとゝは右大臣夕霧也　故院は六條院なり　秘夕霧の事玉かつらの詞弄

この君はに給へる所も　秘薫なり弄　箋似ぬこそ道理なれとなり

かの御わかさかりそ　箋玉かつらの見給はぬ以前の源氏のかをるの時分の事をおしはかりての給ふなり

いとすかせ奉らまほしき　秘餘賞法なる樣のし給へれはとなり

かうさまにそ　秘源氏の事を思ひやり給ふなり弄

なこりさへとまりたる　薫の立かへりし跡なり

めてくつかへる　河感しかへるなり　秘再三めてたるなり　箋絶倒の心なるへし　弄あまりに太心ならすなるなり

侍從君まめ人の名を　花かをる侍從なり箋　秘かをるの心なり

すき物ならはさん　ならはさんとならはんと兩義なり三本さ文字不入也　歌よみかけたはふれ事いひし人々の事なり

藤侍從のもとに　秘玉かつら腹の侍從なり箋

おなしなほしすかたなる人　秘かをるとおなし直衣なり弄　花まへよりおなしなほしすかたとありまへよりはさきよりといふ心なり藏人少將の事なり

たちわつらふ少將なりけり　姫君の事ゆゑにつねにうかゝひありくなり藏人少將なり

しん殿のにしおもてに　秘注にかけり

くるしけなり　秘薫の心なり箋

いさしるへし給へ　秘かをるの藏人少將にの給ふなり弄

梅かえをうそふきて　河梅か枝催馬樂呂　弄催馬樂一段梅かえにきゐる鶯や春かけてはれ春かけてなけともいまた雪はふりつゝ二段

つまとおしあけて人々　秘うちの女房ともなり弄箋

女の事にてりちのかたはかうしもあはせぬを　花呂は陰なり女も陰なれはえたりかほにあはせぬ心にや又呂は双調なりその聲たかきによりて下こゑにあはするをかうしもあはせぬといふにや私かたうもあはせぬとあり如何　弄呂は女に屬せぬをとなり　私此義如何　秘心得かたき事なり女のかたよ

りはつけにくきことなるをよくつけたるなりいたしとはほめたるなり　弄いたしとはほめたるなり

箋呂は左の手ちとてんほうなる物なれは女の所作には相應になきをつけ事はよくつけたるなりいたしとは痛なり人の所望もなきにつま戸おし明てもて出たるやうたいさし過たると薫の心に思ふなり種々の説々あり

ひはもになくいまめかし　秘此琵琶すくれたるよし末にもみえたり箋

かたみにゆつりて　箋花源侍従と藏人少將とたかひにゆつりてかきあはせ給はぬとなり　弄かをるとあるしの侍從となり云々

侍從の君して　秘あるしの侍從なり

故致仕のおとゝの御つまおとに　花薫は柏木の子なるによりて祖父のおとゝの爪おとにかよふにやと也　弄玉かつらかんの君の御子侍従して云ひ出し給ふかをるのつまおとの故ちしの大臣に似たりと人のいひしをきゝしかはゆかしきとすゝめ給ふなり箋　箋致仕大臣薨の義此段にてみえたり是も雲隱の卷の中の事と心得へし

うくひすにさそはれて　箋鶯聲誘引來花下　河古、花のかを風のたよりにたくへては鶯さそふしるへにはやる　以上河　箋不可及引歌

つめくふへき事にもあらぬ　花つめかくすへきことありてつめかくすははちしめたる心なり又ことにつきてつめかくすへきにもあらぬといふにや　私つめくふもはちたる心おなしくや

つねにみたてまつりむつひさりし　弄玉かつらの父ちしのおとゝにむつひさりしことなり　秘玉かつらの心こゝにはしめて致仕大臣うせ給ふ事みえたり

この君はあやしく故大納言の　秘柏木にゝたるさなり　弄玉かつらの詞なり

さきくさうたふ　河此殿也　藏人少將のうたふなり

うちすくしたる人も　秘年老たる人もなしとなり

故おとゝに似たてまつり　箋鬚黑なり無能の人のよし此段にてかき出せり

さかつきをのみ　弄盃をさしかはすなり

ことふきをたにせんや　花言吹は男踏歌にある事なり　秘祝言をすゝめてうたはせたるなり

竹川をおなし聲に　河「竹川のはしのつめなるや花そのにわれはなそのにわれをはゝなてめさしくはへて」おなし聲といふは未練の人なれは兩人して同音に出し歌をしたる歟　花おなしこゑは以前の梅かえ此殿とおなし呂の歌をいふにや　弄さきのうたひの同し聲なり　秘河海説いかゝ同調子にうたふなるへし　箋此殿も呂竹川も呂なるをしかも同調子にうたふなり

ゑひのすゝみてはしのふることもつゝまれす　河酒顯二本心一と云事歟伊行釋

いかにもてなひ給ふそと　これは盡期もなきなとゝいふ體歟

うけひかす　秘薫なとの酒を辭したるなり

なにそもそなとさうときて　花細長を源侍從の君の纏頭にいたしたるをこれは何そもそとてあるしの侍從にうちかけていそき出たるなり　秘何事そつきなし思ひもかけすといひてきぬを辭したるなり　弄わかくてはつかしかる心なり　箋何事そつきもなしなとゝてきぬをさしかへせは興もなきにあるしの侍從にかつくるなり

ひきとめて〳〵かつくれと　かをるを引とゝめて又あるしの侍從のかつくるなり

みつうまやにてよふけにけり　河水驛　此語踏歌所よりいひはしめたり無饗應の義なり是は俗にすゑきしつると云事歟心は同事なり　花水驛の事初子の卷にしるし侍り　秘竹川は踏歌の時うたふ歌なれはかくとりなしていへり下心は思ふことのかひなきをいへり箋　弄竹川は諸歌の時うたふ歌なれは此夜竹川をうたひしによりていへり水うまやにてといふは勞してかひなき事をいへりこゝにては其心なり　追聞書に水驛とは驛路に飯驛水驛とてある事なりそれを本說にして踏歌にも水驛なといふ事あり今夜竹川をうたひしかは踏歌の心によせて水驛にてといへり心は勞して曲もなきよしなり水驛とは踈なる事なれはなりわか思ひのしるしもなきをよそへてかくいへるなり

少將は　弄藏人少將なりのこりてよめり

わか身はいとゝくつしいたく　箋藏人少將の心なり　河是も苦歟但うらみたる心なり物えんしなとの心歟

藏人少將 人はみな花に心をうつすらんひとりぞまどふ春の夜のやみ　秘人々の源侍從に心うつるへしとなり　箋姫君の御方の人々は皆薫に心を歸して我は中空のやみに迷ふへきと藏人少將の恨なり

河讀人不知 折からやあはれもしらん梅の花たゞかはかりにうつりしもせし　弄女房の中よりよめりたゝ折からにこそ心をまどはすらめまことは心うつさしとなり　秘女房の中よりよめり何事もおりからをあはれとみるはかりなり花のにほひにはかり心をうつすにてはなきとなりまことにはこゝろをうつさしとなり　箋折ふしの情をはたれもしるへきなりしかれはとてかくはかりの事に心のうつる事はあらし物をとなりかはかりは香をおもてにてかくはかりの心をふくめたり此歌の作者は女房の中より詠し出せり讀人しらすのことし

よへはいとみたりかはしかりしを人々いかに見給ひけんと　秘薫の文の詞也箋弄

みたまへとおほしく　秘玉かつらにもみ給へとおほしくて假名にかき給へりと也箋弄同

薫 たけ川のはしうち出し一ふしにふかき心のそこはしりきや　拾遺躬恒 河一もみち葉のなかるゝ時は竹川の淵のみどりも色變るらん　大和國宇陀郡有竹川流之由見舊記　花はしうち出し一ふしは竹川の曲をうたひし事はしとは竹にも川にもよせある詞也　秘はしは橋と詞の端とをかねたり姫君をゆるし給への心もあるなり「竹川のはしのつめなるや花園に我をはゝなてめさしくはへてはなてはゆるせと云心なり　箋然れは薫をはゆるし給への下心なり先夜ゐるしの侍從竹川をうたひしそのゆくへなれは此催馬樂をひくなり

院にもおくれ　箋源の御事なり

はゝみやのしとけなく　箋女三宮なり

この君たちの　秘玉かつらの子たちなり

けにいとわかく　弄藤侍從の返事の手のよからぬなり　私けにとは手なとのあしき事をはつかしめ給ふといふにあたる也

よへは水むまやをなん　花源侍從よへのふるまひを人々あやしかると也(さくかへり給ひしをイ)　秘先夜かをるの水うまやにてとてとゝまり給ひしを人々もとかめしと返しにかくなり弄　箋薫の心には姫君の御あたりの心さ

しをもとけすしてすみやかにかへるうらみを水うまやといへるを今返答には引たかへ面をとりて隨分興を催し醉をすゝめ申つるを水驛とあるは近頃面目をうしなひたると聞とかめたるよしなり

返藤侍従
竹川によをふかさしといそけ（きしイ）ともいかなるふしを思ひおかまし　秘我方を卑下してかをるをかこちたる也　弄かをるの早くかへり給ひしをとかめなからまた何事にか思ひおきてとゝまり給はんと卑下したる心なり　箋此歌一段とてにをはめつらしき歌なり此格一つあり能限を付へし薫の水うまやにてよふけにけりと夜のふくるをいとひ御かへりありしてそことわりなれといひて下句にけにもや御心のとまるへきふしもあらはこそとなり

此ふしをはしめにて　秘かをるの藤侍従の御かたへおはするなり箋弄

侍従の君もわかき心ちに　あるしの侍従なり箋弄

さく櫻あれはちりかひくもり　弄歌の心なり　河櫻さくさくらの山のさくら花咲櫻あれはちるさくらあり　古さくら花ちりかひくもれ老らくのこむと云なる道まかふかに　箋此引歌ちりかひくもれの詞はかりをとれり

はしちかなるつみも　秘人しけからぬ所なれはひめ君たちのはしちかなるつみもなしとなり此油斷にて少將にもみえ給へり弄箋

十八九ほとにや　花姫君中の君なとの事　秘姫君たちの事なり　弄あね姫君の事なり又云姫君兄弟の事なり必十八と九との事にはあるへからすそのほとゝいへり　箋あね姫君一人にみる義あり不用之末にとり〳〵にとあり兄弟分明なり

けにたゝ人にて　箋まへの詞にひめ君をはさらにたたのさまにもおほしおきて給はすとあり平人にはみせしとおほすも尤の事となり仍てけにといへり

いま一ところは　秘中君なり弄

にほひやかなるけはひこよなし　秘にほひやかなるかたはあね（ひめイ）君はまさり（れる也イ）さまなり

侍従の君けむそし給ふとて　弄姫君たちの弟也藤侍從なり　箋見證なり　鞠なとにもあり

あに君たちさしのそき給うて　秘侍従の君の兄なり　弄中將辨君二人なり

中將宮つかへのいそかしう　秘後に兵衞督なり　宮

つかへにひまなしとなり　弄みやつかへにひまなくて私のみやつかへおろそかなりともおほしすてしとなり　箋宮つかへひまなき故に兄弟なとへも疎遠にて侍従のおほえにおとりたるとのことなりたはふれいへり

辨官はまいて　秘宮つかへに障なくて思はすにおこたりて細々まゐりこさるとなり　私まいてとは中將よりも辨官は政官にて毎日萬機の政にあつかる職なり仍てかくいへり　箋凡尚書郎は管轄之任權衡之職也尤撰其人上象七星故也云々　云握蘭職也私尚書郎はすなはち辨官なり

うちわたりなとまかりありきても　秘兄中將の詞なり弄　箋兄弟二人の心のうちと云々但中將一人か次に年の事あり　私中將の詞にて可然歟

ことのおはしまさましかは　箋故殿は鬚黒なり　秘内まゐりの事なとなり弄箋

廿七八のほとに　秘中將なり　弄鬚黒の息左近中將姫君たちの兄の辨の事ともみゆ　箋中將なり一義には辨ともいへり

この御ありさまともを　秘故殿の素意のことくにありたきとなり

おまへの花の木とも　秘姫君たちをらせてみ給へり

おかしき櫻をゝらせて　箋中將のをらせ給ふてなり　弄姫君たちのをらせておかれたるを兄たちの見て昔あらそひ給ひし事をいひ出すなり

うへはわか君の　秘玉かつらはいまうとの君のとさため給ひしことなり

いとさはなきのゝしらねとも　箋中將の我身の事なり姫君たちのをさなくて花の木のあらそひになきのゝしり給ひしといふ事此詞にて聞えたりそのことくにこそ中將はなかりつれ制（分ちイ）しかねたる様體の心いたくやすからさりし事をかたり出るなり

此さくらの老木になりにけるに　河童稚悉成人園林半喬木白氏文集　箋次に櫻のかけ物の事をいひ出さんとての序なり

あまたの人におくれて　弄父鬚黒等の事なり　兄の心中物語云々　玉かつらに對面すとみゆ

人のむこになりて　秘中將の事なり誰人のむことは見えす箋

花に心とめて　秘花ゆゑにのとかに居給ふとなり弄

こ箋

おほくはこの御ありさまの　秘玉かつらを思ひすて
給はぬとなり
何につけてかは　弄冷泉院の御心をいふ　箋かんの
君かくおとなしき人のおやといふよりきこえ給ふ
にそ有けるといふまて草子地なり　私冷泉院のみ
かとはおほくは此御有様これより草子地なり
院へまゐり給はん事は　弄玉かつらの子共兄弟なと
の語也只今玉かつらにいふにあらすかね〳〵いひ
し事をかけりこゝに玉かつらむかひ給ふ座の體と
はみえすと云々此義いかゝ玉かつら居給ふとみゆ
この君たちそ　秘兄弟たちなり中將なとなり
ことふえのしらへ花鳥の色をもねをも　箋花紅葉も
詩歌管絃も時を得たる所からなるものなりなと中
將の玉かつらへの異見の詞なり　弄花に玉かつら
に向ひて申給ふ座の體にはあらすかねかねいひし
事をかけりと云々以外相違なり
春宮はいかゝなと　秘中將なとの申給ふなり　箋上
の詞よりつゝけて中將の申なり東宮より御所望の
事始て見えたり

いまやはしめよりやんことなき人の　秘夕霧の第一
女御に參り給ひし事なり弄　箋玉かつらの返答也
殿おはせしかは　秘鬚黒なり
の給ひいてゝ　箋玉かつらなり
中將なとたち給ひて　弄姫君たちの兄なとなり
あらそひ給ふさくらをかけ物にて　花宋朝に王荊公
といふ人鐘山にありて葉秀才と碁をかこむ梅詩一
首をもて賭とす秀才まけて不能作詩王荊公代て作
れる事あり後代の事なれと花を賭にすることあひ
似たるにや　秘花鳥に王荊公か事をひけり興ある
事なり又宇治に菊をかけ物にする事もあり箋
かす一つかち給はん　三番に二番かちたる事なり
花をよせてんと　箋櫻木をかたつけんとなり姉妹の
たはふれなり
れいの少將　秘藏人の少將なりあるしの侍從のかた
へわたり給へり　藏人少將なりあるしの侍從のか
たへわたりけるに兄弟つれてみな出しかはなり箋
うちつれて　秘侍從をも中將辨君のうちつれて出給
ふなり
さくら色もあやめも　秘あね君なり　花あね君はさ

くらのほそなかをき給へるよしみえたりさてあね君の事をこゝにはいへり　箋あね姫君の衣裳前にくはしけれはそれとみわかつさかけり

けにちりなん後のかたみに　河「櫻色に衣はふかくそめてきん外のちりなん後のかたみに　箋引歌同

右のかた勝給ひぬ　秘いもうとの君勝給ふなり弄

こまのらんそうのおそしや　花高麗樂は右なり競馬なとにも勝の方に亂聲をすれは右かたせ給ふによりていへり　秘高麗の樂なり競馬の時右の勝たるにはこまの樂をするなりそのためしにかくいひたはふれたるなり弄箋　河高麗亂聲　高麗は右の物なれはなり

右に心よせたてまつりて　弄にしのおまへとはいもうとのかたによれりといふ心也　箋妹君のかた也もとより此君のすみ給ふかたにありつる花の木なるを左のあね君のいはれぬ競よりなりしを道理にまかして此君にうちかち給へると右方の人とりはやし申なり　弄花の木はいつかたによるともなけれとも我方と思ふ人にてもとよりなとゝいへり

にしのおまへによりて侍る木を　花櫻の木は二本なから西のおまへにあるを姫の（姉君イ）左の木にとりわけてとし比あらそひありつるについに西の御木になりたるといふ心なり

なに事としらねと　秘藏人の少將の心なり

うちとけ給へるをり心ちなくやはと思ひていてゝいぬ　少將の心つかひ奇特なり

又かゝるまされもやと　弄後々の事なり藏人少將又見もせはやとうかゝひしとなり　箋是より以後の事をいふ

君たちは花のあらそひ　箋姫君たちなり

まけかたの姉君　箋姉姫君左方　弄よりも後のことなり

さくらゆゑ風に心のさわくかな思ひくまなきはなとみる／＼　秘おもひくまなきとはおもへともそのかひなしとなり我身にはかた人せぬことをいへり　河後撰「人はかる心のくまはきたなくてきよき渚を（思ひよ）いかて過けん少將内侍　思ひくまなきもし此歌の心歟　弄おもへともそのかひなきよしなり

御かたの宰相君　秘あね君の方なり弄箋　私をりてみはいさゝ匂ひもまさるやとの歌をかをるによみ

かけたる人を宰相君といへり同し人なるへし
（宰相君）さくとみてかくはちりぬる花なれはまくるをふかきうらみともせす　弄世を観したる心なり　箋咲もあへすちる花なれは我かたの木とみぬも恨なしとなり
きこえたすくれは　姫君に方人して力をそへたるなり
右のひめ君　箋妹中君なり
（中君）風にちることはよのつね枝なからうつろふ花をたゝにしもみし　弄枝なからは木なから我方になるを云なり　秘まけしの心なり風にちるはうらみもなし世間なれはなり技なからは木なから我かたによるとなり　箋風に花のちるは普通の不珍事なり其木なからうつろふ花をはさためて遺恨に思ふ人のあるへきとなり　私是は宰相君のさくとみてかつはちりぬるとはかなくいひなしたるにあたりてよめるなり
この御かたの大輔の君　箋中君勝方の人也
（大輔君）こゝろありて池のみきはにおつる花あわとなりて（ぬるイ）も我方によれ　河古「枝よりもあなたに散にし花なれは落ても水のあわとこそなれ
（勝方の童）おほそらの風にちれ（公イ）ともさくらはなをのか物とそかきつめてみる　箋下界にちる花をもそなたの物と負方はえし給ましきとなりかきつめてはかきあつめてなり
左のなれき　河馴公なり姫君のわらはへなるへし
（馴公）櫻花にほひあまたにちらさしとおほふはかりの袖はありやは　秘袖はありやはとはいつくにかあらんとなり弄箋　河「大空におほふはかりの袖もかな春さく花を風にまかせし
心よわけにこそみゆめれなといひおとす　河落すなり下すなり　花花を風にまかせしとおほふはかりの袖はあまりに心せはしと負方より右方をいひくたしたるなり　秘まへの歌のおのか物とその何ををいふなり　箋わらはの花をひろひておのか物とそかきつめてみるといへるもことの外雅量のちひさき歌なり此歌花の色香は天下へ押出して匂ひあまたに甑てこそ興もあるを我方の木とさため給ふは心せはきとなり　私しかもおほふはかりの袖もなき物ゆゑにとなり

かくいふに月日はかなく　秘とかくして姫君もさしたけ給ふとなり

女御うと〳〵しく　秘女一宮の母女御弘徽殿なりうと〳〵しくとは我むつかしく思ひ給ふかとなり
箋冷泉院の御詞弘き殿の女御のうと〳〵しきゆゑに玉かつらの隔心なると仰なし給ふなり　弄玉かつらの兄弟の冷泉院の女御より玉かつらの方へなり　私是は弘徽殿女御より玉かつらへの給ひつかはす詞歟女御方からなりうと〳〵しくおほしへたつるにやとは玉鬘と女御と疎遠なるとおほすにやうへは冷泉院此事を女御のいひさまたけ給ふと云やうに仰らるゝとなり

うへはこゝにきこえうとむる　秘冷泉院の女御をにくけにおほしたるとなり弄

たはふれ事もくるしう　箋よし〳〵實の仰にあらすとも女御の御身にとりては迷惑となり

さるへきにこそ　秘イ箋玉かつらの心定れり御宿世にてこそとなり

はゝ北のかたを　秘雲井鴈なり弄箋　花藏人少將の母雲井鴈は玉鬘の內侍の督のあね君なり

いとかたはらいたう　秘雲井鴈の文の詞箋　弄玉かつらのかたへなり

おほしゝるかたもあらは　秘人の事を思ふはたれも同事となり　箋やかて姫君の事にてもおほしゝるへしとなり弄

くるしうもあるかなと　秘玉かつらの心也箋

いかなる事と思ひ給ひさたむへき　秘玉かつらの返事の詞也弄箋

まめやかなる御心ならは　箋眞實の志あらはとなり弄

この御まゐり過して　箋仙洞への女御まゐりの事なり　私草子地か茲にかけり

さしあはせては　箋姉妹の君たちを一度にありつけ給はんは外聞ことかましくやとなり

をとこはさらにもしか思ひうつるへくもあらす　秘いもうと君には思ひうつるへくもなきとなり

たのみかゝらす　箋院へ御參りの治定するを云也

侍從のさうしに　弄藏人少將玉かつらの侍從のさうしにわたり給ふなり

うはひとりつ　河奪取なり

たゝ世をうらめしけに　文のさまなり
箋つれなくて過る月日をかそへつゝものうらめしきくれの春かな　箋面は暮春の歌なりしたふこともしらすかほに春の日数うつり行は誠にかそへあへぬ間にはや春の暮ける事よとなり下の心は姫君を御ゆるしもなくてつれなき月日のいたつらに暮にけるさへあるを院への御参りのよしは彌生のそらのとちめのことくなれは物うらめしきといへり
人はかうこそのとやかに　秘少將のこゝろなり　箋かほるの文體を思ふなり
かたへはめなれて　箋傍には例の事としてなり
れいかたらふ中將のおもと　弄姫君の女房也少將の文なととりつたふる人也秘箋同
この返事せんとて　箋かをるの返事なり　弄かをるの文をもちて玉かつらの方へ侍從のゆくを藏人少將のみてはらたちし心なり
うへにまゐり給ひしを　秘玉かつらの御まへなり　箋藤侍從の參るなり
いとはらたゝしう　秘少將なり　箋少將の心なり
ひとへに物そおほえける　河「うしとのみひとへに物はおもほえて左り右りにぬるゝ袖かな　私此引歌にはおもほえでとあり此少將はうしとのみ思ひはてたると云也但他抄の例不引之
このまへまうすも　花此まへ中は藏人少將の心はひとへに姫君をと思はんをとはしと中將のおとゝも思へとも我まゝならぬ事なれはいらへもせぬなり　秘中たちの女なり弄　箋少將のおもとなるへし
河御前にて（イナシ）こり申す心也
たはふれにつゝ　箋手にあましたる心なり
つらきもあはれもといふこと　花人のつらきいかにもつらかるへきかゝへりてあはれなといふは別の古歌のあるへきにや古今歌「立かへりあはれとそ思ふよそにても人にこゝろをおきつしら波　此歌の心なとやかなふへからん　秘引歌未勘「うれしくは忘るゝ事も有なましつらきそなかきかたみなりける（同イ）心は此うたの心なるへし花鳥には立かへりあはれとそ思ふの歌をひけり箋弄同し　弄うれしくは忘るゝ事もの歌なとも可然歟云々
いひやるへきかたなき事なり　秘はや事定りたる事なれはなり　箋中將のおもとの心なり

なくさめ給はん御さま　花いもうとの姫君の事なり
藏人少將思ひうつらふへき心のなきよしは上にみえたり　秘中姫君をといふ事なり弄
けにかの夕くれのけんそうなりけんに　河顯證也あらはるゝ也　見證也伊勢物語眞名本に見ゆ弄　箋中將のおもとの心なり碁うち給ひしときあらはにならへてみたまひしかはいもうとの君には心うつるましきと思ふとなり　花侍從君の御碁の見證せし夕くれよりかゝる思ひはあやにくに成たるをいふなり河海にはあらはに見し事にいへり　私花鳥の義如何　秘の義可然也
きこしめさせたらは　秘此中將の云なりのそき給ひしと玉かつらへ申たらはとなり　弄中將玉かつらの方の女房の詞也かへりて藏人少將をかこつなりむかひ火つくる此心なり
心くるしと思ひつる心もうせぬ　箋隨分いかにかと思ひつる心もうせてちかころうしろめたき御心そと中將のおもとのうらみかへすなり
むかひ火つくれは　河向燒日本紀人のはちたちぬへき事をいはれぬさきにこなたより又はらたちかゝる心なり　花火のつきたるにはこなたに又火をつくれはむかひの火はかならす消るをむかひ火といふそのことく人の腹をたつれはこなたに又腹をたてかへれは人のはらたてはやむなり　箋彼方より火のつきたるを此方より又火のつくれは消ると云本縁あり神代の事の人のむかひよりいかるを我も又腹立していかりかへすをかくいひならはせり
私是は中將のおもとの心に藏人少將の心中を至極道理かなと思へともすへきかたなき事なりさるときに此のそきて見し事を少將のかたるをよきかたち所そとおもひてかくむかひ火つけしなるへし
いてやさはれや　秘藏人少將の詞なり　箋さらはさてあれとも我身はいらぬ物そとふてたり
おひらかにめしいれて　秘常にはおとな〳〵しきと云詞なりこゝにてはまことにといふ詞なり助言なと申たかりことなり　弄まことにと云心なり　箋おひらかは誠と云心なりと云々　箋曰隱便にと云か如し
めくはせたてまつらましかは　河めくはせはをしふる心也　花めくはせて碁の手をしふるなり　箋ま

くはせなり助言の心歟
こよなからまし　事の外よからんと云なり
藏人少將
いてやなそ數ならぬ身にかなはぬは人にまけしの心也けり　秘 冷泉院へ參り給ふは我身數ならぬ故そとなり　箋 まけしの心はありなからしかも勝えぬなり數ならぬ身に叶はぬとなり
中將のおもと
わりなしやつよきによらん勝まけを心ひとつにいかかまかする　河 圍碁の好手は强弱によりてあるへき勝劣なれはめくはしせんによるへからすとよめるなり　秘 更にわか心にまかせさるなり助言も曲あるましきとなり　箋 一切の勝負はもとよりつよき人のかけ物なれは見證の心にはまかせたきと也下心はめましを心にまかせてしたまはん事は叶かたきとなり
つらかりける　箋 少將の心なり
又藏人少將
あはれとて手をゆるかせしいきしにを君にまかする我身とならは　河 碁にいきしにと云事あれは我身をよそへていふなり　秘 少將の歌なり我か生死をは君にまかせたるなり　弄 藏人少將の歌なり又よみたり手をゆるせは藏人少將に姫君をゆるせとなり

上の詞に何をたのみにていきたらんかうきこゆるも殘りすくなくおほゆれはと云々如此姫君の上よそに定り給はん日は少將の命の限りと聞えたり然れは碁の上に打たる手を違變して手を見る事ありそのことくに院への御事今にも御違變ならは我は忽蘇生すへしとにかくに少將の生死は姫君の御進退にあるそとなり
又の日は卯月に　箋 卯月一日の事なり　秘 平座なと有へし箋同
內に參りさまよふ　卯月一日は旬なけれは平座あり少將の兄弟たち此殿に參內なり
いたうくしいりて　藏人少將のさまなり
母北のかたはなみたくみて　秘 雲井鴈なり箋
おとゝも　秘 夕霧の事なり
院のきこしめさむ　冷泉院なり　秘 少將の心をかけたる事なり
おふな〳〵　秘 ねんころになり弄　箋 常にはねん比なり此段も心通するなり但箋おなしわなかしこなと云類歟云々
たいめんのついてにも　秘 正月一日に談合し給し時

と云々少將かくふかく思ひ給ふとしらはあなかちに申へき物をとなり弄
みつからあなかちに申さましかは　箋夕霧の直に申さは玉かつらの同心なくては叶はし物をと後悔なり
さてれいの　秘藏人少將の歌なり弄
藏人少將
はなをみて春はくらしつ今よりやしけきなけきのしたにまとはん　花のちりはてゝしけきかけにまとはん春より後をうれふるなり御參りのちかつけはなり
御けさう人のさま〳〵と　かをる藏人少將の外にも又あるへし
中將のおもといきしにをと　秘前にありし歌の事なりいきしにをといひしさまのと讀きるへしことにのみはあらす思はれたるさまを中將のおもとの申すなり　弄いきしにのなと少將の歌にいひしまてをいはすとなり又說いきしにをといひしさまのとよみきりてことにのみはあらすとよむと云々又云こと葉のみにはあらすあはれなる心ありしとなり
おとゝ北のかたの　秘夕霧雲井鴈なり

とりかへありて　秘中將君をとなり箋
めさましき事　箋及ひなき事也ことと句を切なり
かきりなきにても　箋極上の人をいふいかに攝關家なりとも臣下にはゆるすましきなり況やたゝ人にをやとなり　玉かつらの華族にあらす髭黒の宗意をたかへしとなり
をりしもこの御文　花花をみて春はくらしつの歌なり
返玉かつら
けふそしる空をなかむるけしきにて花に心をうつしけりとも　花中將のおもとの藏人少將の返事なりひころの思ひかなはすしてことかたに思ひうつろふ事をよめる歌なりさてたはふれにのみとりなすもいとはしといへり　弄玉かつらの返しにそらおほれしてけふそしるとよめり　秘公家（界イ）にとりなしていへり御まへなる人のかくなりけふそしるとそらおほれしてよめり　箋少將の君をはうはの空をなかむる人そと思ひしに花に執心のふかきよしをは今ハ始めてしりけるこそらおほれなり
あないとほし　秘傍の人のいへり
かきかへす　不書改なり

九日にそまゐり給ふ　河髪黒之大君參入冷泉院四月九日也　本上天皇納妃例　裏書云后妃也　寬平法皇以京極御息所爲妃左大臣時平公の女　秘四月九日なり玉かつらの嫡女院也女御にまゐり給ふ京極御息所の例なり　弄

右の大殿　秘夕霧玉かつらと兄弟たるよしなり弄

夕霧と玉かつらと兄弟たるの由　夕霧は源氏御養子　玉鬘は左大臣御　然は夕霧玉鬘は　御吟味可被成也

北のかたも　秘雲井鴈なり弄箋

この御事ゆゑ　弄藏人少將事ゆゑなり　箋としころうと／＼しかりしを藏人少將の事ゆゑ細々申かはし給ひて又此女御參りにそらめあらんもいかゝとなり

あやしうゝつし心もなきやうなる　弄藏人少將事也

秘雲井鴈の文の詞うつし心もなきやうなる人とはイナシ藏人少將此ひめきみの事をうちわらひたるをいへり

うけたまはりとゝむる事も　秘御まゐりの事そなたよりもおとろかさせ給ふへき事にてある物をこなり

おひらかなるやうにて　秘さらぬやうにてうらみたることなり弄

みつからもまゐるへきに　秘夕霧よりの文の詞なり

つゝしむことの　秘物いみなとなるへし弄

さうやくにさて　河雜役也　源少將夕霧六男後に頭中將任大納言侍　兵衛佐同七男四位少將母雲井の雁藏人兵衛佐と樵本にいひし人也　箋上古は攝關の子息も雜役を勤せらる其由也中古以來近代に至ては大臣以上の子孫これをつとめす此物語は上古の義なり

大納言殿よりも　秘紅梅大臣なり弄

北のかたは　秘此姬君はまき柱の君と別腹の兄弟也中通し給ふ事もまれなるとなり　箋紅梅の北方は髭黒の嫡女槙柱の君なり母式部卿宮御女　たゝ今院へ參り給ふ姬君とは別腹の兄弟なり紅梅と玉かつらとも兄弟なりいつかたにつけてもいへる是なり

藤中納言はしも　秘髭黒の息槙柱の君同腹の兄弟なり　しもといへる詞はおなし兄弟なれとも音信し給はさるをいへり箋弄

殿のおはせましかは　秘人々の心なり

れいの人にいみしき　秘媒せし中將のおもとなり花
いまはかきりと思ひはへる　藏人少將の文の詞なり
もてまゐりてみれは　中將のおもとなり
心ことにしたて　姫君の出たちのさまなり
このゝかはしの給ひし　弄姫君たちの父の事を思ひ
出たる折あはれなり　秘内まゐりなとの事なり
おとゝ北のかたのさはかりたちならひて　秘此藏人
少將は父母相具していかめしき人にて何事を思ふ
へきにてもなきにかゝるおもひをする事のあやし
きとなり故殿おはせましかはとよろつに思ひ給へ
るこゝろより感したる心にてかくおもひ給へるな
り箋弄　花是は藏人少將のおや二人をいふなり
かきりとあるを　秘まへのいまはかきりと思ひはへ
るとありし詞をいへり
この御文のはしに　箋少將の文になり
姫君
あはれてふ常ならぬ世の一こともいかなる人にかく
るものそは　秘おほめきたる歌なり命のかきりをは
しらさるなりなへての世のあはれはしれともあは
れといふことはいかなる人にいひかくる物ともし
らさることなり　弄おほめきたる歌なり　箋あはれ

さたに一ことの給はせはといふをかくいへり
ゆゝしきかたにて　花世の常なき事を思ひしるとな
り　秘いまはかきりとありし詞をいへり弄
かういひやれかしと　秘中將にの給ふなり
やかて奉れたるを　箋そのまゝ少將のかたへやるな
り
かきりなうめつらしきに　秘少將の心なり
をりをれほしとむるさへ　秘今院へ参り給ふとちめ
なり弄箋　箋藏人少將の心也　私時節の感をさへ
覺しゝるよといよ〳〵心のふかくしむるなり
たちかへり　秘やかて又申給へり
たか名はたゝしなと　河「戀しなはたか名はたゝし
世中のつねなき物といひはなすとも　秘箋弄引此
歌　箋此歌をかこちて引用るなりそなたの御名こ
そたつへけれとかこちたるなり此かこちとはかこ
つなり箋弄
藏人少將
いけるよのしたは心にまかせねはきかてやゝまん君
かひとこと　秘けふをかきりと思ふ比も心にまかせ
されはさても一言をもうけ給はらて命もたえぬへ
きかとなり　私一ことをもきかて心にもまかせぬ

死にやせんとなり　弄君か一ことは姫君の歌につねならぬ世の一ことゝあるをいふなりいきしにもわかまかせねはしねといふともしなてやあらんといふ事をきかてやゝまんとはよめるなり　箋生死を我心にまかせすして今日まて存命したれはこそ君か一言をも聞たれもしなき身となりなは君か一言は聞ましきよあふなき事かなとなり　私此箋の義尤面白し

つかのうへにもかけ給ふへき　河史記曰季札之初使北遇徐君云々好季札劒口不敢言季札心知之爲使上國未獻還至徐徐君已死於是乃解其寶劒繫之徐君冢樹而去從者曰徐君已死尙誰予乎季札曰不然始吾心已許之豈以死倍吾心哉呉世家　秘季札か事也河海にみえたり豈以死倍吾心乎と云語の意を用ひたり箋　箋姫君の御心にゆるす心のましまさはたとひ少將の死後にも季札かことく情をはかけ給ふへきをさもあらしとなり

ひたみちにもいそかれ　季札かことく死後になりとも御情あるへきならはひたすら死をもいそかるへきをさもあるましきとなり

うたてもいらへを　秘姫君の心なり又少將の文あるを姫君のみてなり

かきかへでやりつらんよと　秘かきあらためすしてやりけるよとなり弄

おとなわらは　秘御つき〳〵の人なり

まつ女御の御かたに　秘玉かつらの兄弟の女御なり弄

うへにまうのほり　秘冷泉院なり箋

后女御　秘后は秋好也　女御は玉かつらのいもうと也

たゝひとたちて　秘院の御事なり弄

かんの君を　秘玉かつらなり弄

心とゝめて　玉かつらの院に逗留もあれかしと冷泉院のおほすなり

口をしう心うしと　秘院の御心なり弄

源侍從の君　かをるなり

院のうちには　冷泉院の院中に薫にさうしを給ふと前にあり

この御かたにも　秘鬚黒の姫君の御かたなり弄

したにはいかにみ給ふらん　秘玉かつらの御かたに

て此姫君へはとき〳〵みえたてまつりしとなり
箋かをるも心かけ給ひし人の内なれはなり
かの御かたの　弄今女御なり箋
薫手にかくる物にしあらは藤の花松よりこゆる色をみ
ましや　花松よりこゆるは末の松山波こゆるとはの
心を思ひよせたり　弄我及ふ（思ふイ）程の花ならは餘所に
は見し物をとなり又松山の心にては松よりこゆる
と云義なり此も我及はぬ藤の松をこえたとなりよ
そ人なるをこゆると云義なり　弄松よりこゆるす
くるイまさるイ歌の心は女御の事をよめり又松山
の波の心にもよせたり　秘薫の歌なり松山の心あ
り我心のまゝならはよそにはなすましき物をとな
り　箋松山の心あり松よりこゆる可然なりよりは
詞よりもといふ事には不用之からといふ心に用之
なり然はこゆるにて然なり
我心もあらぬ　秘藤侍従の心には薫におはせはやと
思ひし事をよめり箋弄
返藤侍従むらさきの色はかよへと藤の花心にえこそかゝらさ（まかせイ）
りけれ　花ひめ君は藤侍従のせうとなるゆゑなり
弄薫におはせはやとおもへとも藤侍従の心にまか
せぬ事なりとなり　箋初心なる歌のさまなり　秘
紫は兄弟の事をいへりされと我心にはまかせさる
事といふなり箋
まめなる君にて　箋藤侍従のかをるをいたみ思ふ事
なり草子の地なり　秘藤侍従なり父おとゝの風の
あるとなり　弄藤侍従まめなりしとなり
いと心まとふほとは　秘かをるの心なり弄箋
かの少將はしも　箋しもの詞又こゝにもあり薫はの
とかにあるを藏人少將はしもあるか中に獨思ひわ
ひたるとなり
たえておとつれす　秘少將の中君には心をもいれさ
るなり　夕霧雲井鴈の心中をいかゝとおほす故に
中君をはゆるさんと玉かつらの思ふなり
院にはかの君たちも　秘少將は此姫君達參り給うて
後は院參もなきなり　夕霧の君たちは冷泉院へも
したしきとなり
内には故おとゝの心さしおき給へる　花内裏より御
とかめあるやうは故大臣殿内まゐりをせさせんな
とわら〳〵申されけるなるへし　箋今上の事なり
秘故おとゝかならす内參りあるへき事をいひおき

給へるにひきたかへ院へまゐり給ふ事をくちをし
くおほすなり箋
中將をめして　秘 姫君の兄なり　弄 左近中將に任す
るなり
御けしきよろしからす　秘 中將母上に仰の旨をかた
り申詞なり弄
昔人の御心の内にもかたふきぬへき　箋 あやしみ不審す
る事なり冷泉院へは何とも仰合ぬやうなる事なり
かねて申しゝことを　箋 前に中將のいへる事あり今玉
かつらへ打あたるなり
おほしうるかたこそにて　秘 玉かつらの思ひ給ふす
ちめもあるへしとなり箋
かんの君を申給ふ　弄 かんの君に申すなり
いさやたゝいまかうにはかにしも　秘 玉かつらの返
事かねてより思ひまうけさる事にあらす女御より
もねんころに宣ひしゆゑなり
思ひたゝさりし　弄 院へ姫君參らするなり
たれも／＼ひんなからん事をは　なにとて儀の事に
てもなかりしに各まへより異見はなかりしそさな
りひんなからんは無便なり

右のおとゝも　箋 夕霧なり　弄 息少將の事
これもさるへきにこそはと　箋 玉かつらの詞也　秘
宿世なるへしとなり
そのむかしの御すくせは　秘 中將の詞也箋　箋 宿世
と云事は目には見えぬ物なり然れとも内へは御縁か
續きの事そとは申なほしかたき事なり
中宮をはゝかり給ふとて院の女御をは　あかし中宮
をはゝかり給ふとも院には女御ましませは是もおな
なしほとのことなるへしとなり箋
うしろみやなにやと　弄 院の女御をうしろみのやう
におほすともさしもあらしとなり秘　箋 今の女御
に御あらは弘徽殿にかならす中よからす成給はむ
となり
君につかうまつる　箋 奉公には尊卑をわかぬ事なり
是は御位の君と院とは心のかはるへき事をいへり
女御はいさゝかなることの　箋 二つをくらふるに女
御と姫君との御間の心よからぬ事出來せは外聞み
くるしかりなむとなり
ふた所して申給へは　花 中將の君と辨の君となり箋
秘 中將と辨となり玉かつらの子ともなり弄

さるはかきりなき御おもひ　弄又是よりはしめたる
詞也　秘これより冷泉院の御寵のまされるをいへ
り
きこえわつらはすともことわりそかし　秘美人なる
をいへりけさう人のれほかりしもことわりと也箋
いかてかはかゝらん人をし　おほゆるまてと云まて
草子地也箋秘弄の義如何不詳なり
侍従もけちかう　弄薫なり　冷泉院にての事なり
梅かえにあはせし中將のおもと　秘梅かえをうたひ
し時和琴をひきし女房なるへし弄　弄正月廿日梅
かえうたひし時和琴引し女房なるへし藏人少將の
妹と云々イ
妹とみし末の詞に人の哀と聞もありさなり藏人少
將事を云へり此中將君なとにや
たゝにはおほえさりけり　箋かをるの心なり
そのこしかへりて　箋又一年なり
をとこたうかせられけり　河男踏歌正月十四日　箋
正月十四日式日也　天武天皇三年正月拜朝大極殿
詔男女無別闘棹有踏歌事　天平十四年正月十六日
御大安殿宴群臣云々琴歌曰新年始邇何久社供奉良
米萬代摩提丹　朝野僉載群載允亮撰　正月十五六日月時京

中士女踏歌云々　國史云天平六年云々在初子卷
天慶四年正月十四日踏歌舞人菊麿特裝左之將監作
有時以上左近衛大石富門垂纓着位袍淺沓
殿上人のわか人ともの中に　箋前六七日於御前被撰
定歌頭以下囊持以上人々之行列次第等其後於中院
習禮二三度前二日於中院試樂
四位の侍從右のかさうなり　河右歌頭前勸之　花右
のかくとう一本に歌頭なり　箋歌頭六人袴各一領
歌掌以下舞人以上具下樂衾各一條樂人九人綿各一
十四日の月　箋式日
御前よりいてゝ冷泉院へ　弄御せんよりは内裏より
なり　箋延喜十五正十四踏歌參所々尚侍并一親王
宿所等と云々
みやす所も　秘いまの姫君なりはしめて御息所とい
へり
右の大殿致仕の大殿のそうをはなれて　秘夕霧致仕
大臣の外の人々なしとなり弄同
この院をは　弄冷泉院物の上手にておはします　秘
冷泉院なり
見給ふらんかしさ思ひやりて　秘姫君の見給ふへき

ときつかひしたるなり
わた花も　花綿にて花をつくれりかさしのわた同前なり　弄踏歌のかさしの花は綿なり　箋八月被定踏歌之事　內藏寮可奉帖綿廿帖細屯綿一束祿料綿十連綿花料綿一屯糸三兩調進之件綿花之綿給作物所令削纏（ムシラ）之一左衞門官人技廿五枝進之云々然者箋云綿花は枝に付る歟
竹川うたひてみはしのもとに　秘去年正月の事を思へり　弄內裏にての義は綿を內藏寮の方より出す內侍と女藏人と御階のうへにて歌頭なと院（階イ）にのほりてうけとる又次の人々には五位藏人庭上にてうたふ又もとより庭に綿をつみおきて次々の袋もちなとに給ふ　箋先殿調子（發イ）　踏歌三反　言吹（音イ）　奏祝詞　囊持計綿（拜イ）　奏絹鴨（キヌガモ）　此殿曲　着座管絃　酒肴饌吹調子　唱竹川曲　即立座列立　如前歌曰唱之後舞人雙舞內侍二人分被綿且舞且退彈和琴自簾中出奏我家曲退出
過にし夜のはかなかりし　河藤侍從と竹川うたひし事なり　弄藏人少將の心正月廿日の夜の遊びの事なり

ひかこともしつへくなみたくみけり　舞の足ふみ手つかひもおほえぬさまなるとにや　秘冷泉院なり
きさいの宮　花明石中宮なり　私此義如何秋好中宮なり
うへもそなたに　箋秋好の御かたにて冷泉も御らんするなり
ひとりをのみとかめらるゝは　花藏人少將にとりわき酒をしひらるゝをめいほく（迷惑なるイ）なきといふなり　秘藏人少將のこゝろのおにゝかく思へるなり箋　弄踏歌に飯驛あり水驛は酒肴はかりなり物思ひありていたましうするとみゆ　同花鳥に后の宮を明石の中宮とあり如何ふむ空もおほえぬと云又盃も獨をのみなといへは是は玉鬘の女御の御方へも參て其御方にての酒と云へきなり（只后宮なるへし）秋好なるへし其次に玉かつらの女御へ參りての事と見るへし不然は中宮の御局と女御の局ほとかひとつ庭なとにもや
めいほくなくなん　弄藏人少將に酒をしひらるゝもかへりてはつかしとなり
夜一よ所々かきありて　弄物を舁にはあらすたゝこ

なたかなたへまゐりし體なり　問云男踏歌殿上人
はかりのうたひめくるにや一勘合點　私くるしくて
ふしたるにといふはかはるのことなり
源侍從を院よりめしたれは　薫を冷泉院のめし出給
ふなり
御前の事とも　內裏にての作法を冷泉院のたつねき
こしめすなり
かたうはうちすこしたる人　秘　院宣ふ也御自愛の御
詞也　弄年過たる人こそと也薫の歌頭とみえたり
はんすんらくを　河　萬春樂踏歌曲也　勘初音卷云々
弄踏歌にうたふ歌には我家此殿萬春樂何れにも此
曲云々　問云萬秋樂と踏歌の人のいふ事萬春樂と
もいふにや　一答萬春樂正說なり
わたとのゝとくちに　秘　薫なり聲きゝしりたる人と
ものいふなり
一夜の月かけは　秘　踏歌の夜の後なり弄
藏人の少將の月のひかりにかゝやきたりしけしきも
かつらのかけにはつるにはあらすやありけん雲の上
ちかくてはさしもみえさりき　花　藏人少將にては御
前にみえしは桂のかけにはつる事の有しとみえし
とは髭黑の姬君の簾中にてみ給ひしゆゑなりさて
くものうへにてはさしもみえさりきといへり　弄
祇云少將かたちよき人なりされと桂のかけに侍に
はあらすやとは桂男には非すやと云心也雲の上近
てはさしも見えさりきといへる其心見えたり　私
云如此薫のいへる少將をいひおとすやうにきこえ
たりさにはあるへからすかたちのよき人さほと御
前の月にはけおされたれはおくしてかれははした
なきと卑下なり少將美男也月の影にては桂男とも
いふへきを院中にてはさほとは見えさりし雲上ち
かくてはといへる其心なり　又云桂の影にはつる
とは桂男の事なりさやうにみえぬらんとおもふに
さもあらすやとうたかひたるやうの詞なり　又云
雲上を內裏にして冷泉院にては月はへたてなくみ
しは御息所のおはしますに心つかひのありしにや
と也秘同　雲の上ちかうてはとは院中にての事な
り院にて見しにはさもみえさりしとはけおされた
るにやとなり又の說には院中も月中のことくなれ
はことに桂男ともみえぬへきかさもみえさりしと
さま／＼あつかひいひたること葉なり以上弄　秘

はつる或本侍るとあり　少將美男なれは桂男にもはつへきにてはなけれと此院中にてはさほともみえすけおされたるといふ也　説々あれとも此義を用るとなり箋同之　箋雲のうへちかくは院なり秘私藏人少將は美男にて桂男にもはつるにはあらすや有けん月のひかりにかゝやきしとなりされとも雲のうへちかき此院中にてはさしもみえすけおされたりといふにや大略かはる事なけれとしるしつくる物なり如何

あはれときくもあり　玉かつらの女御にさふらふ人とも又藏人少將の中たちせし中將のおもとなとなるへし

やみはあやなきを月はへ　河古今「春の夜のやみはあやなし梅の花色こそみえねかやはかくるゝ花同花月はへは月花也今按是はかほるの事を云色こそみえねかやはかくるゝの心なり月はへは花の色の月にはへあひて今一しほ見所ありしとほめたる詞なり　秘少將の事をはさしおきて薫の事をいひ出したり　同月はへは月にはへたるなり箋　同やみはあやなしは薫の事内の女房共の詞なりかをるの事をほむる也　弄すかしてとは　私云かをる思のあるをなくさめて云をすかすとは云也薫をほめて如此云はなくさむる義也

簾中の女房歌
竹川のそのよのことは思ひいつやしのふはかりのふしはなけれと　秘昔あそひし事忍ふはかりのは卑下したる詞なり箋　弄其夜とは去年正月にあそひし事梅かえうたひしよの事忍ふはかりのとは卑下なり

なみたくまるゝ　箋薫也　秘ふかく思ふにやはかなき事と思ふに涙のおつるとなり弄

返薫
なかれてのたのむなしき竹川に世はうき物と思ひしりにき　弄薫の歌なり　秘薫の歌なり何事もたのむ事はむなしくなるさりとも行末はとなり　箋うきよはみなたのむ事の跡もつかぬ事をいへり

人のやうにもわひ給はさりし　秘少將のやうにとなり

うち出すくすこともこそ　秘薫のこゝろなり弄　箋薫の詞なり　私此義然るへし

あなかしことてたつ　秘とはすかたりもしつへしとなり

こなたにとめしいつれは　秘院の御かたなり箋　弄
冷泉院の御前也　私是は御やす所のかたにてのこ
と也冷泉院の御前へめし出すなり
故六條院のたうかのあしたに　秘院の薫にかたり給
へり　私たうかのあしたのは正月十五日なり
女かたにてあそひせられけるいとおもしろかりきと
右のおとゝの語られし　花女樂の事なり　弄初音の
巻に後宴に女樂せんとて樂器なとゝり出し給ひし
までにてありともかゝぬを今ありし分にかけり
秘右のおとゝ夕霧なり初音にて女樂ある事はたし
かならさるなりこゝにてたしかにみえたり　箋此
後宴の事初音巻にてあらましはかりにて物語に見
えす此巻にて後宴の事分明にみえたり凡後宴は二
三月に此事あり
さうはみやす所　箏は御やす所鬚黒の姫君也
ひはゝ　弄薫侍従也
わこんをひかせ給ふ　弄冷泉院のひかせ給ふなり
この殿なとあそひ給ふ　河此殿なり　箋踏歌のうた
うたはせ給へり
みやす所の御ことのね　秘薫のかねて聞しよりはま
さりたり院のよくをしへさせ給へるなるへしとな
り箋弄
うたこくの物　秘歌は付物なりこくの物は曲樂曲也
弄　箋歌はつけ物なりこくの物は曲の物なり大曲
なり
かたちはたおかしかるへしとなほ心とまる　秘以下
草子地なり　箋云此義如何薫の心中なり爪音なと
聞給につけてさまかたちを思ひやり給ふなり
かやうなるをりおほかれとおのつからけとはからす
箋薫は院の御子のやうにし給へは物ちかき事おほ
きなり
みたれ給ふかたなく　箋ちとも行迹をくつさぬなり
さる故になれ〳〵しく恨かけ給ふほとの事はなけ
れともなり
をり〳〵につけて思ふ心のたかへる　箋物のたより
毎にはかやうに院へ御まゐりの事の心にたかへる
よしをけしきはみ給ふなり
いかゝおほしけんしらすかし　箋宮す所の御心のう
ちに何とか思ひ給ふらんしらすかしとなり　私か
やうなる折といふよりこれまては草子地なるへし

卯月に姫（女イ）宮むまれ給ひぬ　箋玉かつらの亭にて御産
なるへし　箋去年七月よりの懐姙なり秘弄同
院の御けしきにしたかひて　時代にしたかふはかり
なりとなり
いかのほとにまゐり給ひぬ　河五十日（イカ）
女みやひとゝころ　弘徽殿の御腹也
たゝこなたにのみ　みやす所の御かたはかりに冷泉
院おはしますなり
さうしみの御心ともは　箋主人々々は皆別義なきな
り世上みなかくのことし
かの中將の君の　弄左近中將也　秘女御かたよりく
せ〳〵しき事のいてきぬれはさきに中將の申給ひ
し事ともをけにも玉かつらはおほしたりさすかに
兄心（コノカミゴコロ）なるとなり
かくいひ〳〵てのはていかならん　河「世中をかく
いひ〳〵てはて〳〵はいかにやいかにならんとす
らん　箋弄引此歌
としへてさふらひ給ふ　秋好中宮弘徽殿女御なとな
り
内にはまことに　姫君の院へ參り給ひしたに御氣色
あしきなり
おほやけさまにてましらはせ　秘此以下中姫君の事
なり　公役をさせたてまつらんとて讓任あるなり
箋弄同
おほやけいとかたうし給ふ事なりけれは　花かたう
は難きなりおほやけことはやすからぬ心也　秘尙
侍は重職なりされは玉かつらも辭せんとおほした
れと其人からなきによりてゆるし給はさりしを只
今讓任し給ふなり弄
故おとゝの御心をおほして　箋内々鬚黑の中君とか
やうに女官に參らすへき內役なりしとなり　秘鬚
黑也幽玄の事なれと女官なとはさも有ぬへしとて
讓任あるなり鬚黑は當代の始の關白にて奉公他に
すくれたりさて一つはさやうのかたにもよせある
となり
ひさしうなりにけるむかしのれいなと　以尙侍讓子
例可勘　箋舊例を勘て讓任し給ふなり親子相續の
例打まかせたる事ときこえたり　弄父の職を子に
ゆつるを例とすへし尙侍に限へからす　問云尙侍
を女に與奪する事いつれの例そや　答云其例容に

覺悟せす今の世にも女官なと女に其職をぬきゝする事は運綿の事なり
この君の御すくせにて　中姫君内侍のかみに成給ふへきすくせのあれはにやさして望申人もなくて玉かつらの辭退をもゆるし給はさりつらんとなり弄箋
内(ウチ)すみもし給へかし　箋尙侍に中君のなり給はゝ禁中に住給ふ樣に祇候ありて然へきとなり
少將の事をはゝ北のかたの　藏人少將の事を雲井雁のゝ給ふ也
辨の君して心うつくしきやうに　秘玉かつらの事なり　箋右中辨を使にて夕霧へとゝけ申さるゝとなり
内よりかゝるおほせ事　玉かつらより夕霧へいひつかはし給ふ詞なり弄
さま〳〵にあなかちなる　箋院や又内なとへ女君たちのましらひは御物このみなるとの外聞もいかゝならんとなり弄箋
内の御けしきはおほしとかむるも　秘夕霧の返事なり

おほやけことにつけても宮つかへし給はぬは　秘公役なとにても宮つかへし給ふとなり弄　公役にしたかひ給ふ筋にての宮つかへをし給ふましきはあるましき事と也内侍司は女官なるゆゑにかくいへり　私后女御なとは寵をかうふらんための職なり尙侍なとは女官とて其職につきたる公役なれはかくいふなり其上寵をかうふるは各別なり
又此たひは中宮のみけしきとりて　弄明石中宮なり　秘明石なり此たひはとは院にては女御の御けしきをとり給ひしとなり
おとゝおはせましかは　秘鬚黑の事を思へり　弄源氏のおはせす成て玉かつらなと方々へけしきとり追從する事を思へり此おとゝ鬚黑歟　箋鬚黑の存生ならは人々への追從には及ふましきとなり
おしけち給はさらまし　箋中君を人におさせましき物をとなり
あね君はかたちなと　秘主上の御心なり　宮す所は美人のきこえありしを内にもゆかしくおほしめしつるを引かへたる中の君を心の外にはおほしめせとも妹君とてさまておとるへき人さまならねはけ

んかくのやうにはなくてやうたい可然となり
さきのかんの君　秘内侍のかみを譲任あるによりて
前の字をくはへたり箋　箋玉かつら出家の心さし
の事なり
かた／＼にあつかひ　秘姫君たちなり箋
君たちの申給へは　中將辨君なるへし
うちに時々　内侍のかみの御方なり
院にはわつらはしき御心の　秘院の御けさう心なり
弄
いにしへをおもひいてしか　箋冷泉院の心かけ給ふ
事なり
かたしけなうおほしかしこまりに　箋名代に姫君を
まゐらせ給ふなり
みつからさへたはふれにても　此上にて自然の義も
有ては外聞口惜きと也
さるいみによりて　箋忌なり憚也弄同之花同　秘院
の御心かけ給ふ事故參り給はぬをさへ宮す所へは
あらはし給はさる故うらみ給へるなり
われをむかしよりこおとゝは　秘宮す所の心なり
弄今女御の母をうらみ給ふ玉かつらの心中をはし
らてなり
かんの君はわか君を　秘玉かつらは中君に櫻のあら
そひの時も心よせ給ひしとなり弄
ふるめかしきあたりに　箋冷泉院のわか御身の上を
の給ふなり年ねひ過たる故に玉鬘のうとみ給ふよ
しなり又院中なれはゝなやかならぬとなり内裏へ
は忍ひても參り給ふとあれはなり
うちかたらひ　箋宮す所となり
年ころありて又をとこみこ　秘こゝにて年をふると
みえたり十三　弄薫宰相中將までの間のとなるへし此
年比何と年紀を可勘歟上件の義並の巻に年紀をす
てゝとりあけさるの義此段にて可分別なり　箋若
宮御誕生なり
御かとはましてかきりなう　箋院のみかと也冷泉院
このいま宮をは　箋今度御誕生の若宮なり
女一宮をかきりなき物に　弘徽殿の女御はらなり
女御もあまりかうてはものしからんと　御寵愛のう
つりけるまては御堪忍ありしを女宮若みや歴々と
おはして女一宮の御威光のおされ給へは此分にし
ては叶ふましきと心のやみにて義兵イ言かおこれるな

り
世のことくして　世間のならひ本臺のかたに道理をつくるものなり箋
ひさしくなり給へる御かたにのみことわりて　箋秋好と弘徽殿との二人に道理をつけてみやす所をはひかことに申なすなり
御せうとの君たちも　中將辨君なり
きゝくるしきまゝに　箋玉かつらの心中なり
かきりなきさいはひならて　箋かきりもなくすくれたる幸のたらては宮つかへはなるましきと玉かつらのなけくなり
おほうへはなけき給ふ　秘玉かつらなり
きこえし人々の　秘藏人少將をはしめとして宮す所に心かけし人々なり箋
なりのほり　秘昇進なり箋
さてもおはせましに　箋是はきこえし時ゆるし給ともくるしからすみゆる人々おほしとなりさてもいかやうにしつゝなといふかことし宮つかへにこり給へるからの心なり
宰相の中將にて匂ふやかをるやと　秘匂宮の卷に薫十九歳にて宰相とみえたり弄　箋匂宮卷と同時をみせて匂ふやかをると同詞を書り史記筆法かくのことし
やんことなききみこたち大臣　秘かをるをむこにとるへきよしあるをも聞いれ給はすとなり弄
いひおはさうす　箋玉かつらなり　弄かをるの事をいふなり
少將なりしも三位中將とかいひて　秘藏人少將なり箋
かたちさへあらまほしかりきや　箋後達のしりうことなり少將なといひし時よりかたちもすくれしなといふなり
うるさけなる御ありさまよりは　秘院中のくせ〳〵しき事をいへり　箋院中の愁（整イ）の事よりも此人なとはますへきをとなり
此中將は猶おもひそめてし心たえす　秘藏人少將なりし人三位中將なり弄箋
左大臣の御むすめをえたれと　花竹川の左大臣系圖になき人なり弄　弄竹川左大臣事始て書之歟　秘氏族不分明なり

みちのはてなる　秘姫君に猶心かけたる也弄　河「東路のみちのはてなるひたち帯のかことはかりもあはんとそ思ふ　秘弄箋引此歌

宮す所やすけなき　箋院中の體不和なる故なり

うちの君はなか〳〵　秘内侍のかみなり弄箋

左大臣うせ給ひて　秘前にみゆ

右(ミギ)は左(ヒダリ)に　秘夕霧の右大臣左大臣になり給へる也

箋竹川左大臣薨仍て夕霧右より左に轉す

藤大納言左大將かけ給へる右大臣になり給ふ　秘河海に藤大納言の事九條右丞相の事をひけり尤興ある事なり　弄紅梅按察大納言大臣大將になる　河紅梅右大臣稱藤大納言事　貫之集云天慶六年正月藤大納言殿の御せうそこにて年ころありつる魚袋を吹風に氷とけたる九條右丞相を藤大納言と申けりと執柄次男なること右大臣たること相似たるなり箋載之　河國史云右大臣從二位藤原朝臣三守阿波守從五位上眞作第五子也三守早入大學受習五經歷文章生人任大臣幷大將例付轉左大臣事　菅家貞観四年五月十七日補文章生九年月日得業生十一年三月對策及第十八年四月一日侍從　自余中央略之寛平五年二月十六日任參議元式部權大輔從四位下　同七年任中納言叙從三位九年六月十九日任權大納言兼右近衞大將昌泰二年二月十四日任右大臣大將如元五十六歲　藤原道明號山井大將　寛平二年補文章生延喜十三年正月廿八日任中納言同四月十五日兼右近衞大將　藤原在衡粟田左大臣　延喜十三年五月日補文章生十八年十二月九日得業生對策及第　中央略之安和二年三月廿六日任右大臣七十七　天祿元年正月七日轉左大臣　薫中將椎本秋自宰相中將任中納言仍此卷與椎本卷同時節也

このかほる中將は中納言に　秘薫の中納言の事紅梅卷にあたれり箋　紅梅卷にも薫を源中納言とかけり此竹川の卷昇進の同時なるへし卷々に混雜有事前に註せり　私云並の卷を一人々々の列傳とみれは年紀混亂の事は別に註するに及はさるなり　當流用之

三位の君は宰相になりて　前の藏人少將なり　弄夕霧の息三位中將宰相に成るなり

この御そうよりほかに　秘皆夕霧の一族なり　この二三(フタツミツ)の御そうよりほかのさありて夕霧紅梅大臣か

ほる中納言なとなりとあり　私三本以下二つ三つ
の字なし倚此御そう然るへし紅梅も薫も皆夕霧と
ちかきゆかりなれはなり箋には夕霧と致仕大臣と
の一族と云々此義然へし
中納言のよろこひに　箋薫なり中納言の慶を申なり
　上古は所々にてかくのことし
れまへの庭にて拜したてまつり給ふ　河拜なり　弄
親院なる故に拜し給へり箋　問云薫の玉かつらの
家に向て昇進を拜し給ふとみえたり家禮ならぬに
も拜する事あるにや又女かた人も拜する事ある歟
答云玉かつらの家に參りておやかたなれは禮をい
たされたるにや女にも拜する事仔細なしかほとの
事は時にしたかひてさたまれる法なきなり
かんの君たいめんし給ひて　秘玉かつらなり箋
むくらの門をよき給はぬ　玉かつらの詞也　引歌不
　見點あり
まつむかしの事　源氏の事なり弄
かゝれは院のうへは　薫の心に玉かつらのふりかた
きさま思ふなりこれ故に冷泉院の今に御心かけ給
ふと思ふとなり

よろこひなとは心にはいとしも　秘薫の詞なり我身
には何とも思はされと御らんしてめやすくおほし
めすへきとて參りぬるとなり
よきぬなとの給はするはおろかなるつみにうちかへ
させ給ふ　秘ねんころにおもふをおろかなるつみに
いひなし給ふとなり弄箋　箋よきぬといふにあた
りていへりなほさりにいひなし給ふとなり
さた過にたる身のうれへ　花玉かつらの院の御やす
所の事をうれひ給ふなり　秘玉かつらの詞身のふ
りたる愁となり弄
たいめんなくてはた　花入つてにはくた〳〵しき事
は申されぬほとにたいめのついても待たるよしの
給ふなり　秘入つてには申かたしとなり弄
院にさふらはるゝかいといたう　秘宮す所の事なり
箋
女御をたのみきこえ　弘徽殿　玉かつらの妹なり
きさいの宮の御かたにも　秋好なり
いつかたにも　秘女御と秋好中宮なり
宮たちはさてさふらひ給ふ　箋女二宮若宮は院にそ
のまゝおはするなり　秘今女御の御子たちなり

みつからはかくて心やすく　みやす所を里におきたてまつるとなり箋
それにつけても　里住をも人の又何かと申すとなり
うへにもよろしからす　箋院にも里居をよろしからすおほすなり
ほのめかしそうし　かをるに院へとりなし申給へとなり
いつかたをも心やすく　箋女御秋好なり
をさなうおほけなかりける　箋玉かつらの我心の遠慮もなく身のほともなき事を思ひたちぬる我身をかこつよしなり
さらにかうまておほすましき　秘薫の詞なり箋
むかしよりさる事と　箋昔より嫉妬の道はありしとなり
位をさりてしつかにおはしまし　箋仙洞にしつかにましませは内春宮にて女御更衣のいとましきよりは心安かるへきと人はおしはかれともいつかたにても后女御のいとみ心は同し事となり
さはかりのまきれもあらし物とてやは　秘かやうの事は女御后の御くせなりかほとの事あるましきとおもひて覺悟し給はて出たち給ふかとなり
をのこのかたにて　かやうの事をおもてむきにはそうしかたき事となり是まて薫の詞なり
たいめんのついてに　秘玉かつらの詞なり
あはの御ことわりや　弄あは〳〵しきなり秘　箋是はあまりに事もなき御異見なれはたのみ所なきをいへり淡々敷は如何　私淡といふは淺くかろきやうの事なりこまやかなる歟深くれもき心なり色のこくうすきなりこの淡といへるさうさもなく淺くかろきやうたいといふなり
人のおやにて　秘玉かつらをいへり　箋物の分別を辨へ給ふにあはせては御こしもふけぬへきかわかくおはしますとなり　私人のおやにて物を分別し給ふには御心のほといま少しわかく大やうなるこいふか御としのほとにはあらさるへしと云なり
おほといたる　大やうにけたかきなり
みやす所もかやうには　箋冷泉院のみやす所なり薫の推量なり
宇治のひめ君の心とまりて　河宇治宮の姫君の事紅梅卷に見えたり同時なり　弄宇治八宮の姫君あけ

まきの君の事なり秘箋　秘椎か本の中程にある也
箋
思ひゐ給へり　人のおやにてといふより是まてかは
るの心なり
内侍のかみもこの比まて居(まかてイ)給へり　中君も里におは
するなり
いとゝもてしつめ　かをるのさまなり
ちかうもみましかはと　玉かつらの心なり薫をむこ
にみましかはと思ふなり　秘玉鬘の心なり薫中納
言を聟にてみましかはとなり弄
大いとのはたゝこのとのゝひむかしなりけり　花お
ほい殿は紅梅の右大臣殿なり鬚黒の殿の東にあた
れり右大臣の大饗おこなふとて人々あまたあつま
り給ふをちか〳〵にてきゝ給ふなり　箋おほいと
のとよむへき歟　秘紅梅大臣殿なり弄
このとのゝひむかし　秘玉かつらの殿の東なり弄箋
箋たゝこのとのゝとは程のちかきを云なり
兵部卿宮左大臣殿のゝり弓のかへりたちすまひのわ
るしなとにはゐはしましゝを　河賭弓還饗在端後撰
第四すまひのかへりあるし西三條右大臣女郎花の

歌　私前に有仍略之　左大臣の賭弓すまひのかへ
りあるしなとに兵部卿宮の出給を例として右大臣
の大饗に請し申給へとも出給はぬとなり　秘左大
臣の相撲の事は見えすさためて前にありし事なる
へしかやうの事に匂宮の御出有つる例とてけふも
請し給へり弄箋
けふの光と　弄紅梅大臣匂宮を光にと請し給へとお
はしまさすとなり
もてかしつき給ふ　秘紅梅大臣の女なり弄箋
宮はいかなるにか　秘匂宮なり心をとめ給はさるな
り弄　箋螢宮のひめ君も御心引ゆゑなり紅梅巻に
みえたり
おとゝも北のかたも　秘紅梅大臣同北方なり弄箋
薫をむこにしたく思ふなり
となりのかくのゝしりて　花鬚黒の殿にて隣にての
のしるを聞なり　秘玉かつらの殿の東なれは隣な
り弄　箋紅梅大臣の家の事なり
むかしの事思ひ出られて　秘鬚黒の大饗の事をおも
ひ出給ふなり弄
故宮うせ給ひてほとなくこのおとゝのかよひ給ひし

事を　河眞木柱の君螢兵部卿宮うせ給て後やかて紅梅右大臣にあひ給ひし事のあはつけきやうなりし事もかくてゐはするも中々めやすしと玉かつらのわか女たちの心くるしさに思ひあはせられたるなり　秘螢兵部卿宮の事なり其後眞木柱の君に紅梅大臣かよひ給ふ事いかゝのやうに思ひし事また此宮す所もかく物思はしくてゐ給へり世間のありさまかくのことしと玉かつらの観し給へるなり　弄螢兵部卿宮の後なり紅梅の室眞木柱君の事を思ひ給ふなり

おもひきえす　箋紅梅のかよひし初は人はよからす何かといひしを思ひもきえすして過し給ひしか今は果報の人なるとなり

さためなの世や（時塗歟）　同し鬚黒の御女なれとも眞木柱はかやうに愛給ひ玉かつらの我腹のは思ふやうにもなき事を憂給ふなり

いつれにかよるへき　箋眞木柱君は今時をえられたる様なれとも螢宮の後二夫を見給ふは更に本義にあらす又わか腹の宮す所はさやうの事はなけれとも又時にあひ給はぬ也所詮いつれかますへきそとなりまゝ子と本の子とを果報をたくらへ給ふなり

左の大殿の宰相中將　秘藏人少將なり箋　弄夕霧の息宰相なり

おほやけのかすまへ給ふよろこひなとは　秘昇進なとなり

ことさらめいたり　これはみやす所のおはすと思ふ故にもいふ歟

廿七八のほとの　秘宰相中將の事なり弄箋

みくるしの君たち　花物思ふ事のくるしきなりみるかくるしき心なり　秘玉かつらの心なりみるにくるしきとなり弄箋

つかさくらゐをは何とも思はすすくしいますからふや　河古本に皆かくのことしたゝいまさから（すやイ）うやといふ心なりむかしのこと葉なりける歟　花此君たちはつかさ位につきては思ふ事なきなりとすくしいますからふやはすくしましますとなり　秘ましますやとなり箋

故殿おはせましかは　花鬚黒の御子たちもむかしならは官位の事には思ふ事なくてかゝるすさひわさに心をみたらましとなり　秘故殿まします世なら

は我子たちもかやうのかたに心をみたらまし物をと也弄　箋鬚黒の存生ならはこゝの子達も繁花にしてかやうのそゝろ事に心を迷はすへきと也　此一言これをはつへし皆繁花にして行迹をあやまれるものなりこれを愼むへし

右兵衛右大辨にて　花鬚黒の子左中將は右兵衛督に（座イ）（イニ右ナシ）なり右中辨は右大辨になるいまた非參議にては省にたにならすこれをうれひなけくなり　弄玉かつらの兄弟なり兄は兵衛督弟は右大辨なりさきに中將といひし人なり昇進の心のまゝならさる思ひの有よしなり

非參議なるを　弄問云竹川卷に右兵衛督右大辨を非參議といへり如何　一答參議に任せぬさきは非參議と云なり

侍從ときこゆめりしそ此比頭中將ときこゆる　花藤侍從も賭弓の比やう／＼頭中將になりてとしの程にあはすれは昇進しおくれたるとなり　私侍從ときこゆめりしそとは是は兄弟の中にはなりいてたる心歟頭中將は重職なり中將辨にて廿七八のほとといへる時いまた昇殿もせぬ侍從にて年も事の外わかゝりしなり

年よはひのほとはかたはならねと　弄玉かつらの子たちとしはいまたわかけれは官の淺きもかたわならねと母なとの心に人におくるゝとなけき給ふ也　秘年齢はいまたわかけれと母の御心には昇進なと不足におもひ給ふなり　箋年齢はいまたしけれとも時に不逢は愁なり

人におくるとなけき給へり　此卷に源侍從（葉）藏人少將（夕霧三男）なときこえし比此の人々は右中將右中辨にて年のほと廿七八とみえたりかの藏人少將は三位の宰相にて今のとしのほと廿七八とあり人におくるといへるはこれらの人々みな超越せるとしるへし藤侍從は今頭中將なれは年のほとなとも藏人少將源侍從なとよりもわかしとみえたれはさのみおくれぬ昇進なり又頭中將は重職なり仍侍從ときこゆめりしそとすこし差別してかけるなるへし

宰相とかくつき／＼しく　弄夕霧の息宰相の中將事也玉かつらの方へ猶つき／＼しくとかくむすめの事をいひかくると云心なるへし　私宰相はとかくつき／＼しの詞耕雲本には無之なけき給へるにて

終爲後鑒記也（永正八五廿一）以上弄（此文イニナシ）夕霧息宰相中將なり
玉かつらの方へ猶つき／＼しくむすめの事をいへ
る心歟又はむかしなからのたえぬ思ひをいへるな
るへし此詞耕雲の本には無之　箋夕霧息宰相中將
藏人少將是也玉かつらのかたへ尙おこさ（はたイ）す所爲を
遁らるゝそといふなり　又の義には昔なからの思
ひの絕ぬ（かはらぬイ）よしを申さるゝそとなり此詞耕雲本に無
之河花兩說無之　私云玉かつらの御息所冷泉院に
もさふらひにくきやうにて里住し給ふなとをきゝ
て宰相中將はいよ／＼思ひはなたぬ心ありてつき
つきしく中將のおもとなとをかたらふといふ事を
いひのこしたるへし此卷の前の詞にみちのはてな
るといふ手ならひにもくちすさひにもと云所へか
かりたるなり此事箋聞にあり

弄花奧に註する分

竹川　花鳥にあり

女のことにて呂のうたはいとかたうもあはせぬを
呂は陰なり女も陰なれはしたりかほにあはせぬ心
にや又呂は雙調なりその聲たかきによりて下こゑ
にあはするをかたうもあはせぬといふにや

あつまをいとよくかきあはせたり女のことにて呂の
うたはいとかう（かいイ）しもあはせぬをいたしと思ひて　梅
かえは呂の曲なり

岷江入楚第四十六　橋姫

十六歳　秋任右近中將又任宰相
宇治八宮姫君有二人事　姉は總角君と中妹は中君と申
母君卒去之事
東宮炎上移住宇治給事　但以上事當年以前の事とみゆ
宇治阿闍梨參冷泉院之次語申八宮御有様之事
宰相中將候御前聞給事
薫中將八座に任する事　ことしの秋冬なるへし
冷泉院付阿闍梨送御消息於宇治宮給事
薫宰相中將參宇治給事
習法文等事
十七歳
十八歳　宰相中將宇治八宮に心よせつかふまつり給事三とせはかりに成ぬと見えたり薫君參宇治給事
去々年よりの事なり
薫中將參宇治給事
八宮御留主姫君達合物音事
馮宿直人垣間見事
以琵琶撥招月事
見參老人事　辨尼君也
老人物語柏木右衛門督昔事　曉歸給事
明日奉文於宇治事
左近將監御使送借布施物等事　八宮自寺出給日也
薫中將參匂兵部卿許語申宇治宮〔姫イ〕有様事
十月五六日頃薫中將參宇治事
合物音給事（宇治宮琴 中將琵琶）
八宮跡事申付中將給事
曉方召辨君問先日物語殘給事
奉右衛門督之文入袋事
歸京參三條宮事

宇治巻

花 或抄云此物語はしめ桐壺より総夢の浮橋まて五十四帖なへては式部かきたるよしを思へり或人の申侍るは宇治十帖は娘の大貳三位かけり其證據あきらかなり云々まことにても侍らは斑彪か漢書をかきさしたるをその子斑固かきつきたるに相似たるへし（大貳三位は右衛門佐藤宣孝か女賢子後一條院御乳母叙三位也） 弄 宇治十帖をは大貳三位書たるといふ義あり難用歟 紫式部か息女也花鳥に見えたり 紅梅竹川に宇治一二の巻混亂せり 文體は又時代のうつるにまかせて書歟 秘 宇治十帖の事娘の大貳三位か筆といへる説あり師説不用之其故は文體前にかはれり紫式部か筆にあらすといへる義なれと是はわさと體をかへたるなり時四代年七十年來の事をかける故に其間には人の詞つかひなともしらすしてかはれるなり末の代になる趣をみせたる也尤式部か筆なるへし 箋 此物語文法文體史記によれり先桐壺より匂宮まて廿七帖の巻々には本紀十二巻に比す此宇治十帖をは世家卅巻になそらふ並十七帖をは列傳七十巻に擬す其外巻々に文法相似たる事ありと云々 又云凡此物語莊子の寓言を摸すと云々莊子に内篇外篇雜篇あり内篇は理の根本をあかす是又桐壺より匂宮までの廿七帖其心あり外篇は物の事迹をあかす宇治十帖を准す雜篇は事理をましへあかす見並の十帖を摸す是によりて文體のかはりあるへき事勿論なり 秘 宇治と號する事莵道稚子の事を花鳥にひけり尤興あり 花 抑應神天皇と申は宇治（佐イ）宮八幡大菩薩にれはします其御子このかみを大鷦鷯のみこと申御弟莵道稚子と申けり父みかどうぢわかごをやことに愛子におはしましけん東宮にたて奉らせ給ひけりその後みかとかくれおはしましにけれは東宮位につかせ給へきをいかてわれこのかみをおき奉りては位につかん大さゝきのみこはやく位につかせ給へと申給ひけるをわれはこのかみ也さもうちわか子を先位におほしめしけれはこそ太子にはたてまいらせ給ひけめいかて父の御心をはたかへ奉らむとてわれは難波におはしましにけり又うちわか子も宇治にこもり給ひにけりそのほとに國々のあまともみつき物をもちて宇治にもてまゐれはわれは天皇にあらす難波へもてまゐれと仰け

れはあちこちもてまゐるほとに何もくち損しけれはあまともゝをのか物から袖をぬらしけるかくて三年をへけるほとに宇治わか子のたまはく我このかみの王の心さしをたかふへからす久しくいきて天下をわつらはさんやとてわさとなるやうにてかくれ給にけれは大さゝきのみこきゝ給ひて難波よりいそきおはしましていかて我をすてゝさきには立給ふへきそいそきかへり給へと棺にむかひてかなしひ給ひけれはうぢわか子いきかへり給ひておきゐ給ひて申給はく是は天命なりかきりある事なりいかてかとゝまらんと申て又棺にふしてつひにうせ給ひにけれは大さゝきのみこ素服してかなしひ給ひて宇治山のうへにみさゝきなとし給ひて其のちなん大さゝきのみかとつひに位につき給ひにけりこれを仁徳天皇と申なり宇治といふ名は山城國の郡の名なりやかて里をも宇治といへり是は昔よりの名なれは神功皇后の御世の歌の詞にも田上(ダナカミ)過(スギ)て宇治にとらへつとよめり此所にすみ給へるによりて宇治わか子とは申侍る也今物語の宇治のうはそくの宮と申は桐壺のみかとの第八の宮なり御母は故大臣の女と見えたりそのおとうとは冷泉院（第十の御子也）東宮にまし〳〵し時朱雀院の母后大さゝきと申侍るまし〳〵きこの后わか御むまこの東宮を冷泉院にひきこされ給へるほいなき事に覺しめしてせめてのはかり事にこの八宮をとりたてもてかしつき給へりけるを六條院の御いきほひにおされ給ひてその事もとけす成てそれより六條院とも此八宮御中そは〳〵しくならせ給ひてけれは中々より所なくて年月を送り給へるに京の御家さへやけにしかは宇治といふ所によしある山里の有けるにうつろひ給へれは宇治のうはそくの宮とはなつけ侍るなり昔のうちわか子はこのかみに位をゆつりて宇治にこもり給へり此八宮は御弟に東宮をこされて宇治にかくれ侍りとなるやうなれとそのほいをとけすして世を宇治山にのかれ侍るそのあさあひにたるうへともに兄弟のあひたの事なれはかたかたに宇治の巻とは申つたへ侍るなり　箋此物語桐壺帝を漢高祖になすらへたる事ありそれにつきて弘徽殿の太后を呂后にたとへたり又高祖に八子あり此八宮をかけるも其心をふくめり桐壺のみか

とかくれ給ひて後にうす雲の女院威夫人のみけんめのやうにはなとありこれもその心なり　又史記の世家とは家を世々すと云なり一代なる者のは皆列傳に入二代三代と相續して入る者世家にあり此宇治十帖をは世家に比す八宮總角大君中君浮舟等の事を記せり

橋姫　花以レ歌爲ニ卷名一

河「橋姫のこゝろをくみてたかせさす棹のしつくに袖そぬれける　一名優婆塞宮又うはそくかおこなふ山のふかき心とあり　花橋姫は歌の詞をもて卷の名させり薫中將十六歳の時より十八歳までの事此卷に見えたり匂兵部卿紅梅竹川等の卷と同時の事なり　弄此卷は紅梅の卷よりさきの事なり末にみゆこの卷に薫宰相中將とあり十九歳なりかをるの宇治へ心よせつかふまつる事三年はかりとあり其秋の末に宇治へ參り給ふ事又十月に參りたる事あり薫十九歳より廿一歳の冬まて歟花鳥に薫十六歳より十八歳までの事とあり不審卷名橋姫一禪云ひめ清云々問云はしひめのひの字濁てよむ歟一註むすへき歟云々　箋はしひめのひ文字濁イひの字清也　弄此卷の始は八宮の幼少の時よりの事をかけり其故は此宮の事を以前の卷ともに書出たるによりて八宮の事をしらしめんためなり玉かつらの事を書けるにも如此の事在之　秘薫の年を以て年紀をしるすにつきて花鳥に三ヶ年の異あり薫十九歳より廿一歳の冬までの事見えたり　此年の次に花鳥におきて一の遺闕と見えたり花鳥作者後成恩寺殿源氏物語年立さて制作の物あり件の抄には年齢の相違なきなり卷の名は以前に號すと云なり

その頃世にかすまへられ給はぬふる宮おはしけり

河宇治宮桐壺帝第八御子なり母左大臣女なり　號八宮又優婆塞宮そのこゝろは今上の御在位の時の由なり紅梅卷始之詞一同也同時の由なり薫中將升進以下にて思ひあはすへし其頃とはいつれの時分を定めてみるへき事そや此卷薫中將の宇治にまうて給へる事をいふとて宰相中將とかき侍り又紅梅のおとゝをも藤大納言とのせ侍り是にて見侍るときはかをるの十六歳の時なるへしいかさまうはそくの宮の宇治へうつり給ひてより後の事をその頃とは云へきなりかすまへられ給はぬとは桐壺の御門の御子の數にかぞへられ給はぬと云心なり　秘ふる宮は八宮なり此宮の事前にいまたかゝさるほとに彼幼少の時よりの事をかけり東宮にも立給ふへき事有しとなりその頃といふは當代今上の御時をさすなるへし　箋その頃を當時におしあてゝみるよし又讒言の時の事にあてゝ見るも吉なり云々

母かたなともやんことなく　花是よりは先もとの事をいふなり八宮御母は左大臣の女と見えたり　秘大臣のむすめの女御と見えたり

すちことなるへき御おほえなと　花すちことなるへきとは一流をことにとりたてゝ相續有へきやうなる父みかとの御おほえにて有しとなり　秘八宮春宮にもたち給ふへきなり弄

時うつりて世中にはしたなめられ給ける　花六條院とうはそくの宮と御中そは〱しくなりし事をいふなりはしたは半の心なりはしたなきとは物のこは〱しくおそろしき事をいふ上にかすまへられぬといへる心也　秘冷泉院の春宮に立給ふなり弘徽殿太后は此八宮をとりたてんとし給へりしか成就せさるなりさて中々とはいへり此沙汰なかりせはよかるへしとなり　弄是も東宮になとの事ゆゑなり

物うらめしき心々にて　御うしろみなとのはか〱しく見とゝけたてまつるもなく成たるとなり

北の方もむかしの大臣の御むすめなりけり　箋八宮の北のかたは大臣の女なり誰とも見えす

おやたちのおほしおきてたりし　秘八宮東宮にたち給はゝ北の方も立后あるへしと父なとはおほしたるとなり

おかしからんちこもかなと宮そとき〱　箋八宮の子をほしくおほすとなり

女君のいとうつくしけなるうまれ給へり　秘あけまきの君なり後に大君と云

おなしさまにてたひらかにはし給ひなから　花おなしさまとは此度も又姫君の生れ給へることをいへり　此君は匂兵部卿宮にむかへられ給ひて若君なとまうけ給へり

いといたくわつらひてうせ給ひぬ　秘母なり

ありたるにつけて　箋世間の體なり八宮の御心歟

見すてかたくあはれなる人の　秘八宮の北方をこひきこえ給ふなり

かきりある身にて　弄上らうの事なり限なきといふはその上の事也　秘上﨟の事なり限なきとは天子をいへりかきりあるとは親王なとをいへりかろかろしくはえせさるなり女君たちの事を思しわひ給ふなり

見ゆつる人なくて 箋 姫君たちの事なり
おの〳〵およすけまさり給ふ 是も姫君たちの成長をいふなり
のちに生れ給へりし君をは 秘 中の君なり此君をうみ給ふとてうせ給へるをいへり
いてやをりふし心うく 花 いてやと云詞古今集の歌にいて我を人なとかめそいて人はことの葉のみそよきなとありいてはさてもなといふやうなる詞なり 秘 いて人は云々いて我を云々さてもと云詞なり
かきりのさまにて 秘 北方の遺言なり此中君をよく養育し給ふへしとなり
覺し出つゝこの君をしも 北方の遺言を覺しいてゝ此中君をは結句いたはしくし給ふとなりこれ故に母君のうせ給ひつるはつらけれどもいひおきしさまのあはれなるなり
姫君は心はせしつかに 秘 あね君也 弄箋 おほ〳〵としたる方なり
いたはしくやんことなきすち 花 是もいもうと姫君の事なり 弄 中君なるへし父宮のいたはしく思ひ給ふなり 秘 中君なるへしとり〳〵なるなり
つき〳〵にしたかひて 秘 次々なり
わか君の御めのと 河 女子をも若君といふ年わかき心なり 秘 めのとなとも人體をえらはすあるにまかせておき給ふなり
ほとにつけたる心あさゝにて 弄 下らうに付たる心あさゝなり 下臈に付たる心あさゝにて堪忍のおもひなくて若君の成人をも見さるとなり 私是は中君の事なりさるさわきとは北方かくれ給へる故に彌人をもえらはす先有(アル)をよきにしたるなり
はくゝみ 河 養育(ハクヽミ) 省(ハクヽミ)(カヘリミル)(ハフク)
ひろうおもしろき宮のいけ山 弄 八宮の京の宮の事也
むね〳〵しき人も 箋 棟々なり 宗々なりきとしたる人なきなり物の棟梁をとりなとする人のなきをいふなり
色をもかをもおなし心に 秘 北方ともろともにみし事なり 箋 色をも香をもしる人そしるの歌の心にもちひてもよし但不及引歌歟云々
ちぶつの御かさりはかりを 河 持佛莊嚴なり 箋是

より優婆塞宮の下地にかきいたすなり
かゝるほたしともに　箋姫君たちなり
故君のうせ給ひにし　北方の事なり
れいの人さまなる心はへ　花男女のみちの事をいふなり
なとかさしもわかるゝほとの　秘夫婦のわかれ難堪となり
ありふれは　箋程ふれはなり　秘わするゝ事もありとなり可然縁にもなと人は申事のあるなり
たつきなき宮のうちもおのつからもてなさるゝ　おところへたる宮に男のひとり住にておはするはいよいよ物さひしく見くるしかるへしせめて北方おはせは然るへからんなとゝもとき申なるへし
世の人になすらふ　弄又北方をもすませ給へかしなといふなり
へんつきなと　河篇突　玉篇梁大同九(元イ)年三月廿八日黄門侍郎兼大學博士顧野王撰字廿萬九千一百七字三十卷五百六部　秘玉篇なとの様に字の篇をそろへてかきつらねておほゆる事にするなり
ひめ君はおほとかに　箋大君也何事もかやうにきこえたり
わか君はいとうつくしう　箋中君なりいつれもとりとりなるなり
池の水鳥とものはねうちかはしつゝ　花水鳥もさへつるは春の心あるなり又鴛鴦は雌雄はなれぬ鳥なり一つか死ぬれはいまひとつもしぬるといへり杜子美か詩にも鴛鴦不獨宿と作れりうはそくの宮北方にはなれ給ひて水鳥のつかひはなれぬをうら山しくみ給ふなり　秘獨すみなる故に物ことに感する心もふかくあるなり
八宮　うちすてゝつかひさりにし水鳥のかりのこの世にたちおくれけん　花此歌姫君たちの御事をよみ給へりさてかりの此世とはつゝけ侍りかりのことはかものこをいふうつほの物語第二さいしやうめつらしくいてきたりかりのこにかきつく「かひの中に命こめたるかりのこは君か宿にそ(まてイ)かへらさらなむ兵衛給はりてあて宮にすもりになりはしむるかりのこみせよとて奉れはあて宮くるしけなる御物ねかひかなとの給ふとあり　秘花鳥うつほのかひの中に命云々北方の事を打すてゝといへりかりの子

リイ
かもの子によせてよめり心は假の世なり大方不定なる世中にかやうの別のあるは不定のうへの不定とよめるなり　弄かもの子をかりの子といふなり鴨のことによせて宮の御子の事をおもひ給へり歌の面は假の世とよめり　箋かりの此世なれはこそ立おくれけんといふなり此劔のとまり當時はよむましきなりけるとよむへきなり去にしのし文字にてけんとはよめるなりかりの子鴨の事なり

かたちいときよけにおはします　秘八宮をいへり

なほしのなへはめる　箋姫君をかしつき給ふ心はへに直衣をもき給ふとなり　秘かりにもうちとけてはましまさゝる趣見えたり

すゝりにはかきつけさなり　河硯は文珠御眼なり此故に眼石と云か此聲を假て硯石とは書なり云々硯面に物をかゝさる事なり菅家の御日記（たけイ）にも硯面不書とあり「みる石の面に物もかゝさりきふしのやうしもつかはさりけり　菅家　弄見河海　又折ふしのいさめにや　秘河海に見えたり引歌みる石のおもてに云々前にあり仍略之

大君
いかてかくすたちけるそとおもふにもうき水鳥の契をそしる　秘あね君の歌なり北方におくれては何としてかは人となりぬるそとなり　私うき身とうけたるなるへし

よからねとそのをりは　秘草子地也此歌を評していへり　箋かやうにきりくみたるはよき歌にてはなけれ共なり

手はおひさき見えて　箋歌をほめぬ詞なり

をさなけに久しく　箋中君のさまなり久しきか妙なりしつかにかく體なり

中君
なく〳〵もはねうちきする君なくは我そすもりになるへかりける　秘中君の歌八宮ましまさては巣守になるへしとなり

河大和物語に古中務宮の北方うせ給て後ちひさき君たちを引くして三條右大臣殿に住給ひけり御いみなと過してはつひにひとりは過し給ふましかりけれは彼北方の御弟九君をやかてえ給はんとなんおほしけるを何かはさもとおやはらからも覺したりけるにいかゝ有けん左（師尹）兵衛督の君侍従に物し給ける頃その御ふみもてくとなんきゝ給けるさて心つきなしとやおほしけんもとの宮になんわたり給

にけるその時に宮す所の御もとより「なき人のすもりにたにもなるへきを今はとかへるけふのかなしさ　宮の御返し「すもりにと思ふ心はとゝむれとかひあるへくもなしとこそきけ拾遺物の名「鳥の子はまたひなゝからたちていぬかひのみゆるはすもりなりけり

御そなとなへはみて　秘八宮の御心なり此君たちの衣裳なともきら〳〵しからす又さふらふ人もなきくるしとおほすなり

心くるしういかゝおほさゝらん　秘草子地おしはかりてかけり箋

經をかたてにも給ひて　河應神天皇十五年甲辰八月百濟阿直岐云々能讀經典即太子菟道稚郎子師焉天皇問曰如勝汝博士亦有耶對曰有王仁者是秀也時遣荒田別於百濟徵王仁十六年乙丑王仁來太子師之習諸典籍　欽明天皇十三年百濟獻經論

さうかをし給ふ　河唱歌　唱歌の秘事師説あるなり

秘御ことをしへ給ふとて唱歌し給へり

ちゝみかとにもはゝ女御にもとくおくれ給ひて　秘桐壺帝にも母女御にもはやくわかれ給て何事も世中のありさまをよくもしり給はさるとなり　私是は八宮の御事をいふ

世中にすみつく御心おきて　世中のたゝすまひをはかつてしり給はぬとなり

おほちおとゞの御そうふん　秘八宮の母は大臣の女なりその大臣よりつたはりたるをいへり弄

うたつかさの物のしとも　秘雅樂寮の樂人なりそのかたとは樂道をいへり弄　箋雅樂寮職員令云雅樂寮頭一人乃至歌師四人儛師四人笛師二人唐國樂師十二人高麗樂師四人百濟樂師四人新羅樂師四人腰鼓師二人以下略之

源氏のおとゝの御おとうとに八宮とそきこえしを

花こゝにはしめて八宮の系圖のやうをかきあらはし侍り物語なとをつくるにはしめより次第にかきつゝくるは無下に見所すくなき也さきを後のちをさきにかくは作りさまおもしろくみゆるなり　秘八宮を春宮にやと弘徽殿の太后のおもひかまへ給へる事なり

太后のよこさまに　弄八宮を春宮にやと弘徽殿のおほしかまへしなり實母にはあらす

あなたさまの御なからひには　河あなたさまは六條
院の御事なり　秘源氏かたをいへり
いよ／＼かの御つき／＼に　秘源氏の御親類はかり
になる世となり
かゝるひしりに　北方うせ給ひてより後の事なり
すみ給ふ宮やけにけり　八宮の京の御所なり
うつろひ住給ふへき所のよろしきもなかりけれは
京中には別に宮も持給はぬとなり
宇治といふところによしある山里も給へりけるに
宇治の山里なり是より八宮うつり住給ふなり　弄
宮の山荘なりこれに八宮の住なり
あしろのけはひちかく　網代は近江國田上川と此所
とにあるなり田上川にてもれたる氷魚を宇治川に
てとるこ云々此由或抄物に見及ふ者なり　網代の
事延喜式にあり云々
野山の末にもむかしの人　秘さしてはるかなる所な
らねと野山といへる幽玄にておもしろし弄　秘む
かしの人は北方なり
八宮見し人も宿も煙になりにしを何とて我身の消のこり
けん　秘ありめのまゝをいへる歌なり尤あはれなり

弄時にあたりてあり事をよみ給ふ尤哀なり
いけるかひなくそ　河大和物語「雲井にてよそふる
頃は五月雨のあめかしたにそ(てイ)いけるかひなき　草
子地なり引歌なし
いとゝ山かさなれる　河山重江複(復イ)　花「月よみの光
にきませ足引の山かさなりて遠からなくに　私此
引歌不相叶
みねの朝霧はるゝをりなくて　河「鴈のくる嶺の朝
霧晴すのみ思ひつきせぬ世中のうさ
此宇治山にひしりたちたる　秘喜撰なとをおもひて
いへるなり弄　花古今集喜撰法師歌「わかいほは
都のたつみしかそすむ世をうち山と人はいふなり
或書云喜撰隱居宇治山持密呪食松葉得仙道云々後
冷泉院御宇永承七年に頼通公宇治の別業をすてゝ
寺になして平等院となつく後に阿闍梨四口をよせ
て慈覺智證の兩門徒を補せしめ侍り
おほやけことにもいてつかへす　公請をも辭して隱
居の人なり
としころまなひしり　秘八宮もとよりも才覺ましま
すにつけてもてあそひたまふ法文の深重なる事な

ことゝきゝかせまつるなり弄
心はかりはゝちすのうへに　河極樂國土有七寶池八功徳水充滿其中池底純以金沙布地乃至池中蓮華大如車輪　阿彌陀經也　秘有七寶池八功徳水　花引歌拾「けふよりは露の命もをしからす蓮の上の玉とちきれは　寶方同「一たひもなむあみた佛といふ人は蓮のうへにのほらぬはなし　空也上人　八宮のあさりにの給ふ
へたてなく物かたりし給ふ　八宮のあさりにの給ふなり
れいせんゐんにもしたしく　秘前におほやけ事にも出つかへすといへるは外さまなる公請にはしたかはすとなりときどき院へは參るなるへし弄
れいのさるへき　秘聖敎なとなり
八宮のいとかしこくないけうの　河内敎内典也　あさりの冷泉院へ申詞なり
いまたかたちはかへ給はすや　秘冷泉院の御詞なり弄
そくひしりとか　河淨名居士云身在家心出家云々俗形にて戒行を持する人なり四部の弟子の中優婆塞是なり唐土にも龐居イ居士なといひて多此類あり凡聲聞は必合イ心イ出家十地以上也菩薩者無其趣也　花東坡山谷なとも自つから有鬚僧在家僧なと詩にもつくれり
宰相中將も御前にさふらひて　花宰相中將は薫中將の事なり　秘薫なり十九歳の年なるへし紅梅卷の時分なり　弄紅梅卷はかをる中納言なりこの卷は以前の事なり
われこそ世中を　秘薫の心は柏木の菩提をもとふらはゝやとの心より道心のすゝむなり弄
みゝとゝめて聞給ふ　秘俗なからつとむる事を耳よりにれもひ給へるなり
出家のこゝろさしは　秘聖の御返事なり　弄八宮出家の志の事なり
侍り給ふと　侍り給ふなり
さすかに物の音めつる　物に心のかゝらぬ聖なれとも物の音をこのむとなり
いとおもしろくかうさくに極樂思やられ　花かうさくは遊跡也こゝにはすくれたる心にいへりこたいは古代なりふるめかしき心なり極樂の歌舞の菩薩の事をいへり　私云三本かうさくの詞なし

みかさほゝゑみ給ひて　冷泉院なり
ひしりのあたりにおひいてゝ　姫君たちの事なり
おかしのことや　ことなことひき給ふ事なるへし
しはしもをられんほとを　箋八宮よりも御弟なれはなり姫君たちをゆつり給へかしと仰らるゝなり
この院のみかとは十のみこにそ　秘冷泉院の註にかくなり河同　花雅明親王は宇多天皇十の御子なり御母は京極御息所なり御出家の後の御子なるによりて延喜の御子になしまゐらせられたるといへり
朱雀院のみかとの故六條院に　秘院の御心なり入道宮のためしとは女三宮を源にあつけ給ひしことくにとなり
中將君は中々みこの思ひすまし給へらん　秘薫の心に出家よりも此八宮のおもむき心にかなへるなり
うち〱にもけしき給はり　内々阿闍梨の八宮の御氣色をうかゝひ給へるとなり
みかとは御ことつてにて　河冷泉院の事なり院號の後なれともさきに院のみかとゝありつれはその心なり
冷泉院
世をいとふ心は山にかよへとも八重立雲を君やへたつる　秘冷泉院の世をいとひ給御心のすゝまさるは八宮の御方よりへたて給ふかさなり弄箋
此御つかひをさきにたてゝ　秘ひしりにも御ことつてありて此御歌をは別に御使にてまゐらせ給ふなり弄
まちよろこひ　八宮の悦ひ給ふなり
返八宮
あとたえて心すむとはなけれとも世をうち山に宿をこそかれ　河一我庵は都のたつみしかそすむ世をうち山と人はいふ也　秘我身一すちに世を思ひすてゝゐるにはあらすとなり喜撰か歌よりも猶感歎の心のあるなり結句眞實の道心よりよみいたせり彼高光か雲の八重たつ山は住うしとよめる類なるへし
ひしりのかたをはひけして　秘院はやかて述懐のあるやうにあはれに御覽しとかめたるなり　弄世に述懐あるやうに冷泉院はきこしめしけるなり八宮卑下の御返事殊勝なり　少將高光横川にて天暦への御返事此心あり　大和物語又新古今
中將君の道心ふかけに　薰のの給ひしさまを阿闍梨の八宮へかたり申さまなり

法文なとの心えまほしき　薫のあさりにかたりし様
なり
世中をそむきかほならんも　數ならぬ身は却ていか
かとなり
いとありかたき御さま　八宮の御ありさまを聞及ひ
てなり
宮世中をかりそめの事と　秘八宮の詞也因縁なくて
は道心はおこらさる物をとなり
何事もあかぬ心はあらしと　花あかぬ事はあらしと
は萬事不足なる事なくたらひたる心なり
こゝにはさへきにや　秘八宮の御身はさるへき事と
佛のすゝめ給ふやうなる世のうさにてこそかくい
とひぬれとなり
はか〳〵しくもあらて過ぬへかめる　しつかなる思
ひは自然に叶ひゆけともはや齢ものこりすくなき
やうにて佛法のふかき心まて入たゝぬをはゝかは
かしくもあらて過ぬへかんめるといふにや
きしかた行末さらにたとる所なく　弄薫の心中をほ
めたるなりきしかたにも行末にもかをるなとの道
心あるへき事は思ひかけぬ事なりこれは心はつか
しき法文の友そとなり八宮は自然にかやうになり
行様なる身にてさへはか〳〵しからぬにとなり
のりのともにこそは　花法の友なり
みつからもまうて給ふ　秘薫なり　薫の宇治へおは
するなり
けにきゝしよりもあはれに　薫の心なり聞及しより
もあはれなるさまとなり
浪のひゝきに　秘宇治のわたりのさまなり
よるなと心とけて夢をたに　河「宇治川の浪の枕に
夢覺てよる橋姫のいやねさるらん　奥入云此歌同
時の歌なり不可爲證歌歟云々
ひしりたちたる御心にはかゝりしもこそ心とまらぬ
もよほしならめ　黄ム總して出家は桑下にさへも宿
せぬ事なれは心をとめぬたよりなりといへる歟
細字に首書也
すこく吹はらひたり　秘風ともいはて吹はらふさい
へるわたり殊勝なり
よのつねの女しく　秘薫の推量なり
さうしはかりをへたてゝそ（たる、そイ）　弄姫君の方は持佛室の
かたの障子をへたてたるはかりなり

されとさるかたを思ひはなるゝ　秘　かをるの打かへ
して思へる心のうちなり
あされはまんも　秘　淺なり　私　あされたる心歟如何
思ひしやうにうはそくなからおこなふ山の　河　優婆
塞　花　優婆塞は梵語唐土飜して近事男といへり俗
なから佛の道を修行する人なり佛の四部の弟子の
その一なり賀茂役公(エンノキミ)小角年卅二にして家をはなれ
てかつらき山に入て藤の皮を衣とし松の葉を食と
して孔雀明王の呪をみてゝつひに仙術をえて鬼神
をしたかへ侍り是を役優婆塞と號す山伏の行は是
よりはしまれりとなむ　六帖「うはそくかをこなふ山
の椎か本あなそは〳〵しとこにしあらねは
さかしけにはあらて　八宮の法文なとをしへ給ふさ
まなり
ひしりたつ人さへある　秘　薫の心なり
しうとくの僧都僧正のきはゝ　河　宿德なり
いむことをおもつはかり　河　受持禁戒の事なり戒行
と惠解とは各別の事なり
けはひいやしくことはだみてこちなけに　秘　無骨な
り　こちなけは無骨なり俗に思ひやうなき事をは
ぶこつなるといひならはし侍り
ひるは大やけことに　河　設自帝何益况彼仕慢擧天仙
彈指耻聖賢(訓イ 名)心悲　高野正學上人曰
けちかき御枕かみに　かやうのあら〳〵しきさまな
る物を身ちかくなとはめし入かたくとなり
いとあてに心くるしきさまして　八宮の法文の給ふ
さまなり
ふかき御さとりには　八宮の御才學のほとを云なり
よき人は物の心をえ給ふかたの　弄　高貴の人の事な
るへし過去戒行によるへし河海の善人不相叶　秘
よき人は貴人なり花鳥の義用之　花　よき人とは貴
き人を云いやしきもよきもと歌によめるも貴と賤
とをいふなり貴き人は智惠ありて物の心をはやく
さとる故なり河海説あやまれるなり　河　天道無親
唯與善人佛教にも善性人惡性人あり又孟子にも性
善惡といへり
こひしうおほえ給ふ　宇治にも戀しく思ひ給ふなり
此君のかくたふとかり　薫の八宮を信仰の事なり
折ふしにとふらひ　冷泉院より折々御心よせあるな
り

三年はかりに成ぬ　秘薫十九廿廿一の年なり花鳥年
異あり薫宰相にて三年はかり宇治へ音信の體とみ
ゆ其後中納言と見えたり　弄秘に同し五帖の雑記
別に註(論イ)あり
秋の末つかた四季にあてゝし給ふ御念佛　秘八月な
り四季に七日つゝの念佛なり弄
中將君久しく參らぬかなと　かをるの宇治へ久敷無
音となり
在明の月のまたよふかく　河よひより曉までの月を
有明といふ云々然るに只朝まで殘る月をいふ歟是
も秋の末つかたとあれは九月下旬の頃たる歟　能
因歌枕には十五日より後の月を有明といへり匡房
卿續本朝往生傳云十五日より以後月夜稱ニ晨月(アリアケ)ニ云
々
河のこなたなれは舟なともわつらはて　花いまの橋
守のあたりなるべし　秘宇治の宮は當時の橋守の
邊かとなり宇治橋は孝德天皇大化元年丙午歲造此橋
云々　釋書元興寺の道昭和尚大化二年創造宇治大
橋云々
みちも見えぬしけきの中を　秘一説滋き野中と云々

不用之茂(シゲキ)木の中をと讀へし弄箋　河親行説云しけ
き木の中をとよむへきにや風のきほひにほろ〳〵
とおちみたるゝ木葉の露とあり野の露ならは木葉(イナシ)
の露のちりかゝるは心得かたくや侍らん且は宇治
の通路山路木立しけき所也但證本ことに野中とか
けり如何云々　水原抄云按之しけき木の中あまり
の入ほかなる也　古歌に(今イ)もしけ山と云詞あれとし
けきと云詞未見及野中にも木蔭なるへきに非す野
中の森野中の松櫻(イナシ)など多くよめり野中にても事た
りぬへし此しけ木の了見桐壺卷の草むらの虫もよ
ほしがほ同事也何も今按の儀なり不可用　花權か
もとの卷云はるけき野へをわけ入給へる心さしな
とも思ひしりぬへし宇治にも野の有へき事は證文
を外にもとむるに不及也　私河花兩抄如此野中の
説につきて茂木を不可用也但弄秘箋茂木の中用之
滋き野中不用之所分明也尤此義を用へし
薫 山おろしにたへ(えイ)ぬ木の葉の露よりもあやなくもろき
我涙哉　花俊成卿歌「嵐吹みねのもみちの日にそ
へてもろく成ゆくわかなみたかな　此源氏の歌を
とりてよみ侍り　秘あやなくはあちきなくと云心

なり俊成卿歌花鳥にひけり　弄あちきなき心なり
前に注す

柴のまかきを分つゝ　弄家々の柴のかきねを行給ふなり　秘道すからのさまなり

ぬししらぬかとおどろく　河古「ぬししらぬかこそ匂へれ秋の野にたかぬきかけし藤はかまぞも　弄歌のこゝろなり

そのことゝも聞わかれぬ物の音　ことゝもは絃の心あり只物の音とはいふへからすと云々

わうしき調にしらへて　河此黄鐘調は笛の黄鐘調也此巴の風香調也比巴の黄鐘にはあらぬ歟凡比巴は風香調也風香調に秘曲あり楊眞操流泉等曲也仍以此両調子如先比巴の黄鐘調は笛の平調にあはするなり掃部頭貞敏四調を定めたり風香調 合笛黄鐘調也 返風香調 合黄越調双調イ双問 黄鐘調 合笛平調 清調 合笛平調盤渉調 是也　今世に此外返黄鐘調 笛太食調 双調 笛一越調 平調 笛盤渉調 等あり委不及註歟　秘河海に見えたり弄

さうのことあはれに　秘ちかくなるにしたかひてきこゆるなり

とのゐ人めく　弄さふらひなるへし

しか〳〵なんこもりおはします　秘とのゐ人の申なり　八宮の七日の念佛にあさりの寺にこもり給ふとなり

なにかしか限ある　秘薫の詞也　弄薫の斟酌也　私何がしかなにかさぞといふなり

みにくきかほうちゑみで　秘とのゐ人なり

しはしやとめしよせて　秘薫のよひかへし給ふなり

御けはひかほかたちの　秘薫のさまをとのゐ人の思へるなり

人きかぬ時は　秘とのゐ人の詞なり

うちわらひ給ひて　薫なり

あちきなき御物かくしや　秘薫の詞なり

あなたのおまへは　とのゐ人のこと葉なり

竹のすいかい　河五架三間新草堂石階松柱竹編牆 白氏文集

をしへよせたてまつれり　秘此とのゐ人の心然るへからす姫君たちをのこりなくみせたてまつる不忠の事なり用意有へき事なり弄

すたれをみしかくまきあけ　簾を高く捲たるなるへしまきのこしたる上の方の短きなるへし

ひとりは柱にすこしゐかくれて　秘是大君なり

扇ならてこれしてもまねきつへかりけりとて　河
行尺奥入同隠重山兮擎扇喩之　止観　「おふことはかたわれ月　伊
の雲かくれおほろけにやは人の戀しき　同　秋のよ
の月かも君は雲かくれしはしも見ねはこゝら戀し
き　後嵯峨院御時此物語の御談義ありけるに以扇
招月事諸道に尋られけるにいつれも無所見後日基
長卿云漢書に以扇月をまなふといふ事ありつ與ふ
五音通する故歟然はまなふと可心得歟水原抄杜詩
云月生初學扇雲細不成衣　註云初之謂不成衣言未甚圓也細
作舞衣　按之まねくとあるを押てまなふと心えんこと　イナシ也趙曰季義甫謂季月成歌扇裁雲マトサナラ
もすこし理不盡にや扇を古来月に喩へたる事勿論
歟されは扇こそ月にはよせあれとも撥も月にはな
るゝ物ならねは扇ならてもまねきつへかりけりと
女の心に何となく云るにや次の詞にも入日をかへ
すはちこそ有けれとあるなり偏にまねく心歟學ふ
にはあらさるなり或詩註云月圓似扇故云月扇
招月といふことは詩なとにもつくり入日をかへ
す撥といふ事もあれは月をまねくといへる心なる
へし
そひふしたる人はことのうへにかたふきかゝりて

秘　中君なり
入日をかへすはちこそありけれ　河　淮南子曰魯陽公
與韓搆難戰酣日暮援戈而撝之日爲之反三舎　舎十里　又
史記曰魯陽公以戈廻落日　又還城樂陵王をあやふ
めんとす日の暮るに撥して日を午にかきかへすと
いへり陵王隨舞吹囀云我等胡兒吐氣如雷我採頂雷
踏履如泥右得士力左得鞭廻日光西沒東西若月舞樂
打去緣之長曲也　弄　河海說出所未詳　一禪同之云
々　問云河海に還城樂陵王をあやふめんとて日の
くるゝに撥して日を午にかきかへすといへり云々
何書の文そや　一答その書たしかならす樂の譜な
とにのせたる事をひかれたるにや　秘　中君の詞な
り出所たしかならさる事と云々　河海說引淮南子
尤是
をよはすともこれも月にはなるゝ物かは　花　比巴の
撥をおさむる穴をは隠月といふゝくしゆの下にあ
り上に雲かくれたる月といひて隠月の事を思ひよ
せ侍る心詞たくひなく面白く聞え侍り　弄　又あね
君の詞なり　大君の詞比巴の隠月に撥はをさむる
物なれはかくいへり　河　比巴の撥は隠月にをさむ

る故なり　又李嶠琵琶詩曰半月分紘上（月分經上）　王元長同
詩曰於月如可明　呉均（拘イ）詩一箭一列作琵琶自譬觀心
覺照月
よそにおもひやりしにはにす　まへによのつねの女
しくなよひたるかたは遠くやとおしはかるゝと
なり
昔物かたりなとに　花住吉物語に姫君の琴ひき給ふ
を中將きゝつけ侍る事みえたり又うつほの第四に
月おもしろき夕暮に八宮いま宮ひめ宮みすまきあ
けて琴とも引あはせあそひ給ふ事あり　弄薫の心
なりうつほ物語にとしかけが女の事ひとりゐて琴
ひきしを今わか君といふ人とをもり聞てかよひて
たえ／＼なりし事なとありき子なともいてきたり
し事あり　秘住吉物語うつほの物語を思へり抄に
見えたり
さしもあらさりけんとにくゝ　作物語にかやうの事
をいへるをわさとめきたる事かなとにくゝ思ふに
只今かやうの事を見つけてさも有へき事そと思ひ
しるよしなり
又月さしいてなんと　弄村雲の空の月のけしきなり

はしめさしいてたりとかけり又くもりてさためな
き空とみゆ　秘むら雲のさまなりさやかにみゆへ
くもあらすとかきて又かやうにかけるおもしろし
おとろきかほにはあらす　しかるへき樣體なり
京に御車ゐて參るへく　秘夜も明ぬきとてかくいひ
やれり
をりあしくまゐり　秘宮の御留守をいへり弄
思ふことすこしなくさめて　かをるの詞也御ことの
ねをきゝほのかにみたてまつれる事をとのゐ人に
の給ふなり
まゐりてきこゆ　秘只今まゐりたるやうに申せとな
り
かくみえやしぬらんとは　秘まへにのそき給ふとは
しり給はさるなり
はちをはさうす　ことのねなと聞給へるかとなり姫
君たちの心なり
ありつるみすのまへに　秘申つたふへき人もみえさ
れはなり　私まきわけて月見給ひしみすの前なり
このみすのまへにははしたなう　秘薫の詞なり
山のかけちに思ひ給ふるを　河古世にふれはうさこ

そまされみよしのゝ岩のかけ道ふみならしてん
私薫のはる〳〵分まゐれる山道を姫君たちにかこちなすなり
きえかへりかゝやかしけなる　河はちかゝやく心なり
女はうのおくふかきを　秘此御返事なと申させ給はんとておくなる人をおこしいへるなり
何ことも思ひしらぬ　あね君の詞なり弄　私人おこし出るさまのわさとめきたるもくるしくてまつ大君のほのかにの給ふなり
かつしりなからうきを　弄薫の詞なり　秘薫の詞なり世間の事をしりなからしらさるさまをつくるは世のならひなりされともひとへにかくおほめき給ふ事をいかゝとうらみたるなり
ありかたうよろつを思ひすまして　秘八宮の御事なりそれにたくひ給ふ御身なれは何事をもすゝしくおしはかり給ふへき事となり弄
御心のうちは何事もすゝしく　花拾「さゞ波やしかのうら風いかはかり心のうちのすゝしかるらむ　公任　私不及引歌歟

さやうのかたはわさとすゝむる人　秘すき〳〵しき方の心はなしとなり
つれ〳〵とのみ過し侍る世の物かたりも　姫君とおなしさまにて過す身なれはきこえなれて同し心の物かたりなともきこえはやとなり
つゝましくいらへにくゝて　大君のこゝろなり
たとしへなくさし過して　秘たとへなくなりことの外なると云なり老人の出ていへるなり薫の座をいへるなりみすの内にこそとよみきるへし
さたすきたるも　弄年よりたるとなり
いともあやしく　秘老人の詞
すまひ給ふ人の数にもあらぬ　此宇治の宮の事を云
さもわりぬへき人々たに　近き御ゆかりなとの事歟
それさへ疎遠なるなり
ありかたき御心さしのほと　薫の此宮への心さしふかき事なり
わかき心にも　姫君たちなり
つゝみなく物なれたるも　秘薫の心なり
いとたつきもしらぬ　秘薫の詞なりたよりもなかりつるになり　黄ムのたづき濁聲たしかにわり

かゝりきぬすかたの　かをるのさまなり
さし過たるつみもやと　秘老人の詞也薫の御心いかゝとなり
おほかたさた過たる人は　秘薫の心なり涙もろなるは老人のならひなれとも其分にも過たるとみ給へるなり　あやしう成給ひてとはあまりかくあるはゆゑあらんと不審の出きたるなり
こゝにかくまゐる事は　秘薫の詞なり
ことなのこい給ひそ　こと葉をのこしそとなり
かゝるついてしも侍らしかし　秘老人の詞なり
又侍りとも夜のまのほとしらぬ命　河人命不停過於山水今日雖存明亦難保何假令心任悪法（イナシ）（何縦心令任悪法イ）　涅槃經雪山鳥唱云今日不知死明日不知死何故造作栖安穏無常身
三條の宮に侍し小侍従ははかなくなり侍にけると　秘女三宮の御方なりほのいひ出せるなり　女三宮なり小侍従は女三宮のめのとの女なり此老人辨の尼は柏木のめのと（妹）との女なり（姉なり）秘同
私女三宮の御めのとゝ柏木のめのとゝはおとゝひ辨公と小侍従とはいとこなり
はるかなるせかいより　秘ゐ中なとよりなり　弄ゐ中よりなり辨は八宮に近くしたしき人なり
此頃藤大納言と申なる　秘紅梅の大臣なり　弄紅梅の大臣の事也大臣に成給はぬ以前の時節なるへし
私薫生れ給へるとしの事なれは右衛門督をえしろしめさしといへり
いくはくもへたゝらぬ　昨日けふのやうに思ふとなり
手ををりてかそへ侍れは　秘はや廿年はかりになりぬれはとなり　河手を折てあひみしことをかそふれは十といひつゝ四はへにけり　不及引歌歟
おとなしくならせ給にける　薫の年齢をもよくかそへしるなり
故権大納言の御めのとに侍しは辨か母になむ侍し　花故権大納言はすなはち右衛門督同人なり此老人は辨君といふ人なり　秘柏木なり弄
御やまひの末つかた　柏木の遺言の事此巻の末にあり
さすかに打いてすなりぬ　秘妙なるかきさまなり
あやしく夢かたり　秘薫の心
かんなきやうのものゝとはすかたり　河巫（男カンナキ）覡（女カンナキ）文撰

弄神なとのつきて物いふに似たりとなり
おほつかなく霓しわたる　薫の柏木の事を思ふなり
さしくみに（なイ）ふる物かたり　河さしよりになりやかて
と云心なり　秘うちつけになといふ詞なり　弄註
にみゆ云々
こち〳〵しかるへけれは　抄云ほれ〳〵しき心歟又
こと〳〵しき心なり五音通する故なり
そこはかとなく思ひわく事は　秘薫の詞なり　弄薫
の辨にこたへ給ふ詞なり
はれゆかはゝしたなかるへき　前に霧のふかきと有
おもなく御らんしとかめられぬへき　河面目なくな
り　秘姫君たちをはちたるなり
思ふ給ふる心のほとよりは　秘心のまゝならはかく
てさふらひたきとなり　弄思ふよりはやくかへる
となり
かのおはします寺の　秘八宮のおはします御寺なり
みねの八重雲おもひやるへたておほく　花「白雲の
八重にかさなるをちにても思はん人にこゝろへた
つな　後撰「おもひやる心はかりはさはらしを何へた
つらん峰のしらくも　私云霧のふかき故にへたて
おほくとかきなしたるへし面白し
此姫君たちの　秘薫たゝ今立かねてきくたに折ふし
の物かなしき鐘の聲をましてたえす聞給ふ御こゝ
ろいかにとなり　弄薫の只今鐘の聲を聞もかなし
きにまして姫君達いかにとなり
おくまり給へるも　秘姫君達の人遠く聞ゆるもこと
わりとなり姫君たちのつゝましきさまなるもこと
わりそとなり
朝ほらけ家ちもみえす尋こし槇のを山は霧こめてけり
り　秘折ふしのさまなりまきのを山は宇治の名所な
り　河槇尾山宇治也山城國也椎本にまきの山へと
あり
たちかへりやすらひ給へり　姫君の事を心にかけた
る心なり
れいのいとつゝましけにて　秘大君なり
返大君
雲のゐる峰のかけちを秋霧のいとゝへたつるころに
も有哉　弄姫君閑々の體尤哀なり　不出詞　たゝあ
りなる歌のさま尤あはれなり霧さへ雲にかさなり
たる所のさま御心の中はおしはかり給ふへきとな
り

いかはかりおかしき　秘薫の心なり
心ぐるしき事おほかるにも　弄薫の心もとまり又此
歌をみるもあはれとなり
中々なるほさにうけたまはりさしつる　秘一言も申
うけたまはりてはのこりおほきさなり　私大君さ
一ことをもかはし給へる事なり辨の尼の申さした
る事にはあらすとみゆ
世の人めいてもてなし　秘薫は大かた世の人めきて
心おき給ふへき心のある身にてはあらすさなり
弄薫を大かたの世の人めきて心おき給ふと恨給ふ
心なり
あしろはひとさわかしけなりされとひをもよらぬに
や　花内膳司式云山城國近江國氷魚網代各一所其氷
魚始九月迄十二月卅日供之　今按近江の田上のあ
しろにもれたる氷魚を山城宇治にてとるといへり
河六帖「宇治川のひをのよらねはねをそなくあしろも
るてふひとのつらさに　貫之　鮎　和名氷魚
後撰になか月のつこもりの日紅葉にひをゝつけて
をこせて侍りけれは　「宇治山の紅葉をみすは長
月の過行日をもしらすそあらまし　秘御ともの人
のいふなり
何となき世のいとなみともに　あしろ柴かり舟なと
いふなり
誰もおもへはおなしことなる　河れなしことなり
私同事然へし　氷魚のために殺生し柴をはこひて
世をわたるいつれも利をあらそふ心はおなし事と
なり　弄はかなき事ともと見給ふて又身のうへな
とにおもひかへし給ふ妙なり
我はうかはす玉のうてなにしつけき身とおもふへき
世かはと　河露臺一本記　露樓――　拾「けふみれ
は玉のうてなもなかりけりあやめの草のいほりの
みして　秘我はしつのわさなとはせされともそれ
を至極とも思ふへきにあらすいつれもおなしかり
の世といへるなり　弄薫の玉の臺に住て水のうへ
にうかはねともれもへはおなし事なりとなり
あなたにきこえ給ふ　姫君の御方へなり
薫はし姫の心をくみてたかせさすさをの雫に袖そぬれ
ぬる　橋姫は宇治橋の神也此故に萬葉にもちはやふ
る宇治といへり　古「さむしろに衣かたしきこよ
ひもや我を待らん宇治の橋姫　宇治橋姫と云物語

あり　宇治橋は孝德天皇大化二年沙門道澄（昭イ）始造也
三本河海之端註之今書加此所――宇治橋　石
上銘曰　沉々横流横　其疾如箭　條々征（往）人　停（倚イ）騎
成市　欲超重深　人馬亡命　從古至今　莫知杭（抗イ）葦
世有釋子　名曰道澄（證イ）　出自山尻　惠濱之家　大化
元年　丙午之歲　搆立此橋　濟度人畜　即因微善
爰發大願　結因此橋　成果彼所　法果衆生　普同（因イ）
此願　夢裡空中　導其昔（此イ）緣　孝德天皇御宇（自丙午歲至弘安七
年甲午六百三十九ヶ年也）（大永六七廿五寫之伏見殿御本也）　已上三本如此　花　宇治の橋ひめ
は橋下の姫大明神と申神なり離宮の神此姫神にか
よひ給ふといふ說あり又一說住吉大明神の宇治の
橋下（姫イ）にかよひ給ふといふさむしろに衣かたしきの
歌は住吉大明神の御歌といひつたへたり　六帖ぬ
は玉のよむへはかへる今夜さへ我をかへすなうち
のはしひめ　弄 橋姫に姫君をよそへ　さほのしつく
に以下はかほるの身によそへたり　秘 橋姫の事兩
說いつれにても此歌は姫君をはし姫によそへてい
へり下句は薫の身によそへたり　私心をくみては
心中を察する義なり　箋 たかせは高き瀬なり淺く
て舟のこしかたき所なり仍棹もひまなく袖もぬる
へきなり又高瀬舟といふは此高瀬をこさんれうに
舟の底をあさくひらたに作りたる物なりそれは高
瀬舟とて舟の名なり

なかめ給らんと　箋 さひしからん事を云なり

さむけにいらゝきたるかほして　河 寒き時鳥はた（イナシ）の
たつをいふなり詩に鷄（鶴イ）皮といふはこれなり　この
ゐ人のさまなり

ときをこそはかゝるをりはとて　秘 疾なり　かやう
の時おそきは心おくれたる事となり

（返姫君）さしかへる宇治の川長（チサ）朝夕のしつくや袖をくたしは
つらん　弄 姫君の我身によせてよめり　秘 姫君の我
身のうへを悉皆いひ出給へるなり
今按一二の句は薫のかたを云て三の句以下姫君に
みるへき歟となり　箋 さしかへるは行かへる心な
りたゝさしてかへるはかりにては大君のしたふや
うに成なりされは惡敷なりくたしはつらんは大君
の袖なり上句は薫の事をふくむなり

身さへうきてと　河 さす棹のしつくにぬるゝ物ゆゑ
に身さへうきてもおもほゆるかな　弄 秘箋一同に

用此歌
心とまりぬれと　大君のさまのかをるの心につきたるなり
かへりわたらせ給はんほとに　秘八宮かへり給はん時になり
みなこの人にぬきかけ　薫のきぬ以下狩衣なとも殿ゐ人に給へるとなり
老人の物かたり心にかゝりて　箋辨の尼のいひ出し事なり　秘くい太子の我身にとひけんさとりなとねかひ給ひしゆかりの事なれはなり
思ひしよりはこよなくまさりて　秘姫君たちのさま也　箋かねてより思ひあなつりしにたかへると也
猶思ひはなれかたき　秘世を観したる心なり　弄可見也と云々
白きしきしのあつこえたるに筆はひきつくろひて　箋梅か枝巻に白きひらをは心して源氏の草子をもかき給へるよしあり色ある紙よりも白きは墨つきなともよきあしき見ゆへき事なり
うちつけなるさまにやと　秘文の詞なるへし弄　箋宇治にて姫君たちにはしめて對面の事なりされは何事もうちつけたるゆゑに申殘したるとなり
あいなくとゝめ侍りて　秘くはしく申へけれともととめ侍しとなり
かたはしきこえおきつるやうに　箋かをるのみすの前をたちさまにの給ひし事なり
御山こもりはて(イナシ)侍らん　八宮の御おこなひまする時の事なり
すくよかに　箋風流めかぬなり
右近のそうなる人　秘右近將監なり
かの老人たつねて　辨の尼なり
又の日かの御寺にも　阿闍梨の寺に八宮おはしますなり
さておはしますらんほとのふせ給ふへからんと　箋八宮の山におはします事なり布施物の料をかをるの奉るとなり　秘此七日御念佛の間の御布施にさる(イナシ)なり
とのゐ人かの御ぬきすての　薫のぬきすてし衣裳也
かりの御そとも　河狩衣なり　短裳(カリキヌ)舊事本記
身をはたえか(カイ)へぬ　箋よき衣裳にてもかたちはかはらす彌似あはぬなり

こゝろにまかせて身をやすくもふるまはれす　秘千家州に杜子美か詩に錦鯨巻還(ガヘスニ)ㇾ客始覺意和平といへる類なり

君は姫君の御かへり事　秘君とは薫なり宇治よりの返事なり　箋姫君は大君なり

こめかしきを　弄こゝにては巨なる心なり大やうなるなり箋　秘巨の字なりほめたる心なり

宮にもかく御せうそこ　秘八宮へも此よしを申給へり

何かはけさうたちてもてなひ給はんも　【秘八宮の詞なり薫にはゆるし給へるなり　私何かはと切てよむへき歟

なからん後もなと　秘かやうにおもむけ給ひしとなり

心にとめたらん　箋八宮の前になからん後もなと一ことほのめかし給ひし故にこそかくねんころなるらめけさうたちてはあらしとなり

御みつからもさま〱の御とふらひ　弄八宮より薫への返事もよろこひ給ひし事也　秘八宮なり絹綿なとをたてまつりたるをふかく悦ひ給へるその禮をも申さんとて薫のまうて給へるなるへし

山のいはやにあまりし　寺の事をおもしろくかけり布施のこと〱しかりしとなり

三宮のかやうにおくりたらん　秘匂宮なりかやうのかくろへたる事見出したきの心ふかくまします事なり　案之匂宮宇治にかよひ給ふ事紅梅巻よりもさきの事なり

きこえはけまして　箋御心のとまるやうにいひなさんとなり

のとかなる夕くれに　秘匂宮へまゐり給へり　弄薫の匂宮へ參り給ふこれより匂宮も宇治の姫君の事を聞初給ふ上の巻に宇治へもかよひ給ふとありしよりもさきの事なり

みしあかつきの　宇治にて薫のかいまみし事也

宮いとせちに　匂宮の按のことく心のとまりたるなり

されはよと御けしきをみて　薫の心なり

さてその有けんかへり事　箋宇治よりの返事なり匂宮の詞也

さかしいとさま〱　秘薫の詞なり　箋匂の我なら

は見せんとの給へともさもなしとなり
かのわたりは　宇治の事なり
いともうもれたる身にひきこめて　秘我身ひとつにひきこめてあるましきとなり
いかてかたつねよらせ　かをるのことはなり　秘かろ〳〵しくいかにしてかよひ給ふへきそとなり箋
かやすきほとこそすかまほしくは　弄匂宮はかやすからぬ御身なれはとなり秘箋
さるかたに見所有ぬへき女の　秘總して世上の事を云り弄箋　箋物おもはしき女とは身の上にたしろきありて山さとめきかくろへたるかたはらのやうなる所にかくろへてしかるへき女なとのある事かあるといふそ
おのつから侍へかめり　河侍るめりなり　箋前にうちかくろへつゝおほかめるかなといひし畢竟也
このきこえさする　箋宇治の事なり　秘八宮のひしりたち給ふあたりにさへかやうの事のあれは其外かくろへたる事は必有へき事となり
ほのかなりし月かけの　箋前にのそき給ひし時の事也

さはかりならんをそあらまほしきほとゝ也　弄かやうのをこそあらまほしくおほえけれとなり
いとねたくおほろけの人の心うつるましき　秘匂の御心なり薫のかくほめ給へは一しほゆかしく思ひ給ふなり箋
猶又々よくけしきみ給へと人をすゝめ　箋匂宮のかをるへの給ふなり　秘薫をすゝめ申さるゝなり
よだけさをいとはしきまて　秘大やうに上らうしき心なり　箋物のおよひなきやうの心なり
おかしくて　秘薫の詞なり　箋薫の心なり
いてやよしなくそ侍る　箋薫の詞なり匂宮の又々けしき見給へなとゝすゝめ給ふにつきていや〳〵我は世に心とゝめましと思へはよしなき事そとなり心のとまりそめなとし侍らば本懐にたかふへしとなり
いてあなこと〳〵し　秘匂宮の詞箋
ひしりことは　河聖人詞なり　秘聖人詞なり弄
心のうちにはかのふる人の　箋薫の心中なり辨尼のほのかたりし實父の事を聞あきらめたきはかりそとなり

うちおとろかされて　又辨の尼にもよほされて彌此ほとは心にかゝるなり

あしろをこそこの頃は御覽せめと　箋よき網代の時分そと薫へ人の申すなり

なにかそのひをむしにあらそふ心にして　秘蜉蝣をいへり朝あれとも夕をしらぬ身そとなり箋　弄蜉蝣を氷魚によそへたり　河蜉蝣フエウヒチムシ　無常の喩に云り蜉フユウ　朝生暮死蟲也　西圓固イ法師はやかて氷魚と申けり常にかやうに心得たる無念の事なり蜉蝣は朝に生て夕をまたぬと無常の喩の虫のしかも氷魚の名にかよひたるをいひたれはこそ有興事なれたゝ氷魚はかりにて何の興か有へき大かた此物語をおしよみてはことはりあらはれかたき事多かるへし　花郭璞か詩に借問蜉蝣ノ輩寧知二龜鶴年一

あしろにもよらんとろきすて給ひて　前の詞におかしとみる事もめやすしときくあたりも何はかり心にもとまらさりけりといふに合せてみるへし

あしろ車にて　秘昔は女なとのみ乘し車なり

かさりのなほしさしぬき　花昔は公卿も直衣に平絹を用たるへし　河練直衣　指貫　ことさらひのひはやすめ字なり　故着也ユトサラキル　箋人にまきれんとてき給へるなり　弄問云昔は公卿も着すと花鳥餘情にあそはされ候大かたいかなる人いかやうの時着するそや橋姫卷にては薫中將着すとあり十月の事なり一答かとりは平絹を云ふなり殿上人着用之又公卿着夏冬更衣時着之又服者なと着之

宮まちよろこひ給ひて　秘八宮也

所につけたる　其所に似合たるなり

ふみとものふかき　甚深の義なり　經論聖敎也

あさりもさうしおろして　阿闍梨請下也

きなこいはせ給ふ　秘義理なり　箋議なとなり

うちもまとろます　かやうの法文なときゝて夜もすからいね給はぬなり次の詞河風のいとあらましきといふにつゝけておもしろくかけり

ありしのゝめ　秘姫君の御事思ひいつるなり　箋御留守に姫君たちの箏琵琶聞し時の事なり

きんのねのあはれなることのついてに　弄八宮琴の上手なりしゆへにまつその事を薫のゝ給ひ出すなり

さきのたひ霧にまとはされ侍し　秘薫の詞なり

色をも香をも思ひすてゝし後　河奥入「君ならて誰にか
みせん梅花色をも香をもしる人そしる　箋不及引
歌八宮の詞萬事世間の事を抛て後はとの給ふこと
はなり　秘八宮の詞なり
いとつきなくなりにたりや　八宮の詞なり
しるへする物のねにつけて　秘しるへし給はゝ思ひ
出す事も有へきとなり　箋薫の何にてもひき給は
はそれにつきては思出給ふへきとなり
ひはめしてまらうとに　箋琵琶を薫に所望し給ふな
り琵琶は絃の中にて音頭をするなり
とりてしらへたまふ　弄薫のしらへたまふ也
さらにはのかにきゝ侍し　秘薫の詞なり一日きゝて
忘れかたかりし音は器からと思ひしに只今しらへ
てみ侍れはさもなきとて弾し給はさるなり　箋秘
に同し　弄姫君たちの調を聞し事なりそれは別し
てすくれたりきと云々
御ことひゝきからにや　弄ひき給ふ人によりてにや
となり薫卑下の詞なり
いてあなさかなや　秘八宮の詞なり　箋さほとにま
て聞給ひたる歟さりとも恥給ふへき事にてはなし

との八宮の詞なり　秘此さかなやといふは夫程に
ほめ給ふはあまりなる事なれは口さかなくの給ふ
やうなりといふにや結句わろ口めくといふ八宮卑
下し給ふ詞歟如何
きんかきならし　琴は八宮のひき給ふなり
かたへはみねの松風の　河拾松風入夜琴といふことを
齋宮女御　「ことの音に嶺の松かせかよふらしい
つれのをよりしらへそめけん　花後撰夏の夜深養
父か琴ひくをきゝて　中納言兼輔　「みしか夜の
ふけ行まゝに高砂のみねの松かせ吹かとそ聞　箋
引歌ことの音にみねの松風――　松風ゆゑに一入の感
今あるなるへしとなり
このわたりにをり／＼ほのめくさうのこと　秘八宮
の詞なり中君の所作に宣へり箋　弄八宮の語也姫
君たちの調の事を宣ふ也心えたるにやとはよくひ
きえたるかときく時もありとなり箋
心にまかせてれの／＼かきならすへかめるは　箋合
奏のつねになき事をの給ふなり
ろなう物のようにすはかりのはうしなとも　河無論
なり勿論なり　秘用にたつなり　弄用にたつはか

りはあらしとなり　箋はうしは拍子也
かきならし給へとあなたにきこえ給へど　姫君たちに箏琵琶なと八宮のすゝめ給へと引給はぬとなり
いとくちをしうおほゆ　秘薫の心なり一日の曉聞給ひしをたにはつかしく覺して只今はすこしもひき給はぬなり
そのついてにもかくあやしうよつかぬ　秘此姫君たちをかくておき給ふ事は薫の心もはつかしきとなり箋　弄八宮の心姫君たちもよつかぬありさまを人の思ひやるへきとなり
人にたにいかにしらせしと　よすかなとさため給はん事は沙汰にも及はす人にしらせもせしとてかくてはくゝみ給へともまことに世をかけはなれ給はん時にはほたしと成ぬへきをなけき給ふなり
行末遠き人　姫君たちなり
心くるしう見たてまつり給　弄薫の心也箋同
わさとの御うしろみたち　秘薫の詞なり　等閑あるましきとなり　私薫の本妻なとゝいふやうのかたにはあらての給ひおくすちの御うしろみはかりは等閑あらしとなり

いとうれしき事と　秘八宮の御心なり箋
宮の御おこなひし給ふほとに　八宮後夜のおこなひ歟
老人めしいてゝあひ給へり　箋辨君なり
ひめ君の御うしろみにて　秘こゝにて辨の君の傳を書なり椎本卷に系圖をよくかけり
故權大納言の君の　箋柏木の事なり
よとゝもに　弄夜の事に用たるもある也　是は世さゝもの心なるへし　一勘世にも用へきなり
なくことかきりなし　辨の尼の體の事なり
けによその人のうへときかんたに　秘薫の心なり箋
涙とゝめかたかりける　是まてかをるの心なり
さてもかくその世の心しりたる人ものこり給へりけるを　箋薫の詞なり柏木のことを辨君のよくしりたる事を云なり
めつらかにもはつかしうもおほゆることの　薫のためには人のあまたしらんは面目なき事なり
猶かくいひつたふる　秘薫辨君に問給ふ詞なり又しる人ありとのよしなり　箋辨の君の外に又世にいひつたふる人あらは女三の御爲もわか身のためも

心くるしさに薫のさひ給ふなり
小侍従さ辨とはなちて　秘 辨の尼の詞なり　箋 小侍従と辨といとこ也女三柏木のめとの子共なり
かの御かけにつきたてまつりて　秘 柏木のかけなり
弄
たゝふたりの中に　秘 小侍従と辨となり
かたはらいたけれはくはしうも　箋 薫へ柏木の事をあらはにはいひかたきなり
いまはのとちめになり給ひて　箋 柏木の終焉の時分なり
きこしめしつたふへきと　箋 薫のきこしめしつたふるやうにと朝夕思ひ念せししるし有てとかくかたり申せは佛の利生も有世なりといふなり
御らんせさすへき物も侍り　箋 文ともの事なり
いまは何かはやきもすて侍なん　箋 わか方におきて落ちりなとしてはと思ひしほとに焼もすてんと思ひしなりされとかく薫へあひ奉れはそれへつたへ申さんほとに焼もすてしとなり
ちからいてまうできてなむ　弄 力出來なり
さらにこれは此世の事にも　是は前世の宿縁なるへしとなり弄
うまれ給けるほとの　薫誕生の時の事なり
むなしうなり給にしさわきに　秘 柏木の事なり
母に侍し人はやかてやまひつきて　弄 辨か母なり柏木のめのとなり
いとゝ思う給へしつみに　辨君か心なり
ぶぢごろもたちかさね　秘 柏木の藤衣にわか母（柏木のめのとなり）の服をかさかぬると也箋　花 辨の君柏木の服と母の服とを着したる事を云なり　河 纏衣フチコロモ喪衣 和名　六帖「ひとへたにきるはわひしき藤衣かさぬる秋を思ひやらなむ　貫之　同「ふち衣かさなるおもひ思ひやる心はけふもやすまさりけり
拾長歌　源順「あら玉の　としのはたち（みたひイ）に　たらさりし　ときはの山の　山さむみ　風もさはらぬ　藤ころも　ふたゝひたちし　朝霧に
年ころよからぬ人の心をつけたりけるか　秘 辨を妻とせし人ありきとなり大貳小貳なとにぐして行けるにや　箋 弄に辨君か人にはかられて筑紫へ下りし事をいふなり
人をはかりこちて　河 詐ハカリコト　花 はかるはたはから

れたる事なり
その人もかしこにて　辨か夫の事なり　秘西の國へぐしてくたりける人なり
この宮はちゝかたにつけて　秘姫君の親類なり
冷泉院の女御との　秘致仕大臣の女なり　弄柏木のいもうとなり　箋柏木の妹弘徽殿と云なり
はしたなくて　箋今さらにはれ〳〵しきやうなる心なり
み山かくれのくち木に　河古「かたちこそみ山かくれのくち木なれ心は花になさはなりなむ兼藝法師　箋詞はかりなり　不及引歌歟　弄歌の心也云々
さすかにめつらひ(くらぞイ)侍れなと　辨か身上の事なり
れいのあけはてぬ　秘前にも物語にて夜もあけぬさてれいのとはいへり
よしさらはこのむかし物かたりは　秘薫の詞なり花弄　箋薫の返答なり
侍従といひし人は　小侍従か事なり薫の五六歳の時うせぬるとなり
つみおもき身にて　箋實父をしらぬは罪障おもかるへきとなり

さゝやかにおしまきあはせたるほぐとものかひくさひを(イナシ)　河細々許(サヽヤカ)遊仙窟　ほそくまきたる心歟ほく反古なり　秘さゝやかに――　弄さゝやかに一勘さの字清濁如何　花かひくさきはかびてふるくさきを云なり
おまへにてうしなはせ給へ　秘薫の御前なりやきすて給へといふなり弄箋
われ猶いくへくもあらす成にたり　秘柏木臨終にかくの給ひしとなり弄箋
つたへ參らせんと　小侍従は女三宮にさふらへは生長して薫へ參らせんと思ひしとなり
やかてわかれ侍りにしも　秘西國まて下りし事は私の悲なり　私云此私の悲なりと秘にのせられたる心得かたし
わたくし事にはあらすかなしうなん　箋小侍従にわかれし事のかなしみはわたくし事はかりにはあらす此文のつてなともなかりし故に一入かなしきとなり　私此義よくきこえたり　秘の義あやまれり
つれなくてこれはかくい給ひつ　秘此文をは薫のとりておき給ふなり箋

かへす〳〵もちらさぬよしを　箋 辨君他言せぬよしを返々いひしをさにこそと思ひつゝも猶かをるの思ひみたれ給ふなり
御かゆてはいひなと　八宮のかたにてなり
昨日はいとまひなりし　河 暇日(イトマビ)　箋 暇文(イトマフミ)といふ物をかきて暇を申ことあり暇日(イトマヒ)も名目(ミヤウモク)なり
内の御物いみもあきぬらん　秘 八宮へ申さるゝなりつゝしみある日は大かたの人も出入せす外へも出す物忌なといひてつゝしむなり
院の女一宮なやみ給ふ御とふらひに　秘 冷泉院の女宮なり　弄 冷泉院の女宮事母は致仕大臣の女弘徽殿と號す
かくしは〳〵立よらせ給ふに　箋 八宮の詞也しはしはは細々の心也數の字なり　八宮悦喜し給へるなり
からのふせんれうをぬひて　河 唐浮線綾也　箋 禁色の冬の直衣文歟
上(ジヤウ)といふもしを　かみのかたのしるしなるへし
かの御名のふうつきたり　弄 柏木の封したるなり箋柏木の判形あるなり　私 彼御名の封なり判形は草名を猶くづしたる物なり
御ふみのかへり事いつゝむつ　私 女三宮の御文なり　箋 女三の御返事なり
さてはかの御手にて　秘 遺言なり女三宮へ參るへき物なり　箋 柏木の手なり
やまひはおもくかきりに成にたるに　秘 文の詞なり　箋　弄 柏木の文の詞なりこの文女三宮の御方へやるへき心さしなるをいまたえ奉らて辨か方にありしなり
ゆかしく思ふことはそひにたり　弄 柏木今はのほとなれは女三宮をゆかしく思ふ心そひたるなり　秘 對面もなき事となり臨終なれはなり
御かたちもかはりて　私 女三宮尼に成給へるなり箋弄
あやしき鳥のあとのやうにかきて　河 蒼頡見二鳥跡一はしめて文字を作りしなり　箋 是はたゝそのもしともみえかたき事にいへり
柏木 めのまへにこの世をそむく君よりもよそにわかるゝ我そかなしき　花古今「聲をたにきかてわかるゝ玉よりもなき床にねん君そかなしき　秘 御さまをかへ

給ふなり古今聲をたにきかてわかるゝ――の心あり　箋女三宮の御かたちをかへ給ふは有ましきかなしき事なりされとも柏木ははや死の道におもむけは猶まされるといへる成へし

めつらしくきゝ給ふる二葉　秘薫の事なり箋　花二葉の松はをさなき人にたとふ是はかをる大將の事なり

うしろめたう思ひ給ふるかたはなけれと　秘源の御子とて人々おろかに思ふましきと也　弄源氏の御子の分なれは薫の行末うしろめたくはなけれとも命たえすして見す成なん事を歎きたる心なり

柏木

いのちあらはそれともみまし人しれす岩ねにとめし松のおひ末　箋命たにあらはよそなからそれともみましをとなり　引歌種しあれは岩にも松は生にけり云々

しみといふ虫のすみかになりて　河蟫シミ　蠹同　又白魚和名云食書虫名也　衣魚同　紙魚同　齒蠹　蠹落書棚韓文　杜陵詩積蠹鄙獄劒生苔　白氏文集　花白氏文集十四云經䟽白紙兩三束半是君詩半是書經レ年不レ展縁ニ身病ニ今日開看生ニ蠹魚一　秘「いたつらにうちおく文も月日へてあくれはしみのすみかとそなると定家卿のよめるも此心なるへし

跡はきえすたゝいまかきたらんにも　河「かきつくる跡は千とせも有ぬへし忘れす忍ふ人やなからん　秘引歌同し

いとほしき事ともなり　箋薫の心に女三宮柏木の事を思ふなり

うちへ參らんと覺しつるもいてたゝれす　箋前に參内有へきよしありしなりされとも此文を見給ひて物思はしき心のあるゆゑに出たゝれぬとなり

宮の御まへにまゐり給へれは　秘女三宮なり弄何かはしりにけりとも　箋女三宮へ此事をしりたるとはしらせ申ましきとの薫のこゝろなり

よろつにおもひゐ給へり　かをるの何やかやと物おもはしく思ひつゝけたる心なり

岷江入楚第四十七　椎本

廿二歳　此年立には十九歳云々　私此年立花鳥餘情とは三年の相違ありて十九歳とのせらる然共諸抄の說廿二歳の分相違なしと云々

二月廿日頃匂兵部卿宮泊瀨詣事

歸京之次留宇治給事

夕霧右大臣御馱餉事

薰宰相中將參御迎事

宇治八宮遣御消息於薰中將事

匂宮見給有御返歌事

薰中將伴人々參八宮合物音事

匂宮遣消息於宇治宮事

中宮書御返事給事

藤大納言參御迎事

宇治宮御女年齡事　姉君廿五　中君廿三云々

其秋宰相中將任中納言事　竹川卷末詞同時也

七月源中納言詣宇治給事

宮姫君達御事源中納言申付給事

初イ物音定事

大將君引琴給事

源中納言逢辨君物語事

兵部卿宮常通書於宇治事

暮秋八宮爲御念佛移阿闍梨寺給事

申置女君達給間事

自念佛三昧結願日八宮病惱事

八月廿日夜中八宮薨給事

源中納言聞宮御事驚歎事

訪阿闍梨事

九月匂宮紅葉道遙留給事

匂宮遣消息於宇治事　大君書御返事給中君不書給故也

早旦匂宮又遣御文於宇治事　無返事也

御中陰終源中納言參宇治給事

姫君聞對面給事　與老人物語事

源中納言對面匂宮之次物語宇治姫君達事

宇治姫君達御有樣事

年暮事

年暮源中納言訪宇治給事

對面姫君之次語匂宮御趣給事

與宿直人語給事

廿三歳　中納言　年立には廿歳と云々

春初自阿闍梨許献芹蕨於宇治宮事

花頃匂宮送消息於宇治給事中君有返事

兵部卿宮責恨源中納言給事

三條宮燒亡入道宮移六條院給事

六月炎日源中納言出宇治給自障子穴奉見姫君達事

椎本　花 以歌詞爲卷名

河 立よらんかけとたのみし椎かもとむなしき床に成にける哉　秘 卷名以歌號之薫廿二歳の春より次の年廿三の夏までのことなり花鳥異あり不用之箋同　弄 卷名歌にあり薫廿二歳の春より次の年廿三の夏迄の事なり　花 薫十九歳の春より廿歳の夏までの事みえたり十九の秋に中納言にはなり侍るなり竹川卷と同時なり

きさらきの廿日のほとに兵部卿の宮はつせにまうて給ふ　秘 宿願をはたし給へるなり　箋 兵部卿宮は匂宮なり三宮なり　河 長谷寺の事玉鬘卷にみゆ箋同

うちのわたりの御なかやとりの　花 南都下向の人は宇治を中宿にす後々の御幸なとにも平等院にて御儲の事あるなり　秘 南都御幸なとにも中やとりにし給所なりもとはなしまの頓宮にて春日祭の使なとは中宿をせしなり「待人の山ちの月も遠ければは里の名つらきかたしきの床　定家　箋 兵部卿宮は宮の姫君たちを聞おきてゆかしくおほすなるへしといへるなり

おほくはもよほされ給へるなるへし　箋 此段草子地なり

うらめしといふ人も有ける里の名の　河 本歌未勘出たゝ世を宇治山のうたの大意也古歌「忘らるゝ身をうち橋の中たえて人もかよはぬ年そへにける　花 うらめしといふ里の名は古今の歌に世をうち山をうち橋なとよめる心をとりていへるなり此源氏の詞をとりて讀る歌に元久元年七月宇治御幸の時夜戀の題にて定家卿「まつ人の山ちの月も遠けれはさとの名つらきかたしきの床　また名所秋歌に家隆卿「初霜のなれもおきいてさゆる夜に里の名うらみうつ衣かな　弄 我いほは都のたつみの歌を引り　秘 喜撰か歌を下にふくめり　箋 この引歌河海未勘花鳥定家卿家隆卿の歌を引り只うちは世のうきなり喜撰か歌をこゝろにもちてかく書なせるなり

なへてむつましうおほさるゝ　秘 姫君たちゆゑに匂宮のなつかしく思ひ給ふもはかなき事と草子地のかたなり

殿上人なとはさらにもいはす　箋 公卿さへかすおほけれはかく有へし

六條院よりつたはりて　弄　花鳥

右(左イ)大殿しり給所は川よりをちに　秘　源より夕霧の傳領ある所なり今の平等院なるへし花鳥にくはしく見えたり　河をちとは遠き心なり或又あなたと云心(心はイ)にも用之歟。貫之歌に昨日よりをちをはしらすとよめりいつれも不可違　遠方(ヲチカタ)　遠近(ヲチコチ)　彼方(ヲチカタ)　花　河原左大臣融公の別業宇治にあり陽成天皇しはらく此所におはしましけり宇治の院と云所なり宇多天皇朱雀院と申を領し給へる所なり　承平の御門こゝにて遊獵有ける事李部王記に見えたり其後六條左大臣雅信公の所領たりしを長德四年十月の頃御堂關白此院を買とりて同五年宇治の家にむかひ遊なとありき宇治關白の代に成て永承七年に寺になされて法華三昧を修せられ平等院となつけ侍り治曆三年に行幸ありき今は藤氏の長者のしるなり六條左大臣より御堂關白につたはりたるを二條(六イ)院よりつたはりてとはかきなし侍るなり　弄同　箋　花鳥の義尤よし云々別業は心やすく景をも見遊覽なとすへきためなり　八宮のおはする所は川よりも京の方也此所は河のむかひなり平等院に准するなり

おとゝもかへさの御むかへに　秘　夕霧匂宮の御下向の御むかへにまいり給はんとなり箋同

宮なますさましと　箋　夕霧のおはせぬを匂宮の冷然にれほすなり

宰相中將けふの御むかへにまいりあひ給へるに　秘　薫なり

中々心やすくて　秘　夕霧の參り給はてすさましと覺(くイ)しめすへき事なるを薫のまいり給へれは心やすくて夕霧の參り給へるよりはうれしく思ひ給へるを中々心やすくとはいへり

かのわたりのけしきも　箋　八宮邊のよきたよりにとなり

れとゝをはうちとけて見えにくゝ　箋　夕霧なり　紅梅卷に夕霧なとは匂宮の風流すきたると思ひ申給ふゆゑに見えにくゝし給ふとあるにや紅梅大納言のいへる事にや

御子の君たち　秘　夕霧の御子なり

右大辨侍從宰相權中將とうの少將藏人の兵衛佐

夕霧
　├三男 右大辨 母三條上
　├四男 侍從宰相 不母審
　├五男 權中將 母三条上系圖には源宰相中將竹川に藏人少將三位中將又宰相になることあり
　├六男 頭少將 母藤内侍系圖には頭中將竹川には源少將さいへり
　└七男 藏人兵衛佐 母三條上系圖には四位少將也竹川に兵衛佐也

弄 皆何れも夕霧の子ともなり

心ことに思ひきこえ給へるは宮なれは（イナシ） 箋 主上も母后も此匂宮をは愛子にてましますよしなり

まいて六條院の御かたさまは 箋 紫上やしなひたて給ひし故なり

碁すくろくたぎのばん 河 圍碁 堯始作之 雙六 自天竺起之云々打綿大皇二年禁制 又孟嘗君作 彈碁 後漢書梁冀傳云彈棊藝經彈碁兩人對局白黑碁各六枚先列碁相當更先彈也碁局以石爲之先斷に 箋 彈碁は碁をはしくなり若石はしきなとの事歟（イナシ）

こゝにやすらはんの御心もふかけれは 箋 八宮の姫君たちの事ゆゑなり

水のおもゝてはやして 箋 かやうに山や川なとかけたる所は物音なとも心つかひかはるへし樂なとも仕にくき物なりされともゝてはやす心ちしてといへりもてはやすにてはなき心なり

かのひしりの宮にもたゝさしわたる 箋 八宮なり川を隔たるなり 花 宇治院は平等院を云成へし河のむかひ也ひしりの宮は川よりこなたなれは舟にてさしわたるほとちかきなり今の橋守のわたりをいへるなり

むかしの事おほしいてられて 弄 八宮の心なり

ふえをいとおかしうも（イナシ）ふきとを（ほイ）したるかな 秘 薫の笛なり弄同

おかしけにあいきやうつきたる 源の御笛は音色もうつりうつくしく愛あるさまなるへし

ちゝのおとゝの御ぞうの 河 御孫なり 一族の心なり 弄 薫の笛の音致仕の聲ににたるとなり柏木に通る故なり 箋 是は薫の笛の事なり誰ともなし八宮のよそなから聞しり給へるなり

さい相の君のおなしうは 秘 薫なり 八宮の御心也

さしも思ひよるましかめり 秘 法文なとをのみならひ給ふをいへり 弄 薫も法文にことよせてわたり（出イ）給へりされはいかてか姫君の事をうちけんと宮の思ひ給ふなり

いかてかはなさおほしみたれつれ〳〵となかめ給ふ所は　箋是は決前先後の句なり此句の所は前にてしかゝ跡へかゝるなり　秘かやうの遊なさし給ふを聞給へは一しほのつれ〳〵もまさりぬへし

心やり給へるたひねのやとり　秘匂宮の御方なり遊なとにてあかし給ふ故なり

ちる櫻あれはいまひらけそむるなと　河「櫻さくさくらの山のさくら花ちるさくらあれはさく櫻あり　秘同歌引之　弄引歌同箋同　私詩にも　春風堪賞還堪恨纔見開花又落花とあり

川そひ柳のおきふしなひく水かけ　河（六帖）「いなむしろ川そひ柳水ゆけはおきふしみれとそのねた（えイ）へせす　秘河海六帖貫之か歌いなむしろ川そひ柳云々　按日本紀第十五顯宗天皇御歌に「いなむしろ川そひ柳水ゆけはなひきおきたちそのねはうせす　此歌猶川そひ柳とよめるはしめなるへきなり　箒木巻に池の水かけ見えてとあり　水影詩にはあれとも歌には宜からす是は柳の水にうつりたる影なりされはさのみあしからさるへし只水はかりにていへるはあしきとなり

かの宮にまうてはやと　薫の八宮へ参りたく思ふよしなり

かれより御ふみあり　箋八宮より薫へ御音つれあるなり

八宮
山風に霞吹とくこゑはあれとへたてゝ見ゆるをちのしら波　秘笛のねはへたてされとも心のへたてこそつらけれとなり　弄笛のことをよせたり　箋霞吹とくは笛をいふなりされとも笛を吹ときたるにてはなしこゝへとふらひ來給はぬほとにといふなり

宮おほすあたりと　秘匂宮御返事あるなり同箋

返匂宮
をちこちのみきはの浪はへたつともなほふきかよへ宇治の川かせ　秘そなたより心なへたて給ひそとなり　箋是は浪にへたてさせたるとなり

中將はまうて給ふ　秘薫なり箋同

あそひに心いれたる君たち　箋若君たちをさそひ給ふなり

さしやり給ふほと　舟わたしの體なり

かんすい（ねイ）らくあそひて　河酣醉樂右樂　かすい（ぬイ）らくとかきたる本もあり　河水樂壹越調元舞新樂　河邊の逍遙なれはまことに其たよりある歟然て古本におほくか

んすいらく（ゐイ）とありもし書寫のあやまり歟又勸盃の序（席イ）なれは酬醉樂も其よせなきにあらす但酒宴は管絃以後と見えたり兼て此曲を賞翫せんも前後するにや或說には宇治初度の逍遙なりやかて右樂をひらゝかさんも不可然歟と云り詞にも水にのそきたる席（宴イ）なとあれは猶河水樂にてや有へきともおほえ侍り　花村上御記應和元年閏二月十一日藤宴舟樂奏酬醉樂舞人四人云々今按酬醉樂は右樂なり舟樂に其例よせあるにや　秘花鳥の義然へし　箋河海花鳥にあり　秘箋には兩義の内の事をきかす　弄にも其沙汰なし但猶舟樂の例を用へきなり河海に初度の逍遙に右の樂如何と云々此所にて絲竹の曲は晦夕ありしと見えたりこれは翌日の事なり醉のまきれにいさう明ぬる心ちしてとあり猶以酬醉樂よせあるなり

水にのそきたるらうに　秘八宮のまします宮の廊也

ゆゑある宮なれは　弄宇治院の事なり云々

私此義如何宇治院は只今匂宮の遊なとし給ふ所なりこゝにいへるは八宮のおはする川よりこなたの宮なり

箋ゆゑある宮ゆゑある君兩本云々ゆゑある君はな（ふ）か（るイ）人をさすなりゆゑある宮とは御所の體をさしていふなり云々

こゝは又さまことに　弄八宮の事也　箋平等院宇治院歟に對していへり

山さびたるあしろびやうぶなどの　河普通の網代にてはりたる屛風なり昔は山庄なとのふるめかしき調度には定事なり漆骨に片面をはりて網組にて間合せたる物なり　遊（アジロ）屛風といふ又ひあしろの屛風といふ物有歟車のひあしろは竹を日に白く曝してくみたる物なり其體の物歟

さる心ちしてかきはらひ　秘都ひたるやうにしなし給へり　箋かきはらひは塵もなき體なり

ひき物ともを　絃の類なるへし

一こつてうの心にさくらひとあそひ給ふ　河櫻人　一說延久　破同音　高麗雙調

さくら人そのふねとゝめしまつたをとまちつくれるみてかへりこんやそよや一段あすかへりこんやそよや二段ことをこそあすともいはめをちかたにつまさるせなゝ（イナシ）れはあすもさねこしやそよやあす

もさねこしやそよや催馬樂呂　花櫻人は呂歌なり呂
は雙調律は平調なり雙調の樂には多は壹越調をわ（い）
（イ）たして吹ゆゑなり一越調も則又呂也薫の中將を櫻
人にたとふるなり　秘心にとは櫻人は呂歌にて雙
調なるを一越調のわ（にいイ）たし物したるなり櫻人の詞に
その舟ちゝめといへる詞ありちゝめはとゝめよと
いへる詞なりさて爰にてうたひ給ふなり
あるしの宮の御きんを　八宮なり琴の上手なるを各
聞及ふさなり　箋源氏は無雙の上手にて皆聞たり
し人なさそあれは也八宮の卑下し給ふなり云々
見えなれぬけにや　面白き曲ある手をひき給ふなり
所につけたるわるし　秘饗應なり
なまそんわうめくいやしからぬ人あまたおほきみ四
位のふるめきたる　河生孫王此物かたりにも生王家無等論さあり
おほきみ四位を古人正四位と釋せり古今序に人丸
正三位をおほきみつの位とあるに思ひあたる也但
是も有說におほきみつのとあれは正三位無子細歟
これはおほきみ歟王の字也王氏の四位といふなり
生孫王めく同體なり　箋なまそんわうめくは王孫
の事なりおほきみも同體なり四位のふるめきたる

は四品したる樣の者なり
へいしとる人も　河瓶子取人也
まらうとたちは　箋薫につ（イナシ）れたる君たちともなり
秘草子地なり
かの宮はまいて　秘匂宮なり
かやすきほとならぬ　たやすき同事なり
うへわらはのおかしきして　殿上童也弄
匂兵部卿宮
山櫻匂ふあたりにたつねきておなしかさしををりて
ける哉　河「我やとゝたのむよしのに君しいらはお
なしかさしをさしこそはせめ　秘姫君のあたりを
ゆかしく思ひてこのかさしををるとよめり引歌に
我宿とたのむよしのに君し云々箋弄同
野をむつましみとや有けん　河「春の野にすみれつ
みにとこし我そ野をなつかしみ一夜ねにけり　赤
人歌　むつましみの詞參差歟但心は同事歟　水原むら
さきの一もとゆゑにむさしのゝ野をなつかしみあ
はれとそおもふ　普通の本には草はみなからとあ
り若異本の說歟不審　花匂宮宇治に一夜とまり給
へるゆゑに野をむつましみとかき給へるなり　弄
春の野にすみれの歌はゆかりをしたふ心也　秘春

の野にすみれの歌はゆかりをしたひたる心なり
箋引歌春のゝに菫云々此心にてそ有つらんなりく
はしくは見ぬと草子の地なり
御かへりいかてかはなさ　箋前はこなたへの返事を
匂宮のし給ひし故に此返事を中君にかゝせ給ふな
り歌は八宮のなるへし
ふる人ともきこゆれは　拚の尼なとのことなるへし
返歌 かさしをる花のたよりに山かつのかきねをすきぬ春
の旅人　秘卑下したる歌なりこなたへの御志にては
有へからすかきねを過ぬはかりをとなり　箋よそ
の花のたよりにてなくは此かきねをわさとは尋ね
給ふましきとなり
野をわきてしも　奥入 河一わきてしも何匂ふらむ秋の野
にいつれともなくなひくを花に　弄此引歌不當歟
花 匂宮をとりわけて御ふみのあるを何匂ふらんの
歌にとりなしてかき給へるなり　秘河海引歌不叶
歟心はこなたへはかりの御志にては有へからすと
なり　箋河海引歌不相叶花鳥には野のかたに取な
したるはかりと云々猶引歌可有之
けにかは風も心わかぬさまに　箋前の川風の歌二首

をうけてかくいふなり宇治院と八宮にてこの両方
の遊のさまなり
御むかへに藤大納言おほせことにて　秘紅葉なり上
よりの仰事にて参り給へり薫はわたくしに参り給
へるなるへし　弄紅梅右大臣也　紅梅大納言を藤
大納言とかき夕霧を右大臣といへりいつれも紅梅
巻よりさきと見えたり
物さわかしくきほひかへり給ふ　河各いそき給ふさ
てわれさきにとかへり給ふ心なり
宮は又さるへきついてしてと　秘草子地なり　箋匂
宮はついてをつくり出てわさと此わたりへおはせ
んとおほすなり
四方の霞もなかめやるほとの　秘草子の地なり　箋
所は宇治院時節は春二月景物は花興をさかせたる
時分なり
からのもやまとのもうたともおほかれと　河唐詩
和歌　詩も訓うた　そも〳〵うたのさま六つ也か
らのうたもかくそあるへき古今序
おもふまゝにもえいひやらす　八宮思ふはかりもえ
いひより給はぬを残りおほく匂宮のおほすなり

しるへなくても御ふみつねにあり　秘　薫のしり給はても文はかよはし給へり　箋　薫の傳ならてもなり

垣ねを過ぬの歌より也　花　後拾「あふみちをしるへなくてもみてしかな關のこなたはわひしかりけり

仲正　私　此引歌不當なり

宮も猶きこえ給へ　秘　八宮なりけさうたち給はて返事し給へとなり

中々心ときめきに　さもなき事をけさうたちてあえしらへは又我も心ときめきするやうになる物そとなり弄箋同

猶もあらぬすさみなめり　なほさり計にの給ふそとなり

ひめ君はかやうの事　あね君なり　河海斉書大君昔五歳中君昔三歳也　大君も物の領したる事ありて世にしたかはぬ人なりその事此ものかたりの末の卷に見えたり

春のつれ／＼はいとゝくらしかたくなかめ給ふ「思ひやれかすみこめたる山里に花まつほとい春のつれ／＼上東門院少將

ねひまさり給ふ御かたちと　秘　八宮の御心なり　箋　姫君たちの御さまなり

かたほにもおはせましかは　秘　かたなりにもあらはやとなり弄　箋　かたちのすくれすはかゝる山かけにおき給ふをあたらしくをしく思ふかたはなほさりならんとなり

宮はおもくつゝしみ給ふへきとしなりけり　秘　八宮此卷の末にて薨し給へり其序にかくなり　弄　八宮のうせ給はんする事を先かきそめたり妙なり

御おこなひつねよりもたゆみなく　箋　善知識は死期をかねてより能知事のある者なり八宮なとそ其心有へし

すゝしきみちにもおもふき給ぬへきを　秘　姫君たちはみすてかたく思ひ給ふ八宮の御心のうちをいへり　箋　おもふきはおもむきなりすゝしき道は淨刹なり

たゝこの御事ともにいと／＼ほしくかきりなき御心つよさに　此段詞のつゝき心えかたきやうなれはしるすへしすゝしき道にもおもむき給ひぬへき八宮のかきりなき道心の御心つよきなれとも此姫君たちの御ことゝもにいと／＼ほしく必今はとみすて

給はん御心もみたれなんとみたてまつる人もおし
はかりきこゆるとなり
おほすさまにはあらすとも　此段姫君たちの御うし
ろみの事なり　八宮の御心に十分におほす程なら
すとも外聞くるしからぬ程の人のま心なる御うし
ろみもかなとおほすとなりしらすかほにてとはな
ほさりの事御心こゆるしては有ましきなれはなり
私此段は八宮の姫君たちの事を薫をうしろみにさ
覺せと法文なとの事にいひより給へる人なり人か
らもさやうにも有へくもあらす打いてぬへく覺し
てさま／＼おほしあつかふ御心のうちなり
さまてふかき心に　さほとまて心とゝめて申よる人
もなしとなり
物まうての中やとり　箋便宜のやうには申よる人も
あることなり
なけのいらへをたに　河ないかしろの返事なり又な
ほさりなり
三宮そ猶見ては　秘匂宮なり
さるへきにやおはしけん宰相の中將その秋中納言に
なり給ぬ　秘しかるへき人にてましますに故昇進を

も早速にし給ふとなり　弄薫昇進の事をいへりい
かめしき宿因なるにやとなり箋　花その秋中納言
に成給ふとなり云々　花鳥に年立のあやまりはこ
こより出來ぬとなり　薫廿二歳也　その秋とは匂
宮宇治にて春あそひ給ひし時の秋なり薫宰相にて
の秋とみるにて年立の誤のあるなり竹川に人々の
昇進の事をかけりし其時と同時なり　弄匂宮の宇
治にて春遊ひ給ひし其としの秋といへり廿二歳な
り　薫の宰相にての秋と云義不相當事なり橋姫にイよ
り宰相にて三年計云々竹川に人々昇進の事を書り
し其同時の事なり　河此宰相中將竹川卷に中納言
とみえたり今又此秋中納言とあり仍同時分明なり
いかなることゝいふせく思ひわたりし　花薫の實の
父をしらさりし事なり箋　秘薫の心中なり昇進あ
るにつけてもさま／＼思ひつゝけ給ふなり
とし頃よりも心くるしう　弄薫の心に柏木の事を思
ひて道心すゝむによりて宇治の大姫君をもとりは
つし給ひしなり　箋たしかにしりてから心くるし
きなり
過給ひにけんいにしへさまの　秘柏木の事なり罪を

もかろめたきとなり
かの老人をはあはれなる物に　秘　辨君なり箋
とかくまきらはして　箋たゝ大かたなるやうにてふかき志をみするなり是妙なり〳〵
宇治にまうてゝ久しう成にけるを　薫の八宮を久しくとふらひ給はぬと思ひ出たるなり
七月はかりになりにけり　秘　前にその秋中納言にと先かきて七月はかりになりにけりといへるを不審する人あるへしかやうの處よりあやまりあるへし昇進も七月なるへし箋
都にはまた入たゝぬ秋のけしきをおとはの山ちかく
花 後撰「まつ虫の初聲さそふ秋かせは音羽山よりふきはしめけり　今按　音羽山は都近き所なりまきの山は宇治にいたりての事をいへり名所なり宇治にもちかゝるへし
まきの山へもわつかに色つきて　秘　行もて行さまなり宇治の近邊をいへり橋姫の卷にもあり箋同
猶たつねきたるに　秘　尋ね來るによき時節なるとなり
宮はまいてれいよりもまちよろこひ　秘　まへの詞に宇治にまかてゝ久しう成にけるといふ詞をうけてさてれいよりもとはかけり
ひとことにてもうけ給りおきてしかは　秘　薫の詞也　箋前に此事を八宮の宣ひし事をかくいふなり薫の詞なり
世中に心をとゝめしとはふき侍る身にて　秘　はふきは何事をも省すてたるとなり　弄　省はかへりみる心なり
たのもしけなきおひさき　秘　道心ふかくあれはたのもしけなき身なから命のかきりはゝくゝみたてまつるへしとなり箋
さるかたにてもめくらひ侍らんかきりは　弄　薫出家の本意なとはとけたりとも見すてしとなり　箋かくのことく世上に徘徊する程はとなり
夜ふかき月のあきらかにさしいてゝ山のはちかき心ちするに　八宮の心に我かよはひにくらへて觀したるなり是は山から出たるやうに聞ゆれともさにはあらす入かたの月をいふなり
此ころの世はいかゝ成にたらん　秘　八宮の詞當時の事を思ひやり給ふなり弄

くちうなとにてかやうなる秋の月に　秘九重と云義あれとも宮中可然なり　箋又九重は異説〔弄イ〕なり不用之〔禁イ〕宮中也令にては宮中〔チウ〕と讀也　弄禁中也九重　私宮中歟以上弄　九重　離騒經曰君門多以九重　王逸云天門凡有九重洛陽城閶闔門西向大道門九重也白氏文集曰君門九重閇

とり／＼にうちあはせたる　秘男方の上手なとをいへり

みつほね／＼　イ本にみつほねの重點をけして有如何　箋云此卷には一ところ／＼みつほね／＼なとゝかさねてかけり仍みつほね／＼といふを用へしと云々

おのかしゝはいとましく　河搔調　秘したにはそねみねたむ心の有なからうへには情をかはすなり弄人のけしめりぬる　人氣のしつまりたるなり夜ふけ寝しつまりたるさまなり

何事にも女はもてあそひのつまにしつへく　秘我か御むすめのうへをいはんさて公界の女のうへをかくの給へり女は何事にも人の着相を生する心のある者なり

されはつみのふかきにやあらん　箋人の心をとる物なる故に其身も罪ふかしとなり

この道のやみを　これより姫君たちのうへにかけての給ふなり

をのこはいとしもれやの心を　箋男女の子をくらふるに男子にはおやの心をみたる事もすくなかるへしとなり

女はかきりありていふかひなきかたに　弄女子はかひなしと思ひすてゝも又心くるしかるへしとなり

いかゝさおほさゝらんと　秘草子地也　秘薫の心なり此段悉皆大君中君の事をの給はんためなり

すへてまことにしか思ひすてたるけにや侍らん　秘薫の詞我身は管絃の無才覺なるは思ひすてたるけにや心にはとめされと人のをきゝて心を動すは此道なりとなり弄　箋薫の詞なり總別世上の事を思ひすてたる事なり　私箋の義然るへし女の上の事也さやうの事には心をとめぬ故にや能〻分別せす聲にめつる心は猶思ひすてかたしとかをるの申給ふなり

さかしうひじりだつかせうも　弄河海に見ゆ　秘河

海に見えたり優婆塞宮に對しての詞なれは似あひたる事にて面白し一てゑきゝしとは立きゝ給ひし姫君の御琴なり　箋花海にあり但河海の義ょし又黄老彈時嬰兒起而舞をもひけり　私此義薫の大かた世間の事に心もとまらすされとも聲にめつる事は猶すてかたしといへり迦葉の事尤肝要なり　河香山大樹緊那羅於佛前彈瑠璃琴奏八萬四千音樂迦葉尊者忘威儀而起舞 出大樹緊那羅經 法華文句第二卷 乾闥婆王奏樂直得須彌震動大海騰波引經迦葉起舞傳灯錄　花大樹緊那羅經云大樹緊那羅與無量緊及無量乾無量諸天奏四萬(波底イ)四千淨妙樂音來至佛所絃歌一動聲振大千須彌山踊沒低仰(狀イ)一切聲聞皆從座起猶如舞戲天冠菩薩問迦葉言少欲知足頭陀第一乃於今日猶如小兒迦葉答言非本心也

うと／＼しからぬはしめにもやと　秘八宮の心なり　弄薫に姫君をゆるしてやなと覺しけれはそのはしめにとなり　箋前になかからん跡をと宣ひしかは隔心なく思ひ給へき始にと也

さうのことをそ　弄姫君なるへし　箋中君なり　私前にも中君箏をひき給へりとみゆ

心にいかておかしうおほゆれと　薫のあかす思へる心中なり打とけてたゝ今なとひき給へき事にはあらねはさもしひてはえの給はぬなり

かはかりならしそめつるのこりは　秘琴を手ならすなと也弄　箋琴(がイ)も下にこもるなり馴しそむる心歟

よこもれるとちに　花わかき人をよこもれるとはいふなり　秘わかきひとをいへり行末をこむる心なり　弄姫君たちにゆつり給ふとなり　箋わかき人のおひさきとほき事をよこもれると云なり

佛のおまへに　箋持佛堂なるへし　おはしさまに(おほしゝまゝイ)此歌をよみ給ふなり

八宮 われなくて草のいほりはあれぬともこのひとことはかれしとそおもふ　秘ひとことは琴の心なり末はたゆましきとなり　箋此一ことは一言なり琴をもたせたるなり　私八宮のはかなく成給ひなは此草庵はあれぬへしさりとも此姫君たちの行末を一ことの給ひおくうへは薫の心はかはらしとさすかに行方をたのみ又は祝してよみ給へるなりあはれなり

かゝるたいめんもこのたひはかりなり　八宮の詞此

たひよろつ薫にの給ひおきことの音なとそゝのかし給ひしはみつから心ほそく思ひしり給ふ事あるへきなり
ひかことおほくも也ぬる哉　八宮の心中をのこさすの給へりと也是か薫へかきりの對面にてありし也
返薫 いかならん世にかゝれせんなかき世のちきりむすへる草のいほりは　秘 我心はたかふましきとなり
箋 まらうとは薫なり八宮をなくさめたる歌なり
すまひなとおほやけことゝも　秘 河海に見えたり弄
同　河 垂仁天皇七年戊戌七月當麻蹶速與出雲國野見宿禰令捔力二人相對立各擧足相蹶則蹶折蹶速之脇骨蹶折其腰骨殺之故奪蹶速地賜宿禰因其邑有腰折田縁也　神亀三年令諸國始進相撲人七月十六七日間相撲召仰也廿六日内取小月廿五日廿八日召合小月廿七日廿九日拔出小月廿八日也諸國の供御人をめしあつめて御覽するなり初は召合せ後はすくりて御覽あるを拔出といふなり
まきれ侍る頃過てさふらはんなときこえ給ふ　薫の八宮へまかりし申し給ふ詞なり
かのとはすかたりのふる人　秘 辨のあまなり箋

のこりおほかる物かたり　柏木の事のゆくへなるへし
君たちもおくまりて　箋 姫君たちなり月の簾中へさし入ゆゑに奥ふかく居給ふなり
心ふかう物かたりのとやかに　薫のけさうたゝぬさまなり
さるへき御いらへなと　箋 姫君たちなり
三宮いとゆかしうおほ(ひイ)いたる物をと　秘 薫の匂宮の事を思ひ出給へるなり
わか心なから　箋 薫のみつから思ふ心なり
御心もてゆるひ給ふことの　箋 八宮の方よりゆるし給へる事なり
あるましきことゝは　薫も一圓にかけはなれんとは思はぬなり
ほかさまにもなり給はんは　人の物にみなさんはさすかに口をしかるへきとなり
りやうしたる心地しけり　我物にやと思はるゝ心なり
のこりなけにおほひたりし　箋 薫の心なり　秘 八宮なからん後の事なとかたらひ給ひし事なり

女はまめやかにおはすんとも思ひ給はねは　秘匂宮の眞實に思ひ給ふ事とはしり給はてなほさりことのやうに返事をはし給へるなり

秋ふかくなり行まゝに　箋八月なり　河悲哉秋之爲氣蕭瑟文選　秋は菩提門なるゆゑに物にふれて愁の心ある歟

宮はいみしう心ほそう　秘八宮なり

れいのしつかなる所にて念佛をもまきれなうせんと　秘阿闍梨の寺にてし給へるなり　箋四季の念佛の事なり　傳教大師云　當捨惡見諸緣事　當發最勝菩提心　應當速向蘭若所　於彼當成如來德　阿彌陀佛執持名號若一日乃至七日一心不亂阿彌陀經文

世のことゝしてつひのわかれを　秘八宮の詞也　世のことゝは世間の定れるならひとなり

思ひなくさむかたありてこそ　よきうしろみなとありての事なり

なかき夜のやみにさへまとはんかやくなき　やくなさは無益なり　河壽命八千不願出冥々長夜從生死十住心論　親々絕知門獨泣長夜臺同　私これほとのほたしに我さへ長夜のやみにまよはんと心つよく姫君たちのうへを思ひすつるそとなりかつみたてまつるとはかたみにみたてまつるなり　かつこへて別も行かの歌と同しかつなり今生の事を云なり

さりなんうしろの事　八宮うせ給なん後の事なり後の字はうしろとよめり

過給ひにし御おもてふせに　秘母上の事なり

この山さとをあくかれ給ふな　箋此敎訓はあしかりしなり大君の此心をもちて薫へもつれなかりしはあしきなり

ひたふるに思ひしなせはことにもあらす過ぬるとし月なりけり　秘一向におもひとけはなりいかにして過ける年月そとなり八宮もふるき宮回祿の後此宇治にも何として住つき給へるそとなり　弄一向に思ひとりてすくせは年月はさて過る世なりといへり　箋一向にうき世の事に貪着せすして過さんする世は物ならすとうちやりての給ふ詞なり

さるかたにたえこもりて　女はたゝこもりてすくさんも中々似合たるさまなるへしとなり

ともかくも身のならんやうまてはおほしもなかされす　秘姫君たちの心の中なり　箋わが身の行へまて

は分別もなしたゝ八宮にわかれ奉らん事のかなしきに今の事のやうに心ほそき御あらましことをの給ふによりてせんかたなく姫君たちの思ひまとひ給ふとなり

心のうちにこそ思ひすて給ひつらめと　秘八宮の心のうちをいへり弄　秘思ひすて給ひつらめと云々如此聲をさせり

にわかにわかれ給はんは　秘すて行か（給ふへきイ）つらきにてはなけれとゝなり

つらき御心ならねと　弄八宮の心は世の人のことくかなしみ思ひ給ふにはあらねとゝなり私八宮のにわかにわかれ給はん事心とたくみてつらくせんとの事にてはあらねと姫君達の身にとりてはうらめしくたよりなかるへき事となり

あす入給はんとての日はれいならすこなたかなたたたすみ　秘境界線のはなれかたきなり　箋阿闍梨の寺へおはせんとて前の日の事なり

わかき人のたゝ（えイ）こもりて　箋八宮さへおはせぬ跡にては姫君たちのいかて過し給はんと心中におほすなり

かやすく世にきこえあるましき　秘下﨟なとは大かた見ゆるさるゝ事のあるなり

するのおとろへもつねの事にて　箋族姓さしもなき人の時にあはさりしは何につけても末々のおとろふる事勿論の事そとなり

かゝるきはになりぬれは　秘宮たちなとの御末なとをいへり

さすらへんちきり　箋さすかにおちあふれんもくちをしきとなり

物さひしく心ほそき世をふるは　箋是はうしろみなとも定ら（りイ）ての事なりかゝる古宮の御末なとのかすかなる世にへ給ふ事はとりわきたる恥辱にはあらす只身上の事にかろ〱しき名なとのたゝぬやうにとの給ふなり

にきはゝしく人めかんと思ふとも　箋たとへは時にあひたる受領なとの御うしろみ申さはにきはゝしくはあらんすれとも有ましき事なれはさやうの事を思ひかくへからすとなり　秘榮辱昇沈影與身なれはなり

こなたにわたり給ふ　秘姫君の御方なりかりそめに

寺に入給ひなから下心には世をさりなん事を思へり

なからんほと心ほそくな　弄八宮のかりに寺に入給ふ程の事なから又心には世をさりなん事を思へり

ひとり〳〵なからましかは　河「思ふとちひとりひ古とりに戀しなはたれによそへて藤ころもきん　秘誰におほせ（よそへイ）てふち衣きんの歌なとの詞によれり弄同　箋かさね詞をおほくかけり此卷のふりなり

いまはゆく末もさためなき世にて　箋女の兄弟は猶そひはて給ふましき事なるへし

かのおこなひ給ふ三まい　秘念佛三昧なり弄　箋三昧は定と飜する也念佛三昧一七日なるへし　河傳教大師云以諸方便樂閑靜攝心於彼得三昧我於佛法中知一行三昧所謂念佛三昧 花嚴經 是も念佛を三昧と云なり

いつしかとまちきこえ給ふ夕くれに　八宮阿闍梨の寺にて風にあたりていたはり給ふよし告來るなり

さるはれいよりもたいめん心もとなきを　箋死期のちかき人はかくある物なり

むねつふれて　姫君たちの心なり

御そともわたあつくて　河「しらぬひのつくしのわ六帖たは身につきてきてはみねともわたゝかにみゆ 万葉人丸

ことはにてきこえ給ふ　箋文にてもなきほとにいよいよ心もとなかるへし

あさりつとさふらひてつかうまつりけり　秘阿闍梨看病し給ふなり

はかなき御なやみと見ゆれは　秘阿闍梨の申詞なり

君たちの御事　姫君たちなり

いまさらにな出給ひそと　秘此寺にて終をとり給へとなり　私此段阿闍梨に似合たる申樣なるへしいさめ申成けりと云は草子の地の詞に書りとみゆ

大かたのそらのけしきも　箋秋の夕のかなしき時分なり

有明の月のいとはなやかにさし出て水のおもてもさやかにすみたるを　河八月廿日の程とあり有明の時分前卷月に思ひあはすへし　弄宇治に二所に此詞をかけりことに面白くや思ひけん　秘此詞浮舟卷にもあり詞おもしろきゆゑ也

そなたのしとみあけさせて　秘此寺のかたなり

心にかけていかにさは絶す思ひきこえ給へれと　八宮の事を絶す思ひやれる姫君たちの心なり
涙もいつちかいにけん　弄見河　河史記曰孝惠帝崩太后哭泣不下（ナケトモナンタクタラス）　呂氏本紀　河海に顔淵死子痛哭之慟（コクスレトモ）　哭は泣とも涙おちさる心也歎の切なる時涙くたらすといへり　花杜詩云驚定却（初イ）拭涙云々あまりあきれたる事には中々涙はおちぬ物なり心をさりしつめ思ひわくる時にかなしきはおほえて涙なかるゝ物也　杜子美詩も其心をつくれるなり　秘花鳥に杜子美か驚定初拭涙といへる句をひけりおもしろし、箋花鳥に杜詩驚定云々
おほつかなさそひて　箋終焉を見給はぬ故にかくおほすなり
かきりある道なりけれは　秘尤あはれなり　弄此語ことにあはれなり上の詞にもかゝれり
いまさらになてう（ふイ）さることか　秘阿闍梨の申さゝるなり
又あひみ給ふましき事を　八宮は此ほと連々姫君たちへ再會あるましき事をよく／＼申きかせしとなり

かたみに御心とゝめ給ふましき　姫君たちもその御・心つかひあれと阿闍梨のすく／＼しう申さるなり
おはしましける御ありさまを　八宮のそのまゝかへり給はさりしもあさりの申せしゆゑなれは姫君たちはつらくおほすなり
入道の御ほいはむかしよりふかく　秘姫君たちゆゑにかたらひ（かつイ）給ひしさなり　箋父子の間にても入道なさし給ひては姫君たちと心やすくあひ住給はんも似あはぬ事なり上古の風儀なり仍かたちをはかへ給はさりし事をこゝにいへり
さきたち給ふもしたひ給ふ御心も　八宮と姫君たちの御心をおもしろくかけり
中納言殿にはきゝ給うて　秘薫なり
又あひみる事かたくやと　箋さきのたひは八宮のゝ給ひし事なり
世のはかなさを人よりけに　箋八宮つねに無常を心にかけ給ひし人なれは耳なれて思ひしさなり薫の心なり
昨日けふとはおもはさりけるを　河（古伊語）「つゐにゆく道とはかねて聞しかと昨日けふとはおもはさりしを

弄ついに行の歌の心あり　箋引歌同
物おほえぬ御心ちとも　姫君たちの心中也薫の心は
へを思ひしり給ふなり
よのつねのほとのわかれたに　これも父子のわかれなれはよのつねの事なから八宮ならては別にたのもしき人なけれはよのつねの親子のわかれの類にはあらすといふなり是も薫か姫君たちを思ひやる心なり
あけぬ夜の心ちなから　河「明ぬよの心なからにやみにしをあくそといひし聲はきゝきや實方朝臣　花「人しれぬねやはやたえせぬきり〳〵すたゝ明ぬ夜の心ちのみして　私不及引歌歟　秘弄箋不用之
只姫君たちの心中なるへし
袖のしくれをもよほしかほに　河秋は時雨に袖をかし古今長歌　末に涙の瀧とあれは是はつねの時雨をいふなり云々但袖の時雨も涙の瀧もひとつ物にて猶感あるへきなり
あらそひおつる木のはの音も水のひゝきも涙の瀧も皆所につけたるあはれをもよほす道具ともなり　河「わか世をはけふかあすかとまつかひのなみたの瀧といつれたかけん　私不及此歌歟但可引之歟
かきりあらん御いのちも　姫君たちの事なり
おはしましゝかたは　箋八宮のおはせしかたなり
おほつかなけれは　箋匂宮へ文の返事なともえし給はぬなり
中納言にはかうもあらさめるを　薫へは文の返事もあらんと匂宮のうらみ給ふなり
もみちのさかりにふみなとつくらせ　秘前に有し事なり　私兵部卿宮宇治にて作文なとのあらまし有しなり
御いみもはてぬ　箋卅日の穢の過たるをいふ歟
いとおほくかきつゝけ　匂宮の文のさまなり
匂宮　をしかなく秋の山里いかならん小萩か露のかゝるゆふくれ　秘折ふしのあはれをいへる歌なり小萩は姫君たちによせたり　弄匂宮のあはれなる折ふしとなり　箋上句は山里を思ひやるなり下句は匂宮のなかめ給ふ庭のさまなりそれさへあはれなる時分なれはましてさこそと山里を思ひやり給ふとなり
たゝいまの空のけしきを　箋文の詞なり
かれ行野へもわきてなかめらるゝ頃になんなとあり

秘これまて文の詞也弄　かやうのかなしみの時は草木のかるゝまても世間の無常に思ひよそへられてなかめらるゝ物そとなり

思ひしらぬやうにてたひ〳〵になりぬるを　たひたひ御返事なかりしをいへり

けふまてなからへて硯なと　箋涙にくらされたるなり

又かきくもり物見えぬ　秘中君の詞なり箋

やう〳〵かうおき居られなと　秘歎もかきりあれはとなり愁歎の心尤あはれなり　箋程のふるにつけて愁傷のさめたると我心には思はねともすこしは起居られなとするも遠さかりて歎きのかきりもあるかと思ふゆゑにいよ〳〵かなしきとなり

夕くれのほとよりさける　箋是は匂宮より御使の出たちたる時分なり云々

よひすこし過てそきたる　箋宇治へ来(まゐりイ)りつきたる時分なり

いかてかゝへりまゐらん　箋夜のふけぬれはいかでか明日かへり参れと匂宮の御使にこなたよりいはせ給ふなり

たちかへりこそまゐりなめといそけは　秘御使のいへるなり箋

いとほしうて　箋中君の御返事かきわつらひ給へるを大君のいとほしく思ひてかき給ふとなり　秘あね君のかき給へるなり

我さかしう思ひしつめ給ふにはあらねと　箋大君の心しつめたるにてはなけれとも年のましたるから(なくイ)分別して中君にかはりて返事かき給ふなり

(返大君)涙のみ霧ふたかれる山里はまかきに鹿そもろこゑになく　河左右(もろ)音(こへ)伊勢物語真名本にも見ゆ　箋涙の霧なり此歌のもろ聲は鹿のもろこゑなり下の心は我と鹿とのもろこゑなり

くろきかみによるのすみつき　河黒紙服者の料紙歟くろき紙によるの墨つき詞のたより無比類者乎　花黒紙はにひ色の紙をいふへし箋

こはたの山のほと(きイ)を雨もよに　河「三(後撰)かさ山さしはなれぬといひしかと雨もよにとはおもひしものを　箋雨もよ雪もよ夜にも用之又催すこゝろにも用るなり

さゝのくまをこまひきとゝむる程もなく　花八雲御

抄云さゝのくまはたゝ篠の生たる所也箋　河古｜さ
さのくまひのくま川にこまとめてしはし水かへか
けをたにみん　秘しはし水かへの歌又こはたの山
に馬はあれとなとの歌にてかけ（いへイ）り篠なとの生した
る所をさゝのくまとは云り　弄しはし水かへ又こ
はたの山にの歌の心ありさゝは木幡山の篠成へし
箋さゝのくまひのくま川不及此歌何とも道の草し
けりこむつかしけなる所を乗とほして行さまなり
只早くいそきたる所ともみるなりさて引歌も（なイ）よし
さき／＼御らんせしにはあらぬての　秘さき／＼は
中君の手跡なれはなり箋
いつれかいつれならんと　箋いつれを大君中君とも
しり給はぬなり
まつとてたきおはしまし　箋御使のかへるをまち給
ひしなり
御らんするほとの久しきは　箋いつれ大君中君なら
んと久しく思案し給ふさまなり
ねふたけれはなめり　箋草子の地なり
またあさきりふかきあしたにいそきおきて　弄匂宮
より又宇治へつかはしたるなり返し有しによりて
又返しをつかはしたるなり　秘手跡かはりたるゆ
ゑにやかてつかはし給へり　箋やかては明る朝つ
かはすなり　私霧のふかきは雨の名残なるへし
（匂宮）あさ霧に友まとはせる鹿の音を大かたにやはあはれ
ともきく　花こゑたてゝ（後撰）鳴そしぬへきあさ霧に友ま
とはせる鹿にはあらねと友則　箋友まとはせるは
八宮の事をいふなり
もろこゑはおとるましうこそと　花姫君の返歌にま
かきの鹿そもろこゑになくとあるにつきたる詞な
り　秘思にはこなたにもおとるましきとなり　箋
八宮の御事を大（御イ）かたの事とやは思ふ哀とよくいひ
てさてもろ声にとあるは我こそといふなり思ひの
かなはぬをいふなり
あまりなさけたゝんもうるさし　秘姫君たちの心な
り
一ところの御かけにかくろへたるを　箋八宮の事な
り
思はすなることのまきれ　箋わか心えて御返事なと
細々申て自然の事のまきれもあらはいかゝとなり
八宮の遺言をたかへしの心なり

なき御たまにさへきすやつけ奉らんさ　秘おもしろき詞也　花蘭相か如趙璧にきすありさいひし玉のきすはそれよりいへるなるへし　出ろイ
きこえ給はす　返事なきさなり
この宮なさをは　匂宮なり　これより姫君たちの心中なり
なけのはしりかい給へる　なけやりさまの心なり
これこそはめてたきなめれさ　秘匂宮の文のさまなり
なさけあるさたにことをませきこえんも　匂宮はかりの御こふらひも風流めくかたのましるなり
身のありさまともなれは何かたゝ　何かたゝ是は只といふへき用なり前をおさゆる所にいふ又の義つれなき身のありさまさもなれは何か打さけて文なさをもかよはさん只かゝる山ふしたちて過してんと心得たるもやすし
かれよりもまめやかなる　箋薫よりは御さふらひの體も風流めかす實々敷なり
いとけうさけには　河氣外　私氣疎也　弄こさ〳〵しからぬなり物やはらかなるさなり

御いみはてゝもみつからまうて給へり　箋いみは穢なり云々　秘みつからは薫なり
東のひさしのくたりたるかたに　弄服者の體本居に居たまはぬなり箋　秘姫君只今服者たるによりてかくやつれてすみ給へり　禮記喪大記曰父母之喪ニハ居ニ倚廬一不レ塗寢レ苫枕レ土さいへり
やみにまさひ給へる御あたりに　姫君の御心さもなり
まはゆく匂ひみちて　秘薫のさまなり
かやうにはもてない給はて昔の御心むけに　秘薫の詞なり　箋したしき始にもさやなと前にあり物の音すゝめ給ひし時の事なり
なよひけしきはみ　箋風流めきたる事をしらぬさなり人つてに物なと申事無詞績なるよしなり　秘我は好色のかたはなきとなり
あさましういまゝてなからへ　秘大君の詞なり
ことゝいへはかきりなき御心のふかきになん　花その事といへはといふなり　弄あやにくなる心なり
薫の詞なり　秘薫の詞その事といへはこなり　箋薫の詞道理はさてそとなり　私道理しかなれさも　ろイ

あまりなる御心ふかきかなといふ心なるへし
月日のかけは御心もてはれ〳〵しく　秘月日の光にと我身の方よりむかはゝこそあらめ月日のかたよりてらすをはいかゝはし給ふへきそと也　箋大君の我とはし近くなとともあらはこそつみもあらめ人にしたかひてはくるしからしとなり是はすこし程ちかくして物語りをもし給へと薫のゝ給ふ心なり
ゆくかたもなくいふせう　箋薫の心中なり程遠くては心もとなき所の残るとなり
又おほさるらんはし〳〵をもあきらめきこえまほしく　又大君の御心のうちをもきこえなくさめ申さんとなり　秘の給ふ事あらはあきらむるかたも有へきとなり
けにこそいとたくひなけなめる　秘さふらふ人々の詞也
むかしさまにてもかうまてはるけき野へを　秘八宮現存の時より度々わたり給ひし事なり弄同　箋此段大君の心を察して草子地にかけるなり
すこしゐさりより　大君のはしつかたへすこしゐさり出たるなり

おほすらんさま　姫君たちの心中を察して薫の宣ふなり
又の給ひちきりし事　箋八宮の姫君たちの事を薫への給ひおきし事なり
うたておゝしきけはひ　箋薫のさまなり男々しく風流めかぬをいふなり
けうとくすゝろはしく　箋気疎なりすゝろはしくはむつかしき事なとなきさまなり　私すゝろはしくはそゝろなと云心也帚木巻に此男いたくそゝろきてと有
ありつる日ころを思ひつゝくるも　秘八宮のましまさゝれはゆつるかたなくてあへしらひ給へると也　私たのみかほなる事なともありつる日ころを是は故八宮の薫への給ひおきし事をきゝて大君のおほす心にや
いとあはれときゝたてまつり給ふ　大君のけはひを薫の思ふ心なり
くろ木丁のすきかけ　服者の調度なり　箋皆黒漆なり
ほのみし明くれ　箋橋姫巻にありし事也

薫色かはるあさちを見ても墨染にやつるゝ袖を思ひこそやれ　箋浅茅は草の中にもはかなき物なり此浅茅の上をみて袖の上にかくれ（イナシ）こそと思ひやりたるなり墨染は服者のきる色なり

近大君色かはるそでをは露のやとりにてわか身そさらにおき所なき　秘秋の末の事なれはなり服の袖をいへり此やつれたる袖は誠に露のおき所なるへしとなり　弄色かはる袖は服の袖なり　箋我袖を露のやとり（云イ）にするから我身のおき所なきとわひたる歌なり

はつるゝ糸はと　河（古）「ふち衣はつるゝ糸はわひ人の涙の玉のをとそなりぬる　弄秘箋引歌同

ひきとゝめなとすへき　秘薫の心なり

老人そことよなきかはりに　弄君なり大君の跡へ立かはりたるをことよなきとはいへり

むかしいまをかきあつめ　箋柏木以下八宮なとの事なり

ありかたくあさましき　秘柏木なとの事なり　弄柏木の物思ふ事を見たる人なり

故院におくれたてまつり　薫の詞源におくれし事なり　幻巻にては薫五歳なり　弄されは源の崩御は歳へたる也　弄源氏に薫のおくれ給ひし事幻に五歳其後まて馴給ひしにや　箋六條院崩御の事なり雲隠に有へき事なり

つかさくらゐ世中のにほひ　箋官位世間のおほえなとなり

しつやかなる御すまゐ　箋八宮の宇治の御すみかの事なり

かりそめの世を思ひしらるゝ心もゝよほされにたれと　八宮のこと故薫のもとよりの道心も催されたるとなり

心くるしうてとまり給へる御事ともの　秘姫君たちの事なり箋

ほたしなときこえんはかけ／＼しきやうなれと　弄薫のほたしと姫君だちをいはんはかけ／＼しとなり　箋姫君たち故に世をすてぬと申さんは我物に領したるやうなれとゝいふ薫の詞也　花かゝつらふやうなる心にや下にも此詞有　秘河海説ふはつかなし　河かけまくもかしこき心歟　弄河海弄花鳥説共に可用之　私花鳥の説然へき歟

なからへてもかの御ことゐやまたす　秘なからへて

は我身も又かゝつらふとなり　弄かの御ことは故八宮の御詞なり

おほえなき御ふる物かたり　秘柏木の罪をもすくひたきとなり　薫後心のすゝむ事をの給ふなり

この人はまして　辨君なり

御けはひなとのたゝそれかと　秘柏木によく似給ふとなり　弄薫を柏木かと見る也　私薫の似給ゆへに一入柏木の事を思ひいたしたるとなり

おほゝれゐたり　秘涙におほれたる也　河溺居也

この人はかの大納言の御めのとこにて　秘辨事なり系圖をかけり八宮の北方と辨とはいとこなり弄同弄めのとこはめのと子なり　この系圖をまいにかきてはあいそ（さうイ）もなきなりこゝにかきたるは面白なり

遠きくにゝあくかれ　辨君の筑紫へくたりし事前にあり

はゝ君もうせ給て後　秘姫君の母なり　弄八宮の北方の事也

かの殿にはうとくなり　秘致仕大臣かたへはうとく成行なり西國へくたりたるなり　弄致仕大臣方へはうときなり辨か事　河水原抄云母君もうせ給て後とは辨か母と見えたり而給の詞以外にうちまひたり不審なり云々按之母君とは宇治の姫君の母の事歟彼辨尼君は姫君の母北方の母かたのをち左中辨か子なれは母義うせて後外家のよしみに此姫君のうしろみに候けると見えたり如何以上河海見

心ちなからぬものに宮もおほして　私自然御僻なる心もちなとは有ましきと覺してなり如（女イ）本心あるといふなり宮は八宮なり此段辨の君か系圖をかけり

むかしの御事は　秘柏木の昔の事なり姫君たちにたにもらさゝるとなり

君たちにもひとこと　姫君たちなり

ふる人のとはすかたり　秘薫の心なり

いとはつかしけなめる御心ともにはきゝおきたまひ（イナシ）つらん　薫老人はとはすかたりするものなれはあまねく人にはかたらすとも此姫君たちには申さんと薫の思ひうたかひ給ふなり

ねたくもいとほしくも　薫の我身にかけてねたくも又柏木のためにいとほしくも思ふとなり

又もてはなれてはやましと　秘かやうの事をもくは

しくしり給はゝ事のひろまらさるやうに我物にしなしたく薫のいよ〳〵思ひ給ふなり薫の遠慮なり　弄姫君たちをもてはなれしことなり薫の遠慮なり

いまはたひねもすゝろなる心ちして　河そゝろかし（はイ）きなりすことそこと五音通する故なり　秘故宮ましま す時は法文なと問たてまつりしに今は詮なしことなり　箋宮もおはせす女房はかりなるをいへり

これやかきりのなこと　弄八宮のゝ給ひし詞を思ふなり

さしもやはとうちたのみ　かきりのことありしをさしもあらしとたのみしことなり

秋やはかはれるあまたの日數もへたてぬほとに　秘三秋の中なり　弄同し秋のうちにことなり　秘去頃は八月今は九月なり同し三秋のうちなれはいへり

かはしにけん（おイ）かたもしらす　八宮の行衛をしたふなり

れいの人めいたる　世をすて給へれは有へきかきりの御しつらひにてはなかりしことなり

御ねんすのくとも　河御念誦の具とも

佛はみなかの寺に　箋阿闍梨の寺なり

かゝるさまの人かけ　箋大德たちのこゝにこもりゐんも今しはしなるへし

くみきこえ給ふ　心のそこをくみしるなり推察する義なり

いたくゝれ侍ぬと　箋供奉の人のいへるなり

かりなきてわたる　所と時節と感有へし

薫秋きりの晴ぬ雲井にいとゝしく此世をかりといひしらすらん　弄かほるの心のはれぬをよめり　秘かほるの心中のはれかたきをいへり鴈をかりなる世によせたり　箋此世をかりとは鴈によせたるなり

河古今「かりのくる嶺の朝霧はれすのみ思ひつきせぬ世中のうさ「後撰ゆきかへりこゝもかしこも旅なれやくる秋ことにかり〳〵となく　同「ひたすらにわか思はなくにおのれさへかり〳〵とのみなきわたるらん

今はさりとも心やすきをも　箋八宮おはせねは姫君たちの心まゝならん事を心やすしとおほす兵部卿の御心なり

はかなき御かへり事もきこえにくゝ　箋姫君たち八

宮のおはせぬ故に御返事もありにくゝおほすと也
いかにうゐ／＼しくふるめきたらん　匂宮の好色に事このましく艶なるあたりへかやうの山さとふるめきたるあたりより御返事なと申さんはいかゝと斟酌も有となり
さてもあさましうて明くらさるゝは　姫君たちの心中なり
かくたのみかたかりける御世を昨日けふとは思はて
箋八宮の事なり　河つゐに行道とはかねて聞しかと云々　私他抄不引之
われも人もおくれさきたつほどしもやはへんなと
河新古末の露もとの雫や世中のおくれさきたつためしなるらん　箋引歌末の露もとの雫や云々八宮におくれて程をはへしと思ひつるにさてもあさましうてもあけくらさるゝは月日かなと前へかけて心うへし
きしかたを思ひつゝくるも何のたのもしけなる世にもあらさりけれと　これよりまた八宮のおはせてたよりなき姫君たちのこゝろのうちを思ひてつゝけたる段なり別に義なし

としもくれにけり　大かた年の末に成たる事をいへり
いまはしめて思ひ入たらん　秘はしめたる山すみのことなり　箋八宮のおはせぬ故なり
心ほそくかなしき事をあらたまるへき春まち出てしかなと　箋かなしみも春になりてあらたまれかしのねかひなり
心をけたすいふもあり　河本性をうしなはぬ心なり
かたき事かなときこゝ給ふ　秘姫君の心なり　箋世にあはん事かたしと姫君のおほすなり
人もまいりかよひしか　弄寺よりも宮よりも人々行かよひし事なり
あさりもいかゝと大かたに稀におとつれ　箋姫君たちはかりなれは參る事もなしたまさかの音信なと申はかりなりとなり
このころの事とてたきゝこのみひろひて　秘冬ちかき時分なり　河好心なり菓子の義にあらす水原抄　按之ひろふは菓拾の事歟　經文にも採薪又菓蓏なとあり以上河海　私ひろふは菓薪にかけたる字なり同經文に拾薪設食とあり

としころにならひ侍にける宮つかへの　㊙阿闍梨の
詞　・
わたきぬなさつかはしゝを　綿絹なさなり　八宮の
時よりの作法なるへし
ほうしはらわらはへなさのゝほりゆくも　寺へかへ
るさまなり
御くしなさおろい給うても　㊙故宮落髮のあらまし
ありしをうき事に思ひしに今はさやうにてもまし
まさましかはさ思ひ給ふとなり箋
たえてやまゝしやはなど　箋御存命にたにわらはさ
すか逢事はたえましきさなり
（大君）君なら（くイ）て岩のかけ道たえしより松の雪をも何とかは
みる　河一世（古）にふれはうさこそまされみよしのゝ岩
のかけ道ふみならしてん　不及此歌歟
㊙兄弟かたらひてよみ給へる歌なり君さは故宮を
いへりかけ道のけの字淸濁兩說なり下句故宮うせ
給にし後山へ人をもかよはし給ふ事のまれなるを
いへり阿闍梨の何さか見るらん（てイ）さなり又は何さか
は見るとは姫君の心にもあるへし兩義（說）共用之弄
箋岩のかけ道け文字淸又け文字濁云々　陰道なり

兩義なり　何さかは見るさは中君へいかゝ御らん
するそさなり又は阿闍梨にいふ云々兩義なり
（中君）おく山の松葉につもる雪とたにきえにし人を思はま
しかは　㊙松のうへの雪は落てはかなき物なれさ又
ふりそふ事のあるなり消にし人のかへりこさるを
うちわひたるなり此歌伊勢大輔集に　松に雪のこ
ほりたりしにつけて紫式部　「奥山の松葉にこほ
る雪よりも我身世にふるほさそはかなき　返し
「消やすき露の命にくらふれはけにさゝこほる松
のゆきかな　作者の自歌を此物語に用たる事前四
十四帖には見えさる歟至宇治此歌の上句并里の名
をわか身にしれは山城のさ侍るも新拾遺に入たる
歟兩首を採用たるいかに思へる所あるにか云々
以上秘　箋松の葉の雪は消やすくて又はやくふり
つもる物なりなき人をもかやうにあれかしさいへ
るなり歌はかりにてはいひ殘したるゆへにうらや
ましくも又もふりそふやさ詞にてたすけたり此上
句紫式部か歌なり　古今に「み山には松の雪たに
きえなくにさいへるも消やすき物なれはたにもさ
いへり松葉（このみイ）のみよむへからすといへり

うらやましくそ又もふりそふや　秘歌をたしたる詞なり
中納言の君あたらしき年はふとしも　薫なり　年始には公事ともに隙有へからさる故なり
よろしき人たに見えす　箋大かたの人さへ見えぬ山里となり
れいよりはみいれて　秘此雪中の志の深切なるなり
箋大君の心折ふしを感したるなり
すみそめならぬ御火をけ　河服者の調度は物毎に黒色なるへき歟　弄服者の物は黒ぬりなりされはさならぬを薫の前へ出したる也　秘只今姫君の御調度は皆黒染なれはなり
宮のまちよろこひ　秘故宮なり
たいめし給ふ事をはつゝましく　大君の薫へ對面の事也
おもひくまなきやうに　人のかたより懇切なるを思ひしらぬやうなる事にいへり
いかゝはせんとてきこえ給ふ　弄物こしなるへし
さき／＼よりはすこしことのはつゝけて　箋大君の薫の懇切を思ひしるなり

かやうにてはえ過しはつましと　秘薫の心中なり箋
猶うつりぬへき世なりけりと　秘薫の心なり人の心はうつりやすきものとなり弄　箋觸縁とて事にふるゝ所よりおこりぬる縁ある物なり
宮のいとあやしく　秘匂宮なり　箋薫の詞なり
あはれなりし御ひとことを　秘故宮の遺言を匂へかたり給ひしかたしかに覺え侍らすとなり
もらしきこえたりけん　弄薫の匂宮に申し事ありしにやかやうに匂宮のせめ給ふとなり箋
又いとくまなき御心にて　匂宮の性をいふ也おしあてにの給ふかとなり箋
こゝになんとかくもきこえなすへきと　箋匂宮の薫次第なるへしとの給ふなり　弄匂宮の薫をとめ給ふ心也
つれなきさまなるはもてそこなひ　秘姫君の心のつれなきは薫のさまたけぬるにやなとの給へると也
さとのしるへいとこよなうもえあらかひきこえぬを
河「あまのすむ里のしるへにあらなくにうらみんとのみ人のいふらん　秘此宇治の里のしるへは我身申さてはとなり引歌海士のすむ里云々此引歌我

身しるへせてはといふ心なれはよくかなへり　花薫を宇治の案内者に匂宮の思ひ給ふと也　弄引歌の心にはわらす薫の宇治へしるへし給ふ事なり　箋たゝ宇治への案内者なり　私花弄箋の義然へし（の義如何イ）薫の宇治をは我物に領したるやうに匂宮へは思せておくとなり

何かはいとさしもてなしきこえ給ふらん　秘何とてかくつれなくはいらへ給そとなり　箋是よりは薫の大君へ教訓なり

すい給へるやうに人はきこえなすへかめれと　匂宮の好色をいへり

なほさりことなとの給ふわたりの心かはらてなひきやすなるなとをめつらしからぬ物に思ひおとし給ふにやと　秘心あさき人のなひきやすなるをはめつらしけなく思ひ給へる性のましますを色々しきかたに人の申なすとなり　弄匂宮をなほさりなる人をこそめつらしからす思ひおとし給ふ事もあれとなり

何事にもあるにしたかひて　秘公界の事を薫のいひて姫君にきかせたてまつり給ふ也大方の人の大とけほけたるはよからぬ人の事也心なかくて我氣にうけふせさる事をも打まかせたるはよきやうには見ゆれともつひにはさもあらさるとなり　花おほとけたるはほけ／＼（れイ）しき人をいふなり　弄大かた人の大とけほけたるよからぬ人の事を先の給ふなり心なかくよきやうに見ゆれとつひにはさもあらぬとなり

くつれそめては　秘是もよからぬ人の心とけそめぬれは又名をけかす事有なりにこる名といはんためにたつ田川とはいふ也引歌神なひの云々　河（拾）「神なひの三室の岸やくつるらん龍田の川の水のにこれる　弄これもよからぬ人の心とけそめぬれは又名をもけかす事有しとなり　箋引歌龍田川の水のにこれるか出所なり心はいらぬなりこれも人の心のたとへなりこらゆるほとこらへてくつれたちぬれは人の心のおくみゆるやうなる人あるとなり　弄たつた川はにこるといはんためなり　花是は男の思ひかゝりてさてやまぬたとへにいふなり　私花鳥の義如何

心のふかくしみ給ふへかめる　弄匂宮の事也　秘匂

宮はさしもなき事を名をたち又御氣にかなはさる事をうちおき給ふ性はなき人なり始終心にちかふ事はなき人にてましますとなり

御心さまにかなひことにそむく事おほくなと物したまはさらんをは　御心にかなふは勿論御心にそむく事もおほからさらんをは忘れ給ふましき人そとなり

人のみたてまつりしらぬ事を　秘薫は匂宮の御心をはたれ〳〵よりもよくしれりとなり箋

もしにつかはしくさもやと　匂宮の御事を御同心ならは薫のとり申へきとなり

御なかみちのほとみたりあしこそ　河媒のあなたこなたとありくへきよし歟　花宮の宇治のかよひに脚のいたから（ろイ）ん心なりみたりわしはみたり心地み（をイ）たりかくひやうなといふやうなる心なりとほ道にあしをやむ心にいへり河海に媒介の人の事といへるいかゝと覺え侍り　秘河海の説用之あなたこなたありく足なり　箋　弄薫の苦勞こそせめとなり

わか御みつからの事とは　秘姫君の心なり　花あね姫君の我事とは思ひ給はぬなり

人のおやめきて　中君に匂宮の事をはおとしつけておやめきていらへんとおほすなり

いかにとかはかけ〳〵しけに　秘姫君の詞かけ〳〵しとはかゝつらひの給ふなり我身はかけはなれぬへき物をとなり　箋故宮の薫に申をき給へるほとに我物そと覺したるやうなるをいふなりさて匂宮の事もいらへにくきとなり

かならす御みつからきこしめしおふへき事とも　秘薫の詞兵部卿宮の御事とはかりと思ひ給ひそと也　弄薫の詞也　箋大君の身のうへと必きゝなし給ふへきにてはなしとなり　私秘の義不審箋の義然るへし

それは雪をふみわけて　秘薫の我身の事をいへり　箋薫の雪ふみ分て參りたるを大君は御らんしあはれめとなり

かの御心よせは　秘中君にとなり　箋　花匂宮はいもうとの姫君に心よせ給へるよしいひなせる也

ほのかにの給ふさまも　秘匂宮中君に音信ありし事なり　弄

いさやそれも人のわききこえかたき　秘いつれかい

つれとは人のさためかたき事と也　弄同　私薫の大君をは我物に思ひ中君をは匂宮へとこゝろさしなから用捨にてかくの給へり又大君をおきなから中君なとは申かたき故なり

御かへりなとはいつかたにかは　花匂宮のふみの御かへりは姫君の申させ給へるにや中君の申させ給へるにやと薫の姫君にとひ給ふなり　秘薫のとひ給ふなり箋

ようそたはふれにも　秘かしこくそと姫君の思ひ給ふるなり　箋姫君の心なりかしこうそ我身のやうに薫へこたへさりしとおほすなり

えこたへやり給はす　大君の返答しかねてなり

大君 雪ふかき山のかけ道（はしイ）君ならて又ふみかよふあとを見ぬかな　秘君ならては薫のかたへはかり申かよはし給ふとなり箋

かきてさしいて給へれは　弄詞に出しかたくかきて出し給ふなり　薫のかたへならては文つかはしたる事はなしとなり

御物あらかひこそ　陳しての給ふと也　箋薫の詞なり　匂宮へ返事も有しを思ひていへるなり

返薫 つらゝとち駒ふみしたく山川をしるへしかてらまつや渡らん　秘上句は艱難なる道をいひたてたるなり下句は匂宮よりも先我身の逢せをいそく心也　箋古來稱美の歌なり川をわたるとは人にあふ事をいへり

弄薫の姫君にいひよらんとよめりわたるは人にあふ事をいへり

かけさへみゆるしるしも　河「淺香山かけさへみゆる山の井のあさくは人を思ふ物かは　弄引歌　あさくは人を云々也　秘打のへて云る也あさくは思はさると也引歌淺香山かけさへ云々箋

おもはすにものしうなりて　秘大君の心なり箋

薫のけさうたちたるは思はすなるなり

けさやかにいと物とほく　薫の心なり大君のありさまをこのましく思ひ給ふなり

えんけにもてなさす　箋艶氣なり　風流めきてはあらぬなり大君のさまをいふなり

かうこそはあらまほしけれと　箋大君の様[illegible]薫の心にかなふなり

ことにふれてけしきはみ　薫のをり／＼はけさうた

つを大君のみしらぬさまなるなり
雪いとゝそらもとぢぬへし　河雲とつるなと云事歟
凍雲合なと雪の詩に多く作れり
心くるしうなかめくらさるゝ御すまひのさまなりや
秘薫の詞なり我御かたにわたしてんとなり箋同
たゝ山さとのやうにいとしつかなる所　箋是は三條
宮の事を薫のゝ給ふなり
いとめてたかるへき事かなと　箋女宮ともの心なり
中の君はいと見くるしう　秘中君也　薫のかくの給
ふをきゝてさらに有ましき事とおほすなり　弄
女房の居たる方にゐ給へは中君はかりきゝ給ふな
りあね君の事を聞て中君のさも有ましき事と思ひ
給ふとなり
かのうつり香もてさわかれし　橋姫巻に薫のかりき
ぬなとぬきかけしとのゐ人なり
かづらひけとかいふ　秘おもつらひけなるとなり
弄　箋とのゐ人のさまなり　河髯鬚(カツラヒゲ)　鬘鬚いつれ
も同しおもつらひけなりかつらをかけたるやうに
生たるなり
はかなの御たのもし人や　とのゐ人の事也

いかにそおはしまさて　秘故宮の御のちなり薫の詞
なり
世中にたのむよるへも侍らぬ　秘とのゐ人の詞
いかならん木のもとをかは　花「わひ人のわきて立(古)
よるこのもとはたのむかけなく紅葉ちりけり　箋
木のもとゝきのもとゝよむへし
れはしましゝかた　秘故宮のおはしましゝ方なり
箋此とのゐ人に明させたる事なり
佛のみそ花のかさり(さかイ)れところへす　花のみそは詞なり
又御衣(みそ)ともよむへきなり花のかさり(さかイ)は瓔珞なとの
事なり又花臺なり　秘のみそとは而已なり此説を
可用なり
おこなひ給ひけりとみゆ　弄姫君たちのおこなひ給
ひし也　私此義ならは花のかさり(さかイ)おところへすおこ
なひ給ひけりとみゆとつゝけ見る(ろイ)へし時(シケ)花なとそ
なへて今もをこなひ給ふとみゆとなるへし又愚案
佛のみそ花のかさり(さかイ)おところへすとは瓔珞花臺なと
のかさりなるへしさておこなひ給ひけりとみゆる
とは御ゆかなとゝりやかてと跡てつゝけて見るへ
し是は八宮のおこなひし給ひしと見ゆる床なとゝ

りやりたる也姫君達なとたえすおこなひ給はゝ塵いたうつもりなとはさすかにすへからさる歟此義弄花の外にこれを沙汰せす両義いつれにても用へき歟如何

ほいをもとけはとちきりきこえし 箋薫の八宮への給ひし事なり 秘薫の出家もあらはとあらまし申せし事なり

薫 たちよらんかけとたのみし椎か本むなしきとこに成にける哉 河六帖「かたをかのむかひの岡の椎つまはこんとしことに夏かけになれ 人丸 同「わか宿と君こしの椎の中たえてつみのむくいやあひみさるらん うつほ第四神樂する所に召人うたひていはくうはそくかおこなふ山の椎かもとあなそはそはしとこにしあらねは 秘此歌にて巻の名とせり弄箋是は優婆塞かおこなふといふ本歌の心詞をよくそたてゝよめる歌なり 是はたゝ椎の木の本なりうつほの物語始なり云々

はしらによりゐ給へるをも 箋倚テレ柱ニ尋思倍メ惆悵ス 三體詩 薫の嗟嘆したる體なり

見さうなとつかうまつる人々に 秘薫のましますとて御庄なとより人々の參りたるなり

はしたなきわさかなと御らんすれと 薫の心なり

老人にまきらはし給うつ 秘辨の君のかたへつかはし給ふなり箋 弄辨なとに物いひ給はんためになし給へり 私弄の義如何

大かたかやうにつかうまつるへく 御庄の人なとこゝにつねにつかうまつれとの給ひつくるなり

さしかはりぬれは 秘薫廿三歳なり箋

汀池イの氷とけわたる 姫君の心のとけさるよりかく思へり弄

ありかたくもとなかめ給ふ 秘今までも有かたき世にかくまて有けるよと観したるなり 弄はかなきさまを見てありかたき世に今まてかくて有ける事よと観したるにや

ひしりのばうより 箋阿闍梨なり

雪きえにつみて 花「雪きえに袖はぬれつゝいつしかとかすかのゝへにわかなつみけり 箋雪きえわしき詞なりされとひしりに似合たり

さはのせりわらひなと 河芹をたてまつる事 文選第二十二云野人有快炙背而弄芹子者欲献之至尊雖有

區々之意亦已疏矣(李叔夜與山巨源絶交書)註李氏曰列子宋國有田父常温(濕イ)黂僅以過冬暨春東作自曝當爾時不知有廣夏澳室綿纊狐貉顧其妻曰負日之暄人莫知者以獻吾君將有賞也其室告之曰昔人有美戎菽甘枲莖芹萍子者對鄕豪稱之鄕豪取嘗之蜇(チ)於口慘於腹衆哂(ワレトラン)之　陟ニ彼南山ニ言采ニ其蕨ヲ(毛詩草蟲篇)

いもゐの御だい　精進の御ものなり　河　齋(イモヰ)　潔齋精進　万「神かきにひもろきたてゝいもゐする人の心はまもりあへぬものを　人丸

所につけてはかゝる草木の　せめて山里なとのすさみなりなとゝ人々申なり

何のおかしきならんと　秘　姫君の心なり　箋　大君の愁のみなる心なり

(大君)君かをるみねのわらひと見ましかはしられ(世イ)やせましはるのしるしも　秘　大君の歌なり八宮の在所にてそなたより給はゝいかにあらましとなり　弄　わね君の歌なり八宮の事なり　秘　八宮の折給ふへきにはあらねとも歌の體なり　箋　前に御くしなとおろし給てもとありさやうにて此山寺よりわらひなと折て給はらは春のしるしとも思はれんとなり　此義尤おもしろし

(中君)雪ふかき汀のせりもたかためにつみかはやさんおやなしにして　花「(拾遺)しなてるやかた岡山のいひにうゑてふせる旅人あはれおやなし　今按つみかはやさんとはかやうの草はつめは跡よりはゆるゆゑにつみはやすといふ也(以上花鳥)　中君の歌なり我身のありさまはたかためにつみはやすへき事もなき身そとなり　弄　中君の歌なり　此本汀の氷とあり但つみかはやさんとあれは芹よかるへし云々　又は汀のこせりともあり

中納言殿よりも宮よりも　秘　以下草子地なり　箋　細細の御音信の事をはかきもらしたるなり薫匂宮なり

花さかりの頃宮かさしをおほしいてゝ　河　此巻の始におなしかさしを折てけるかなと有し事なり　弄　去年の春の事なり　秘　去年の春の事なりおなしかさしを折りてけるかなとよめる時の事なり

又もみす成にし事なと　去年より參りし君たちも八宮匂宮の事をいひいたしたるとなり

(匂宮)つてにみし宿の櫻をこの春は霞へたてすをりてかさ

さん　弄匂宮より姫君のかたへのうたなり　秘匂宮より姫君の御方への歌なり去年の春はよそなからみしを此春は霞へたてす我物にして中君を見はやとなり　箋去年の春は薫への文のありしに此かへりは我せんとて匂宮のあそはしゝ事をつてにみしといふと云々

心をやりての給へりけりわるましき事かなと　匂宮の我物とおとしつけたる御ふみのさまを心をやりてといへりそれを有ましき事と姫君たちはおほすなり

見ところある御文のうはべはかりをもてけたしとて　秘なひく心はなけれと文のすてかたきはかりにとなり　箋面白くかけり時節の感と文のみ所あるとはかりに返事あるとなり

返中君
いつくとか尋てをらん墨染にかすみこめたる宿のさくらを　弄中君の歌なり　秘霞の中の花はたつねかたきよしなり服者のうへをはいかゝをりてんといふなり墨染は服者の家の心なり弄同　箋いかにをらんとおほすとも墨染に霞こめたる櫻はえをり給ましきとなり　花「深草の野への櫻し心あらはことしはかりは墨染にさけ　今案霞の色を墨染といへり服者のすむ宿なれはなり　河いつことかとありていつくとかなり五音通するなり云々

まことに心うしと　秘匂宮の心なり箋

れかしと思ひなから　薫の心中なり

いとうけばりたるうしろみかほに　箋薫の理運に此姫君たちのうしろみかほし給ふなり

いかてかゝらんにはなと申給へは　秘匂宮のあたゐたしき事のみえぬる時は薫のかくいましめ給ふなり箋

心にかなふあたりをまたみつけぬ　秘匂宮の返答なりさして思ふ事のかなはさるあひたの事そとなり　箋匂宮の我心にあふたる人のなきほとにかくあたあたしくも見ゆるそと陳し給ふなり

大とのゝ六の君を　秘夕霧の六君を匂宮にと有し事なり

ゆかしけなきなからひなるうちにも　箋夕霧の六君と匂宮とはいとこ也　上にてはかくいひなし給ふなり

何事のまきれをも見とかめられんか　箋夕霧のゆる

しなくの給はんを匂宮のむつかしくおほすなり
そのとし三條の宮やけて　女三宮の御所なり
宇治わたりをひさしう　薫の宇治へ疎遠なるなり
まめやかなる人の御心は　秘薫の事なりあまりに思ひのさめたる心にて大君をもとりはつし給へるなり　箋薫の心をいふなり
女の心さけさらん　箋大君をさして云なり
にはかにまうて給へり　秘薫なり弄
朝すゝみのほとに　河夏の日も朝夕すゝみある物を
宮のおはせしにしのひさし　朝日さしくるゆゑに西のひさしにおはするなり
そなたのもやの佛の御前に　箋宮のおはせし方なれは此母屋佛前なるへし
わか御かたにわたり給ふ　姫君たちのわか方へかへり給ふなり
なほあらじに　有ましき事のもしもあらはなといふやうの心なり
かけかねしたる所に　弄かねのある所なり
あなのすこしあきたるを見おき給へれは　秘細々薫の参り給へはよく見おき給ふなり箋

とにたてたる屏風　箋障子のこなた薫のゐ給かたにたてたる屏風なり
ひきやりて見給ふ　たゝ見よせたゐなり
こゝもとに木丁をそへたてたる　さうしのあなたなりこの穴のとほりに木丁のあたるなり
ひきかへるをりしも　秘薫の立歸らんとせしなり箋弄
風のすたれをいたう吹あくれは　あなたのおもての簾なるへし
そのみ木丁おし出てこそ　弄障子のあなたにあたりたる木丁をはしのみすにおしよせたり
たかきもみしかきも　箋高きは常の木丁なりみしかきはさし木丁なり
ふたまのすに　二間の簾なり
このさうしにむかひてあきたるさうしより　此さうしは薫のゝそく障子なりその間をへたてたるむかひの障子を又明てとほらんとするなり
あなたにとほらんとするを　秘姫君たちあなたに入給はんとするを見給ふなり弄同
まつひとりたちいてゝ　秘中君なり弄箋

この御ともの人々の　箋薫の御供の人々なり
こきにひ色のひさへにくわんさうのはかま　河濃鈍
色萱草色紅のきはみたるなり服者の着するなり
おひはかなけに　秘かけ帯なり　弄かけ帯なり物ま
うてなとに女のかくる帯なり　問云中君服中の事
なり何の帯にかかけ帯の事歟如何　答云帯と云は
唐衣の引こしを帯とは云るにや服者の色は何もに
ひ色なるへし　問云ひきこしいかやうなる物哉い
かなる時用る哉答云唐衣にそひたる物なり小こし
引腰とておるなり
すゝひきかくし　箋人の見るやうに念珠なともつ事
上古はなき事なり
そひやかにやうたいおかしけなる人のかみうちきに
すこしたらぬ程　せいのたかき心なり　髪はとのみ
すくれぬよし歟
かたはらめなと　箋そばかほの事
女一宮いうさまにておはすへき　花今上の御女明石
中宮の御腹なり　箋　秘今上の宮明石中宮の御腹
なり箋のほのかに見たてまつりし事あるへし
又るこりいてゝかのこうしはあらはにもこそ　弄あ
ね君なり　秘大君なり用意ふかきさまなり
あなたに屏風もそへて　秘さふらふ人のいふなり
いそきてしものそき給はし　秘薫の事をいへり　薫
はのそき給はしと人々のいひしなり
いみしうも有へきわさかなとて　箋薫の御らんして
はいかならんと大君の給ひてうしろめたけにゐさ
り入給ふとなり用意ふかし
くろきあはせひとかさね　河鈍色のあはせのきぬな
り
おなしやうなる色あひ　箋中君とおなしやうなる色
をき給ふとなり
かみさばらかなるほとにおちたるなるへし　河さば
らかは前にあり
秘髪のすこし落ほそりたるなり　箋物思ひにおち
たるなるへし
色なりとかいふめりひすいたちて　河翡翠　鳥の名
なりうつくしきすかたなり　翡翠はうつくしき物
なれはなり又は髪も色かみとてさのみくろからぬ
をいふ事あり　秘色髪(ヒロ)なといへるなりさのみくろ
からぬをいへり尋と云義不用之翡翠はうつくしき

色をいへり　箋　花鳥にいろは尋なりとあり不用之　花いろは尋なり八尺をいふ髪ときに千尋八尺と云なり　翡翠は鳥名赤羽曰翡青曰翡翠小如燕毛青黑色間深青有光彩飛水上食魚翡大如鳩毛紫赤間點々青不深無光彩林栖不食魚今俗呼翠赤曰翡翠云云今案翡翠はせうびといふ鳥なりくはしくいはゝ翠は大さ燕のことくにして水の上に飛て魚を食すと云る今のせうびは翠にあたる也以上花鳥　私案之色なりとかいふめるひすゐたつとは色かみとてさのみくろからぬをいふといへるはいかゝくろきうちにあかきひかりのあるやうなるうつくしきさまときこえたり

紫のかみにかきたる經を　河紫色吉事勿論也又凶服にも通用歟紙の色も同事なり　紫上祖母の服をはぬきなからまはゆき色にはあらて紅薄紫の地のかきりおれるなりうちきを着すと有又六條御息所をくるゝ袖をと有ことも紫のにはめる紙也處女巻に齋院御服の時奉られし源氏の文も紫の紙をたて文にて藤の花に付られたる也（黄ム此注の上に付紙あり如何）

かれよりもほそさまさりて　大君の手つき中君よりもやせやせなるなり生得かよわき人と聞えたり

たちたりつる君も　秘中君なり弄箋

こなたを見おこせてわらひたるいとあいきやうつきたり　中君のさまなり

岷江入楚第四十八　角總

私イに總角とかけり愚案奥に註す
卅三歳（サイ）　中納言　私椎本と同年の秋より冬までの事也
秋宇治八宮一周忌法事之事
源中納言訪宇治給事
名香糸角總事
匂宮御心向語中姫君給事
召出老人物語事　今夜留宇治給事
姫君對面之事　曉歸給事
明日源中納言獻文於宇治事
姫君除服事
源中納言渡宇治召例老人物語事
姫君心强事
其夜宿宇治老人引導源中納言奉入姫君寢所事
姫君起屛風陰事　逢中君無實事
朝源中納言奉文於姫君事
姫君有返歌事
源中納言參兵部卿宮語宇治宮事
兵部卿宮又誘引源中納言給事
八月廿八日彼岸結願日源中納言奉伴兵部卿宮出宇治事
源中納言姫君物語事
匂宮出給之由語給事
匂宮忍入中君寢所給事　源中納言のまねをし給ふ事
曉天源中納言匂宮同車還京給事
明旦匂宮御文送宇治中君事
御使賜衣事
宇治中君三日夜餠事
源中納言送消息於中君事　有返歌
及深更匂宮參宇治給事　乘馬と云々
九月十餘日源中納言奉伴匂宮出宇治給事
兵部卿宮欲奉渡中君於京宮事
源中納言又欲渡姫君於三條宮事
此卷夕霧のおとゝを右のおほい殿とかける本ありあやまりなり左に轉し給ふてのちの事なり右をひたりとよみつくへきなり
十月一日兵部卿宮爲紅葉御覽逍遙宇治事

舟楽事
依中宮仰右衛門督參御迎事
宮獻御文於中君事　不出宇治宮直歸京給事
姫君中宮等兵部卿宮無御渡恨給事
內中宮聞食兵部卿宮宇治御忍行御氣色之惡敷事
左大臣殿六君也嫁兵部卿宮給事
兵部卿宮養女一宮御方見在五繪給事
兵部卿宮久不出宇治給事
源中納言參宇治給事
姫君病腦無對面事
明日聊對面歸給事
中君晝寢夢見故宮給事
十月三十（二十イ）日兵部卿宮獻消息於宇治事
十一月姫君病腦同前事
源中納言訪給事
仰阿闍梨令行祈事
阿闍梨夢見故宮爲追善行常不怪給事
源中納言與中君詠歌事
源中納言籠宇治給事
思遣京事給事　物語姫君給事

宇治姫君卒去事
同葬送事　中君（中納言イ）戀慕事
兵部卿宮中陰之（歸イ）中渡宇治給事
宿宇治事　中君隔御見參事
源中納言奉逢物語事
明日兵部卿宮還京給事
年暮源中納言欲歸間事
兵部卿宮可奉渡中君於京二條院用意事

總角　花以歌幷詞爲卷名秘同

あけまきになかきちきりをむすひこめておなし所によりもあはなん　私此詞はあけまきをたはふれにとりなしゝも心もてひろ（給イ）はかりのへたてにてなとあり　わけまきに二つあり童をもあけまきといふ髪をからはにあけたるこゝろなり又車なとに糸にてくみてかくるをもあけまきといふ此あけまきはいとにてしたるをいふなり薰廿歳の秋より冬までの事をかけるなり　秘あけまき神樂には總角とかけり童の心なり催馬樂には角總とかけりこれは糸にて結ふをいへり此卷名は催馬樂を用へきなり薰廿三の秋より冬までの事なり箋　私云天皇御元服の時童形にて御出立のやうを總角（ソウカク）と云これも童の義なり河海花鳥弄花此卷の名總角を用たり此抄には總角を用所なり　弄　薰廿三歳なり椎本は廿三の夏までの事あり此卷其秋より其年くれぬ廿歳へかへる義不可然

あまた年みゝなれ給にし川風もこの秋はいとはしたなく　秘此宮にすみ給ふ事年をへぬれと八宮薨し給ひてさらに物かなしきさま也　箋　薰の參りかよふ事は五年はかり歟こゝへは宮のうつろひ給ひしはいつよりともみえす

御はての事いそかせ給ふ　花うはそくの宮去年の八月廿日にうせたまふことし周忌の御佛事あるへきを御はての事とはいへり　秘八宮一周忌の事なり弄箋

こゝにはほうふくの事經のかざり　箋宇治の事なり袈裟衣經佛なとの事なるへし法事は八講なるへし　花經のかさりは經机の覆なとの事なり

きこゆるにしたかひて　箋紫上はかやうの事もたとたとしからすと書たり是は人の中まゝにとなり

かゝるよその御うしろみ　秘薰のし給はてはと也箋

みつからもまうて給ひて　箋薰の宇治へおはするなり

いまはとぬきすて給ふほとの御とふらひ　箋着服をぬき給ふ時の事なり　私藤衣の色あらため給ふほとの衣裳なとまて思ひやり給ふなるへし又そのほとの御心さそとのとふらひもあるへし

みやうかうのいとひきみたりて　河名香糸也行香の机四角に結ひ垂るゝ糸也　花さま〳〵の香をかみ

につゝみて五色の糸にてむすひかけて佛にたてまつる事也　私名香糸にて結ふ事たしかなる所なし河海説可然哉名香つゝみたる紙を糸にて結たるなり又云名香袋に糸をつくる事あり又有河海　箋河海花鳥の義各別なり猶河海説よしと云々華足(ケソク)の心柴よりつくる糸なるへし

かくてもへぬるなとうちかたらひ　河古今「身をうしと思ふにきこえぬものなれはかくてもへぬる物にそありける　弄糸の縁おもしろし引歌身をうしとおもふに云々箋　秘引歌同し姫君たちかくいひてうちかたらひ給ふをりふしなり　中君とうちかたらひたまふひめきみの口すさみなり

むすひあけたるたゝりの　河糸をかくるものなり（万十三）「をさめ子かうみをのたゝりうちをかけうむ時なしにこひわたるかも　花延喜式に線柱とかきてたゝりとよめり糸くるわくの事也　弄糸をくる臺なり線柱とかけり　聞たゝり糸をかくる物（臺イ）なり云々たゝの字すみて讀歟（一答合點）たゝり如何聲をさす　秘糸をくる物なり　花鳥に延喜式をひけり未勘之令神祇令第六凡天皇即位其大幣者三月之内令修理詑註云　金水桶(カネノミヅケ)金線柱奉二伊勢神宮一

そのことゝ心えて　箋薫の名香の糸と心得たるなりわか涙をはたまにぬかなむと　秘薫の糸をより給へる事を心えてかくいへり　「よりあひてなくなるこゑを糸にしてわか涙をは玉にぬかなん　このうたは七條院后のうせ給へる時伊勢かよめる也箋河伊勢集七條后崩給時うへ人あつまりて御わさのくみをしけるしもなる人（伊勢なり）いまはよりはて給ふや只（と歟）いまなにわさをかし給こゝにはいとはよりはてゝいまはねをなんよりあ（ひイ）はせてなき侍るといひこせたれはしもなるひとよりあ（ひイ）はせてなくなるこゑを糸にして

伊勢のこもかうこそは　秘こは御なりかしつきていへる詞なり　河一本御は女房をかしつきたるなり四條大納言新撰髄腦云いせのこか中務君にをしへける歌云々本朝文粹云徒跣(スルチ)彈レ琴者閭巷稱二辨御一俗謂二貴女一爲レ御蓋取二夫人女御之義一藤相公兼二辨官一故稱二其女一也菅家御作慰小男女　以上河海

うちの人はきゝしりかほに　姫君たちなり

物とはなしにとつらゆきかこの世なからのわかをた

に　河「糸による物とはなしに別路の心ほそくもおもほゆるかな　秘姫君の心中なり引歌いとによる物とはなしに古今には物ならなくにとあり　弄引歌古今云物ならなくにとあり家集には物とはなしにと有けるにや如此事多也　私兼好法師かつれつれ草にも物とはなしにとそ源氏物語にはかきたりとあり　花此世なからのわかれとは生別なりそれたにかなしましてなかき世のわかれはいふもおろかなるへしこれは姫君の心におもひ給ふ事なり　箋花鳥の義に同し

御くわんもんつくり經ほとけくやうせらるへき　秘願文の事を阿闍梨も薫に申談し給ふ成へし

かきはてたてまつる硯のついてに　箋薫願文の章をかき給ふなり

薫あけまきになかき契を結ひこめおなし所によりもあはなん　河總角（アゲマキ）日本紀　舉巻催馬樂　催馬樂呂云あけまきやひろはかりやさかりてねたれともまろわひにけりかよりあひにけり今案ひろはかりは八尺はかりなりさかりては糸のさかりたるを人のさかりてねたるにそへたるなり定家卿歌にも　なかくしもむすはさりける契りゆへなとあけまきのよりあひにけん　弄名香の糸をあけまきなとにむすひたる心又は催馬樂の歌の心にてまろひあひたるやうになとの心をもこめたり　秘薫の我心をほのめかしたる也催馬樂のうたにまろひあひにけりかよりあひにけりの心也　又名香の糸を角總に結ひたれはそれをいへりあけまきのむすはれたるやうによりあはんとなり箋花　箋此あけまきは吉事にも用るむすひなり面は追善の歌なり裏には大君の事をの給へり

れいのとうるさけれと　秘大君の心なり　箋これは下にふくませたるうるさきなり

返大君ぬきもあへすもろき涙の玉の緒になかき契りをいかかむすはん　秘玉の緒に契りをむすふへき身にてもなしとなり私涙の玉のをのもろきやうにむすひと（よイ）めぬなりそれになにとなき契をはむすはんするそとなり　秘早世あるへき人にて歌の風體のよからぬとありしなり

あはすは何をと恨めしけになかめ給ふ　河古今「片糸をこなたかなたによりかけてあはすは何を玉の

緒にせん　箋同歌を引　花是は薫の心のうちをいふなり　弄引歌これも糸にことよりたる歌をひけり　箋引歌同あはすはその糸は何のためそとなり
薫の口すさむなり
みつからの御うへをはかくそこはかとなく　秘薫の我身のうれへをいひたまへれとも（ふイ）あらぬさまにとりなし給へれは匂宮の事をたよりに申給ふとなり私大君のはつかしけなるさまし給へるにかほるのさやうのかたうちつけならぬ心なれはさともえのたまひよらて匂宮のことをかこつけてよせことにの給ふとなり此詞草子の地ともいふへし
さしも御心にいるましき事を　秘匂宮の事なり　箋薫の詞なり　是は匂宮の御心にいるへき人當時繁花の人の中におほきをさしれきてこの宇治の事に心とめたまふは好色にすゝみたる御心からゆかしくおほしそめたるにつれなきさまなれはまけしたましるにやの給ふらんと思ひやりてさま〳〵御心のさまをみるにさもあるましけに眞實を見ゆるとかはるのゝ給なり
かやうのかたにすこしすゝみたる　秘匂宮好色のかたにすゝみたる御心をいへり
いとよくなん御けしきみたてまつる　弄薫の匂宮の心をよくさくりみたるなり
まことにうしろめたうはあるましけなるを　秘眞實にすゝみたる御心をいへり
もてはなれ給ふらん　匂宮のあた（あさかイ）ならぬ心とは我よくさくりしりたるさかになとかくつれなくてのみ過し給ふそとなり匂宮の心をさへさくりみるほとの薫の深切（こイ）をいひたてゝ薫の大君へ怨志をはいはすしてしらしむためなるへし別の詞に宮の事をそまめやかにきこえ給ふとは此ゆへなり
世のありさまなとおほしわくましくは　大君の世上の分別もおはせんと思ふよしなり
うたてとほ〳〵しく　秘こなたより疎遠にし給ふとなり
うらなくたのみきこゆる　薫の表裏なく心をへたてぬに遠々しくし給ふは世のありさまを分別もおはせぬやうなりとなり
ともかくもおほしわくらんさま　秘大君の御心をのこさす承はりたきとなり　箋中君を匂へ御同心あ

るましき歟さやうの御分別の處をも理を開あきらめたきとなり
たかへきこえしの心にてこそ　弄これより姫君の心也大君の詞也薫にまかふましきとなり　箋大君の詞也八宮のゝ給ひし一言ゆゑにこそこれ程薫へも隔心なくは申せとなり
あやしき世のためしなるありさまにて　公界ならは薫なとゝ是ほとちかく〳〵しからん事にてはなしそれをかくあやしき世のためしといへり
かゝるすまゐなとに心あらん人は思ひのこすことはあるましきを　秘かく世はなれしつかなるすまゐはよろつをおもひしるへきとなり弄箋　私世のわりさまなとおほしわくましくは見たてまつらぬをと薫のの給ひしにこたへたる詞なりされとも我心おくれにて何事をも思わかぬとなり
何事にもおくれそめにけるうちにこのゝ給ふすちは　秘よろつに心おくれなる心のうちなれともとなり大君の我事をの給ふなりのたまふすちとは匂宮へ縁をむすはれん事なるへし
いにしへもさらにとあらはかゝらは　秘よつきたるすちをは故宮はことの次にての給ひ出さりしとなり
なほかゝるさまにてよつきたるかたをおもひたゆへく　秘今思ひいつるによつきたるすちをは思ひたえねとおほしたるなるへしとなりきこえんかたなくてといへるまて大君の我身の事をいへるなり
さるはすこし世こもりたる　花是はいもうとのひめきみの事をの給ふなり　秘これより中君の事なり
み山かくれには心かくはしう　河古「かたちこそみ山かくれのくち木なれ云々　弄姿こその歌の心又は歌なくてもきこえつへし
あつかはしう　河もてあつかひたる心なり
けさやかにおとなひても　秘薫の心なりけにもみつからの事はけさやかにはの給ひにくき事なるへし
としころはたゝのちの世さまの　秘薫の詞　辨の尼にの給ふなり　私年來故宮へ參りそめし事は佛法に入たちての事なりしとなり
物心ほそけにおほしなるめりし　私故宮の御末なり此事とは姫君達の事なり　私薫にうちまかせたるやうに故宮仰をきしとなり

れはしおきたてまつり給ひし　是は八宮の事覺しをきて（かれイ）しに（事イ）はたかふたるとなり

御心はへともの　姫君たちの御心ともなり

おほしおきつるかたのことなるにやと　是は姫君たちの別に御心むけのあるにやとうたかはしく思ふとなり

世中に心をしむるかたなかりつるを　河おもひしつむるかたなきなり　一本に思ひしつむるかたなき也云々　箋我身のありさまをかほるの辨にいひきかせ給ふなり

世の人もやう〳〵いひなすやう　箋世間には薫と大君とははやしたしき中そと人はみな思ふらんとなりかくいひなしてのかれぬやうにとの了簡なり

宮の御事をもかくきこゆるに　秘匂宮なり我はなかたち中事をもしうたかひ給ふかとなり　箋薫のかく申からは匂宮の好色人なりとも思ひうたかひたまふましき事そとなり

おもほしむけたる事のさまあらん　別に（前イ）おほしおきつるかたのことなるにやあらんといへるすゑをあはせていへるなり

なほいかに〳〵とうちなかめつゝ　秘もしことかたへ御心むけのあるにやとなり

れいのわるひたる女はらなとは　此段辨の尼のさまをほめていへることはなりわろひたるふるこたちなとは薫の仰尤なりいつれも御心むけのこは〳〵しきなとゝそしるやうにいひなすへき事そとなり

いとさはあらす心のうちにはあらまほしかるへき御事ともと思へと　花辨はにくきさかしら心もなくてたゝありのまゝにおもひわひたるへし　弄あらまほしかるへきは辨か心也　私あらまほしかるへき御事ともとは大君を薫へ中君を匂宮へとの事なり

もとよりかく人にたかひ給へる　秘辨か詞なり　姫君の御事を云なり弄

よのつねになにやかやと　箋只惣別よつきたる方（かたイ）の御心なければましてよそ人に御心のひく事なとあるにてはなしと也薫のうたかひ給ふ故なりされとも薫も實にうたかふにてはあらすこゝろはさをやめんと了簡なり

かくてさふらふこれかれとしころたに何のたのもしけある木のもとの　箋こゝの心ほそきさまを申た

つる事なりとしころたにとは故宮のおはせし時た（さ）
に（ヘイ）と申なり七條の后のうせ給へる時伊勢か長歌に
「秋のもみちと人々はをのかちり〳〵わかれなは
たのむかけなくなりはてゝといへる心もあり
秘古今「わひ人の分てたちよる木のもとはたのむ
かけなく紅葉ちりけり
身をすてかたく思ふかきりは　我身のためを思ふ人（思へさや）
は（イ）はやみな方々へゆきちるなり
ふるきすちなる人も　別して奉公申さてかなはぬ人
さへおほくは退散するなり
おはしましゝ世にこそ　秘古宮の御時をいへり　古
宮の御存生の時のことをいふなりこれよりさふら
ふ人々のよからぬ事を申すをかをるへ辨のかたり
申ことと葉なり
こたいなる御うるはしさ　古宮の御心おきてをいふ
なり　秘あまりにおちふれたる事はいかゝと也
私云にきはゝしくともさのみいやしき受領なとの
つらになとはいかにとおほしくことわりなるへし
世になひき給へらんをあなかちにそしりきこえんひ
とは　かやうにたのみ所なき御身にてからは（かゝらはイ）いかや

うのうしろみまうけたまひてもくるしからぬ事な
りそれをなにかと申さん人はそれこそ物の心をし
らぬ人なるへけれとなり
松の葉をすきてつとむる山ふしたにこそ　河仙人主
差食松葉不飢壽百七十餘年芰荷爲衣松葉爲レ食云
々沙門隱士行也すきてはのみいるゝなり　秘すきては食
なり　花樹下集　「柴のいほりこけの衣に身をや
つし松の葉ならぬときはなしとか　金峰山縁起役
行者着二藤皮衣一松葉爲レ食啜二花汁一助二保身命三十
餘ヶ年一云々　箋役行者松の葉を食とすと云々是
は小乘の修業（行イ）也羅漢果をうる人なり
いける世のすてかたさも　箋何とそして修業（行イ）にたて
とんするためにする事なり
わかき御心とそみたれ給ぬへき事おほく　秘辨なと
か姫君たちに教訓の事なり弄　私此義いかゝこれ
はさふらふ人の中にもよからぬ人々の何かと申な
す事を薫へ辨かかたり申なり辨の尼なとは此心も
ちひにてはあるへからす
たはむへくも物し給はす　箋大君の御心のつよき所
を辨か薫へ申なり教訓にもより給はさるなり薫の

ことはに御心とものいと〳〵（よイ）あやにくにものつよけなるはいかにおほしおきつるかたのことなるにやといへる返答なりさてたはむへくもなしといへり

かの御かたをさやうにおもむけて　花あね君の御心に中君をさもおほしめさはとおもむけ給ふよし老人のかたるなり　中君なりかく山ふかく薫のたひたひたつねさせ給へる御心さしには此の中君をとゆるし給へる御心となり

宮の御ふみなと侍めるは　秘匂宮なり　箋匂宮は好色人そとなり前より中君と文なとはかよへとそれをまことしき事とは大君も思ひ給はぬとなり

あはれなる御ひとことを　秘薫の詞也故宮の御遺言をいへり

いつかたにもみたてまつらんおなし事なれと　弄薫の詞あね君の中君をもゆつり給ふなりいつれにもおなし事なからたゝあね君をとの給ふなり

さまてはたおほしよるなる　秘さやうにまてなり　箋中君を薫へと大君のおほすはうれしけれとも俄にえおもひうつるましきとなり　私それほとに大君の御こゝろにかけ給ふもうれしくはあれともとなり

心のひくかた　秘大君に御心のひくなり

かはかり思ひすつる世に　薫のうき世に着せぬ心にも猶こゝろのひくかたの差別はあるとなり

よのつねになよひかなる　世上の風流めきたる心にてはなしとなり

ことのこいたるさまならす　河事殘なり

とにかくにさためなき世の物かたりを　大君も風流のかたはもてはなれたる人なりされは薫と同し心なるとの給ふ心なり

たのみきこゆるきさいの宮　花秋好中宮の御事也　弄明石宮の事なり薫の弟（兄歟）なり　箋明石中宮なり　秘花鳥に秋好中宮とありいかゝ是は明石中宮なり薫と兄弟のよしなり

三條の宮はおやとおもひきこゆへきにもあらぬ　秘女三の宮なり箋

なほさりのすさひにてもけさうたちたるかたは　秘好色のかたなり

こち〳〵しきにて　秘ことゝ〳〵しきか　箋事々しき

なり又無骨の心ある所もあり
まいて心にしめたるかたのことは　秘大君（宮イ）の事なり
わか思ひをは色に出して申事もなしとなり
宮の御事をもさりとも悪様には　秘匂宮の御事也
まかせてやは見給はぬ　秘薫にうちまかせてや見給はぬまかせて見給へとなり
老人はたかはかり心ほそきにあらまほしけなる御ありさまを　薫も大君も心深きさまなる故に思ひのまゝにはいつ方をもえ申なさぬと也辨尼の心中也
あさやかならす物うらみかちに　秘大君の心也　私に薫のさたかにはの給はねとも詞のはつれに樣々うらめしけにかすめたるを大君のむつかしくおほしなからものこしにて對面し給ふ也
とのもおほとなふらまゐらすれと　秘薫の居給ふ所也無禮なると也　いさめてといへるおもしろし
箋なやましくて薫のうちくつろきたるを憚る義也
かたはらにふし給へり　そひふしたる心也
うちとくへうもあらぬ物からなつかしけに　薫の心に思ひ居給へる也
あはれにもをかしうも　箋薫の物語し給ふ樣也

もてはなれ給はさらなんと　さふらふ人々の心也自らもみなれ給へと也
まもり聞えす　人々は結句心して近くさふらはぬ也
もののむつかしうて　大君の心中也
こゝちのかきみたり　秘大君の詞也
山路に遣侍りつる人はまして　秘薫の詞也　箋薫の山路わけくる事を我と宣ふ也
へたてなきとはかゝるをやいふらん　秘大君の詞
花薫の屏風をおしのけて入給を云也
あはめ給へる樣　秘制し給ふ也　人を云おとす心也
へたてぬ心をさらにおほしわかねは　秘薫の詞なり隔心なくし給へと申せとも其さまをしり給はぬ程なれはいよ〳〵申奉らんとての事そと也
めつらかなりともいかなる方に　姫君のめつらかならぬわさ哉と宣を薫のとかめていつかた（水にイ）にめつらかなるわさと聞定めんと申給ふ也　私なにと覺しめしてめつらかなるわさとは宣ふそこれよりもことなる事はあらしとなり
世にたかへるしれ物にて過し侍るそや　秘愚痴なるなり　弄しれ物とはつねにたかひたる心なり薫の

事也　私人は今までもかやうに心ざよからんとも
思ふましきを薫の心のにふき故にこそかくもあれ
となり
心にくきほとなる　秘前に佛の御ともしひもかゝく
る人もなしといへることはにかゝれり
かう心ほそう　秘薫の心なり
すいたらん人はさはる所あるましけなるを　箋薫の
うたかひなり我こそ心のとかにて今まで過しつれ
すいたらん人はさもあるましきとなり我ならてた
つねよる人もあらはとあやふくおほすなり
わりなきやうなるも心くるしうて　秘薫の心のとか
なるさまなり
かゝる御心のほとを思ひよらて　秘大君の心なり
箋薫の御心をかくわらんともしらていひなれ給へ
るを大君の後悔し給ふなり
ゆゝしき袖の色なと　花ゆゝしき袖の色は服者の色
のいま〳〵しきをいふなり　秘鈍色なり　箋いま
た父宮の服中なり　秘大君の心なり　私薫のさた
かにはの給はねともことはのはつれにさま〳〵う
らめしけにかすめたるを大君のむつかしく覺しな

から物こしに對面し給ふとなり
とにもおほとなふらまゐらすれと　秘薫の居給ふ所
なり　無禮なるとなりいさめてといへるおもしろ
し　箋なやましうて薫のうちくつろきたるを憚る
義なり
かたはらにふし給へり　弄そひふしたる心なり
うちとく〳〵へうもあらぬ物からなつかつしけに　秘薫
の心にしみて思ひ給ふなり　大君のさまを薫の思
ふ心なり
かく程もなき物のへたてはかりを　薫の心に思ひゐ
給へるなり
あはれにもおかしうも　箋薫の物かたりし給ふさま
なり
もてはなれ給はさらなんと　さふらふ人々の心なり
薫におのつからも見なれ給へとなり
まもりきこえす　箋人々は結句心してちかくさふら
はぬなり
物むつかしうて　大君の心中なり
心ちのかきみたれ　大君の詞なり
山ちわけ侍りつる人はましてて　秘薫の詞也　箋薫の

山ち分くることをわれとの給ふなり
へたてなきとはかゝるをやいふらん　秘大君の詞也
花薫の屏風をおしのけて入給ふをいふなり
あはめ給へるさまの　秘制し給ふなり　人をいひお
とす心なり
みつからのいふかひなさも　箋大君を薫のかろ〳〵
しくおほしめすとの心なり
いとかうしもおほさるゝやうこそはと　秘薫の心也
あまりにいとひ給ふもいかゝと也
聞えんかたなし　秘薫のよく〳〵思へは大君の心中
も道理そとなり周忌も今すこしのほとなれは也
袖の色をひきかけ給ふはしも　箋これより薫の詞な
り　河「おく山のはれぬ時雨そわひ人の袖の色を
はいとゝましける
さはかりのいみおくへく　秘服の程を過してなとの
たまふへきにあらすとなり弄　箋惣體物の差別を
見する事にかけりこれは服の事にかけていへり
中々なる御わきまへ心　今とても實事なとはあるま
しけれと前々よりも物こしに宣へる同事そと也
はつかしうもありけるかな　秘大君の心なり　私籥
姫巻に有明の月に物の音きゝし時よりをり〳〵の
思ひのさまをかをるのゝ給ふを大君の心にかやう
の事を心にこめなから今まで實々しきさまを見え
給ひける事よとおはすなり
みやうかうのいとかうはしく　名香也　花いとはい
つれも最の字の心なり糸にはあらさるなり秘同
しきみのいとはなやかに　抹香のかをり歟又たゝ樒
のにほひ歟
人よりはけに佛をも思ひきこえ給へる　秘薫佛に心
さしのふかきをいへり
かうなりけりとけしきとりて　薫の大君にちかつき
給へるさと思ひてみなしりそきぬるなり
宮の宣ひしさまなとおほしいつるに　秘八宮なり
箋大君の心なりたよりなくてかゝる所に過し給は
は思ひの外の事も有へしとの給へるなるへしさふ
らふ人々もかくこゝろあはするやうなれはなり
水のおとになかれそふ心ちし給ふ　河邊風吹斷秋心
緒瀧水流添夜涙行　朗詠江相公秘箋同
馬とものいはゆるおとも　河晨鷄再鳴殘月沒征馬連
嘶行人出白氏文集　秘征馬連嘶行人出箋

たひのやとりの有やう　旅宿のありさまなり
ひかりみえつるかたのさうし　障子なり外のかたなるへし
いとなつかしきさましてかたらひきこえ給へる　薫の大君をかたらふさまなり　秘なにとはなくてと云より薫の詞なり
やう〳〵おそろしさもなくさみて　秘大君の心なり
かういとはしたなからて　秘大君の詞なり
むらとりのたちさまよふ　河「むら鳥のたちにし我名今さらにことなしふともしるしあらめや
よふかきあしたのかねのおと　花ふかきあしたは早晨なり　箋かの山寺の鐘なるへし
いまたにいとみくるしきを　秘明はてゝはいかゝと也　花朝かへりしたまふ事をいふなり
いとわりなうはつかしけに　大君の心なり
ことありかほに朝露もえわけ侍るまし　秘薫の詞なり　箋眞實のきぬ〳〵ならぬを云なり爲家卿從門歸戀といふ題にて　「ふかき夜の別といひて眞木の戸の明ぬにかへる身とはしれかし
あさましうかたはならん　秘大君の心なり

いまよりのちはされはこそもてなし給はんまゝに
向後は薫にしたかふへしけさはかりはわれにしたかひ給へと大君のゝ給ふなり
いとすへなしと　河無便也たよりなしとなりせんすへなし同事なり　箋せんやうなしとなり
あなくるしや　私薫の詞なり
あかつきのわかれやまたしらぬ事にて　花「またしらぬ曉おきのなこりにはみちさへまとふ物にそありける　秘箋引歌同花
には鳥もいつかたにかあらん　私晨鷄再鳴殘月沒征云々此始末なり
薫山里のあはれしらるゝ聲々にとりあつめたる朝ぼらけかな　弄村鳥の羽風なとかけるより次第に明ゆくに鷄もなといひしにこそこゑ〳〵にとりあつめたるとよめり　秘薫の歌なり聲々とは峰の嵐も籬の虫も心ほそけにといひ叉むら鳥のたちさまよふ羽風夜ふかきあしたの鐘の音には鳥(鷄イ)もいつかたにかあらんといひて次第々々にあけ行さまをとりあつめたるとはいへるなり俊成卿歌に　「曉は鐘の聲より鳥のこゑ千鳥友よひ鳴のはねかき　箋乍臥無

寳と又衣々のあはれ山さとのありさまとりあつめ
たるとなり　私秘にいへる義然へき歟
返大君鳥の音も聞えぬ山とおもひしを世のうき事は尋ねき
にけり　河古┐とふ鳥の聲もきこえぬおく山のふかき
心を人はしらなん　秘大君の歌なり　箋世のうき
事は今夜の薫の事をいへり
なこりこひしくて　花六帖五┐よもすからたつさはりつるい
もか袖なこりこひしくおもほゆる哉　薫の心なり
ひめ宮は人の思ふらんことの　箋大君の心なり
何やかやとつき〳〵にしたかひつゝいひいつめるに
より　さふらふ人々のさま〳〵御うしろみの事なと
いひ出るやうなる人もある成へし
この人の御けはひありさまの　秘薫なり　箋さふら
ふ女房なともこよひのやうにみなたちさりなとす
るやうなるゆゑ大君のおもひつゝけ給ふ心なりこ
れならすいかなる人をかみちひきもせんとおほす
には此（君をイ）薫は思へはくるしからぬ事そとなり
中の宮を人なみ〳〵に　箋いもうとの君を薫へとお
ほすなり
又たれかはみあつかはん　箋中の宮（君をイ）をは大君のうし
ろみ給はんするか我身のうへになしては誰に見あ
つかはれむそとなり
この人の御ありさまのなのめに　秘これも薫なり大
かたのはつかしけさならはとなり
かくみなれぬるとしころのしるし　薫に大君のさす
かみなれたるとし月もへたるゆゑなり
わか世はかくて過しはてゝんと　河かくてしも（いさこゝにイ）わか
世はへなんすかはらやふしみのさとのあれまくも
をし
れいならす人のさゝめきしけしき　秘中君のこゝろ
なり
御そひきゝせたてまつり給ふに　秘あね君のつまを
ひきゝせ給ふなり又あね君にひきゝせ給へるとな
り　弄あね君に中君のつまを引きせ給ふなり箋
とのゐ人かもてあつかひけんを　秘橋姫卷にありし
事なり花
まらうとは辨のれもと　箋薫なり
御せうそこくすく〳〵しう　箋風流たゝぬなり
あけまきをたはふれにとりなしゝも　河あけまきや
とう〳〵ひろはかりやとう〳〵さかりてねたれと

もまろひあひけりとう〳〵かよりあひにけりとう
とう　[illegible]巻に註之昭の催馬樂大宮本滋同音八尺爲
詩左傳注　花是は姫君の思ひ給へる心なりあけまき
の歌にひろはかりさかりてねたれ共とうたふ詞を
されるなり　弄あけまきの歌を薫と姫君とよみか
はし給てけちかく物かたりなと有しを中の君いか
か思ひ給ふらんとなり　秘大君の心なりあけまき
の歌をよみかはし給ひしをもいかゝ中君の思ひ給
つらんとなり箋　私前のあけまきの歌をよみかは
し給ひし故に大君と我とまろひあひけりとなり
中君のおほさんとなり
ひろはかりのへたてにも　弄見河海けちかくてとい
ふ心なるへし　秘催馬樂のかよりあひけりの心に
てかけり中君あやしく思ひ給ふへきとなり箋
日はのこりなう　秘故宮の正日をいへり箋
心はなとえこそ思ひより侍らね　弄常のかねにてう
ちたる物にはあらしいとにてむすひたる心歟云々
と禪閣同之　秘常にはかねにてするをこれはいと
にてし給ふなりむすひはなにてする事もある也花
に心葉とは金をえりて花のかたをする事なりあけ

まきの心は糸にてむすふやうにみえたり
くらうなりぬるまきれに　箋大君のよへの事をおも
はゆく思ひ給ふ故なり
中納言殿より御ふみあれと　薫より文まゐりたれと
大君の返事し給はぬなり
御ふくなとはてゝぬきすて給へる　周忌過てのさま
なり御法事のほとの事はかゝすしておもしろくか
けり
なきしつみ給へる御さまとも　箋大君中君のさまな
り
月ころくろうならはし給へる御すかたうすにひにて
花重服をぬきてもしはらく輕服をき給ふ也　薄鈍
色なり　弄除服ちかく成て色のうすく成たる心な
りくろく忌イとは重服の間なり　私重服なりうすにひ
は輕服になるなり　箋くろうは着服也除服の後は
去服なるへし但心喪とて志のふかきには猶しはら
く輕服を着する事のあるなり
ちかおとりしては思はすやあらん　花近よりてわろ
くなる人あり此中君はおもあなましきとたのもし
く思ひ給へるなり思はすやあらんといふはちかお

ことりはあるましきといふ心なり
おや心にかしつきたてゝ　秘薫に嫁すへきと大君の
思ひ給ふなり
かの人はつゝみ給ひし藤の衣も　秘かの人は大君な
り　私かの人は薫なりつゝみ給ひし藤の衣は一夜
の灯大君の藤のやつれをみあらはされしをつゝみ
給ひし事なり
なか月もしつ心なくて　河男女初會台に忌正五九月
云々　秘八月におはしたるなり九月まてはしつむ
る心なくてとなり　弄八月におはしたるなり
只九月なり　箋是は其忌月八月中は服なりさらは　私
九月におはせんと薫のおもへとも待遠なれはまつ
おはせしなり又の説嫁娶には九月を憚るなりされ
とも卅日か待とをなるゆゑに九月をもはゝからす
おはしたるなり　私
れいのやうにきこえんと　薫の大君へ宣ふなり一夜
のやうにとなり
心あやまりして　一夜の事にこり給へるなり　花姫
君のれいのやうに物へたてゝきこえんとあるを薫
の心あやまりしてわつらはしけれは姫君の又とか
く宣ひてたいめむなき事なり
御ふみにてきこえ給へり　秘薫宇治にて姫君の御方
へ申給ふなり弄
今はとてぬきすてゝ侍りしほとの　秘文の返事なり
除服ゆゑかなしみのいまさらのやうなるとなり
れいの人めしてよろつにの給ふ　弁尼にかたらひ給
ふなり
この君をのみたのみきこえたる人々なれは　秘薫を
人々のたのみたるなり箋
よのつねのすみかにうつろひ　箋にきはゝしき所の
すまゐなり
たゝいれたてまつらんと　箋薫をみちひきたてまつ
らんとおもふなり
ひめ君その氣色をはふかう見しり給はねは　箋人々
の薫をみちひきたてまつらんと思ふまてはしり給
はねとうちとくましき人々の心そとは思ひ給ふな
り
かうとりわきて人めかし　是は弁君を薫の別して懇
にし給へはうたかはしく大君のおほすとなり
むかし物かたりにも心もてやは　秘昔物語にも我心

とうちとくる事はなしとなり弄　秘小書に云　椎本巻に心より外に空の光み侍らんもつゝましうてはしちかうもえみしろき侍らぬときこえ給へは月日のかけは御心もてはれ〳〵しくもていてさせ給ははこそつみも侍らめと云々心もてやはとあり此詞他本にとある事もかゝる事もとあり青表紙の心ならは此椎か本の詞をむかし物かたりにも心もてやはとありとみるへきなり今案談之　私昔物語を見聞にも心とかろ〳〵しきためしはなしたゝさふらふ人のみちひきなとにてこそおもはぬ事もあれと人々の心を大君のうたかはしくおほして用意し給ふ心なり

せめてうらみふかうは　秘つよくうらみ給はゝ中君をさし出すへきとなり　私三本うらみふかうはと有たゝふかくはと同心なり

あさはかにはもてなすましき心なるを　薫の心の實々しきをいふなり

ほのかにも見そめてはなくさみなむ　秘薫中君にあひそめ給はゝかならすなくさみ給ふへしとなり弄

ことにいてゝはいかてかはふとさる事をまちとる人のあらん　花姫君の中君をと思ひ給ふとも薫の心にことにいてゝはふとうけふす（かふイ）事はあらしかたへの人々の思はんことをはゝかるへきゆゑなり　秘薫の心より中君にもとはえうちいて給はしとなり弄　箋中君をなりともと薫のおほすともいまはさはえのたまふましきとなり

うけひくけしきのなかなるは　承引のけしきなきなり

けしきをたにしらせ給はすは　秘中君のおほさん所を思ひ給へはなり　私中君にかやうの下心を知らせ給はすはつらくおほさんとなり

身をつみていとほしけれは　一夜の事にわか身にしられ給ふなり

うちかたらひて　大君の中君をかたらふさまなり

むかしの御おもむけも　秘大君の中君へ申給ふ詞なり　箋八宮のの給ひしさまをいひいたし給ふなり

御心をみたりしつみたにいみしかりけんと　姫君たちゆゑ故宮の御存生のときのおこなひのさまたけにもなりしとなりされはせめての給ひおきしすちを違へすこのまゝ世を過さんと思ふ心なる故に今

さら心ほそしとも大君の心には思はすと云なり
この人々のあやしう心こはき物に　箋さふらふ人々の大君異相なるやうに思ひ申となり
けにさのみやうの物と　河やうかましきといふ心歟かみの詞又所にしたかひて心得へし　秘おなしやうの物となり箋　花やうの物と云詞河海にやうかましき心にいへるこゝの詞はやうかましきかたへこゝろかなひ侍れと下の詞にさるへき人にもおくれ奉らめやうの物とありそれはやうかましき心にはかなひ侍らす又河海に上の詞により所にしたかひて心得へしといへり此註をはしかるへくおほえ侍るやうの物はたゝさやうの物といふ心なり上にいへる事につきたる詞なり手習巻にあやしくやうの物と有其外所々にみえたりかれこれをかよはして心得へきなり　私此詞あまた所に侍れと大略一様の物といふにかなへりよく／＼心をつけてみるへし
かゝる身のありさまも　大君のわか事をの給ふなり
いかにおほすにかと心うくて　秘中君の心なり箋
一所をのみやはさて世にはて給へとは　秘中君の詞大君はかりにかくてましませととりわき故宮のの給ひおきたるにかとなり箋同
はか／＼しうもあらぬ身のうしろめたきはかすそひたる　箋故宮の中君をはなほさやうにこそは覺しおきつれとなりとしなともわかく分別もなき心を中君の我との給ふなり
心ほそき御なくさめにはかうあさ夕に　大君の心はそくておはするなくさめにもかくてありてこそたかひのたよりにてもあれいかやうに中君をなしてなくさむはかりみたてまつりなさはやとはの給ふそとなり
けにといとほしうて　箋大君の心なり中君のの給ふさま尤そとなり
なほこれかれうたてひか／＼しき　秘大君の詞なりさふらふ人々のなにかと申ゆゑそといひさし給ふなり
うらみ給ふをことわりなるよしを　秘辨薫をことわりとなり
いかにもてなすへき身にかは　箋大君の心中なり
ひとゝころおはせしかは　秘父にても母にてもとな

り　箋父母のうちに一人となり
身を心ともせぬ世なれは　河後撰一いなせ共いひはなたれ
すうき物は身を心ともせぬ世なりけり　秘引歌同
し女の三従の事を引へし
みなれいの事にてこそは　箋親のし給ふ事は身のと
かにならぬなりこれは心とし出たる事と人かおも
ふへしそれに事おかしき事ありてはとなり
としつもりさかしけに　あるかきりの人はもとかし
けによさまなるやうにいひなすなりされとも心に
はさもおほさすとなり大君の心なり
人めかしからぬ心ともにてたゝ一かたにいふにこそ
はと　此人々は世間の體を一往におもひえたる心あ
さゝと見給ふからいよ〳〵その人のいふ事共につ
かんとおほす心のなきなり
とうせられ給はす　河不動なり
おなし心に何事もかたらひ給ふ中の君やは　大君の
心なり此事はいひかたらひにくきなり　大かたは
中君はなほ心もえ給はぬとなり
おくさまにむきて　私大君のさまなり
れいの色の御そにたてまつりかへよ　秘服衣をぬき

て常の色の御そをきせたてまつらんとなり　弄あ
ね君の事なり常の色の御そをきせたてまつらんと
て服衣をぬかせ奉るなり　箋吉服の事なり
かゝる御すまひのかひなき山なしの花のかれんかた
なかりける　河「世中をうしといひてもいつくにか
身をはかくさん山なしのはな　秘箋此歌をひけり
かくけせうにこれかれにもくちいれさせす　河顯證
也是はあらはれたる心なりかやうにあらはならす
いつともなく大君の心さけての事
この老人をのかしかたらひて　此老人とは辨君なり
此類の老人なとあまたあるへし
けせうにさゝめきてなとも　これもおなし心歟やう
たいあらはにさゝめきたる體なり又程もなくせは
き所なとにてきこゆるやうにさゝめきてといふ歟
然らは狭少の心歟如何
さはいへと深からぬけにや老ひかめるにや　弄さは
いへとゝは年よりたる人は遠慮なとあるへきにさ
もなくてあさく老ひかめる心しらひなりといへり
秘　河さはいへと老ひかめると云也　私辨君は前
に用意ありけりにかけりされとも此事にはかくかけ

り仍さはいへと老ひかめるといふなり

としころも人にゝぬ御心よせとのみ　箋大君の辨にの給ふ詞薫の風流かたならぬ心よせそと年來の給ひし故に今は萬にたのみ申てうちとけたるとなり

思ひしにたかふさまなる御心はへのましりて　今はかやうのすちにかけての給ふを云ふなり

世に人めきてあらまほしき身ならは　箋大君の世にあらんと思ふ心ならは何とて薫をさほとまていとはんするそとなり

されとむかしより思ひはなれそめにたる　されとも大君の我身をはよのつねならしと思ひはなれたるとなり

この君のさかりすき給はんも　中君なり

けにかゝるすまひもたゝ此ゆかりに　弄薫のとふらひ給ふによてなくさむとなり

おなしこと思ひなし給へ　箋中君を大君とおなしことにおほせとなり

身をわけたる心のうちは　中君をおなしことに思ひなしたまはゝわれも心をわけたるやうに思ひうしろみ心をそへんとなり

猶かやうによろしけにを　秘薫へ此趣を申へしとなり　箋その文字はたすけ字なり

いとあはれとみたてまつる　秘辨の君の詞なり

さのみこそさき／＼も　辨の詞なり

御けしきを見給ふれはいとよくきこえさすれと　大君のゝかれんとの御けしき見知申たれはさやうに薫へよく申せしとなり

さはえおもひあらたむましき　秘薫のかやうにの給へるとなり

又そなたさまにいとよくうしろみきこえんと　兵部卿宮御うらみふかけれは中君をはそれへ引合せまゐらせて薫のうしろみせんとなり

それもおそふやうなる　秘辨の詞なり

ふたところからおはしまして　秘父宮母北方なり箋

秘父宮母北方おはして心をつくし給ふともかくつとひ給はん事は世にありかたかるへしとなり二人の事をさしつとひ給はさらましといふなり

えしもかく世にありかたき御事ともさしつとひ給はさらまし　弄萬物さひしき事を世にありかたき體なりといへりされは君たち人の申たまふやうになひ

き給はゝありかたきかなしさはあらしとなり　私
此義あやまれり愚案の趣前に註す此義にて別に不
審なき事なり
かしこけれとかくいとたつきなけなり　秘　かたしけ
なき申事なれともとなり
のちの御事は　行末はしらぬ事めてたき御さいはひ
ともと辨の申なり
それはさるへき人のおはせすしなほとならぬ事也
箋　故宮の御遺言も似合たる人おはせすして受領な
といふなみの妻なとになり給ひてはとの御いまし
めなりしとなり
このとのゝさやうなる　弄　薫の事
一ところをうしろやすくみおきたてまつりて　箋　故
宮も此薫のさやうにもあらは姫君一人なりともま
つ心やすくみおかんはうれしからんとの御ねかひ
なりしとなり
それみなれいの事なめれは　おちふれてさすらふる
事はつねにある事なりそれも中々もときいふ人も
なしとなり
かくはかりことさらにもつくりいてまほしけなる

箋　薫匂宮の事はわさともこのみのまゝなる事とい
ふなりかくはかり殊更になり河海には籌策(ハカリコト)と註せ
りはかりことさらにもとよめりと見ゆあやまれる
歟
さりとて雲霞をやはさて(なさイ)　河　仙人雲霞爲ニ裳　文選　雲トメ
是淮王宅なといへり仙人の事なり　私詩松間寂々
無ニ烟火一可レ服ニ朝來一片霞一とも又云來時玉女裁ニ(見朗詠イ)
春服一剪ニ破湘山幾片雲一とも作れり是皆道士仙人
のさまをいへり
いとにくゝ心つきなしと　秘　大君の心なり
ひれふし給へり　河　蹀臥(ヒレフシ)
いとほしき御けしきかなと　大君の御さまをおほす
中君の心なり
うしろめたういかにもてなさんと　箋　辨をはしめて
みちひきなとせんかとの心なり
なよゝかなる御そ　弄　問云なよらかと同心也一勘和
の字の事歟
うへにひきゝせたてまつり給て　箋　中君に大君のき
せ給ふなり
またけはひあつき程なれは　秘　八月なれはなり　私

けはひあつきとはおもしろくかけり
すこしまろひのきて　弄姉妹同所にねたまひてすこしのきてなり
辨はの給ひつるさまをまらうとにきこゆ　大君の給へるさまを辨の薫に申すなり
いかなれはいとかうしも世を思ひはなれ　薫の大君の事をおもふ心なり　秘薫の詞なり　私詞にはあらす心中なり
いとゝわか心かよひておほゆれは　箋大君の世をいとふ心のふかきを薫も道心ある人にていよ〳〵あはれと心にしみてつれなきをにくゝも思はぬなり
さらは物こしなとにも　薫の辨にの給ふ詞なり
ひし〳〵とまきるゝおとに　格子の風に吹ならさるゝに人のけはひのまきるゝなり
おなし所にあほとのこもれるを　箋大君中君一所にね給へるをいふなり
ほか〳〵にもいかゝきこえん　別々にいね給へとも申されぬなり
たと〳〵しからすみたてまつりしり　薫の姉妹の差別をはよくしり給はんとなり

うちもまとろみ給はねは　大君のねもいらすしておはせしなり
何心もなくねいり給へるを　秘中君なり
いかにするわさそとむねつふれて　大君の心也中君の事を思ふ也　私一本に此つき（ついでイ）にむねつふれてかねて思ひわたる心もわすれておとろかしてもろともにかくれなはやと云々　三本にむねつふれてもろともにかくれなはやと云々とあり
あらまし事にてたにつらしと思ひ給へるを　秘大君の心なり中君を大君の教訓ありし時さへいみしき事に思ひ給ひしとなり箋
いまはさて山にのほり給ひし　秘故宮の事也　故宮のまします世ならましかはと思ひ給ふ故に思ひ出給ふなり　箋故宮のおはしましてゆるしたまふ心ならはかやうにはおもふへからすとなり
ひとりふし給へるを　秘大君のひとりふしたまへるかと心ときめきせしなり
心しけるにやとうれしうて　弄人々のかまへて姫君をひとりねさせけるにやと思ひ給ひしなり
あさましけにあきれまとひ　中君のさまなり

かくれ給ひつらんつらさの　大君のはひかくれ給へるかつらさなり
これをもよその物とは　秘薫の心なり
このひとふしは猶すくして　秘大君の心さしをさけすは口をしき事となり　秘只今中君へは心をうつさしとなり　弄中君に一夜逢ぬともとなり
こなたさまにならんも　宿世のかれすはつひには大君にあはんとなり
おい人ともはしそしつと思ひて　しそんしつるなり仕損しつとなり
中君はいつくにかおはしますらん　人々のしらてかくたされるなり弄
みたてまつるにしわのふる心ちして　河老皺　秘薫のさまをいへり何とてか大君のかくはいひのかれ給そとなり　箋薫のさまをみなめておもへるなり
おそろしき神そつきたてまつりたらんと　河能因歌枕に云人の中さくる神をはあらみさきといひ又あらみかけといふ荒神の事なり皇御孫尊此國にくたらんとし給ひしに諸國の荒神此國を領して螢火のかゝやくかことく五月蠅のさわくかことくつとひとよみけりまた草木岩石まてもみなものいふ此荒神をは大己貴神素盞嗚尊御子領し給ひしなり　世俗の諺に嫁すへき時過ぬれは神のつくと也　萬葉第二大伴安丸娉大納言巨勢人女歌に「たま葛みならぬ木にはち(もイ)はるふるかみそつくといふならぬ樹ことに
箋　箋人の嫁せん時分過ぬれは神か領して機かあらぬ物になることありと云々　弄萬葉歌にもおそろしき神なとよめり　私不審以上弄　又云女の嫁すへき時分過ぬれは魑魅なとの領して事をさまたくる事ありと云々　私云萬葉二大伴云々已下秘に同し　返し「玉かつら花のみ咲てみならすはたか戀にあらす我戀おもふを以上弄
はゝうちすきて　河歯透也
あふ人からにしもあらぬ秋のよなれは　河「なかしとも思ひそはてぬむかしよりあふ人からの秋の夜なれは　秘大君ならぬは本意ならねとこれも心のとまるをいへり　弄本意のあね君ならねと又中君にも心とまるにほとなくあけぬとなり　箋これは實事もなく又本意の大君にもあらねは逢人からといふへきならねと是もさすかに心のとまれるなり

人やりならすあかぬ心ちして　秘我心ひとつにて定へしとなり　薫の心まゝなる事をかくていたつらにあかし給ふは人やりならぬなり
いと心うくつらき人の御さまみならひ給ふなよ　秘あね君の事なり　薫の中君をいさめての給詞なり
のちせをちぎりていて給ふ　箋只のちといふ事なり
不及引歌
いとはつかしう思ひかけぬ御心ちに　箋中君の心なり
昨日の給ひし事をおほしいてゝ　秘別(前イ)によろつにうちかたらひてむかしの御ゐもむけも世中をかう心ほそう過しはつとも中々人わらへにかる〳〵しき心つかう我なとの給ひゐきしなとゝ教訓ありしもかやうの事の心かまへにてありけるとおほしよるへきとなり　箋昨日大君のゝ給ひし事なりかやうの心かまへにての給ひしと中君のあねきみをつらくおもふとなり
かへの中のきり〳〵すはひ出給ふ　秘大君壁のつらにかくれゐ給ふをいへり　河蟋蟀在壁月令遠レ壁暗蛍無レ限思戀レ巣寒燕未能歸　花姫君のかへのもとの屏風にかくれ給へるを蛬によそへていへる也　弄壁のつらにかくれ給ひしかいてたまふを蛬にたとへたり壁にある物なれはなり　箋此こと葉おもしろくかけり妙なり感せられしなり
おほすらんことのいと〳〵ほしけれは　中君のおほす心を大君の思ひやれるなり
ゆかしけなう心うくもあるかな　秘兄弟ともにかをるのみ給ふる事なり(中イ)
思ひみたれ給へり　大君の心中なり
あなたにまゐりて　箋薫へ辨君のあひて大君のつれなきをきゝあきらむるなり
きしかたのつらさは猶のこりある心ちして　秘薫の詞也　箋かねて思ひしは連々見馴給はゝおのつからそむき給はぬやうならんとおもひしかさやうにも有ましきよと今夜見さためたるとなり
身も(なイ)なけつへき心ちする　河「尋くる身(人イ)をしとはすはよさのうみに身もなけつへき心地こそすれ不レ可レ及二引歌一　箋引歌同
すてかたくおとしおきたてまつり給へりけん　花故宮の御心に姫君たちをのこしおき給ふ事を心くる

しくおほしめしてかをるにも御遺言ありし事を思へはさすかに又命もすてかたきとなり　弄落しおきては姉君の中君をおとしおきてにけ給ひしかは又それを薫の心くるしく思ふに一夜契しかは又ひたふるに身をもすてかたしと也　秘花鳥に故宮の御事と云々これも然るへし但これは大君の中君をすておきてはひかくれ給へるにて猶然るへし　箋故宮の姫君たちの事を薫にたのむとの給ひし事なりそれゆゑにさすか身もすてかたしと也　私雨義に付てこれを案するに花鳥の説うちむきて面白し秘に花鳥の義も可然歟と云々又箋には花鳥の義につけり但し又案するに弄花の義も理ありこの義ならはすてかたくふとしおきとは大君の薫の事をさすかすてかたく思ひて中君をれとしおかれたるを心くるしく思ふからさすか身もすてかたきといふ歟此次の詞に宮なとのはつかしけなく見え給ふをおなしくは心たかくと思ふかたそことに物し給ふらんとありこれは大君の心を薫の察するに匂宮なとへ御心のうつりて我をはかほとにいとひ給成へしさてしらぬかほにて中君をわれにゆつり給へるかとうらみたる心なり此詞にかけて見れは弄の義も然へき歟

かけ〳〵しきすちはいつかたにも　花かけ〳〵しきとは名はかりなる事なりいつかたにもとは兄弟なからとなりかけ〳〵しきすちは思ひはなれたるとなり姫君たちへ今より好色の心はあらしとなり今よりは世間むきはかりの體にておとつれもあらしとなり

宮なとのはつかしけなく　秘薫より匂宮は好色なれは姫君をもねんころにきこえかはし給ゆゑにそのかたに心のひくにやとうらみ給ふなり箋弄　花匂宮よりも姫君へきこえ給へは心たかく思ふかたは我よりまさり給へはそなたにそ心よせ給ふらんと心えはてぬれはかすならぬ身はとはつかしくおもひ給ふかとえんしての給ふ詞なり

ひめ君もいかにしつる事（身イ）そ　大君なり中君の事を心もとなく思ふなり

もしおろかなる心物し給はゝ　秘中君をよそにおもひ給ひてはとなり

うちあはぬ人々のさかしら　河近（進イ）心サカシラコヽロ日本紀　秘

さし出かましき心をいふ所によりてかはるへし
さま／＼おもひ給ふに御ふみあり　弄薫京よりあね君のかたへなり姉君の心に中君のかたへ後朝の文と思ひ給ひしとなり　秘薫よりあね君の御かたへ
文あり・・・・・
れいよりはうれしく　秘中君への後朝の文なるへしと大君の悦ひ思ひ給ふなり
秋のけしきもしらすかほに　花信明集「露はおけと我をるやとの萩の枝はかくこそ秋をしらすかほなれ　私おもしろくかけり薫のあね君にのみ心はそみてかた枝へはおもひうつる心なきよしなり
薫同し枝を分て染ける山姫にいつれか深き色とゝはや　古今河一おなしえをわきて木の葉のうつろふはにしこそ秋のはしめ也けれ　勝臣　花おなし枝は連枝の心におもひよせ侍りわきてそめけるは猶姫君に心はそめましたるよしなり　秘薫は大君にこそ心をそめたるを大君はしり給はぬさまなるを此枝のことくにあきらめ給へとなり又の義は匂と薫とは親類なるを連枝とはいへりいつかたにか心のひくとくはしく尋ね申たきとなり説々あれとも第一番の義可然なり　箋是は薫の心に匂へ御心のひくかとうたかひ給ひし行への御音つれなり　弄此歌も両意あり歌の句面は山姫の心はいつれにふかきなるらんこきうすき差別をうたかへり　一云薫の心はおとゝいの心連枝の事なり薫の心は姉君にふかきをしり給はねは兄弟いつれにかふかきとわき給へとなり又一云薫と匂宮と叔姪なるを同し枝といへり然るに姉君の心宮にやなひきたまふいつれかふかきととはゝやとなり是師説なり云々又分るをとはゝやといひ出したるなり
さはかりうらみつるけしきもなく　箋宇治よりかへり給ひし時はさはかりうらみたまひしかこのふみにはそのけしきをもみせぬとなり
そこはかとなくもてなしてやみなんとなり　秘大君の心なり　箋かやうに何となくして薫のさから・とすると思ふなり
きこえ給へとゆつらんも　秘後朝の文なれは中君のかきたまふへき中そとなり
さすかにかきにくゝ　私大君の心なり
返大君山姫のそむる心はわかねともうつらふかたやふかき

なるらん　花姫君の御返事なりうつらふかたは薫の中君にかたらひ侍ることをよそへてのたまふとなり　秘うつろふとは中君をいへりよのつねならは妬の心なるへしされと此歌は大君の心は中君をゆつる心ありてよめるなり　弄歌の心は色ふかくそめたるえたそ思ふかたなるらんとなり姫君の心はいつれともわかねとも薫の中君に逢そめ給ひしはとにそれそふかきなるらんとなり箋

ことなしひにかき給へり　秘無事になり弄　無爲コトナシヒ

えんしはつましう　秘薫の心なり大君をはつひにうらみはつましきとなり

身をわけてなとゆつり給ふけしきは　秘大君つねに中君をゆつり給ひし事なり

うけひかぬにわひて　箋薫の同心なかりし故に無理にかく大君のかまへたると思ふなり

はしめのおもひ　薫の本意は大君なり

とにかくに心をそめけんたにくやしう　むイ　姫君たちにかゝつらひそめしを後悔なり

世中をおもひすてんの心にみつからもかなはさりけりと　世をおもひすてなからさすかにかゝつらふ心をいへり

おなしあたりにかへす〳〵こきめくらん　河古「はり江こくたなゝし小船こきかへりおなし人にやこひわたるへき　いつまておなしやうに有へきそとおもひ給て三宮をすゝめたてまつりてまつ中君に（匂宮也）あはせたてまつりて一かたをさためんとたはかり（てイ）給ふなり　秘姉君妹君なとこなたかなたいひよらん事をなけき給ふなり　弄引歌云々以下秘に同し

箋引歌

兵部卿宮の御かたに　秘夜もすからおもひあかし給へる薫の心に中君をまつ匂宮にぬしつけて姉君ののかれなくして我本意をとくへしと案し出し給ふなり弄箋

三條宮やけにし後は六條院にそうつろひ給へれは

秘薫こゝに住給へり三條院とはとちかきなり　弄匂宮は内にも曹司ありとみゆ　私女三宮のすみ給ひしの内にも曹司あり又二條院も里なり又六條院三條宮やけて六條院のむかしの方に女三宮もうつろひ給へは薫も同前に住たまふへし匂宮の御さう

しもゐはれはほとちかくてゐほすやうなる御心ち
し給ひけりといへり
ちかうてはつねに參り　弄匂宮は二條院に里すみに
ておはしけり六條院にもおはしき
思ひつるもしるくおきおはしましけり　秘薫の推し
給ふにたかはさるなりかゝる有明の比はさためて
なかめれはしますへきとなり弄箋
風につきて吹くるにほひの　箋薫の追風なり
みたれぬさまにひきつくろひて　匂宮の用意なり
はしをのほりもはてす　弄階の中程なとにゐ給には
有へからすのほりてゐ給ふなるへし　秘馬道にて
の對面なるへし
うへになとも宣はて　箋月のさま庭の景なとを賞す
る故なるへし
かのわたりの事をも　私宇治の事なり
みつからの心にたに　薫の思ひさへいまたかなはす
と思ふ心中なり
さもおはせなんと　秘匂宮を中君にさためんとの心
なり
思ひなるやうのあれは　弄中君を匂宮にとかまへ給

ふはわか姫君に治定せんとなり
あるへきさまなと　宇治へおはすへきさまなとおろ
おろ薫の匂宮へ語申給ふなり
なほわつらはしかれは　薫のなほわつらはしきさま
に申さすなり
匂宮
女郎花さける大野をふせきつゝ心せはくやしめをゆ
ふらん　花古今「花にあかて何かへるらんをみなへ
しおほかる野へにねなまし物を　同「女郎花おほ
かる野へにやとりせはあやなくあたの名をや立な
ん　大野は名寄の未勘國に入たり　秘大野名所に
あらすひろき野といふ心なり　弄大野名所にもあ
り只大野といふ名所筑紫にも越中にもありこゝに
てはたゝ廣き野と心うへし　箋大野は只廣き野な
り宇治の姫たちを薫の我ものゝやうに領したるを
匂宮の心せはしといひゐとしたまふなり
返薫
霧ふかきあしたの原の女郎花心をよせてみる人そみ
る　秘薫の歌心さしのふかきひとならては見給ふま
しきとなり弄　箋此返しは誰もしめゆふ物はなき
なりされとも霧ふかきあしたの原のことく心をし
めて分入て見る人は女郎花をも見るなりたゝ大か

たの霧のへたてはかりをよそにおもふ人には此女郎花は見えしさなり匂宮の御心さしふかゝらぬさ薫のいひおとしたるなり
なへてやはなさねたましきこゆる　私云ねたましは人のねたむやうにこなたよりいひなすなり　河妬(ネタマシ)聞(キコユル)勵(ハゲマシ)きこゆるなり　箋大かたの心さしならはみちひき申ましきさなり　私女郎花につきてなへてやはさいふ引歌あるへき歟
あなかしかまし　花古「秋の野になまめきたてるをみなへしあなかしかまし花もひとゝき　遍照　秘引歌同　箋引歌の上句の心はいらすす薫の何やかやと我物かほに領して宇治の事をの給ふをあなかしかましと匂宮いゝ給ふ詞也されともをみなへしさ云より此歌にかゝれり　弄秋の野にの歌の心也
さしころかくの給へとも　秘薫の心なり　弄匂宮のさしころかくの給ふなり
人の御ありさまを　箋中君の事をいかならんと薫の思ひしなり
何事もくちをしうは　秘中君の何事も然るへきをいへり

うち／＼に思ひたはかり給ふ　大君の中宮へゆつらんとし給ふ心なり
御はたえ(ヘイ)あらたむましう　秘薫の心はあね君ならてはさなり弄
ゆつりきこえていつかたのうらみをも　秘中君をは匂宮にぬしつけはあね君のうらみもあるましきさなりかほるのこゝろかまへなり弄箋
心せはうとりなし給ふも　秘薫の下心をはしり給はさるなり　花薫の忍ひてかよひ給ふ事をは匂宮しり給はて心せはくしめをいふらんとの給ふをおかしと思ひ侍るなり
れいのかろらかなる御心さまに物思はせんこそ　秘匂宮の御心のかろ／＼しきを薫のゝたまふなり弄私中君に物おもはせんはくるしきさなり箋
おやかたになりて　行すゑまての事をおやかりて申給ふなり
よ(しイ)くみ給へはより(かはかりイ)心にとまる事　匂宮の詞箋　匂宮の薫にの給ふなり心のとまるならてこそ心もおほき事あれさなり
かの心ともにはさもやと　秘薫の詞なり姫君たちの

心に匂宮の心を眞實ならんとは思ふましきとなり
つかうまつりにくきみやつかへを　匂宮の御心もうたかはしくあなたにも承引ありかたかるへしさてむつかしき御なかたらそこ薫の申なす詞なり
おはしますへきやう　宇治への道すからなとやうの事なり
廿六日ひかんのはてにて　弄 時正なれはよき日とす　秘 時正ともいひ天正ともいひて吉日也　箋 彼岸時正とてよき日にとるなり乙女卷六條院造畢の後移徙定も彼岸なりき
忍ひてゐてたてまつる　箋 宇治へ匂宮を薫の誘引なり
きさいの宮なときこしめし　匂宮の御母明石中宮なり
ふなわたりなとも所せけれはこと／＼しき御やとりなともとりたまはす　花 匂宮はつせまうての時は舟わたりして始て夕霧のおとゝの領し給ふ所に中やとりをとり給ひしをそれもこと／＼しけれは橋よりこなたに薫のしり給ふ所に宮をやとしたてまつり給ふなり箋　秘 此宇治宮は川のこなたなり舟わたりすへきにあらされと匂宮をはあたなる所にはやとし申かたしとて川よりこなたに然るへき家を尋てやとし給ひたるなり弄
宮をはおろしたてまつり給ひておはしぬ　匂宮をは中やとりにおきまいらせて薫は宇治の宮へおはしぬるなり
みとかめたてまつるへき　秘 宇治宮のさまなり
とのゐ人はわつかにいてゝありくにも　匂宮を薫のくしておはするとも人もとかむましけれとも此とのゐ人にもしらせしとなりと云なり草子地歟
けいめいしあへり　花 經營なりいとなむ心なり
君たちわつらはしう　箋 姫君たち薫のおはしたるをむつかしく思ひ給ふなり
うつらふかたことにゝほはしおきてしかはと　秘 大君は中君にゆつりてこゝろやすしとおもひ給へり
中の君はおもふかたことなめりしかは　弄 薫はあね君にとおもひさため給ふとなり　薫の心は大君より外には心もうつるましきと思ひ給へは中君は心やすくおほしたるなり箋
うかりし後はありしやうに　大君の心しりにて薫を

みちひき給へるにやと中君はうらめしく思ひ給ふゆゑなり　箋大君の薫へ中君をひきあはするやうにしたまひしと中君の心なり

何やかやと御せうそこのみ　秘大君へかほるの申給ふなり　箋薫の匂宮の事を何やかやと調略し給ふ體のみゆるを不審におもふさまなるへし

こゝもとにたゝ一こときこえさすへき事なん　秘薫の詞中君へ一言申度事のあるとなり　私此義如何此は大君への事なり

おほしはなつさまみたてまつりしに　秘大君は薫を見はなち給へは面目もなしと也ひたやこもりは無意趣なり　私大君の御らんしはなたれたるをはよくおもひしりたれともひたやこもりにてはやみかたしと一言申たき事ありとなり

ひたやこもりにては　弄無意趣なり箋

えやむましきを　これまては大君へ今一言申たき事あるとの薫の詞なり

いましはしふかしてをありしさまにはみちひきたまひてんや　薫の中君のかたへ忍ひまゐらんと人々にの給ひてまことには匂宮をいれ奉らんとかまへ給ふなり

いつかたにもおなし事にこそはと　秘辨の詞なり　花あね姫君もおなし事と辨か思ひたるなり箋

さなんときこゆれは　秘大君へ申なり

されはよ思ひうつりにけりと　秘大君の心也　箋薫の中君へ思ひうつり給ふと大君の心やすく思ふ也

かのいり給ふへき道にはあらぬひさしの　花中君のかたへかよふへき道にはあらぬ障子をさして姫君まつ對面し給ふなり　秘中君のかたへ入給ふへき道ならぬかたにて大君薫に對面あり弄

ひとりこときこえさすへきか　秘薫の詞也

いとよくきこえぬへしとそ　大君の詞なり

いまはとうつろひなんをたゝならしとて　中君へうつろはんとてたゝならんよりは何とそ一言もいふへきにやなと大君はおほすなり

人にくゝいらへて夜もふかさし　箋いらへてのてもし濁るいらへをもよくして薫の心をとりて中の君のかたへみちひきやらんとの大君の心なり

さうしの中より御袖をとらへて　花障子のしりをさしていさゝかあけあはせて物なとの給ふにや　秘

障子のはさまなり　弄さうしのはさまなとにや
いとうたてもあるわさかな　秘大君の心なり
こしらへていたしてんと　箋人をすかしなたむる心なり　弄あね君の心に薫を中君のかたへいれ奉らんとてなり
こと人と思ひわき給ふましき　秘中君をもうつろひ給ひてよとなり　弄中君をもおなし事なりとかほるにゆつり給ふなり
宮はをしへきこえつるまゝに一よのさくちによりて　秘匂宮は薫のをしへのまゝに入給へる也　箋匂宮の薫のまねをして中の君のかたへかよひ給ふなり辨君もこれまては薫と思ひて引導せるなり箋
さき／＼もなれにける道のしるへ　秘匂宮の御心（らひイ）なり　弄薫のかやうに忍ひ入給ひしになれて人々のみちひくと匂宮の思ひ給ふなり
ひめきみはしりたまはてこしらへいれてんと　姫君はかやうにたはかるをはしり給はて薫を夜のふけぬさきに中君のかたへこしらへいれんと思ひ給ふなり　秘大君なり匂宮の御事をはゆめにもしり給はさるなり

おかしうもいとほしうも　秘薫の心なり
うち／＼の心もしらさりけるうらみをかれんも　箋匂宮の事をかつて大君へしらせ申さぬを後にうらみ給はんさなり
宮のしたひ給ひつれは　秘薫の詞也
このさかしたつ人や　秘辨なり
なかそらに人わらへに　秘薫の我身の事なり
いますこし思ひよらぬ事のめもあやに　秘大君の心なりめもあやにはおさろかるゝなり　弄目もおよはぬなとの心なりはむるかたの詞にもいふ詞なり
おとろき給ふなり
かうよろつにめつらかなりける御こゝろのほとをしらて　秘大君の詞也　私かく色々の御心かまへある人をしらて心やすく（あさくイ）うちとけたるからおほしあなつるにこそと薫を大君のうらむるなり
いまはいふかひなしことわりはかへす／＼きこえさせてもあまりわらは　秘薫の詞なり　とりかへされぬことなりことわりをは随分もうすへしそのうへになほ薫にとかあらはつみひねりもせさせたまへとなり

やんことなきかたにおほしよるめるを　秘大君は匂
宮を心よせにおもひ給へとも匂宮の御心さしは中
君にと覚しめすとなり宿世はせんかたなき事とね
たみいふなり弄箋
御こゝろさしはことに　弄匂宮の中君をと思ひ給ふ
となり箋
いとほしう思ひ給ふるに　大君の心をかをるのいふ
詞也
かなはぬ身こそおき所なく　薫のおもひはかなはぬ
事をいふなり
なほいかゝはせんにおほしよわりぬ　秘宿世せんか
たもなしさたゝ我かたになひき給ひねかしとなり
箋大君におほしよわれりとなり
このさうしのかためはかりいとつよきも　箋人々も
かやうにへたてゝあるとは思ふましきとなり
しるへといさなひ給へる人の御心にも　花匂宮の御
事なり秘　箋匂宮の薫をしるへにたはしたるをい
ふなり
こしらへんと思ひしつめて　弄薫をたはかりてのか
れんとなり　秘すかしやるへしとなり

此のたまふすくせといふらんかたは　秘大君の詞な
り　宿世なとゝの給ふ事は何共かつて分別なきと
なり
しらぬなみたのみきりふたかる　秘後撰別「ゆくさ
きをしらぬ涙のかなしきはたゝめのまへにおつる
なりけり　箋引歌同　弄云永正七八九勘附
むかし物かたりなとにことさらにおこめきて　箋虚
言めきての心なり　私事おかしくつくりなせるや
うにといふ歟
かうおほしかまふる心のほとをもいかなりけるとか
は　箋薫のかくさま〳〵(思しイ)事をたくみたまふを匂宮も
いかやうにかをしはかり給はんとの大君の詞なり
心うくなとりあつめまとはし給ふそ　薫の今夜のく
はたてをこと〳〵しくかこちなして我心もまとへ
りうつし心もなしなといひのかれんとの事なり
さすかにことわりを　秘薫の心なり
心はつかしうらうたくおほして　箋此處薫の本性な
り
あか君御心にしたかふ事のたくひなけれはこそ　か
やうにたひ〳〵の給ふまゝなれはこそいまゝてか

くうさ/\しくてあはれさ薫のゝ給ふなり 箋あまり大君の心にしたかふ事をいふなり

ゆめ/\ときこえて 努やこれよりみたれたる事はあらしとなり

山鳥の心地して 河「足引の山鳥のおのしたり尾のなか/\し夜をひとりかもねん人丸 尾をへたつる心歟 花六帖「雲のゐる遠山鳥のはつかにもありさしきけはわひつゝそぬる 同「あふことは遠山鳥のめもあはすあはすて今夜あかしつるかな 箋なか/\しよをひとりかもねんのこゝろもあり

れいの明ゆくけはひに 秘こりあつめたる朝ほらけなさよめる時の心なりさてれいのとはいへり 秘山鳥はひとり/\ぬるなり弄箋

いきたなくて出給ふへきけしきもなきよと 秘匂宮の御さまなり薫のこわつくり給ふなり 匂宮の事

薫のとはつくり給ふなり 薫の姫君にむかひてなり匂宮のかたに程なき所にてなり

薫 しるへせし我やかへりてまとふへき心もゆかぬ明くれの道 花拾「あけくれの道にそ我はまとひぬる思ふ心のゆかぬまに/\ 今案此歌はかほるの姫君にきこえ給へる歌なり 秘薫の歌なり人のしるへをせし身にて我身はかへりてまとへる事よとなり

明くれの道はまよへるかたをいへり

返大君 かた/\にくらす心を思ひやれ人やりならぬ道にまとはゝ 花姫君の返歌なりひとやりならぬはあか心からといふ心なり古今の歌に人やりならぬみちならなくにといふ歌あり 秘大君の歌なり中君の事をも思ひ又わかなけきをもかた/\とよめり此物思ひはみな薫の心よりのしわさなりさやうの所をもよく思ひしり給へとなり 弄姉君の歌なり中君の事をもおもひ又わかなけきをもかた/\とよめり 箋かた/\とは中君の事と又大君をいひなやまし給ふ事なり心もゆかぬ明くれにまとふと薫のよめる故にさらはわか心をくらすをも思ひしり給へとなり

ほの/\と明行ほとによへのかたより出給ふなり 花是よりは匂宮の事なり 秘匂宮なり箋弄

いとあやしう心えかたけれと 薫は大君のかたにおはするゆへ不審するなるへし匂宮の事をはたれたれもしらぬ事なり

あしさまなる御心あらんやはと　薫の心をたのむなり
道のほともかへるさはいとはるけう　秘匂の御心なり　私中君に御心のとまれるさまよくきこえたり
夜をやへたてんと　河「わか草のにゐたまくらをまきそめて夜をやへたてんにくからなくに　秘引歌同弄秘引歌箋に同
らうに御車よせて　秘六條院の廊なり弄
ことやうなるをんな車　箋后の乗たまふへきならぬ網代車なり
みなわらひゐて（給イ）　箋薫や匂宮なり
れろかならぬ宮つかへの　秘薫匂宮へ随分の奉公なるとなり
しるへのゐこかましさをは　秘我身のひとりねにてあかしたる事をは申給はさるとなり　弄薫の匂宮をみちひきなからわれはあねきみともちきり給はねはをこかましきなりそれを匂宮にもうれへ給はぬなり　箋薫の心なり
宮はいつしかと御ふみたてまつり給ふ　箋匂宮宇治への後朝の文なり

山里にはたれも〳〵　姫君たちなり
さま〳〵におほしかまへけるをいろにも出し給はす　中君の心なり大君の薫に心をあはせてし給へるとおもふなり
しらさりしさまをもさは〳〵とは　大君の心なりわれしらぬよしをもいひわけかたくてをはするなり
おほしほれたるやうにてたのもし人のゐはすれは　花たのもし人はあね姫君の事なりあね君なり
れきあかり給はねは　中君なり
（匂宮）尋常に思ひやすらん露ふかき道のさゝはらわけてきつるも　秘はるけき道をわけこしはなほさりならすとなり　箋たゝうちむきたるうたなり
大かたにつけて見給ひしは　秘大君の心さき〳〵なほさり事のやうにて御ふみを見しを今はこのまゝにてわすれ給てはうしろめたき心のそひけるとなり箋
われさかし人にてきこえんも　秘さき〳〵は大君のかはりて返事し給ひし事なり
せめてかゝせたてまつり給ふ　中君へおしてかゝせ給ふなり

しをんいろのほそなかひとかさねにみへかさねのはかまくして　秘御使の祿なりけふはしめてあらはしたまふ故なりみへかさねとはうらおもてありて中倍ある袴なり　河中倍ある袴なり　弄問云みへかさねいかやうなる體そや　一答うらおもてありて中へ入たるをいふなり

つゝませてともなる人になんおくらせ給ふ　花ふくろをはつゝみともいふ也　箋是は忍ひたる事なる故に御使のくるしかれはかやうにつゝませて給へるなりつゝませは衣つゝみの事なり今の世の袋はそれをにせたる物なり

うへわらは　箋童殿上したる人なり

よへのさかしかりし老人の　花かつけ物の事辨君のしわさとおもひ給ふなり　秘祿をたまへる事なり匂宮無用の事とおほすなり

そのよもかのしるへ　秘文たてまつる夜なり　箋薫を匂宮の宇治へさそひ給ふなり

すさましけに世をもてなすとにくゝおほす　薫をさそひ給へるさはりを申給へはなり　私薫の世の事にそまぬさまなるをいふなり

いかゝはせんほいならさりし事とて　秘宇治宮なりしたまちたまへるなり　かねてしりたまはぬ事とて打もおかれぬなり

はるかなる御中道　箋宇治の中道はこれなり

うれしきわさなるそかつはあやしき　秘こよひは悦ひ給ふなり

さうしみはわれにもあらぬさまにて　中君なり大君のつくろひ給ふなり

こき御その袖のいとゝいたうぬるれは　紫にもおほくいへりこれは紅なるへし

さかし人もうちなきて　秘大君なり箋

世中に久しくもと　秘あね君の詞也

はか／＼しうもあらぬ心ひとつをたてゝ　秘大君の心ひとつなり

かうてのみやはみたてまつらんとおもひなるやうもありしかと　私是は薫へ中君をやとおもひしなり匂宮の事は中々おもひかけぬ事そとなり

すこしおほしなくさみなんにしらさりしさまをも　中君の心のすこしおちゐたらん時大君のしらぬさまをいひあきらむへしとなり我身しらぬよしを申

さは其分にてもおき給へとなり
にくしとなおほしいりそつみもそえ給ふ　秘あねなれはおやの心なれは罪もこそうれとはいへり　弄中君の心にあね君をうらみ給ふへき事をつみといへり
いらへもし給はねは　箋中君のさまなり
あしかれともおほしおきてしを　中君の心大君のあしかれとはおほさしと領納し給ふなり
人わらへにみくるしき事そひて　匂宮のかよひ給ふ事にいよ〳〵心を大君のつくし給はむとなり人わらへにとは匂宮の好色を中君のしる故なり
さる心もなくわきれ給ひし　秘匂宮の心にしめ給へるをいへり中君の事匂宮のはしめてあひし夜は何の用意もなかりしなり
よのつねになよひ（たへ給ィ）給へるは御心さしもまさるに　中君のひきつくろへるさまなり御心さしは匂宮の御心さしのまさるなり
あはれともいかにとも　秘中君は何とも思ひ給はすとなり
いひしらすかしつく物の姫君も　秘公界の事なり

いゑにあかめきこゆる人こそなけれ　秘此宇治の宮になり
あやしうゐなかびたらん　中君の心中なり
さるはこの君しもそ　秘中君なり
三日の夜はもちひなん　箋惣巻にありし事なり
おまへにてせさせ給ふ　秘大君のまへなり
このかみ心にやのとかに　秘まへにはさるは此君しもそといひて中君をほめたりこゝには此かみ心にやといひて大きみをほめたるなり
みやつかへのらうもしるしなけなるよに　秘奉公の労なり
こよひはさうやくもやと　河雑役也　私三日の夜にて餅参るへけれは雑役とはいへり
とのゐ所のはしたなけに　箋一夜の事をうらみたるなり外様むきなるをいへり
みちのくにかみに　みちのくのまゆみのかみといへり檀紙なり引合を用る事は中古よりの事なり云々
おひつきかき給ひて　花文のうへひとしくかきたるをいふなり　秘ちらしなともせさるなり　弄ひとしく書たる文なり箋

みそひつあまたかけこにいれて　花御衣櫃懸子なり
弄あまたかけこ歟
宮の御かたにさふらひけるにしたかひて　秘女三宮の御かたに所有の分なり弄箋　母女三宮へは薫のかくし給ふさま歟
たゝなるきぬあやなと　秘染もねりもせさるなり
御れうとおほしき二くたり　秘大君中君のれうなり箋　二くたりとあるは姉妹のためにと覚したるなり
薫小夜衣きてなれきとはいはすともかことはかりはかけすしもあらし　花此かことはいさゝかの心なり薫の中君に實事はなかりしかとも物いひたりし事をいへるなり　花鳥には中君のことゝありされともこれは大君のかけはなれてあつかひ給ふをいへる義然へし　弄姉君のかけはなれ給ともかことはかりかけいてはとなり大君も中君も實事はなけれともそひふしをはいつれもしたることをいへりと云云
おとしきこえ給へり　いひれとす落字の心歟いひ威チトスの心なり

こなたかなたゆかしけなき　秘兄弟なから薫の見給し事なり
御つかひかたへはにけかくれにけり　秘御使かつけものなとあるへき心つかひ成へし　弄引出ものなとあるへけれはさやうならてかへるへきよしをいひつけられけるにや又使の心つかひしける歟なり禄をかけしとの心つかひなり薫の文も後朝めきたる事なれはかくあるにや
返大君隔なき心はかりはかよふともなれし袖とはかけしとそ思ふ　秘心にはへたてなくともなれし袖とはいひかたしとなり歌はみえたるまゝなり
心あはたゝしく思ひみたれ給へる　秘ありのまゝに思ふすちをいひのへたるをいへり草子地の評なり歌はいかなる時も心つかひあるへしとなり
まち見たまふ人はたゝあはれにそ　秘薫なり箋　かをるは是をもあはれに見給ふそとなり
宮はその夜内に參り給ひて　秘三日の夜の事なり弄私匂宮參内の事ありとなり
御心もそらにて　匂宮の御心中なり
中君なほかくひとりおはしまして　秘匂宮を明石中

君の御教訓なり弄
何事も物このましうたてたる心なり　秘一切の事なりわかこのむ所をたてゝするはあしき事と母の御詞にて然るへしかくの給ふうちに好色もこもれるなり　弄好色の事をの給はんとてその事となくをしへ給ふ幽玄なり　箋これはあれこれ匂宮へむすめをまゐらせんとあれとも匂宮の事このましくて御承引なき事なり
うへをうしろめたけに　秘主上なり
いとくるしとおほして　秘匂宮なり
御ふみかきてたてまつれ給へる　匂宮宇治へふみはかりやり給なり
そなたの心よせとおほせは　箋薫は宇治の心よせの人なり
れいよりうれしうて　匂宮の心なり
いかゝすへきいとかうくらうなりぬめるを　匂宮の詞宇治への事を薫へかたらひたまふなり
よく御けしきをみたてまつらん　秘薫の心に匂宮のおほしめす御心のほとをしらんとてなり
ひころへてかうまゐり給へるを　秘日來をへて參內ありてとなり　匂宮のたま〳〵參內ありたる事なり　薫の詞なり
よろしからぬ事にやれはしきこえさせ給はん　明石の中宮の御心を薫の申給ふなり
たいはん所のかたにてうけ給はりつれは　秘女房達のさふらふ所を臺盤所といふなり　明石の中宮の匂宮を御教訓の事なり
わつらはしき宮つかへのしるしに　秘奉公もかへりて不忠なるへしとなり　私此宮つかへの樣體もわつらはしくと前に薫のゝたまへる事ありし剩明石中宮より御勘當あらんとなり
かほの色たかひ侍りつる　私迷惑して赤面したる心なり　箋心の鬼そとなり
いときゝにくゝ　秘匂宮の詞なり　中君（宮イ）のあまりこと〳〵しくのたまへともさせる御とかもなし人の申なすなるへしとなり
所せき身のほとこそ　御身のおも〳〵しきをおもひわつらひたまふなり
いとほしうみたてまつり給て　薫の心なり
おなし御さわかれにこそ　箋さわかれもてさわく心

なりおなし御さわかれとは京と宇治との事なり三日の夜なるにおはせすは宇治におもひなけき給ふへし宇治へおはしたらは中宮のたつね給ふへきをおなし御さわかれといふなり

こよひのつみにはかはりきこえさせて　薫の今夜のつみにはかはらんとなり前の詞に中宮の御腹立にて迷惑したるやうに申給ひしは匂宮の御心をよくみんとの薫の心なりさて匂宮の眞實おほしわひたる所みゆれは今は又匂宮へちからをつけて宇治へ御供申さんとなり

こはたの山に馬はいかゝ侍るへき　河　萬（古イ）「山城のこはたの里に馬はあれと君を戀つゝ（かちよりそゆく君をこひつゝイ）かちよりそゆく　花　薫の夜もふけたれはたゝ馬にていてさせ給へと申給ふ心なり　秘宇治の道なれは馬といはえためなり箋　馬にていたりたまはむはいかゝ侍るへきと申給ふなり馬も不可然歟猶かくれあらしなと憚るなりつねに人にいふ詞にいかゝとうかゝふ事あり此詞與あり

いとゝ物のきこえやさはり所ならんと　秘我といひ出して又我と然へからさる事と申さるゝなり常に人のいへる事に此類ある事なり

御ともにはなか／＼つかうまつらし　秘薫の詞なり

君はうちにさふらひ給ふ　弄薫の事なり　私匂宮の代に薫はそのまゝ内におはするなり

中宮の御かたまゐり給へれは宮は出給ひぬなり　秘明石なり　宮とは匂宮なり　薫の明石中宮へ參り給ふ人は匂宮の事をの給ふなり

うへきこしめして　主上　今上なり

いさめきこえぬか　いさめきこえぬが　か文字濁なり匂宮を明石中宮のいさめ給はぬはいふかひなき事となり又はか文字を淸（スム）義もありいさめきこえぬかと句をきりていふかひなきとよむなり濁てよむを猶用へき歟

あまた宮たちのかくおとなひ　秘明石中宮のいまたわかくおはしますなり明石中宮の宮たちあまたおはしませともとなり

大宮はいよ／＼　弄明石中宮なり

女一宮もかうそおはしますへかめる　秘女一宮の御あたりちかくさふらひたきとなり薫の心なり御母中宮へ思ひよそへたるなり

すいたる人の思ふましき心つかふらんも　かやうに
らかやかなる物から遠きへたてのある事にこそす
いたる人はあるましき事もあるらんとなり
それをたに猶うこきそめぬるあたりは　秘薫のわか
實法なるさへ宇治にはこゝろのとまるとなり箋
ここさらにみえしらかふ人もあり　中宮の御かたに
さふらふ女房達なり薫にわささみえしらかふもあ
る也　中宮の御かたの女房の中に薫に心をかけな
とするもあるなりそれをみえしらかふといへり
もてしつめ給へるあたりなれは　中宮の御かたの人
人よくもてしつめたるうちにも下心ほのすきたる
もあるとなり明石中宮のあたりの大かたのさま心
にくゝもてしつめたるなりされとも下にはほのす
きたるもみゆるとなり
心々なる世中也けれは　花六帖「よの人の心々に有け
れは思ふもつらしうきはたのます　箋大集經の文
に可レ令下二一切衆生心一同上是はあるましき事のた
とへにさけり世中の人のおなし心なるはなきこ也
たゝつねなきありさまを思ひありき給ふ　薫の世を
つねなき物に思ひ給ふなり

かしこには　宇治の宮なり
中納言殿のこと／＼しけに　秘今夜は雜役もやと思
ひ給ふれとなとの給ひし事なり
御ふみのあるをされはよと　匂宮のふみあるにてお
はせしと宇治にはおほしてむねつふるとなりさて
あさよりおはしたるなり
あらましき風のきほひに　道もさわかしからんに一
しほまちよろこひ給ふ心あるへしこれは大君さふ
らふへしの心なり
さうしみもいさゝかうらなひきて　箋中君なり
いみしうおかしけにさかりとみえて　中君なり
さはかりよき人をおほくみ給ふ　匂の御目にも然へ
く思ひ給へり箋
さかり過たるさまともに　秘こゝにめしつかひ給へ
る女房たちなり
あさやかなる花の色々につかはしからぬをさしぬひ
きつゝ　秘きぬともなり　花きぬの色々をいふなり
箋これは薫より參りたるをみな／＼たちきてにあ
はぬさまを大君のおほすこゝろなり
つみゆるされたるもなきを　箋大君の心にこれはな

ほさりなると思ふさへなしといふ事をつみゆるさ
れたるもなしとはいふなり
われもやう〳〵さかり過ぬる　箋大君の身上の觀念
なり惣別にかをるよりも年の過たるなりなとかた
かた心つよくて過したるなり
この人とも〻われわしさやは思へる　秘我も我もと
わかすかたをは思ふ物そとなり　大君の心たくひ
なし　箋此さふらふ人々我も我もと思へとも大君
の心にはみにくきなりされは大君をも人のさ思は
んと思ふ心のあるなり
うしろではしらすかほにひたひがみをひきかけつ〻
私しらすかほにひたひかみ然るへきかうしろては
しらす顔にひたひかみを歟初の聲可然歟　花仲文
集に中宮の内侍のすけ宣旨なと尼になりたるかそ
とに「かまへつ〻までもありつる世をそむくうし
ろてともそ思ひやらる〻　返し「そむきぬるうし
ろてよりも極樂にむかへん君かかほをこそおもへ
以下四十四行重出
花「薫のよそ更たれはた〻馬にて出させ給へと申
給ふ心也　花宇治の道なれは馬といはんため也箋
或馬にて至り給はんはいか〻侍るへきと申給ふ也

馬こふ可然歟猶かくれあらしなとは〻かる也常に
人にいふことはにいか〻とうか〻ふことあり此詞
奥にあり
いと〻物のきこえやさはり所なからんと　秘我とい
ひ出して又我と然るへからさる事と申さる〻也常
に人のいへる事に此類有事也
御ともは中々つかうまつらし　秘薫の詞なり
君はうちにさふらひ給ふ　弄薫の御事也　私匂宮の
代に薫はそのま〻内におはする也
中君の御かたまゐり給へれは　宮は出給ひぬ也明石
也宮とは匂宮なり　薫の明石中へ參給へは匂宮の
事をの給ふ也
うへきこしめして　主上今上なり
いさめきこえぬか　いさめ聞えぬかのか文字濁也匂
宮を明石中宮のいさめ給はぬはいふかひなき事と
也又はか文字を清義も在いさめ聞えぬかと句を切
ていふかひなきと讀也濁て讀を猶用へき歟
あまた宮たちのかくおとなひ　秘明石中宮の末若く
おはします也　あかしの中宮の宮たちあまたおは
しませともと也

大みやはいよ〳〵　弄わかしの中宮也

女一宮もかうそおはしますへかめる　秘女一宮の御あたりちかくさふらひ給ふと也薫の心也御母中宮に思ひよそへたる也

すいたる人の思ふましき心つかふらんも　かやうにちかやかなる物から遠きへたての有事にこそすいたる人はあるましき事も有らんと也

それをたになほうこきそめぬるあたりは　秘薫の我實法なるさへ宇治人には心のとまると也

ことさらに見えしらかふ人も有　中宮の御かたにさふらふ女房達の中に薫に心をうけなとするも有也

それを見えしらかふといへり中宮の御方にさふらふ女房達也薫にわさと見えしらかふも有と也

もてしつめ給へるあたりなれは　中宮の御かたの人よくもてしつめたるうちにも下心ほのすきたるも有と也明石中宮のあたりの大かたのさま心にくくもてしつめたる也されとも下はほのすきたるも見ゆるとなり

心々なる世中なりけれは　箋大集經の文に可令一切衆生心同是は有ましき事のたとへに説り世中の人の同し心なるはなきと也」

目めもはなもなほしとおほゆる　河直なりほめたる詞なり

はつかしけならん人にみえんことは　大君の心中なり　薫の事を思ふ歟

宮はありかたかりつる御いとまのほとを　今夜はおはしましかたかりつれはなり

大君のきこえ給ひしさまなと　秘明石中宮の宣ひし教訓の事なとかたりたまふなり

思ひなからこたえあらんを　匂宮の中君にきこえしらせ給ふ事なり

ゆめにてもおろかならんに　夢ほともとなりそとの事なり

身をすてゝなん句をきる　今夜なとはあるましき事をおはしたるよしなり

つねにかうはえまとひありかし　平生かやうにはありかたしとなり

ちかうわたしてんと　京へわたしたてまつらんとなり

たえまあるへうおほさるらんは　秘中君の心なりか

くたえま有へきさまにの給へるは匂の色らしき御こゝろにての給ふかと思へるなり
さま〳〵物なけかしくてなん　中君の心なり
柴つむ舟のかすかにゆきかふあとのしら波　河「世の中をなにゝたとへん朝ほらけこきゆく船の跡のしらなみ滿誓　箋引歌同秘弄不引之
いつきすへたらんひめ宮も　弄明石中宮腹の一品宮の事也　秘女一宮なとなり　私是は一品の宮なり
思ひなしのわかゝたさまのいとといつくしきそかし　秘后腹なとの思ひなしにやとなり　私匂の心にわかゝたさまの思ひなしとれほすなり
中々なる心ちす　箋中君をほめたるなりこまやかにみまほしき心はまさりたるなり
水のおとなひなつかしからす　宇治川のあらましきなり
うち橋のいと物ふりて　帝王系圖曰孝德天皇二年道登法師始造宇治橋　今案道昭和尚同人歟　「ちはやふる宇治の橋もりなれをしもあはれとは思ふ年のへぬれは　宇治橋石上銘曰　私勘載之　沉々横流　其疾如箭　滌々征人　停騎成市　欲超重深（渫イ）人馬亡命　從古至今　莫和枕（杭イ）葦　世有釋子　名曰道登　出自山尻　惠滿之家　大化元年　丙午之歲構立此橋　濟度人畜　即因微善　爰發大願　結因此橋　成果彼岸　法界衆生　普同此願　夢裏空中導其昔緣
霧はれゆけはいとゝあらましきみねのあたりを（わイ）　箋「朝ほらけ宇治の川霧たえ〳〵にあらはれわたるせゝのあしろき實賴　此歌のおもかけ有と云々
をとこの御さま　箋匂宮なり　中君の心に思ふ事なり
かれはおもふかたことにて　秘薰なり箋
よそに思ひきこえしかは　秘匂宮の事なり箋
御返事たにつゝましう　箋匂は好色風流たちてはつかしうつゝましからんと思ひしかさやうになきとなり
とたえたまはんは心ほそからん　箋つゝましく思ひし心もひきかへてとたえあらんはいかならんと思ふ中君の心なり
京におはしまさんほとはしたなからんはとにて　箋白晝ならぬやうにとなり

匂宮
中絶む物ならなくに橋姫のかたしく袖やよはにぬらさん　心よりほかのよかれといへるなり　花古今「わすらるゝ身をうちはしの中たえて人もかよはぬとしそへにける　同「さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらんうちのはし姫　箋本歌に衣かたしきこよひもやとは今夜もや今夜もやいくよもの事をいへる歌なりそれを此匂宮は夜かれにかけてよめるなり

返中君
絶せしのわかたのみにや宇治橋のはるけき中を待わたるへき　秘一二の句おもしろし　箋中君のわか心なかきから匂宮のはかなき契をもたのむへきとなりおもしろき歌なり

物なけかしき御けはひ　箋中君のさまなり

あはれにおほされにけり　匂宮の心中なり

ざれたる御心かな　秘草子地なり箋　弄匂宮に中君の心のそみたるをざれたるといふこともあるへくもあらぬ事なれはなり

けさそものゝあやめも　秘昨日なとは夜ふかゝりしなり

思ひなしの今一きは　箋匂宮は皇子なれはなり

立もかへりなまほしう　箋匂宮の深切に心のさまるなり

御ふみはあくる日ことに　秘毎日のことしけくとなり　秘毎日となり

あまたかへり　一日に一たひにてはあらすとなり

心つくしにみしと思ひし物を　大君の思ひ給ふなりかやうの夜かれわつらはしき世をしりてこそ中君をもたやすくあはせたてまつらねとなり

いとゝこの君の思ひしつみ　箋大君のさやうになけき給はゝ中君いよ／＼思ひしつみ給ふへけれはさらぬやうにしてゐ給ふなり

みつからたに猶かゝる事思ひくはへしと　大君の心我身に又かゝる事ありては思ひくはゝるへしといよ／＼世つきたる心をおもひはなれ給ふなり

中納言の君もまちとほにそ　薫の心に匂宮をまちとほに宇治におほすらんと思ひやりてたゝす匂宮をおとろかし給ふとなり

いといたうおもほしいれる　匂宮の御氣色深切なるとなり

をりおしはかりてまゐり給へり　秘薫の折節をおし

はかりて參給ふなり
ふるの山里いかならんと　河「石上ふるの山里いかならん遠の里人かすみへたてゝ「初時雨ふるの山里いかならんすむ人さへや袖ぬらすらん（寛和殿上御歌合）（のぬるらんイ）　弄初時雨歌可相當歟　ふるの山里は大和國也上に時雨めきてとあれは初時雨ふるの山里のうたを宇治の里人にいひなし侍るなり此物語のつくりさまかくのみある事なり　秘引歌よく叶へり宇治をやかてふるにとりなしたるなり箋　はつしくれふるの山里箋同
ひとつ御車にて　箋匂薫同車なり
秋はつるけしきのすこきに　秘九月の十日なり暮秋の月なれはなり箋
うちしめりぬれ給へり　箋車のうちの體なり
山かつともはいかゝ心まとひも　箋さふらふ女ともなり
めつらかなるまらうとゝ　箋匂薫時の人なれはいきほひに人のしたかふ心なり
さかしら人のそひ給へるそ　秘薫なり箋
けに人はからはおはせさりけりと　秘大君の心なり
薫のやうなる人はまれなることなり
ありかたしと思ひしらる　是も大君の心なり
宮を所につけてはいとこゝにかしつき　薫の別して禮をいたしたるさまなり亭主かたの心なり
此君はあるしかたに　秘薫は內々へまゐり給へり
またまらうとゐのかりそめなる　箋薫を外さまにあひしらひ給ふなり　私此三本又まらうとゐとありてわきに又とつけて又の字をけたす但またの義然へき歟
うらみ給ふもさすかにいとほしくて　秘大君の心なり
たはふれにくゝもあるかな　箋引歌云々「ありぬやとこゝろみかてらあひみねはたはふれにくきまてそこひしき
人の御うへにても物をいみしう　秘中君へ匂のたえ〳〵なるを見るにもとなりやう〳〵ことわりをは大君もおもひしれとも中君の御うへにて我身の上をいよ〳〵かゝる事思ひはなれ給ふなり
あはれと思ふ人の御心も　よそにしてあはれなるへき事も夫婦の中にてはつらゝふしになれる事とな

り女の心もちひ殊勝の事なり箋
みおとさす心たかはて　薫とたゝ世上むきのしたしみはかりにてとをさんとの心つかひなり
宮の御ありさまもとひきこえ給へは　匂宮のありさまを薫へ大君のとひ給ふなり箋　弄姫君の薫にとひ給ふ也　私三抄共に匂の御ありさまを大君のとひ給ふとあり此義不審也是は中君へ申かよひ給ふさまを薫の大君へとひ給ふなり以下後に註すへし
かすめつゝされはよとおほしての給へは　秘されはよと大君の推し給ふ也弄　私此義不審　秘匂宮の好色かましき事をほのかにこたへふ給と也　弄薫のほのかに匂宮の好色かましき事をこたへ給ふこれは前にまちわひんと有し事なり　私匂宮より中君へのやうたいを薫の大君へとひ給へは薫の心に思ひしことくたえ／＼なるさまを大君のかすめの給へるなり　箋の義こゝの分愚案に叶へりいとほしくてとは薫の大君をおもふこゝろなり
おほしたる御さまけしきをみありくやうなと　おほしたる御さま匂の中君をおろかにおほすかと御氣色をもたえす心にかけて大君のたえ／＼なるをうらめしけにかすめの給ふゆゑに薫のいとほしくおほして京にても匂の中君をおほすやうたい御氣色をよくみきゝてこゝろむるさかたり給ふなり　以上愚案分然へし存す如何
心うつくしうかたらひて　大君の薫へにくからすあひしらふなり
おほさるゝやうこそは　薫の心大君のおほすやう有へしとなり
いとよく思ひしつめ給ふ　箋薫の心なり
ありしやうにてきこえんと　秘前のことくあひたてまつりたきとなり　箋一夜そひふしゝて實事はなかりし時の事なり
つねよりもわか面かけにはつる比なれは　河古、いせ夢にたにみゆとはみえし朝な朝なわか面かけにはつる身なれは此比はことの外におとろへたるさ也此事詞イは宇治十帖第一の詞成へしと也引歌夢にたにみゆとは云々箋　弄夢にたにの歌の心也此歌殊有感
うとましとみ給ひてんもさすかにくるしきは　馴まゐらせんとは思はぬものからみにくゝおほされんを見えんはさすかくるしきとあひしらひたる詞な

りおもしろしうこましと御らんしすてんもさすか
なるとなり
かゝる御心にたゆめられて　心やはらかにしてさす
かへたてあるをいへり薫の詞なり
れいの遠山鳥にてあけぬ　河「雲のゐる（なかイ）遠山鳥のは
つかにもありとしきかはこひつゝをらん　箋前に
山鳥のこありし故也　私前には山鳥のやうにてこ
ありその時はさうしこしに袖をひかへてうらみな
とせし事ありこよひはさほとのけちかさきもなけ
れはれいのことはのつゝきかた〳〵にかきかへて
遠山鳥といへるなるへし此義にておもしろきなり
宮はまた旅ねなるらんこも　秘薫のかくひこりぬる（ぬなるイ）
こは匂宮はしり給はさるとなり弄遠
女君はあやしときゝ給ふ　秘中君なり
宮物をいみしうおほしたり　匂宮のかよひのたやす
からぬをおもひわひたまふなり
女かたはいかならん人わらへに　匂の底の心をしり
給はねは宇治にはとたえあるをあやうく皆々思ひ
給ふなり
六條院には右（左イ）の大いこのかたつかたに住給ひて　秘

左のおほいこのは夕霧なり　花親行本には右の大
殿とあり此時夕霧はゝや左大臣になり給へる故に
左になほしてよむへし
六の君の御事を　夕霧の六君の事を匂宮のうけひき
給はぬをうらみ思ひ給ふなりされは六條院へ中君
むかへん事はならぬなり
おほえなくていたしすへたまはんこ　箋中君の御う
しろみかたのかすかなる事をいへり
なへてにおほす人のきはゝ宮つかへのすちにて　秘
大かたにおほす人ならは中宮の御かたにあつけ給
ふへきをそのつらにはいかゝこおほすこなり　私
此宮つかへはにほふ宮にさふらふ人々なるへし
もし世中うつりてみかときさいのおほしおきつる
花匂宮を御位につけたてまつらんこおほしめす事
なりさもあらは中君を后にもたてんと匂宮のおほ
したる事なり　東宮御位につき給ひて後は此匂宮
を東宮にもとおほすなりその時は御息所にもなり
給ふへき人からなるとなり　今上明石中宮なり東
宮御位につき給て後此宮を東宮にもとおほしおき
ける事なり

中納言は三條宮つくりはてゝ　箋同祿の後薫の新造
　あるなり
さるへきさまにてわたしてんと　秘薫の大君をわた
　してんとのあらまし事なり
かたみにおもひなやみ　匂宮も中君もなり
こゝろくるしくて　薫の心中なり内々中宮へも申さ
　んとなり
かうかよひ給ふよしを　秘露顯すへしと薫は思ひ給
　ふなり
いみしうもてなして　さのみつゝまぬやうにあり
ありしくしなさんとなり仍あなかちに隱密せんと
　もかほるのおもはぬなり
衣かへなとはか〳〵しう　秘十月になるなり薫より
　おくり給ふなり　箋冬の更衣なり　十月朔日なり
御丁(ミチヤウ)のかたひらかへしろなと　河御帳帷　壁代(カヘシロ)
わたり給はん心まうけに　箋三條宮へ大君をわたさ
　んとの用意なり
十月(カミナツキ)ついたちころ　十月七日より以前なるへし
もみち御らんすへう　花後撰「うち山のもみちをみすは
長月のすきゆく日をもしらすそあらまし
しのひてとおほせと　箋中宮(君イ)へおとつれ給はんため
　なれはなり
右のおほいとのゝ宰相中將　秘左(ヒダリ)のおほいとのとお
　り夕霧の息藏人少將にてありし人なり
かしこにはろなうなかやとり　秘御中やとりには此
　宇治宮をし給ふへしとなり
さきの卷も花見に　箋椎か本にありし事なり
こまやかにきこえ給へり　薫より宇治宮へ懇にの給
　ひつかはすなり
もみちのくちはすこしはるけ　はるけとはおもしろ
　くかけり
かつはゆかしけなけれと　秘みな薫よりし給へる事
　ともなれはゆかしけなしとなり　箋いつれも親昵
　の間なるをかくいふ歟
さうしみの御ありさまは　秘匂宮なり箋弄
もみちをふきたる舟のかさり　匂宮の御座舟なり
　花白川院承保の例をひけり　秘花鳥に承保の例をひけり
けにたなはたはかりにてもかゝるひこほしのひかり
をこそ　花詞云けにとしに一夜の契なりともかゝる
ひこほしのひかりをこそとあり　孟「としにあり

て一夜いもにあふひこ星もわれにまさりておもふらんやは　伊勢物かたり「ひこほしに戀はまさりぬ銀河へたつるせきをいまはやめてよ　秘年の一夜の契なりともとなり紅葉をふきたる舟とかきてかくいへる紅葉を舟の心尤面白し

たそかれ時に御舟さしよせて　秘宇治院の事なり此時の御やとりなり平等院なり弄

かいせんらくといふ物をふきて　河海仙樂　又海青樂　黄鐘調也水邊によせたり

宮はあふみのうみの心ちしてをちかた人のうらみ

河「いかなれはあふみのうみそかゝりてふ人をみるめのたえておひぬは　花後撰「七夕のあまのとわたるけふさへやをちかた人のつれなかるらん　今案匂宮はみるめなき事をあふみのうみの心ちしてと思ひ給へり　をちかた人は中君なり　秘みるめなき心なり弄同　箋みるめなきさの心なり　私花鳥の引歌もおもしろしまへに七夕のことあり今またをちかた人と云り

たいいたしてうそふき　箋詩の題なり

人のまよひすこししつめて　たちさわく人をすこししつめてと也　秘かの宮に御出有へしとなり

内より中宮のおほせことにて　箋明石中宮なり

宰相の御あにの衞門督　秘夕霧の息也箋　私匂宮の御供にまゐれる宰相中將の兄なり

こと〳〵しきすゐしん引つれて　弄問云右衞門督なる人隨身をつるゝ事隨身をつるゝ官にや　一答左右近衞左右衞門左右兵衞出仕には必隨身を具するなり　箋衞門兵衞なと本府の隨身をつるゝなり

おのつからことひろこりて　外聞かる〳〵しきよしを中宮の給ふなり

宮も中納言も　匂や薫なり

けふはかくてとおほすに　翌日も御逗留あるへしとなり

又宮の大夫さらぬ殿上人なと　河明石中宮大夫也是は翌日にまゐれるなり中宮よりたてまつりたまふなり

かしこには御ふみをそたてまつり給ふ　箋中君へ匂より文あるなり

御かへりなし　中君より人めをつゝみて御返事し給はぬなり

かすならぬありさまにては　秘不肖の人は權門のま
しはり成かたしとなり
つらうも口をしうも思ひみたれ給ふ　匂のおはせぬ
もつらく文數ならぬ故にこそ忍ひたる事にて御た
ちよりもなけれとくちをしきと也先は中君のこゝ
ろなるへし大君の心もこもるへし
宮はましていふせう　箋匂宮の心は宇治宮におほす
よりも無念なるへしとなり
網代のひをも心よせたてまつりていろ／＼の木のは
にかきませ　河六帖一もみちはのなかれてとまるあしろ
には白波もまたよらぬ日そなき貫之　花拾一いかて
猶あしろのひをにことはん何によりてかわれをと
はぬと　水原云庖丁譜にひをには紅葉を敷と云々
みつからの御心ちはむねのみいとふたかりて　下人
まても心ゆきたる遊に匂宮のみ中君へおはせて御
むねふたかれるとなり
このふる宮のこすゑに　箋八宮の御所なり
中納言の君もなか／＼たのめきこえけるうれはイナシしき
わさかなと　秘兼て案内申せし事なり
こその春御ともなりし君たち　秘泊瀬まうてなり

薫と八宮へ參りし君たちなり
おくれてこゝになかめ給らん　秘故八宮におくれて
姫君たちましますへきとなり
かうしのひ／＼にかよひ給ふと　匂宮のこゝへれは
する事をしりたるもあるなり
心しらぬもましりて　箋匂のかよひ給ふをしらぬ人
なり
かゝる山かくれなれと　かやうの山かくれも人の口
はさかなきとなり
宰相中將いつそやと花の盛に一めみし木のもとさへや秋はさ
ひしき　弄夕霧三男源宰相中將歌なり　秘宰相中將
は夕霧の息なりいつそやのそ文字すみてよむへし
あるしかたと思ひて　薫によみかけ給ふなり
薫櫻こそ思ひしらすれさきにほふ花も紅葉もつねなら
ぬ世になイ　弄櫻を見て飛花落葉の無常を思へる心なり
秘櫻を見て世の常なきをれもふとなりさきのたひ
さくらをみすは今日の感はあるましきとなり　私櫻
の花紅葉とにかけていへる心なり
右衛門督いつこより秋は行けん山里の紅葉の陰は過うき物を
秘秋は行けんといへる艶にれもしらし　箋是はわ

か心にあてゝいふなり此紅葉のかけは過うしと也
宮の大夫　明石中宮大夫なり
(中宮人夫)見し人もなき山里の岩垣に心なかくもはへるくすか(れイ)
な　花「見し人も(引歌後拾遺)わすれのみゆく故郷に心なかくも(きイ)
きたるはるかな　河「(古)奥山の岩垣もみち散ぬへし
てる日のひかり見るときなくて　石を垣のやうに
みたるなり岩かき紅葉岩かき清水なといへり
秘是は年老たる人にて八宮をみたてまつれる人な(りしイ)
るへし末の詞にみえたり木草はつれなくのこると
なり　弄八宮の跡に草木もつれなくのこるとよめ(以下四十三行イ本ナシ)
り次の詞に久しく見かよひし人なる心なり
おひしらひてうちなき給ふみこのわかく　箋宮の大
夫の體なり八宮をみたてまつりし人にて別して思
ひ出たりとの註なり　弄みこのわかくは八宮の事
なり
(匂宮)あきはてゝさひしさまさる木のもとを吹な過しそ峯
の松風　この宮をおもひ入たる歌なり　是は松風の
吹過るやうにこゝにとまらぬ匂の心をわれとよみ
給へるなり

ほのかにしる人は　以下草子地なり　中君へかよひ
給ふことをしる人のめにはふかく匂宮の思ひ給ふ
よと思ひしるなり
かたはらかきとゝめてたに(しイ)　箋かたはらの沙汰をい
ふたにもとなり云々但四五首歌をかきとゝめたる
事をいふへし草子地なり
かしこには過給ひぬるけはひを　秘宇治宮なり箋
心まうけしつる人々も　薫よりまうけのために参ら
せ給へる人々なと成へし
姫君はなほおとにきく月草のいろなる御こゝろなり
けり　河「(古)いて人はことのみそよき月草のうつし心
はいろことにして(おひおもはなくにイ)伊勢釋　引歌同　大君の匂宮の
心を聞およひしあたく\しきなりと思ふなり
をことこといふ物はそらことをこそ　これを惣別の男
のうへを人のいひしを思ひ出給ふなり
さるなほく\しき中にこそ　秘下つかたの人こそそ
らことはすなれとおもひしとなり箋
すちことなるきはになりぬれは　上﨟なとは人にも
はゝかりなとして實なるへきとおもひしかとゝな
り

おためき給へるやうに二宮もきゝつたへたまひて故八宮も匂宮をはあたく／＼しく聞おき給ひしこなり

かうみおとりする御心を　弄中君を見おとし給ふやうなる心なり

はつかしけなる人はうちましらねと　此宮にさふらふ人々の事なり

いとなやましう　これまてみな大君の心中なり

さうしみはたまさかにたいめし給ふ時　秘中君なりたいめは對面なり匂と中君との事なり

わりなきさはりこそは　中君は直にちきり給ふ事のなほさりならねはいかなりともと結句たのみおほすとなり

思ひいられ給はぬにしも　箋中君も思ひなくさめすましたる心にてはなきなり

中々にてうちすき給ひぬるをつらうもくちをしうもちかきほとにはしてとひ給はぬゆゑに中君の御心もうすしとなり

れいの人めきたるすまゐならは　此宇治の宮の御すまゐのよろつうちあはぬゆゑに匂宮のうちすき給ぬるとおほすに大君はくちをしきなり

われも世になからへは　大君の心中なり

中納言のとさまかうさま　中納言のなにかと大君への給ふか人の心をみむためなるへしとなり匂宮ゆゑ薫をも大君の心あさく思ひなりたまふなりかやうの事ゆゑいよ／＼つれなくてはてにしなかとなり

こしらへやるかきりこそあれ　一度二度こそ薫へもいひのかれ給へ人々の心あはせはいかゝと思ひ給ふなり

ある人のこりすまに（々イ）かゝるすちのことを　ある人はこゝにさふらふ人となり薫へ大君をあはせたてまつらん事をのみおもふとなりこりすまは中君の事にもこりすにとなり

もてなされぬへかんめり　人々の薫へかた人せんとの事なり

かゝることもやあらんのいさめなりけり　かろ／＼しき心あるなと八宮の御遺言ありしを思ひいてたる大君の心中なり

さるへき人にもおくれ奉らぬやうの物と　花やうの

物といふ詞上にもわり思ふへき人におくれたてまつるへきさまの物といふ心なり　箋一やうなるなり中君へ匂宮のとほ／＼しきに又我も薫にあひてたえまあらは一様にさる事そと人の思はんはさにわれたにさやうの物おもひあらしと大君のおほすなり花鳥の義如何

心ちもまことにくるしけれは　秘病にもなるとなり

この君をみたてまつり給ふも　秘中君なり

かきりなき人に物し給ふとも　秘匂宮をいへりこのまゝにうちすて給ひてはとなり

世中にたちましりれいの人さまにて　中君の事を面目もなき事と大君のおもひつめ給ふ心なり

なくさむかたなくて過ぬへき身とさもなめりと　大君の中君と二人の事を思ふ心なり

宮はたちかへりれいのやうに忍ひて　箋此度かへり給ひてやかて宇治へおほしたらんとせしなり

（宇治イ）うちにかゝる御忍ひことにより山里の御ありきも　箋うちは内裏なり　秘泊瀬まうて紅葉御覧いつれもこの姫君ゆゑとなり

右衛門督を（のイ）もらし。（申イ）給ひけれは　箋夕霧の子宇治へ中宮の仰にて御迎に参りし人也

右のおほいとのゝ六の君をうけひかす　箋夕霧の六君なり匂宮は御同心なけれともおしたちてもとなり　おも／＼しき御うしろみなきゆゑに匂宮のかろ／＼しき事もあるとの事なるへし

わかあまりことやうなるそや　薫の心なり　花よのつねにかはりたるあてかひをいふなり

みこのうしろめたしと　弄八宮の事なり箋

此君たちの御ありさまけはひ　箋大君中君なり

宮もあやにくにとりもちて　箋匂宮のあなかちにの給ひし事なり

わかおもふかたはことなるにゆつらるゝありさまも　箋薫は大君をと思へは大君の中の君をゆつらんとし給ふゆゑにかた／＼匂宮にあはせたるなり

いつれもわか物にて　匂宮へ引合申たれはかやうのいろ／＼の事ありて宇治にはうらみ匂宮も物思ひ給ふ薫もよからぬきこえあれはかた／＼姉妹君をともにわか物といはん物をと後悔なり

とりかへす物ならねと「とりかへす物にもかなや世中をありしなからのわか身とおもはん　弄引歌同

宮はまして御心にかゝらぬをりなく　秘匂宮なり
おほす人あらはこゝにまゐらせて　秘明石中君の申
給ふなり　おほす人あらはこなたへよひ給へとな
り箋同上
すちことに思ひきこえ給へるに　花匂宮をは御門も
とりわきておほしめして始終御一流(統イ)をもたて給ふ
へくおほしめしあてかひたるなり　秘此度の春宮
にもと匂宮をはおもひたてまつる故かとなり箋
弄匂宮の事上にいへるかことし
大宮は明くれ聞え給ふ　明石の中宮なり
時雨いたうしてのとやか(さまイ)なる日　秘十月なりのとか
なるしつかなる日なるへし
女一宮の御かたに　箋匂宮の御兄なり　匂宮の参り
給ふなり
としころふたつなき物　匂宮の心に世にたくひあら
しと思ひしなり
れせい院のひめ宮はかりこそ　箋弘徽殿の女御はら
なり
うち出ゝかたもなく　匂の冷泉院の姫宮へは申より
かたきとなり

かの山里人はらうたけに　箋中君の事を思ひいてた
るなり
こひするをとこの　弄なにの物かたりともみえす
よそへらるゝ事おほくて　箋宇治の事にゝたる事な
り　秘我御身のうへにゝたるとなり
すこしきこえ給ふてかしこへたてまつらんと　秘此
繪を宇治へたてまつるへしとなり　箋きこえ給ひ
て申いたして宇治へやらんとなり　宇治へなり繪
事
さい五か物かたりかきていもうとにきんをしへたる
所の　河伊勢物語にむかしをとこいもうとのおかし
きをみをりて「うらわかみねよけに見ゆる若草を
人のむすはんことをしそおもふときこえけるかへ
しに「初草のなとめつらしきことの葉そうらなく
ものをおもひけるかな　琴の事伊勢物語には無所
見在大和物語　伊勢物語の繪なるへし琴の事河海
に在大和物語と云々然とも流布の大和物語にはな
きこゝとなり如何　此事大和物語にありと河海にあ
り可引見　私勘愚本に大和物語に此事なし如何
箋伊勢物語の事なり

いにしへの人もさるへきほとはへたてなう　匂宮の
詞なり
いかなる心にかとおほすに　女一宮の何繪そとおほ
すなり
おしまきよせて　秘匂のおしまきたまふなり
すこしも物へたてたる人と　別腹なとを云るなるへ
し是も女子のみち人の用意にかけるなりされは毛
詩にも兄弟父母にさかれりといへり毛詩第三蝃蝀
の詩
匂宮 わか草のねみん物とは思はねとむすほゝれたる心地
こそすれ　秘あるへき事とは思はさるなり　私ある
へき事とは思はさるなり　私あるへき事とは思は
ぬ物から心中にかゝるをむすほゝるゝといへり
このみやをはことにはちきこえて　秘匂宮なり
ことしもこそあれ
ことわりにて　弄女一宮のことわりなるとなり　秘
女一宮の御心中なり
うらなく物をといひたる　花在中將の妹のなとめつ
らしきことのはそといへるがざれてにくゝ思ひ給
へは女一宮はにほふみやの御かへりはし給はぬ成
へし　秘伊勢物語の心は妹をいたはりてうつくし
みにいへるなり父妹の心も我を懇切に思ひ給へる
わりかたきとなりこゝにてみるにはこゝろかはれ
りうらなくといへるはにくき事といへるなり
むらさきのうへのとりわきて　秘以下草子地なり
この二ところをは　女一宮匂宮なり
御心うつろひやすきは　花一世中の人の心は花そめ
のうつろひやすき物にそありける　秘匂宮の御心
なり　女一宮の御かたの女房たちなり
かのわたりをおほしわするゝをりなき物から　秘宇
治の事なり
中納言おはしたり　弄宇治へなり
なやましけにし給ふときゝて　秘大君なり
おとろきなからはるけきほとを参りきつるを　秘薫
の詞なり驚きつゝまゐりつるとなり箋
かたはらいたきわさくるしかり給へと　大君のあ
まり心淺イやすき體をおほす心なり
宮の御心もゆかておはし過にし　弄薫の語也匂宮の
此のこと宇治へおはしまさて心もゆかぬとなり
秘薫の詞なり大君をなくさめたまふなり人しけか

りし故に紅葉御覧のついてをもうち過給ひしとなり

こゝにはさもかくもきこえ給はさめり　秘大君の詞なり妹君は何ともおもひたまはさるとなり箋弄

なき人の御いさめは　故宮の匂宮をは色々しきなとの給ひてうちとくましき事にのたまひしにちかはさるこそゝなり（さりしさなりイ）

いと心くるしうわれさへはつかしき　秘薫の心なり弄箋

世中はとてもかくてもひとつさまにて過すことかたくなん　秘薫の詞なり　箋物をあまり退屈もなく一具にこゝろみ給ふをいふなり（心みたれ給ふイ）

御らんしゝらぬ御心とも　これも世上を知り給はぬ事を云なり

人の御うへをさへあつかふも　秘匂の御おこたりをとりもちていへるとなり弄

よる〳〵はましていとくるしけに　大君のわつらひのさまなり

うとき人の御けはひのちかきも　箋薫のちかくおはするを中君くるしとおほすなり

ましてかくわつらひ給ふほとの　箋薫の詞かくわつらひの時分に思ひのまゝにまゐりあひたることそさいはひなれわれみあつかはんとの心なり

かゝるをりの御あつかひも　秘薫の詞なり

いとみくるしうこともさらにもいとはしき　秘大君の心なり

思ひくまなくのたまはんも　これは物をのこる所もなくおもひしりたるやうの心にいへり大君の命のをしからぬに修法なとゝ薫の宣ふはくるしけれともいつくをも見あきらめたるやうにさかしう修法なとし給ふなとの給はんもいかゝとなり

又のあしたに　薫の宇治にとまり給ての翌朝なり

昨日はかりにてたにきこえさせんと　弄昨日のやうにてちかくてとなり　秘昨日のことくにてとなり

日ころふれはにやけふはいとくるしくなん　箋大君の返答なり日をかさぬるゆゑやらんけふはあしきとなり

さらはこなたにと　秘姫君のかたへとなり弄

いとあはれにいかに物し給ふへきにか　秘薫の心なり

ありしよりはなつかしき御けしき 箋死のちかき人はなつかしきものなり仍薫の心にもかゝりてむねつふるゝなり
くるしうてえきこえす 大君の丶給ふさまなり
なけきゐ給へり 薫のさまなり
いとうしろめたけれとかへり給ふ 秘薫のまつかへり給ふなり
所さり給ふにことよせてさるへき所に 秘此ついてに京へいたしたてまつらんとなり 箋三條宮へなるへし
この君の御ともなる人の 秘薫の供の人なり弄 箋薫の家人宇治宮の女房にかたらひつきたるかあるなり
かの宮は御しのひありきせいせられ 箋匂宮の御事をかたりしなり
右のおほいとのゝひめ君を 箋夕霧の六君なり
女かたはとしころの御ほい 秘六君のかたの人の事也弄 私夕霧のかたよりすゝみ申されし事まへに見えたり
としのうちにありぬへかなり 箋當年中となり

宮はしぶ〳〵におはして 匂宮は六君のことをおほしいれぬとなり
内わたりにもたゝすきかましき 匂宮の好色の事也
わか殿こそ 秘薫なり弄 箋我殿なり
こゝにかくわたり給ふのみ 薫の此宇治かよひの事を人不審するとなり
めもあやにおほろけならぬ 秘おとろくはかり人のおもへるなり 弄目もをよはすの心也とりわきたる事なり
さこそいひつれなと人々の中にてかたるを かやうにかたりつると傳々こゝの人にかたるなり 弄又女房のかたりつたへしなり
きゝ給ふにもいとゝむねつふれて 秘大君のきゝ給ふなり弄箋
いまはかきりにこそ 大君の心なり
中納言なとの思はん所を覺して 箋薫にはゝかり給てかはかりもさま〳〵心ふかくちきりの給ふと大君の思ひ給ふなりこれより病のおもりしなり
世にたちとまるへうもおほえす これまて大君の心中也

きかぬやうにてね給へるを　大君の人々の思はん所もはつかしくてきかぬさまにて寝給へるなり　箋はつかしけなる人々といふよりきかぬやうにて寝給へるをといへるまて中君の心同しき體なり

姫君物おもふときのわさと聞しうたゝねの　河たらちねのおやのいさめしうたゝねは物思ふ時のわさにそありける　秘引歌たらちね云々　此歌にてすゑへかきのへたり弄箋　弄中君のことなり引歌にてかけり　私こゝに姫君とは大君なりうたゝねしたるは中君なり中君のうたゝねしたるを姫君のみておもふ心なり

見やりつゝ　弄あねきみのみやり給ふなり云々　私此詞をいはゝ中君のうたゝねせしを大君の見て物思ふ時のわさときゝしうたゝねの御さまのいとらうたけにてかひなを枕にてね給へるに御くしのたまりたるほとなとありかたううつくしけなるを姫君みやりつゝと此詞の始にあり姫君をこゝへつけて心うへし

おやのいさめしことのはもかへすかへすおもひ出られ給て　箋故宮の遺言をおほす也引歌の上の句をあはせたり

つみふかゝらんなるそこにはよもしつみ給はし　箋故宮の事を大君の覺す也さしも佛法にいりたち後世を思ひ給し人なれはなり

そひふし給へるさまあてに　箋大君のさまなり

ひるねの君風のいとあらきに　秘中君なり弄箋

こ宮の夢に見え給へるいと物おほしたるけしきにて　秘中君の夢なり弄箋　大君の逝去あるへきゆゑに物おほしたる體にみえ給へる成へし

いさゝしうかなしさそひて　大君の心中なり

うせ給ひてのちいかてゆめにも　秘大君の詞也

人のくにゝありけんかうのけふりそ　秘反魂香也　箋李夫人か故事なり夢にも見ぬ故に大君のかくおほすなり　花十洲記云聚窟洲在二西海中一由來地上有二大樹一與二楓木一相似而華葉香聞二數百里一名爲二反魂樹一死屍在レ地聞レ氣仍活云々　九華帳深夜悄悄反魂香反二夫人魂一夫人之魂在二何許一香煙相引到二梵香所一　白氏文集　李夫人うせて後漢武帝甘泉殿の裏に彼かたちを圖して方士をして靈藥を合せしめて金爐に焚しかは香の煙の中に夫人の姿見えし事

なり
をりはすこし物おもひなくさみぬへし 秘時雨うちしたる折ふしなり かゝる折ふしあはれなるなり
御かたはとみにも見給はす 秘中君なり
猶心うつくしく 秘大君の教訓尤あはれなり弄箋
はかなうもなり侍りなは 大君のわか身の事なり
これよりなこりなきかたに 箋匂宮よりも人品もさまでなく情なき心ある人もいひよる事も有へきとなり
あるましき心つかう人は 秘たまさかにも匂宮のかよひ給ふさへ人のしらは又こと人のわつらはしく心かくる人はあらしとなり弄
おくらさんとおほしけるこそ 秘中君の詞也箋
かきりあれはかた時もとまらしと 秘大君の詞故宮にをくれたてまつりてもかくまてもなからへ侍れはとなり箋
あすしらぬ世のさすかになけかしきも 河（六）「あすしらぬ我身（命イ）とおもへとくれぬまのけふは人こそかなしかりけれ 秘大君の事なり中君へゆゑこそ命もをしけれと也 弄あね君の事なり 箋引歌の心おもしろし河に同し

たかためをしき命にかはとて 弄中君ゆゑこそをしけれとなり箋 河「岩くゝる山井の水をむすひあけてたかためをしき命とかしる 箋不及引歌歟
秘引歌同し
れいのこまやかにて 箋匂の文のさまなり
匂宮
なかむれはおなし雲ゐをいかなれはおほつかなさをそふる時雨そ 秘今日の時雨はいかなれはにやかくたへかたきまてこひしきそとなりわかゝたのしくれはことに物かなしきとなり
かく袖ひつるなと 河「いにしへも今もむかしも行すゑもかく袖ひつるをりはなかりき 花「神無月いつも時雨はふりしかとかく袖ひつるをりはなかりき 秘神無月いつも時雨は云々 引歌よく叶へり 弄神無月引歌同 箋引歌神無月これほとにいふたる時雨よりもあさきとなり
みゝなれにける 秘いつも偽のみの給へるさなりこ
なほあらしことゝ 秘あるましき事となりいつはりにてあるへしさなり 弄たゝあらんよりはさなり
箋弄の義よしなほさりことの心なり

世にありかたき御さまかたち　箋匂の事なり好色をそのうへにたて給ふをいふなり匂宮には人のなひきやすきなるへし

わかき人の心よせ　中君は心よせなるをいへり

さはかり所せきまて　秘中君はさはかりともとおほすなり人はさはおもはさるなり

思ひなほす心そつねにそひける　箋中君はくつろきのある性なり

御かへりこよひまゐりなんと　匂宮の御使の今夜かへり參らんとなり

返中君あられふるみ山の里は朝夕になかむる空もかきくらしつゝ　秘都より朝夕はイは時雨をいへり山里は冬ふかき山をいへり「み山には霰ふるらし外山なるまさ木のかつら色つきにけりの歌有　花後撰「あられふるみ山の里のわひしきはきてたはやすくとふ人もなし

月もへたゝりぬるよと　十月にはつゐに宇治へおはせぬなり九月十日比におはせし也

宮はしつ心なく　弄匂宮なり

さはりおほみなる程に　河拾「みなと入の蘆分小船さはりおほみわかおもふ人にあはぬころかな人丸

秘五節の大忌によせてかけり弄

五せちなとくいてきたる年にて　花おほみは十一月新嘗會祭會に大忌小忌と衣裳につきていふ事ありさて五節なとかきつゝけたり五節は中の丑の日に始る族年は十三日の丑の日なり新嘗會は中の卯の日なり　秘十三日の五節なるへし

はかなう人を見給ふにつけても　秘山里の人をははかなき次てにもおもひいてたまふ也　箋あまたの人をはかなくあひみたまふにも思ひ出給ふとなり

大宮も猶さるのとやかなる御うしろみ　秘明石中宮なり　箋六君なとやうにおも〳〵しき御うしろみをさためられてその外に御らんせまほしき人あらはそのおも〳〵しくもてなし給へと匂へ中宮の仰らるゝなりかろ〳〵しく御身をもち給ふなとの御いましめなり六君は夕霧の女也

まことにつらきめは　秘中君へ物おもはせたてまつらんとなり

御心をしり給はねは　秘匂の御心を宇治にははしらさるとなり

中納言も見し程よりは　秘薫も匂宮をは見おとし給

ふなり箋
心からおほえつゝ　秘　薫の中たちせしよりの事なれ
はなり
をさ／＼まゐり給はす　箋　薫の腹立心にて匂へ無音
あることなり
山さとにはいかに／＼と　秘　薫より宇治をとひ給ふ
なり
この月となりては　十一月なるへし
おほやけわたくし物さわかしき　箋　五節の前後なる
へし
うちすてゝまうて給　萬事拋て薫の宇治へおはせし
なり
そこはかといたき所もなく　箋　辨君詞也大君のわつ
らひたまふさまを薫へ申なり
此宮の御事　弄　匂宮の事也　秘　匂のかよひ給ふ事也
心うく侍ける命のなかさにて　秘　薫なり　私是は辨
君か我身の事を申すなり
なとかかくともつけ給はさりける　箋　薫のおところき
ての詞なり
ありしかたに入給ふ　秘　まへに入給ひし所なり

御こゝろもなきやうに　大君のよわきさまなり
かくおもく成給ふまて　箋　薫の詞なり
れいのわさり　宇治の阿闍梨なり
れいのあなたにさ　まらうとゐのかたなるへし
中宮くるしとおほしたれと　弄　薫になかき事なり
此御中を猶もてはなれ給はぬ　薫のあね君との中は
なれましき中（事イ）なりといへり
すこしすへり入て　大君のね給へる丁のうちへなり
なとか御こゝろをたに　薫の詞也
心ちにおほえなから　秘　大君の詞なり
おほつかなくて過侍りぬへきにやと　弄　姉君のうせ
給はゝとなり
かくまたれたてまつりつるほと　秘　薫の心なり　私
薫の詞歟
さくりもよゝと　さくりなきなりよゝといふもなく
聲なり　私よゝとはしつくもよゝとなといへりな
くこゑとはいふへからす
御くしなとすこしあつく　秘　温なり　花　かしらに温
氣のあるをいふなり
なにのつみなる御心ちにか　秘　薫の詞なり箋　花「み

こもりのかみにうれへてきえてしかこひつゝあは
ぬなにのいのみそも
むねもひしけて　薫の心なり　胸のつよくいたきさ
まなり
日ころ見たてまつり給へらん　秘中君へ薫の申給へ
るなり箋　弄さふらひたる人々くたひれぬらんと
薫のゝ給へるなり
すこしそき給へり　中君なるへし
ひたおもてにはあらねと　秘薫なり
いとくるしうはつかしけれと　箋大君の心なり
かのかたつかたの人にみくらへ奉り給へは　秘匂宮
におもひくらふれはとなり　弄匂宮におもひくら
ふれはかほるはねんころなるとなり
思ひくまなからしと　薫の志の懇なるをおもひしら
ぬやうならんは思ひくまなきなり思ひくまなから
しとは志のふかきを思ひしるなり
いはんかたなく思ひゐ給へり　箋薫の心なり
あさりもよゐにさふらひて　箋夜居也　箋よゐの加
持をいふなり
老かれにしたれと　花老のこゑのかれたるなり　嗄
字なり
こうつきて　河功付たるなり　秘功の入たるなり弄
箋若菜紫イ巻にもあり
はなしは〳〵うちかみて　秘阿闍梨の事也弄
すゝしきかたにそと　八宮の事也すゝしきかたは淨
土なり
さいつころ夢になん　河近曾サイツコロ
いさゝかうち思ひし事に　姫君たちの事なるへし
たへたるにしたかひて　あさりの分際にしたかひた
るとなり　堪たるに隨ふなり
なにかしのねんふつなん　河阿彌陀の念佛をいふに
や　彌陀念佛の事　秘彌陀稱名念佛の事　天台疏
論　念二阿彌陀佛一即念二一切佛一法照禪師至五臺山
至大聖林寺逢文殊問末代凡夫修行難成就願斷疑
網已上　文殊曰諸修行無如念佛照問如何念文殊此界
西有阿彌陀願力不可思議
常シヤウ不經フキヤウをなんつかせ侍る　思ひ給ひえたるは常不經
を思ひよせたるなり　私八宮のとふらひに常不經
の功德然へしと思ひえたる所のあるなるへし　秘
つかせとは禮拜の事也　河我深敬二汝等一不二敢輕

慢ー所以者何汝等皆行ニ菩薩道ー當レ得レ作レ佛（法華經常不輕行品）偈トアリ如何 釋尊因位に不輕菩薩にして此二十四字の文を唱て四衆を禮拜し給ひしなり一切衆生の佛性あるゆゑにふかみ給ひしとなり

君もいみしうなき給ふ 弄 姫君の事なり 箋 是は薫の事なり

かの世にさへさまたけに 箋 是より大君の心中なり

さたまりたまはさらたさきにまうてゝ 河 詣てなり 花 三有といふは本有中有生有なりさたまり給はぬとは中有の間をいふなり弄

きゝふし給へり 大君なり

このさうふきやうそのわたりの里々京まてありきけるを 此おこなひ人ら不輕菩薩のまねをして廿四字の文を唱てありくりありくにこそ

いとたふとくつく 河 禮拜の事なりぬかつくといふなり

ゑかうのすゑつかた 河 廻向也 秘 我深敬汝等不敢輕慢等の文なるへし

まらうともこなたにすゝみたる 秘 薫なり佛法に歸し給ふ心なり箋

せちにおほつかなく 箋 中君の君をおほつかなくおほすなり

あさやかにゐるなり（なほりイ） 弄 薫の事也

ふきやうの聲はいかゝ 秘 薫中君に申給ふなり箋

おもへしきみちには 秘 おもからぬ法事となり弄箋

薫 霜さゆる汀の千鳥たちわひて鳴音かなしき朝ほらけかな 弄 不輕の聲をなくねによそへ給へり 秘 薫の歌なり よのつねならは法の聲なといふへきを只千鳥の聲をもちて不輕の聲になしてよめり殊勝の事なり 毛詩關雎篇なとも后妃の德をいはんとて雎鳩の事をいへる類なり

つれなき人の 中君の心也 秘 匂宮に薫を似たるこなり弄

返中宮 曉の霜うちはらひ鳴千鳥物思ふ人の心をやしる 物思ふ人とは中君みつからの事なり弄箋

につかはしからぬ御かはり 秘 辨かつたへたるなり

箋 弄 老人のつたへたるをいへり

かやうのはかなしことも 秘 中君大君の事をいへり

私 是は薫の心に姫君たちの事を思ひ給ひてさて大

君のうせ給てはいかゝとなけき給ふ事なり又中君の心なくはかやうの事をも大君のおかしうとりなし給ひし物をわかれはてなはいかゝとおもふ心歟但あとの詞宮の夢に云々といふへつゝけて見れは薫の心然へし

宮の夢に見え給けん有さまおほしあはするに　秘薫の心なり故宮の御ためなり弄

かう心くるしき御ありさまともを　姫君たちの御うへを心くるしくおほすなるへしとなり

おはしまし御寺にも　弄八宮の念仏にこもり給ひし寺にてとふらひの御誦經なり

ところ〳〵に御いのりのつかひ　弄是は今の新なり

おほやけにもわたくしにも御いとまのよし申給て

秘薫なり一暇文をいたしてこゝにゐ給へるなり是は何ヶ日といふ暇文を奏文する定たることなり

花暇文

假文

請暇若干箇日

牒依其事取請如件以牒 治病之人者治病云々

年月日　官位姓名

みつからもたいらかに　大君の我と病のなほらん事もねかはぬなり

此君のかくそひゐて　弄薫のそひ居給へゐ事なり

いまはもてはなれんかたなし　かやうになりてから本腹し給はゝ薫をはそむき給はんことかたしと大君のおほすなり

かたちをもかへてんさてのみこそなかき心をも　大君の本腹せんにつけてもあまにならんとなりさらすは薫となかくいひ通する事はあらしとなり夫婦と成てはたかひにちかひめのいてこんとなり匂宮の事にいよ〳〵覺しこり給へるなり

おもふ事してんと　花出家の事なり　秘尼になるへしとなり

いむ事なんいとしるしありて命のふる事ときゝしを

花いむ事は受戒なり女の戒をうくるといふひたひのかみをはやしてさけ尼といふものになるを云也

たのもしくも申つかねは　秘薫のも申つかぬ也弄

かくこもりゐ給へれは　薫の宇治におはする事也

きゝつゝ　聞つたへてなり

ふりはへ物し給ふ　わさとゝいふなり

とよのあかりはけふぞかしと　河豊明節會　箋日本
紀に宴の字をとよのあかりとよめりさらは何の宴
をもいふへし但これは豊明節會の事なり　秘辰日
なり弄箋
うとくてやみぬへきにや　箋大君の事なり此まゝに
てやむなしく見なさむと思ふ薫の心なり
たゝしはしにてもれいになして　河いたはるを例に
たかふといへはなり違例なり　私れいになしては
つねになしてなりぬ腹の事なり
ひかりもなくて　雪のふる空なり弄
薫かきくもり日影も見えぬおく山に心をくらす比にも
有かな　秘豊の明の節會なれは日蔭のかつらをかく
る日なれはなり　弄宇治にこもりおはします心な
り　五節の日參によせたり　花高光集におさゝう
せ給ひてのとし新嘗會の比内へも得まゐらて内侍
のもとに「霜かれのよもきかもとにさしこもりけ
ふの日かけをみぬそかなしき　今案新嘗會豊明節
會には小忌をきる人日かけのかつらといふ物を冠
にかくるなり日かけ草はさかりこけ共いふいとに
てむすひてかくるはひかけ草にかたどるなり日蔭
をもてかつらとすと日本紀の第一にありこれより
　事おこれるなり
たゝかくておはするを　秘薫を人々のたのむとなり
いかゝおほさるゝ　秘薫大君へ申給ふなり
こゝらねんしきこゆる　あまた祈なとの事なり
物おほすなりにたる　秘大君なり　私大君のやうた
　いたり
よろしきひまあらは　秘口をしきわさにこそといへ
　るまて大君のことはなり
いよ〳〵せきとゝめかたくて　弄薫の事
枕よりおちたるきはのつや〳〵と　奇特なるかきさ
　まなり
をしき事たくひなし　此一段大君の病今はの體薫の
　心中なり
つひにうちすて給ては　是より薫の詞大君への給ふ
　なり
心くるしうてとゝまり給はん御事　秘中君なり弄箋
いらへせさせたてまつらんとて　大君の返答をきゝ
　たくて中君の事をいひ出し給ふなり
かくはかなかりける物を　大君の詞なり

ほのめかしきこえしに　中君を薫へとゆつりしにさ
もなきをのたまふなり
たかへ給はさらましかはうしろやすからまし　中君
の薫の北方にておはせは大君も心やすかるへし匂
宮は御心あたく／＼しくて物を思はせ給へはかくの
給ふなり
かくいみしう物思ふへき身にや有けん　秘　薫の詞也
弄
ことさまに此世を　大君の外にも心のとまらぬ事を
の給ふ歟
われは佛をねんせさせ給ふ事かきりなし　薫のさま
なり
すゝめ給ふほとけ　薫を佛道へすゝめいれんとのほ
とけのしわさかとなり
物のかれゆくやうにて　大君終焉のさまなり
あしすりもしつへく　箋　薫の心なり　河　伊勢物語い
てこし女もなしあしすりをしてなけともかひなし
弄　伊勢物語の心也
ひきさけたてまつる　秘　中君を避たるなり　中君を
のけたるなり

かくなからむしのからのやうにて　河　古今「うつせみは
からを見つゝもなくさめつふか草の山けふりたに
たて　花　蜺なり虫のもぬけたるをいふなり　秘　う
つせみはからをみつゝもの心あり弄箋
かなしさもさめぬへきふし　薫の愁傷の體をかけり
そらをあゆむやうに　箋　薫のさまなり　花　御法巻に
も此詞あり葵の巻にはあしをそらにてとあり　たゝ
しあしをそらにてはいそかしき時の事なりそらを
あゆむは心のほれ／＼しくうか／＼としたる體な
り
けふりもおほくむすほゝれ給はす　はかなくおもし
ろき詞なり　花　あけまきの君やせさらほひて虫の
からのやうなれはいまはの時の煙もむすほゝるゝ
程もなくたゝ時の間にあとかたもなくなれるなり
御いみにこもれる人　秘　薫のまします故に人おほき
となり
はつかしき身の心うさを　匂宮のうとく／＼しくおは
するにさやうの事を思ひて大君もかくうせ給へる
を中君のおほすなるへし
又なき人に見え給ふ　秘　たくひもなき人となり中君

かた〳〵の物思ひになき人のやうに見え給ふとなり　私大君のはかなく成給へる跡にて中君も又なき人になるへきほとにおもひなけきたまふとなり
宮よりも御とふらひ　秘中君の事なり　箋匂宮より細々と訪ひ給ふとなり
思はすにつらしと　秘中君にとたえある事なり
おほしなほらて　弄あね君の事
いとうき人の御ゆかりなり　中君（宮イ）の匂宮をおもふ心なり
この君の御事の　箋中君の事なり
かのゝ給ひしやうに　箋大君のいまはの時の給ひし事なり
したの心は身をわけ給へりとも　弄あね君の下の心うつろふへくはおほえさりし　弄薫の心なり
物おもはせたてまつるよりは　中君の匂宮ゆゑ物思ふ事なり
をろかならすけうし給へと　河孝養なり
かきりあれは御その色のかはらぬを　薫と姫君とは一たひの契もなきゆゑに服衣をきたまはぬ事なり
弄

薫
紅におつる涙もかひなきはかたみの色をそめぬなりけり　秘本妻にてなきゆゑなりさふらふ人々のきたるをうらやみ給ふ也　私ちきりのなかりしゆゑに藤衣をき給はねはかひなしとなるへし
ゆるし色の氷とけぬかとみゆるをいとゝぬらしそへつゝ　薫大将ゆるし色をきたる歟おつる涙もとあれは涙の紅をゆるし色によそへていへる歟氷とけぬとは涙にぬれたるよしにや袖のつらゝなといふなり　花紅のうちきぬは氷のやうに見ゆるなり河海に涙の氷にいひなし侍然るへからさるにやぬらしそへたるははしめて涙の事をいへり氷とけぬかとみゆるはうちきぬのいろつやをいふと心うへし
秘花鳥説尤可然云々とけぬるをとけぬかと云本ありぬる尤可然歟とけぬるとは氷のとけてぬれたる心なるへしされはぬらしそへつゝといへり箋　弄とけぬるかとみゆる涙のことにはあらす紅のきぬをうちたるきらなるへしそへたるはなみたの事なり
このとのゝかくならひ　かやうに薫のはしなれたるとほ〳〵しくなり給はんを人々のおもふなり

此御かたにはむかしのかたみに　秘薫中君へ申給ふなり

この君はけさやかなるかたに　秘中君の事薫の心になり　私心むけを中君と大君と薫の思ひくらへ給ふなり

よの人のすさましき事に　河清少納言枕草子にすさましき物しはすの月夜女のけさうおうなのけさうとは媼なり老媼の事在端　弄しはすの月うつほの物語にあり云々

簾をまきあけて見たまへはむかひの寺の鐘の聲枕をそはたてゝ　河遺愛寺ノ鐘ハ欹ㇾ枕聽　香爐峯雪撥ㇾ簾看　樂天　拾「山寺の入相の鐘の聲ことにけふもくれぬときくそかなしき　花夜の明るをけふもくれぬといへる夜の明て昨日の過る心なり夜のあけてけふになれはけふもやかてくれぬへき心にいへるなり　秘夜になりていへる面白しけふもくれ又けふもくれぬと思ふ心なるへし花鳥の説いかゝ　箋弄に古詩古歌を引けり　弄けふもくれぬと只今夕にはあらす古歌の心を夜の鐘に思ひ給ふなり

薫おくれしと空行月をしたふ哉つひにすむへき此世ならねは　諸抄これを註せす又ことなることなし　弄薫の歌なり

四方の山のかゝみと見ゆる　花雪の事なり山は鐘をかくるこいふ事あまた所にあり　秘此詞宇治に両所にありしとみおろさぬさきの事なるへし　弄四方の山の鏡と見ゆる汀のこほり月かけに（月かけに汀のこほりイ本）いとおもしろし両説いつれにてもしとみおろさぬさきの事なり又別のかたより見ゆる鏡と見ゆる此詞両説ありおもしろく思ひけるにや

わつかにいきいてゝものし給はましかは　秘あるましき事まて思ひ給へるとなり

薫戀侘てしぬる藥のゆかしきに雪の山にや跡をけなまし　弄問両首同雪山の半偈を受し鬼神の事答云雪山は藥のある所なりされは死ぬる藥もあるへしとなりおもしろき趣向なるへし

なかはなる偈をしへん鬼もかなと　秘諸行無常の偈の事なり薫の心は此世にあとをとめかたきとなり　河諸行無常是生滅法生滅々已寂滅爲樂涅槃經　雪山童子求法有千丈（尺イ）夜叉現半偈先説復同以（因イ）求半偈曰飢未能説日食何新血肉童子爲法乃捨全身佛國中也

夜叉帝釋化身也中阿含經涅槃經説同之仍略之
心きたなきひしり心なりけり　花心とは身をすてすして半偈をしめす鬼にことつていへるを心きたなきひしりとはいへるなり　秘心といてたちてはいはすしてことつけたるは心きたなしとなり
わかきは心にしめて
老たるはたゝ口をしう　私こゝにさふらふ人々の薫をおもふ心なり　秘老幼みないへるなり
たゝ此宮の御事を思はすに　弄匂宮の事なり
さすかにかの御かたにはかく思ふも　弄姉君の中君には忍ひ給ひしなり
あいなう人の御うへを　中君の事を姉君の思ひ給ふなり
わか心からあちきなきことを　弄薫の心なり
何人かはかゝるさ夜中に　秘京極黄門「たれはかり山ちを分てとひくらんまた夜はふかき雪のけしきに　とよめるも此わたりより出たるへし氣色といへることは爲家卿はきらへる詞なりされとも此歌におきてはけしきとなくてはなり雪のけはひとあるをけしきといへる殊勝なり

宮かりの御そに　匂宮の狩衣すかたにておはしたるなり
御いみは日かすのこりたりけれと　秘四十九日のうちなり弄
日ころのつらさもまきれぬへき　匂の御出深切の時分なり仍日來の御疎遠のうらみもわすれぬへきとなり
覺しなけきたるさまはつかしかりし　是は中君の故姫君の我身の事を歎き給ひし事を思ひ出し給ふなり　秘大君の此御事をなけき給ひし事なり
みなほされ給はす　大君の存生の内に匂宮のたちかへり懇切なる事を見せ給はさりしを曲なしと中君の思ふなり
今より後の御心あらたまらんは　花是は匂宮の今より後思ひなほし給ふとも故姫君のしり給ふへきならねはかひなかるへく中君は思ひ給ふなり　秘匂宮の心あらたまるともなほうらみあるへしとなり
箋　弄匂宮の心あらたまるともなり
日ころのおこたりつきせすの給ふを　匂宮の日ころの事を陳し給ふなり

つく／＼ときゝゐ給へり　中君なり
これもいとあるかなきかに　秘中君の物おもひ給へる御さまなり
おくれ給ふましきにやと　人々の中を匂宮のきゝ給ふなり
けふは御身をすてゝ　内裏にもとめ給はん事をいふなり
いたうわひ給へと　匂宮なり
いますこし物おほゆる　中君よりの返答なり
心あさきやうなる御もてなし　匂宮の心あさき事なり中君へ薫の人して異見し給ふ詞なり
にくからぬさまにこそかうかへ奉り給はめ　河勘事の心なり　弄勘當の心なり　花かうかへは人を責勘する事なり　勘當なりこゝの詞箒木巻にうらみいふへき事をもにくからすなとありし詞におへり　弄
かやうなる事またみしらぬ　秘かく人にうらみらるる事なとはこのみやはいまたしり給はさる人なるへし
いよ／＼此君の御心もはつかしうて　弄薫の心をはち給ふ中君の心也箋　秘中君の心なり此君とは薫なり
えきこえ給はす　中君のあひ給はぬなり
きこえしさまをもむけに忘れ給ひけり（なし給ふイ）　花是は匂宮の中君に心ならすとたえおくへき事も有へきそれをは心にかけ給ふましきとの給ひし事をわすれ給ふてうらみ給ふとの給ふなり　秘匂宮のよく契おき給ひし事なり自然のとたえをは心にかけ給ふましきよしはよく契りし物をとなり箋
人やりならすなけきふし　匂宮のあしきからなれは人やりならぬなり
千々のやしろを引かけて行末なかき事を　河ちかひつることのあまたになりぬれは千々のやしろもみみなれぬらん　秘引歌箋同弄引歌の心見河海
えうとみはつましかり　私中君の匂を思ひはなれぬ心なり
中君　きしかたを思ひ出るもはかなきを行末かけて何頼むらん　弄中君歌なり　秘中君歌なりすきにしかたにて行さきのことはしらるゝこと也　私きしかたのそらたのめを思ひいつるさへはかなきに又ゆくす

ゑをはなに（いかにイ）さたのめ給ふそとなりたのむらんとは
常のやうに心うれは中君のたのむときこゆるなり
これはたのむらんとこの文字をいれて心うへきに
やされは匂宮のかたよりたのむるなり
中々いふせう　弄よそなるよりはちかくていふせき
なり
返匂宮
行末をみしかき物と思ひなはめのまへにたにそむか
さらなん　行末をみしかく思ひ給はゝ先たゝ今のめ
の前をそむき給ひそとなり箋弄同し
人のみるらんもいと人わろく　秘匂の御心なり
ましていかに思ひつらんと　秘日ころのとたえいか
に思ひ給ひつらんと心にくみて匂宮のおほすなり
弄
いといたうやせあをみて　秘薫のさまなり箋
まめやかにとふらひ給ふ　秘匂の薫をとふらひ給ふ
なり箋
ありしさまなとかひなき事なれは　薫の心大君の事
なり
此宮にこそはきこえめと　弄匂宮にこそなり
うち（いイ）はてむにつけてもいと心よわく　秘かをるの心

よわきさまをいかゝとなりためらひ給へるなり箋
かほかはりしたるを（のしたりイ）　弄薫の事なり
女ならはかならす心うつりなんと　弄匂宮我身女な
らは薫に心をかよはすへしとなり中君の心をうし
ろめたく思ひ給へるなり箋
なまうしろめたかりけれは　匂宮の心に中君の心薫
にうつらんなと思ひ給ふなり
かくつれなき物から　秘つれなく（すとイ）宇治にゐ給ひて内
わたりなとをも憚り給はねともなり弄　私つれな
きは中君の事なり中君はつれなき物ゆゑに内なと
にきこしめさはあしかるへしと也匂の京へかへり
給ふとなり
つれなきはくるしき物をと　河「いかてわれつれな
き人に身をかへてくるしき物と思ひしらせん　花
ふかへする物にをかつれなきはくるしき物と人に
しらせん　秘弄引歌いかてわれ云々　私引歌猶花
鳥の詞もよく叶へりとみゆいかゝ
としのくれかたにはかゝらぬ所たに　秘宇治のさま
なり
御わさもいかめしう　秘七々日の事なり　四十九日

なり…………………………
宮よりも御すきやうなと　匂宮よりなり
かくてのみやはあたらしきさしさへ　秘薫の事なり
かへり給はん心ちも　薫の心中なり
かくおはしならひて　秘人々の薫を思へるなり
いみしかりしをりの　大君のうせ給ひし時の事
時々をりふしをかしやかなるほとに　秘時々は淸へし時分々々なり薫此宮へ八宮の御時よりまゐり給ひし事なり
はかなきにもまめなるかたにも　薫の心もちひのよき事を人々の思ふなり
かの宮よりはなほかうまゐりくる事も　匂宮より中君を京へわたし奉らんとなり
きさいの宮きこしめし　明石中宮なり弄
中納言もかくおろかならす　箋薫の大君の事をふかく思ふ事なり
おしなへておもひかたうこそはたれもおほさるゝそと　箋中君に匂宮の御心もとまれはかたちなと然るへき姫君たちにこそと明石中宮のおしはかり給ふなり

しのひてきこえ給ひければ　中君を二條院の西の對へわたし給へと明石中宮の忍ひても匂宮へ仰らるるとなり
女一宮の御かたにこそよせて　花女一宮の御方に匂宮の思ひ人のある其類にてと思ひよせての給ふと心得たる事なり上にある事なり　秘さふらふ人に事よせてなり女一宮のみやつかへなとにとおほすにやと匂宮の思ひ給ふなり
おほつかなかるましきはうれしくてのたまふなりけり　匂宮の先二條院まてわたさん事のうれしくて宇治への給ひつかはしたると前の註なり　草子地歟
中納言のきゝ給ひて三條の宮もつくりはてゝ　我も三條の宮をつくりて大君をわたしたてまつるへきものをとなり箋
御かはりにもなすらへても　薫の中君の事をの給ふなり箋　私薫の心なるへし
宮のおほしよるめりしすちは　花中君を二條院にわたしたてまつらんとの給ふ事をあるまし き事におもひ給ふなり　秘匂宮かをるをうたかひ給ひし事なり　箋花鳥の說あやまれり　弄匂宮の薫をうた

かひし事はさも思ひより給はてたゝ中君のうしろ
みをし給ふへきとなり
大かたの御うしろみはわれならてはまたたれかはと
おほすとや　秘　悉皆の御うしろみは薫の沙汰なくて
はと思ひ給ふとなり

岷江入楚第四十九　早蕨

廿四歲　中納言　年立には廿二歲云々花鳥には廿一歲と云々皆以相違也

正月自阿闍梨方送土筆於中宮（君イ）方事

源中納言參兵部卿宮給折梅花獻給事

物語宇治中君渡京事

二月一日頃中君可移二條院給事

除服聞事

源中納言奉御車御前等人々給事

前日中納言君渡宇治對面中君事

與辨尼之物語事　辨出家事

爲中君與辨尼物語惜名殘給事

移徙日事　二月七日なり是を二月一日頃と云なり藤裏葉卷と同し詞に六七日の月のさやかにさしいてたると云々

廿（四イ）餘日中納言可渡三條宮給事

夕霧六君御裳着之事

可渡兵部卿宮給事延引事

源中納言望二條院櫻參中宮御方給事

兵部卿宮出逢給事

早蕨　花以歌幷詞爲卷名

秘但歌には早蕨とあり詞には蕨とはかりあり花同河この春はたれにかみせんなきひとのかたみにつめる峰のさわらひ　私詞にわらひつくづくしおかしきこにいれて又あさりの歌に「君にとてあまたの春をつみつれはつねを忘れぬ初わらひ也と云々花薫廿一歳の春の事あり　私云年立相違あり　私薫廿四歳總角の次年の春なり　弄薫廿四歳なるへしあけ卷の次の年の春なり　箋薫廿四歳なり

やふしわかねは春の光を見給ふにつけても　河古今「日の光やふしわかねはいそのかみふりにしさとに花もさきけり　秘引歌同　弄中君の心のうちなり春は無邊の光あり去年姉君に別て時節のおしうつるをもしらさりしに春はかはらさるをいへり・やふしかくれなさゝは林藪とていやしきところにいひならはせり是は宇治の里を云なり　弄姫君うせ給ての次の年の春の事なり

いかてかくなからへにける　箋大君に別て中君の思なイ心なり　私總別八宮にわかれ給ひしより姫君たちの此心前卷にあまた所見えたりいはんや今は猶以理なるへし

はかなき事をも本末をとりて　花神樂譜本末の拍子あり歌なとよむに上句下句をいひかはす事あり弄歌のとなるへし上句をいひ出し給へは下句をつき下句に上句をつくる也　秘歌なと事なるへし上句をいひ出し給へは下句をつき下句には上句をつきなとたかひに兄弟し給ひし事也又何事をもいひあはせ給ふをいへり　箋歌の上下をつきなとする也神樂の本末なと同作法なり

心ひとつをくたきて　秘又いひあはせん人もなきとなり

宮のおはしまさすなりにしかなしさよりも　弄八宮なり秘箋同　私八宮よりも大君をしたふ心ふかしとなり

世にとまるへきほとは　秘世間の無常をかけり我もしぬへく思へとも心にかなはす又大君はをしむにもかひなしとなり　箋生死のかきりある事を云大君をしたふ心をいふなり

さしあたまりては何事か　秘大德の文の詞なり
箋宇治山の阿闍梨の文なり

今はひとゝころの御事　箋八宮大君のおはせねはな
り
わらひつく〳〵しおかしき籠に入て　河蕨（ワラヒ）毛詩　薇同
虃　同註土筆（ツクツクシ）　本草疏云周秦云蕨齊魯云虃
俗云其初生似虃脚故名之云々蕨各別物歟園豆なり
といへり然て和國通用なり
わらはべのくやうして　箋佛法僧にや物を献するを
供養するといふなり
はつほ　似合たる詞なるへし　字可勘
てはいとあしくて　秘手跡なり
ひきはなちてそ　弄文字をもつゝけす書たるなり
秘大略文にかきまする歌はそのきはを見せす詞に
かきつゝくるなるをこれは歌をひき放て歌とたし
かにみせてかける法師の沙汰おもしろし箋
宇治山阿闍梨
君にとてあまたの春をつみしかはつねをわすれぬは
つわらひなり　花「都には見るへき人もなき物をつ
兼輔集
ねを思ひて春やきぬらむ三條院右大臣　秘常は宮
の御時の嘉例を忘申さゝるとなり　弄ひしりの歌
のさまなり　箋つねを忘れぬは時を忘れぬなり
大事と思ひまはして　秘中君の心なり阿闍梨此歌を
一大事と思ひてこそ按し給ひつらめとなり　箋大
事とよみつらんと思ふより歌の感か出くるなり
なほさりにさしもおほさぬなめりと　秘匂宮の御文
よりは心もとまるとなり箋
かへりことかゝせ給ふ　箋おほせかきなり
返中君
この春はたれにか見せんなき人のかたみにつめるみ
ねのさわらひ　秘此歌巻の名たり八宮大君なともま
しまさねは我身かたみとみるはかり也　箋引歌同
河海　河「みぬ人もゆきてしのへと春の野のかた
みにつめる若菜なりけり　私形見は籠によせたり
いとさかりににほひおほく　秘中君のさまなり箋
さま〳〵の御物おもひ　秘大君の事匂のたえ〳〵な
る事なとなり箋
むかしの人にもおほえ給へり　秘おもやせ給へる故
に大君に似たるなり御前の女房ともの見たてまつ
る心なり箋弄
ならひ給へりしをりはとり〳〵にて　秘人の兄弟の
さまをよくかけり
からをたにとゝめて　秘あけまきの巻に虫のからの
やうにてとありし事なり

見えたてまつり給ふ御すくせ　箋此中君を薫の相具し給はゝ然るへからん物をと人々の思ふなり匂宮のうとくおはするゆゑなり又今は大君によく似たると思ふ故にからをたにとしたひたまふ薫の北方ならはやとなり

かの御あたりの人のかよひくる　秘薫のあたりなり
弄かほるの事をつたへきくなり

あたらしきとしともいはす　秘薫の大君をこひ給ふ事なり

いやめになり給へる　箋薫の愁傷になみたかちなるさまなり

けにうちつけの心あさゝには　箋大君の事を薫の深切に思ひ給ふ事を今はいよ〳〵中君の思ひしり給ふとなり

宮はおはします事の　匂宮なり

ないえんなと物さわかしきころ過して　内宴也　弄
正月にあり作文なとあり　秘大略正月中にある事なり親王公卿以下參して作文なとある事なり久しく絶たる事なり箋

心にあまる事　薫大君の事をかたるへき人別になきとなり

にほひのいとえんに　弄かをるのにほひなり

をりおかしう　箋匂宮のこゝろなり

匂宮 をる人のこゝろにかよふ花なれや色にはいてすしたににほへる　秘匂宮の歌なり五文字は薫をいへり實法をつくり給へと宇治にかよひ給ふ事今に絶さるは中君の事のうたかはしきとなり弄　箋是は白梅の事といへり又色に出ぬとは未開の花の心ともいへり歌の義は雨抄に同し

返薫 みる人にかことよせける花のえをこゝろしてこそをるへかりけれ　花大かたにおくしら露もいまよりは心してこそみるへかりけれ　今按此みる人は中君の事を思ひよせたるなり　秘かことはかこつけなり心をつけてをるへき事にて有けるとなり　弄かことかこつけての給へるはわつらはしこゝろしてこそをるへかりけれと也　箋是は中君の事をやかて心得ていへり心してこそとは梅にかけていへり見る人とは薫の我身の事なるへしみる人の心にかよふと匂のよみ給へれはなり

いとよき御あはひ　箋薫と匂とを云也　私草子地歟

ましてさばかり色めかしう　秘薫さへ涙もろきなり
ましても匂宮の色々しき御心なれはなり箋　弄薫の實人さへなき見わらひ見の給ふにまして匂宮はさなり

人の御うへにてさへ　花古「わか身からうき世中となつけつゝ人のうへさへかなしかるらむ

またけにそあはれしりかほに　箋みる人の心から時節の景氣も色々に見なさるゝなりことに今の眼前の體かすみわたりてあはれなるをけにそといへり

また冬めきて　箋餘寒のさまなり

おほとなふらもきえつゝやみはあやなきたと〳〵しさ　河古「春の夜のやみはあやなし梅の花いろこそ見えねかやはかくるゝ　秘此二人の匂ひを云へり夕へよりふくるまてをかけり　箋引歌春のよのやみは云々　私灯のきえたるとかきて匂薫の事を聞はあやなきたと〳〵しさと匂ひの沙汰をいはてかけるおもしろし

よにためしありかたかりける中のむつひを　秘薫大君に實事なきよしをかたり給ふなり　箋大君と薫との間の事を匂のとひ給ふなり

いてさりともさのみはあらさりけむと　弄薫とあね君と實事なき事はあらしとうたかひ給ふものから又物に心してあへしらひ給ふなり箋

のこりありけに　秘匂の御心ならひなり

さりなからもものに心え給ひて　秘疑なから又物に心えてあひしらひ給ふなり

なけかしき心のうちも　秘匂宮の薫の心をもよく〳〵おしはかりての給ふなり

むねのひまある　箋薫の胸中の鬱氣の散するとなり

宮もかの人ちかく　秘匂宮中君を京へわたすへきよしの給ふなり箋

いとうれしき事にも侍るかな　秘薫の悦ひ給ふなり

あいなく〳〵みつからのあやまちとなん　弄薫の中君の事をあしく〳〵しなし給ひしとあね君のおもひ給ひしとなり　秘薫の嫉妬せし事なれはなり大君も薫のあやまちのやうに思ひ給ひし事となり

あかぬ昔のなこりを　箋大君の事なり

もしひんなく〳〵や覺しめさるへきと　秘匂宮のうたかひ給ふてはさなり箋

かのこと人とな思ひわきそと　秘大君のゆつり給し

事なり箋
いはせのもりのよふことりめいたりし　河「戀しく　奥入伊行釋
はきても見よかし人つてにいはせのもりのよふこ
鳥かも「萬かみなひのいはせのもりのよふこ鳥いた
くなきそわか戀まさる鏡王女　按之此兩首猶今
の心に叶さる歟薫大將に姉君の中君をゆつられし
事をは兵部卿宮にかたり奉れともまさしく會合の
事をのこしたりといふ心也其よし（まゝイ）の本歌さためて
有へき歟猶可尋以上河　花いはせの森のよふこ鳥
の事しかと叶たる古歌は侍らねとも心をとりてい
はゝ戀しくはきてもみよかしの歌大かたは相違な
きにや人つてにいはせの森のよふこ鳥かもは人つ
てならぬといへる心なり又いはせの森をいはたの
森とかける源氏の一本ありと云々　弄中君にかほ
るの一夜契り給ひし事ありき其事をいへり戀しく
はきても見よかし此歌をひけり人つてならて物い
ひしことなり云々一禪よふこ鳥めいたりと書るは
人つてならてといふこゝろなり　秘戀しくはきて
もみよかし人つてに云々人つてならてあひ見し事
のありしとなりされはへたては有ましきといふへ
きをそれをはいひのこし給ふとなり　花鳥の義可
然箋同
心のうちにはかくなくさめかたき　秘薫の心中殊勝
なり
くやしき事やう／＼まさりゆけと　箋是か浮舟の事
をかき出へき下地（シタヂ）なり
あるましき心もこそいてくれ　箋かやうに薫の用意
有つるさへ匂宮の六君へかよひ給ひて中君へとた
へありし頃薫もとかくかゝつらひし事ありしなり
それによりて中君の浮舟を思ひ出て引合せられし
なり
さてもおはしまさんにつけても　秘薫のとりもち給
はては誰かはとなり　箋二條院へ中君のわたり給
ふ事なり
かしこにもよきわかうそ　秘宇治宮なり
このふしみをあらしはてん　花かくしつゝわか世は
へなんすかはらや伏見のさとのあれまくもをし
今按宇治のふる宮をあらさん事をいはんとて此ふ
しみをといへり以上花　弄いさこゝにの歌をひけ
り我世をもへさしてあれなん事を思りされはふし

みをさかけり歌の心をとれり里の名にはかゝはら
す　秘中君の心なりいさこゝにわか世はへなむ云
云の心にてかけり此まゝにてこゝに住はつへきと
なりやかて前の巻にもふるの山里いかならんさ宇
治をふるの山里にしなしよめるなりこゝも伏見を
宇治になし詠するなりまことの伏見のさとにはあ
らすかきさま殊勝なり　箋引歌いさこゝに我世は
云々これは此里をさいふなり我世はへなんさ下に
ふまへたるなり　私八宮のかろ〳〵しく此山里を
あくかれ給なゝとの給ひし事前に見えたり　河伏
見在大和國日本紀云安康天皇崩菅原伏見野中陵葬
「すかはらや伏見の里のあれしよりかよひし人の
跡はたえにき　あらしはてんといはんために此ふ
しみといへる歟宇治をふしみといふにはあらさる
なり　此本歌は大和國にすかはら伏見といふ所な
りかしこの仙人のよめるなりこれを本歌にて菅原
院をふしみともいふなり
さりとても又せめて心ではく　秘中君の心あはれな
り箋
たけかるましく　箋うしろたての强かるましき心也

あさからぬ中のちきりもたえはてぬへき　秘かくへ
たゝりては匂のかよひ給ふ事もたえ〳〵にのみあ
りぬへき事をの給ふなり　箋匂の中君をうらむる
なり
いかゝすへからんと　中君のおもひよわる心なり
きさらきのついたち頃　箋二月はしめころなり
花の木(々イ)とものけしきはむも　秘庭の梢なり　箋つほ
みわたる體なり
みねの霞のたつを見すてんこともおのかとこ世にて
たにあらぬ　河(古)「春かすみたつを見すてゝ行かりは
花なき里にすみやならへる　おのかとこよとは歸
鴈によせていへるなり　常世(トコヨ)日本紀　蓬萊(トコヨ)山　同上
花おのかとこよとはすまの巻にも見えたり故郷の
事云なり　優婆塞宮の昔の京のやけたりし所をい
ふなり　弄春霞たつをの歌を取てかけり宇治山里
にて嶺のとかける妙(體イ)なり　秘春霞たつを見すてゝ
行鴈はの歌にてかけり悉皆わか身を鴈に比してい
へり本歌は春霞とあるをこれは宇治の山里にての
事なれはみねの霞とかけりおもしろし　箋今わた
り給所も中君の故郷ならぬ事をいへり春霞たつを

見すて丶かへる鴈は我故郷へ行也花の木々もさかきて嶺の霞のたつを見すてゝなとおもしろくかけり 秘とこよとは古郷をいへり須磨に見えたり中君は都にて生れ給ひし人なれはもとよりの宮はやけてあらぬ所に歸り給ふを云なり弄

よろつにつゝましく 山里よりふと都へ出給ひて人おかしき事なとありてはとの中君の遠慮にて恐怖し給ふなり

御ふくもかきりある事なれは 河「かきりあれはけふぬきてつ藤衣はてなきものは涙なりけり道信朝臣 花あねの服は三ヶ月なり 秘大君十一月にうせ給へり九十日服なれは二月にぬきたまへり箋法度ある事 見河海

みそきそあさき 除服事なり 河原に出て解除するなりあさきは兄弟の服三月なり限あることなれはぬきすて給へともこゝろには父母の服のことくに着せはやとおもはるゝ故にあさき心ちすると云なり 花みそきもあさきとは輕服のまゝをいふ也いつれも除服の時は河邊にてはらへをする故に川のあさきによせて云り 秘中君の心なりあかす思ひ給ふなり箋 弄あさく思ふに似たりとなり

おやひとゝころは 秘母上をはみ給はさる事なり姉君を母のことくに思ひ給ふ事なり母をは見給はて過にし人なり 箋中君の誕生の時母北方はうせ給へり

さるへきゆゑもなきわさなれは 箋かきりあれはけふぬきすてつ藤衣の歌なとをおもひてかけり

御車御せんの人々 私御祓に河原にいて給はん用意なり

はかせなとたてまつれ給へり 弄除服の祓のためなり 女にもはかせをそふるなり 秘女にもまもりのため太刀なとそふる事あるとなり愚案はかせは陰陽博士なるへき歟御はらへのため御使にそへて陰陽師をたてまつられたるへし 箋太刀の事といへるは非なり除服には必陰陽師なくてかなはぬなり 神祇官とも用あり

薫はかなしや霞の衣たちしまに花のひもとくをりも來にけり 一説中君歌なりと云々いかゝ是は薫の歌にて然るへし今日の中君の御祓を思ひやりて大君の事を昨日けふと思ひしにはや中君の除服にもなり

けるよとなり箋　弄薫歌なり此義可用歟中君のうへを思ひ給ふなり或説云中君歌なり此歌除服して常の衣に程もなくかへぬる事のはかなき心とみるへし花のひもとくを面白き心にては中君のと心得にくけなるへし霞の衣花のひもとく春の歌なれはなり　霞の衣は服の事によそへたり花のひもとくは除服の事なり

けに色々いときよらにて　秘けにとは歌をうけて草子地にかけるなり

御わたりの程のかつけ物　秘京へ出給ふへきの料なり京にて人々にも給はるへき物共なり弄

をりにつけてはわすれぬさまなる　秘薫のねんころに心はこひ給ふ事也

ふる人とものこゝろにはかゝるかたを心にしめて　弄實なるかたに心よれり　秘物なと參らせ給ふ事をいへり

わかき人々は　弄好色に心をよするなり

みつからはわたり給はんものあすとての　秘薫宇治へわたり給ふ事は二月六日なり中君は七日に京へわたりいとまこひにわたり給へるなるへし

まらうとゐのかたに　秘客亭なり

いまはやう／＼物なれて　秘大君おはせはとなり

我こそ人よりさきに　秘大君をまつ京へうつすへしと思ひし物をとなり

さすかにかけはなれ　秘あまりに大やうにせしゆゑそとなり　私此段は中君の事を我物にてもみん物をと思ふ薫の心歟

かいま見せししやうしのあなも　秘椎かもとにありし事なり

この中をはおろしこめて　箋人のなき故にかけまはしたるなり

うちにも人々　秘大君の事を思ひつゝるなり

うちひそみあへり　箋うちしほれなとしたる體なり

中君はましてもよほさるゝ御涙の川にあすのわたりもおほえ給はす　河催さるゝなみたの河にあすのわたりの詞の奇絶無比類者也　秘河によせていへり京へ出給ふへきことなり箋　花京へわたり給はむ事あすとての事なり　箋中君のなみたなり涙の川名所なり是は只涙なりあすのわたり川をうけていへり　花此詞尤妙なり／＼

月ころのつもりも　秘薫の人つてにの給ふ詞なり
いとゝあかぬ世の心ち　秘外様むきなるとなり　私
大君のおはしまさすことのさまもかはりゆかん事
をいへり
はしたなしと思はれたてまつらんとしそ　弄中君の
詞　秘中君の返事なり更に（さるにイ）さしはなつとは思はさ
れともとなり箋
いと心はつかしけに　秘薫くさまなり　箋薫のさま
也中君の心なり
ひめ君はおもかけさらぬ人の御事をさへ　河故姉君
の事なり　弄あね君の事を思ひ出て薫をあはれに
見給ふなり箋　秘大君のましまさはあひしらひ給
ふへき物をと薫をも名殘と（にイ）おもひ出給ふなり
つきせぬ御ものかたりなとも　弄あね君の事なり
けふはこといみすへくやなと　箋中君の匂へ御わた
りの前なれは薫の用意なり弄
わたらせ給ふへき所ちかく此頃過してうつろひ侍へ
けれは　秘匂宮は二條院へ中君をむかへ給ふへしと
なり三條宮へ薫もうつるへきとなりされは程ちか
かるへしとなり箋　中君のわたり給ふへき所は二
條院なり薫は三條宮つくり出てわたり給ふへき故
に程ちかゝるへき事をいふなり　弄二條院も薫の
三條宮作はて給はむ時分にてちかゝるへし
つき／＼しき人のいひ侍る　花むつましきとちは夜
中曉ともいはすいひかはす事なり　弄夜中曉とさ
したる人はいはぬ事にや　箋世上に懇切にいひか
はす事を俗にかくいひならはせるなり　秘つきつ
きし世俗にいふことなり次々しなり　私つきつき
歟　次々むつかしき義なり
人の心さま／＼に侍る世なれは　秘中君の御心はい
かゝとなり　箋我心には隨分とおもふ事をもむか
ひの人のさほとにうけぬ事のあるをいへり
やとをはかれしと思ふ心ふかく　河古業平一今そし
るくるしき物と人またんやとをはかれすとふへか
りけり　此外に宿をはかれしといふ歌ある歟只（但イ）又
詞にもいふへきなり　花中務集「花の香のつまを
忘れぬ春ことに宿をかれにし君をしそおもふ　弄
中君詞或本里をはなり心同宿をはかれすとはんと
思ふ物をちかくなとの給ふはなほさり也となり
秘引歌いつれも不叶歟一義は此宿をはかれす侍は

つへきと思物をかくの給ふよとなり又の義は薫の前の詞をうけていかに遠路をへたて給ふとそ中かよはすへき物をちかくなとの給は猶もへたてたる心ちするとなり此義可然なり　箋本に點あり引歌あり云々但歌に及さるなり中君詞なり此宇治の里を出ましきと思ふ物を薫の出京の事を定め給ふよとなり　私秘の始の義并箋の義尤可然前には此伏見をあらさん事を思ひあすのわたりもおほえ給はすといひ宿をはかれしとかける皆此山里をしたふ一意なり

ところ〳〵いひけちて　箋中君の薫へ直にの給ふゆゑなり

いとようおほえたまへるを　秘大君に似たるとなり　箋

いとくやしく　薫の心中なり

そのよのことかけてもいはす　箋大君のはひかくれ中君とそひふし給ひし時の事なり薫の心ある用意なり

うくひすたに見過しかたけに　たにといふ字に心をつけてかけり

春やむかしのと心をまとはし給ふとちの　河伊勢物語「月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつは本の身にして　弄引歌業平の二條の后の事を思ひしによそへたり　秘引歌の詞をかりたるはかりとみえたれと下の心は二條の后を業平の昔にかはらぬ心をなけきたる心あり在五か心と薫も同かるへしとなり箋　心をまとはし給ふとちは大君を思ふ心は中君も薫も同事なり

たち花ならねとむかしおもひ出らるゝつまなり　河古今「さ月まつ花橘の香をかけはむかしの人の袖の香そする　秘つまとは端なり弄同　箋引歌さ月まつ云々

つれ〳〵のまきらはしにも　秘大君の此花をもてあそひ給ひし物をとなり　弄もて大君のこの花をあそひ給ひし物をと姉君の事を思ひ出し給ふ又今立はなれん事を思へり

中君
みる人もあらしにまよふ山里にむかしおほゆるはなの香そする　弄中君歌なりわか身のまよひ出る心もあり又姉君のなきことにもきこゆ　此義猶可然歟以上箋　秘大君の事を薫のおはしますにつけて一

入思ひ出たるなり箋　箋中君の此山里をいつる心と云義あれとも不用之　箋是は大君の事を思へり
見る人もあらしさかけたるなり　私みる人もあらしにまよふとは中君の京へわたり給ふに心もうきたるやうなるを云へし其折節から梅の匂ひに一入大君の事を思ふ成へし又薫の愛へおはしたるをうけていへる成へし
なつかしけにうちすんし　秘薫のすんし給ふなり
河歌薫 袖ふれし梅はかはらぬ匂ひにてねこめうつろふやとやことなる　河後撰「垣こしにちりくる花をみるよりはねこめに風のふきもこさなむ伊勢　弄中君を姉君のかたみとよめる歟袖ふれしとは薫の一夜の心もあるにや此心はをりに似合さる歟云々ねこめは根なからなり中君の京へうつり給はん事なり本を根なからうつす事なり　秘中君をむかしのかたみと思ひてこそあるに只今都へ出給ふは木を根なからうつしたるかことしとなり根こめ云々　箋中君の事をいへり根こめは根なからなり匂へ定り給ふを云なり　私薫の一夜の事も心にこもれりと見えたり

たえぬなみたをさまよく　秘薫のさまなり
ことおほくもあらす　箋薫のさまなり
このやともりにかのひけかちのとのゐ人　箋宇治の宮の留守居にかのとのゐ人なとなり
みさうともなとに　箋是は薫の領知宇治の近邊なり
かたちもかへてけるを　秘辨の尼又髪をおろしたるなり弄箋
しゐてめしめてゝ　秘薫のめし出し給ふなり　弄一説さけ居とみゆ
いとあはれに見給ふ　箋薫の心なり　柏木八宮大君のかたみなり
こゝにはなほも時々　秘薫の詞也
いとたつきなく　箋薫の時々こゝへおはせんに便あるましきよしなり
いとふにはえてのひ侍る命を　河「にくさのみます田の池のねぬなはのいとふにはゆる物にそ有ける　後「あやしくもいとふにはゆる心かないかにしてかはおもひやむへき　引歌命の殘りたる心はかりなり秘　箋不及引歌云々
うちすてさせ給ひけん　秘大君の事我をすて給ふと

なり箋
なへての世を思ひたまへしつむに　河拾「大かたの
我身ひとつのうきからになへての世をもうらみつ
るかな箋
つみもいかにふかく侍らんと　秘かやうの事を思ひ
つゝけるゆゑにや
いとよくいひなくさめ給ふ　薫のあひしらひなり
ひたひのほとさまかはれるに　秘さけ尼の時にさま
はかはりたるなり　弄さけ尼の時にさまかはりて
しらかなとのなき事なり
さるかたにみやひかなり　箋よし〳〵しきさまなり
河閑麗(ミヤヒカ)　又窈窕(ヨウテウトミヤヒカナリ)　文選　又閑(ミヤヒカ)　白氏文集　又臘納(ナツトウ)遊仙窟
おもひわひてはなとかゝる　秘大君を戀しくおもひ
給ふによりてさま〳〵の事を思ひ給ふなりかたち
をもかへさせ奉りてかけとゝむる事も有へき物を
と思ひ出給ふ也
けにむけにおもひほけたる　秘辨かさまなり
辨尼 さきにたつ涙の川に身をなけは人におくれぬいのち
ならまし　花さきにたつ涙のみちにさそはれてかき
りのたひと思ひける哉　弄姉君の事を思へり　秘

人におくれぬとは心のまゝならは大君におくるま
しきとなり　箋物思ひにさきたつ物は涙川なりそ
れに身をなけは大君におくるゝ思ひはあらしとな
り面白歌なり
うちひそみきこゆ　箋うちしをれたるさまなり　秘
なくかたにはあらす
それもいとつみふかゝなる　秘こゝを法文になして
辨をなくさめ給なり　箋薫の詞なり四十八數の十
重禁戒とて十戒になしそれを五戒にしても第一は
殺生戒なり我と身をなけなとするも殺生戒のうち
なれはなり
かのきしにいたる事　花波羅密の梵語を譯して到彼
岸といふなり　此段よく〳〵思ふへし彼岸にいた
る事なとか有ましきとも定めんとなり　秘入水な
とをしては佛の制戒にたかひ侍れは彼岸にいたる
事かたかるへしとなり　箋殺生戒を破りては彼岸
にいたらん事かたかるへしとなり　私なとかさし
も有ましきと事にてさへとは我と身をなけなとして
は彼岸にいたりかたし又たとひ彼岸に到る事のさ
はりにならすとも先ふかき水底にしつみはてん事

は心うかるへき事そこ到彼岸の事をさしおきても思ひわき給へとの給ふなり

なへてむなしく思ひさるへきよに　秘　諸事むなしく思ふへしとなり弄同　箋　命をなかくとも見しかくとも思ふは罪障なりたゝむなしく思ひなして過すへき世そとなり

返薫 身をなけん涙の川にしつみても戀しきせゝに忘れしそせし　花　拾「なみた川そこのもくつと成はてゝ戀しき瀬々になかれこそすれ　順　弄　空しくとの給ても猶思ふかたの事は切にて忘かたき御心なるへし　秘　人をはかく教化しての給へとゝ身はなくさめかたきとなり　箋　身をなけても人の性はくちぬ物なれは人を戀る執心ははてしとなり

はてもなき心地し給ふ　秘　無始無終なり

人のとかむる事やと　弄　二夜まてとまりなは匂宮もやうたかひあらんなとおほし召ける也　秘　匂宮の所を思ひ給ふなり箋　私弄に二夜まてとまりなはといへる不審是は薫の宇治へおはしたる其日（春イ）の夕なるへしつとめておはしたるとわり朝とくよりおはせしなるへし

おもほしの給ひつる　秘　中君の御前にての語なり　箋　薫のさまを辨か中君へ申すなり

みな人は心ゆきたるさま　箋　宇治にさふらふ人々なり

いよ〳〵やつして　秘　辨なり箋

返辨尼 人はみないそきたつめるそてのうらにひとりもしほをたるゝあまかな　河　後撰「から衣袖しのうらのうつせ貝むなしき戀にとしのへぬらん國房　秘　新古「なかゐするあまのしわさと（なイ）みるからに袖のうらにもたつ涙かな讀人不知　同　辨君なからへたる有様なかゐするあまによせたるにや　私袖浦出羽國と云々　獨藻汐をたるゝあまかなゝるへしもの字てにをはにては有へからす

うれへきこゆれは　中君へ辨尼の事をかくいへり人のいそきたつをうらやむ心にては有へからす

返中君 しほたるゝあまの衣にことなれやうきたるなみにぬるゝわか袖　河　後撰「心からうきたる舟にのりそめてひとひも浪にぬれぬ日そなき　弄　中君の歌なりこゝなれやとは辨尼か袖にもおとらす同し事となり　うきたる波とは匂宮の方へ行もうきたると也

心からうきたる舟にの歌にもかよへり　秘中君の歌なりことなれやとはここならすなり尼公の袖にもおとらすとなりうきたる浪とは都へのほり給ふ事なり引歌河海に心からうきたる舟云々の歌よく叶へり此歌結句のつまりたる悪しきなり

世にすみつかん事も　秘中君辨にの給ふ詞也　箋中君の詞匂宮の心を思ひうたかふなりされは又変へ立かへる事もあらんほとに宇治の里をあらさしと思ふとなり

かゝるかたちなる人も　秘尼なるをいへり

むかしの人のもてつかひ給ひし　秘大君なり　箋大君の調度ともを辨の尼にのこしおき給ふなり

かく人よりふかく思ひしつみ給へるをみれはさきの世も　私中君の詞なり　秘大君を一段戀慕するをよそともおほしめさゝるとなり　弄辨かなけく事のふかきを云姉君の事を思ふなり　河「さきの世にいかなる事をちきりけんむかしの世こそしらまほしけれ

わらはへのこひてなくやうに　弄子の母をこふるににたりとなり　辨の尼のさまなり

みなかきはらひのこひて　秘掃除するなり　供奉の衆の車とも

御車ともよせて　秘御むかへなり

有へし

御みつからも　秘匂宮なり

心もとなくおほさる　弄我もむかはて心もとなきなり

たゝこの殿より　箋薫の懇にとふらひ給ふとなり

心あはたゝしういつちならんと　秘中君の心なり箋大輔の君といふ人のいふ　中君の官女なり

大輔君 有ふれはうれしき世にもあひけるを身を宇治川になけてましかは　河六帖三「いのりつゝたのみそわたる初瀬川うれしきせゝになかれあふやと　後撰傒仲「心みになほおりたゝん涙川うれしき瀬にもなかれあふやと　九條右大臣集「かゝる瀬もありけるものをとまりゐて身を宇治川とおもひけるかな　秘六帖三「いのりつゝ頼そわたる云々九條右大臣集「かゝる瀬も有ける物を云々兩首の歌の心なり　箋入水の事にてはあなかち有へからす身を用なき物に思ひ捨たらはけふのうれしき世にもあはしと心やりてよめるなり　弄祈りつゝたのみそわたる

の歌の心なるへし
辨の尼の心はへこよなう　秘中君の心に辨尼の心はえにはかはりたりと心あさくみなし給へるなり箋
今一人過にしか戀しきこともわすれねとけふはた先もゆくこゝろかな　秘此歌はたゝうちむきたる道理なり
將先（ハタマツ）　弄いまひとりとは車にのるへき女房なるへし　箋此今一人とは誰とも見えす此歌はましたるなり過にしは八宮大君の事にて只大君はかりにて可然歟
いつれそとしへたる人々にてかの御かたをは　弄此女房ともは姉君に心をよせたりし人なりいつしか中の君の事にのみ心を入て事いみなとするとなり　秘大君に心よせし人々今はかく名殘もなく思へるさまをいへり　箋中君の心に此人々の事いみなとするをかへりてつらくみ給ふなり
みちのほとはるけくはけしき山みち　秘中君は此道をはしめて見給へり　箋はけしき山道とかける面白し嶮岨なる道ならねとも中君の見ならはぬ心に思へるなり
つらきにのみ思ひなされし　秘匂宮のたえ〱なりしも今ことわりに思ひ給ふとなり箋
七日の月のさやかに　箋道にてくれたる様なり
中君なかむれは山より出てゆく月もよにすみわひてやまにこそいれ　秘わかわりさまに月はかはりたるをいへり　箋月は山から出ても住わひぬれはこそ山へはいるらめとなり我は今出るを云り此五文字たやすくおくへからさるなりと云々此歌には叶へりと云々思惟してなかむる心ありと云々　私中君の山里を出て行心からみれは空の月は山を出たる物なれとも世にすみわひたれはこそ只今山へはいらんとするらめと出て行わか身も思惟あるへき事そと遠慮したる心なるへし我身もさやうならんするそとなり
さまかはりてつゐにいかならんと　秘我は山里をいつる事をいへり弄
ゆくすゑうしろめたきに年ころ何事を思ひけん　秘匂宮にあひ見さりしさきは何事か思ひしとなり弄　箋かやうに中君の京へ出給ひて匂宮の疎遠ならはいかゝあらんとなり宇治にては遠路のかこつけもあるなりそれにて思ひし事は物の數にもあらすと

なり

このつくりのみつはよつはなる中に　河古今「この殿はむへもとみけりさき草のみつはよつはに殿つくりせり　箋此二條院はめてたき所なり桐壺の更衣より源氏紫上なとへつたはりて又匂宮の御傳領となり

御車のもとにみつからよらせ給ひて　秘嫁娶の禮なり　箋匂宮と等輩の禮歟中君も宮の御むすめなれはなり

いかはかりの事にかと　秘始はいかゝとおほつかなく思ひし事の只今かく定り給ふを云り　弄匂宮の心好色過たるにいかはかりの事にて中君をかくし給ふならんと思ひしにかく定り給へは人々いかめしく思へり　箋はしめ宇治へおはしましゝ時の事をいかゝと人々思ひつるとなり　今は明石中宮内内の御許容となり

おほろけならす　河不少縁

廿日あまりのほとにわたり給はんとて　薫の三條宮を新造ありて同月廿餘日に移徙有へしとなり

このほとは日々に　弄三條宮を作り出す時分なり

薫の事也

この院ちかきほとなれはけはひもきかんとて　二條院三條宮程ちかしとなり宇治よりわたり給へるさまを薫のゆかしくて夜ふくるまて三條宮におはせしとなり

御心にいりてもてなし給　箋匂宮の御懇切の體とさなり

うれしきものから　箋薫の心中なりうれしき物から悔しきなり

ものにもかなやと返々　河「とりかへす物にもかなや世中をありしなからの我身とおもはん　秘とりかへすものにもかなやとおほすなり箋　弄引歌しなてるやにほのみつうみにこく舟のまほならね（ぬイ）とも逢みし物をとそいひくたさまほしき　河いひくたす腐也　河萬「しなてるやにほの水海にこく舟のまほにもいかてあひみてしかな　此歌大略同物也然るに先達云萬葉歌とり過す強非難云々　或又伊勢物語にもはしめてよみたるやうにかきて萬葉歌あまた有淺香山の歌以下也作物語なとは可然事常の事也空蟬巻に勘たり中古まても法性寺關白くに

つみかみの浦さひてと詠し後徳大寺左府なからの橋をきてみれはなとよまれたりしなてるやは水海の總名なりにほてる同心なり白氏文集に湖光とかけり此事歟或は又難波にかきる堀江をさしていへるといふなり云々おしてるは塩海也　弄　萬葉歌にすこしかはりたり子細見河海てると云心にしなてるとよめるなりにほてると云なり片岡山のしなてるにはかはるへし　其義はしなひてるかた岡山と夕日なとのかたふきたる心なり　秘　萬葉の歌をすこし引なほすなり河海に見えたり薫の我身まほならねとあひみし事はありにし物をとなりしなてるこれは湖光の心なるへし日本紀にしなてるやかた岡山とよめるは別の事なるへし只かたといはんとてしなてるやあすか川なともよめり　萬九しなてるやにほの湖に云々河海に萬葉をとり過すと云々（るへからすイ）然共歌をとるにてはあるへからすわさとその歌にて心をのへてしかも末を言かへたるなり箋　又式子内親王萬葉をとりて「にほの海やかすみのうちに漕舟のまほにも春のけしきなるかなまほは兩義あり　箋　これは薫の古歌の末を取て言かへて口すさみたるなり本歌はまほにもいもにおひみてしかなといへり薫は實事なかりしかともそひふしは給へる故にまほならねと（ぬイ）もあひみしものをといひくたしたきとなり中君を人の物に見なして後悔の心から色々に薫の思へる心なり是三光院の説なり稱名院同心と云々仍秘の奥に被註之畢

右の大殿は六の君を　箋　夕霧なり六君かたちよしとみゆ　藤内侍腹なり

思ひのほかの人を　中君の事なり

このほとよりさきにとおほしかほに　箋　六君の事よりもさきへと中君の御わたりをいそき給へるやうなれは夕霧腹立の心あるなり

見なれ（はイ）おはすれは　匂宮は六條院にも住給へは夕霧とも同し四町のうち也　今は中宮わたり給ふゆゑに二條院に匂のおはするをいへり

御ふみはとき／＼　秘　六君のかたへ匂の文あるなり

弄箋

御もきの事世にひゝきて　箋　六君着裳事　六君裳き「ありてやかて匂宮へむかへ給はんとて夕霧のかまへ給ひしか中君におされて思ひとゝこほりぬとて

もきをのへ給へは人わろしとなり
おなしゆかりにめつらしけなくとも　花夕霧大臣と
薫大將とは兄弟のよしなり箋
此中納言をよそ人にゆつらんか　薫を人のむこにな
さなさんは口をしきと夕霧のおほすなり　是も匂
宮の御心のさのみおもむかぬやうにし給ふ故にか
くおほしける成へし
こしころ人しれぬ物におもひけん　箋大君の事をい
ふなり
けしきさらせ給ひけれと　箋夕霧六君の事人して薫
への給ふなり
身もゆゝしくおほゆれは　箋薫の心我身もいま〳〵
しきそとなり
此君さへおほな〳〵こといつることを　私懇に思ひ
よりてと夕霧の思ふなり　秘此君は薫なりおほな
おほなとは懇にいへる事をさなり弄箋　弄薫の事
なり匂宮もうけひかすとなり箋　言出（コトイツル）
心はつかしけにものし給へは　箋薫のさまなり心ふ
かき人なる故に夕霧の兄弟なれともしゐてはえの
給はすとなり

花さかりのほと　箋三月なるへし
二條院のさくらを　弄薫の見給ふなり
ぬしなきやとのさまつ思ひやられ給へは心やすくや
なと　河「うゑてみしぬしなきやとの櫻花色はかり
こそむかしなりけれ「谷ふかみみる人もなき櫻花
こゝろやすくや風にちるらむ　花拾遺「あさち原
ぬしなきやとの櫻はな心やすくや風にちるらん惠
慶　今按下の詞に心やすくやなと有惠慶か歌の心
に叶へり　ぬしなきやとは宇治のふる宮をいふな
り　弄引歌あさち原ぬしなき宿云々宇治宮の事を
思ひやり給ふなり　秘薫宇治を思ひやり給へり花
鳥にひかれたる淺茅原の歌可用之引歌あさちはら
ぬし云々箋　古「うちつけにさひしくもあるか紅
（淺茅原イ）葉々もぬしなき宿はさひしかりけり
宮の御もとより　弄匂宮事　匂へ薫の參り給ふなり
此前に三條宮へ薫はわたり給へるなるへし
こゝかちに　秘二條院なり　箋二條院の對にのみ匂
宮のおはするなり
されとしちの心は　河實なり　薫の眞實に中君をお
もひうしろみたるとなり

れいのいかにそや　秘さりかへす物にもかなやの心
なり箋
御車のさうそくして　箋車の具ともなり匂宮參内あ
る用意なり
たちいて給ひて　秘中君の御方に薫の參り給へるな
り
たいの御かたへ　弄中君のかた　中君をいふなり
山さとのけはひ引かへ　箋宇治の山里なり
わらはのすきかけ　箋女わらはなりそれして參り給
へるよし案内し給ふなり
むかしの心しれる　宇治にてなれし人なるへし　箋
あなたよりおとなの出るなり　弄薫のことをしり
てつたへなれし人なり
朝夕のへたてもあるましう　薫の詞也　箋夜中あか
つきなと前に宇治にての給ひし行末なり程のちか
きをいふなり
なれ／＼しきとかめや　箋匂宮の御心中いかゝと也
世中かはりにたる　箋宇治のやうならて結句對面も
かたきをいへり
おまへのこすゑもかすみへたてゝ　弄薫の心に我を
へたて給ふといふ心あり　秘中君の方よりへたて
かましきと也　箋前に二條院の櫻の事ありてぬし
なきやとのなとなかめし事なり　大君の事を思ひ
いへるなり
うちなかめてものし給けしき　薫のさまなり
けにおはせましかは　秘中君の心なり　大君のおは
せましかはとなり　箋薫のなかめ給ふさまにて大
君の事をけにと中君の思ひあたるなり
かたみに花の色鳥の聲をも　弄中君のこゝろにふか
く姉君を思ひいて給ふにこそ（よくイ）如此詞あまた所にあ
る也　秘前にも此詞の面影ありふかく大君を思ひ
給ふ故なり
くちをしきことそいとゝまさりける　秘かく世にも
出給ふやうなるにつけては一入思ひ出給ふなり
人々もよのつねに　箋おまへの人々なり秘
いましもこそ　弄中君の御身のいかめしくなり給ふ
へき時となり　秘中君の薫へ隔心あるましきさま
に人も申しらする心なり　箋今しもこそは中君匂
宮へさたまり給へは人の疑も有ましき時そといふ
なり

人つてならす　秘中君のおもひやすらひ給ふなり
やすらひ給ふほとに　中君薫へのあひしらひをとか
　くやすらひ給となり
宮いて給はんとて　匂宮の參內あらんとて中宮へい
　とまこひにおはしたるなり
なとかむけにさしはなちては　秘匂宮の詞箋　箋薫
　としたしく有へきさまにの給ふなり
御あたりには　宇治の宮にて姫君たちへのありさま
　なり
あやしと思ふまて　不審のたつ（たうつイ）ほとなりしとなり
わかためはをこかましき　箋昔薫と中君とのあはひ
　いかなりつらんとなり
さはありとも　あまり心ゆるひせんも　弄ゆるいとよ
　めり
一かたならす　箋匂のかく色々にの給へは一かたな
　らすくるしきとなり
わか御心にもあはれふかく　箋中君の心なり
かの人も思ひの給ふめるやうに　秘薫なり
いにしへの御かはりと　中君の心なり　箋薫は中君
　を大君の名殘と思ひ中君も薫をさやうに思ふなり

されともその心のあらはさんことはにほふ宮のと
やかくややすからすの給へとなりかたしとなり
かた〳〵にやすからすの給へはくるしうおほされけ
り　中君の心なり

岷江入楚第五十　寄生

私年立には廿二三四歳の由載之　花鳥には廿一歳の夏より廿二歳の春までとあり

廿三歳　中納言（年イ）　年立には廿二歳云々　私是は早蕨の前の事なり猶奥載之

藤壺女御御腹女二宮之御事

夏母女御卒去依之女二宮御裳着延引之事

四十九日過後女二宮參內之事

秋末行幸女二宮藤壺御覽菊事

與二源中納言一打碁給事

夕霧左大臣六君御事　右大臣とかける本有わやまれるなり

按察使大納言紅梅の御方事　此時按察大納言は右大臣なり然とも按察大納言といはれし時分より兵部卿宮は中君をおもひかけ給へるによりてもさの宮をかけるなり物語作者の詞なり

廿四歳　中納言　年立には廿三歳　私花鳥には廿二歳とあり諸抄廿四歳云々早蕨同時なり

夏女二宮御除服賜事

御門以二女二宮一欲レ令レ嫁二於源中納言一給事

源中納言不レ忘二故宇治之姫君一事

夕霧六君可レ嫁二兵部卿宮一事　可レ爲二八月一事

宇治中君自二五月頃一懷孕之事

八月源中納言折二權花一參二二條院一奉レ見二中宮一事

此次色々物語事

十六日兵部卿宮嫁娶之事　左大臣六條院東御殿云云

二條院中君獨詠給事

明日兵部卿宮奉二文於六條院一事

兵部卿宮與二二條院一中君御物語之事

六條院御返事持參事　繼母落葉宮六君給事

兵部卿宮出（參於イ）二六條院一給事

三日夜餅之事

源中納言出六條院給事

源中納言宿（給イ）二按察使君局一給事

兵部卿宮晝見六君給事廿一二歳云々

兵部卿宮出二二條院一給事難有事

中君遣二文於源中納言一事　可下出二宇治一給上事

又之日源中納言參ニ二條院一給事
隔几帳對面之事　押ニ入母屋中一不レ及ニ實事一明日
奉レ文事
兵部卿宮渡ニ二條院一給事
恠〔怪イ〕ニ中君移香給事一　二三日留賜事
源中納言送ニ衣裳於二條院一事
源中納言常奉ニ艶書於二條院一事
源中納言又參ニ二條院事
入簾中夜居僧座給事
中君語ニ於手習君一事於源中納言爲ニ故姫君形代一事
九月廿餘日源中納言出ニ宇治宮一事
召ニ出辨尼一對面事　召ニ阿闍梨一仰ニ御忌日經佛一事
壞ニ宇治故宮一可レ爲レ寺事
源中納言其夜留ニ宇治一與ニ辨尼一昔物語事
源中納言問ニ形代事於辨尼一云々委語申之事
古宮御子也母同ニ中將君一云々後爲陸奥守之妻陸奥
守又爲ニ常陸守一云々女歲ニ二十歲許云々
於宇治折ニ蔦紅葉一獻ニ二條院一給事
兵部卿宮見之中君有ニ文返一事
菊盛兵部卿宮與ニ中君一合ニ物音一事

夕霧大臣參ニ二條院一給事
廿五歲　正月任權大納言兼左大將　年立には廿四歲
云々
自ニ正月卅日一中君惱給事
直物日源中納言任ニ權大納言一兼ニ右大將一事
參ニ二條院一有ニ答拜一事
於ニ六條院一設大將饗事
兵部卿宮渡御
二月二條院中君誕ニ生男子一事
御産養事　碁手錢事
廿日餘藤壺女二宮御裳着事
又日大將參給事
御門賜ニ御文於大將母儀入道宮一事
宮之若君五十日事
大將參ニ二條院一給見ニ宮之若君一給事
三月晦日御門渡ニ御藤壺一事　藤花宴事　御贈物事
御遊事　大將賜ニ天盃一事　立文臺講ニ和歌一事　詞
云按察大納言われこそかゝるめもみんと思ひしか
云々　此按察大納言も紅梅の右大臣なり此人女二
宮の御母藤壺女御を思ひかけてその事かなはすし

てはては女二宮をえまほしく思ひ給へるなりそれはいまたあせちの大納言といはれ給ひし時の事なれば物語の家にかくかけり

其夜女二宮退二出大將之三條宮一事

四月大將出宇治造御堂事

常陸前司女自二長谷寺一下向之事

大將垣間見事

尼君對面大將殿給（女傳イ）事

大將消息常陸守母侍之事

寄生　或宿木　以レ歌爲ニ卷名一秘
花詞にはみ山木にやとりたる葛（蔦イ）の色とあり　河「や
とりきと思ひはてすは木の本の旅ねもいとゝさひ
しからまし　一名貞烏　私此名花弄秘箋等無ニ沙
汰一なり「かほ鳥の聲も聞しにかよふやとしけみ
を分てけふそたつぬる　花やとり木は歌にあり詞
にはみ山木にやとりたる葛（蔦イ）の色とありやとりきは
木のおやといふ物なり藥に桑寄生とてあり桑の木
に生す又楓の樹にも生すつたをやとり木といふは
木にかゝれる物なれは名をかりていへりまことの
やとりきにはあらさるなり薰廿一歳の夏より廿二
歳の春までの事あり二月に直物の次に任大納言兼
大將のよしみえたり　弄此卷薰廿三歳より廿五歳
までなり並にあらされとも竪横相交なり前の卷に
例あり別註之此卷には椎本の末より也總角には宮
の御月忌の事ありし年の事早蕨の春なとの事とも
りて又次の年に移れり卯月までの事なり　秘卷名
以レ歌號レ之薰廿三歳より廿四五の年まで三ヶ年の
事あり然は早蕨卷よりは前の事なり椎本の末より
あけまき早蕨の事もこもれり末にてみえたり總し
て前の事をいひ出せる事玉鬘の卷も玉かつらの君
四歳の年よりの事を書て末は源氏の卅五の事にあ
たる也この卷も藤壺女二宮の事をいはんとて前よ
りの事をかけるなり　これ物語の例なり箋　箋寄
生は寄一字をもやとり木とよめりこと木にやとり
たるをいふなり桑寄生といふかことし　東坡詩吾
生如寄生耳云々
その頃藤つほときこゆるは故左大臣との女御にな
んおはしける　花竹川卷に夕霧左大臣に轉するよし
みえたり此おとゝよりさきにうせ給へる左大臣を
いへりその人誰とも見えす系圖には藤壺女御大藏
卿修理大夫なとの父とみえたり今上は若菜下に位
につき給ふ春宮と申しゝ事はそれよりさきの事な
るへし此藤壺の女御は東宮の御時より參り給て女
二宮をうみ給へり女二宮は薰大將の室になり給ふ
人也　左大臣秘に梅かえの左大臣若菜上のも此人
なるへし　秘此左大臣を古き系圖には梅かえの左
大臣とありあやまり也　行幸より若菜上までの左
大臣なり　大藏卿　修理大夫　此二人女御のひと
つ御はらにはあらす　藤壺女御　今上春宮の御時

より参り給ひしか明石中宮におされ給ひき女二宮はかりをうみたてまつりうせ給ひしよしやとりきにみえたり梅かえに麗景殿ときこえし三君この人にや　秘左大臣の三君なり麗景殿と號せり明石中宮よりもはやく参り給へり又此左大臣ふるき系圖には梅かえの左大臣とあり誤なり行幸巻より若菜上までの左大臣なり箋　弄見系圖三君麗景殿梅かえの巻にありし中宮にあらそひ給ひし人々の内なるへし　箋その頃と云るは椎本の始をさしていふ成へし故左大臣とのゝとよむへし行幸より若菜上までの左大臣なり

また春宮ときこえさせし時　秘方々よりむすめをたてまつれる事なり　箋今上春宮の御時の事なり

人よりさきに　箋明石中宮よりもさきなり

中宮には宮たちさへ　秘明石中宮なり　箋前の事をいへとも明石の女御當時中宮なれはかくいへり

こゝら　箋多なりいつくにても同し

女みや一ところ　箋今上女二宮なり

わかいとくちをしく　藤壺女御の心なり

この宮をたにいかに行末の心なくさむはかり　秘女二宮なり

御かたちもいとおかしく　箋女二宮御かたちよしとなり

女一宮を世にたくひなき物に　箋明石中宮腹なり

ちゝおとゝの御いきほひ　秘父左大臣也　箋故左大臣攝政なとせし人は餘慶あることなり

ゆゑ／＼しきさまに　秘女御の御もてなしなり

十四になり給ふとし御裳きせたてまつり給　秘女二宮なり

つたはりたりけるたから物　箋左大臣のなり

女御夏ころ物のけにわつらひ給ていとはかなくて失給ぬ　秘椎本の夏なり薫朝すゝみに宇治へ行給ふ時分なり　箋宇治の大君よりもさきの事なり

内にもおほしなけく　今上なり

さるましき女宮なとまて　藤つほの女御の御さま然へきよしをかけるなり

宮はましてわかき御心ちに　秘女二宮なり箋

心くるしくあはれに　今上の御心なり

御四十九日すくるまゝに　女御の七七日なり

日々にわたらせ給ひつゝ　箋主上毎日女二宮をみと

ふらひたまふなり

おぢなとやうの　秘舅なり　外戚に可然人なきなり

大藏卿すりのかみ　秘みな左大臣の息藤つほの兄弟なりすりのかみは修理大夫なり弄　箋此二人女御の別腹と云々

御心ひとつなるやうに　主上の御心一におほしめしあつかふなり

おまへの菊うつろひはてゝさかりなる頃　花「古今秋をおきて時こそありけれ菊の花うつろふからに色のまされは　秘「うつろひはてすしてなりうつろふからに色のまされはの心なり

まつこの御かたに　箋時雨の空のあはれなるにも先女二宮を主上の御覧しとふらはせ給ふなり

うつくしう思ひきこえ給ふ　箋主上の鍾愛あるなり

なとかはあらさらん　弄ありかたしとなり　私なとかはなからんとなり誰にも有へしとの給ふなり

朱雀院の姫宮を六條院にゆつりきこえ給し　秘女三宮の例を思ひ給へり箋

しはしはいてやあかすもあるかなさらてもおはしなましと　花朱雀院の女三宮を六條院にゆつり給ひし事あかすも有哉とは不足なる事にて有しとなりかからすもありぬへく覺しゝかとも薫大將のかく物せられて今にうしろみかしつき給ふをみ侍れは又かしこくそと思はるゝと也　秘宮なとはあなかちに御うしろみなくともと有しかとも今思へは薫を女三宮のもち給てこそ御おほえもやんことなくましませとなり箋　弄女三宮を六條院におくり給ひし事さなくとももと人もいひしかとゝ思へはよろしきとなり

御心よりほかなる事　箋女三の御身の上に不慮の御あやまちなともあらんとなり

ともかくも御らんする世にや　箋女二宮の御事を今上御位のほとにや御うしろみをもさためましとおほするなり

やかてその御ついてのまゝに　花朱雀院女三宮を六條院にゆつりきこえしそのついてのまゝに今上の女二宮を薫中納言にゝつけまほしくおほしめすなり　秘女三宮の例にとなり弄箋

もとより思ふ人もたりとて　弄思ふ人なりともさいへり宇治大君未た存生時と云々　大方思ふ人をも

たまへりとも女二宮なとに参りてきゝにくき事な
とをうちませ奉るましき性也又本たい有へき事也
思ふ人ありとも女二宮なとをおろかにしたてまつ
るましき心なりと薫の性を御覧せられこめたるな
り箋
つゐにはさやうの事なくてしもえあらし　秘本臺定
りてはかなふましきとなり夕霧の六君なとの事成
へし
くれ行まゝに時雨おかしき　箋次第にくれて時雨も
おもしろきなり
花の色も夕はえしたる　前にいへる菊花なり
中つかさのみこかんつけのみこ中納言源のあそんな
と　花上野のみことはみえす中務宮は今上の御子也
中納言源朝臣は薫大将なり御前にて人をめす時に
はその人の官姓尸(カバネ)を奏する事なり箋　秘中務親王
は今上の御子なり上野親王は當代の親王にあらす
箋　中務のみこは今上の御子也上つけのみこ一人
也中納言源朝臣は薫なり主上へ申詞なり
けにかくとりわきてめし出るも　薫の面目あるさま
を云なり

けふの時雨つねよりことに　秘勅語なりおもしろき
仰なり
あそひなとすさましきかたにて　弄藤壷にての事な
り　秘藤壷にての事なり御服なり管絃はいかゝと
なり　花女二宮は母女御の御思ひの折ふしなれは
物の音なとはすさましく似あはぬゆゑに御碁をと
おほしめすなり
いたつらに日をおくるたはふれにてこれなんよかる
へしとて五はんめしいてゝ御五のかたきにめしよす
花文集十云送(ルニハチ)レ春唯有レ酒銷レ日不レ過レ碁(ニ)云々　此
詩の心をとりていたつらに日をおくるにはこれな
んよかるへきと云り　箋碁局消長夏とそあり　河
銷レ日不レ如レ碁ニ　延喜七年正月三日御記(朝覲行幸也)大臣
等日還御之時可寂寥宜圍碁持懸物有好馬則召碁局
式部卿親王與左大臣其間御厩別當春野牽ニ鹿毛御
馬一立ニ庭中一局給左大臣勝
いつもかやうにけちかく　薫をはつねにかくなれな
れしくし給ふなりさやうに思ひたれはけふは取分
主上の御下心のあるなり
よきのり物は有ぬへけれと　河賭(カケ)ノリモノ　花のり物

はかけ物なり御門の御碁にまけさせ給はゝ我は御
女を薫に給らんと覺したる御氣色心のあらはれた
るなり　弄女二宮の事をおほしてかくの給へりか
け物なり賭字賭弓なといふなり女二宮の御事をほ
のめかしたるなり箋
かる〳〵しくはえわたすましき　箋女二宮の事を仰
らるゝなり
三番にかすひとつ　箋碁三番の内主上二番の御負な
り
まつけふは此花一枝ゆるすと　花先此花一枝をと仰
られたるはのこりおほかる御詞なり　朗詠云聞得
園中花春艶請君許折一枝春箋
をりておもしろき枝ををりて　秘薫下殿して菊を折
たるなり
薫 よのつねの垣ねにはふ菊ならは心のまゝに折てみ
ましを　秘雲上の籬をはゝかりたるなり箋
よういあさからすみゆ　薫のさまなり
主上御返 霜にあへすかれにし園の菊なれとのこりの色はあせ
すも有哉　花延喜御集一時雨つゝ枯行野への花なれ
と霜の籬に殘る色哉　能宣家集一引そめて世々も
へにける松なれと緑の色のあせすも有かな　今案
女二宮はたのむかけにおくれ給へる事を下の心に
よませ給へるなり　秘女二宮は母女御もなくてま
しますによそへたり弄　箋枯るゝは園殘るは菊也
母女御を園にたとへ女二宮をは菊に比して祝し給
へるなり
をり〳〵ほのめかさせ給ふ　主上の直に薫に御氣色
あるなり
れいの心のくせなれは　秘薫の心くせなり箋
いてやほいにもあらすさま〳〵にいとほしき人々の
御事ともを　花中君を姉君のわかゝはりにとの給ひ
し事をも聞過しゝ事をも云り　秘女二宮も本意に
はあらすとなり宇治の大君の中君にゆつり給ひし
をも聞過してあれはなり箋
ことさらに心をつくす　人はかくはあらさるなり
箋女二宮に心をつくす人も有へしとなり
きさきはらにおはせは　弄女一宮ならはと思へるな
り　秘おなしくはとなり
あまりおほけなかりける　薫のあまりなる心つかひ
そと評して草子地にかけり

左大臣とのほのきゝ給て六君はさりとも此君にこそは　夕霧は竹川巻に左大臣に轉す右大臣はあやまれるなり但藤壺の女御の父にまきるゝによりてしはらくもとの右大臣を云るにや　秘古本右大臣に作る是も無子細歟但猶左大臣可然也　花鳥釋箋其義―に及へからさる也夕霧は左大臣なる事分明の事なり　箋薫に女二宮を給はする事をきゝて夕霧の思ふ心なり　一本六條君とあり又は六君とはかりもありいつれにても夕霧の六君の事なり

なほさりの御すきにはありとも　匂宮の六君を大方におほすとも思ひさためんとなり

水もるまじく思ひさためんとても　河伊勢物語云昔色このみなる女出ていにけれは「なとてかくあふことかたみに成にけん水もらさしとむすひし物を 貞信公

一つゝみをはとよらの寺につきそめて世々はへぬれと水はもらさす　花水もるましきは水漏不通と云本文なりたとへは堅密にしてすき間なきをいふなほ／＼しきとはしなおくれたるたゝ人をむこにとらんはたとひ水もらぬやうなるなからひなりともこのましからぬと云心也　秘そはめをもせさる人をとおほせと思ふやう成事はなしさりとて下臈なとを思さたむへきにはあらすなほさりにもあらは兵部卿宮にとおほすなり箋

なほ／＼しきゝはに　弄紅薫なとならてはむこにとらしとなり

みかとたにむこもとめ給ふ　箋夕霧のの給ふなり女二宮の事なり

そしらはしけにの給て　箋主上の御事を夕霧のそしるやうにの給ふとなり

中宮をもまめやかにうらみて　秘明石中宮をも恨み給ふなり箋　弄匂宮の御心に入らぬをあかしの中宮へ申給ふなり

きこしめしわつらひて　中宮の御心なり

いとほしくおふな／＼　秘あかし中宮匂宮を教訓申給ふなり

みこたちは御うしろみからこそ　箋親王達は御外戚かた又御うしろみの様によりて御位なとにもつき給ふ事なり

うへの御世もすゑになりゆくと　秘春宮にもとおほすなり

たゝ人こそ一方にさたまりぬれは　凡人こそ本妻一所にて又あるましき事なれとなり　是は匂宮中君をもち給へはかくの給ふなり

かのおとゝのまめたちなからこなたかなた　花夕霧のおとゝも雲ゐ鴈と落葉宮と二かたにもてなし給へる事也　秘夕霧實法をたて給へと雲井の鴈の外に落葉宮おはしますとなり　箋夕霧の雲井の鴈落葉宮藤内侍のすけなとある事なり

思ひおきてきこゆる事もかなはゝ　弄東宮にもとなり秘　箋春宮御即位の後の儲君（マウケノキミ）とおほすなり

わか御心にももとよりもてはなれてはたおほさぬ　秘匂宮の御心なり箋

ことうるはしけなるあたりにとりこめられて　秘夕霧のわたりをいへり　弄夕霧にとりこめられんをの給ふ也　箋夕霧の實々しくみたれたる所なきたたすまひを匂宮のうるさくおほすとなり

あせちの大納言の　秘當時右大臣なり右大臣とかけれは心得かたきによりて前のいひつけたる官をかけり箋　弄致仕大臣二男紅梅の左大臣竹川に右大臣となり以前のことく大納言といひつけたる也彼大臣のまゝむすめの事

こうはいの御かたをも　花按察大納言の女は中君事也紅梅巻にせうとを見てはやましと匂宮のの給ひし人なり但按察大納言は此時は右大臣也然とも按察大納言といはれし時より匂宮は中君を思ひかけ給へるによりてもとの官をかけるは物語の作者の詞なり　秘螢兵部卿宮の御女まき柱の腹なり右大臣のまゝむすめなり箋

その年はかはりぬ　弄早蕨の巻の春と同し　秘薫廿三の年の終あけまきの年に當るなり箋　私此葉たる年は薫廿三歳あけまきの末と同事明る春は薫廿四歳早蕨の春とおなし

女二宮も御ふくはてぬれは　秘廿四歳の夏なり　私早蕨には薫廿四歳の春はかりをかけり此詞よりはさきの事なりその年はかはりぬといふ詞と此女二宮も御ふくはてぬれはといふ詞の中間を早蕨の巻にはかけるなり

さもきこえいてはと　弄薫の事也　箋今上の御心也薫の女二宮の御事を申出はと待おはしますの由也

つけきこゆる人々　主上の御心中を薫に人の告るな

り
おほしおこしてほのめかしまゐらせ給ふ　薫の心なり底からおもむかぬ心なり
はしたなきやうは　秘何かは御ゆるしあらてはと也弄　私主上よりおもむき給へる事なれは勿論の事と云なり
みつから御けしきをもみれは　箋薫の心に主上のいつ頃と覺しめし定たる體を御氣色にもみるなり
すき給ひし人の　秘宇治の大君なり箋
うたてかく契ふかく　箋契りふかくとは何とふかき宿縁やらん忘られぬ事を云り
口をしきしなゝりともかの御ありさまに　秘彼大君に似給へかしとなり　私義如何大君に似たる人もかなとなり　箋浮舟の事をかくへき序なり
むかし有けんかうの煙　河反魂香也　前勘
やんことなきかたさまに　薫の心に女二宮の事をいそかれぬなり
左の大殿にはいそきたちて八月はかりにと　秘左大臣夕霧なり早蕨巻の八月なり　此已下匂宮をむこにとるへき事也弄　箋八月十六日に匂宮をむこにとりしなり
二條院のたいの御かた　秘中君なり　箋宇治中君也
いかてかは數ならぬありさま　中君の身の上を思ひ給ふなり
あたなる御心と　匂宮の御本性の事なり
めにちかくては　箋さしむかひてはとなり
にはかにかはりたまはんほと　秘此程夜かれもなかりしにとなり
つゐには山すみにかくるへき　秘其まゝ山すみにて住はてたきとなり　私此匂宮のかれ／＼に成給宇治の里に立かへらんとなり
やかて跡たえなましよりは山かつのまち思はん　花二條院へむかへられすしてそのまゝ山にとちこもるをあとたゆるといふなりそれよりも猶山里へ立歸らんは人わらへなるへしとの給ふなり箋
山かつの待思はんも　おもしろくかきなせり
宮のの給ひおきし事にたかひて　私八宮の常にの給ひおきし事なり
草のもとをかれにける　花草のもとは蓬かもとのすみかをあらす心なり此詞は桐壺の巻にもあり　秘

古郷のやどりをいへり桐つほの巻に此詞あり
心のそこのづしやかなる　河したゝかなる心なり　秘心の不動なり　箋大君はちと異相なる様に人の忍ひしを今思へは奇特なる性なりと中君のおほすなり
もし世におはせましかは又かやう　秘大君の事薫の心もたのみなけれはなり
それをいとふかくいかてさはあらしと　箋男は頼まれぬ物そと思ひて薫にもしたかはすさて尼にもならんとし給ふそとなり
かならすさかさまにてそ　弄姉君のさやうに成てなりともおはせましかは中君のをきてと成てかゝる物思ひをはせしと也　私さかさまとは尼の事也大君存生にてましますとも尼にておはせんと思也花なき御かけとも〻我をはいかに　秘八宮大君を云り　箋
何かはかひなき物から　匂宮へは思ひあるけしきも見せたてまつらしとなり
宮はつねよりもあはれに　秘こと方の事のいてくへけれはなつかしくかたらひ給ふなり　弄ことかたの事いてくへきに中君をいとほしく思ひ給ふなり　箋匂の下心ありて彌かく思ふなり
れいならぬさま　秘懐妊の事なり弄箋
あつき比なれはかくおはするなめりとそ　匂宮懐妊の事を見知給はねはたゝ暑氣の故にかく中君のなやましくし給ふと思ふなり
さる人こそかやうには　箋匂宮のさすか不審に覺して懐姙の人こそさやうなるときけとの給ふとなり
八月（ハツキ）になりぬれはその日なと外よりそ　秘六君の事なり弄　箋六君嫁娶の日をよそより中君のつたへ聞給ふなり
宮はへたてんとにはあらねと　秘匂宮はいひ出しかたくし給ふと也　私かくさんとはおほさねと我といひ出んこと中君の心くるしくてとかく打過給ふを中君の心にはの給ぬをつらくおほすとなり常にある事なり
しのひたる事にもあらぬを　秘以下草子地にをしはかりて云り　私中君の心に理をつけて今一段評したるなり
かくわたり給ひにし後は　秘中君の渡給て後一日の

夜かれもなくならはし給ふとなり
心くるしきまきらはしに　箋匂の心に今より夜かれのあらんを心くるしきゝはをみせしと覺してちとよそからにならはし給ふなり
この頃はとき〳〵御とのゐとて　秘ならはさんの宮の御心なり
かねてよりならはしきこえ給ふをもたゝつらきかたにのみ　河「かねてよりつらき心をならはさて俄に物を思はするかな　弄本歌　秘つらきには中君の心なり　箋ならはし給ふをもたゝ一向に中君のつらくのみ思はんと心中を察してかけり　私河の引歌の心はかねてつらき心をならはさすして俄に物を思はする事をうらみたる是は匂宮の兼て夜かれをならはし給をも中君はつらきかたにのみそ覺すへきとなりおもしろくかけり
中納言殿もいとほしきわさかなと　薫の中君を思ひやるなり
あはれとおほすとも　匂の中君をあはれとおほすともめつらしきに御心うつるへしあた成御心なれはなり

女かたもいとしたゝかなる　秘夕霧のあたりの事なり　箋夕霧のあたりのおもくいかめしき事なり
さもならひ給はて　中君によかれにならはぬ事なり
あいなしやわか心よ　秘薫の我物にして中君をきた（きゝイ）らましかはかやうの物思ひはなかるへき物をとなり
なにしにゆつりきこえけん　箋匂へ中君をあはせし事なり
むかしの人に心をしめてし後　秘大君になり
すみはてたりしかたの人もにこりそめにし　箋大君に心をつけそめしより薫の道心のにこりそめしとなり
たゝかの御ことをのみ　大君の事なり
人は心にもあらす　大君の心はすこしもくつろくへくもなかりしなり
一かたにもえさしはなつましく　一向に薫を厭却しはてんもいかゝにて中君にゆつり給へるなり
ほいならぬかたに　箋中君の事なり
いそきせしわさそかしなと　匂宮へ中君をあはせし事なり

めゝしく物くるほしく　河めたゝしくなり秘箋　弄いやめなる云々　花めゝしきと云詞幻巻にもあり又此巻の下の詞にもめゝしくねちけてとありめさましき心成へし又ゐてとは將の字なり匂宮を宇治へつれていて給へる事を云りあけまきの巻にある事なり

ゐてありきし　弄中君を匂宮にあはせんと薫のせし事なり　秘匂宮に媒申せし事なり

宮もさりともそのほとの有さま　匂宮も薫の前へ中君の事には御用意有へき事そと薫の思ふなり

そのをりの事なとかけても　秘其時の奉公をも今はの給ひ出る事もなしとなり　箋浮舟に匂の密通の事をかくへき下地なり

猶あたなるかたにすゝみうつりやすなる人は女のためのみにもあらす　秘朋友の交心をつくへき事となりあしさまの御心もちひとなり浮舟の事とも然へからさる事なり女の心もちひのみならす一切の人のをしへ成へきことなり　私薫の心に朋友なとの交も更になくてはと思ひ給ふ也　私男女の間のみならすあたなる人の心は朋友のためにも悪敷事そとなり

一かたにしみたる心ならひに人はいとこよなくもとかしく見ゆる成へし　箋薫のわれと我心を思ふなり

私大君一人に薫の心しみてうつらぬ故に匂の御うへの別して色々しくみゆると云草子地なり

かの人をむなしくみなし　秘大君なり箋

このきみをみましかはと　秘中君はおほきみのゆかりと思へは思ひはなれかたしとなり箋

とまらん人をおなしことゝ　秘總角巻にあり　箋中君を大君と同し人と思ひ給へと薫へ大君のの給ひし事なり

おもはすなる事もなし　箋薫へうらむへき事もなしとなり

たゝかの思ひおきてしさまをたかへ給へる　箋中君を匂宮にあはせ給へる事なり大君のうせ給はん頃匂宮のかつてかよひ給はさりし故に別してかく思ひ給へるなり

人のうへさへ　中君の物思ひ給ふ事までを思ひめくらすとなり薫の心なり

なけのすさみに物をもいひふれ　秘薫の心なり

さるはかの君たちのほとにおとるましき　弄宇治の
君たちなり　弄孫王なとの女房を女三の御かたに
尋とりておき給へるなり　秘女三宮の御かたにあ
る人たちなり此宇治の君たちにおとらさる孫王な
とも有しと也箋

我心なからねちけてもある哉　心つかひふかく有し
を宇治の姫君の事より物思ひつきし事をねちけて
わろしと思ひ給ふなり

明る間さきつとか猶つねなき世に　花「朝かほは常
なき色の花なれやあくるまさきてうつろひにけり
秘朝かほは云々弄箋　河譬日及之在條垣蹔盡而不
悟注曰朝菌者世謂之木菫或謂之日及也文選歎逝賦　日及は朝かほの名なり

かうしも明なから　秘夜ふけてより次第々々に明ゆ
くさまなり

北の院にまゐらんに　秘二條院中君おはするなり三(宮イ)
條院より北にわたれり　河二條院の事なり三條院
より北なれはなり弄箋

宮はきのふより内になん　秘匂宮御留守にてと申な
り　私匂宮の此程中君に夜かれをならはし給ふと
あり

さはれかのたいの御かたの　箋さもあれといふなり
たいの御かたは中君なり薫の詞なり

日たけぬさきにと　參内有へき日なれは今朝の間に
となり

おりて花の中に　私庭上へおり給ふ事をいへるなり

えんたちいろめきてもてなし給はねと　私天然の容
儀なり好色の人には似さるとなり

朝かほを引よせ給ふ　秘朝顔のかつらのあるさまな
り

薫けさの間のいろにやめてんおく露の消ぬそかゝる玉
とみる／＼　私かくはかなくきえやすきものとみる
みるもなほめてつへきなり大君の事なり　弄みし
かき世をめてんとよみ給へりかゝる花とみる／＼
は猶こそめてつへきといふ心そとなり　箋今朝の
間その盛もはかなき露にかゝることは露よりも猶
はかなき花そといふなり

をみなへしをは見すきてそ　花「女郎花うしとみつゝそ行
とまらさるとなり　秘好色のかたには心も
すくるをとこやまにしたてりと思へは　今按朝か
ほのはかなき色をは故姫君に思ひよそへてとにも

てあそひ給ふをみなへしは色々しき花の名なれはまめなる心にみすき給へる成へし　弄引歌花鳥にあり　箋是は薫の性なり花まてもはかなき物に心をとめて女に性をとめぬをいへり
明はなるゝまゝに霧たちみち　秘夜のあくるにしたかひて霧のふかくみえたるさま面白し
女とちはしとけなくあさいし給へらん　箋匂宮のれはせぬ時なり
かうしつまとなと　薫の用意あるさまなり
朝またきまたきにけりと　花またきは速(ハヤキ)也　弄引歌まてもなし　秘引歌に及はす早朝なるを云許也
箋引歌の詞はかりなり引歌可勘之奥入無之(未イ)
みかうしともまゐりて　弄かうしともあけたるへし
女房の御けはひも　秘御格子もまゐりたるへし女房の御けはひもみえたるとなり
おりて霧のまきれに　秘これより下車し給ふなり
宮の忍ひたる所より　秘匂宮の御かへりと思ふとなり
れいのいとさまことに　匂のうつしなとの香のやうには薫のにほひはなしとなり

心をあまりおさめ給へるそ　薫の實法をわかき人々のにくむなり
これにさらふへとゆるさせたまふほと　私薫の詞なり
かゝるみすの前に　箋外様なるをうらむるなり
しば／＼もえさふらはぬ　箋細々の心なり屢なり歟同歟
さらはいかゝは侍へからん　秘内の女房達のことはなり
北おもてなとやうのかくれそかし　河北面は女房の住居すへき方なり北方のなといふもこの故なり内内の方といふ心なり内家内房なといふなり　秘薫の詞なり内々にさふらふへしとなりふる人なとゝは薫のみつから卑下しての給ふなり箋弄　私此詞のつゝきむつかしきなり薫のやうなるふる人なとのさふらはんにことはりなるやすみ所は北おもてなとやうのかくれそかしといふ詞なりかやうにおもてむきにさしはなち給ふを恨たるとなりこそわりなるとはふる人に相應したる所かといふなり
それも又たゝ御心なれは　秘御心なりさしてうらみ

申へき事もなしとなり　私御心とは御心まゝといふなり
猶あしこもとに　花あそこもとになりしとそと五音通す也
をゝしくなとはものし給はぬ　秘男々しきなり箋
うたてつゝましかりしかた　秘中君の心なりつゝましさもすこしうすらくとなり
なやましくおほさるらん　懐姙の事を薫のとひ給ふなり
しめり給へるけしき　秘六君の事を思ひ給へる成へし弄箋
こまやかに世中の有へきやう　秘薫のかくをしへなとし給ふなりまことの兄弟のことしとなり
わさとに給へりとも　秘大君によく似たり箋
うちなやみ給へらんかたち　箋大君の病中を思ひ出る故なり
人々しくきら／＼しきかたには　秘薫の詞弄箋
身をもてなやむさまになと　薫の身の上人にすくれたる身にこそあらね我身をとやかくやともてわつらふ程の思ひ有へきにてはなしと思ふとなりされとも心からかなしき事の思ひあるよしをいひのふるなり
心からかなしき事もくやしき事も　秘かなしき事は大君の事くやしき事とは中君を我物にせさる事なり箋
つかさくらゐなと　官位の望世間の身の愁なとは定れるならひなるかそれはなき身にかやうのわりなき物思ひはさやうの事よりも罪ふかゝるへきわさそなとさま／＼に薫の宣ふなり
やう／＼あかみもてゆくも　秘槿をいへり　箋朝かほのうつろふさまなり
やをらさし入て　簾中へ朝かほを入たるなり
薫よそへてそみるへかりけるしら露のちきりかおきし朝かほの花　弄姉君によそへてみんとよみ給へり秘
箋世上のはかなさと朝かほとのちきりは一ツそとなり
ことさらひてしももてなさぬに　弄薫の用意おのつから優なれはなり　秘薫の進退しつかなるをいへりわさとならす露もそのまゝありとなり　箋ことさらひてしもとは態と落さしとせねともおのつか

ら落ぬとなり
おきなからかるゝ　秘露はふきなからなり
中君きえぬまにかれぬる花のはかなさにおくるゝ露は猶
そまされる　箋きえぬ間は露のきえぬ間なり　秘下
句は中君の自嘆なり　弄消ぬまにかれぬるはあね
君の事ふくるゝ露は中君の身によそへ給ふ殘りた
る露猶はかなき心深し
なにゝかゝれると　秘此はかなさはなにゝかゝれる
そさなり花鳥の引歌不叶歟　弄引歌不見　箋引歌
猶可勘と云々　河與君結新婚莵絲附女蘿　古詩　松
蘿契夫妻 奥入伊行釋水原以下同　今案是は中君の詞なり女の
かたよりして此文の心をいふへきにあらす朝か（するイ）ほ
の本歌ある歟可勘付之（みてイ）　藤浪に松の嵐の音せすは
何にかゝれる花としらまし　今案此歌の心こゝに
は叶ひ侍らす朝かほの歌何にかゝれると讀る詞有
へししからすは露の命のはかなさは何にかゝれる
といへる歌こゝには相叶へし未見及管見のいたり
なり　私河花詩歌をのせられなから猶不叶之由被
註之然共暫註之者なり
まつそかなしき　箋大君を思ひいへるなり

秋の空は今すこしなかめのみまさり侍る　秘薫宇治
へ行給へる事をかたり給へる就中腸斷是秋天の心
あり　箋薫は平生心に愁かある故に殊に秋は切成
へし
庭もまかきもまことにいとゝあれはてゝ　河古「さと
はあれて人はふりにし宿なれや庭も籬も秋の野ら
なる　私諸抄不載之　箋引歌同
故院のうせ給て後二三年の末に世をそむき給ひし嵯
峨院六條院にもさしのそく人の心をさめんかたなく
なん侍りける　河六條院遁世し給ひける事此詞にみ
えたり嵯峨院は桂宮院歟又栖霞寺歟　私此詞のつ
つきふと心得かたし是は故院とは源氏なり源氏の
御世の末二三年は御遁世有し嵯峨院といふなり扱
源氏失給ひて後かの嵯峨院にも六條院にもさしの
そく人心たへかたかりしとなり　花水原云世をそ
むき給しさかの院此事大かた不得其心尤不審なり
云々河海云六條院遁世し給ひける事此詞にみえた
り嵯峨院は桂宮院歟栖霞寺歟云々今按故院は六條
院を申かの院うせ給て後二三年はかりの末の世を
そむき給ひし嵯峨院と六條院とをさしのそく人の

申侍しは木草の色水の流につけても涙を催し侍しと薫大將に其時の事をかたる人の侍しとなり故院は紫上にはなれ給ひてさかの院に隱居し給しを幻卷の末に頓滅し給ふといひたるによりて水原抄なとには心えさるよしを申侍り河海には頓滅の說をはやふられたるによりて六條院隱遁の事此詞にみえたるよししるされたり次に嵯峨院を桂宮院栖霞寺なとかとのせられたるはあやまりなり嵯峨院とは大覺寺をいふなり大覺寺は嵯峨天皇の離宮にして脫屣の後承和元年に嵯峨院にうつり給ふ由國史にのせられたり貞觀十八年に淳和太后公家に奏し給ひて寺になされて大覺寺とは名つけ侍り嵯峨天皇昇遐の後階庭不披臺樹亦壞といへる事國史にのせたり嵯峨天皇のさかの院に世をのかれましましける事をいま六條院の御事にかきなし侍りさらにうたかひなき事なるへし　秘此宇治の宮あれたるをみて昔の事を思ひ出たるとてかたり給へり弄同箋これはたとへをいへり　秘さかの院の事花鳥にみえたり大覺寺の事淳和太后は公家に奏して大覺寺と號し給へりと也云々　花鳥云淸和太后とあり改可爲淳和也　箋花鳥の義用之

かの御あたりの人はかみ下心あさき人なく　花是よりは故院うせ給うて六條院に殘(侍イ)り給ふ人々の事なり　秘六條院なり

ところ〳〵にあかれちりつゝ　箋六條院につとひし人々なり

思ひはなるゝすまひ　こゝに有し人々の皆世を思ひはなれしとなり前に心あさき人なくといへる心成へし

物おほえぬ心に　物の分別なき心なり

わすれ草おふして　秘愁傷を忘るゝ程をへてこそ夕霧もかへ(移イ)りすみたまへりと也箋　弄おふしては生してなり六條院あれて後にさらに夕霧なともすみ(イナシ)給ひし事なり　河毛詩云北堂栽萱草能忘憂本云北堂儒者居所也此故に萱草も忘草と云なり住吉の岸の忘草も此草なり今に神供を此草にて裏て供なりわすれ草は忍草の一名なり又萱草を忘憂草といふにつきて忘草といへりいつれも相違なきなり

この右のおとゝも　箋夕霧なり

むかしにかへりたるやうに　箋源の御世を思ひ出る

となり

たくひなきかなしさそ　箋源氏かくれ給し時の事なり

かのいにしへのかなしさは　秘六條院の世をさり給ひし事なりそのをりは薫はいまた幼少なりしとなり花弄箋

猶このちかき夢こそ　秘大君の事なり弄箋

おなしごとよのつねなきかなしひなれと　秘おなしことくなるかならひなれとなり　箋源の時の事も大君の事も同無常そとなり

つみふかきかたはまさりて侍るにや　秘大君はしかしなから匂宮のとたえ成事故我身の事おもひて病つき給ふと思へはとなり　私此註は後段の註歟然共如本書之者也　私此秘の義如何是は薫の宣ふ事なり源氏の御時はうせ給へるかなしみはかりなり大君には薫の戀慕愛着の心よりなれはいよ〳〵つみふかゝるへしとなり

なき給へるほと　薫のさまなり

昔の人をいとしも　弄姉君の事也　箋大君の事をさほとに思はぬ中君なり共此薫のさまをみてはあはれ成へしまして此程の物思ひにいよ〳〵思出給ふをりなれは薫にもよほされて一入悲しく覺す中君の心なり　此註本には朱書なり　秘大君はしかしなから匂宮とたえなる事ゆゑ我身の事を思ひて病つき給ふと思へはとなり　私此註は前段にあり然て其義不當仍此段の註にやと存す故に以朱註之了也

あはれと思ひかはし給ふ　薫の心にも中君の體をあはれに思ふなり

世のうきよりはなと人はいひしをも　弄中君詞山里の物の歌「山里は物のさひしきことこそあれ世のうきよりはすみよかりけり　秘引歌山里は物のさひしき云々　中君は山里にておひたち給へれは世のうき事はしらせ給はされは思ひくらふへき事もなきをたゝいまは世中にすみ給へは今こそは世のうきに思ひくらへて山里にかへりたき心のいて來ぬれとなり　箋引歌以下同之

辨の尼こそうらやましく　箋辨の尼の宇治に居たるかうらやましきとなり　私尼になりたきとの事にては有へからす

このはつかわまりのほとは　花故宮の御忌日をいふなり　弄八宮の第三年の心なり宇治へ行ておこなはゝやとなり　秘父宮第三年なり四年と見る義あり不用之　弄以此詞爲第三回若年忌歟未の詞にかくて三年はかりおはしますとわり匂のかよひそめ給てと云々如何又例のかの御忌日の經佛云々これは九月なり姉君の忌日と云々此詞にて此巻の始は椎本總角の時分よりの事とみえたり

かの近き寺の鐘のこゑも　宇治の阿闍梨の事なり

忍ひてわたさせ給ひてんやと　弄中君の詞なり秘

あらさしとおほすとも　秘薫の詞宇治の宮の事なり

弄薫の返事

古宮の御忌日はかのわさりに　箋八宮なり　弄年忌歟未定　私八宮の薨するは薫廿二歳の八月なり是は廿四歳の八月なれは第三年忌必定なり

かしこは猶たふときかたに　花宇治のふる宮を寺になすへき事なり　秘彼宮を寺になすへしとなり箋

弄宇治宮を寺なとへ寄進せんとにや

つみうしなふさまに　みるたひに愛執の思ひをますを寺になしては功德のうへの功德成へしとなり

あるへからんやうに　箋おほしたるまゝの給ふなり

經佛なとこの上も　弄中君の事　秘中君故宮の忌日の作善をさせ給ふなり

やをらこもり居はやなと　箋中君の心中に宇治へこもらはやとの事みえたり辨をうらやましきとの給へるやうの事成へし

あるましき事なり　秘薫の詞也弄

いつこにてもみすのとにはならひ侍らねは　秘宇治にてもかく物へたてたる對面なかりし事なり弄

私何方にてもかくみすの外にはならはぬを中君はかりかく外様にあひしらひ給ふがうれはしきよしなり

いま又かやうにも　弄又如此なりとも參らんとなり

箋みすのとにても今又參らんとなり

宮のなとかなきをりにはきつらんと　箋匂宮の御留守に薫の參りたるを不審し給はんと薫の覺すなり

さふらひのへたうなる右京のかみ　花さふらひ所の別當は政所の別當なり右京のかみは大夫なり　秘さふらひの別當右京の大夫とあり諸大夫成へし箋

弄殿上の別當なり匂宮にては右京大夫なと家司成

へし禁中にての殿上の別當は左大臣補するなりよろつを取行ふ也　問云匂宮にてさふらひとあるはいか成所を云るぞや答さきにしるせる殿上の事なりこれによりて殿上人をは御さふらひ人といふなり

よへまかてさせ給ひぬと　弄匂宮内より出ぬときゝて參りたりとの給ふなり薫の用意ふかし　秘かく用意申おきて出給へり

けふはまかてさせ給ひなんと　右京大夫か詞なり

猶このけはひありさま　秘中君の御けはひなり　箋薫の心なり

思ひくまなかりけん　箋大君の色々中君をゆつり給ひしにさもなかりしは薫の思ひくまなき事ぞと我と思ひしり給ふなり是（それイ）か悔しきとなり

なぞや人やりならぬ心ならんと　箋匂へ中君を引わはせたるもわれなり今又大君の名殘にとりかへま（さイ）ほしくしたひ思ふも皆我心からとなり

そのまゝにいまたさうじんにて　河精進也　弄姉君にはなれてより精進かちなるなり一向に精進とは心うへからす　秘大君の後薫は精進かちにてましますなり

はゝ宮猶いともわかく　花是は薫の母宮なり

かゝる御けしきをいとあやふく　箋女三の御心なり薫の精進かちに世に心のとまらぬさまのあやふきなり　弄女三の宮の薫の身體をあやふく道心ありとみ給ひてをしへ給ふ詞なり

いく世しもあらしをみたてまつらんほとは　河古「いく世しもあらし我身をなぞもかくあまのかるもに思ひみたるゝ

世中を思ひすて給はんをもかゝるかたちにてはさまたけきこゆへきにもあらぬを　箋女三は尼宮にてましませは薫の世をすて給ふともさまたくへき事にはあらすもしさまたけたらは入道宮の御身には罪ふかゝるへき事なりさりなから薫の世をすて給はは女三宮の物おほさん事薫の出家を妨たるよりも罪深かるへしとの給ふなり

かたしけなくいとほしくて　弄薫の心中なり

おまへにては物思ひなきさまを　秘おまへは女三宮なり薫の孝心ある故に道心有さまをも母宮にはみえたてまつらしとし給へり箋　弄孝心なり〳〵

左の大いとのには　秘夕霧なり弄箋
よろつをとゝのへてまちきこえ給ふに　夕霧の匂を
　むこにとるのさまなり八月十六日なり
心もとなければ　箋匂宮のおそくおはするを云也
いとしも御心にいらぬ事にて
あないし給へは　弄内へ人をつかはしてなり　河案
　内なり　秘夕霧匂宮のおとつれ給はさるをいかゝ
　と待給ふなり
おほす人も給へれは　秘中君なり箋
こよひすきんも人わらへなるへければ　弄日をとり
　たるへし　秘今日吉日成へし
御子の頭中將して　弄夕霧の使なり　夕霧の子藤内
　侍腹此六君と一腹なり
夕霧 おほそらの月たにやとる我やとにまつよひ過てみえ
ぬ君かな　花「元良親王集大空の月たにやとに（しイ）いる物を雲のよ
　そにも過るきみかな　秘元良親王の大空の月と花
　鳥にいへるをすこし引かへたり　箋月と云物は所
　をわかぬに君は我宿へはまたれ給ふよと也　弄秘
　に同し物語なとにつねに如此事あり
宮は中々　秘内よりすくに六條院へ行給ふへきの御
心なり　箋中君に今宵ともしらせしと覺しゝ事な
り
御ふみきこえ給へりける　秘中君へ文をまゐらせ給
　へり箋
御かへりやいかゝありけん　秘中君の御返事いかゝ
　ありつらん先二條院へわたり給へり　弄匂宮内裡
　より中君の方へ文有しに中君の御返事いかゝあり
　しにや又二條院へ匂宮おはしたるとなり
もろともに月をなかめて　匂宮中君と二條院にてな
り
おほとかにもてなして　中君のさまなり
中將のまゐり給へるを　箋夕霧の使頭中將なり　秘
　頭中將なり大空の月さへやとるの歌の御つかひな
り
かれもいとほしければ　夕霧の六君の事なり
いまいさとくまゐりこん　秘匂の詞なり
ひとり月な見給ひそよ心そらなれはいとくるしと
　箋小町集に中たえたる男の忍ひてかくれたちてみ
　るに月のいとあはれなるをみすてゝねんこそ口惜
けれとてすのこになかめければ男いむなる物をと

いふをきかぬさまにて「ひとりねのわひしきときはおきゐつゝ月をあはれといみそかねつる　私莫下對二月明一思中往事上損二君顔色一減二君年一　白樂天贈内詩なり諸抄月みるはいみ侍るにひけり勿論の事なから匂宮の月なみ給ひそとあるにはよく叶へり

かくれのかたよりしんてんへ　花二條院寝殿に匂宮はすみ給ふ中君は西對にすみ給ふよし見えたり

たゝまくらのうきぬへき心地すれは　花拾「涙川水まされはや敷妙の枕のうきてとまらさるらん

われなから思ひしらるゝ　箋うき物は人の心とは匂宮の只今まてかはるましきとの契りをしつゝもかくあると思ふなり又それを中君の我には何とも心にかゝらぬと思へとも枕のうくはかりなるはよく我も心に深く思ふに先は我なから心うきと思ひしるとなり

世中をおもひとゝめたるさまにもれはせさりし一ところを　秘八宮の事なり箋　弄八宮の事中きみの心なり

うちつゝきあさましき御事ともを　箋八宮大君の失給ひし也

人かすにもなるやうなる　河人流（ヒトカス）遊仙窟　私流の字はたぐひと云心なるへし

にくけなき御心ばへもてなしなるに　箋匂宮の御さまを中君の思ふなりそれにちと過にしかたのかなしさもうすらきたるやうなりしとなり

このをりふしの身のうさはたとへんかたなく　私古宮大君のうせ給ひし時はかなしさもたくひあらしと思しかこれは一段身にしみて中君の思ふとなり

ひたすら世になくなり給ひにし人々よりはさりともこれは時々も　弄中君の心なり父宮あね宮なとの事は悲しけれともせんかたなし歸へからす匂宮は夜かれありともさすかに又も待みんと思へとさしあたりて只今のかなしさといへり是はなき人のやうに又あひみましき人にてはなしと思ひなくさむれともこよひのみすて給へるつらさはならへん物なしとなり　箋是は前の詞に心うき物は人の心なりけりと我なから思ひしらるるといへる始末なり　秘此まゝにたえはて給ふへきにてはなけれとも只今のつらさはやるかたもなしとなり

おのつからなからへはなとなくさめんことをおもふに　私中君の命たにあらはなとゝは心を我となくさめん事をおもへともなくさめかたしとなり　古今さらにをはすて山の月すみのほりて　河「我心なくさめかねつ更科やをは捨山に照月を見て　後拾遺花「月みては誰も心そなくさまぬをはすて山のふもとならねと和泉式部　今案姨捨山の因縁大和物語に委くしるされ侍り都にてはれはすて山の月すみのほると云心おほつかなし是は上の詞になくさめんと云ふに付て姨捨山とは云りたとへは身は都にあれとも心の内はをはすて山の月にことならぬよし也又中君の匂宮にすてられたる心をかの山になそらへたるなり　秘なくさめかたき心より見れはいつくに見るもをはすて山の月なり箋　なくさめかねたるはいつくにみるもをはすて山の月成へし

山下風に思ひくらふれは　箋宇治と二條院とをくらへての事なり

こよひはさもおほえす　心中の愁ゆゑなり

椎の葉のおとにはおとりておほゆ　河「家にてはけにもるいひを草枕旅にしあれは椎の葉にもる　引歌に及はす　花椎かもとのやとりを思ふ心なり　弄椎かもとによめりし事もあり宇治に椎の木有ける成へし　秘彼椎かもとにはおとりたるなり　箋椎の葉の音は松よりもあらく吹物なり二條院の閑なる松風さへ宇治の山風あらき椎の葉の音にもおとりて物かなしきとなり

中君山里の松のかけにもかくはかり身にしむ秋の風はなかりき　秘宮のうちすて給へるをいへり

來しかた忘れにけるにやあらん　秘昔の山風のあらかりしをわすれたるにやと歌をたつしたるなり　箋思ひくらふへき事にてもなきを思ひくらへたるをかく云り

月みるはいみ侍る物を　河後撰第十。三ィ云月をうつくしみあはれといふはいむなりと中人の有けれはよみ人しらす「獨ねのわひしき時はおきゐつゝ月をあはれといみそかねつる　弄ひとり月をみるをいむといふ事出所不分明歟但後撰にあり　秘小町か集に中たえたる男忍ひてかくれたちて見るに月のいとあはれなるを見すてゝねんこそくちをしけれとてすのこになかめけれは男いむ成物をと云きか

ぬさまにて　本には朱書なり　私云此事箋には前に引「ひとりねのわひしき時はおきゐつゝ月をあはれといみそかねつる　此の歌心なり又はかくや姫月のおもしろう出たるをみて常よりも物思ひたるさまなりある人月のかほみるはいむことゝせいしけれともともすれは人まにも月をみてはいみしくなき給ふとあり　白樂天贈内詩莫下對二月明一思中往事上損二君顔色一減二君年一　箋月は陰氣なり故に愁を生するなり月みれは千々に物こそかなしけれの同心なり又樂天か贈内の詩を引是は樂天か江州の司馬に左遷の時内に贈る詩なり内とは我本妻を云又こゝに老人ともなとゝいへるは辨尼にはあらす宇治より其外參りし老ごだちなり

はかなき御くた物　秘懐妊ゆゑなり

ゆゝしう思ひいてらるゝ　秘大君もかく不食し給ひたりしとなり弄

この御事よさりともかうて　秘匂宮御事なり箋

さいへともとの心さしふかく　弄中君はもとよりの人なれはといひあへるなり

いかにも／＼かけていはさらなん　箋中君の詞　私中君の心はいはせしと覺すらん

たゝにこそ　箋たゝおきて匂の御心のまゝにしてみんとなり

人にはいはせしわれひとりうらみきこえむと　秘草子地なり、箋中君の心を了見してかけり

そのかみの人々は　中君を薫へと大君の引あはせし事をしる人々の心なり

宮はいと心くるしくおほしなから今めかしき御心は　箋匂の中君の事を心くるしく覺す也されとも今めかしきかたへもめてたくと心けさうし給ふなり

まちつけきこえ給へる所の　秘六君の御さまなり

いかならん物々しく　弄匂宮かねてかく推し給へりとなり

あさやぎて心はえもたをやかなるかたはなく物ほこりかに　箋是は六君思ひのまゝに人を人ともせすはこりたるやうたいなとやあらんさあらはうたてあるへしとおほせしなり

秋の夜なれとふけにしかはにや　花「なかしとも思ひそはてぬ昔よりあふ人からの秋の夜なれは　箋みしかく思ふは心のとまるかたも有へし

かへり給ひてもたいへはふとも　箋中君のゐ給ふ對なり
御ふみかき給ふ御けしき　秘六君への後朝の文なり
おまへの人々つきしろふ　箋御前の人々我さち思ひいふさまなり
天下(アメガシタ)にあまねき　秘匂宮の御心に中君にあまねくともとなり弄　私匂宮の御心世間に平等にして差別なき御心なりとも六の君のあしからすは夕霧なとのもてはやし給ふにひかれて中君の御おほえはおとらんと此ほと對の御かたへなれつかうまつりたるは匂宮の人々も心くるしかるとなり
御かへりもこなたにて　箋六君の御返事を寢殿にて待みんとおほせと夜のほともおほつかなく又つねのへたてよりもくるしくていそき中君のかたへおはするとなり匂宮の心なり
いそきわたり給　秘中君の御方へわたり給へり
ねくたれの御かたち　秘中君なり　箋匂宮なり　私匂宮なり　秘に中君といへるあやまれり
ふしたるもうたてあれは　箋中君の臥なからはいかにてすこしおきあかり給ふなり

うちわかみ給へるかほの　箋終夜なき給へる名殘成へし
あいなく涙くまれて　箋匂の中君の心を察してなり
おもかくしにやなとかうのみなやましけなる　花しらぬかほしたるなり人の知たる事を上にかくしたるなり　私花鳥の義如何　私すこしはつかしさをまきらはさんのためにの給ふ詞成へし弄箋
なとかくのみなやましけなる御けしきならん　秘匂宮の詞なり
すゝしきほとまちいてゝも　箋八月十七日なり
さまぐ\にせさする事も　箋祈禱さそ成へし
なにかし僧都をそ　弄その人なといふ心なり誰ともなし箋
かゝるかたにもことよき(うイ)は　秘かく實めなるかたをもよくの給ふ物かなとなり　弄ことよきとは實なる方の事をよくの給ふをつれなしとなり
いらへきこえさらんもれいならねは　秘中君の心なり　箋かやうの事をいらへ給はねは腹立の體の見ゆる故に中君の物の給ふなり
昔も人ににぬありさまにて　箋人かすならぬに云な

り下にては六君の事をふくむ中君のこと葉なり
いとよく（かイ）こそさはやかなれと　秘匂の詞なりさはやかにいひなし給へれとも下に心のあるなりさきさきかやうなるもやかておこたれは祈るまてもなしとあるをかくさはやかなれはとは宣り　弄匂宮の詞なりさはやかに中君の云なし給へと下の心は思ふ事有ぬらんとたはふれ給なりやかておこたる物をなとゝて祈まてもあらしとの給ひしをかく匂宮のあへしらひ給ふなり
猶又とくゆかしきかたの　秘六君なり箋
御心さしおろかにもあらぬなめり　六君へも御心さしふかしとなり
されとみ給ふほとは　箋匂の底の心も僞にてはなし中君にむかふ時は深切に契り給ふなり
いのちまつまもつらき御心は　河（古）「ありはてぬ命まつまのほとはかりうき事しけくおもはすもかな
弄ありはてぬ命待まのうたの心なり箋　秘後世までも契り給ひしかともはや此世の契はたかふやうなれは後世をこそたのむへけれとなり引歌同前箋後のちきりやたかはぬ事もあらんとおもふにこそ猶こりすまに又もたのまれぬへけれはとて　箋此世のちきりはつらき御心みえぬへけれは後の契もしたかはぬ事もやと思ふからこりすまに又もたのみぬへしとなり　河「こうすまに又もなき名の立ぬへし人にくからぬ世にしすまへは
ねんすへかめれと　箋中君の大かたならす堪忍し給へけれと涙のこほれそめたるとなり
けふはなき給ぬ　箋中君の日ころ忍ひ給ひしよし前にみえたりおもしろき詞なり
日ころもいかてかう思ひけりとみえたてまつらましと　秘中君の心なり箋
思ひあつむることとしおほかれは　箋身の數ならて人におされたる事古宮姉君の事なとまてかやうの時思ひいつる也又宇治へ歸へきなとゝ思ふ心も有也
いとはつかしくわひしと　中君の我なからはつかしく思ふなりこほれそめてはとみにもえためらはぬなとおもしろくかけり
しゐて引むけ給つゝ　箋匂の中君の打そむきたるをかやうにし給ふなり
きこゆるまゝあはれなる御心と　秘匂の詞也

猶へたてたる御心こそ有けれなさらすは夜のほとにおほしかはりにけり　總別いふまゝ成御心そと思ひつれは底の心はへたて給ふ事有しをしらさりつるよとなりもしさやうにてなくは今夜のほとに人にうつる御心有へしとかへりて匂のうらみ給へる詞なり

夜の間の心かはりこその給ふにつけて　秘中君の返事なり　箋匂の夜の間の心かはりかとの給ふにつけて六君へ御心のうつりたるは推量するなり御詞についてこそ思ひしりたれとなり

けにあが君や　秘匂の詞也　箋中君をさしての給ふなり

おさなの御物いひやな　心をさなく分別もなく物をの給ふと中君を匂のの給ふなり

まことに心にくまのなければ　實（宮イ）心のそこにかくれたる事のなきとなり中君は疎略なしとなり

いみしくことえりしてきこゆともいとしるかるへきわさも　箋六君へ心の眞實うつりたらは言えりをしてつくろひつゝ物をの給ふともはつれ〳〵に眞實の底の心あらはるへしよく見給へさもなきとなり

世のことわりをしり給はぬこそらうたき物からわりなけれ　道理をも聞わかすの給ふと中君へ匂宮のの給ふなり

わか御身になしても　秘中君の身上になしてもおしはかり給へとなり母中宮のわりなく申すゝめ給へは身を心ともせさるとなり

身を心ともせぬありさま　弄歌の心なり　河いなせともいひはなたれすうき物は身を心ともせぬ世成けり　箋匂の御心にまかせぬとなり引歌なし

思ふやうなる世もあらは　花匂宮の位なとにつき給事もあらは中君を后にたて奉らんといふ事なり　秘春宮にもたち給はゝとなり箋

たはやすくことといつへき事にもあらねは　箋春宮に立たまはん事のあらましなと聊爾に言に出すへきにはあらすとなり

命のみこそなと　秘「えそしらぬ今試よ命あらは我やわするゝ人やとはぬと　弄「えそしらぬ今心みよの歌の心あり　箋とかく命なかゝらてはとなり引歌なし

かしこにたてまつれ給へる御使　秘六君の返事なり

はゝかるへき事もわすて　箋御使中君の御方へは用
意有へきとなり
この南おもてに　箋中君のおはするかたの南おもて
なり
あまのかるめつらしき玉もに　花後「なにせんにへた
のみるめを思ひけんおきつ玉もをかつく身にして
黒主　今按後朝の文の使に祿の裳きぬをかけたる
なり　秘玉藻の事祿をいへり　箋かつけ物なり
弄玉もの事後撰に大伴黒主かからさきにてはらへ
の時の歌なと例あり
いつのほとにいそきかき給つらん　秘匂宮はいつの
程に文をかきて參らせ給つらんとなり　箋今朝と
く中君のかたへおはせしかいつの程にとなり
やすからすは有けんかし　私草子の地なり
さしくみは猶いとほしきを　秘さしよりなりうちつ
けの心なり箋　弄うちつけの心也
すこしのよういはあれかしと　御使のあまり無念な
るとなり匂の心なり
女房して御文とりいれさせ給ふ　了簡なくて文を匂
宮のこゝにて見給ふなり

へたてなきさまもてなしはてゝんと　私中宮への事
なり匂の心なり
まゝ母のみやの御てなめりと　秘落葉宮なり此六君
を養子にし給ふなり箋　藤内侍はらなり　花六君
は雲井の鴈の御腹なりまゝ母は落葉宮なり　弄ま
ま母の宮は落葉の宮なり典侍腹の六君をやしなひ
給ひしかはなり　私花鳥の義あやまれり秘の義よ
し
せんしかきにてもうしろめたのわさや　自筆ならて
も文の返事を中君のみ給ふは六君の爲には迷惑成
事なりそれをうしろめたしと云り草子地に評てか
けり
さかしらはかたはらいたさに　花これは文の詞なり
秘文の詞なり宣旨かきをいへるなり　私此さかし
らは進心此心なりさし出かましとすゝみたる心な
り
なやましけにて　六君のさまを云なり
返落葉宮六君にかはれるなり
をみなへししほれそまさる朝露のいかにおきける名
殘成らむ　秘いかにおきけるとは落葉宮の六君をみ
給へる心なり弄　箋しほるゝは六君のさまなりい

かに露のふかくおきける名残そとなり起けりとい
ふ心もあり　秘匂宮の御歌は書のせねはみえす女
郎花なと讀給へるにや
かことかましけなるも　河かこつなり　花いかにを
きける名殘成らんといふ歌の詞にいへり　箋かこ
とかましけなるなとむつかしけに匂宮のいひなし
給ふなり　秘匂の詞なり此歌はかこちかほ成歌と
なり
心やすくてしはしはあらんと思ふ世を　秘又おもふ
人なくてあらまし物をとなり弄
たゝ人の中こそかやう成事の　秘たゝ人こそかやう
の方々のならひたるを女のためにくるしとも人の
思ふへけれかやうの宮たちなとはつねの事にて中
君のため心くるしかるへき事とも人の思はす有へ
き事と思ふとなり
みる人くるしくは　弄女のくるしくおもふ事
すちことによ人おもひたれは　箋匂は坊かねそとな
り
人も此御かたいとほしきも　秘中君のことわりとも
公界よりは思はさるなり箋　箋思ひたへぬ成へし
とは草子地なり
かはかりもの／＼しくかしつきすへ給ひて　弄六の
君の事　私云中君の事歟以上弄　秘中君なり箋
私中君の今の樣體を隨分のさいはひ人そといふと
なり　弄匂宮の中君をおろかならぬ事を幸の人な
りけりと云り
みつからの心にも　私中君の心なり弄箋
あまりにならはし給うて　私此程匂のあまり中君へ
よかれもなかりし事なり　弄匂宮のならはし也
かゝるみちをいかなれはあさからす　中君の心に戀
慕嫉妬の事昔よりおほくいひおきたるをいかてか
ほとある事そと思ひつると身上になりて思ひ知る
となり
宮はつねよりもうちとけたる　箋匂の中君へつねよ
りも深切成なり
又さるへき人めしてことさらにてうせさせ給ひつゝ
中君へ參るへき物なり花鳥には御あはせてうせさ
せなとしつゝとあり註にあはせは食物を云俗に朝
の飯を朝あはせといらり合子にもるゆゑにあはせ
といふにやとあり

くれぬれは夕つかたしん殿にわたり給ひぬ　箋六君へおはせんとてなり二日めの暮の事なり

物おもはしき人の　秘中君なり箋

日くらしのなくこゑに　河「日くらしの鳴つるなへに日はくれぬと思ふは山のかけにそありける　秘引歌河同此心なり弄　箋歌の心也　箋宇治へゆかはやと覺す折ふしなり

中君 大かたにきかまし物を日くらしの聲うらめしき秋のくれかな　秘昔の山里のまゝならましかは大かたにのみ聞へき物をとなり箋　弄山里にてきかは大かたならまし物をとなり

こよひはまたふけぬに　匂の六君へはやくおはしたるなり

あまもつりするはかりに　河「戀をしてねをのみ鳴は敷妙の枕の下に海士そ釣する　弄歌の心なり河海　秘不引之　箋引歌同中君の心なり

にくき心かなと　箋中君の心に匂宮に執着のふかきよと我なからにくゝ覺すとなり

はしめより物おもはせ　秘匂宮ゆゑにさま〳〵の思ひをするとなり　弄匂宮の中君に物思はせし事

箋匂宮の中絶の事

このなやましき事　箋懐姙の事

いのちみしかきそうにて　秘母も姉君も早世のすちなり　弄其孫なり箋

又いとつみふかくもあなる物をと　秘懐姙にて失なは罪ふかゝるへしとなり弄箋

その日はきさいの宮　秘明石中宮事六君にあひ給ひし三日めの事なり弄

おとゝはひるまうて給ひにけり　秘夕霧なり弄箋

中納言の君さそひきこえて　箋夕霧の薫をさそひて同車して出給ふなり

こよひのきしき　花匂宮の嫁娶の後三日の夜の事也　秘三ヶ夜の義なり弄箋

此君も心はつかしけれは　薫をもむこにと思ひしかさもあらす成たるをはつかしくとなり　秘薫なり此六君は前に薫にとの給ひしなりたゝうちの人ならは匂に定りまたへる事をは口惜く思ふ心の有へきなりこゝもとは物語の作者の心をやりてかくなり

わか方さまに　夕霧の方さまなり

人のうへにみなして　箋薫の六君を匂宮のにみなし
てもねたしとも思はすいそきおはしてこゝの儀式
なとゝりもち給ふとなり
おとゝは人しれすなまねたしと　秘夕霧はかへりて
かく思ひ給へるなり　箋薫の心にかけぬを夕霧は
ねたしと思ふなり
よひすこし過るほとにおはしましたり　夕霧の亭へ
匂のおはするなり　箋李部王記の例にかなへり花
鳥にのせられたり後に註す
もちひまゐらせ給へり　秘三日夜のもちひの事前に
あり　弄三日夜の餅は銀器にもるなり
めつらしからぬ事　秘草子地なり　箋つねにある事
そとなり
さみにも出給はす　秘匂宮は六君の方におはしまし
て外様にても酒宴有へきかたへはおそく出給ふな
り弄箋　箋あきれてとはちと恥ておもはゆき心歟
云々
北のかたの御はらからの左衛門督藤宰相　秘雲井鴈
の兄弟なり弄箋
からうして出給へる御さま　弄匂宮の方（座イ）へ出給ふ也

あるしの頭中將さかつきさゝけて　弄盃をもちて出
たるなり　箋匂宮へまつよひ過と有し使の人六の
君と一腹なり　李部王の左少將伊尹勤之
中納言のいたくすゝめ給へるに　薫の匂へつよく酒
をしひ給ふなり
わつらはしきわたりをと　前にとりこめられてはな
とあらまし事を薫との給ひし事なとの心しれる
人なる故にと覺してほゝゑみ給へり箋
されとみしらぬやうにていとまめやかに　弄薫の見
しらぬ體にし給ふなり　秘薫のさまなり箋
東のたいに出給ひて御供の人々もてはやし給ふ　秘
薫の出給ふなり弄　箋供奉の人をこゝにて饗應し
給ふなり
おほえある殿上人ともいとおほかり　よき人々供奉
となり此供奉の人廿人なり　箋李部王記には十八
歟
四位六人は女のさうそくにほそなかそへて　箋きぬ
はよのつねの女のさうそくなり細長はちと貴人の
着物なり
五位十人はみへかさねのからきぬ裳のこしもみなけ

ちめ有へし　秘みへかさねは常のきぬに中倍あるな
り　箋にほひをいたすなり　箋からきぬは裳かそ
ふなり　秘裳の腰もきぬによりて腰もしな〳〵あ
るなり箋　弄問云人々に給ふほとの事なり裳のこ
しのけちめはいかやう成へきにか一答唐きぬの色
も色々にあり織物はたてこめ平絹の次なり故にけ
ちめあるといへり
六位四人はあやのほそなかはかまなと　箋おり物は
位たかしあやは次なり
もの丶色しざまなと　秘法令(ハウリヤウ)の外にはすへき事もな
けれはしざまを執し給ふなり
めしつきとねりなとの　秘院の召繼なり親王家へわ
たしてめしつかひ給ふ成へし　とねりは御厩の舍
人なり　花西宮抄院宮雜事中御隨身勤夜行召繼奏
時云々　今按親王家又有召繼式部卿重明親王嫁娶
之時召繼以下錢二萬を祿に給ふよしかの記にみえ
たり匂宮の御事もこれになそらふへし又知足院禪
閤(院イ)の御猶子として召繼を具せし事も有し也とね
りとは御厩の舍人なり　箋名家に預りとこれを云
なり院親王これをめしつかふ攝家以下是をつかは
すと云々　私の義あやまれるなり花鳥にくはしく
しるされたれは此義然へし
されとくはしくはえそかそへたてさりける　物語の
作者の筆法なり此度の事こと〳〵しきといふ心に
かくかけり　私けにかくと云より草子地なり　花
李部王記天曆二年十二月廿二日丁卯夜詣右丞相坊
門家娶公中女廿四日夜更漸深向右相府亭所住之東
南對廂東頭西向設座以朱臺六臺及銀器辨饌少臺一
雙以樣器辨饌菓子等安座右其西頭南北對設客座主
公傳侍女告備饌由即出就座左兵衞督師尹卿右衞門
督師氏朝臣相次加座以折敷設饌左少將藤原朝臣伊
尹以盞酒安臺酒巡兩三行即入簾中侍女以一盃餠安
莒蓋羞之主公率客卿起就別所命飮深賜陪從者祿五
位三人白單細長各二領袴一具六位有官散位四人各
同細長二領無官三人白絹各一疋召繼以下錢二萬
今按女裝束は尋常の裳唐衣等なり細長は貴女者着
之物なり故に別に之をそふるなり三重かさねの唐
衣は中倍あるを云にや腰の事は小腰引腰なり或白
或地摺或村濃等有差異なり
中納言殿の御せんのなかに　秘物語の誹諧にかけり

かへりてうちなけきて　弄薫のかへり給ふよ同く歸りしなり　箋薫の亭にての事なり
夜のふけてねふたきに　箋是よりかのいひし事の註のやうにかけり草子地なり
君は入てふし給ひて　秘薫なり三條宮にかへり給へり箋　弄薫の三條宮に歸りての事なり三條宮にわたり給へる事はいまたみえすとなり　花薫のかへり給て今夜の儀式を心に思ひ給ふ事なり
はしたなけなる　箋何ともおもはゆき樣體そとなり
さるを匂宮のさまよくもてなし給へるとおもふなり
はなれぬなからひ　弄夕霧のかたにて賭とりの座の體の事
けにわれにてもよしとおもへる女子　秘薫も女子をもちたらは此匂にこそたてまつらめとなり箋
内にたにえまゐらせさらまし　弄匂宮にとこそ思はめ内裏なとにも參らせんむとも思はしとなり
宮にたてまつらんと心さし（心さしイ）給へるむすめは源中納言にこそと　弄匂宮にと侍し給へるといひ又は薫にてそなといふ人もあり　秘匂宮と我身とひとしきをいふなり
ふるめきたる物をなと心おこりせらる　秘ふるめきは卑下したるなり弄　箋薫の心なり
うちの御けしきある事　秘女二宮の御事なり箋
故君にいとよくに給へらん時に　秘宇治大君なり　箋故君なりき文字清なり
あせちの君とて人よりは　弄薫のれもひ人也　秘女三宮にさふらふ人なり箋
たゝならす思ふへかめり　按察君の心を察してかけり

按察君
うちわたしよにゆるしなきせき川をみなれそめけん名こそをしけれ　河關川會坂關川　寛平菊合にあり　秘あせちの君の歌なり人めはゝかるやうに夜ふかくいそき給ふるをゆるしなきとはよめりかくはゝかり給へき事にてはなしとなり我身數ならぬ故成へしとなりうちわたしは大かたなといふ心なりせき川は逢坂の關の小川をかく云りみなれそめけんとは見なれたるなり水馴によせたり弄箋　弄見なるゝ水馴によせたり元良のみこの歌なり

返薫
ふかゝらすうへはみゆれと關川の下のかよひはたゆ

るものかは　花「あさくこそ人はみるとも關川のたゆる心はわらしとそおもふ　秘薫の歌なり　箋淺くみゆるともとおさへたるなり下の流はたゆましきとなり

ふかしとの給はんにてたに　秘歌をことはりて草子地にかくなり

まことはこのそらをみ給へ　秘薫の詞也　箋夜ふかき秋の空の體なり

ことにおかしきことの數をつくさねと　秘薫の事をいへり　私人に情々しくえんなる事をこのましくつくさんとし給はねとも自然のさまのすくれたるやらんかやうになほさりにあひしらひ給ふも情なくはみえぬとなり

あなかちに世をそむき給へる宮の御かた　弄女三宮の御かたにたよりして參る人もあり　秘薫ゆゑにあなかちに女三宮の御かたにしこうす人々を云り箋　箋匂宮卷に此心あり

宮は女君の御有樣ひる見きこえ給ふに　秘匂宮はしめて六君を見給ふなり箋　私晝見給ふは四日めの事とみゆ

おほきさよきほとなる　是より六君のさまなりすくれたりとみゆ廿一二とみえたり

かたなりにあかぬ所なく　箋かたなりに不足成事なきとなり

けにおやにては心もまとはし　箋夕霧の自慢尤となり　河「人のおやの心はやみにあらねとも子を思ふ道にまとひぬる哉

あいきやうつきらうたき事　箋是より中君の事を云

たいの御かたは　秘中君なり

物の給ふいらへなと　弄六君の事箋

かと／＼しけなり　弄六君の一かとあるなりあしくかと／＼しきにはあらす

れいのうるはしき事はめなれて　箋結構にし美麗をつくす事は匂宮の御目なれたるとなり

心えぬまてこのみそし給へる　花そしは殺なりこのみに事をそき簡略する心也　弄好殺也　秘そしとは殺なりこのみ過したるやうなる心花鳥説簡略と云るいかゝ箋　私あまりめつらしくとこのみて心えぬ事ともあるほと成をこのみそしと云なり

三條殿はらの大ひめ君　秘雲井の鴈の事弄　私春宮

の女御の事なり
宮の御おほえ　匂宮をもてなし給ふ故となり
二條院にえ心やすく　箋匂の夕霧の六條院にのみおはして中君へ遠々敷となり
南のまちに年ころ有しやうに　花六條院の南のまちなり匂宮のもとすみ給ひし所なり　六君も六條院にすみ給ふなり弄　箋是は紫上の住給ひしかた匂宮もと住給ひしかたなり
かゝらんとする事とは　秘中君の心なり不肖故となり　箋中君の心なり
いとかくやは名殘なかるへき　匂宮のあまりなる名殘なきそとなり
うつゝとも覺えす　箋何と思ひて宇治を出しそとなり
猶いかてしのひてわたりなむ　箋中君宇治への事なり
にくけにもてなしなとせはこそ　箋宮へはにくけなるけしきもらさしとなり
一日(ヒトイ)のことはあまりのつたへたりし　秘文の詞八宮の第三年の佛事も薫のいみしくし給ひし事なり弄

箋　私法事の有さま阿闍梨の中君へ申たるなり
かゝる御心のなこりなからましかは　花薫の故姫君を忘れ給はぬ名殘に我まても思ひ給ふと中君の御ふみにかき給ふなり　箋是は薫の八宮の事を名殘なく忘れ給はゝ第三年の佛事なととりおこなふ人も有ましき事をいへり花鳥の說いかゝ
さりぬへくはみつからも　秘ついてもあらは立より給へとみつから申たきとなり　弄さりぬへくは薫にわたり給ひもせよかしとなり此義可然一說云中君の宇治へわたりなんといふ心なり云々薫のとりなしてみつからわたり給へと我身の事にし給ふなり云々　私秘又弄の始の義よし
宮の御忌日にれいのことゝも　八宮の佛事の事をよろこひ給へるゆゑにかくこま〳〵とあるへしとなり草子地成へし
これよりたてまつる御かへりをたに　箋常には御返事さへもつゝましけなるかあなたよりこま〳〵文ありてしかもみつからなとゝあるに薫の心ときめきもしぬへしとなり
宮のいまめかしくこのみたち給へる　秘薫の心なり

匂は六君をそ思ひつき給へる成へし
おほしおこたりけるを　箋匂の中君へ疎遠成を云り
懈怠の事なり
うけたまはりぬ　秘薫の返事也貴人への返事にはかく書なり
一日はひしりたちたるさまにて　弄返事の詞薫の事也　秘宮の御忌日の事なと大樣に申となり　花故みやの御忌日に經佛の事なと取もち給てきこえ給ひし事をひしりたちてと云なりそれも中君の御爲にとりわきし給ふを過にし人の名殘とのみ見給へはその人の御ため心さしあさく成といふなり是は薫の文の返事の詞なり
しのひ侍しもさ思ひ給へるやぅ侍る頃ほひにて　私此佛事を沙汰するよし申さは中君宇治へ行給ふへき由の給ふへきとてしのひたるとなりまへに宇治へわたり給ふへきわらましなとの給ひし故にとなり箋　弄ことさらにしのひとはことさらにとりおこなひしとなりさ思ひ給ふるやうとは今案宇治へわたり給はんとの給ふ頃なれは不可然と思ふ心にや

なこりとの給はせたることそ　弄もとの名殘との給へはあさく成ぬとなり　秘前の文に御心のなこりなからましかはとあり　箋中君の詞をうけていへり中君へ隨分奉公と思ふをむかしの名殘とは曲なしとなり　私前に花鳥にしるされたる義然へし皆其心なり
よろつはさふらひて　箋參りて申さんとなり
すくよかに　薫の實なる性なり
さて又の日夕つかたそ　箋文のありし翌日の夕なり
いとゝにほはしそへ給へるは　箋薫のたきそへたるはあまりおとろ〳〵しきとなり
丁子そめの扇の　箋扇に丁子のしるをぬる成へし　秘よのつねのかはほり扇成へし弄
女君もあやしかりしよの事　秘宇治にての事也　箋そひふしし給ひし事なり
さてもあらましをとはかりは　秘草子地なり　箋かほるにくしての事なり
うらめしき人の御ありさま　秘匂にくらふれはさなり
何事もいとゝことよなう思ひしられたまふにや　ちか

ちかしとてみたれたる所あるましきと覺す成へし
けふはみすの内に　弄ひさしにすへ奉りける成へし
私この前に參り給へる時みすの外成られへありし
ゆゑなり
わさとめしと侍らさりしかと　秘薫の詞なりさりぬ
へくはみつからもと文の詞に有つる事なりわさと
のめしにはあらさるといへり
れいならすゆるさせ給へる　箋さりぬへくはみつか
らもと有し事をいへり
宮わたらせ給ふとうけ給はりしかは　秘昨日は匂宮
わたらせ給へりときゝしとなり弄箋
としころのしるしもやう〳〵あらはれ侍るにや　け
ふはみすの内にてたいめんもあり又昨日の文にみ
つからもなと有し事なり
猶いとはつかしく　秘中君の心なり箋　箋かくのこ
とくしたしきは宇治への事をいひ出んためなり
一日うれしくきゝ侍し　秘中君の詞　箋宇治にて宮
の御忌日の佛事のさまを阿闍梨のうれへ申たるを
聞て悦ひ給ふなり心にこめてはうれしさもしられ
しとて文にて申たるとなり花鳥說いかゝ但註之

花是はかほるの宇治の山里をたとふきかたに覺し
ゆつり給へかしなとの給ひし事ともなり
いたくしそきて　退（シリソク）しそき也　秘簾中の奥ふかき
となり箋
いと遠くも侍るかな　箋薫の詞遠くてきこえかぬる
となり　秘薫の詞あまりにおくふかきなるとなり
まめやかにきこえさせうけ給らまほしき　箋實にこ
まやかに申たき事もあるとなり
けにとおほして　中君の心なり
ふとむねうちつふるれと　薫の心なり
宮の御心はへれもはすに　秘匂宮の六君に思ひうつ
り給ふ事也
かつはいひもうとめ　箋匂の中をちといひさけなと
の心なり中君に薫の心かくる故なり
たゝ世やはうきなとやうに　河「世やはうき人やは
つらきあまのかるもにすむ虫のわれからそうき
我からなるとなり引歌世やはうき人やは云々　弄
引歌同箋
山さとにあからさまに　秘薫へ申給へるなり
それはしも心ひとつに　秘薫の詞宮のゆるし給はて

はとなり
かの御けしきにしたかひて　箋匂宮へ間給ひてその御心次第にて然へしとなり
たかひめありて心かるくも　箋六君の事ゆゑそむき給ふやうならんは外聞いかゝとなり
うしろやすく人にゝぬ　箋薫の好色ならぬは匂もしり給へりとなり
物にもかなやと　河「とりかへす物にもかなや世中を有しなからの我身と思はん　秘薫の心中に思給すちなれはあまたゝひ此歌の心出きぬるなり　弄とりかへすの引歌なり箋引歌同
ほのめかしつゝ　箋薫のちと風流めくなり
いとうるさく覚えて　中君の心なり
さらは心ちもなやましく　秘中君の詞也
さてもいつはかりおほしめしたつへきにか　秘引とめんの心にてかくの給へり
いとしけく侍りし　箋道の草は宇治の道なり
しはし入さして　秘中君なり九月にとなり
ついたちのほと　箋九月上旬なり
なにか世のゆるしなとこと〳〵しく　箋匂へ申に及はぬなり　私匂もかけしろひ給ふましきとなるへし数ならぬなと身をおほす心歟
むかしおもひ出らるゝ　箋大君を思ひ出るなり
女さりやあなこゝろうと　箋中君のこゝろされはこそとなり
それにつきて　引入給ふにつきて薫もなかはゝ簾中へ入なり
あらすやしのひてはよかるへく　花あらすやはの給ふ事にはあらすやの心也忍ひこそよからめと宇治へのことをの給をそらおほれしてあらぬかたにとりなしてとほくにてひかきゝもや侍らんちかくよりてうけ給はりさためんとかこつけてみすの内へ入侍るなり　秘まへの中きみの詞に宇治への事をたゝいと忍ひてこそよからめなにか世のゆるしなとこと〳〵しとの給しを云り　弄中君の宇治へ忍ひてよかるへしと侍しを薫のとりなし給ひて忍ひてといふ詞にたより給ふなり　箋前の義ともに同し
うと〳〵しく覚すへきにもあらぬを　前もそひふし給へれはかくいへり

いらへすへき心ちもせす　中君の心なり
思ひの外なりける　秘中君の詞也
すこしはことわりなれは　薫の詞也
いにしへをもおほしいてよかし　箋昔そひふしの時の事なり
過にし人の御ゆるしも　秘大君なり
月ころくやしさ　薫の心中をいひつゝくるなり
せんかたなくいみしともよのつねなり　中君の心也
なかく〵むけにこゝろしらさらん　秘中君の心なり
こはなそあなわかく〵し　薫の詞也
いひしらすらうたけにこゝろくるしき　中の君のさまなり薫の心なり
みしほとよりも　箋むかしのそひふしの時の事也
くやしさにもけにねはなかれけり　河「ならはねは人のとはぬもつらからす悔しきにこそねはなかれけれ　箋引歌同秘弄引歌なし
やをらしそきぬるそいとほしきや　ちかくさふらひし女房ふたりもしりそきぬとなりされは中君の御ためいとほしきとなり
むかしたにありかたかりし　箋むかしのそひ臥にさへ實事なかりしかはまして　薫の堪忍し給ふなり
かやうのすかたこまかにも　秘草子地なり　箋何とかくへきやうなしとおもはせておくも草子地と也
かひなき物から人めのあいなきを　秘薫の實法なるさまなり　箋此性のある所薫の妙なり
なやましけに聞わたる　箋懐姙を今夜薫のしり給ふなり
いとはつかしと覺したりつるこしのしるし　花懐姙の女のしるしの帯の事なり　秘懐姙の着帯なり箋
心やすくしもえあらさらん　箋かさねて逢事のたやすかるましきなり
さかしくおもふに　隨分薫のわかこゝちをこくらゆるなり
せかれす今のまも戀しきそ　箋さかしくおもひしつむるにもせかれす戀しきとなり
すこしほそやか　中君のさまなり
たちはなれたりとも覺えす身にそひたる　箋面かけなとはつねにかく云り是はめつらしくかきなせり
宇治にいとわたらまほしけに　中君宇治へゆかまほしくし給ふ事也　箋かやうに中君に薫の心かくる

に浮舟事を思ひ出して中君の引合給へり
またいとふかきあしたに御文あり　箋薫より中君へ
なり
薫 いたつらに分いる道の露しけみ昔覺ゆる秋のそらか
な　秘昔もかやうの事はありしとなり　箋むかしの
そひふしをおもひ出るなり
ことわりしらぬつらさのみなん　河「身をしれはう
らみぬ物をなそもかくとわりしらぬつらさなるら
ん　弄引歌までもなし　箋引歌同
うけたまはりぬ　秘返事なり
あまりことすくなゝるはなと　薫の心なり
すこし世中をもしり　箋中君のさまを薫の思ひつゝ
くる心なり
いにしへにはいとおほしまさりて　箋薫の昔そひふ
しの時より思ひくらふるなり
この宮かれはて給ひなは　匂宮の中たえはとなり
あらはれて心やすきさまには　箋われをたのもし人
にし給ふともおもてむきにてはえあらしと思ふ也
さはかり心ふかけに　秘草子地なり
なき人の御かなしさは　箋大君の事也

これはよろつにそ思ひめくらされ給ける　箋大君の
事は大かたしられぬあはれはかりなり是はさまさ
まの事をあらましとに思ひめくらさるゝとなり薫
の心歟
宮わたらせ給ひぬと　箋匂の中君へおはしたるとな
り
うしろみの心はうせて　薫の中君をうしろみはかり
の心にてはなくて戀しきまゝに匂宮のおはしたる
をうらやましく思ふとなり
何かは心へたてたるさまにも　秘中君匂宮をはうら
み給はさるなり
たのもし人に思ふ人も　箋薫の事なり
きえせぬほとはあるにまかせて　河「うきなからき
えせぬ物は身なりけりうらやましきは水の泡かな
箋引歌同詞はかりをかりたる本歌なり只今のほと
はなり次第に匂宮をたのまんとなり
いとゝあはれにうれしく　秘匂宮の御心なり　箋中
君の心うつくしきさまなる故に匂も一段うれしく
覺すなり
かのはち給ふしるしの帶　秘薫にはち給ひしなり

めつらしくさへ　箋匂の御懐妊の事を也
うちとけぬ所　秘六君の御かたなり箋
かくのみことよきわさにやわらんと　中君の心也
秘男はいつれも辨説ある物と思ひ給ふなり弄箋
あなかちなりつる人の　秘薫の事なり　箋年ころ薫
をあはれなる人と思ひしに夜へ詞をつくし給へれ
ともそれは有ましき事そと思へは此匂宮の御こと
はゝたのみなけれとも今はこれこそたのむへき事
と思ふから耳にとまるよしなり
この御ゆくさきのためは　秘立かへり思へは薫より
は匂宮の行末をこそ頼むへけれとなり弄
たゆめ／＼て入きたりしほとに　箋薫のよへの事な
り中君の心たゆむるは油斷さする樣成こゝろなり
むかしの人にうとくて過にし　箋大君に實事なかり
し事
久しくたとへ給はん事は　秘匂宮のとたえの事　箋
匂のとたえおほくは薫を人の道ひきなとしてはと
思ふ故に匂を思ひまつはすやうに中君のし給ふな
り
かの人のうつり香　薫の餘香なり

そのみちの人にし　箋香のみちに心につきたる匂宮
なれはなり　又好色のかたへ心のつく事ともみる
へし
いとくるしとおほしたるを　中君のさまなり
されはよるならすさる事は　箋匂の心なり
ひとへの御そなともぬきかへ給ひてけれと　箋物な
とはぬきかへ給へと身にしみたるとなり
のこりありてしもあらしと　秘匂のゝ給ふなりこと
わりなり
心うく身そおき所なき　箋中君の心なり
思ひきこゆるさまことなる物を　秘東宮にも立給は
はつゐには立后なとも有へき事なり　弄さきにの
給やうに東宮なとになり給はゝとの事なり　箋さ
まこと成を東宮にも立給はゝといふ義は惡なり只
中君を人よりこと成さまに思ふ物をとなり
われこそさきになとかやうにうちそむくきはゝこと
にこそあれ　花六帖「人なれは我こそさきに忘れなめつ
れなきをしも何かたのまん　今按中君の我は六君
よりさきにむかへられ侍るに次に思ひなさるゝと
うちそむき給ふへき事也　弄引歌同　此歌の心の

やうにこそ忘れめなとゝ思ふきはゝことにこそあれかゝる御中なとにはさやうにかゝる〳〵しきことは有へからすとなり　秘引歌同　我こそさきに忘れめなと思ふきはにはあらさるへしかやうの御中にてはあまりにかろ〳〵しき事となり　秘案之立（小字かき）后の事なとの方へとはみるへからす只中君をおもふ事にて別したる事也然るを只中の君の我身のさきへむかへられたる物をなと思ひ給ふるはあまり成とみるへき歟　箋花鳥の儀又秘の小書の義如何引歌同我こそ先にとはそなたか思ふ人あらは我こそさきに忘れんなとゝ思ふは人による事そと也何とてかく匂のゝ給ふ事そなれはつれなき匂宮をたのむましきとおほせはこそはや薫には逢給へれと薫のことをおとしつけてうらみ給ふなり匂宮の六君へかよはゝ我こそさきに忘れめとて薫へあひ給ふ事よとの給事なり　私箋の義可用之

又御心おき給ふはかりの　秘いくはくの夜かれにもあらさる物をとなり

いらへ給はぬさへいとねたくて　匂のねたましくおほえすとなり中君はいはん方なくておはするなり

匂宮
又人になれぬる袖のうつり香を我身にしめて恨つるかな　箋なれぬるそてとは心のよく純熟しての事なり一旦の事にはあらすこふかくうらむる心あり中君のこたへをし給はゝ此歌には不可及歟

いかゝはとて　いふへき方もなけれと返歌なからんもいかゝなれはかくの給ふなり

返中君
みなれぬる中の衣とたのみしをかはかりにてやかけはなれなむ　弄かはかりは香によそへたり　みなれぬるは身になれたるなりかはかりはかくはかり也それをうつりかによそへたり　秘かはかりとはうつり香はかりとなり此歌も又大やうにいひなし給へり箋　箋是は此事をかこつけて義絶あるへきかとなり

かゝれはそかしと　秘かやうの所に薫の心をおくへきかとなり　匂の心なり

われもほろ〳〵と　匂の中君を色めかしき御心にさすかあはれと覺すなり

色めかしき御心なるや　箋草子地の評歟

かくはこしらへ　匂の心よわく中君をいひこしらへ給ふなり

又の日も心のとかに　匂のとまり給て翌朝のさまなり

御しつらひなともさはかりかゝやく　秘六君の御かたのめうつしにとなり箋

なへはみたるうちましり　箋是は薫よりさぬをおくり給事を末にかくへきためなり　箋こゝは晴々しからぬ故にかくあるなり

君はなよゝかなるうす色とも　箋紅歟紫歟いつれにてもなり　秘君とは中君なりなよゝかはなよらか成なり弄

何事もいとうるはしく　秘六君の事匂宮の心さしより思ひくらへ給ふに恥なきとなり

さかりなる人の御よそひ　箋六君の事なり

はちなきなめり　花はつかしくもなき心なり　箋心さしのふかき故によくみなさるゝかとなり

まろにうつくしく　箋中君の體なり前にもほそやきたるとあり

かゝる御うつりかなとのいちしるからぬをりたに

箋匂の心なり總別中君へ薫の心たゝにしもあらしと我心にくらへておほす故うたかはしき文なとのあるかとさらぬ體にて心かけ給へともさもなきとなり是は總別の事をいへり末によく聞えたり

あいきやうつきらうたき所　是は中君のさまを云

これをはらからなとにはあらぬ人のけちかくいひかよひて　秘兄弟なとならぬ人はかならすちかつきよりなはたゝにはあるましき中君の御さまなりとなり

ちかきみつしこからひつ　花御厨子　小唐櫃

いとかうのみはあらし　薫と中君よそ〳〵にてのみはあらしと匂の覺すなり

かの人のけしきも　秘薫のことなり箋

その日もえいて給はす　心もとなくて猶二條院におはするなり

六條院には御ふみをそ二たひ三たひ　秘六君の御かたなり

いつのほとにつもる御ことのはならんとつふやく老人ともあり　箋中君の官女の六君へ御文のしけきをそしるなり

こもりおはします　箋匂の二條院におはする事を薫の心に何とせんねたましき心のあるとなり

わか心のをこかましくあしきそかし　薫の思ひかへす心なり奇特なり
うしろやすくと思ひそめし　箋中君の爲よかれと思ふ人のかやうの心は有ましき事そと思ひかへすなり
さはいへとえおほしすてさめり　秘薫のかくねたくは心に思へとも中君をすて給はさるはうれしきとなり箋
人々のけはひなとの　秘中君にさふらふ人々を思ひやり給ふなり箋
母宮の御かたち　薫の母女三宮なり
れいのたゝん月のほうしのれうに　女三宮の詞也
弄薫の道心すゝみて八講なとさせ給ひし事ありきさやうの法事を此九月なとにもし給ふへき事とみえたり　秘九月は齋月なれは法事有へし　箋大君の法事の事とあり　私箋の義如何大君は霜月にうせ給へりとみゆ是は例のたゝん月の法事とあれは正五九月なとに行るゝ法事にや
なるかこと〳〵しき　薫の詞なりわさと染なとし給ふへからすとなりいそきてこそせさせめと宣ふ故なり
たゝなるきぬあや　いまたそめぬ成へし
みつから御れうとおほしきはわか御れうにありける　秘中君の御料なり弄　箋中君の御れうは薫のれうにしてあるを奉り給ふなり
はかまのくはなかりけるに　薫のれうのきぬなれは女のはかまのくはなかりしとなり
こしのひとつあるを　花引でしの事なり
薫むすひける契ことなる下ひもをたゝひとすちに恨やはする　秘腰の帯なとを見給ふことなり宮には契ふかくおはしましける事とも也我身にはうらむへき事もなしとなり　箋たゝ一すちには腰の一つあるを云り下の心は契ことなるは薫のわか物にてもみるへき事を匂へゆつりしも心からそとなりされは我身からの事なれは中君を一すちに恨むへきやうもなしとなり面白し
大輔の君とて　宇治より京へ出る時歌讀し人歟
とりあへぬさまの　箋薫よりの給ひつかはすさまなりわさとの用意ならねは結構からぬとなり
御れうのは　箋中君のれうなり

御らんせさせねと　匂のおはする故に中君へみせ奉らぬは如何

つねの事にてめなれにたれは　箋薫よりかやうの心つかひ細々の事そとなり

人々にとりちらしなとしたれは　大輔君の中君へもみせ奉らす人々にわかちつかはすなり

おの〱さしぬひ　箋ぬはぬもありと前にみえたり

おまへちかくつかうまつるなとをそ　箋御まへちかきは薫も御らんすへきゆゑにつくろふとなり

けちえんならぬそ　こと〱しき色あひならぬかよきとなり掲焉（イチシルシトヨムナリ）

何事をもうしろみきこゆ　箋中君の御たより成へき人薫ならてはなしとなり　弄中君の誰かはうしろみんとなり

宮はおろかならぬ御心さし　箋匂宮なり中君を懇切にはし給へもこまか成事をはえ知給はぬとなりことわりなりとなり

えんにそゝろさむく花の露はかり　箋匂の心には風流はかりなりとなり　弄匂宮事也　薫の事と祇説云々

おほす人のためなれは　箋平生の御心つかひよりは中君へは一段にこまやか成をさふらふ人々は猶不足に思ふと成へし　弄中君を思ひ給ふなり　秘匂宮は中君をは一段と覺しめすによりてこそ此程にもはぐゝみ給へとなり

いてやなとそしらはしけに　花ことわりしらぬ御めのとなとは宮の御うしろみのかたおろかなるやうにそしり申なり　秘不足にのみめのとなとは申なすとなり

わらはへなとのなりあさやかならぬ　是は總別こゝの體をいふ匂宮こまか成ことはえしり給はぬゆゑにそのさふらふ人なとのうちあはぬ事なるを山里なとにてこそかやうにても有つれこゝにてはすまゐにおはすと中君のくるしくおほす事ありしとなり

ましてこの頃は世にひゝきたる　六君の御かたなり

箋　中君は此頃はいよ〱匂宮の御家人なともいかゝみくらへて思ふらんとはつかしくおほすとなり

うとからんあたりにはみくるしくたい〱しかるへ

き　薫は中君の心をおしはかるなりさてかやうのくたく〳〵しき事は隔心かましきあたりへはあるましき事となりされはあなつるまてはなし又ことく〳〵しくしなしたらは結句人の目にたてゝみとかむる人やあらんとの用捨なりとなり

いまそ又れいのめやすきさまなる　秘前にはとりあへぬ物ともなれはとは又殊更にしたてゝまゐらせ給へり

あやのれう　河綾料　糸の事也　秘綾を織へき料なり弄　花れうはをりこんの事なり

この君しもそ宮にもおとりきこえ給はす　弄薫の事秘　箋句におとらす榮耀の人なり

このみこの御山すみを　八宮の宇治の山里に侘しくさひしき事を薫はみならひ給ひてかゝるおもひやりのふかきとなり

いとほしの人ならはしやとそ　花故宮にならはされ給て人のたえく〳〵しき事をもしり給なり　弄宇治の宮よりさひしき體を見習給ておしはかり給なり人のためいとほしとなり　秘草子地なりよく思ひしらせ給ふ事となり　箋作者の評なり　私かやうにたえく〳〵にわひしき事のならはしてに成給ふ八宮をいとほしきことゝ云歟

かくて猶いかてうしろやすくおとなしくて　秘薫の心なり　薫の心のたしなみなり中君にこゝろのかかることなくて過さはやとおもふなり

ひとへにしらぬ人ならは　秘中君の心なりいひはなたんもいかゝとなり

さまことなるたのもし人　さまことなるとは薫は中君と兄弟なとのやうなるちかきゆかりにもあらす又夫婦の間にてもなくてたのみならひたる人なれはさまことなると云なり

あはれをしらぬには　薫のあはれなる心のほとをもさすかみしれりとなり

いふかひありぬへくわかやかなるはみなあたらしやうなり

花新參の人ともなり　秘皆新參の人たちなり箋弄はしめてゐたる人なとには中の君の心おき給ふ

みなれたるとてはかの山里の　弄ふる人にて心よからぬなり　弄山陰になれていふかひなきふるこたちともとなり

おはせしかは此人もかゝる心を　箋大君のおはせは薫の中君へ心かけしとなり
この事いとくるしくおほゆ　箋匂宮の心のかはるよりも薫の心かけ給ふかくるしき也　中君の心なり
をとこ君もしゐて思ひわひて　秘薫なり
やかてはしに御しとね　とさまにあひしらはんためにやかてしとねをいたすなり簾外なり
なみたのおちぬへきを　箋薫の心なり
なやませ給ふをりはしらぬ僧なとも　箋僧の事加持なとの時の事なり　秘薫の詞醫師僧なとの類なとなり
物のけしき　ちか〳〵しかりしをみし人々の云なり
夜ゐのそうのさに　秘加持の僧なり　花加持する人を夜居の僧といふなり　箋母屋の外ひさし成へし
人のかくいふにけちえんならんも　秘中君の心殊勝なり　箋けちえんは掲焉也いちしるく人の不審のたつへけれはかくて對面し給ふなり
とき〳〵物の給ふけはひ　薫の心也中君のけはひ也
むかしの人のなやみそめ給へりし　大君の事の思ひ出らるゝをゆかしくと思ふなり

なれ〳〵しけにちかつきより　箋一よの時のことくなり
いとくるしけれはわりなしとおほして　中君の心なり
少將といひし人を　箋少將の君をそはにさふらはせ給ふなり
むねはおさへたるはくるしく　箋けにもあしかるへき事なれとも人をちかくおかんため也薫の詞也
ゐなほり給ふほともけにそしたやすからぬ　河拾「水とりの下やすからぬ思ひにはあたりの水もこほらさりけり　弄下やすからぬは中君の心とみゆ　秘中君の心とみゆ薫といふ義われとも非なり　私下やすからぬは薫の心にても可然なり但如何引歌及さるなり
いかなれはかくしもつねに　秘薫の詞なり
人にとひ侍しかは　秘懐妊したる人の趣を尋ねとへはとなり　箋初こそくるしけれ後はさもなきといひしとなり
いとはつかしくて　秘懐妊の事をはち給ふなり弄
むねはいつともなくかくこそは侍れ昔の人も　秘中

君の詞昔の人もとは大君なり

なかゝるましき人のするわさとか　箋大君も胸をやみ給ひしなり長命なるましき人のかくあると人のいひしとなり

けにたれも千とせの松ならぬ　河「うくも世の思ふ心にかなはぬか誰も千とせの松ならなくに　秘引歌同　箋引歌同し妙なる歌なり　弄引歌うくも世の云々

めしよせたる人のきかんもつゝまれす　秘少將なり　弄つゝますなから中君はかりの聞給ふやうにの給ひしなり

かの御みゝひとつには　箋中君は心え給ふやうにいひなし給ふとなり

けにありかたき御心はへにもと　箋少將は心にはたたねんころ成とはかり思ふなり

故君の御ことを　箋大君なり

いはけなかりし程より世中を思ひはなれて　秘薫の詞なり　箋薫の心いつも如此あり

うとき物からおろかならす　箋三本うき物からとありてと文字無之但古本以下可然也三本被見合所に四本にうときとあり　河三本書入る本と註之　秘大きみにこゝろかけそめし事なり

かのほいのひしり心はたかひやしにけん　大君に心かけしより出家道心なとの心はやみたる歟となり

なくさめはかりにこゝにもかしこにも　大君の忘れかたきなくさめなり

さらにほかさまには　大きみの事なりほかさまと云へるにて中君の心も有へし

心のひくかたのつよからぬわさなりけれは　大君の思ひ忘られぬゆゑにすきかましきやうに中君の覺すともそく（本ノマヽ）へしとなり

よの人ににぬ心のほと　箋薫の實法なる事なり

うらみゝなきみきこえ給ふ　花なきみわらひみといふ詞つかひなり

うしろめたく思ひきこえは　秘中きみの詞こなたよりこそ申おところかす事もありつれとなり　箋大かたの人にては薫のおはせはかくちか〲しかるへきかとなり

みしる事ともの侍りしかは　箋薫の實法又志の深切なる事なり

今はこれよりなとおとろかし　箋ちとみつからも申たきなと〻見なしたからえさへ申すとなり　さやうなるおりもおほえ侍らぬものをいとかしこき事に　秘薫の詞中君の方より薫にわたり給へと以前ありし事をかしこき事にの給ふとなり弄　さやうの事もた〻一度の事なるに有ましき事との給ふとなり

この御山さといてたちいそきにからうして　花宇治のふる宮をは後の世の爲にたふとき人にゆつり給へきといふ心なり薫大將の我身こ〻におこなひてこもりゐ侍らんと思よしほのめかし給ふそれを御らんしてしるかたありてこそはとかけるなり　私此義如何　箋宇治への事ゆゑこそそれをめしたれとなり　秘からうしてとはそれも山里への御用にこその給つれとなり弄

御らんししるかたありて　箋それも心安く覺しめす故なれはとおろかには思はすとなり　秘それをもうれしくはおもひしとなり

山のかたをくらく　秘庭の山成へし弄箋　花二條院の庭のつき山なりをくらきはほのくらきなり秘弄箋

かきりたにあるなと　引歌河に同し　河「戀しさのかきりたにある世なりせはつらきをしゐてなけかさらまし

音なしのさともとめまほしきを　河「戀侘ぬねをたになかん（なみイ）聲たて〻（おほつかなイ）いつこ成らん音なしの里　花紀伊國の名所なりをとなし川とてあり　秘引歌河に同　弄同宇治の山里なとを思ひよそへての給ふ也　箋引歌同此歌三四の句つ〻かぬなり戀わひぬ聲たて〻ねをたになかんとはつ〻けられぬ故にかくよめり

かの山さとのわたりに　秘宇治なり　箋宇治事なりそれを音なしの里といひなしたるなり

むかし覺ゆる人かたをもつくりゑにもかきとめて　秘大君の事なり箋　弄兩義あり　見河海一義なり一云た〻昔の人のかはりにといふ心なり　河白氏文集曰香爐峰北有ㇾ寺號二遺愛寺一件寺者高宗皇帝有二最愛王子一至二七歳一忽薨不ㇾ堪二哀傷一建二立堂舍一王子形安二置其寺一草堂記　書圖事漢武帝初喪二李夫人甘泉殿裏ㇾ令ㇾ寫ㇾ眞丹青書出竟何益不ㇾ言不

彫刻事武帝以二薫中君一李夫
レ笑愁二殺君一 白氏文集
人形作以二温石一
あはれなる御ねかひに　秘中君の心なり　私中君詞
なり　箋中君の返答なり

またうたてみたらし川ちかき心ちする人かたこそ
河「戀せしとみたらし川にせし御禊神はうけすそ[もイ]成にけらしも　秘人形と云るにつきていへり戀せしなといふ事は佛の道には遠き事となり引歌同河
花昔おほゆる人かたをもとのたまへるにつきてみそき河の人形を思ひよせて戀すれはこそうき事もあれこひせしとおもひなり給へるいとほしく侍との給ふなり　弄戀せしのみそきも心きよからぬ事なれはおこなひに似あはぬ心なり引歌同　私花鳥の義如何以上弄　箋御祓の人かたはやかてすつる物也さやうにては大君の人形いとほしと也引歌同

こかねもとむるゑしもこそなとうしろめたくそ　秘昭君かこときあしくかきなしてはとなり　弄昭君かことくかきかへたる事あれはなり　箋是は薫の宣ほとに畫工何ほとも形をよくかくへしされとも似すは曲々なし又散々にかきなさんもいかゝなれはうしろめたしといふなり　河蒼舒云漢元帝宮人頗多嘗令畫工圖之有欲呼者被[彼イ]圖以召故宮人多行賂於畫工王昭君姿容甚麗无所苟求工遂毀其狀後匈奴求美女帝以昭君充行既召見帝悦之而名字已去遂不復留帝怒殺畫工毛延壽　杜詩註

今よそのたくみもゑしもいかてかは心にはかなふへき　秘不言不笑かたちはかよひもなかるへしとなりかくいへるも中君の心あるとなり

ちかき世に花ふらせたるたくみも侍りけるを　河ひたのたくみか事なり云々可勘付飛彈匠　花水原抄云ひたのたくみは母のかなしうしける女をうしなひてかたをつくりたりけれはありしにもかはらすよるになれは物なとほのかにいひける事をいへり或説云ひたのたくみははかりことに花をふらせたり云々　弄術にて花ふらせたることとあり云々可用此義花鳥　秘神變を現する[今イ]ありともとなり　箋なき人のかたちをみせたる事ある歟それ望みに思ふなり

いますこしちかくすへりよりて　秘中君也　箋薫の深切に大君の事をの給ふか苦しくて浮舟の事をい

ひ出んとて中君のちかく居よるなり
人かたのついてにいとあやしく思ひよるましき　秘中君の詞也　箋此次に人のしらぬ事を思ひ出たるとなり　弄薫にかたるましき事を思出たるとなり　花手習君の事をいひ出んとて人かたのついてにといへり昔の人のけはひにかよひたれは其かたしろにいひなし給ひて薫のつねにむつかしき事をきこえ給ふをいひのかれんと思ひ給ふなり
うれしくあはれにて　箋薫の心なり
このちかき人の思はんことの　秘少将なり箋さりけなくもてなし　秘中君の手をとらへたるを少将にしらせしとさらぬよしなるなり
としころは世にやあらんとも　秘中君の詞なり手習君の事をかたり出し給へり　箋うき舟の事なり
たつねいてたりしを　弄中君のかたへたつねこしなり
うとくは思ふましけれと　箋別腹のいもうとなり
うちつけにむつひ思はんと　箋腹かはれる故なり
あはれにおほえなりにし　大君ににたるからあはれに成たるなり

かたみなとかう覺しの給めるは　秘中君の我身よりはよく大君に似たる人ありとなり中君をはさふらふ人々は大君には似たりともおもはぬよしいへり　弄中君をあねのかたみに薫のゝ給ふとさふらふ人人なとさもあらぬよしをいふに此浮舟はよく似たりとなり
あさましくもてはなれたり　花たりの字さりと有へきなり故姫君にもてはなれす似かよひたる心成へし　箋花鳥にもてはなれさりと云々尤吉なり
ゆめかたりかとまて聞　秘薫の心なり　花薫の心夢かたりかと聞侍るなり　箋薫の心夢かとはまことならぬとのやうに思はるゝとなりうれしき事をは夢ともうつゝともわきまへぬといふ心なり
さるへきゆゑあれはこそ　秘薫の詞箋
いさやそのゆゑも思ひわかれ侍らす　秘中君の詞
箋いかなるはとも分別なきとなり
物はかなきありさまともにて　秘大君はおはせす物はかなき事は中君の我身ひとつの上になれるとなり　私是は八宮の姫君たちあまたおちとまり給へる事をうしろめたけにおほしゝとなり

たゝひとりかきあつめて　私あまたとありつれとも
中君ひとりかやうのはかなきさまにてのこれるに
又そのたくひをやそへんとの給ふにて兄弟と薫の
推し給ふなり
又あひなきさまうちそへて　秘我身さへあるに又あ
いなき事をそへてはとなり
の給ふけしきみるに　秘薫の推し給ふなり
宮のしのひて　秘故八宮なり弄箋
忍ふ草つみおきたりけるなるへし　秘落胤腹なと成
へしとなり花　河「むすひおくかたみのこたにな
かりせは何にしのふの草をつまゝし　秘弄箋引歌
同
かはかりにておなしくは　秘薫の詞也
さすかにかたはらいたくて　箋中君ののこりなくは
さすかいひにくゝおほすなり
たつねんとおほす心あらは　秘中君の詞也
くはしくもえしらすや　中君もさたかならぬと也
あまりいかゝ心おとりも　箋様體をくはしく申さは
いかゝとなり
よをうみ中にも玉のありか　秘蓬萊山をいへり　楊

貴妃の事　弄方士事　箋蓬萊事なり桐壺巻に有し
事なり面かけかはれり日本よりも猶東となり　河
又旁求四虗上下東極絶天海跨蓬壺見最高仙山上多
樓閣西廂下有洞戸東嚮闔其門署曰玉妃太眞院　長恨
歌傳陳鴻
いとさまてとふへきにはあらねと　秘此人をしゐて
したふへき事はあらねとなくさめかたきよりはと
薫のの給ふ事也
いさやいにしへの御ゆるしも　秘中君の詞八宮の御
子ともかすまへ給はさりしとなり弄
くちかるけれと　河口輕也かろ〳〵しく物云心なり
中君の申すは口かろき事なれと薫の御志の切なる
を見てこそかくまても申せとなり
いと遠き所に　箋常陸よりのほりしなり　花常陸國
をいふなり　私此常陸介もとは陸奥守なりき其時
こそくして下りけるにや
母なる人のうれはしき事に思ひて　秘手習君の母は
浮舟（中村イ）のいとこなり弄
ほのかなりしかはにや　箋浮舟を中君のほのかにみ
しゆゑにかくおほえしとなり

佛にならんはいさこよなき事　花 薫の山里の本尊に
との給ふなり　秘 山里の本尊といへる詞につきて
の給ふなり箋　箋 總別此浮舟の事末のあしからん
前表なり或は人かたかたしろ佛につくり繪にかき
なさゝいへる皆不吉の事にのみたさへたり殊形代
は川へなかす物なり
さまてはいかてかは　それほとまてのかたちなとゝ
はしらぬと中君の詞なり
さりけなくてかくうるさき　秘 薫の心なり中君の我
身をいひのかれんためとは推したまふなり箋
あるましき事さはふかく思ひ給へる物から　箋 中君
の心薫のあひたの事なり
けせうにはしたなくはもてなさぬを　河 顯證なり
箋 顯證なりあらはにしるくもてなしてはなれはえ
せぬを薫の我心のうちを中君のしり給へりと思ふ
なり
うちたゆめて入給ぬへけれは　秘 いとまこひもせす
して入給へるなり　箋 油斷させて中君の内へ入給
ふなり
なけきかちにて　薫のかへり給ふさま也

かくのみ思ひては　箋 薫の我さ此事を思ふなり
をりたちてれんじたる心ならねは　河 練也　秘 戀ち
なさには薫はさのみ練せさるなり　弄 薫は練し給
はぬ程了簡なき心なり　箋 好色に練したる人なら
は結局かくはあるましきさなり　花 練調練したる
こころなり
にたりとの給ひつる人も　箋 浮舟なり　薫の心也
まことかとはみるへき　箋 實によくにたるか浮舟を
みたきさなり
かたくはあらすとも　箋 ふとり腹なとは尋よらんは
やすかるへしさなり
人のほいにもあらすは　秘 わか思ふにかなはぬ樣に
ありてはさなり
猶そなたさまには　箋 浮舟の事に心はいそかぬなり
是は中君には心のかゝるさいふなり
いとゝむかしとほくなる　秘 大君の事なり
さうしくちに　弄 障子なるへき歟
いさかしこけれと　秘 辨かさまなり　弄 さし出ぬ事
をいへり　私直に對面申さぬは無禮成事なりされ
はとしよりてみくるしきゆゑそさことわりを申な

り

いかになかめ給ふらんと　秘薫の詞也

人のうへにてあいなく物を覺すめりし　花故姫君の事を思ひ忘れ給はぬなり　秘辨か詞心なり大君匂宮の御こたえをなけき給此頃にて有しとなり人のうへにてさへかくふかく物思ひをし給へる御心なれは薫につゐになひき給はさるもかやうの遠慮ある故成へしとなり箋　弄姫君中君の事に物思ひ給し頃の事なり

いつこ侍らぬ中にも秋の風は身にしみて　河「秋ふくはいかなる色の風なれや身にしむはかり人の戀しき

けにかのなけかせ給ふめりしもしるき世中の御ありさま　箋大君の去年なけかせ給ひし事を思ひいてゝその行末の如く六君の事出來て今又中君の心くるしきさまをいかにと辨尼申出るなり　私中君只今六君ゆゑ物思ひをし給へるよしをきゝ侍れはことわりと思ひあはせたるとなり　弄中君の只今の物思ひを辨尼の思ひ合せたるなり

さま〳〵になむ　是は大君と中君との事にかけたる詞なり

今ある事もかゝる事こ　秘薫の詞なり我身中たち中せし事なれは一入かなしきなり

なからふれはなをか事あるを　中君の事も今はみなほしたるなるへし

あちきなくおほししつみ　大君の命みしかくて今のなほかゝるさまを見給はて失せ給し事此事ゆゑなれは薫のわかあやまちのやうにかなしきとなり

此ころの御ありさまは　秘匂宮の事なり　弄中君との事也　箋匂宮に六君のおはする事かやうの事はなくてかなふましき事そとなり

されとうしろめたけには　私六君おはすとて中君のおほえおとる事はなしとなり

いひても〳〵むなしきそらに　秘殊勝の詞なりたれも〳〵とまらぬ世となり

かの御忌日に　弄かね君第三年の法事と云々　秘大君の一回忌を第三年と云義不用之　箋第三回歟　私一周忌なり

かひなき事のやすからす　箋此所をみれは思ひいつるなり

かの山てらのかたはらに　阿闍梨の寺のかたはら成
へし
たういくつ　堂なり
たふとき事ときこえしらす　寺なと建立の功德をあ
ざりの中なり
むかしの人のゆゑある御すまひに　秘八宮なり薫の
心なり箋　河此屋齊人何所居憶明(昨イ)平陽宅初置呑併(來圖イ)
平人幾家地仙去雙今作梵宮漸恐人家盡爲寺西朱閣
判佛寺寢多也白氏文集
その御心さしもくとくのかたに　箋八宮も佛道に入
たち給ひし事なれはなり
とまり給はん人を　秘故宮も姫君たちのましますに故
にこそ寺なとになすへき事を思ひわつらひ給ひつ
らめとなり箋
兵部卿宮の北のかた　秘中君なり箋
かの宮の御領とも　箋此所は匂宮の御領知ともいふ
へしとなり
こゝなから寺になさん　此古宮の地なからは成かた
きとなり
川つらちかくけせうにもあれは　箋狹少なりせはき
心なり
猶しん殿をうしなひて　秘此殿をは寺になして別に
殿をたつへきとなり弄箋
ことさまかうさまにいともかしこくたふとき御心なり
秘阿闍梨の返答なり可然となり　箋寢殿を御覽せ
は彌覺しいつへきを寺になしてしかも佛のくとく
のかたになし給へは此御心たきてかた／＼しかる
へしとなり因緣物かたりをしたるなり
別をしみてかはねをつゝみて　河或傳記云觀音勢
至むかし人の子にておはしましけるに繼母のため
にころされけれはそのたやかはねをくひにかけて
終に佛道に入給けるとなり經文にあり云々　弄見
河觀音勢至の因位なりつひに佛道に入事を覺しけ
り　秘河海にみえたりこゝの心は前の餘習をすて
て佛道に歸入し給へと也　箋觀音勢至因位の事出
所たしかならすと云々寢殿を其まゝたき給はゝか
はねをつゝみてもちたるやうの事なりそれをくつ
して寺になし給はゝかはねをすてゝ佛になりたる
ことしといふなり
たい／＼しき事なり　秘退々なり不可然事となり弄

こよみのはかせの　河暦博士也　推古天皇十二年甲
子正月戊午始用暦日
佛の御をしへのまゝ　寺をたつる様も悉佛説なとの
法令有へし
とかくの給ひさためて　秘薫の定め給ふなり
このたひはかりこそはみめと　秘薫の心なり寝殿を
こほつへけれはなり弄
寝殿はかへてつくるへきやうあり　秘辨にかほるの
の給ふなり箋
京の宮にわたさるへき物あらは　秘中君の方なり
箋わたすへき物あらは御庄の人してつかはせとな
り
故權大納言の君の御ありさま　秘柏木なり箋
めつらしくおはしますらん　秘薫の誕生の事なり弄
かの御母にむつましく　秘今薫のあたり近くなれ侍
るは柏木によくみやつかへたてまつりし陰德陽報
成へしとなり
さま〳〵の事をみ給へすくして　箋柏木八宮大君な
との事なり
宮よりもとき〳〵は　秘中君なり箋

こひめ君の御事とも　大君の事なり
こめかしくこそすくなゝる　花こめかしきは人の心
むけのこまやかなるをいふ又はかなくをさまるま
しき心にもかなへり　箋此花鳥義相違　秘巨なり
薫の心なり
宮の御かたは　秘中君の事なり
心ゆるさゝらん人のためには　秘うとき人なとには
すく〳〵しうわへしらひ給ふへき心成そとなり弄
箋
われにはいと心ふかく　秘薫にはなさけ〳〵しくお
もては見えてやみぬへきやうにし給へり兄弟の心
をとりあはせて思ひくらへ給ふなり箋
かのかたしろの事を　秘中君のほのかにかたり給ひ
し事なり浮舟の事なり
京にこの頃侍らんとは　秘辨か詞なり　箋浮舟母な
との在京をはいまた辨はしらぬなり　今イ
中將君とてさふらひける　浮舟の母とは常陸介か妻
八宮の北方のめひとみゆるなり
さもやあらんとおほす事の　秘八宮はわか御子とは
おほしなから也　箋女子は浮舟なりそれ故に八宮

の遠さかり給ふなり
ひしりにならせ給ひにける　箋それより八宮のひしり心になり給ひしとなり
はしたなく思ひてえさふらはす　箋八宮の厭却し給ふ故にさふらひにくけれは此中將君の退出したるなり
みちのくにのかみのめに　今の常陸介なり
の給はせはなちけれは　箋八宮へ申せしかと御許容なかりしとなり
さて又ひたちになりて　秘初は陸奥守なりしか今常陸になりてくたれるなり箋
かの宮にはたつね參り　中君（宮イ）の御あたりへなり
はたちはかりには　箋浮舟の年なり八宮の北方うせ給うて四五年後の事成へし
くはしくきゝあきらめ　秘薫の心なり
みはやと思ふ心いてきぬ　箋能々きゝて薫の心に入たるなり
むかしの御けはひに　大君に似たる人となり
かすまへ給はさりけれと　八宮の御女の數にはの給はさりつれとなり

母君は故北のかたの御めひなり　秘系圖をかけり浮舟の母中將君は辨かいとこめひなり箋
辨もはなれぬなからひ　弄浮舟の母中將の君は辨かいとこめひなり
そのかみはほか〳〵　辨は柏木に候ふ中將の君は八宮にや
大輔かもとより　秘浮舟の方の女房なり弄箋
かの御はかにたに　秘八宮の御墓なり
よへおくれてもてまゐれる　秘薫におくれたるなり
木からしのたへかたきまて　秘景氣たくひなし
とみにもえいて給はす　箋懷舊の思ひこゝの景氣なとにかへさのいそかれぬなり
こたになとすこしひきとらせ給ひて　河木蔦つたのたくひなり　花木蔦は木につきたる虫の名なり　弄蔦の類なり一義又云木にとりつきたる虫のからの類と云々　蛸（竹作切身小虫なり）　木蛸玉篇　秘蔦の類なりと云々　箋蔦の類なりちと葉のちひさきなり引とらせといへるにて聞えたり
宮へとおほしくて　匂宮へなり中君の御かたへ成へし

薫やとりきと思ひ出すは木のもとのたひねもいかにさひしからまし　秘昔の名殘をおもはすはさひしかるへしとなり總して薫は一生をより所なく思ひ給ふ間東坡か吾生如寄耳と云ることくいつくをもさためさるとなり（なかりしイ）　箋かりねと思ふ一夜をさへあかしかぬるに常住の心を思ひやる事也　私やとり木のきの字はやとりてありきと云きの字の心成へしおもては木の字なり

返辨尼あれはつるくち木の本をやとりきと思ひおきけるほとのかなしさ　秘あれたるかけを何とも思はて一夜をもあかし給へるは誠にあさからす昔を思ひ給へるゆゑとあはれなるとなり　箋程の字か詮なり

いさゝかのなくさめには　薫の心なり

宮にもみちたてまつり給へはをとこ宮おはしける程なりけり　弄宮には中君なり　秘折ふし匂宮もおはします時分なり

みなみの宮よりとて　弄三條宮より二條院へなり　秘三條宮をいへり前にも北の院に參らんにといへり　二條院の南なれはなり箋

例のむつかしき事もこそと　箋けさうたちたる事なとやあらんと匂宮のおはする程なれは中君のくるしく覺すなり

日ころなに事か　秘文の詞なり

いとゝみねの朝霧に　河「かりのくる峯の朝霧はれすのみ思ひつきせぬ世中のうさ　秘引歌同いとゝの字おもしろし都にてさへ晴かたしとなり　弄かりのくるの歌の心なり　箋宇治の體なり

御ゆるし侍てこそは　箋彼所は中君の知給ふへき所なれはなり

よくもつれなく　秘匂の詞なり　箋何事もなくさりけなくかけるを匂のの給ふ也

すこしはけにさやありつらん　秘草子地なり弄箋あなかちにかくの給ふをわりなしと覺してうちえして　かやうに書なし給ひにけるを匂のおはするを知て成へしとの給ふを中君のうちえんするさまなり

返事かき給へみしやとて　秘匂のそゝのかし給ふなり匂宮はみ給ふましきとなり

山さとの御ありきの　秘返事の詞なり　弄中君の文の詞なり　箋宇治の事なり

さやうにてこそよくと　秘堂になしてよかるへしと

なり
ことさらに又いはほの中　秘別の山をもとめんよりもとなりことさらの詞妙なり何時も入へきの心あり引歌に「いかならん巖の中にすまはかは世のうき事の聞えこさらん　弄引歌同事なり巖の中たつねんよりは宇治宮にすまゝほしとなり箋
おろかならすなんと　秘おろかならすうれしかるへきとの事なり
を花の物よりことに　秘ここ草にまきれす尾花のすくれたるさま也弄　箋「秋の野の草の袂か花すゝき穂に出てまねく袖とみゆらん
またほにいてさしたるも　秘小花のさま也　また秘に如此點せり　箋また清濁本に朱なり又も然へし云云
匂宮 ほに出ぬ物おもふらししのすゝきまねく袂の露しけくして　弄両説ありしの薄とはほにいてぬものなり云々　又云忍ふ薄なり出へきことのいまた出ぬをいふと萬葉箋同　中君の下に物思ふとえんし給ふ歌なりかをるとの事なり　秘薫の折々かやうの文かよはしのあれはしたに思ふ心のましますへきと匂の推し給ふなりしのすゝき一種類別にありと云ふ説あり但ほに出さるを云歟しのすゝきほに出るとよめる歌おほし然は穂に出たる類別なりと云説非歟　箋あらはれす下に物思ふよしとなりまねく袂は中君のかたより薫を許容し給ふとなり
なつかしきほとの御そに　秘匂宮の御さまなり
なほしはかりき給ひて　かさねのきぬのなきなり
女きみもこゝろにいり給へる　箋中君もあそひの事にすき給へり又琵琶をは大君の引給ひしかはなつかしくおほすへし
返中君 おきはつる野へのけしきも花（しのイ）薄ほのめく風につけてこそしれ　秘中君は匂宮の心のかはる頃にとりなし給へり弄　箋前にかれ〳〵前栽とありそのことく六君へ匂のおはして心のうつらふといへり
わか身ひとつのとて　河「大かたの我身ひとつのうきからになへての世をも恨つるかな　秘引歌同弄同箋同
らうたくおしはからるれ　匂の心なり
かゝるにこそ人もえ思ひはなたさらめと　秘薫の事なり箋　箋薫のかゝる故に心のとまるらんとうた

かはしくうらめしく匂の覺となり
菊のまたよくもうつろひはてゝ　弄尾花のさまの時分にあふよし也　秘菊のさかりなるをいへりうつろふからに色のまされはの心なり尾花の時分によくかなへり
わさとつくろひたてさせ給へるは　箋匂宮は菊なとをことに愛し給ふよし匂宮卷にみえたり　花あるにまかせたるにてはなくてわさとしめゆひなとしてつくりなせる花はおそくさくなり
いかなる一もとにか　花菊のうつろふは中君の事に思ひよそへたるなり　私此義如何
花の中にひとへにとすし給て　河不是花中偏愛菊此花開盡更无花（元稹朗詠に見ゆ）　秘引此詩詞箋同　私是は菊に付て口すさみ給へり唐の元稹が詩なり
なにかしのみこの花めてたる夕そかしいにしへ天人のかけりて琵琶の手をしへけるは　河西宮左府庭前靈物降居樹上託前遊小兒詠此詩敎（數イ）作者之本意盡字兼（召イ）請琵琶授秘手曲小兒醒了唐廉承武之靈也授上元石上流泉曲　又天人琵琶を敎へる事は寢覺の物語にもあり云々　ねさめの中君と云り　弄西宮左府事宮ならねと御子なれはみことと云る成へし　同天人のかけりてね覺の物語にあり廉承武か靈事云々　秘西宮左府の事なり親王ならねと皇子にとりてかく云る歟末代には奇瑞なともなけれは曲もなき事となり箋　箋是は菊にかけしろはぬ事なり琵琶に付ての事なり此花めてたるとは西宮左府高明菊を愛したるにはあらす時節に對して云り天人の琵琶の手をしへける事ね覺物語に在出所はしらす凡うつほ竹取ね覺濱松の物語を四種の法にあてゝ紫式部か源氏物語を法花の心にあてゝ云なり此物語にて皆會したる心なり
御ことさしおき給ふを　弄琵琶なり絃の總名にいへり　花こゝには琵琶を御ことゝ云絃の類をはおほよそことゝ云なり　秘琵琶なり
くちをしと覺して　秘中君の心也箋
心こそあさくもあらめ　秘中君の詞なり面白詞なり當時こそ心あさくも傳たる所はあさかるへからすとなり　我身こそおろそかなれとなり　諸道如此なり箋
さしいらへし給へかしとて　箋中君へ箏をそゝのか

すなり

昔こそまねふ人　秘中君の詞まねふ人は故宮の御事をいへり

かはかりの事もへたて給へる　秘匂の詞なり　私隔心あると匂のうらみ給ふなり

この頃みるわたり　秘六君なり

かたなりなるうゐことをも　箋初心なるをいふなり

その中納言もさたむめりし　箋女はいかにも人まゝに心やはらかなるこそよけれと也中君の御心よせの薫中納言もさやうにこそ定むさ匂のゝ給なり　秘薫なり花鳥の義不審いかゝ　弄薫成へし又義あり不用之　花此中納言謂誰人哉可尋なり

かの君にはたかくもつゝみ給はし　秘薫にはかくし給ましきと也此詞にて薫とはよく見えたり　弄薫にはつゝみ給はしと匂のうらみ給ふなり

ゆるひたりければ　秘琵琶は上に黄鐘調のかき合をとあり弄　箋柱のたち所ゆるひてさかりたれは則盤渉調にしらへ給ふなり盤渉は柱のさかりてたつゆゑなり琵琶をも黄鐘にしらへ給なるへし

伊勢のうみうたひ給ふ　河伊勢乃宇美乃引支與支ッヽ名支左爾一之保伽安比爾名乃利曾也津末安々牟安加比也比呂波安々牟也引多末安々也比呂波安々牟也　伊勢海　花伊勢海は律の歌なり盤渉調も律なり平調にかきるへからさるにや郢曲の衆（家イ）にたつぬへし　秘匂宮催馬樂をうたひすし給ふなり　箋箏の音をほめてうたひ給へるなり淸き渚なとあり

ふた心おはしますは　箋匂宮の御事を女はらの中詞なり

我おまへをはさいはひ人さ　箋中君の事をこれもいふ詞なり

又かへりなまほしけに　秘宇治へ歸り給ふへき御心のあるとなり

三四日こもりおはして　箋匂の二條院に御逗留なり

かのとのにはうらめしく　秘六君の御かたなり

おとゝうちより出給ひけるまゝにこゝにまいり給へれは　箋夕霧の内より退出しさまに二條院へおはしたるなり

こと〳〵しけなるさましして　箋匂の詞なり夕霧のさまをわつらはしくの給ふなり

むつかり給へと　發憤とかくはらたつ心なり
あなたにわたり給ひて　寝殿にて夕霧に匂の對面し給ふなり
ことなることなき程は此院を見て久しくなり侍るも　秘夕霧の詞なり此院とは二條院なり六條院の御後久しくてみたるとなり箋　弄此院は二條院なり
やかて引つれきこえ給うて　箋連行なり
ならふへくもあらぬそくつしいたかりける　箋中君かたの人の心なりくつしいたきは屈の極るなり痛の字のこゝろなり
きよらにおはしけるおとゝかな　箋夕霧をみて人々のほむるなり
御こともの給ふへきもなかりける　箋夕霧の子息にうち似たるものなしとなり
御むこかへり（むかへにイ）まいり給へるこそ　匂宮の御迎に參り給へるをこたちのはらたつなり
御みつからきしかたをおもひ出るより　秘中君なり中君の心なり
はなやかなる御ならひ（ゐイ）に　箋六君かたの事なり
猶心やすくこもりねなんのみこそ　宇治へ隱遁の事なり
はかなくてとしもくれぬ　秘二年此巻にてくれぬるなり弄
正月卅日かたよりれいならぬさまになやみ給ふ　弄薰廿五歲の正月なり早蕨の巻の年過て次の年に成なり　秘薰廿五歲なり早蕨の巻年過て次の年にうつるなり　中君誕生ちかつく故なり去年五月より懷妊なり箋　弄去年五月よりの懷妊なれは二月にあたれり
宮未おほしゝらぬ事にて（また御らんしならはぬ事にてイ）　箋匂の產なとの事をしり給はぬなり
又々はしめそへ　始より行るゝ修法のうへに此度くはへ給ふなり
きさいの宮よりも　箋明石中宮より中君をとふらひ給ふなり
かくて三とせに成ぬれと　秘かよひそめ給ひしより三年に成なり　弄中君に宮のかよひ給ひしより三年に成なり
ひと所の御こゝろさしこそ　箋匂宮はかりこそ懇切にし給へ公界からはもてなし申さすとなり

さるは女二宮の御裳き　此以前に薫の事をかきてさてかく云り　秘薫に給へきとて御服をはりぬれは御裳着の事をいそき給へり　弄かねて沙汰有しかと御母藤壷の服によりてのひたる事なり

御うしろ見なきしもそ中々めてたけにみえける　箋母女御のおはせぬ故にみかとの御みつからよろつをきての給はするとなり結句事のさまの御懇切成故にめてたく人のめにも見奉るとなり

つくも所　河作物所　秘物のかざりなとする所なり

箋弄

すらうともなと　秘國守に仰つけたるなり　箋受領なりかやうの臨時の課役國守に仰らるゝ事なり

秘に小書朝廷事何事も一事とある事をは國の守に仰られていとなませらるゝ定たる法なり

やかてその程參りそめ給ふへきやうに　秘薫のまいりそめ給ふへきとなり弄　私御裳着の頃より薫まいり給ふへしとなり

男かたも心つかひし給ふ頃なれと　箋薫のかたの事なり

れいの事なれは　秘薫の心はせなれはなり

この御事のみ　中君の事なり

なほし物とかいふ事に　秘除目の後執筆申行事なり其次に任官ある事なり近代久しくたえたるにや弄

箋　河直物縣召或京官除目已後執筆直物申行或除目以後兩三月を經てもあるなり　先度除目參着の事等をなほす故に直物と云なり

權大納言になり給ひて右大將かけ給つ　薫の任官兼官の事なり

右のおほいとの左にておはしけるかし（先イ）ゝ給へる所なりけり　弄竹川昇進のごとくならは右大臣は紅梅なり　不可然此右大臣誰ともなし可按之　秘紅梅成へし竹川巻の昇進にみえたり此物語源氏必右とみえたり　箋此右大臣紅梅成へし右大臣の左大將成人大將を辭す仍此時の右大將左に轉する成へし仍薫の大納言にて右大將を兼するなり

よろこひに所々　箋薫大納言大將の慶なり內裏より始て所々へ申事ありと云々

こなたにおはします　中君のわつらはしくおはする故に匂宮二條院におはす仍則薫のよろこひに參り給ふなり

そうなとさふらひてひんなきかたにと　弄みたりか

はしき折ふしとの給ふ禮なり　箋所のさまつきも
なき所の體そさなり
おりてたうのはゐ　河答拜　花拜賀なとに來る人に
は主人南階におりくたりて答拜揖讓の作法あるな
り薫新大納言の拜賀に二條院へ來り給ふ束帶成へ
ししかるに匂兵部卿宮直衣下襲にて答拜ありめつ
らしき事成へし以上花　薫は束帶なるへし匂宮な
ほし下襲の義めつらしき事にて祿有し也　秘おり
てたふのはい也花に見えたり箋
つかさの人にろく給ふあるしの所にと　河大將初任
大饗の尊者に兵部卿宮を請申たるなり親王尊者の
例可勘之　私匂宮をは垣下に請し申さるゝ歟次
の詞にえんかのみこたちとあり尊者の儀にはあら
さるへし　弄大將のつかさともに祿給ふ所へは匂
宮をよひ給ひしなり　花大饗にはあらす河海說不
可然大將には大饗有へからす宮は垣下なり公卿は
大將より上の人はいかすと云々以上箋　秘大將な
れは中少將將監以下にいたるまて招請する事なり
親王公卿垣下の衆とて請作わるなり　花西宮抄大
將初任事除目畢大臣以下着議所座大將暫留於射場

殿令奏慶拜舞了此間可奏饗事也渡南階前退出之間近衞等候
庭際忽然發物聲撤簾放歌于時牽公卿及次將以下出
從敷政門向里亭少將以上垣下公卿各着座上卿は着外座次將在內
先近衞以上六位官人於庭前歌舞訖着庭中座次公卿
及中少將等座立机相次立机食床於庭中給六位已下
肴物盃酌無算之後被物絹等各有差但新任大將若在
里亭有引可到其家歟賭弓勝方饗准是可知此日以親
王爲垣下蓋故實耳勘物云大將上﨟不來有親王大將
着中將上　今按大將初任之時その方の中少將以下
を請して大饗の事を行うて祿を給ふなり匂兵部卿
のみこを饗所へ請し申さるゝになやみ給ふ人に事
よせて覺したゆたふとなり
右大臣殿のし給けるまゝにとて　弄夕霧の大饗の例
にて薫大將のつかさの祿を六條にてし給ひしなり
箋
えんかのみこたちかんたちめたいきやうにおとらす
河垣下の大饗也　花垣下の公卿といふはたとへは
請伴するを垣下とは云なりかいもとゝいふ事なり
公卿は大將より上首の公卿はむかはさるなり親王
はむかふ其時大將のつき所かはる事あり匂宮も垣

下の座に請し申さるゝなり河海に親王尊者の例尋へきよし記さるあやまれる事なり垣下とはいふへし尊者といふへからす箋

この宮もわたり給ひて　弄はしめは辭退し給ひけれともわたり給ひしなり箋

また事はてぬにいそきかへり給ぬるを大とのゝ御かたにはいとあかす　箋中君の心もとなくて歸り給ふなり此事六條院にてあるに六君にはとまり給はて二條院にかへり給ぬるを夕霧のかたにはめさましくいふとなり

おとるへくもあらぬ御ほとなるを　秘中君も八宮の御女なれは六君にさのみおとり給へき事にもあらすとなり弄

おほしおこりておしたち　秘夕霧かたの權威成まゝに本臺とおほして中君なとをは物のかすならすおもふゆゑにかやうの事も別してめさましきなり

をとこにはむまれ給へるを　箋中君の若公（男子な）をうみ給へるなり

大將殿もよろこひにそへて　箋薫大納言大將の昇進にそへて男生給へるを悦給ふなり

よそへ（イナシ）おはしましたりし　匂宮の薫の祿をおこなふ所へおはせし事なり

此御よろこひもうちそへて立なから　誕生の悦なり

箋たちなからは産穢なれはなり

かくこもりおはしませは　箋産穢の間なり匂宮なり

みかはれいのたゝ宮の御わたくしことにて　弄匂宮なり　箋匂宮の御まうけなり

五日のよは大將殿よりとんじき五十ぐ五てのせに

河圍碁出錢也　秘碁のかけ物なり箋　かくのごときの時碁をうたせあそはするそのかけ物に錢をわたす事なり　花李部王記天暦四年七月七日是夕藤壺女御有産養事產婦饌衝重十六合破子食七荷屯食八具碁手錢二萬贈物兒衣被褓各五重納支（佐木イ）作本莒二合（青白絹裹）使大藏丞藤原守忠傳云物雖鄙陋今宮所贈蓋可有意報云思開備至恐喜兼深況承宮恩命忻悦无極即纏頭白細長一重袴一具守忠介遁出門追傳報賜祿

こもちの御前のついかさね三十ちこの御そいつかさねにて御むつきなとそこと〳〵しからす　天暦四年閏五月五日此日自中宮給産餉息所前衝重廿枚面打敷等用蟬翼有銀筒箸上洲濱等酒壺具如例有男女房

饗各用朱臺盤荒屯食十具皇子御衣十襲五具唐綾五具平絹褂五
具納深折櫃四合置中取二脚膳イ九條右丞相記　同記云當第七
夜姫君政所設饗饌息所御前衝重廿前纈面打敷有銀
筒同四枕枚イ箸上洲濱有酒壺俱一具又親王公卿料廿前
毎前繪打敷四枚碁手五十貫屯食五具冷泉院御誕生記也　四條
抄曰右衞門府奉碁手錢盛机立砌前召使疊前置高坏官人取立王卿傍　新依制
令停止之　依例或有圍碁之興此間或府督勸盃也
箋此事天曆四年冷泉御誕生の例を云り又御子うみ
給ふ人を産婦といへり則御こもちといへる是なり
宮のおまへにもせんかうのをしきたかつきともにて
ふすくまいらせ給へり　河粉熟也　校本私云今のう
んさうの樣な物なり云々河海一本あり　秘默止節
會の時も有し餛飩ともいへりうんさんと云物なり
花粉熟は五穀を五色にかたとりて粉にして餅にな
してゆてゝ甘葛をかけてこねあはせてほそき竹の
筒をして其中にかたくおし入てしはしおきてつき
出て其姿雙六の調度のことくまなふうつほ物語
内侍の上北のおとゝよりまらう人の御さかなおほみき
まいらせたまふそれにうちつゝきてふすくまゐれ
り　私ふんすくの事花鳥正説たるへし

七日の夜はきさいの宮の御うふやしなひ　明石の中
宮なり
宮の大夫をはしめ　秘中宮大夫也　箋誰ともみえす
内にもきこしめして　秘御はかし御劔なり　箋主上
なり匂宮の初たる御子なりとて御はかし奉り給ふ
なり
大いとのより　秘夕霧なり　箋匂宮へおもてむきの
義理はかりなり
御みつからも　秘中君なり　草子地也箋
我かたさまはとほくや　薫のかやうに御子なとも出
きたれは中君のいよ〳〵物とをからんと思ふなり
又匂宮の御心さしもまさるへけれはいよ〳〵へだ
たらんと思ふはくちをしけれとも始より馳走申た
き本意は達して滿足するとなり是薫の性なり
その月の廿日あまりにそ　同月二月なり廿餘日女二宮御裳き
ありて明る夜薫の參り給へるなり其夜の作法は密
儀なるよしなり
たゝ人のくしたてまつり給ふ　女二宮には猶薫もあ
かすとなり
すか〳〵しくおはします御心にて　今上の御心をい

ふなり　心清々日本紀
みかとの御むこになる人はむかしも今もおほかれと
かくさかりの御代にたゝ人のやうにむことりいそか
せ給ふるたくひすくなくや有けん　秘花鳥に見えた
り　花嵯峨皇女潔姫通忠仁公宇多皇女源朝臣傾子（欣歟）
通貞信公醍醐皇女勤子内親王配右大臣師輔公同皇
女雅子内親王康子内親王共配師輔公同皇女請子（清イ）内
親王配大納言師氏卿生一女子韶子（韶イ）内親王配大納言
源清蔭卿後配河内守橘惟風村上皇女保子内親王配
貞信公盛子内親王配右大臣顯充（光イ）公　保字内親王配入道太政大臣兼家公云々貞信公非也相國冬良公押紙にあり　今按是等の例皆以脱屣の後或は崩御
の後たゝ人のめになり給ふまして（まさしくイ）在位の天子の御
女臣下に配する事はまれなるなり嵯峨の潔姫の外
はたしかならさるなり　漢朝には其例まゝありそ
れをは尙（シヤウ）すといふ者なり　箋すくなくや有けんと
は御位の時の例には延喜御門師輔公の例と此薫と
といふなり　私師輔公の例勘（事イ）へし
右のおとゝもめつらしかりける人の御おほえ　秘夕
霧なり　箋夕霧の薫の事をの給ふなり落葉宮のか
たにての事とみえたり

こ院たに朱雀院の御末にならせ給て　弄源氏事箋（本ノマヽ）、
私是はさはかりの御代に薫をむことり給ふを（イ本前段むことり給ふたにつゝく）そしらはしけなるやうに夕霧のゝ給ふ心なり
かのはゝ宮を　秘女三宮なり　箋薫の母宮女三といふなり
我はまして人もゆるさぬ物を　花是は夕霧のおとゝ
の一條宮の事をの給ふなり一條の宮はきゝ給ひて
はつかしく思ひ給ふなり　秘落葉宮の事なり弄
大藏卿よりはしめて　弄今上女二宮の御をぢなり箋
秘二宮の母かたのをぢなり
そのほとの事ともはわたくしことのやうにて　箋大
藏卿なとのしたる様にしなしたるなり　私是は大
やけ事にはかやうのこまか成事有ましきをたゝ人
のむことりのことくこまか（あまりイ）にねんころなるといふ
をわたくし事と云る成へし
心のうちには猶忘れかたき　箋大君の事なり　秘薫
の心なり
まかてさせたてまつらんと　秘薫の私へいれ奉らん
となり　箋薫の參入のくるしき故に里亭へわたし
奉らんと思ふなり

はゝ宮はいとうれしき事に　秘女三宮なり
おはしますらん殿ゆつりきこえ給ふへく　弄女三の宮のまします方をゆつらんとなり箋
御ねんすたう　女三の念誦堂なり
にしおもてにうつろひ給ふへき　箋西おもてへ女三宮のうつり給ふへきとなり
内にもきかせ給ひて　箋薫の女三宮をうつしまいらせん用意を主上のきこしめすなり
程なくうちとけうつろひ給はん　早速に女二宮里亭へ渡御の事いかゝとの御思按なり
心のやみはおなしことならん　箋主上も子をおほす道はおなしこととなり
はゝ宮の御もとに御つかひ　秘女三宮への勅書なり弄箋
このあま宮の御事をは　箋女三宮なり故朱雀院の御遺勅にて今も別して主上の御懇切なるとなり
そうせさせ給ふなり　箋女三宮より主上へ奏聞ある事はよくきこしめし入るゝなり
かくやんことなき御心ともに　主上女三宮なとを申成へし

心のうちにはことにうれしくも　秘薫の心中なり箋女二宮の御事もさのみうれしからぬ成へし
宮のわか君のいかになり給ふは　河五十日或百日御餅事　天暦四年八月五日儲君降誕之後當百日依世俗之例供御餅朱小御臺六一臺御ヒ筯乾荷葉四種巳（巳イ）上銀器二基唐菓子八種二基餅八枚一基等四種以上成（盛イ）平盤九條記　花子誕生の後五十日をいかと云百日をもゝかといふその日儀式ありて餅をそなふるなり
われおとらしとさま〳〵事ともを　箋細工ともする人の心々なり
心のなしにやあらんいますこしおも〳〵しく　秘薫の有さまなり昇進なともあり又みかとの御聟成ゆゑなり
いまはさりともむつかしかりし　秘中君の心なり箋薫の御むこになり昇進なと有故なり心やすくて對面し給へるなり
ありしなからのけしきにまつ涙くみて　箋薫の體なり大君の事なと忘給ぬさまなり
心にもあらぬましらひ　秘薫の詞なり　女二宮へ参

りかよふ事なり
あいたちなくそ 箋ことの外の心なり
いとあさましき御事かな 秘中君の詞也
人もこそおのつからもりきく 外聞ありては然へからすとなり
忘れかたく思ひ給ふらん心ふかさよ 箋大君の事を忘れ給はぬを心ふかくあはれに中君の思ひ給ふなり
おはせましかは 秘大君の事なり 箋中君のこゝろ也
わかありさまのやうにそうらやみなく 中君の心なり大君のおはせは六君の事を思ふやうに女二宮の事をそ思はんとなりうらやみなくとは中君と大君とのものおもひ同しほと成へしといふ詞なり
うちとけはてゝやみなんと 秘中君の我身匂宮にうちとけて後悔の心やゝもすれはすゝみ侍るとなり
箋大君の薫にうちとけさりし心を奇特なりと我身にくらへて中君の思ひ給ふなり
わりなき事ひとつにつけてうらみらるゝより外は
箋薫の中君へ心をかくる事はしたかはれぬ事なれは是一つの恨をはおふへし其外の事は薫の心にたかはじとの中君の心なり
めのとしてさしいたさせ給へるさら成事なれはにくけならんやは 秘若公をめのとの出したるなり一段たくひなき事なれはなり弄 私小書わつらはしく心かけ賜事こそむつかしけれ是はにくけに惜まるへき事にもあらされはにくからずもてなして見せ奉り給ふとなり
たかやかに物かたりし 弄語をいたするにはあらす何ともなく物いふことく成なり
わか物にてみまほしく 箋薫の子にほしきとなりさてかやうの事思はるゝは世中にとまる心のいてきぬるかと薫のみつから覺すなり
世のおもひはなれかたく 秘道心おこしかたしとなり
されといふかひなく 秘いふかひなくは大君なり
箋大君の世におはしてかやうの子なとあらは嬉しかるへしとなり
おもたゝしけなる御あたりに 秘六君の御腹にとは思はさるとなり 箋女二宮なとはいつしかもはや

く御子のいてきよかしとは薫の思ひいそかれぬとなり　秘の義あやまれり
あまりすへなき君の御心なめれ　箋かやうにおほす薫の御心はすへきやうもなきかなと草子の評なり
又此次も一段薫の事を評したるなり
かくめゝしくねちけてまねひなす事　花是は物語かく人の薫の事をいふなり　弄めゝしくは女々しくなり箋秘　秘悉皆草子の詞也御心も御覧しこめたる所こそ有らめとなり　箋まねひなすとは薫の事をあしくいふやう成となり
まことしきかたの御心をきて　箋薫の様體を今上の御覧し所ありてこそ御むこにはし給ふらん實々しき方こそおはすらんとをしはかるへしとなりこれまで草子評なり
かくをさなきほとを　箋若公をはやくみせ給へるを隔心なしと覺すなり
くれぬれは夜をたにふかすましきを　秘女二宮へまいり給へれはなり
おかしの人の御にほひや　箋薫のにほひの若公にうつりたるをいふなり　私薫のわか君いたき給へりともみえす只總別こゝにとまりたる匂ひをいへるにや
をりつれはとかいふやうに　河古「をりつれは袖こそ匂へ梅の花ありとやこゝに鶯のなく
夏にならは三條宮ふたかるかたに成ぬへし　秘藤壺より方角のいみあるなり　箋季ふたかりとて四季にかはる主相と云正月寅より次第勘云々
卯月のついたち頃せちぶとか　河節分四月の節なり　花四月の節にいらぬさきに三條の宮にわたり給ふへき事なり　箋女二宮三條宮へ御わたりの事四月の初卯月の節にいらぬさきにとなり
あすとての日藤つほにうへわたらせ給て藤の花のえんせさせたまふ　秘花鳥に西宮をひけり　箋女二宮薫の里亭三條宮渡御前の日於飛香舍に藤つぼなり藤の花の宴あり河海にも延喜二年の例をのす花鳥には天暦三年の例あり兩度の例を取合てこの物語にはかけり天暦三年琴の譜を奏す延喜御筆也それを此物語にかけり　河飛香舍藤花宴事　延喜二年二月廿日御記曰此日左大臣於飛香舍藤花下有献物事左大臣執献物稱菅根献御贄可爲作御息所宣旨別當

也而後列坐藤花下盃酒數巡後左大臣殊仰右大將令
献題曰飛香舍藤花和歌則左大臣置御硯匣奉手跡匣
甕献横笛和琴其横笛箱是承和逢（遣イ）物耳酒盃同擧群臣
酩酊管絃歌舞亂召敦固親王備前介忠房令吹笛暫（甕イ）給
祿群臣有差　花　西宮記曰天暦三年四月十二（六イ）日於飛
香舍有藤花宴以殿上御倚子立南廂（有氈代）南廂東一二
三間卷簾垂母屋前立四尺屏風二帖同廂西中戸東面
東一間障子西立五尺屏風二帖敷信乃廣莚中敷氈代
立御倚子南簀子敷同莚同簀子中間以東敷疊公卿座
當庇中戸南立五尺障子其西在御酒具赤漆火爐一口
有黑漆臺同机二前其上有滿心瓶令咋金銅抄件鳥入
御酒銀御銚子一口加土器臺盤炭取當公卿南前庭敷
紫端疊四枚其南敷二枚殿上人座仰掃部寮令敷軒廊
東小庭疊二行西面北上樂所座未刻御出召右大臣次
諸卿參上次侍臣着座（四位北六位五位南）供御膳具詩維時朝臣奉
五位六位自南庭渡西昇置物御机二基立御座西橡木
作在木蘭地倚敷物臥組等御折敷四枚立御机上淺香
折敷沈裏以金開（閇イ）之朽葉色唐羅花文綾敷在心葉藤花
閑（閇イ）組等件組折敷一名四加牙象臺表紫檀裏蘇芳在銀
筋供膳（折敷二枚以橡木作無心葉組等）御肴四種生物干物窪坏以銀

作土器（以黃土塗之）供之陪膳退下給臣衝重供御酒（銀盞維時朝臣供之）
（伊尹取銚子）給臣下（義方朝臣給）二献餛飩臣下大臣奏聞召樂所
別當中納言源朝臣令召樂人別當仰藏人召之樂所參
人奏調子有歌事（立文臺南庭）立置物御机置御硯紙給臣下
献題（維時）大臣奏准延長例地下人一兩献歌召庭燎（月光）
（明也）献歌伊尹取文臺右兵衛佐清正講之左少將朝成藏
人頭雅信朝臣秉燭地下献歌者源緒（循イ）藤原兼家茨（灌イ）木有
時々方等云々講歌大臣取御製召公卿侍臣堪（續イ）歌者奏
絲竹大臣納言渡西大臣取御杖源朝臣取御琴譜進御
前奏云延喜御時御琴譜云源朝臣等稱物名授以（頭イ）藏人
置机琴出袋彈御兼家被聽昇殿（大臣共拜）賜祿（納言女裝束源氏小袿四位白
細長）大臣給御衣一襲又以女裝束給之
南のひさしのみすあけていしたてたり　花　天暦三年
記にみえたり
あるしの宮のつかうまつり給ふにはあらす　弄　女二
宮の沙汰にはあらす内よりのなり　秘　あるしの宮
は女二を申なり此宴は主上よりの御沙汰なり
左のおとゝあせちの大納言　花　天暦三年右大臣師輔
公爲公卿上首　弄　夕きり右とある本あり　秘　古本
右とあり花鳥天暦三年右大臣爲上首云々されとも

是は左成へし夕霧の事なり左とあり　箋夕霧なり
左とあり　弄按察は紅梅に似たり但別人云々祇云
可然愚按　私云按察は紅梅歟壁の能事末の詞に有
此事あまた所にあり又夕霧左大臣に轉する時紅梅
右大臣とみゆ夕霧を多分右大臣とこゝにかけり紅
梅按察たるの義大略分歟
故（藤イ）中納言左兵衛督　弄鬚黒の息　秘鬚黒大臣の息左
兵衛督も同兄弟歟箋　私左兵衛督とあり鬚黒の息
は右兵衛督歟但可隨秘箋之義歟
三宮　秘匂宮なり弄箋
ひたちの宮　弄同御弟なり　私更衣はらなり
南の庭の藤の花のもとに殿上人のさはしたり　花天
暦三年南庭藤花下賜近臣座云々箋
こうらうてんのひんかしにかくその人々めして　花
天暦三年軒廊東設御座箋　私此詞こうらうてんと
云る不審藤つほにての宴なれは後涼殿は其所相違
すへし古本こんらう（軒廊）のひんかしといへるをこうら
うてんとあやまれる成へし可尋
宮の御かたより御ことゝも笛なといたさせ給へは
弄女二宮なり秘

おとゝおはし（なはしめイ）　夕霧以下なり
御まへにさりつゝ　箋うつは物をおきわたすなり
故六條院の御てつからかき給ひて入道の宮に奉らせ
給ひしきんのふ二くはん五えふのえたにつけたるを
秘入道宮は女三宮なりきんのふ琴の譜なり　弄薫
（へ歟）の参らせ給ふを夕霧のとりつき給ふなり此例花鳥
にあり延喜御門勅子内親王に給り給ひし箏譜を九
條の右丞相につたはりて有しを丞相の息女安子中
宮（號藤壺）よりつたへて村上の天皇へ奉給ひし事を
云り　河琴德譜五卷雜琴譜百廿卷見在書目錄　箋
かやうの物をは木の枝につくるなり大部の物をは
三卷枝につけて殘りをは別に奏するなり云々　花
天暦三年右大臣捧先皇賜勅子内親王箏譜三卷左衛
門督執赤笛一管（元貞保親王笛也）左衛門督將螺箏一面（元貞保親王物有奇）
音奏名而獻之　今案天暦三年藤壺女御安子は九條
右丞相の御女也延喜御門の御女勅子内親王に給は
せ給へる箏譜をたてまつる事をいまの物かたりに
六條院の女三宮にたてまつり給ひし琴の譜にかき
なせるなり河海等の諸抄にもみえさる事なり
朱雀院の御物とも也けり　是は薫よりの主上への進

物共歟朱雀院より女三宮へつたはりて薫へわたれる物ともなるへし

笛はかの夢につたへし　花柏木の衛門督の笛なり　秘柏木の笛なり箋

めてさせ給ひけれは　今上のかねてほめさせ給へる歟

大將の御ふえはけふそよになきねのかきり　箋夢のつたへの笛を手をつくして吹しなるへし

さうがにつきなからぬ　箋郢曲にたへたる殿上人なり

宮の御かたよりふんすくまいらせ給へり　花天暦三年沉香折敷四枚紫檀臺以土器様銀器供御肴粉餈有赤漆火爐銀銚子寛治五年萬壽元年天盃用瑠璃御盞

ふちのむらこのうちしき　河藤村濃打敷也

しろかねのやうき　河銀様器　或藥器　親行説

るりの御さかつき　花萬壽寛治の例あり

へいしはこんゐ　秘名義抄云金翅鳥卵殼鬼神得之出寳與人或名紺瑠璃釋名曰紺含也青而含赤色也

兵衛督御まかなひ　兵衛督は髯黒の息云々　箋天暦例如此　弄夕霧の天盃を毎度はかり給はり給ふ事を辭したるなり　宮達は御子なれはにや薫にゆつり給ふなり

おとゝしきりてはひんなかるへし　花夕霧のおとゝ公卿の上首にて毎度盃をはしめ給ふによりて此度は位をみたりて天盃を大將に給ふなり　秘天盃を毎度上首給はれり然るを親王達の中にはめつらしけなしとて大將にゆつり給へり

はゝかり申給へと　夕霧の盃をゆつり給ふを薫の斟酌あるとなり

御けしきいかゝ有けん　天氣も薫へこそやありつらんとなり

をゝとの給へることはつかひ　賜天盃例　天暦七年十月廿八日菊合式部卿親王重明賜天盃寛弘四年四月廿七日密宴中務卿具平親王賜天盃以上親王例　永延二年三月廿五日攝政六十賀攝政殿御堂給天盃永祚元年二月十六日朝覲行幸御堂殿給天杯　寛弘三年三月四日行幸御堂殿給天盃　同五年十二月廿日後一條院御百日御堂殿御盃以上給執政臣例也　今按此後萬壽元年宇治殿嘉保三年京極殿賜上皇御盃寛喜三年光明峰寺攝政永徳元年室町第行幸鹿苑院大相國等給之

也 爲後學以次書之　をゝといふ事河海の說皆今按なり一向にしらぬ事なり知れらんをはしれりとせよ知らさらんをはしらすとせよこれ知なりと孔子の格言もあれはしはらくさしおく是故實成へり但永延二年三月廿五日小右記云攝政六十の賀なり　左大臣起座献御盃右大臣取御銚子主上給御盃於攝政此間被仰壽言 或者云萬歲千秋　攝政又有答奏云々可尋記攝政下庭中拜舞云々　かやうの例もあれはをゝといふは祝言につきたる事にてもやあるらんしらすかし　河 進食シリシス 日本紀第七　案之若稱唯事歟　秘 不分明事なり　弄 註せす　箋 不知事なり　河海說惡なり不知之云々

けふはみなしさへ　みかとの御むこにてもてはやし給ふ日なれは別してとなり

さしかへし給はりて　花 天盃を給ふ時は土器をめして御盃の酒をうつし入てのむ物なりそのかはらけをさしかへしとは云飲をはりて後かたはらの階よりくたりて御前にむかひて舞蹈して座にかへりつく是定れる作法なり　秘 盃の凝濁をうつして天盃をは懷中するなり別盃をさしかへしと云なり　弄 天盃を給るはかはらけをとりよせてうつしかへて給ると云々問云天盃をは直にのますうつして飲と云事ありや一勘ことかはらけに後濁をうつして飲それはさしかへといふなり　問云天盃を給ふ時定れる禮にや　一勘晴の時定禮なり

これはまして御むこにて　河 漢書曰女子公主註曰如淳曰公羊傳曰天子嫁女於諸侯必使諸侯同姓者主之故謂之公主百官表列侯所食曰國皇后。公イ 主帝姉妹曰長公主正三位源朝臣潔姫者嵯峨天皇之女也天皇選聟未得其人太政大臣正一位藤原朝臣良房初參之時天皇悅其時探超倫殊初嫁之

くたりたるさにかへりつき給へる　河 下座　秘 位次なれはなり

あせちの大納言はわれこそかゝるめもめ　弄 誰ともなしと云々　紅梅のには有へからす　私 此前に弄 紅梅成へしとあり此義可然歟　秘 誰ともなしと云々紅梅の大臣成へし右大臣とかけるはまきらはしさにかくかけるにや　私 紅梅の義可然なり女二宮なとをたゝ人は思ひかけ奉るへからす紅梅は故致仕相國の家督たる人なれは隨分の事なり又聲の

よき沙汰あり　箋紅梅なるへし
この宮の御母女御をそ　弄父大臣の家におはせし時成へし箋　藤壺の女御女二宮の母に按察大納言の心をかけし事有し成へし弄
はては宮をえたてまつらん　箋後には此女二宮に望をかけしとなり　私紅梅大臣の年齢なとも母女御に心をかけし事は相違せる歟
人からはけにちきりことなれと　箋宿世たかき人とはみえたるなり薫の事を按察のそしらはしくいふ詞なり
時のみかと　主上御在位の事をいふ
おはしますお殿ちかき　私薫の女二宮へ通ひ給ふ事を云主上の御殿近き事を云殿はおとゝとよむへきなり
はてはえむやなにや　箋藤のえんの事なり
さすかゆかしけれは　箋按察の心中をいへり
しそくさして歌ともたてまつる　天暦三年四月十二日記云地下一両献歌召庭燎月光明也　献歌とあり　箋天暦に作文あり皆詩歌なりとあり
ふんたいのもとに　秘草子地なり

あやしけにふるめきたりけん　詩なとめつらしからぬ事共成へしといへるなり
かみのまちも上らふとて　河第一といふ心なり二のまちとあるに思ひ合すへし　弄上の町といふ上らふの品成へし　秘上らふの品成へし　箋上品のしな成へき人なり族姓にもよらぬ事なれはとなり
大將君の御かさしをゝりて　秘うへの御かさしをゐるとてなり藤花を御かさしに薫のをりてたてまつれる事有し成へし歌の詞かきのやうにかけり草子地成へし
薫すへらきのかさしにをると藤花およはぬ枝に袖かけてけり　秘およはぬ枝は二宮をいへり　弄この歌薫のなりおよはぬ枝は女二宮の事によれり藤つほの女御にもたよりあり　箋主上の御爲なれはおよはぬ枝に袖をかけてたをれるかさしなりとなり下の心は女二宮の御事なり
うけはりたるそにくきや　秘我物にしたるとなり　箋草子地也理運に我物にいひたるを評するなり
今上御製　よろつ世をかけてにほはんはななれはけふをもあかぬ色とこそみれ　河飛香舎　藤宴　延喜御製　新古

「かくてこそみまくほしけれ萬代をかけて匂へる藤浪のはな　弄主上の御詠なり　秘御製なり行末萬々歳成へけれともまつけふもあかさるとなり　箋藤は花もあたらぬ物そとなり

夕霧歌成へし
君か爲をれるかさしは紫の雲におとらぬはなのけしきか　河「むらさきの雲とそ見ゆる藤の花いか成やとのしるし成らん　花拾遺集延喜の御時藤つほの藤の花えんせさせ給けるに殿上のをのこともわかつかうまつりけるか藏人藤原國擧「藤の花都のうちは紫の雲かとのみそあやまたれける　秘引歌藤花都のうちは云々夕霧の歌なるへし　夕霧なり　弄誰ともなし作者左大臣にや　箋夕霧の歌歟けしきかはけしき哉なり

按察大納言
よのつねの色ともみえす雲井まて立のほりける藤浪の花　弄これやこのはらたつ云々按察大納言の歌といへり歌の心雲井まて立のほるとよめる薫の事を思へるににたり　箋前の詞にこゝのへのうちにおはします殿にちかきなとゝ按察の薫をそしり申せし事あり其心歟藤浪の花とは惡なり

ひかことにもや　箋もし歌をひか事なと聞たるにや

此分はめつらしくおかしきふしもなしとなり草子地なり

あせちもむかしすくれ給へりし御聲の　秘紅梅成へし　私紅梅大臣と此人同事とみえたり　弄聲の事紅梅に似たり云々但別人可然　私以上弄　箋紅梅はわらはより聲のよき事あまた所に有此按察紅梅なるへし

右の大殿の御七郎わらはにて　箋夕霧の息也　系圖には童はありて註（後イ）にやとり木に今上の女二宮藤の宴し給ひし時笙の笛ふきたりし人七郎君とありと云々　私系圖には男子の八人めに是をのせたり母たれともなし

御そ　箋御衣を給ふなり

あかつきちかうなりてそかへらせ給ひける　秘還御なり

上だちめみこたちにはうへより　親王公卿には勅祿あるなり

殿上人がくその人々には宮の御かたより　殿上人樂所の衆には女二宮よりろくを給はるそれもみなしな〳〵あるとなり　秘女御の御かた（宮イ）は女二宮なり

宮まかてさせたてまつり給ひける　箋そのよさりは前の日藤宴ありて曉還御なりその夜明ての夜女二宮三條宮へ渡御なり藤のえんのあくる夜のことなり

うへの女房さなから　禁中祗候の女房大概御をくりに參るとなり

ひさしの御車にて　箋庇御車に女二宮の乘給なり弄ひさしなき糸げ　河庇御車　糸毛　金造　檳榔毛網代

こかねつくりむつ　秘車のかさりのかな物をいへり弄あしろに金のかなものうちたるなり　九禪同箋同

御むかへのいたし車　弄薫よりの御迎なり　箋出車　しゆつしやと云也

本所の人々のせて　秘薫よりの御むかへなり

心やすくうちとけてみたてまつり給ふに　女二宮を薫の里亭にて心やすく見給ふさまなり

さゝやかにあてに　女二宮の御さまをいへりちひさきかたへよりてけたかき人と聞ゆ

過にしかたの忘られはこそ　箋大君の事なり　此女二宮にても思ひまきれぬなり

此世にてはなくさみかねつへき　秘薫のあまりなる心なり

佛になりてこそ　箋ほとけになりて三明六通をえて我身の前生も大君との宿縁をもあきらめたきとなり

てらのいそきにのみ　箋宇治の寺なり

つくらせ給ふみたう　所は阿闍梨の寺のかたはらさ前にあり

れいのくち木のもとに　河寺尼か事なりみ山かくれのくち木なれはの歌の心也　弄先つくり給ふ寺を見給て又宇治の宮へ渡り給ふなり　秘前に辨か歌にあり　私「あれはつるくち木の本をやとり木と思ひおきける程のかなしき　箋是は八宮の舊跡なり

そなたさまにおはするに　八宮の御所のかたへなり

女くるまのこと〳〵しきさまにはあらぬ　箋浮舟のをりふし來あひたるなり

あらましきあつま男　常陸介かつかふ下人とも成へし

殿はまつ入給ひて　薫は辨尼のかたへ立入給ふとい
ふ歟
この宮をさして　此車も八宮の御かたへ來るなり
かや〳〵といふをせいし給ひて　河かしましきなり
弄かや〳〵　薫の制し給へるなり
こゑのうちゆかみたる物　箋ゐ中こゑになまりたる
體なり
ひたちのせんじどのゝ　箋常陸の前司（ゼン）　前常陸介な
り任はてゝ後なり
おいやきゝし人なりと覺しいてゝ　花おいとはおう
といふ心さる事ありといふ心なり　秘領納したる
なり手習の君成へし　箋薫のうき舟そと思ひ合す
るなり
北れもてになんと　秘こなたは人もなしとなり　箋
薫はこゝかたにおはすると人にいはせ給ふなりの
そきて御覽すへきためなり又薫とはあつま人には
しらせ給はぬなり
御ともの人こそ　箋薫の供の人也弄
馬とをひきさけなとしつゝ　馬を引避るなり所をさ
る心なり

このしん殿はまたあらはにて　弄あたらしく作事な
り　秘新造なれはなり　箋此新造いつ作れることも
みえす
御そのなれは　私御衣の鳴（ナレ）はなり衣の音のするなり
きぬの音なひのするなり　私下かさねはぬき給へ
る成へし
なほしさしぬきのかきり　なほしかさねもさしぬき
のかさねをもぬき給へるなり
とみにもおりて　おはする人をたれそと思ひて浮舟
の卒爾になりぬなり
たれそなとあないする　箋おはする人はたれそと辨
尼のかたへとふ成へしとなり
ゆめその人にまろありと　箋此車を浮舟そと薫の推
してかくのそきてみんためにこの人に薫のおはす
るとはしらせそとかねて辨の尼にのたまひたるな
り
まらうとはもし給へとこゝかたに　客人はあれと
もこゝかたにそとなり薫ともしらせぬなり
わかき人のあるまつおりて　浮舟にのりそひたる人
成へし

御せんのさまよりはこのおもとなれてめやすし　箋御前とは浮舟のつれたる物ともを前駈に比しての給ふなりそのともの人々に對しては此車よりさきへおりたる女房は樣體めやすしとなり　秘ともにある人は京なれたるさまなり

又おとなひたる人いまひとりおりて　是ものりそひたる人なり

はやうといふに　おとなひたる人のいふなり

あやしくあらはなる　箋是は浮舟の車のうちにていふなり

れいの御こと　これもおとなひたる人のいふなり

いつこのあらはなるへきそと心をやりて　あらはにて人のみるをもしらす人は見しとはかり思ひなしてかくいふ心をやりてといふなり

つゝましけにおるゝを　浮舟は猶人のみるくきと用意のあるなり

ほそやかにあてなるほとはいとよく物思ひ出られぬへし　秘大君に似たり

むねうちつふれつゝ　薫の心なり

車はたかくおるゝ所はくたりたるを　花是によりて女の車におりのる時はうち板といふ物をして車の前板とえんとにわたす物なり　秘女車は車の前いたより打板といふ物を敷ておるゝ事なりこゝには此用意なかるへし弄

いとくるしけにやゝみて　河良見（ヤヽミ）　よく／＼みるなり云々　箋逗留のあるなり浮舟の車よりおりわつらふさまなり

こきうちきになてしことおほしきほそなか　箋浮舟の衣裳なりこきは紅なり

わかなへいろのこうちき　河若苗色なり　花うすあをのすこしすきたるいろなりなつのきぬのいろなり

たてたるがかみよりみゆる　箋四尺の屏風なれは其上より薫の見給ふなり

あまたさまにむきてそ　浮舟の體なり

さもくるしけにおほしたりつる　秘ひとのいひしなり

いつみ川の舟わたりも　河泉川　木津川をいふなり日本紀に挑川（イトミ）とかけりつとさと五音通するなり崇神天皇兵を發して此川を中にして挑戦有し故なり

古今「都いてゝけふみかの原いつみ河川風さむし衣かせやま　造舟フナワタシ文選第二　弄八々のいひしことはなりこつ川のわたりなり　箋路次の體なり

水のすくなかりし　木津河は水のなき時はかちわたりなり

あづまぢをおもへはいつこかおそろしからん　秘東國の道を思へは南都の道なとは心やすきとなり箋

ふたりしてくるしと思ひたらす　車よりさきへおりつる二人のこたちなり

しうはおともせて　箋主なり　浮舟なり

かひなをさしいてたるかまろらかに　秘ひたちの前司かむすめなとゝいふへくもなしとなり

おかしけなるほともひたち殿なといふへくも　箋うきふねのさま受領のおんななといふへくもなしとなり

やう／＼こしいたきまて　薫のたちすくみたる體なり

わかき人あなかうはしや　箋始に車よりおりたる人なり薫の匂ひをきゝとかめたるなり

老人まことにあなめてたのもののかや　二番めにくるまよりおりたるおとなひたるとありし人なるへし

天下にいみしきこと覺したりしかとあつまにてかゝるたき物のかは　箋天下テンカと讀へしとなり云々私ゐめかしたにても然へき歟常陸國にて前司の隨分とあはせし薫物もかやうにはあらさりしといふなり

すまゐかくかすかにおはすれと　辨尼の幽なる栖なから衣裳なとのうつくしきと此女とものほむるなり薫のうしろみ給ふ故なり

物けたまはる　秘物うけたまはるなり箋

これなとおこせて　くた物なとをまいれと浮舟を起すなり

しそき給へと又ゆかしく　河退也　おかしくなれはかほるの立のき給へと又ゆかしく成てのそくとなり

これよりまさるきはの　薫のすくれたる人をみあつめたる心にもさしも心のとまるもなきに是はいとおやしくむつかしきとなり

おほろけならては　箋少しの事にては薫の心とまる事なしとなり

あま君は此殿の御かたにも　薫の御かたへも御せうそこ申たれとさふらふ人々のそき給をしりて只今御休息あると申たるなり

この君をたつねまほしけに　浮舟を薫のたつねたくの給ひし事なり

日くらし給ふにやと　辨尼か推量なり

御さうのあつかり　河御庄預　薫の知行し給ふ所のあつかりなり

うちけさうしてまらうとのかたにきたり　辨尼の浮舟君に對面するなり

ほめつるさうそく　花辨の尼君のきたるきぬなりいなか人のほめたる事上に見えたり　秘前に此あつま人のほめたる事なり

いとかはらかにて　秘さはやかになり弄

昨日おはしなんと　尼君の詞なり泊瀬より昨日こゝに來り給ふへき事となり

この老人いとおやしく　箋此老人とは浮舟君につきたりしおとなひたると有し人なり

けさもむこに御心ちためらひて　河無期（ムゴ）　盡期もなき心なりかきりもなきといふ心なり

いまそおきゐつる　箋浮舟の君のさまなり

そはみたるかたはらめこれよりいとよくみゆ　秘辨をはつるとて薫のゝそき給ふかたへむきたるなり弄箋　秘大君なり箋

これをみるにつけて　箋浮舟ゆゑに大君の猶々思ひ出らるゝとなり薫の心なり

尼きみのいらへうちする　浮舟の聲けはひなり

宮の御かたにもいとよくにたりときこゆ　秘中君にも似たり　弄中君にもこのうきふね君の似たるなり　私きこゆとは薫のきゝたまへる體の似たるとなり

これよりくちをしからんきはの　是よりもくたりたる品の人なりともゆかりあらはたつぬへし是は兄弟なれはましてとなり

しられたてまつらさりけれと　故八宮の御子のうちにはかそへ給はさりし事なり

まことに宮の御子にこそ　浮舟のさま八宮の御實子とは人からにてみえたるなり

世中におはしける物をと　弄薫の心也　秘大君によく似たれは世におはしけるかともいひよりたきとなり弄箋

ほうらいまてたつねてかんさしのかきりをつたへて　河取金釵鈿合各折其半授使者曰爲我謝太上皇謹献是物尋舊好也長恨歌傳　秘此かきりの字心あるへし此金釵をえて隨分のかきりもなき事と玄宗の思ひ給ひしをかきりと云成へし　箋かたみはかりを見し玄宗の御心は猶覺束なかるへし是は別人なれと兄弟にてよく似たれはなくさめ所有となり薫の心なり

人のとかめつるかほりを　箋尼君は薫の匂をきゝしりてのそき給ふとしりてうちとけ事なともいはすして入ぬる用意あるさまなり人のとかめつるとはあつま人ともよきたき物の香なるなといひしことをなり

御そなとき給ひて　箋薫の前にぬき給ひしかさねのきぬなとき給ふなり

ありさまなと　うき舟のさまを尼に薫のとひ給ふなり

まうてきあひたるを　まうて來り逢たるなり

かのきこえし事は　箋薫の内々浮舟の事を辨に仰せし事なり

しかおほせことと侍しのちは　秘辨か詞

こそは過てこのきさらき　去年はつゐてなくて過しとなり

かたしけなき御よそへ　箋大君のゆかりなとゝ尋ね給ふは過分なる事と浮舟の母の申なり

そのころはひはのとやかにおはしまさすと　秘女二宮に薫のまいり給ひし時分なり弄箋

過にし御けはひを　大君の御あとなれはとなり又は宮にても有へしとなり

かのはゝ君はさはる事ありて　浮舟の母常陸介か妻なり

かくおはしますともなにかは　箋薫のおはします事なともしらせぬさなり

ゐなかひたる人ともに忍ひやつれたるありきもみえしとてくちかためつれと　秘薫の口かため給ひしなり　此事前にあり

ひとりものすらんこそ中々心やすく　箋かやうの次

にと辨にの給ふなり浮舟はかりなれは却て心安しとなり

うちつけにいつのほとなる御ちきりにかと　秘　辨か詞也

薫かほとりの聲もきゝしにかよふやと　しけみをわけてけふそたつぬる　河古「夕されは野へに鳴なるかほ鳥のかほに見えつゝ忘られなくに人丸　同「貌鳥のまなくしは鳴春の野の草のねしける戀もするかな　同「春の野に鳴貌鳥の聲たてゝいたくはなかし人しりぬへみ　毛詩云　流離梟少而貌好老而甚醜　此故に梟鳥の一名を貌鳥といふなり　或說云杜若をかほよ花と云彼花さく頃此鳥なく故なり　又八雲抄云かほ鳥は春日山によめりかた戀する物といへりよるひるたえす戀すといへりまなくしはなく春の野のといへり源氏物語にもあり是其鳥と定る歟但定家卿は不知之といふ推之只うつくしき鳥なり但未决　秘　薫の歌なり心は故大君を忘れさるによりて似たるを尋わりくとなり　今按聲も聞しにと聲もといふに心あるへきか只今のそきてみ給ふにかたちは大君によく似たり然はさしよりて物をもいひふれて聲をもとくきゝたきといふこゝろ歟引歌のかほにみえつゝわすられなくにと云々よくかなへり　箋　貌鳥の說々ある事なり只うつくしき鳥をいへり引歌に夕されは野へに鳴なるかほ鳥の云々　是は大君にかよふやとはる／＼尋ねきたるとなり

たゝくちすさみのやうにのたまふをいりてかたりけり　へんのあまのうきふねの君にかたるとなり弄花

奥

うつふし給へるかみのかゝりかんさしなと　中君の事也私云清少納言枕草子歟

ひのおましのかたにおものまいるあしをたりしけはひなとをしくといふ聲きこゆ

東方朔傳　薫君之寵由是衰至年三十而終後數歲竇大主卒與薫君會葬於覇陵是後公主貴人多踰禮制自薫始　武帝始舘陶公主號竇太主（如淳曰竇太公之女也故云竇太主）堂邑（當色イ）候陳午尙之宇（平イ）孔主寡居年五十餘近幸董偃如（姑イ）偃與母賣殊爲事偃年十三隨母出入主家左右言其姣好主召

見曰吾爲母養之因留第中敎書計相馬御射頗傳記年八十而冠之　箋曰藤むらご藤をそめつけたるなり紫色なり

岷江入楚第五十一　東屋

廿五歳　權大納言右大將　私花鳥には廿二歳の秋なり云々

中將君冊宮姫君事　私宮姫君は手習君なり中將君は手習君の母常陸介妻なり

中將君欲嫁宮姫君於左近少將事

左近少將稱非常陸介之女嫌之事

中人以此事告常陸介常陸領狀之事　詞云左大臣殿あせちの大納言式部卿の宮なとのいとねんころにほのめかし給けれと云々この左大臣殿は夕霧左大臣なり按察大納言は紅梅の右大臣なり常陸守の妻ゐ中人にて右大臣になり給ふ事をしらてきゝならひしまゝに按察大納言といへるなり左近少將嫁娶之事　常陸女十五六云々

中將君奉文於二條院中君事 宮イ　故宮姫君預ヶ申間事

姫君移居二條院西庇之北給事

中將君於二條院伺見宮御有樣事

常陸介壻左近少將參二條院事

兵部卿宮參中宮給事

中將君與二條院君御物語事

大將殿參二條院給中將君伺見事

大將與中君物語之事

謂彼形代在此殿之由事　大將欲得形代事

大將異香引藥玉品事

中君傳大將心趣於中將君給事

常陸守妻迎車並二條院廊方兵部卿宮見咎給事

中君浴湯給事

兵部卿宮見付姫君押對面事　右近君少將君思憂事

中宮御胸痛之由人告申事

兵部卿宮參中宮給事

中君與姫君物語給事

乳母行常陸殿語宮御振舞事

常陸殿參二條院伴姫君歸京家事　三條邊云々

常陸殿亦歸京家事

常陸殿詠萩歌送壻少將事　有返歌

宮姫君在三條家詠給事　母上送文事

秋末大將殿於宇治見新造御堂給事

逢辨尼問宮姫君御事給事

大將折草花歸京奉見女二宮事

大將遣車於宇治迎辨尼事

辨尼行三條家事

九月十三日大將到三條家逢辨尼事

引入車事　逢姫君事

大將殿伴姫君行宇治事　尼君侍從君同車事

大將殿遣御文於女二宮告爲佛飾二三日逗留事

東屋

花以歌并詞爲巻名秘同

河「さしとむるむくらやしけき東屋のあまり程ふる雨そゝきかな　薫の歌也　東屋アツマヤ　四阿アツマヤ　雨（兩イ）下マヤトヨメリ　秘四阿　阿韵會阿於何切考工記阿重屋或本屋若今四柱重屋複（さく）笮　私按あつまやは重屋とありあつまりたる屋の心歟以上秘箋同　私雨方の庇を角木（くすきへ或イ）掛棟木の下より葺下したるをあつまやと云常の屋の如く破風の處なき物なり又は吾妻屋（アツマヤ）　花薫廿二歳の秋なり　秘薫廿五歳の八月より九月までの事あり　弄箋　箋催馬樂にも東屋といふ名あり

つくは山をわきみまほしき御心はありなから　筑波根　此時は波の字濁て云　河「つくは山は山しけ山しけゝれとおもひいるにはさはらさりけり　花筑波山は常陸國にありあつまやの君は常陸の前司のまゝむすめなりこれは薫大將の心さしを云上の卷の末にかけて見るへし　秘常陸國の名所なれはなり　弄浮舟の君は常陸守のまゝ子なれはつくは山をと云り思ひ入にはさはらさりけりと詠る歌の心あれは深く尋給ふへけれとも受領のむすめなとを尋ねかゝつらひ給はん事を人きゝいかゝとはゝかり給へるなるへし薫の上臈しき體を知るへし　箋浮舟の繼父は常陸介なるをいへりそれ故に薫のははかり給なり

は山のしけりまてをあなかちに思ひいらんもいとゝ入きゝかろ〳〵しう　秘薫の上臈しきさまなりこの浮舟君は八宮の御むすめにてはあれと只今人きゝはなま受領のむすめとのみ聞えあれは交なとつかはし給はんもかならすかろ〳〵しき名をたちぬへきと思惟し給ふなり箋

かのあま君のもとよりそはゝ北のかたに　箋辨の尼よりも浮舟君の母の方へ薫のの給ひしさまをいひつたふるとなり

まめやかに御心とまるへき事とも思はねは　秘母の心なり

かすならましかはなとそ　箋是も浮舟の母の心なり

かみの子ともはゝしなくなりにけるなと　河守子共或本これは常陸介の子供なり　河太守者爲親王置之親王任時不知吏務仍以介爲守乃介掛吏務云々此故今の介を守といふ歟又當國守凡人任時止二太守（守イ）一

任する例もあるなり　花常陸前司の子藏人民部丞
源少納言妻讃岐守妻　主上前腹なり藏人右近將監童少將妻
以上中將君腹なり　祕中將君は則浮舟君の母の八宮に仕し時
の名なり　祕常陸寺は必親王なりされとも守のな
き時は介が吏務以下をつかさとるによりて介をか
みとかけるなり　河裏書云常陸上野等諸親王外不
任諸王とは宮達の御事なり
はゝなくなりにける　祕前腹なり箋
このはらにもひめ君とつけし　祕浮舟の母なり箋
私此姫君といふ人此巻に少將の妻になる也
すき〳〵に六人ありけれは　河次々歟すとつと同音
なり或過と也
こと人と思ひへたてたる心の　祕浮舟をは他人のこ
とくへたてたるなり
いとつらき物にかみをもうらみつゝ　浮舟の母の守
をうらむるなり
ひきすくれておもたゝしきほとに　浮舟をかやうに
おもふ母の心なり
さまかたちのなのめに　祕浮舟のみるめの然へき故
に母の心をつくすとなり

とりませてもありぬへくは　箋常陸介の子ともにま
きるへくもあらぬをいふなり
おなしことおもはせても　河同事なり
はしめのはらの二三人　前腹の子ともなり
さま〳〵にくはりて　賦なり
いまはわか姫君を　祕母の我腹の子共なり　箋わが
姫君歟しからは母のわたくし物に思へる浮舟の事
歟又わかひめ君歟然らは守の女の姫君とつけたる
なるへしとあり私若姫君ならはかしつく事限なし
といへるは守の心なるへし我姫君ならは浮舟を母
の思ふなるへし箋し思ふやうにて見たてまつらは
やといへるさま母の心に浮舟きみを思へる心にか
なへり前の詞にいかでひきすくれておもたゝしき
ほとにもといへるにあひかなへり
かみもいやしき人にはあらさりけり　箋常陸介の俗
姓公卿の子孫となり
なからひも物きたなき人ならす　弄常陸事也なから
ひもとは母かたの事歟
とくいかめしうなとあれは　箋宮のある人をいふな
り

事このみしたるほどよりは　箋過分なるふるまひをするをいふなり　河好事者募以錢帛孝經

わかうよりさるあつまのかたの　もとは陸奥守にてありしと見ゆ

物うちいふすこしたみたるやうにて　花拾「あつまにてやしなはれたる人の子は舌しみてこそ物はいひけれ

かうけのあたりおそろしく　祕豪家などをはおちははかれるなりすきまなきとはほめたるなり全き人となり　河豪家　箋位たかく威勢あるあたりにおそるゝなり田舎人のさまを云なり

いとまたくすきまなき心もあり　花全なり　弄常陸事ほめたるなり　箋退屈なくくつろきもなきさまなり

弓をなんいとよくひきける　箋東國の住人は武を本とす東夷を畏るゝゆゑなり

なほ〳〵しきあたりともいはすいきほひにひかされて　箋品くたれるあたりともいはす富あるゆゑに入のつとふなり

こしをれたる歌あはせ物かたりかうしんをし　河腰折歌合物語合庚申　祕物語合歌合なり　庚申をしは守庚申なり弄　箋庚申守る事はいやしき心歟但拾遺集なとの詞書にあり　花庚申經云人腹中有三尸爲人大害常庚申夜上告天帝記人品過絶人生籍庚申之夜不寢則不得上天　許渾詩　年長毎勞推甲子夜寒初共守庚申

このけさうのきんたち　常陸介のあたりへいひよる君たちなり

かたちなんいみしかんなる　祕浮舟のきこえなり此女共かたちよきといひなすことなり

左近少將とてとし廿二三はかりの　弄大將なりし人の子なり　大將先祖不見箋

しめやかにさえありて　少將才なとはある人となり

きら〳〵しういまめいてなとはえあらぬるにや　箋時にあひはなやかなるおほえはなきとなり

かよひし所なともたえて　箋この少將のもとよりかよひしところへたえてこの常陸介のあたりいひよるなり

このはゝ君あまたかゝることといふ人々の中に　箋浮舟の母君の心なり

この君は人からもめやすなり　箋左近少將の事なり
ことゝしききはの人はたかゝるあたりをさいへと
たつねよりし　祕家中ともしき事こそなけれおほえ（ゐゝイ）
はさせる事もなきとなり
この御かたにとりつきて　箋此人を浮舟へと母のお
もひよるなり
心ひとつにおもひまうけて　祕母の心なり
かみこそおろかに思ひなすとも　常陸は浮舟を疎略
に思ふとも母は身にもかへんとなり
さまかたちのめてたきを見つきなは　浮舟をみそめ
たらは少將の心とまらんとおもふなり
まきゐらてんのこまやかなる心はへまさりて　河蒔
繪　螺鈿也
この御かたにとりかくして　箋浮舟をいへり
おとりのをこれなんよきとて　箋おなしむすめなれ
とも母の差別したるとなり
かみはよくも見しらす　守はゐなか人にてよくもし
らぬなり
めをはつかにさしいつはかり　河うつもれたる心な
り

ことひはのしないけうばうのわたりより　花內教坊
は大とのゐのかたはらにある所なり樂人舞姬なと
の有所なり　祕今の大とのゐといふ所なり弄箋
弄今の世に大なき小なきなといふは內教をかくい
ひなしたるなり　河內教坊別當大中納言中堪其道
之人補之
てひとつひきとれは師をたちゐおかみて　箋常陸介
かゐ中ひたるさまなり
はやりかなるこくの物　河萬秋樂に內教坊說といふ
事然ははやりかなる曲の物とは五六帖の事歟　孝
行說　十三學得琵琶成　名屬教坊第一部　琵琶引
內教坊琵琶の女學師　和漢の古事有其心歟　祕こ
くの物は曲の物なり
しとおかしき夕くれなとにひきあはせてあそふ時は
祕師となり　箋師匠と同絃のよしなり
さすかに物めてしたり　祕守の事なり　私あら〳〵
しき人のかくあるをさすかにといへり
はゝ君はすこし物のゆゑしりて　箋浮舟の母はすこ
し分別のあるなり
あこをは思ひおとし給へりと　河吾子日本紀　我子

阿子　家子知本　秘わか子をは浮舟よりもおろそかにし給ふとうらむるなり箋

かの少將ちきりしほとをまちつけて　左近少將に八月のほとゝ契りしよし前にあり

わか心ひとつにかう思ひいそくも　秘浮舟の母の心なり箋

人の心のしりかたさを思ひて　箋少將の心も眞實をしりかたしとなり

よろつおほく思ひはゝかることのあるを　箋浮舟を常陸か思ひへたつれは我心ひとつなるよしなり是より媒といふ詞なり

なみ〳〵の人にも物し給はねは　秘少將をいへり箋　弄左近少將をさる人の子なれはかくいへり

おやなともものし給はぬ人なれは　浮舟の父のおはせぬ事

うちあはぬさまに見えたてまつる事もやと　箋朝夕かよひ給ふ事なとにつけて少將へのあつかひ不足におほす事もやあらんとなり守の疎略なるゆゑかくいへり

わかき人々あまた侍れと　秘むすめともなり

思ふ人くしたるはおのつから思ひゆつられて　秘ありつきたるなり　又父の事をいふなり　私父常陸の子をはわれは思ひゆつりておろそかなりと云なり

この君の御事をのみなん　浮舟をわたくし物に思ふとなり

物思ひしりぬへき御心さまと　秘此少將の心はへをいへり箋

もしおもはすなる御心はへも見えは　箋常陸介か女と覺して相違してはとなり

しか〳〵なんと　河云々（シカ〳〵）日本紀

けしきあしうなりぬ　少將のけしきなり箋

はしめよりかみのむすめにあらすといふことを　秘少將詞　箋浮舟の事を少將のうけぬなり

よくもあないせてうかひたる事を　よく按内をもしらて浮たる事をと媒をあしく思ふなり

いとほしくなりて　秘中たちの心なり箋

くはしくもしりたまへす　中たちの詞なり

中にかしつくむすめとのみ　むすめの中にとりわきかしつくとのみ聞て常陸の女とはかり思ひ申さ陳

するなりくはしくしり給へすといふより媒の返答なり

かみのにこそはとこそ　守のむすめにこそと思ひしとなり

こゝ人の子ゝ給へらんとも思ひきゝ侍らす　箋繼子なとのあるとはしらさりしとなり

かたち心もすくれて　是より中たちの間およひたる體をいふなり浮舟の事なり

君いとあてやかならぬさまにて　祕少將なりあてやかならぬとは無興したるさまなり　箋少將の無興したる體なり

さやうのあたりいきかよはん　祕受領のむこなとにならん事本意ならすとなり　私此少將大將の子にて今受領の女に心をかくるは本意ならすとなり左樣のあたりといふよりは少將の詞なりあてやかな（御方イ）らぬさまは少將のけたかゝらす無興していへるさまをかけるなりあてやかならぬさまにてさやうのとつゝけてみれはあしきなり少將の利欲にふけりてかやうにいふをあてやかならぬといへりさて少將の心にも受領なとの聟にならん事は外聞も然へからぬ事なれとも如此いひよりて身のたよりともせんとおもふからは父母くしたる常陸かむすめを得んと思ふ心をのふるなり

おなしことうち〳〵にはおもふとも　箋同しことくなり浮舟を實子にかはらす思ふとも外聞いかゝとなり

源少納言讃岐守なとのうけはりたるけしきにて　祕兩人前腹のむこなるへし系圖になし箋　私此二人も母なき子ともなれとも少將は常陸介にうしろみられけん事を思へる（ふかしイ）なるへし

この人ついそうありうたてある人の心にて　祕媒なり　追從ツイショウ　箋媒の體なり　佞人なり

いとくちをしうこなたかなたに思ひけれは　箋兩方へあしけれはかく思ふなり媒しそこなへるを口惜思ふなり

まことに守のむすめとおほさは　祕媒の詞也

またわかうなとおはすとも　祕年わかきなり實子をも中へしとなり

中にあたるをなん　弄あまたある中なりひたちの介か子なり　箋當腹の中にあたるなり將監と童との

中にあたるなり
いとやはしめよりしかいひよれる事をおきて　祕少
將の詞也箋　私浮舟へ文かよはしつゝ今さらいか
かすへしとはさすかに思ひつれと猶たよりのかた
を本にして常陸かむこになれり
かのかんのぬしの人からも物々しく　河守主なり
何の主といふは聊かしつく詞なり大鏡にもなにか
しのぬしの藏人にていますかりしと云々　祕守の
ぬしなりうやまひたる詞なり
もはらかほかたちの　河專也モハラ
しなあてにえんならん女をねかはゝ　箋おちふれた
らんはかひなしとなり
ことうちあはぬみやひこのめる　花みやひは伊勢物
語なとにあり艶なる心なるへし
なたらかにて世中を過さんことを　浮世の樂をおも
ふなり人の常のさまなり
さもとゆるすけしきあらは何かはさもとの給ふ　守
のさもと思はゝ前に別人へいひよりしをあらため
てさもと思ふと少將の思ふなり
この人はいもうとのこのにしの御かたにあるたより
に　花にしの御方は浮舟の君の事なり媒入する人の
妹西の御かたにあるをいふなり　にしの御かたは
東屋君なり　祕手習のかたにあるなり守のかたへ
は行かよふ事もなきとなり　箋此人は中たちなり
此にしの御かたなり末に見えたり
中たちの妹の子のうき舟のかたにゐるたよりと云
云　手習のかたにあるなり　私花に媒の妹とあり
然へし然らは此西の御かたなるへし　子のといふ
義にては有へからす　追勘此末に浮舟の方に有し
は媒の妹とあり
かみにはくはしくも見えしられぬ　箋媒を守はしら
ぬなり
たゝいきにかみのゐたりけるまへに　媒のさまな
り
このわたりに時々出入はすときけと　此媒の事を內
內は守も聞たるはかりなり
なまあら／＼しき　守のきすくなるさまなり
左近少將とのゝ御せうそこ　祕媒の詞
かたらひかたけなるさまして　祕守のさまなり　箋
物のいひよりにくきさまなり
ちかうゐよりて　箋中たちの居よるなり　私かたら

ひかたけなるさましてちかうゐよりてとはことはのつゝきゝかゝなれと守の物いひよりにくきさまなれと媒なとしつけたるやうの人にてさしかゝりていへるなるへし

この月ころうちの御かたに　祕媒の詞　河内の御かたは内房の心なり　私浮舟君の事歟

北のかたの御はらにものし給へとかんの殿の御むすめにはおはせす　浮舟君常陸の北方には實子なれとも常陸か實子ならぬとの事なり

てにさゝけたりと思ひあつかひ　河如捧手掌上珠といふ體なり

さすかにその御ねかひはあなかちなるやうにてをさをさかけられ給はてけおこりておはしかよはん事

箋此少將のさやうのうしろみなとのねかひのかたはありてなましひに常陸介かあたりへはあなかちにいひよりなから守るには心にうけられすして源少納言讃岐守なとよりも數ならておなし所へおはしかよはんはしかるへからすと申てそしり申すとなり

せちにそしり申入々　箋媒のそらことをいふなり

はしめよりたゝきら／＼しう　祕守をあけていへり

もとの御心さしのまゝに　少將の本意も介の女なり　弄はしめは手習の君をといひしを又介の子といひてはしめより此女をと少將のいひし分につたふる程にこゝにてもとの心さしと僞て言なり

祕此義如何但媒のいひあやまれる事成へし

またをさなきもあまたおはすなるを　中にあたるをなんさ前にあり然は系圖に見えすとも猶妹も有へし

さらにかゝる御せうそこ　祕守のことま也箋　少將の此邊へのせうそこの事なり

おなし事に思ふ給ふべき人なれと　箋浮舟の事なり

よからぬわらはへあまた　男女子ともおほきゆゑに浮舟の事まては思ひいれぬよしなり

はゝなるものもこれをこと人と思ひわけたる事と子ともの事にとりまきれて浮舟へ疎略なるよしを彼母も腹立のよしなりされは此人のうへにわか口入をやめたるゆゑにいよ／＼さやうの事もしらぬとなり

なにかしをとり所にと　少將の御せうそこは浮舟へ

の御心さしにてこそ有らんとはかり思ひて介をと
り所におほすとは會てしらぬとなり
さるはいとうれしう思ひ給へらるゝ此妹(媒イ)の中こさく
ならは常陸介悦喜のよしなり
いとらうたしと思ふめのわらはゝ　花めのわらはゝ
女子の事なり　祕おくに十五六にてとあるむすめ
なり
これをなんいのちにかへんと　箋嫡君とつけたる當
腹の中君なり
故大將殿にもわかうより　祕系圖不分明此少將は大
將たりし人の子と見えたり
いへのこにてみたてまつりしに　此事諸抄註せす不
審也　私此少將幼少の時より故大將の家にて常陸
介か見し心にや　箋常陸介は故大將の家禮又其餘
流より出たる人歟
はるかなる所にうちつゝきて　箋陸奥常陸なとの任
の間なり
この人の思ひ給へんことを　祕母の心いかゝと也箋
よろしけなりと　祕媒の心なり
何かとおほしはゝかるへき事にも侍らす　祕妹(媒イ)の詞
なり
たゝひとところの御ゆるし　祕守をいへり
しんじちのおやのやんことなく　河眞實とは常陸介
か女の事なり　河眞實無比事
ほとりはみたらんふるまひすへきにあらす　河ほと
りはみとはふれはみたる心なり　花家のぬしには
見參せすしてそのあたりに經廻する事なり　祕邊
はみたるなり其邊を(親たるイ)へつらひたる心なり守の實子
にてもなきに行かよふへき事誤(親イ)たるやうなるへし
となり箋弄
人からはいとやんことなく　祕これより少將をほめ
ていへり箋
わかき君たちとて　弄一本わかき君媒の詞少將をい
ふ我君といふなり　私云わか君たちなれとも風流
めかぬとなり
すき／＼しくあてひてもおはしまさす　花あてひは
あてやかなるといふ心なり　祕實(めイ)なる人となり
弄　箋風流めかぬなり
りやうし給ふ所と(ごイ)も　箋知行なり
また此ころの御としなきやうなれと　河ころとは身

つからさいふ心なり又は頭歟いまたさかりの御さ
しならすさいふ歟後の守か詞に此頭の御さしなさ
の心もさなからんことはなのたまひそさなり　花
孤露なり頭歟如本みなしこのやうにたのむかたなき心也
弄見和秘抄ひさりの心歟　イ本この頭の御さくな
さ是も又その理あり云々　祕見なし子さいふ義あ
りこれも一義かなへるにや但此頭さいふ義可然歟
守の詞に此頭の御さくさあり奥にみえたり　箋み
なし子のやうなるさいへるはあしきなり只時分さ
いふなり　私秘箋の義可然
猶人のかきりなきさみさいふめるいきほひにはまさ
り侍り　箋尋常の人の富祐なるよりはまされりさな
り　河なほ人　直人也　諸大夫なり
らいねん四位に　箋明年四品すへしさなり
こたいのさうはうたかひなく　河今度日本紀　頭藏人
頭なり　弄この度の藏人頭はなり　祕今度の藏人
頭はさなり勅定さいへりこゝもさは悉皆虚言なり
よからぬものゝ人の謀介する事さもかくいへる
類あるなりか樣の所に心をつくへきをしへにかけ
るなるへし箋　私四位になり給てんさいひて藏

人頭にやかてなるへしさいひたりまことに口にま
かせていへるなるへし
みかさの御くちつからこて給へるなり　河ごて給ふ
はこち給ふなりいひたち給ふなりてさちさ五音相
通する故なり
よろつのことたらひなるあそんの　箋此詞以下猶御
門の仰のよしをかたるなり　祕此詞も主上のかや
うに仰あるよしを媒の女のさりそへて常陸にかた
るなり　弄あそんのこさ少將の事也
われしあれは　勅定の由なり此事媒のおく云尤かろ
かろし不可說なる事なり
あたら人の御むこをかうきゝ給ほさに　あたら人な
れはかくきこえ給時にはや〳〵聟により給へさい
ふなり
かのさのにはわれも〳〵　弄少將をいへり
これたゝうしろやすき事をさり申すなり　祕媒の隨
分申さいふなり　箋常陸介のために然へき事をい
ふよしなり
ひなひたるかみにて　河鄙夷　ゐ中ひたり枕草子　祕ゐなか人
なり

この頃の御さくなさの心もさなかこんこさは　守
の詞なりまへのころの御さくさいへる此詞にて見
えたり　箋
なにをあかぬさはおほすへき　何の不足をあらしさ
なり
たさへあへすしてつかうまつりさしつさも　さりあ
へすしてなさゝいふに同し少將に心さしを見せあ
へすしてさいふなり
子さもおほく侍れさこれはさまこさに思ひそめたる
箋他腹の子なさは皆さま／＼にしつけたるなるへ
しこれは此姫君なり少將にさ思ふをは別して思ふ
やう有なるへし
たゝま心におほしかへりみさせ給はゝ　我女を眞實
に少將のおほしめさはさなり
大臣のくらゐをもさのんさ　上達部にはえかてな
さんさみかさの仰らるゝよし中たちのかたりしゆ
ゑなり　私に是は大臣に成へき顯勢の心をいふな
るへし
たうじのみかさしかめくみ申給ふなれは　當時の帝
王しかの如く勅定あるなれはさいふなり

なにかしかめのわらはのためにもさいはひあるへき
ことにやさもしらすさ　かの御ためは少將のためさ
なり　不慮の幸を是に得たるさの心なるにやの
字ちさ難解なり　弄少將ためさもむすめのためさ
もおもひさたむるにもあらすひたすらむこの事を
領狀せんさなり私弄の義如何少將をしかのこさく
主上のめくみふかくおはしますに常陸聟にさるな
らひは大臣にならん顯勢にも事をかゝせしさなり
されはいよ／＼少將立身有へししからはわかむす
めの幸さなるへししらぬ事をさもあるへしさこさ
よけにいふを守のうけ悦ひたる詞なり
いさうれしくなりて　媒の心なり箋
いもうさにもかゝる事ありさも　浮舟のかたにゐ
たる媒のいもうさなり浮舟への文かよはしはその
つてなるへけれはかたらぬなるへし
あなたにもよりつかて　うき舟又姉なさのかたへも
つねは行かよふへきをけふはかくしてよりつかぬ
なり
めでたしさ思ひてきこゆれは　媒のいさきさ少將にい
ふなり

君すこしひなひてそあると　祕少將なり
大臣にならんぞくらうをとらんなとそ　河贖勞　古
記權大納言去年獻贖勞申官云々　弄そくらう河海
にはそくとすみてよめりき　祕贖の字濁てよめり
箋そくらう講談の時かくのことし贖銅とも云但刑
罰の時法令ありて出すを贖銅とは云重室なとをい
たして官になす事をいふなり　私記異朝には贖銅
にて官にもなるにや崔別（烈イ）といふ者錢貨を出して官
になりしをは人そしりて銅臭とてからかねくさき
といひし事もあるなり
さてかの北のかたにはものしつや心さしことに　祕
母の心いかゝとなり　私少將の心なり　私浮舟へ
と思ひたりし物をさすかにかの心中もいかゝとな
り
なにかきたのかたもかのひめ君をはいさやんことな
き物に　弄常陸のむすめも今の北方の腹なれはおろ
かには思はすと云り　祕媒の詞これも同しむすめ
なれはさなり　箋　私なにかとは申に及はすそれ
も同前に合點なるといひなすなり　母も此姫君を
大切にすると一段とよくいひなすなり

たゝ中のかみにてとしもおとなひ給ふを　弄おとゝ
いの中の兄といへり　箋浮舟はとしもゆきたるゆ
ゑに先これをと母のいひしはかりなりとこれも媒
のいひなすなり
月ころはまたなくよのつねならすかしつくと　祕少
將の心に此媒の月頃の詞にはかはりていへるよと
思ふとなり　箋浮舟へ文をつたへし時は別して母
の思ひかしつくといひし事前に見えたりそれを少
將の思ひ合するとなり
ひとわたりはつらしと思はれん　少將の心にとかく
母の心には一旦はつらしと思はるゝとももとおもひ
さたむるなり
人にすこしそしらるとも　少將の心なりまたくかし
こき君なとかけり利欲にふけりたる體なり
日をたにとりかへて　花これよりは後の事をまつ書
なりまことはいまた此時まては少將はきたらさる
なり下にくはしく見えたり　祕浮舟にと約束せし
日をあらためすして行なりかくいへと少將のかよ
ふ事は奥に見えたりこれ文法なり箋
北のかたは人しれすいそきたちて　箋母北方は此事

をしらて猶浮舟へのむことりの用意をするなり
御かたをもかしらあらはせ　祕浮舟なり
少將なといふほとの人にみせんも　箋浮舟のさまの
少將なとには過分なると母の思ふなり
おやにしられたてまつりて　祕八宮なり
おはせすなりにたりとも大將の丶給ふらんさまにも
八宮にしられておひ出給は丶おはせすとも薫のの
給ふさまにもしたかはん事有ましき事にもあらす
となり
ほかのをとき丶はかみの子とも思ひわかす　箋内々
は八宮の御子そと思ひあかりても人は守の子とお
もひわくへからすとなり
又しちをたつねしらん人も中々おとしめ思ひぬへき
弄浮舟君の事の實を八宮の御子也としらぬ人もか
すまへ給はさりし事を思は丶おとしつへしと母の
さま〳〵思へるなり箋
いやしからすめやすきほとの人の　少將の事なりは
や媒（妹イ）にうつりたる事を母のしらぬさまなり
中たちのかくことよくいみしきに女はましして　祕守
をたにもことよくいひなせは母のすかされたるは
ことわりなり仍女はましてとはいへり
こなたにも心のとかにあられて　私是はうき舟の事
成へしさて守の方へ行たれは此事をいへる成へし
かみとよも入きて　河外より入れるなり箋
あこの御けさう人をむけ（うはイ）んとし給けるか　河吾子（アコ）
河新猿楽記云十一君氣装人十二君假相人吾子人奪也　祕
あこは我むすめをさしていへり箋
めてたからんみこの御むすめ　一本めてたからんみ
むすめ　弄常陸か詞なり手習君の事をあさけりて
いふなり　祕めてたからん御むすめとは浮舟をあ
さむきていへり　箋みこの御むすめとは八宮の御
女といふなり歎たるなり
ようせさせ給ふ君たちあらし　河用或要也　花よう
は用なりしなのたかきはようにたゝぬ心なり
いやしくとやうならんなにかしらはをんな子をこそ
守の自慢の詞なり
かしこうおもひくはたてられたれと　箋北方をおこ
つりいふなり
ほかさまへ思ひなり給ひぬへかなれは　箋少將の外
の縁にならんとし給ふをさらはさてわかむすめを

と申たるなり
あふなく人の思はん所も　河あふなくは無興なりおくふかゝらすあだ／＼しき心なり　祕奥もなくなり箋
北のかたあきれて　祕母は浮舟を違變の事をはしめてきくなり
とはかりおもふに　箋しはらくの心なり
こなたにわたりて見るに　祕浮舟のかたなり
人にはおさ／\給はしと　祕浮舟のかたちの事也
おのれはおなしこと　祕おなしことくなり弄
この君のゆかりと　祕浮舟の事弄箋
おやなしときゝあなつりて　少將の心をいふなり
をさなくなりあはぬ人を　此浮舟の媒の事なり
ちかきあたりにてみしきかじと　此少將のうたてしき心を云かゝる人をは媒（妹イ）のむこにも我はみしきかしと思へとも守のうけとりてさわくとなり
あひ／＼にたる世の人のありさまを　弄あひて／＼の假あひたる事ともなれは口いれしとなり　祕あひて／＼假あひたる類の人なれは我は口入せしとなり　箋守の心と少將の心とをいふなり

いかてこゝならぬ所にしはしありにしかなと　別所に居て此事にいろうましきなとゝさへ腹立のあまりに母北方のいふなり
めのともいとはらたゝしう　浮舟のめのとなり
御さいはひにてたかふ事ともしらす　弄手習君のか様に引たかへたる事あるも又しらずよきさいはひにや有らんとなり箋
かく心くちをしくいましける君なれは　弄少將を思ひおとしたるなり　祕少將をいへり　私めのとの詞なり浮舟のかほかたちすくれたるをもかのうたてしき心にては見しらしとなり
大將殿の御さまかたちの　かほるの事をめのとのいふなり
あなおそろしや人のいふをきけは　祕母の詞也箋
左の大とのあせちの大納言式部卿の宮　祕夕霧なり按察大納言は紅梅の大臣なり式部卿は蜻蛉にうせ給へり薫のをちなり　箋弄　弄薫をむことと思ひし人々也
みかとの御かしつきむすめ見（えイ）給へる君は　花國史云正三位源朝臣潔姫（染殿后母也）者嵯峨太上天皇之皇女也

母當廬氏天皇選聟未得其人太政大臣正一位藤原朝臣（忠仁公事也）弱冠之時天皇悦其風操超倫殊勅嫁之清和太后其長女也潔姫性能琵琶頗可賞翫云々

かの御はゝ宮なとの御かたにあらせて　祕女三宮なり　箋薫の時々のすさみなとには見給ひもせんすらんとなり

宮のうへのかくさいはひ人と　箋中君なり（宮イ）　箋六君の事ゆゑ物をおほすなり

わか身にてもしりにき　箋浮舟の母も八宮の御事と常陸とを思ひくらへていふなり

このいといふかひなく　常陸か事をいふなり

かやうのあいきやうなく　箋今度少將の事

心にあはぬ事をもあきらめつ　心やすきさまの所ある事をいふなりいみしきあたりにも身の數ならぬはかひなしとなり

人わらへならすしたてまつらんと　浮舟の事をとかく思ひわつらふなり

こなたにめやすきあまたあなるを　箋浮舟の方に然へき女房なとのあるを先かいとるなり

ちやうなともあたらしうしたてられためるを　箋是是をも先とりわたすへしとなり

にしのかたにきてたちゐとかくしつらひ　弄常陸介きけるなり浮舟にむことらんと思ひしかたなり

めやすきさまにさはらかに　祕あはらなる心なり　弄　私さはやかなる心にて然へき歟

あるへきかきりしたる所をさかしらに屏風ともしてきて　箋母北の方の有へきさまにしつらひたる所へ屏風ともを猶たてそへたるとなり　此さかしらはかしこたてなる心なりさしいてたる心なり

つしにかいあやしきまて　厨子　二階　箋おき所かさりやう定りたる事なるをおほけれはよき事ともさとならへおきたるなるへし

御かたは北おもてもゐ給へり　祕此かしつくむすめの事なり　箋又浮舟と（如本）云義あり可然也　以上祕　弄末の詞に十五六のほとゝいふ常陸の女の事なり少將にあはせんとする人なり又云浮舟と見ゆ如何　私云浮舟可然なり　以上弄　私此一段は浮舟の事をかきたる樣子みゆさて本にもあひさかに何あり此次にはかしつく女の事をいへり兩抄ともに兩義の内浮舟とみて可然と云々箋には守の女とあり

て秘にも墨點をかけらるしかれとも猶浮舟の義可然のよしを存す如何

人の御心はみしりはてぬ　祕守の詞　箋北方の事を守のいふなり

世にはゝなき子は　弄北方のいまの女ともをおろかに思ふをうらみてよしや母なき人もそたつ事なれはといふなり

めのとゝふたりなてつくろひ　箋守とかしつく女のめのとなり

こうちきのほと　弄髪のするのことなり　弄たけにはつれぬほとのかみなり

なにか人のことさまに思ひかまへられける人をしもと思へと　祕人にとられしとてなり　私守の少將の事をいふなり北方の浮舟へと思はれたる人をあなかちに聟にせんと思ふへき事ならねと守の女ならすと聞て外の縁にならんとし給へは此少將の人からすくれたるをしさにかくむことるといふなり人のわれも／＼聟にとらんといひしも世のおほえ人からすくれたると守の思ふもみな中立にはかられての事なり

をとこ君もこのほとのいかめしく　箋少將の事なり私少將も中たちにはかられてことよくいひなしたれは少將もいよ／＼いそくなり

その夜もかへすきそめぬ　祕こゝにて來りそめたり私前に有し事なり浮舟と契りし日をもかへすなり

母君御かたのめのと　箋浮舟の母と乳母なり

宮の北のかたの御もとに　祕中宮なり　箋兵部卿宮の北方なり　箋浮舟をあつけ申たき事を文にて申すなり

そのことゝ侍らては　弄常陸北方の中君の方への文の詞なり

しはし所かへさせんと　祕方たかへなり

身ひとつのかけにかくれもあへす　母北の方の心ひとつにては此浮舟をかけにかくしかねたるとうれへたるなり

たのもしきかたにはまつなんと　箋中君の御事をたのむよしなり

こ宮のさはかりゆるし給はて　祕中君の心なり　箋八宮の御許容なかりし事なり

見くるしきさまにて世にあぶれんも　箋これもまた

八宮の御恥そと二色におもふ中君の心なり　私あ
ふるゝは溢歎世にあまされたる心なるへし
かたみにちりほはんも　箋ことなる事なきさまにて
此御あたりにちりほはんも又みくるしかるへしと
なり
大輔かもとにも　祕さふらふ女房たちなり
さるやうこそは侍らめ　祕大輔か詞なり
あまりいとなさけなくの給はせし事なり　八宮の御
許容なかりし事をいふなり
いとむつかしけなめれと　所のさま窮屈なるへし
いとうれしとおもほして　祕母の心なり箋
御かたもこの御あたりをは　祕浮舟なり　箋　弄手
習君の心をいふ
そのきら／＼しかるへきこともしらぬ心ちに　箋少
將嫁娶の時守の心に何事をかと思へとも結構なる
しやうをしらぬとなり
たゝあらゝかなるあつまきぬともを　花東絹　見ニタリ
善相公之意見ニうつほ藤原君ふときあつまきぬ三井に
みそにそめ　又祭使ふるめきたるはこふたつにあ
つまきぬ一はことをたあふみのあや一はこ

君もいとあらまほしく　箋少將事也
まらうとの御てゐさふらひとしつらひさわけは　箋
少將なり出居さふらひは少將のつかふ人のゐる所
なるへし
源少納言東のたいにすむ　弄先腹のむすめのむこな
り
この御かたにまらうとすみつきぬれは　花西の方な
り宮の姬君の此ほとすみ給ひしかたなり　箋西の
御かたとて浮舟の住し所には少將のすむなり
らうなとほとりはみたらんに　箋物のかたほとりの
心なり
宮にとは思ふなりけり　祕居所もなき故になり
私中君へ浮舟を參らする理をいひのふる段なり
此御かたさまにかすまへ給ふ人のなきをあなつるな
めりと思へは　弄中君の方の人の浮舟をおとゝひの
やうにはかすまへぬをいかにしてもむつひはやと
思ひてしひていひよるなり　祕浮舟の方に親類な
きをいへりさて人のあなつるなりと思ふ故に中君
にあなかちにまいりてむつふるなり　箋
ことにゆるひ給はさりし　弄中君の方の事也

めのとわかき人々二三人　浮舟にくしたる人なり
人けとほきかたにつほねしたり　祕匂宮の御方にお
かるゝなり　箋二條院にての事なり
としころかくはるかなりつれと　祕手習の母の北方
の事をいへり
まゐる時ははち給はす　弄浮舟の母の中君の方へま
いるなり箋
いとあらまほしくけはひことにて　祕中君のさまな
り
われもこ北のかたにははなれて奉るへき人には
花故宇治宮の北方中君の母のめひに中將君はあた
る也中君とは母方のいとこなれははなれぬ中とは
云なり　弄八宮の北方は浮舟の母のためにはをば
なり
つかうまつるといひしはかりに　祕宮つかへせしの
みちかひたるなり　弄北方になり給ふと宮つかへ
とのちかひたるはかりなり
しのひてむつひきこゆるも　かく參りよれとも親類
のよしをはかくすなり
こゝには御物いみと　祕匂宮の御かたなり　弄浮舟
の物いみにてわたり給ふといひたるなり　私浮舟
の物忌といひて常陸の方より人をかよはさしのた
め歟又匂宮の御かた物忌といひて人をかよはさぬ
か猶決すへし
こたみは心のとかに見る　箋此度なり今度なり　祕
常陸の妻匂宮をみるなり前にもみし事有へし箋
私常陸の妻二三日此宮にさふらひし事始なるへし
宮わたり給ふゆかしくて物のはさまよりみれは　箋
六條院六の君の方より二條院へ匂宮おはしたるな
り
いときよらに櫻をゝりたるさまし給ひて　匂宮の御
さまなり　常陸の妻のそきてみ奉るなり
わかたのもし人に思ひて　箋常陸介なり
あたり／＼の事なと　箋それ／＼の事かれの事なと
といふなり
けいしともなと申す　啓し申すなり　宮たちへ申事
をは啓すると云なり家司にはあらす聞まかひぬへ
き所なるゆゑにこれを注す
わかまゝこの式部丞にてくら人になる　祕常陸守か
子に先腹の六位の藏人式部丞なるへし弄　弄常陸

先腹の子北方のまゝ子なり
こよなき人の御けはひを　箋匂宮の御さまなり
かゝる所あたりにおはする　祕中君の事なり箋弄よそにおもふ時はめてたき人々と聞ゆともつらきめ見せ給はゝ　前にいひつる詞也かねて思ひし事はあさましきとなり　薫の事なとをかねて思ひしにはかはりていみしき體をみれはありかたく思ふ也
たなはたはかりにても　河「ちきりけん心そつらき七夕のとしに一たひあふはあふかは　箋かねておもひしはめてたき人もとたえかちならはうらめしかるへしとこそ思ひしに今思へは年に一たひはかりにてもかやうの事はなくさみなんと北方の思ふなり
わか君いたきて　祕匂宮なり　弄匂宮のいたき給ふなり　箋
女君みしかきかてを木丁をへたてゝ　弄中君なり
こ宮のさびしくおはせし　八宮のかすかにおはせしさまを思ひ出るなり
人々まゐりあつまれと　おもてむきへ人々參るとなり
わかいみしき事をつくすと　箋常陸か家のさまを思ひくらふるなり
なほ〳〵しき人のあたりは　弄受領なとの事をいふ
わかむすめもかやうにてさしならへたらんに　浮舟の事をおもふなりかやうの人にさしならへてもはつかしからしと思ふなり
ちゝぬしの后にもなしてんと　常陸か女ともを家の内にては后にもなさんと思ひあかるなり
おなしわか子なからけはひこよなきを　箋此北方のひとつ腹なから常陸が女と浮舟とのけはひかはる事をいへり
心はかたくつかふへかりけりと　弄よろしからぬ人の北方なとになしては無念なるへしとなり
宮日たけてなき給ひて　箋これは明るあしたなり
きさいのみやれいのなやましく　箋明石中宮なり
きよけたちてなてう事なき　箋常陸か聟の少將なり
三本愚見抄無何條事也よき程のこともなきと云事なりあしからすよからぬ人をいふ　花伊勢物語の詞なり　弄ほめたる詞にはあらす　祕こゝにてはさしもなきと云詞なり伊勢物語のは心かはれり

私愚見抄は花鳥の同作にていせ物語にもほめたる方には註せられすこゝの心にはよくかなへりと云へし　祕に伊勢物語のは心かはれるとは是又よくきこえたり伊勢にはほめたる事ときこゆ然は伊勢物語の註に愚見抄をあやまれりとしるへし　此所へ花鳥の義は心かよへり愚見抄の義以來三本に被註之仍今かくのことし

なほしきてたちはきたるあり　花北山抄云外衞佐等任意不帶劍之至于近衞次將帶劍上殿無妨仍宿侍之時副於宿物持上有餘不能持上　蜻蛉日記に馬頭はなよらかなるなほしたちはきれいの事なれと赤色のあふきすこし亂れたるにて　弄武官つねの事也

かれそこのひたちのかみのむこの少將な　祕中君にさふらふ女房逢此少將をみていへり　弄女房とものわれ〳〵いひたる詞なり

この御かたにとさためけるを　箋浮舟君の事なり

かしけたるめのわらはをえたるなり　花うつほにくらひらきめのわらはのかしけたるをこそむまめ
　弄いまた成長せさる體なり

かみの君のかたより　弄常陸守邊よりなり　イ本かの君の是は左少將の邊よりなり

きくらんともしらて人のかくいふにつけても　祕母北方のきくともしらてなり　箋

あなつらはしく思ひなりぬ　箋北方の少將を思ふ心なり

わか君のはひいてゝ　箋此君二歲になり給ふ

御心地のよろしくみえ給はゝ　祕匂宮の詞なり明石の中宮わつらはしくましますはとなり　箋

なくさめあそはして　箋わか君をなくさむるなり

みるとも〳〵あくましく　箋浮舟の母の心なり

女君の御まへに出きて　祕母北方のまゐりぬるなり
　箋中君の御前へなり

ゐ中ひたると覺してわらひ給ふ　箋中君なり

こうへのうせ給ひしほとは　箋故北方の事をいへり
　弄中君母の事　箋浮舟母の詞

いひかひなくをさなき御程にて　箋中君の事　母北方此中君をうみおきてやかてうせ給へりと橋姬卷にあり

こ宮も覺しかけきしを　箋八宮なり

さる山ふところにても　御宿世いみしき故に宇治の

山里にてもかやうによくおひたゝせ給へるとなり
山ふところめつらしき詞なり幼少の人を養育の事
をいふに山ふところたよりある歟
こひめ君のおはしまさす　大君の事を申いつるなり
君もうちなき給ひて　箋中君のさまなり
世中のうらめしく心ほそき　箋中君の詞也　六君な
との時の事なるへし
たのみきこえけるともに　弄中君の父母の御事也
よのつねに思ひなされて見たてまつりしらす成にけ
れはあるを　秘母北方のわかれはしらさる世の事也
猶この御事はつきせす　秘大君の事なり　弄箋
大將のよろつの事に心うつらぬよしを　箋薫の心中
を中君のかたり給ふなり
大將とのはさはかり世にためしなきまて　秘常陸北
方詞也
猶この事せかれしもし給はさらまし　箋女二宮にて
ましますともせき給はしとなり　秘宇治の大君薫
の北方にておはせは二宮にもせかれ給はしといふ
なり又二宮の御事も大君にはゝかり給ふへきかと
なり　二宮の事にもさはりに成へきとなり　箋大
君の薫の北方にておはすとも女二宮の事をは太后
へはゝかり給はゝといふなり　私此事いつれにて
もきこゆへき歟
いさやうの物と人わらはれなる　弄中君の詞　秘
中宮の詞也我身も六君におされたり大君もなから
へ給はゝおなしやうの身なるへしとなり箋
みはてぬにつけて心にくゝもある世にこそはと思へ
とかの君はいかなるにか　おく見ぬ程はかり心にく
き物なりさやうなるへきやらんしらぬ事なから此
薫はあやしうさやうにも有ましきさまなるよしを
かたり給ふなり　秘かの君は薫なり
故宮の御後の世をさへ　箋八宮の御追善まて心ふか
く思ひあつかひ給ふ事なり
かの過にし御かはりにたつねてみんと此数ならぬ人
をさへ　秘母北方の詞弄　弄浮舟を大君のかはりに
と辨して薫のゝ給ふとなり
一もとゆゑにこそはと　河「紫の一もとゆゑにむさ
しのゝ草はみなからあはれとそみる　秘ゆかりと
いへり　弄そのゆかりと云心なり箋
かたしけなけれとあはれになんおもひ給へらるゝ

箋かたしけなけれとゝあり是は申はかたしけなき事なれともあはれと思ふとのよしなり
此君をもてわつらふ　箋浮舟の事なり
人もきゝけりと思ふに少將の思ひあなつりける　箋少將の浮舟を違變したる事をは人はしりけりと思ひて有のまゝにかたるなり
尼になしてふかき山にやしすへて　浮舟の上を思ひわひての事なり
さるかたに世中を思ひたえて侍らましなとなん　箋母北方もともにや世をそむかんとなり
思ふ給へわひては思ひより侍るなといふ　箋思ひあまりてはかくまて思ひよるとなり
けに心くるしき御ありさまにこそ　祕中君の詞なり弄浮舟の事なり
人にあなつらるゝ御ありさまは　祕是はみなし子のならひさなり
かやうになりぬる人のさがにこそ　箋世のつねの事そとなり只は中君の我身によく思ひしり給へる事なるへし
さりともえたへもこもらぬ　箋さすかにすてはてられぬこそそとなりさて中君の身のうへを引かけての給ふなり
むけにそのかたにおきて給へる身たに　祕中君をは宇治にたえ（へ歟）こもり給ふへきやうに父みやもの給ひおきし身たにかくなりぬとなり弄
やつい給はんもいとほしけなる御さまにこそ　うき舟の事なり
はゝ君いとうれしと思ひたり　中君のかくの給にちからをえたるなり
おひにたるさまなれと　母北方のさまなりふけたるなり
故宮のつらうなさけなくおほしはなちたりしに　箋八宮なり　私八宮の浮舟をかすまへ給はさりしより人にもあなつらるゝはしめとなれるよしとなり北方詞なり
かうきこえさせ御らんせらるゝに（しまゝにイ）　箋中君のかくかすまへ給ふをよろこふ詞なり
うきしまのあはれなりし事もきこえいつ　河後拾へたてつる人の心をうきしまのあやうき迄もふみみつるかな　花しほかまのまへにうきたる浮島の

うきて思ひのある世なりけり　今按常陸國に信太の浮島といふ所ありこれを浮島と云にや又鹽かまの浮島は奥州なりそれをいふにや以上花　祕常陸國にあるはしたの浮島の事なりしかれともこれは奥州の守になりたる時の事をかきたるなりしからはしほかまのまへにうきたるとよめる浮島なるへし　弄箋　私此言葉のつゝきうきて思ひのある世なりけりといへる歌の心もおもしろし

わか身ひとつのとのみいひあはする人もなきつくは山のありさま　河「世中は昔よりやはうかりけん我身ひとつのためになれるか「大かたの我身ひとつのうきからになへての世をもうらみつるかな　弄引歌兩首いつれにても　箋引歌世中は昔よりやは云々　祕引歌のさたなし　箋此つくは山とは常陸國の物かたりにて有へし又浮舟に介か疎略なることをいふなり仍いひあはすへき人もなきと云り　祕こゝにて常陸國の事を云と見えたり國々の事をいへり　弄常陸介なりし時の物かたりなり　箋國國の心をつくしたる事ともいひ出たるなり

かくてさふらはまほしく　箋北方いつもかくてさふらひたきとなり

かゝるほとのありさまに　花受領の妻になりたるを身をやつすとはいふなり箋　弄浮舟の母のかくいやしき人にくしたる事をいへるなり　本姓いやしからぬ人なり

この君はまかせきこえさせて　祕浮舟なり　箋浮舟をは我身のやうに受領の妻なとにはなさしとなりされは中君にまかせたてまつらんとかこちなすなり

けに見くるしからてもあらなんと　祕中君の心なり　箋まことに浮舟をよからんさまにもとおほすなり

かたちも心さまもえにくむましう　箋是より皆浮舟の樣體をいふ歟

物はちもおとろ〳〵しからす　箋物なれぬやうに物はちをもせぬなり

こめきたる物から　箋巨めきたるなり大やうなるなり

かとなからす　箋かとのあるなりかと〳〵しきにては有へからす

むかしの人の御さまにあやしきまて　箋大君によく似かよひたるとなり

人かたもとめ給ふ人に　箋薫なり前に人かたの事あり

大將殿まいり給ふと　薫のをりしも參りたまふとなり

此まらうとのは丶君　箋浮舟の母のいふなり

えこそきこえさためね　箋匂薫の勝劣定かたしとなり

いかはかりの人か宮をはけちたてまつらん　祕匂宮をほめたるなり　弄浮舟の母の又詞なり

かしかましきまておひの丶しりて　祕大將なれは隨身のさまをおふをいへり箋

またれたるほとにあゆみ入給ふ　箋車よりおる丶ほとのあるなり

おかしけとも見えすなから　弄實なる人なり

見えくるしうはつかしうて　箋物こしなれともかくあるなり

ひたひかみなとも　鬢の髮なり

きはもなきさまそ　箋實々しく心ふかくくらゐのある也位匂宮にましたるなり

うちよりまいり給へるなるへし　祕内裏より出給ふなるへし

よへきさいの宮なやみ給ふよし　祕薫の詞也

宮たちさふらひ給はさりしかは　弄后宮の御かたに宮たちの見え給はぬをの給也　明石中宮腹の宮たちなり

宮の御かはりにいまゝてさふらひ侍りつるなり　箋此宮は匂なりその御かはりに薫のさふらひつるとなり

あいなう御あやまちおしはかり　祕匂の遲參し給へるは中君のあやまちとなり箋　弄匂宮の遲く參り給ひしを中君の御あやまちとたはふれ給ふなり

けにおろかならす思ひやりふかき　祕中君の返答なり

宮はうちにとまり給ぬるを見おきて　箋草子地也
箋匂の御留守をしりて參り給へるなり

たゝいにしへの忘れかたく　大君の事なり薫の心に忘れかたきとなり

さしもいかてか世をへて心にはなれす　箋中君の心いひそめてし事のすちなれはなこりなかりしとにや
箋あれ程薫の心中には有ましけれともいひそめし

事なれはその末をさをして詞にはかりかくの給ふ
かさ思へさもさにあらす眞實に見ゆるさなり　祕
眞實に思ひ給ふやうなり
いは木ならねはおもほししる　河人非木石皆有情
白氏文集　河心非木石遊仙窟
うらみ給ふ事もおほかれは　箋中君を薫の恨るなり
かゝる御心をやむる見そきをなん　河戀せしさ見た
らし川にせし見そき神はうけすそ成にけらしも
花御祓は人の思ひをやむるはらへなり祓には又人
かたをさりなせは手習君を故姫君のかたしろにし
て薫に見せたてまつらんさ思ひ給ふなり　祕引歌
戀せしさ見たらし川にせしみそきの心なり箋　弄
戀せしの心也
かの人かたの給ひいてゝ　箋浮舟の事なりみそきに
事よれり前に有し事なり
かれもなへての心ちはせす　祕薫の心なり　箋浮舟
の事なり
いてやそのほんそんねかひみて給ふへくはこそ　花
薫の山里の本尊にてもさいひしを中君の佛さなら
んさの給へる事なりやさり木の巻にある事なり私

花鳥にはその佛ねかひみて給ふへくはこそさあり
箋前にありし事なり
とき〳〵心やましくは中々山水もにこりぬへくさ
祕時々のやうならはにこるへしさなり　箋出山淺
水清云々　私心やましきはかりたえ〳〵ならは却
て薫の心のすめるもにこり出きぬへしさなり
うたての御ひしり心や　箋中君の詞なり　ひしりめ
かぬ事そさわらひ給ふ詞なり
いてさらはつたえはてさせ給へかし　弄浮舟の母に
つたへ給へさなり　祕薫の心なり詞なるなり　箋
この事をよくいひさけ給へさの詞歟
この御のかれこ（なイ）さはこそ思ひ出れはゆゝしくさ　祕
大君の中君にゆつり給ふに似たり　箋浮舟に中君
のゆつりてのかれんさするさなり秘の心面白し
薫見し人のかたしろならは身にそへてこひしき瀬々の
なでものにせん　河人形（カタシロ）點（塗本ノマヽ）祭祀具　一撫　一惣ッ
ハキハク　祕見し人さは大君なりかたしろは人形
なりなて物さは人かたをなてゝ我身にそへてよろ
つの災殃をうつしてなかす物也我か此大君の戀し
きを是にうつしてはらふへきさ也箋　弄なて物さ

は人かたの事也それをなて丶我か身にそへて萬の災殃をうつして流す物なれは也戀しき瀬々とは姉宮の事也かたしろ人形形代也我か思をやむるみそきせんと也

みそき川瀬々にいたさんなてものを身にそふかけと誰か頼まん　祕なて物は撫る物なれは薫の心頼かたしと也身にそへ給はしとよめるなり箋　流す物なれは身にそへ給はしと讀り浮舟の事をうしろみ也

ひしてあまたにとかやさかしらなれと心とをしくそ　祕引歌同河海弄　河伊勢物語「大ぬさの引手あまたに成ぬれは思へとえこそ頼さりけれ　大幣麻歟あなたこなたの手へわたるを引手あまたといふ歟

つひによるせはさらなりや　薫の詞　河伊勢物語「大ぬさと名にこそたてれなかれてもつゐによるせはありてふ物を業平　花引歌同　弄返歌の心也　祕伊勢物語にてかけり

いとうれたきやうなる水のあわにも　祕薫の身を觀しての給ふなりはかなき世中に如此事を申て戀路にまとはさる丶よとなり　弄薫の身を觀したるなり　箋云物にはよからんとてもあしからんとても前表のある物なり此浮舟の事には人かた本尊なとの事なき人のたとへのみあり又此瀬々のなて物なともうき舟の始末にてよく叶たり又詞（此詞イ）にもうれたき水の泡にもあらそひ侍るかななといへりかやうの事もみな前表なりとそ侍りし　花水の泡ははかなき事をいふ撫物の水になかれとまるをはかきなかしやる物也たとへは中君の我身のかはりに此人を出し給はんと思ひ給ふ事を薫のかくの給ふなり撫物人形同し事なり

かきなかさる丶なて物いてまことそかし　祕かやうにして中君の薫をすて給ふとなり　弄中君の薫をすてんとのうらみなり

いかてなくさむへき事そなと　中君の事を少々のかはりにてはなくさめかたしとなり

くらうなるもうるさけれは　箋中君の心なり

かりそめにものしたる人もあやしと思ふらんと　祕浮舟の事なり

こしらへやり給ふ　箋中君の薫をすかし給ふなり

さらはそのまらうとに　祕薫の詞なり此思ひをよく

さゝけ給へとなり　箋浮舟をさしていふなり
うちつけになとあさう。なすましう（はおもひイ）　箋うちつけにいひ出ては浮舟のあさく思ふへしさなきやうにつたへ仰せよとなりしかも此ねかひは年へぬれは眞實うちつけの事にはあらずとなり
はしたなけなるましうはこそ句　母君のゆるしあらはうれしかるへしとなり　母君のいらへはしたなけならすはこそうれしからめといふ詞なり仍句をきりてみるへし
いとうゐ〳〵しくならひにて侍る身は　薫はかやうの戀慕方に練習せさるとなり　風流かたの無調法なる心なり　弄薫の戀路になれぬよしをの給ふなり
をこかましきまてなんと　つき〳〵しくいひよる事の無調法なるとなり
めのとゆくりかに思ひよりて　かねてはめのとうちつけに薫參らせ給へなと云しを思ひよらす有しかと今みたてまつりそめてたる事也　めのとは浮舟の乳母なり是はよく薫をみたるなり前に有しなりさて浮舟を參らせよと云しかと母君ははしめは承引せさりしかとも今見奉りてめつるなり
あまの川をわたりてもかゝるひこほしの光をこそは　河七夕に戀はまさりぬ天川へたつるせきを今はやめてよ　花あまの川をへたてゝもとあり　あけまきの巻には匂宮の事を彦星にたとへていへりこゝには薫大將の事をひこほしの光と云り上の詞にはたなはたはかりにてもかやうにてみたてまつりかよはんはいとゝいみしかるへきと中將君の中君の事を申侍る男をはひこほしといひ女をはたなはたといへるなり　祕此詞あまた所にありさき〳〵めのとの薫の事をいひし事を今思ひ出て母君もけにもと思へるなり　箋あまた所にありされとも面白くかへてかけり
わかむすめはなのめならん人にみせんはをしけなるを　箋浮舟の事なり
えひすめきたる人をのみ見ならひて少將をかしこき物に　花えひすは東國の人をいふなり　私浮舟の母あつま人をのみ見るめうつしにはむこの少將も人からよしと思ひしなり思へはそれさへくやしきとなり
よりゐ給へりつるまきはしらも　河「わきもこかきてはよりたつ槙はしらそもむつましやゆかりと思へは　弄わきもこか云々箋不及此歌又は可用云々
時々みたてまつる人たに　弄おり〳〵みる心なりよ

りく\なとの義歟　祕折々みる心なりしからは下の時のきの字清(スミ)てよむへし

きやうなとをよみてくとくのすくれたる　箋法華經なとなり

やくわうほんにもとりわきての給るごづせんたんとかや　河牛頭栴檀若有人聞是藥王菩薩本事品能隨喜(觸イ)讃善者是人現世口中常出青蓮華香身毛孔中常出牛頭栴檀之香 法華經藥王品以上河海　祕河海に有箋同正法念經云高山之峯多有牛頭栴檀諸天與修羅戰時爲刀所傷以此香塗之即愈此山峯狀(曲イ)如牛頭故名牛頭　祕箋勘物花權說長德五年十月九日於山階寺拜見牛頭栴檀等箋刀劔なとの疵に此香をぬれは則愈と云々

佛はまことし給ひけりと　花經云實語者不誑語者云云　箋ちかくふるまひ給へはとは經說に聞たるはかりにはあらすその證據には此薫の事を眼前に見るといふなり

すゝろにゑみてきゝゐたり　浮舟の母の人々の薫をほめ申をきゝてはやわか物のやうにうれしかり居たるさまなり

君はしのひての給ひつる事をほのめかしのたまふ　祕中君なり　薫のの給ひしさまを浮舟の母にの給ふとなり

思ひそめつる事しう(ふイ)ねきまてかろく\しからす　祕薫の性をいふなり　弄箋

たゝいまの御ありさまを思へはわつらはしき心ちすへけれと　弄内親王をむかへ給ふ事也　箋女二宮の事也

世をそむきてもなと思ひより給ふらんもおなし事に思ひなして　祕尼にもなすへきといひし事なり箋　箋これもよからぬ前表なり

つらきめみせす人にあなつられしの心にてこそ鳥のねきこえさらんすまゐ(てイ)にて　祕母の詞也　箋思ひわひてのうへにてこそ深山の住もとおもへとなり河古「とふ鳥の聲もきこえぬおく山のふかき心を人はしらなむ

けに人の御ありさまけはひをみ奉り思ひ給ふるは　箋薫の有さまのすくれたるをみては下つかへのほとにてもさふらはせたきとなり

かすならぬ身に物思ひのたねをやいとゝまかせて見侍らん　河「數ならぬ身には思ひのなかれかしひさなみく\にぬるゝ袖かな　伊勢物語「いまはとて忘るゝ草の種をたに人の心にまかせすもかな

たかきもみしかきも　河卑ミシカキ　私高卑尊卑なといへり貴賤といへるにおなし卑の字いやしきと

もよめり　箋今にも卑をいやしきとよめり
この世後の世までくるしき身に　箋女人の身にことに嫉妬愛執の道現世後生のさはりとなる事なるへし
それもたゝ御心になんともおほしすてす　祕中君にまかせたてまつるなり箋　私前にたゝまかせきこえさせてしり侍らしと浮舟の事を中君へ申たる詞あり
いとわつらはしく成て　箋中君にまかせ奉るといふにてわつらはしくおほすなり
いさやこしがたの心ふかさにうちとけて行さきのありさまはしりかたきをと　中君の詞也　祕薫の性をいふ行さきの事はしりかたしとなり箋　弄薫の心をの給ふきしかたは心ふかく見え給ふをたのみて行するの事まてはたのみかたしとなり
かみのせうそこなといとはらたゝしけに　箋浮舟の母二三日こゝにさふらひたるを常陸かはらたちつつ迎をおこせたるなり
かたしけなくよろつたのみきこえさせて　箋浮舟の母詞也
いはほの中にともいかにとも　祕世をそむかんとも又誰にまゐらせんとも思ひめくらすへしとなり

弄祕箋同　花「いかならんいはほの中にすまはかは世のうき事のきこえこさらん
この御かたもいと心ほそく　祕浮舟なり　箋母のかへるを心ほそく思ふなり
いまめかしくおかしく見ゆるあたりに　箋中君のおはする二條院のありさまなり
車ひきかへるほとの　箋母北方のむかへの車なり祕宮内よりまかて給ふ　箋匂宮の内裏より退出し給ふなり常陸かむかへの車に行あひ給へるなり
御車なともれいならておはしますにさしあひて　弄參内の時は毛車にて有へし例ならてとは忍ひて出給心なるへし網代車なるへし又女車八葉と歟　祕網代車なとなるへし若君をおほつかなく思ひたまひてはやく出給へるなり
さしあひておしとゝめて　箋常陸か車匂宮の御車に參りあひておしとゝめて立たるなり
らうに御車よせており給ふ　箋廊にており給ふは内内の方にて下車なり
なその車そくらきほとにいそき出るはと　祕匂宮とはせ給へり　箋薫の事か御心にあるゆゑ匂宮の目とゝめ給ふなり

かやうにてそ忍ひたる所には出るかしと　箋匂宮の御心ならひに忍ひありきを覺しいて給ふなり

ひたちとの丶まかてさせ給ふと申す　箋此車そひの返答なり

とのこそあさやかなれと　弄匂宮のたつねさせ給ふにひたち殿とこたふるを殿の字をわらひたるなり　祕常陸殿と殿の字をくはへていふをいへり箋

けにこよなの身のほとやとそ　箋常陸か北方の心中なり事外ちかひたる事を思ふなり

たゝこの御かたの事を思ふゆゑにおのれも人々しくならまほしく　箋浮舟の事を母のとかく思ひあつかふさまなり

ましてさうしみをなほ〳〵しくやつして見ん事は浮舟の母身のうへに思ひうんして受領なとの妻となさんとは浮舟の事を思はすとなりさうしみは浮舟をさしていふなり

ひたちとのといふ人やこゝにかよはし給ふ　箋匂宮の中君へとひ給ふ歟御心にうたかはしく覺すへし

車そひなとこそとさらめきて　祕ゐならひあら〳〵しきとなり　弄　箋忍ふ時は人の見しらぬものをつるゝ物なり仍あら〳〵敷をなほことさらめきたると不審し給ふなり

きゝにく丶かたはらいたしと　祕中君なり　箋中君の心なり

太輔なとかわかくての頃友たちにてありける　祕さふらふ人なり　私中君の官女の太輔なとか友たち也常陸の北方か事をの給ふなり

いまめかしうもみえさめるをゆゑ〳〵しけにもの給ひなすかな　箋なにのゆゑもなき人の出入をも事ありかほにの給ひなすよとなと（なさイナシ）中君のかたり給ふなり

なき名はたてしとうちそむき給ふも　河「思はんとたのめし事もある物をなきなはたてしたゝに忘れぬ引歌同　祕弄

あくるもしらすおほとのこもりたるに　花「玉すたれあくるもしらすねし物を夢にもみしと思ひかけきや　祕匂のこなたにてあかし給へるなり

きさいの宮はこと〳〵しき御なやみにもあらて　箋明石中宮の御なやみことなる事なくておこたり給ふとなり

右の大との丶君たちなと　箋夕霧の息たちなり　匂宮の北方六君の兄弟ともなり

碁うちゐんふたき　前にあり　箋韵ふたきは常に人の目なれぬ詩集の韵字をかくして推する事なり

身輕一鳥飛と云は杜子美か句なり飛の字を摺消(スリギユ)のしたるを詩人ともの推したる事もあり云々是は韻ふたきの次の物語なり

夕つかた宮こなたにわたらせ給へれは　弄匂宮の寢殿より女君の方へわたり給ふなり

御ゆするのほとなりけり　花ゆするは沐浴する事なり　祕髪あらふ事なり　弄　箋泔器と書てゆするつきと訓せり

ちひさきわらはのあるしてをりあしき御ゆするの程こそ見くるしかめれ　箋匂宮のちひさきわらはして中君のおはする湯殿へいひつかはし給ふ詞なり

けにおはしまさぬひま〳〵にこそ　祕太輔か申なり

九十月はいかてかはとて　花九月はいむ月なり十月はかみなし月にて髪あらふにはいかる月なるへし　弄　祕なか月かみな月とよむへし昔は髪をあらふにも日をえらひたるなり　弄　箋九十月(クジウグワチ)とよむへし云々近代まて沐浴に日をえらひしなり　まつ正五九月をいむなり又十月をはかみな月とていむなり　私祕弄にはなか月かみな月とよむへしと云々箋には九十月とよめり如何

わか君もね給へりけれは　若君もいね給つれはつれつれにて匂宮のこゝかしこたゝすみありき給ふなり

にしのかたにれいならぬわらはの　浮舟の君のわらはなり

いまゝいりたるかなと　匂の見しり給はぬ故に新參のわらはかとおほすとなり

一尺(イッシャク)はかりひきさけて屏風たてたり　箋ひきさけては引避てなり引のけたるなり

きちやうすにそへてたてたり　河簾也

かたひらひとへをうちかけて　箋木丁の帷なり一重なり

しをん色のはなやかなるをみなへしのおり物　浮舟の衣裳の色目なり

心にもあらて見ゆるなめり　箋浮舟の見ゆるなり

いままいりのくちをしからぬなめりと　匂宮の浮舟を新參の女房とおほすなり

こなたのらうの中のつほせんさいの　箋坪とはせはき庭なり

やり水のわたりの石たかきほと　箋石たかき程はやり水も音あるへし

れいこなたにきなれたる人にやあらんと　箋中君の
女房の中に浮舟の方へ來なれたる人かと思ふなり
こなたのさうしはひきたて給ひて　箋入給へる跡さ
うしを引たて給ふなり
見かへりたるさまいとおかし　浮舟のさまなり
かほをほかさまにもてかくして　弄匂宮の事也　箋
匂宮のかほをみせしと外さまへむき給へるなり
たゝならすほのめかし給大將にや　弄かほをかくし
給ふによりて薫るにやとうたかひしなり
めのと人けのれいならぬを　箋浮舟のめのとなり
かくうちつけなる御しわさなれと　弄うちつけなる
事なれとも好色になれたるみやにて詞おほくの給
ふなり
たれときかさらんほとは　前に名のりこそゆかしけ
れとの給ひし行衛なり
いまわたらせ給ひなんと人々いふなり　祕中君はゆ
するよりかへらせ給ふと人々いふなり箋　弄中君
のゆするの方よりつねの方へわたり給ふ事なり匂
宮浮舟のかたに入る給ふ時なり
おまへならぬかたのみかうしともそおろすなる　中

君のつねにおはする方の御まへはかりあけてのこ
りの格子をはおろすなり
こなたははなれたるかたにしなして　弄匂宮の浮舟
のかたへとほり給ひし道の事ともなり　箋浮舟の
ゐたる方なり
ひやうふのふくろにいれこめたる　祕昔はかくのこ
とし云々弄　河屛風納袋事今世いたくなきにや上
古事歟　但舊記無所見ゐ中ひたる體歟　箋厨子二
階屛風やうの物おき給ふ所と見ゆ云々
かく人のものし給へはとて　祕常にはこゝは道にて
もなきを只今浮舟をすませ給ふとて障子一まあき
たるなり　浮舟のこゝに居給ふゆゑに人のかよふ
道はかりを道具ちとのけてあけたるとなり
右近とて大輔かむすめのさふらふきて　弄中君のか
たの女はうと見ゆ後に浮舟のかたにある人歟又別
也云々　私是は中君にさふらふ大輔か女にて右近
といふ人と見えたり中君の官女なり浮舟にさふら
ひし右近とは各別の事勿論なり
物つゝみせすはやりかにおぞき人にて　河物おそき
ことなり　弄おそろしきなり

うき舟のめのとの事なり
見給へこうして　花見つかれたる心なり　河見る事
の至極したる心なり　看殺おなし心歟　祕久しく
まもりゐたるなり　箋くたひれたる心もあり是は
看殺なり
れいのけしからぬ御さまと思ひよりにけり　箋右近
の心にやかて匂宮そと思ふなり
女の心か（あイ）はし（せイ）給ましき　浮舟の內々心をかよはす事
はあるましきと右近か思ふゆゑにいとほしく思ふ
なり
けにいと見くるしき事にも侍るかな　右近か詞なり
御前にこそはしのひてきこえさせめとて　箋右近か
中君へ申さん我はいかゝせんとなり弄
かたはにたれも〳〵おもへは　箋中君へ申さんはい
かゝと人々の思ふなりされと匂宮はなにともおほ
さすさわき給はぬなり
あさましきまてあてにおかしき人かな　匂宮の浮舟
のさまを思ふ心なり
いとをしなへてのいまゝゐりには　浮舟を右近のい
ひつるさま宮つかへ人なとのあひしらひにはあら
すとおほすなり
たゝいみしうしぬはかり　浮舟の體なり
右近うへにしか〳〵こそおはしませ　箋中君へ此樣
體を申なり
れいの心うき御さまかな　祕中君の詞
かのはゝもいかにあは〳〵しく　箋浮舟の母なりそ
の思はん所を中君もくるしくおほすなり
物もいはれ給はす　箋中君のさまなり
れいもかゝる時は（時イ）おそくもわたり給へは　弄寢殿に
あそひ給ひて女房の方へおそくわたり給ふとなり
めのとこそおすましかりけれ　河おそましなりそと
すと同響なり　弄おそろしき心なり
右近少將とふたりしていとほしかる　祕右近と少將
と二人なり　弄少將も中君の女房なり
大宮この夕暮より御むねなやませ給ふを　弄中宮の
御事也箋
右近心なきをりの御なやみかなきこえさせんとてた
つ　祕たはふれにいへり眞實にいふにあらす　箋匂
の御ためにおりあしきとなりたはふれなり　弄匂
宮の浮舟の方に入おはしたる折ふし中宮の御なや

みをつけきたれは匂宮のために心なき折なりと右近かいひなしたるなり末の詞に今すこしあはたゝしけにといへり眞實心なき折といふにあらす

少將いてや今はかひなくもあへいことを　少將の君は匂宮の實事もはや有へしといひなすなり

いないまたしかるへし　右近か返答歟

きゝにくき人の御ほんしやう　箋中君の心に匂宮の好色すきたるとちとおほすなり

わかあたりをさへうとみぬへかめりと　匂宮ゆへ中君をもうとまんとなり

まいりて御つかひの申すよりもいますこしあはたゝしけに　右近か匂宮へ申すさまなり

たれかまいりたる　祕誰かまいりたる　私か文字清へき歟如何　箋そらことを右近か申と匂のおほすなり

宮のさふらひにたひらのしけつね　弄別の儀なし

箋明石の中君（宮歟）の御侍なり（玄はなき人なり）平重經なり惟光良清以下其頃の人のありし名なり此重經未勘云々

この御つかひをにしおもてにてさへには　弄浮舟君の方ちかくよひてとひて宮にもきかせ奉る也　箋匂のそらことのやうにおほすゆゑに聞給ふやうにあたり近く申つきつる人をもよひよせて又やうたいを右近かとふなり

申つきつる人もよりきて　弄はしめ申次つる人も西おもてにきていひつたふるなり

中務　祕匂の兄弟なり箋　弄今上の御子云々

大夫（ダイフ）はたゝいまなん　祕中宮大夫なり箋　弄中宮大夫も參りつるとかたり申なり

みちに御くるま引いつる　大夫の車歟　弄中務宮なとの參内の車ともみえしとなり但大夫の車かと也

おそろしき夢のさめたる心ちして　祕うき舟の心なり箋

かくおはしましそめて　箋匂宮のかくおはしましそめてはつい（ひイ）によからしとなり乳母の詞

かきりなきひとさこゆとも　箋匂の事なりかきりなくすくれたる人なりともとなり

さしはなれたらん人にこそ　箋中君と浮舟は兄弟なる事をいへり

かゝのさうをいたして　河降魔相　花鳥弄祕　花不動尊なとのやうに忿怒の相をあらはしたるなり

祕降魔相も八相成道の内なり

むくつけくけすく〱しき　箋蠢々なり
手をいたくつませ給ひしこそ　弄めのとの匂宮をまもり奉りしにめのとの手をつみ給ひしとなり
なほ人のけさうたちて　弄おしなへての人のけさうのやうなり宮を云なり
かのとのにはけふもいみしくいさかひ給ひけり　花常陸殿の事なり　祕常陸守か宿所なり弄　箋浮舟の母の二條院より歸ていさかふなり
たゝ一ところのうへを　祕浮舟一人を母の思ひあつかふと常陸かはらたつなり
まらうとのおはするほとの御たひゐ　弄むこの少將の事也　祕左近少將なり箋同　弄旅居は常陸か北方の浮舟にそひて旅ゐしたる事を常陸はらたつ也　祕旅ゐは母上よそにある事なり
しも人さへきゝ句　箋いとおしかりけり
すへてこの少將の君そあいきやうなく　此少將の事ゆへ夫妻のいさかひもいてきぬるといふなり
なたらかにとしころのまゝにて　乳母の浮舟の身上をいふ
君はたゝいまはともかくも思ひめくらされす　祕浮舟なり　箋　私浮舟身上の事母の常陸の介とのいさかひの事も思はすたゝ匂宮ゆゑおそろしきめをみしを思ふとなり
いかにおほすらんと思ふに　祕中君のいかにおほすらんとなけくなり
いとくるしみあつかひて　箋めのとの心浮舟のさまを心くるしく思ふなり
なにかかくおほす　めのとのなくさめていへるなり　めのとの詞浮舟をなくさむる歟
さかなきまゝはゝにゝくまれんよりは　箋父のなきは外聞はたよりなき様なれと繼母ににくまれんよりは内々の心やすしとなり
はつせのくわんおんおはしませは　弄泊瀬の觀音を信してまいりしかとも浮舟のさいはひのつゐに思ふやうならす玉かつらは長谷の利生にあつかり給へり世間の道理をはかるへし　祕長谷寺の利生をいへり或は成就不成就は云りたまかつらは利生成就此浮舟はおもふやうにもあらさるなり　此理を知せんためなり　箋天台釋云如シ二向テレ漢ニ聞ラレ聲ヲ對メ向レ鏡ニ見レ後ニ成就不成就の事にいへり利生の有無は人の

信によりて佛によらす
かくもありけりと思ふはかりの御さいはひ　人のおとろくほとの幸あれとなり
あか君は人あらはれにては　箋浮舟をさして云也
世をやすけにいひゐたり　浮舟をなくさめたるめのとのさまなり
宮はいそきていて給ふなり　祕匂宮の參内なり
内ちかきかたにやあらんこなたの御かとより出給へは　祕内裏へ參り給へるに此御方の御門ちかきゆゑとなりうら門のことなるへし　弄内裏への路次近きかたよりとて浮舟の居給ふ方の西の門より出給ふなり
すゝろにわつらはしく　浮舟也めのとなとの心なるへし
うつし馬ともひきいたして　花移の鞍おきたる馬なり祕　箋うつしは鞍のこしらへやうとなり
とのゐにさふらふ人　箋これにありあひたる人はかり御供するなり
うへいとほしくうたて思ふらんとて　祕中君より浮舟の方へ人をまいらせたまへり　箋

こよひはいて給はし　匂宮の御留守のよしをの給ふなり
ゆするのなこりにや心ちもなやましくて　河洗レ髮後首風發　醫書　左傳曰辭以レ沐謂ニ僕人一曰沐則心覆則圖反宜
みたり心ちのいとくるしう侍るを　祕浮舟の返事なり箋
いかなる御心ちそと立かへりとふらひきこえ給へは
おしかへし中君の使をやり給ふなり
少將右近めましろきをして　瞬メマシロキ　目見かはしめくはせしたる躰なり
かたはらいたくおほすらんと　弄中君のかたはらいたくや思ひ給ふらんと女房とものいふを中君のききて何となくいとほしと思ひ給ふなり　箋實事もありたる歟と中君のおほすへきとなり
たゝなるよりはいとほしく　祕草子地なり
あはれ／＼しく思ひおとさん　箋浮舟を薫へみせんと中君のおほすに匂宮のこよひ實事なと有たらは薫の浮舟を見おとさんとなり中君の心なり
かくのみゝたりかはしく　匂の性をいへり祕　弄匂

宮の事を中君のゝ給ふなりか樣の人の心を思ひつゝけ給ふなり

しちならぬ事をもくねりいひ　河不實　まことならぬ事なり

さすかに見ゆるしつらう　匂宮は思はすによからぬ事のあるをも見ゆるし給事もありさためなくわつらはしとなり　箋實なき事にもくねるやうなる性は見とかむへき事をも又なほさりなる所のあるこなり匂の性をいふなり

この君はいかてうしと思はん事そ　花是は薫大將の事なり弄　祕薫の性をいへりいつかいひは出給はて下の心に恨の有へきをいへり　箋　河「心には下ゆく水のわきかへりいはて思ふそいふにまされる　伊勢物語「おもふ事いはてそたゝにやみぬへき我とひとしき人しなければ　弄薫の心中にうしと思ひ給はん事はつかしとなり

あいなく思ふ事そひぬる人のうへなめり　弄匂宮の事の浮舟にそひたるをわひ給ふなり　祕薫の人になりておはせは此事くるしき事となり

としころ見すしらさりし　弄中君の詞浮舟の事

心はへかたちをみれは　弄中君の詞浮舟の事　箋浮舟のかたちも心はへもよきをみ初てかく中君の心にも思ひはなちかたく成たるとなり

あかぬ事おほかる心ちすれと　弄中君の身上は子細なきやうなるなり　箋不足なる事のおほきなり

かく物はかなきめもみつへかりける身の　浮舟に匂のちかつきより給へるやうの事なり　箋此中君も宇治にて大君のすへりかくれて薫のちかつき給ひし時實事なと有たらは匂宮の北方にてはゐ給ふましきなるへし

さははふれすなりにけるにこそ　花はふれすは不放埒心なり

にくき心そひ給へる人　弄薫の中君にの給ひかくる事むつかしく思ひ給ふなり　祕薫なり　箋薫の中君へ心をかくる事なり

しろき御そひとかさねはかり　箋中君の髮をほし給ふ程きぬをもき給はぬなり

この君はまことに心ちもあしく　浮舟君なり

ことしもありかほに　箋中君の方へおはせすは事ありかほならんとめのとの云なり

こなたのさうしのもとにて　弄中君の方の右近をよひてめのとのいへるなり　箋中君の方の障子の邊なり
いとあやしく侍つる事のなこりに　めのとの右近にいふ詞也
まめやかにくるしけに見えさせ給ふを　弄浮舟の實事なき事をまことしくくるしと見え給ふとなり
いさゝかも世をしり給へる人こそあれ　箋男女の間の事を浮舟の知ぬゆゑに宮のちかつき給へるはかりをもあるましくはつかしき事に思ふとなり
いとやはらかにおほときすき給へる君にて　箋浮舟の性をいへりちとあまり實々しからぬ性なり末まてその心みえたり
うへをたくひなくみたてまつるにけおとるとも見えす　箋中君に浮舟のおとらぬとなりさふらふ女房ともの心なり
これにおほしつきなは　祕匂の心をとめ給はゝとなり　箋是も女房共の心なり
かゝらぬをたにめつらしき人おかしうし給ふ　匂の御心をいふなりこれほとによからぬをさへめつらしきをは御らんし過さぬにとなり
物かたりいとなつかしくし給ひて　祕中君の物語なり
れいならすつゝましき所なとな思ひなし給ふそ　箋中君の詞也
こひめ君のおはせすなりにしのち　箋大君なり
思ひよそへられ給ふ御さきを　箋浮舟の大君に似たるとなり
あはれになん思ふ人なき身に　箋思ふを前後へつけて見る決前生後の句法也云々
むかしの御心さしのやうに　祕大君の中君を思ひしやうにとなり　箋浮舟にあひ思ひ給へと中君のゝ給ふなり
とし頃いとはるかにのみ思ひきこえさせしに　祕浮舟の詞也　兄弟の數にも入られさりし事なり又は東國にありし事にても有へし
わかひたる聲にて　箋浮舟の聲也
物はちもえしあへ給はす　箋浮舟の繪に心いりたる體なり
こゝと見ゆる所なく　箋浮舟のさまなりこゝそわろ

きと目にたつ所のなきなり
たゝそれとのみ思ひ出らるれは　箋大君かと思ふほ
となるなり
ゐはことにめもとゝめ給はて　箋中君の繪をは見す
して浮舟をみるなり
こ宮にいとよくにたてまつりたるなめり　箋浮舟も
八宮に似たるとなり
こ姫君は宮の御かたさまにわれはゝゝうへににたて
まつりたると　箋大君は父八宮に似たり中君は母北
方にゝたると人々の申せしとなり浮舟も大君に似
たれは八宮かたそとなり
けにゝたる人はいみしきものなりけりと　弄浮舟の
姉宮なとに似給へるをほめていみしとなり
かれはかきりなくあてに　箋大君の事をいふ似たる
うちに大君と浮舟とのかはりめをいふなり
これはまたもてなしのうひ〳〵しけに　箋浮舟のさ
まを云也
ゆゑ〳〵しきけはひたにもてつけたらは　箋今ちと
物なれたる所の出來たらは薫の御らんせんにも不
足あらしなとゝ中君のおほすなり

このかみ心に思ひあつかはれ給ふ　箋中君の心なり
御ありさまなとまほならねとかたり給　箋八宮の御
事をすこしつゝかたり給ふなり
いとゆかしうてみたてまつらす成にけるを　ぬイ　箋浮舟
の心なり
よへの心しりの人々はいかなりつらんな　祕右近や
少將なとなり　箋匂の浮舟にちかつき給へる事を
しれる人なり
いみしくおほすともかひあるへき事かは　祕中君の
かくらうたけにし給ふとも匂はたゝに覺しめしは
すつましきとなりいみしくおほすともとは中君浮
舟の事をねんころにおほすとも匂の御心うつり給
はゝかひなかるへしとなり　弄
御めのとひきすゑてすゝろにかたりうれへし　箋浮
舟のめのとの事のやうを右近をとりとめてかたり
しも實事なとあるさまにはあらすとなり
もてはなれてそ　箋實事はなきよしをふかくいひし
となり
宮もあひてもあはぬやうなる　河「ふすほともなくて
明ぬる夏の夜はあひてもあはぬ心ちこそすれ　祕

まへによしあるふることともすし給ふと有しなり
引歌河に同し　箋匂宮參内し給ひし時西の門より
いて給ふとてふることなとくちすさみ給ふとあり
しことなり引歌同　これは浮舟の逢たまはぬ證據
にいへり本歌は逢たれともあはぬこゝちするとい
へり
いさやこことさらにもやあらん　祕わさとつくりての
給ふ事もや有へしとなり箋　弄又しらす宮のわさ
とことさらにあひてもあはぬこゝろをやすんし給
ひけんとなり
こともありかほに見え給はさりし　祕かくさま／＼に
とりあつかへるなり　浮舟の體も何心もなかりし
ほとに實事はなかりし物なりなとゝいふなり
めのとくるまこひて　箋常陸介かたへ車をとりにや
る歟
人もけしからぬさまに　さふらふ人々を思ふなり北
方の詞也
さうしみもいとゝおほすへき　祕中君なり箋
物にくみはあて人もなき物なりと　花うはなりにな
る事いかなる上臈もにくむならひなり　弄上臈し
き人も物にくみはする物をと云也
夕つかたまいりぬ　箋浮舟の母の二條院へ參るなり
宮おはしまさねは　箋匂宮いまた退出なきなり
あやしく心をさなけなる人を　祕母の詞也
いたちの侍らんやうなる心ちのし侍れはよからぬも
のともにくみうらみられ侍ときこゆ　河いたちのま
かけといふこと歟たとへはおほつかなきにや中君
の御返事にもうしろめたけにけしきはみたる御ま
かけこそと有り花いたちのなき間のてんほこりと
いふ事ありてんと云けたものはいたちのなき時は
こるを云常陸の北方は浮舟君をいたちになそらへ
ていへり心は此人を宮の御方にあつけたてまつり
て心やすく思ひてわか殿にてほこるやうなれはよ
からぬものともはよのむすめなとにおのれをは次
にするとうらみくねるといへる也　祕花鳥說いか
かいたちは狐の性の類なり狐は狐疑とて物をつよ
く疑心のある物なり其ことくにいたちも疑心の有
物なりうしろやすくは思へともうたかはしき心の
あるとなりいたちのまかけなといふも疑心のある
故なり　弄いたちは物をうたかはしく思ふ心ある

なりさてまかけをさすなり　箋いたちのまかけといふ事なり物をうたかはしく思ふ心なり易の晋の卦に沙汰あり可勘也　祕よからぬ物ともにとは母のこなたへ參てあひそふてさふらひたき心のあれともさもえし侍らさるなりよからぬものともとは常陸守かたのものなり

いとさいふはかりをさなけさには　祕中君の詞也浮舟の事を云也

うしろめたけにけしきはみたる御まかけこそ　いたちといふ詞をうけてまかけといへりうたかはしき心をいへり　弄うたかはしけにいへることをの給ふなり　花いたちのまかけと云事手習卷にも見えたりいたちは人をみてあやしくおもひてまかげをさす物なり浮舟君をいたちにたとふるにつきて中君に心をおき給ふやうなる氣色のあるをまかけこそわつらはしけれと中君の丶給を母君のき丶給事もあれは心のおに丶はつかしく思ひ侍るとなり

心のおに丶はつかしくそ　祕母の心なり箋

えもうちいてきこえす　箋匂の浮舟にちかつき給へる事を母のえいひ出ぬなり

かくてさふらひ給ふ（侍るイ）はとしころのねかひみつこ丶ちして　祕母のことは　此事ところ兄弟の內にもかすまへ給はさりし事なり

さすかにつ丶ましき事なん　箋匂宮の事を思はせていへり

ふかき山のほひは見さほになん侍るへきをと　祕前に山里にすませんとのあらましせし事なり　みさほとは不變なるとなり箋　河心操なり心からなり　祕みさほは松のみさほなといふやうにかはらぬ心をいふなり

こ丶は何事かうしろめたく　祕中君の詞　箋つ丶ましき事といふにあたりてなり

けしからすたちてよからぬ人の　祕匂宮の御事なり

その心をみな人みしりためれは　祕さやうのかたもみな心つかひせはくるしかるましきとなり箋

ひんなうもてなしきこえしと　箋浮舟のためあしくはせしと中君はおもふとなり

さらに御心をはへたてありても　祕母の詞也　中君の御隔心あるとは思はぬとなり

かたはらいたうゆるしなかりしすちは何にかけても

きこえさせ侍らん　秘浮舟は故宮の御子にてはなき
といひはなちたまへはそのかたはなれたるとなり箋
弄秘イ八宮の浮舟をかすまへ給はさりし事なり
そのかたならてもおほしはなつましきつなも　秘浮
舟の母と中君の母とはめひをはなる事を云り箋弄
河八宮の浮舟の君をゆるし給はさりし事なりそ
のかたならて覺しはなつましきとは中君の母儀と
常陸介か妻としたしき事なり
いさなふ　倡　浮舟を母のつれてかへらんとなり
いとほしくほいなきわさかなと　中君の心なり浮舟
を母のくしてかへる事を心くるしくおほすなり
物もきこえて出ぬ　箋母北方なり
ちひさき家まうけたりけり　常陸か妻の家三條にあ
るとなり薫のあつまやの歌よみたる所なり　箋薫
の近所なるへし
この御身ひとつをよろつにもてなやみ　浮舟の身ひ
とつおき所なきとなり母の心なり
みつからはかりはたゝひたふるにしな〳〵しからす
箋浮舟の母の心なりしな〳〵しからすとは俗姓ほ
と身をたてすしてとなり俗姓をかくしての心なり

この御ゆかりは心うしと思ひきこえし　秘故宮の御
子にてなきよしを云はなち給へはうとみはつへき
あたりなれと浮舟のためを思ひてむつひよりぬれ
は又かくむつかしき事の出來ぬるとなり　中君の
御あたりなり
ことやうなりともこゝを人にもしらせす　秘人々し
き所にてはなけれともとなり
みつからはかへりなんとす　浮舟をは三條のやとり
りにおきて母は常陸か所へかへらんとするなり
君はうちなきて　浮舟のさまなり
おやはたましてあたらしくをしけれはつゝかなくて
箋母の心をいふ浮舟のさまをあたらしくをしくお
もふなり　つゝかなくてとは匂宮なとの實事なか
りし事なり
おもふことみなさん　箋思ふことくなり母のねかひ
のまゝになしたく思ふなり
人にもあは〳〵しく　匂宮のちかつき給へる時實事
なとありてはいかならんと思ひてかさねてさやう
の事もなき間にと急き浮舟をくして歸るなり
心ちなしなとはあらぬ人の　秘母の性を云なり箋

弄常陸か北方の心の事なり　草
思ひのまゝにそ　箋心のまゝなり随意なるなり　草
子地也
かのいへにもかくろへてはすへたりぬへけれと　祕
常陸の家なり　箋　花ひたちの家にもかくしては
いつくにもおくへけれと實の子ともにけをされて
あらんかいとほしきにかくはふらかすなり　しか
は然なり　箋數ならておはせんは心くるしとなり
かたみに心ほそく　浮舟と母との各別にあらん事を
互に思ふなり
こゝは又かくあはれて　箋家の半作なるをいへり
さうしにある物ともめしいてゝ　河曹司　箋つほね
つほねにある人なり
とのゐ人の事なと　箋番衆なとの心なり
かしこにはらたちうらみらるゝ　箋常陸か事なり
うちなきつゝかへり　母の常陸か所へかへるなり
少將のあつかひを　箋ひたちか聟なり
もろこゝろにさまあしくいとなますと　河浮舟の母
の常陸と一ッ心になりて少將の事をいとなまぬと
云なり
草子地なり　河左右音（モロコヱ）萬葉

この人によりかゝるまきれもあるそかしと　祕少將
ゆゑなり　花此少將ゆゑに宮の姫君をもてあつ
かふを云なり　弄少將ゆゑにかくさま／＼わつら
はしき事の浮舟君の身のうへにいてきぬるとなり
箋浮舟の母の心此少將ゆゑ浮舟の事もさま／＼の
事ありと思ひていよ／＼少將をにくゝ思ふなり
又なく思ふかたの事のかゝれは　箋浮舟のためにあ
しき人そと少將をつらく思ふなり
かの宮の御まへにて人けなく見えしに　祕匂の御前
にて此少將をみしに人けなかりしことなりさて浮
舟のむこにとるへきの心は思ひさませるとなり
箋弄　花二條院にて少將の直衣きて太刀はきたる
すかたを云し事なり
こゝにてはいかゝ見ゆると　箋少將のありさまを北
方の思ふ心なり
いまやう色のうちめなと　箋うす紅梅の色こきなり
少將の衣裳なり
いつくかはおとるいときよけなめるはと　箋こゝに
てはよく見ゆるなりいつくかはおとるとはあしき
所も見えぬよしなるへし

むすめまたいと（いとイナシ）かたなりに　箋常陸かむすめ此北方
のはら歟
宮のうへのならひておはせし　箋匂と中君との事な
り
いと見しやうにゝほひなく人わろけにも見えぬを
弄匂宮にて少將を見しにはにすとなり　祕こゝに
ても人物もあるやうなり
かの宮なりしはこと少將なりけりと　かく思ふ折節
匂宮の事をいひ出るなり　祕こゝにても別の少將
かと思ふをりふしなり　箋
兵部卿宮のはきのなほことにおもしろく　祕匂の御
所にて見し時の事をいふなり
事たにをしきと宮のうちすんし給へし　河うつろは
んこそたにをしき秋萩にをれるはかりもをける露
かな　祕引歌同弄引歌　箋引歌同萩のえたもをる
へき程露のおきるたるをつらきと云歌なり
心はせのほとを思へは　箋浮舟を遊變したる事をい
へり
いでぎえはいとこよなかりけるに　祕匂の御前にて
の事なり箋　私出きえははれうてのしたる心なり

いかゝいふとてこゝろみに　母の方より歌をよみて
やれり　箋
（常陸介北方）しめゆひし小萩かうへもまよはぬにいかなる露にう
つるした葉そ　花故宮の姫君をはしめは少將に約束
したるを常陸介の女に引ちかへられたる計をいか
なる露にうつる下葉そと母の中將の君をよめるな
り　祕浮舟にこそさして約束せし物をとなりしめゆ
ふとは領したるなり姝（妹イ）に思ひうつるを云り　弄箋
いかなる露にとは妹にうつるをいへり
いとほしくおほえて　少將の心なり
（返少將）宮城野の小萩かもとゝしらませは露もこゝろをわか
すそあらまし　河みやきのゝ小萩かもとは宮の御子
としらましかはとそへていへるなり　私不及引歌
古「宮城野のもとあらのこはき露おもみ風をまつ
こと君をこそまて　弄八宮の御子と云心也　祕浮
舟を故宮の御子としりたらは思ひうつるましき物
をとなり　箋此宮きのゝとは八宮の事をさしてい
へり桐壺巻に宮きのゝ露ふきむすふ風の音にとあ
るは内裏の事をいふ宮城野義也小萩とよみかけた
るに宮城野をよく取合せたり

こ宮の御子ときゝたるなめりと　河御子なり　秘母の心なりさては宮の御子といふ事をきゝたるよとなり

いとゝいかて人とひとしく　箋浮舟を八宮の御子と人の知から彌々よき幸をと母の思ひあつかふと也

あいなう大將殿の御さまかたちそ　私薫の事　弄あちきなうなといふ心なるへし愛もなきにはかはるへし

おなしうめてたしと　匂の事を思ふなり

あなつりており入給へりけるを　箋浮舟の所へ匂宮のちかつき給へる事なりそれ故に母の心に思ひはなれて匂宮をはつらく思ひ申なり

この君はさすかにたつねおほす心はへありなから

弄薫の事　箋

つれなしかほなるしもこそいたけれ　弄いたましき心なり　箋心にふかくしみたるやうの心なり心はふかくたつねんと思ふ心の有なからうちつけならす心ふかくみゆるさまを母の思ふ心なり

わかき人はましてかくや　浮舟も薫を思ひ出やし給ふらんとよそにてはいひたる詞なり又大かたわかき人々の事歟わかき人はつかふ人なり　私わかき人は浮舟なり　箋同之

わか物にせんとかくにくき人を思ひけんこそ　秘此少將の事なりこれをわか物にせんと思ひしも口惜き事となり　弄よその人のおしはかり歟此段不審なり薫のつれなしかほをにくきやうに思ふを浮舟は心にかけてや思ひ出ぬらんに見くるしき事と母のおしはかりてとかく思ふなりこれも浮舟を思ひあつかふあまりなり　此段愚按不可然にくき人少將の義可然以上弄　私此段弄花の義あやまれり秘箋の義尤よし

なかめのみせられて　とやかくと物を思ひわつらふ心なり

よからんことを思ひつゝくるにいとかたし　秘薫にと思ふ心は成就しかたしとなり　箋浮舟をいかやうにもよくもかなと思ふにかたき事となり

やんことなき御身のほと御もてなし　秘薫は當代の二宮をえ給へる人なれはなり　弄薫の女二宮をもち給へる事　常陸北方の心　箋浮舟の母の心浮舟のかたちを随分と思へとも人は又品位にもてなし

による物なれは女二宮の御めうつしには薫の思ひうつるましきと思ふなり其よしを末へいひのふるなり

世の人のありさまを見きくに　私公界をいへり人のしな／＼あるをいふなり

わか子ともを見るに此君ににるへきやはある　箋此北方の腹の子とも丶常陸の子には浮舟に似たるもなしとなり

少將をこの家のうちに又なき物に思へとも　常陸か家にては聟の少將に似たる人もなしと思へとも匂宮の御前にては口をしかりしを思ひ出るなり

たうたいの御かしつきむすめ　箋薫の事を浮舟の母のさかく心にかゝりて思ひあつかふなり　當代の女二宮をえ給つる事なり

たひのやどりはつれ／＼　祕三條の家なり　箋浮舟のゐたる三條わたりの家の體なり

はれ／＼しからてあかしくらすに　弄心のはれぬ事也

宮のうへの御ありさま　箋中君の事を浮舟の思ひ出るなり

あやにくたち給へりし人の　祕匂宮の御事なり　箋匂宮なり

は丶君たつやといとあはれなる文をかきて　河屋戸宿如此但總不得其心猶可了見云々　花河海云屋戸宿なり但不得其心猶可了見云々　今按宿の義ならは三條わたりの母の私のやとりをいふへしそこに浮舟の君のゐ給つれは母君のかたより此宿へあはれなる文をおこせたると心得へし　弄説々あり宿といふ義もあり難用之了見にはやとうたかひたるやうに心うへし母君たちたるやうになとなるへし　祕やと屋戸と云説ありと云々難用之也イ了簡にはやとうたかひたる様に心得べし母君たつやとは此母君萬を卑下してあれと今は本の母に成ておやたちて文を書と也　箋　私此義不審の事なり箋云もし文字の書おとしなとある歟但諸本並諸抄かくのことし右の了見の分にみておくへしとなり弄秘等の義を用へし

おろかならず思ひあつかひ結ぶめるに　祕浮舟の心なりとにもかくにも不運なりかくねんころにし給へともとなり

いかにつれ〳〵に見ならはぬ心ち　弄浮舟の母の文の詞　祕箋

つれ〳〵はなにか　弄浮舟の返事なり　箋

浮舟 ひたふるにうれしからまし世中にあらぬところとおもはましかは　弄浮舟の歌なり　河拾「世間にあらぬ所もえてしかなとしふりにたるかたちかくさん

花こひわひてへしとそ思ふ世中にあらぬ所やいつくなるらん　祕こゝをは一向に浮世の外と思ひたきとなり　箋歌義あらはなり

みるまゝにほろ〳〵とうちなきて　浮舟の母のさまなり

かうまごはしてふるゝやうに　河迷放埓

返浮舟母 うき世にはあらぬ所をもとめても君かさかりを見るよしもかな　花母の中將の君のよめるなり　祕いかなる所をもとめても浮舟をよくもてなすやうもあらはわか身はいかにもとよめりあはれなる歌なり弄箋　弄母の返歌なり　私浮舟の歌は此世の外をもとめんと世のいとはしきをいへり母の返歌はうき世の外とはよめり面白しうき世なれはこそいとはしき心もあれうきにてあらぬ所ならはうき事はあらしされはよからぬ所をもとめても君かさかりを見はやといふ義歟但如何

なほ〳〵しき事ともをいひかはして　祕思ふ所を有のまゝによめるをなほ〳〵しとはいへり歌をよむへき用意にかけるなりかやうにかける所あまたあり歌をはいかにも沈吟すへしとなり　箋　弄母の心に思ふ事を有のまゝによめるをなほ〳〵しといへり　是も歌のさま人にをしへんとの紫式部か心なり

ならひにし事なれはねさめ〳〵に物忘せす　箋ならひにしとは薫の物思ひになれてね覺かちなるとなり　祕物忘れせすは大君の事なり

うちのみたうつくりはてつときゝ給ふに　薫の宇治にたて給へる御堂なり

こほちししん殿こたみはいとはれ〳〵しう　箋寢殿を別所へうつすなり　私もとの寢殿をこほちて寺になしもとのしん殿の跡に又寢殿をあたらしくつくるへしと前に有し歟

昔いとことそきて　箋八宮の住ゐ給ひし時そさうなりし事なり

さまかへてけるも　故宮のおはせししん殿を作りあ
らためたる事なり　箋此しん殿を作りなほしたる
をいふなりむかしのおもかけのなく成たるを名殘
をしく薫のおほすとなり
もとありし御しつらひはいとたふとけにて　箋古宮
時の御すまゐのさまをいふなり　おもてむきはひ
しりたちてしなし給ひしとなり
かたつかたを女しく　箋姫君たちのすみ給ひし故な
り
あしろひやうふなとのあら〳〵しき　かやうの物を
は御堂の具になさるゝなり
山さとめきたるかくともを　是は此しん殿の具をは
別にし給ふなるへし
いたうもことそかす　弄八宮のおはせし時（常イ）は事そき
たるを今はさのみことそかすといへり都のすまゐ
よりは山里めきたる成へし　祕故宮の御時省略せ
られし事とも此度はくはへられたるなり
やり水のほとりなる岩にゐ給ひて　箋こゝにて懷舊
の心をもよほしてとみにもたられぬなり薫の心ふ
かきさまなり

薫
たえはてぬ清水になとかなき人の面影をたにとゝめ
さりけん　祕故宮の事なり　箋ゐ手の左大臣諸兄公薨
して後も玉水に影をうつさんなとゝいへるにつゐ
に見えすなといふ事ありと云々
いとかなしと　辨尼薫の御さまを思ふ心なり
かの人はさいつ頃宮にときゝしを　箋薫の詞なり浮
舟の匂宮に有し事なり　祕薫の詞なり浮舟の事を
傳へ給へとなり
一日かのはゝの文侍りき　祕辨か詞也
いみたも（かイ）ふとてこゝかしこ　箋浮舟の事なり方角の
いみをたかふるとてとなり
あやしき小家に　花三條わたりの家の事也
ちかきほとならましかは　箋宇治が京へちかくは浮
舟を宇治におきたしとなり
人々のかくおそろしくすゝめる道に　祕薫の詞なり
まろこそふりかたく　河難舊
さらはその心やすからん所にせうそこし給へ　祕薫
の詞なり　浮舟のゐる三條の事なり
みつからやはかしこに出給はぬとの給へは　辨は出
京せさる歟（せましき歟となり）となり　箋

おほせことをつたへ侍らん事は　祕辨か詞
宮にたにえまゐらぬ　箋中君の二條院なり
なとてかともかくも　祕薫の詞也
あたごのひじりたに時にしたかひては出すやはあり
ける　河愛宕聖者空也上人事歟彼山縁起曰空也上人
於清水寺發誓願曰念佛行何所にしてか慈尊出生世イに
至まて相續の靈地たるべきと祈念せられけるに觀
音告給はく愛宕山月輪寺は是補院落山同淨土也
魔界斷跡聖衆影向之所也於彼所此行を可始之由有
夢想仍彼山にして多年練行其後於洛中念佛行を弘
通し諸人を度せらると云々取意略抄に有　花補下
の紀僧正眞濟あたこたかをの峯に入て十二年山を
出す其後嵯峨帝その苦行を聞給て內供奉十禪師に
補せらるゝ事をいへるにや　祕河海には空也上人
の事を引花鳥には補下紀僧正の事をひけりいつれ
にても有へし心は利生方便のためには山こもりの
人もいつる事あるとなり　弄見河海又故事までも
なし山にこもりたる聖も利生のためにはいつる事
ありと心うへし　箋河花兩抄說いつれもよし箋又
祕弄何もよし云々

人わたす事も侍らぬに　祕辨か心なり詞なり　衆生無邊誓
願度四弘誓願ノ隨一也　或本 四弘誓願　衆生無邊誓願
度　煩惱無邊誓願斷　法心行無盡誓願學　無上菩
提誓願證　花人わたすことたになきをなにしかも
なからの橋と身のふりぬらん
箋衆生の濟度の事なり　私人わたすは辨か詞人を
かよはす事もなきに申つかはさんもいかゝとなり
又ちかひをやふりて人のねかひをみて給はんとい
ふにつきて濟度の事にとりなしていふ詞なり
なほよきをりなゝるイるをとれいならす　箋浮舟の常陸
か家にあらはしにくき事なるをこれはよき所そと
なり　祕れいならすとは薫はかく物をしゐての給
ふ事なき人となり
ゆめをこかましう　河努
あふな〳〵あは〳〵しからぬ　祕河奥もなくなり
箋奥なくあは〳〵しからぬ奥のあるあは〳〵しか
らぬ心ふかき人と薫をいふなり
ちかき程にこそ御ふみなとを　弄薫の三條宮よりあ
つまやの宿に近けれはいへり箋
ふりはへさかしらめきて心しらひのやうに　箋辨尼

かとりもちたるやうなるへし薫の御文を給はれと
なり　河ふりはへはうちはへなり　心しらひは心
知なり　燎熱コ・ロシラウ漢語抄
いかたうめにやと　或本私くらへとてかんなきやう
なる女の事云々　伊賀部女中媒事なり狐にそへていへる也　又云伊賀
部女譯云女姪なり部女は狐なり齋宮寮部女是狐事也一說伊賀伊勢國には
白狐をたうめの御前といふ云々　新猿樂記云野干
坂伊賀專也祭專今俗呼考女爲男祭イ――漢語抄　花靑表紙
云未勘云々土佐日記云おきなひとりたうめひとり
ひとりある中にあはちのたうめといへる人のよめ
る又あはち島のおほいことも有うつほ藤原君なか
とこしたうめにこのよりましのまちとほなるよし
はこよひのほたしくひにいかゝ見えつるとしたう
めこよひのほたしひいとよかりそ又とこなつかと
いふ物語にもあつまたうめとて人のいのりしたる
事あり　今按いかさまにも見こなるへし國々にあ
る事にや　弄說々ありいつれにもきつねをたうめ
といへは狐の人をたふらかすことく中たちをして
人をはかる事にたとへたり伊賀伊勢のことわさに
いふと云々又平野社の末社にたうめの社と申は狐
なり云々　祕伊賀たう女なり國々にあるなりたう
めは狐の名と云々諸抄に見えたりこゝの心に媒を
云なり媒の物をいふは狐の人をはかすかことし
箋祕の義に同したゝ老女をたうめといへりこゝは
中媒の事にいへりとみゆさやうの類に辨尼を人の
いひ思はんとなり
ふみはやすかるへきを　祕薫の詞なり
人の物いひうたてある　箋薫の性の奇特なり此卷發
端につくは山をわけ見まほしき心は有なからさか
けるも此心なりかんのぬしは常陸守をいへり
うちわらひていとおしと思ふ　祕辨尼なり
宮に御らんせさせ給ふ　花宮は薫の室をいふなり
花女二宮なり薫の室家なり　箋
かひなからすおはしぬへけれと　祕かひなきやうに
はおはせねともいまたなれ〱しくはし給はさる
となり
うちかしこまより　箋薫の打とけ申さぬ樣なり　女二
宮の御さまかたちよくおはしませとも薫のかたよ
り懸想にし給へは物のはへなきやうなるへし
うちよりたゝのおやめきて入道宮にもきこえ給へは

花うちは内裏なり薫は内の御むこなれはしうとかたをおやめくといふなり　秘入道宮は女三なり箋私内裏よりたゝ人の思ひあつかふやうに女二宮の事をおほしあつかひて薫の母女三宮へも何かと仰らるゝとなり

かしつき給みやつかへにそへて　秘女二宮を方々よりおもくし給ふへきよしなれはわつらはしき心を宮つかへとはいへり弄

わたくしの心そひたるも　弄浮舟の事の心にかゝるなり

の給しまたつとめて　秘あさてはかりとの給し日の早々より宇治へつかはし給へり　箋弄同之

かほしらぬうしかひ　河牛飼　應神天皇の御時はしまる　誰ともしらすましきためなり

さうの物ともゐなかひたるめしいてゝつけよと　秘御庄なり弄　秘つけよとは付よとなり　弄警固せよとなり　箋宇治のあたりちかき薫の御庄の物ともをめしいてゝつけよとなり

かならすいつへく　秘かならす辨に出京せよとなり

ふることゝも思ひ出られて　道すからの辨尼か心なり

人めもみえぬ所なれは　三條の小家のさまなり

しるへのをのこして　辨尼かくしたる人なるへし

はつせのともにありしわか人　箋前に有し事宇治に浮舟の中やとりせし時薫のゝそき給ひし時の事なり

なかめくらしあかすに　箋浮舟の心也

おやときこえける人の御あたりの人と　箋辨尼を八宮の御あたりの人と思ふ故にむつましきなり

あはれと人しれすみたてまつりし後よりは　秘辨か詞なり

かの宮にたに　秘匂宮へなり

君もめのともめてたしと見おき　箋浮舟も乳母も薫を匂宮にてみ奉りてめてたしと思ふとなり

よひうち過るほとにうちより人まいれるとて　秘宇治よりといはせ給へり箋

さにやあらんと　弄薫にやとおもひしなり　箋辨の心なり

ちかきみさうのあつかりのなのり　薫の御庄のあつかりの名をの給ひて辨にあはんとの給ふなり

こくちにゐさり出たり　祕辨なり箋
雨すこしうちそゝくに　箋是も物のあしかるへき始なり
かうなりけりとたれも〳〵　祕薫なりとたれもしりたることなり
また思ひあへぬほとなれは　箋内の人々の心なり
心やすき所にて月頃の思ひあまる事も　祕月頃の思のほとをもいはんとなり　箋所のさま心やすしとなり
君はくるしけに思ひて　祕君とは浮舟なり箋
かのとのにこそなんと　花かの殿には二條院の中君の事なり　祕母の御方にてなり弄箋
うゐ〳〵しくなとてかさはあらん　祕辨か詞也　弄箋
物ふかうおはする君なれは　薫の御さまを辨かいひきかするなり
夜行うちして　河秦始皇本紀註曰西京賦曰徼（微イ）道外周千廬（蒔イ）内（内イ）傳薩綜曰士傳宮外白爲廬舍晝（晝イ）則巡行非常（當イ）夜行則驚備不虞也
やかのたつみのくつれ　河崩　河家の字をやかとよむなり中納言家持なと云へり源順夜行歌在

夕顔巻　五おきつとりかもといふ舟のかへりにはやかのさきもりはやくつけこそ（せ歟）　伊勢物語門（ひイナシ）よりもえいらてわらはへのふみあけたるついひちのくつれよりかよひけり古今にはかきのくつれとあり
祕やかは家なり箋　弄家のたつみなり　私紹巴往事見此巻次語云喜撰か都のたつみしかそすむこ宇治の事をよめりこゝにやかのたつみといへる自然におもしろしと申き
この人の御車いるへくは引入れて　箋門内へ入へきならは引入よとのゐ人のいふなり
さのゝわたりに家もあらなくに　河萬くるしくもふりくる雨か三輪かさきさのゝわたりにいゑもあらなくに　祕弄箋　引歌同　五文字わりなくも云々
箋祕聞に如此わりなくもふりくるといはん爲なり
さとびたるすのこの　花さとひたるはさとなれたるなりこゝにはふるひたる心にいへるにや　弄さとけなると云義ありすのこのふむになるをいふと云云難用　只里ひたるといふ心なるへし上らうしからぬなり　祕説々あれともたゝ山里ひたるかりなるすのこなるへし箋

薫
さしさむるむくらやしけきあつまやのあまり程ふる
雨そゝきかな　祕久しくまたせ奉るはもしへたつ
る人もある歟となりわれたちぬれぬといへる催馬
樂の心もあるなり　弄薫を久しくまたせ奉るは浮
舟にへたてたるにやとなり歌のおもてなり　箋た
たすみて待かねたる心に云へり　河四阿(アツマヤ)令新撰樂記阿
屋顯和名四屋同上東屋催馬樂　庶令曰宮殿皆四阿辨色
立成云四阿阿都末夜末夜雨下(アツマヤマヤノアマリ)　同令曰庶人門舍不得過
一門　色立成云雨下廡如木
うちはらひ給へるおひ風　箋薫の袖の追風なり
あつまのさと人も　心なくあらく〳〵しき人といふ心
歟こゝにては常陸介かあたりなれはいへるなり
おましひきつくろひていれたてまつる　薫を内へい
れ申なり
これかれをしいてたり　箋うき舟をおし出るなり心
やすくもたいめんし給はぬをとは浮舟の薫をはち
給へるなり
とゝいふ物さして　戸の事なり本式の殿の内なとに
戸はあるへからすへたてはみな障子なりゐなかひ
たる體なり
ひたのたくみもうらめしきへたてかな　河万「とに
かくに物は思はすひたゝくみうつすみなはのたゝ
一すちに人丸　花飛驒の工は番匠の總名なり　箋
此義尤よし　弄やり戸のへたてをいへり　祕箋
かの人かたのねかひもの給はて　祕大君のかたみに
なとゝはの給ふましきなりはしめてあひ給へはな
り　人の推したるおもむきをいへる事なれはの給
ふへきとかける尤妙也　弄へきとかける詞妙なり
かたらひ給ふを人の推したる詞なりこゝにて人か
たの事ともの給はしとなり弄　私又人かたの事を
の給はゝ浮舟への心さしうすき心になるへけれは
なり
物のはさまより見しより　はつせのかへりに宇治に
て薫の浮舟を見し時の事なり
人のさまいとらうたけに　浮舟のさまなり薫の心な
り
おほち近き所に　大路近きなり小家のさまなり
おほとれたる聲して　河溺心なり　花ひさいとものの
行かふ聲なり
なのりをしてうちむれて　箋物うる人なり

物いたゝきたるものゝおにのやうなるそかし　弄おにのやうなるを鬼々しうおそろしきなり　弄薫のかねてかゝる姿の者をみ給ひし事有しなるへし
祕道のかたはらなとにて見給ふ事の有し成へし

がゝるよもきのまろねにならひ給はぬ心ちも　河車都曹徳詩に轉蓬逐車輪とあり　蓬葉の車輪のまろきかことくに行をみて車を作り始るなり仍蓬とは車の心をいふかまろねはしちのまろねの心歟「此事祕說あり或本裏書云私云只草の庵なとの旅ね丸寢なり　花諸抄の說々みな蓬を車の心にいへりしからは車の中にねたるといふへきにや然とも薫大將は東屋にて車よりおりて女君とかたらひたるうへ車はさらに引入たるよし見えたれは車なからまろねしたりとは見え侍らす愚按に了見し侍るに上の詞に旅のやとりはいとつれ〳〵にて庭の草もいふせき心ちするにとありしからは蓬はたゝよもきふのやどの心にてこそあらめあれたる所に一宿したるを蓬のまろねといはんさらにたかひ侍るましきにや祕說々あり只蓬生の宿にねたる義を用へし　弄轉蓬を車にたとへたる義あり只蓬の宿にねたる義を用へし　私花鳥の義よし只蓬生のまろねなり

を（おイ）の〳〵入てふしなとするなり　祕夜行せし人なとも明ぬれは入てやすむと也箋　弄夜行せし人なとあけぬれはやすみふしたるなるへし大路より内へ入にては有へからす

かきいたきてのせ給ひつ　箋浮舟を車にのするなり

九月にもありけるを　祕嫁娶には忌の月なり　箋正五九月を忌と云々是も悪かるへき故なり

なか月はあすこそせちぶときゝしかと　河節分九月節なり　諸事忌之云々

けふは十三日なりけり　箋是も十三日と書たる下のふまへ有へしと云々

宮のうへきこしめさん事もあるに　弄中君の聞給うて辨の尼の近き程にきてまいらぬ事はいかゝ思ひ給はんとなり

またきこの事をきかせたてまつらんも　祕中君にははやく申きかすましきとなり

それはのにもつみさり申給はん　中君の辨の無音をとかめ給はゝ後になりともそのことわりを申わけ給へとなり

かしこもしえへなくては（かくたにイ）　箋宇治の按内者なくては
となり
人ひとりや侍るへきと　弄誰にても一人浮舟のとも
にまいるへしと薫の給なり
この君にそひたる侍従とのりぬ　弄辨の尼となり箋
めのとあま君のともなりしわらは　浮舟のめのとや
又尼君のくしたる童なり
うちへおはするなりけり　箋東屋のやとりより宇治
へおはするなり
うしなとひきかふへき　箋遠路は牛をかけかふる事
あるなり
ほうさうじのわたり　河法性寺　花法性寺は貞信公
建立し給へり尊意座主は貞信公の師壇たる故に法
性坊の名をとりて法性寺といへり
わかき人はいとほのかに見たてまつりて　弄ともな
りし女なり　秘侍従なり
君そいとあさましきと　箋浮舟なり
石たかきわたりはくるしき物をとて　箋車の石にあ
たりてはあしきなるへし
うすものゝほそなかを車の中にひきへたてたれは

花車中に引物をして貴賤同車する事あるなり　箋
男女なとのる時も中に物を引へたつるなり木丁の
かたひらのやうなる物なるへしこれはとりあへぬ
事にて細長を引へたてたるなり　秘昔は男女同車
の時かくするなり浮舟と薫と同車なり車の内に釣
あるは此用なり　弄浮舟と薫とは同車歟問云男女
同車の時定れる作法歟又折ふしほそなかをへたて
にし給へる歟答男女同車の時或物見なとの時前の
簾をあくるによりて車の中に几帳のかたひらをか
くるなり時としてはほそなかなともかくへきにや
以上弄
尼きみいとはしたなくおほゆるに　箋車の中へ朝日
のさし入たるかおもはゆきなり
こひめ君の御ともにこそ　辨尼の心なり大君の事を
思ひいてゝひそみなくなり
侍従はいとにくゝ物のはしめにかたちことにてのり
そひたるをたに　箋侍従は辨かなくをことの始にい
まく〳〵しく思ふなり辨の尼すかたにてのりたるさ
へあるにうちひそみたるをいよ〳〵いまはしく思
ふなり　弄此時さま〳〵よろしからぬさとしめき

たる事もありき
涙もろにある物そとおろそかに思ふなりけり　箋侍従か心を察してかけり只老者は涙かちなるとのみ思ひて大君の事を思ふといふ事をはしらぬ（しらてイ）なり　弄辨か心よからぬ事をは忘れて老のならひとのみおろかに思ひしなり
君も見る人はにくからねと　祕薫なり見る人とは浮舟なり弄
きしかたの戀しさ　弄あね君の事
ふかく入まゝに霧たちわたる心ちし給ふ　箋宇治の里ちかくなり行まゝに大君の事を覺しいてゝ心の霧のふかくなるなり
かさなりなからなかやかに出たりけるか　なほしに紅の御そのかさなりて車より下へさかるなり御その紅なるに御なほしの花のおとろ／＼しう（夏イ）うつりたるを　弄夏のなほしの花のうつるなり服の色にかよひたるなり　又云此袖はたゝにて可然歟九月にもありけるといひ楚王の臺のうへのと（にてイ）いへり　箋此義を談し給へり此浮舟の事は悉前表をあしく書い（ひイ）なせり

おとしかけたかき所にて　河道あしき所を云云々或云自高至低車の輪の落所なり　花車やる道のたかき所よりひきゝ所にやりおとすをいふ山道なとにある事なり　箋おとしかけは高よりひきゝへおとしかくるなりたかき所とは又ひきゝ所より上へのほするをいふなるへしその時車の前のかたあかりて袖の車より外へさかりたるを薫の見つけ給へると云なり
薫　かたみそと見るにつけては朝露の所せきまてぬるゝ袖かな　花故姫君のかたみと思ひ給ふ心なり　祕大君のかたみとなり箋
心にもあらすひとりこち給ふを　祕今はいひ出し給はすともの事となり　弄此時こといみすへき事なるを心ならすといへり
いとゝしほるはかり　尼君の薫も大君を思ひ出給へるよといよ／＼なくさまなり
わかき人あやしう見くるしきよかな　祕侍従なり
はなすゝりをきゝ給ひて　辨の鼻すゝるを聞て薫もうちなくうき舟のいかゝおもふらんと思ひて詞をかけ給ふなり
あまたのとし頃このみちを　祕薫浮舟にいひきかせ

給ふなり　物のあはれなるさまをことさまに浮舟にいひなしたまふなり
おかしきほとにさしかくして　祕扇なり弄箋
いとゝよく思ひ出らるれと　祕大君の似たるなり
おほとき過たるそ　箋餘り大やう過たるとかけり
いといたうこめいたる物から　大君の心なり　大やうなるなりあね君の事なり　箋大君の事なり薫の心なり　箋大君は大やうなれとも實なる所あり浮舟は大やうにてしかも實のなきなり
むなしき空にも見ちぬへかめり　河拾　わか戀はむなしき空に見ちぬらし思ひやれとも行かたのなき
祕引歌同箋
あはれなき玉やとまりて見給ならん　祕亡魂　箋大君を思ふ薫の心なり
たれによりてかくすゝろに　祕大君ゆへとなり
かたみそと見るにつけては朝露の　黄ム云々此歌は諸抄にさのみ義なし箋なと大君のかみとはかりあり愚按薫の歌にてはさせる風情なきに似たり露はあした夕におく物なれとも夕露は猶おきあまる物なりしかれはあさ露なれとも大君の名殘ゆゑ如此フカキトよめる歟見るにつけてはといふは文字に心を付て見るへき歟
おりてはすこし心しらひて立さり給へり　祕下車なり浮舟すこしうちやすみ給へきのこゝろしらひをし給ふなり　弄箋　私祕弄箋等の義一同に可然なり又詞のつゝき大君のなき玉やとまりて見給ふらんと思ひ出るゆゑにすこしはたちさり給ふ心もある歟如何
女ははゝ君の思ひ給はんこと　浮舟の心なりされと薫のさまになひきてくるまよりおるゝとなり
あま君はことさらにおりてらうにそよする　箋尼君はおなし所にておりすして廊によするはおそれたる心なり　祕禮にてはなけれとも尼すかたをはゝかりたるなり
わさ（なイ）と思ふへきすまひにもあらぬをよういこそあまりけれ　弄尼公のこと方におりて（ホイ）廊に車よせなとするを此所は始終女君なとすへをくへき所にもあらぬを有へき義のやうに辨か心つかひしたるをいへり　祕薫の心なりこゝはかりなる所なれはくるしからさる物をとなり　始終浮舟を置へき所と思

へるかとなり
女の御たいは尼君のかたよりまいる　弄忍ひ給ふゆゑなり
みちはしけかりつれと　花道のあひたは草木のかけをわけし心をいふにや　祕此ほとの小家の目うつしなれはなり私花鳥の義然へし
このありさまはいとはれ〳〵し　宇治にあたらしくつくられたる寝殿なり　三條の小家の目うつしはこよなかるへし
うきてあやしうおほゆ　祕浮舟の心なり箋
殿は京に御ふみかき給ふ　薫の母女三宮室家女二宮なとへの文也佛のかさり又物忌なとの事こゝに逗留有へき事ともをの給ひつかはすさまなり
うちとけたる御有さますこしおかしくて　浮舟のすこし打とけたる體なり入おはしたるは薫なり
よくと思ひてしかさねたれと　箋浮舟の母の隨分ときぬともなとをしかさねたれともゐ中めきたる所のあるとなり
昔のいとなへはみたる御すかたの　祕大君なり弄
かみのすそのおかしけさなとは　箋浮舟の髪の事なり大君はさほとになかりし歟
宮の御くしのいみしうめてたきにも　弄女二宮に思ひくらへ給ふなり　祕女二宮なり箋
かつはこの人をいかにもてなして　浮舟の事を薫のおほすさまなり
かの宮にむかへすへ（ゑイ）んも　祕女三宮の御方になりかれこれあるつらにて　薫に心かくる女房なとは御母女三宮へ參りつとふよし前にありしなり其外女三宮にさふらふ女房のつらにはいかゝとなり
こ宮の御事もの給ひいてゝ　箋薫の八宮の事をもいひきかせ給ふなり
たゝいとつゝましけにて　祕此つゝましけなるさまはをしへても見るへしとなり
心もとなきは　箋斟酌ふかきなりさし過たらぬはましたると覺すなり
ゐ中ひたるされ心もてつけてしな〳〵しからすはやりか（ほイ）ならましかは　箋ゐ中ひたる物から風流すき物なれたらはしなをしかたかるへしとなり
かたしろふようならまし　此浮舟さし過たらは大君の形代にはなりかたかるへしとなり　ふようは

河不安　不用
こゝにありけるきんさうのこと　箋琴(キン)　箏(サウノコト)　もとよりの宇治の物なるへし
かゝることはたましてえせしと　浮舟のかやうの事はしらしとなり
宮うせ給ひて後　八宮薨し給て後はかやうの事手ふれ給はぬとなり
月さしいてぬ　十三日の月なり
宮の御きんのねのおとろ〳〵しうはあらて　八宮琴の上手ときこゆこと〳〵しくはあらて位のありける成へし
むかしたれも〳〵おはせし世にこゝにおひ出給へらましかは　祕浮舟の事歟薫のゝ(みイ)給ふなり八宮も大君もまします時ならはとなり
よその人たにあはれにこひしうこそ　薫の身なとにさへ八宮をしたはしく思ふそとなり
なとてさる所にはとしころへ給ひしそと　浮舟の東國に久しく有し事を薫のとひ(思イ)給なり
いとはつかしくて　浮舟を八宮のかすまへ給はさりし故なればなり　うき舟の心也

しろきあふきをまさくりつゝ　箋浮舟のもてまきらはすさまなり
くまなうしろうて　箋一段と白き心なり
ひたひかみのひま　髪のこほれたる體なり
いとよう思ひいてられて　箋大君の事を思ひいつるなり浮舟の似たるとなり
かやうの事をつきなからす　琴なとの事をもならはさはやと薫の心なり
これはすこしほのめい給ひたるなり　箋和琴をはひくかとなり　私あつまことゝいふにつきて薫の思ひより給へるなり
あはれわかつまといふことはさりともてならし給ひけん　弄あつまの琴をあつまの事によせてなり吾妻とかくによつてかくの給ふなり　祕和琴なり
あつまにておひたち給へはなり箋　河あはれわかつまあつまやのまやのあまりのあまそゝきわれたちぬれぬそのとひらかせ(たイ)かすかひもとさしもあらはこそそのとをわれさゝめをしひらいてきませわれや人つま　備馬樂東屋律
そのやまとことはたにつきなく　花やまとことのは

は和琴の事なりそれさへつきなくならひたれは催馬樂なとにあはせん事は思ひよらぬ心なり　弄大和詞たにといへり歌の事なりまして琴なとはおほつかなしとなりあつまことにやまと綠あり　祕和琴なれはなりよき返答なり大和詞は歌の事なり　箋浮舟の返答なり歌の事さへしらぬにまして琴は思ひよらぬよしなりよき返答なり

こゝにおきても思ふまゝにもこさらんことを　祕薫の心なり　浮舟の體をあしからす薫のおほすなり

こゝへかよはん事の思ふやうなるましきをおほすは心のとまる成へしと草子地なり

楚王の臺のうへのよるのきんのこゑ　河班女閨中秋扇色楚王臺上夜琴聲　順猶秘說あり　弄詩句なり　祕引同詩　私三本には楚王のたいと假名にてかけり　箋には楚王のうてなのうへとよまれしと聞書にあり諸抄假名にてたいとあり

かの弓をのみひく　祕あつまなれはなり　箋常陸かあたりなり　弄常陸にてあら〳〵しくならひたる女房ともなれは侍の心のよろしからぬをは聞しらてめてたくのみ思ふとなり

さるは扇の色も心をきつへきねやのいにしへをはしらねは　花上の詞に白き扇を手まさくりにしたるよしも見えたり班女か秋の扇はのちにすてられたる事を侍從はおもひよると楚王の琴の聲をのみめてたるとなり　弄班女か故事いみ侍へき事なり　祕白き扇なとより思ひよりてうたひ給ふなり　箋此詩の心あしきを侍從も浮舟も聞しらぬを心をられたるといふなり

ことしもこそあれあやしくも　私河海引歌あり不載之口すさひ給ふへき事こそおほきにあやしく不吉なる詩を誦したると薫はおほしあたるなり　是皆あしき前表そと聞箋に侍し　祕薫の此句をうたひ出して後悔あるなり浮舟前表さま〳〵あしき事あるなりその一なり

しきたるかみにふつゝかにかきたる物　くた物の下に敷たる紙に辨尼か歌をかきたるなり老人なれは筆ふとに書きたるなるへし

くた物いそきにそ見えける　されてかけり

辨やとり木は色かはりぬる秋なれとむかしおほえてすめる月かな　河以前の巻にやとりきとおもひ出す

は木のもとのとありしことを思ひいてゝよめる
祕大君にてはなけれともとなり薫のとまり給へはむかしのこゝろのいてきぬるとなり　住人はかはれとも大君の事を思ひいつるを昔おほえてといへり　私雨義の内猶祕の義然へき歟
はつかしくもあはれにも　大君の事を思ふをあはれにやとり木は色かはると浮舟の事をいへるは薫の心にはつかしきなるへし

返薫 さとの名もむかしなからに見し人のおもかはりせるねやの月かげ　花是もさきの巻にうらめしと云里の名と宇治をいひしに思ひよせたるなり　祕宇治なり昔の人はあらはなりとなり　箋浮舟とみる月を面かはりといへり
かへり事とはなくてのたまふ侍従なんつたへけるとそ　薫の何となくのたまふを侍従か尼君にいひつたへたると也　祕とそとは例の作者のかけるなり

岷江入楚第五十二浮舟

廿四歳

花鳥に廿三（ニイ）歳の春の事なり云々　祕箋弄には廿六歳の正月より三月の末までの事なり云々

兵部卿宮不忌（忘歟）宮姫君給事

大將殿與中君不違昔樣事

私按之此次にむ月のついたち比過てとあるは薫廿六歳の正月也此端の詞は廿五歳の事ともいふへき歟但しこれは詞にいひ出したるはかりにて分明に時節をさゝす大かたにみる義可然かやうの處あまたありなそらへて心うへし

廿五歳　大將

花鳥には廿三歳の春の事なり云々　私是は廿六歳の正月よりの事なり可用之

四（正イ）月宇治宮（君イ）獻付小松鬚籠卯槌等於二條君事匂宮見付其文問給事

兵部卿宮恠思大將宇治通召大內記道定問給事

大內記語申聞及分事　大內記爲大將家司聟故知之也

兵部卿宮召具大內記案內者夜陰出宇治給事

自法性寺留車乘馬給事　宮立聞給事

宮作大將之由扣戶入給事

右近君思大將之由出逢事

姬君（君イ）歎思人違事

右近宮奉見宮驚思事

其翌日宮逗留之事　母君石山詣迎車來儀稱物忌返遣事

未明兵部卿宮歸二條院給事

大將參兵部卿宮給事

二月大將渡宇治給事

十日內御作文事

詞云かの君と同しほとにていま二三まさるけちめにやすこしねひまさるけしきと云々　薫大將匂宮に二三のこのかみと云る事不審なり

兵部卿宮又出宇治給事

伴女君乘舟渡橋小島事時方舅因幡守所領在家爲宿也

又之日深夜送女於本宮歸京給事

宮之御文大將之御文同持來宇治事

大將可渡宇治姫君事　語女二宮給事

匂兵部卿宮今月卅日可奉渡之由示送宇治事

母君與辨尼未知宮忍通事　語姫君進退事

姫君欲投身事

宮御使大將御使行會宇治大將御隨身供目見遣宮御使歸參大將申此子細事

兵部卿宮於臺盤所見宇治之返事大將恠見事

大將聞隨身申詞疑兵部卿宮見給事

大將遣文於宇治粗露此給事

姫君不見大將御文返進之事

侍従與右近物語見二夫之女（女イナシ）惡樣事　姫君聞給事

大將内舍人承仰警固宇治事

姫君死出立燒文等事

兵部卿宮御文無返事仍自（宮イ）身又出宇治給事

宮御使伴侍従君行勝空有對面所存事宮空歸京給事

宮御文有最期詞事

母君夢見惡可愼給之由送文事　京使今夜不歸事

浮舟　花以歌爲卷名祕同

河たちはなのこしまの宮はかはらしをこのうき舟そよるべしられぬ

花薫大將の廿三歳の春の事　祕薫廿六の年正月より三月の末までなり　箋同

弄巻名歌に見ゆあつまやの巻は廿五歳の九月まてなり　此卷の初つかたに薫廿六歳正月の事より三月の末までなり

宮かのほのかなりしゆふへを思しわするゝ世なく　花匂宮の二條院の對にて浮舟君を見出給へる事也　箋同　祕ほのかにかたらひし行末をおほすなり箋同

こと〳〵しきほとにはあるましけなりし　祕浮舟のさまなり箋

いとあたなる御心は　匂宮の好色を云

女君をはかなき事ゆゑ　祕誰人とたしかにの給はさるを宮のうらめしく思ひ給ふなり嫉妬の心よりあなかちにかくし給ふかとなり箋

かゝるすちのものにくみしたまひけり　弄匂宮の女君をうらみ給ふなり

思はすに心うしと　祕中君の心なり　私曰此義如何匂の中君をうらみ給ふさまなり

ありのまゝにやきこえてまし　箋中君の心なり

やむことなきさまには　祕薫の浮舟をすゑおき給ふ心を云り

人のかくしおき給へる人を　薫の浮舟をかくしおき給ふなり

物いひさかなくてきこえいてたらんにも　私不及引歌こゝにしも何匂ふらん女郎花人の物いひさかにくき世に

さて聞過し給ふへき御心にもあらざるめり　宮の御心を云り　私祕に浮舟の行末を知給はゝ尋給ふへきなり

さふらふ人の中にも　中君にさふらふ女房なとの事なり

さはかり月日をへておほししむめり　貴ム云々浮舟に匂の心をふかくしむることく注あれともこれは薫の事にやましてかならすみくるしき事とりいて給てん中君のわか御ためにもかほるのためにもしかるへからすといふ歟附箋如件　浮舟には匂のふ

かく心のとまりたるを云也
いつかたさまにもいとお（ほイ）しくこそはありとも　祕いつれにも匂宮は尋給ふへき事をいとほしとなり
ふせくへき心の御ありさまにもあらねは　祕中君の我身のふせくへき事はあらすとなり弄　私いつかたさまとは薫や浮舟の事をいふ中君の此事を有のまゝにの給はすとも外よりつたへきゝ給ひたりともやかて匂の尋ね給ふへき御心そとなりされともそれは中君の了見には及はぬ事なり中君は憚り給ふへき宮の御心にもあらすとなり
わかおこたりにてはもてそこなはしと　祕嫉妬ゆゑと覚すはかりはくるしからさるとなり私中君の匂へ此事を申さすして餘所よりつたへ聞てたつねより給はんは是非に及ばず我口よりはもらさし匂宮の嫉妬ふかくとおほすはかりはくるしからすと思ひかへしての給はぬとなり奇特なる中君の心なり
ことさまにつき〳〵しくは　弄中君の心優たる也そらことをはえいひ給はぬ也　祕我身の罪をははらすへきを虚言をいへるはしなゝき事と思ひて我おこたりになして居たまへり箋

物えんしゝたるはよの常の人になりて　中君の物えんしなとさやうにあるへき心ならねと此事をの給ふましき爲に普通の嫉妬ふかき人の類になりてゐ給ふとなり
かの人はたとしへなくのとかに　花是よりは薫の宇治かよひの事なり　祕薫也たとしへはたとへなくなり　箋浮舟を宇治におきてもたまさにかよひ給ふ事なり
かやすくかよひ給ふへき　祕よく心をとりをさめ給へり
神のいさむるよりもわりなし　河伊勢物語「戀しくはきてもみよかしちはやふるかみのいさむる道ならなくに祕わりなき心をいへり歌の心によれり引かへてそれよりもわりなしとなり　箋神のいさむる道ならなくにとは陰陽の道を神は制すましきなり神代よりおこれはなりその神の制止あらんよりもたやすからぬ道のわりなきとなり戀しくはきてもみよかしといふ心をつけてみるへし
されはいまはたよくもてなさんとす　遠慮をめくらして思ひ給へり

すこし日數も過ぬへき事ともつくりいて丶　祕宇治に逗留なくてかなはぬ用ともを兼てより思ひまうけ給ふなり

しはしは人のしるましきすみ所にして　祕人を訓釋して云り

かの心をものこめおき　箋浮舟を漸々にあらせつけんとなり

わかためにも人のもとき有ましくなのめにてこそよからめ　これみな薫の性なり奇特なりなのめにては大かたなるやうの心なり假に人の目にさ丶ぬ様にして次第々々に自然に人めかさんとなり

又宮の御かたの聞覺さんこともさの心をはきはきはしうゐてはなれ　花是は二條の中君の御事なり祕中君をいへり假に浮舟に思ひうつりぬるよと思ひ給ふへき所をいへり　箋大君の事をはやく思ひわすれたると中君に思はれしとなり

れいのいとのとけさ過たる　祕草子地なり　私薫の心をいへり

わたすへき所おほしまうけて　祕三條宮ちかき所也箋浮舟をわたすへき所なり

すこしいとまなきやうにも成給にたれと宮の御かたにはなほたゆみなく　祕薫は官位もたかく成給へば家中もひまなき様なれど中君への心つかひはむかしにかはらざるなり舊義をわすれざる殊勝の事なり

みたてまつる人もあやしきまでに思へれと　祕昔の事をしらさる人はみとかむるまて思へるとなり箋

世のなかをやう／＼思ひしり　祕中君世を思しり給ては薫のめくみを大切に思ひなり給へり箋

ねひまさり給ふま丶に人からもおほえも　薫のさまを云り中君の心なり匂宮あまりに色々しくてたのもしけなき時はむかしの大君にゆつり給ひしことのこときやうならましかはと今は思ひ給ふとなり

されとたいめし給ふ事は　箋中君の薫に對面し給ふことはまれなるとなり　是又中君の奇特なり薫のむつかしくうらみたまふを匂のおほしうたかふゆゑなり

とし月もあまり昔をへたてゆき　私年月もはるかにへた丶りてさふらふ人も元來を知たる人まれ成と

也　祕さふらふ人々なり宇治にてよりのむつひを
知らさる人はとなり
むつひをわすれぬにつき〳〵しけれ　此けれにてよ
みきりて心うへしみなさふらふ人々の云なり
箋たゝ人こそゆかりむつひをもわりなく大切にす
る物なりとなり　弄薫の宇治より今まてうしろみ
給ひし事中君との間の事なりはしめは宇治なとに
てより中君へ薫のねんころなりし事勿論也其後
年月（三年イ）をへたてゝすてに匂宮のかたにわたり給ひし
かば別段の事なれは元来の由緒をふかくしらぬ人
などはいかにそと思ふへしとなりつき〳〵しけれ
といふまで人の思ひたる心なるへし
中々にかうかきりあるほとにれいにたかひたるあり
さまも　弄此詞中君の思ひ給ふ心なるへし　祕中君
の心なり
おなし心のかはり給はぬ　箋薫の心はかはらぬを云
也　私薫の心なかくかはらす中君をうしろみ給ふ
心にはおほししりなから匂の覺しうたかへはおも
てむきこと〳〵しくなり給ふやうなるにも薫は
猶心のかはらぬことを前の段を註したる様（次イ）にかける
詞なり
宮もあたなる御本性こそみまうきふしもあれ　此段
匂宮のことを中君のおほす心なり
外にはかゝる人もいてくましきにやと　箋六君かた
のことなり
うちとけなつかしきかた　箋中君を心やすく匂の覺
すなり
物思ひしつまりて　匂の六君へかよひ給ひし比は中
君の御身もうきたる様に思ひみたれ給てしか今は
すこし御心もおちゐたるとなり
正月のついたち過たる比　祕薫廿六歳の正月也匂宮
はしめてわたり給ふとみゆ弄
わか君の御としまさり給へるを箋　匂宮の若公のおと
なしくなり給へるを云なり
みとりのうすやうなるつゝみ文　河たて文のことなり
花河海云たて文のことなりと云々今案たて文は別
なりつゝみ文はたき物なとやうに文をうすやうに
てつゝむことなり嫁娶の後朝の艶書なとはみなつゝ
み文なり此つゝみやう舊記にみえたりこゝの段に
文すく〳〵しきたて文とりそへてあふなくはしり

参るとみえたりたて文つゝみ文二やうにありとみえたり弄　秘花鳥の說可然つゝみ文は浮舟の文なりたて文は右近が文なるへし箋

あふなくはしりまゐる　箋無奥なり心の奥なく思慮のなきなり

宇治より大輔のおとゝにとて　いつくよりそと匂のとひ給へるにちいさき童のこたへ申詞なり　河大夫輔　大夫とのへといふ心なり　殿の字をおとゝよむなり

れいの御まへにてそ御らんせんとて　秘いつも宇治よりの文は御前にてみ給ふほとにといへり

このこはかねをつくりて　弄わらはのいふ詞　秘此わらはのめてゝいふなり　これは惣別にかねにてしたるといふ詞にてわらはの詞にてはあらさる也

松もいさやう似て是よりはわらはの詞とみゆ　花金にてひげこをつくりて緑青にて色とりたるべし

ゑみていひつゝくれは　わらはのさまなり　此籠のさまの心に入たるゆゑにみつけて御前へにもてまいりたるなり

いてわれもゝてはやしてんと　箋匂の詞なり

たいふかりやれとの給ふ　秘大輔にやれとなりかりはもとにと云事なり

御かほのあかみたれは　中君のさまなり浮舟の文なるゆゑなりそれを匂宮は薫の文なるゆゑにかほのあかみたるとおほすなり

さすかにそれならん時にも　秘もし大將ならはあてあてしかるへしと思ひ給ひてなり箋

みくるしう何かはその女ともの中にかきかよはしたらん　中君の詞ちともかまはぬさまなるへし

さはみんよ　匂宮の詞也

おほつかなくて年もくれ侍にける　秘浮舟の文の詞なり弄箋

山さとのいふせきより　秘物思ひのはれさるをいへり　物思ひのはれすいふせき心をいへり

はしにこれわか宮の御前に　文のはしかきなり

おほえなきを　しらさる事となり　箋匂の心なり

けに女の手にて　箋女ともの中にかきかよはすとあるにこたへていへり

年あらたまり何事かさふらふ　右近か文なり箋　弄右近か大輔かもとへの文の詞なり

こゝにはいとめてたき御すまゐの　宇治のすまゐふ
さはしからすとなり　薫の浮舟をかくすへおき給
ふはめてたきやうなれともなほ薫のたえ間かちに
又山ふかくてふさはしからぬとなり宇治のすまゐ
のふさはしからぬをいはんとてめてたきとはいは
ひの折ふしなれはかくいひなしたるなり
時々はわたりまいらせ給て　箋浮舟の二條院へ時々
はまいりて心をのへ給へかしと右近か思ふとなり
つゝましくおそろしき物に　弄匂宮の入たち給ひし
事なり　祕匂宮のむつかしきとなり箋同
わか宮の御前にとてうつちまいらせ給ふ　浮舟の文
のはしかきにもあれと又右近か文にくはしくかく
なり　弄卯槌の樣卯杖に同云々　祕卯槌卯杖同事
なり年中の惡氣を追なり糸所より內裏には奉る物
なり　河卯槌　持統天皇三年正月朔日天皇朝萬國於
前殿乙卯大學寮献杖八千枚　年中行事云正月上卯
日御杖之事宮內大舍人兵衞作物所別當節會日渡ニ諸司ニ奏付內侍所　江次第曰春宮被
献卯杖大進着腋陣付藏人進之次大舍人進卯杖六
十束次糸所進卯槌加糸所或者可居机歟　其料糸卯槌御机組幷纔
覆敷料十兩二分糸參河　結組料七兩二分糸丹波　巳上申請

納殿藏人取之結付晝御座張懸ニ角柱副立細木爲柱
末之出五尺許卯杖は諸衞献之精魅を追ふ杖なり
或說云仁壽三年正月始之　私卯杖卯槌大かたは同
しやうなれといさゝか其姿もかはれる成へし糸所
より献るは卯槌なり糸なとにてかさりたるものな
りいつれも同時献することはみえたり精魅を追邪氣
をはらふ事は同し心歟
おほき御まへの御らんせさらんほとに　祕匂宮をい
へり箋
いまはの給ひかしたかそとの給へは　匂の詞也　箋
中君への給ふなり
むかしかの山里に有ける人の　宇治なり　宇治にむ
かしさふらひし人のむすめの今又宇治に居たると
中君のゝ給ふなり
おしなへてつかうまつるとはみえぬ文かきを　祕匂
の心なり　只宮つかへの人のつらとはみえさる文
かきの樣そとなり　箋うはかき以下ちかふへし
かのわつらはしきことゝあるに　此詞にて思ひあは
せ給へり箋
うつちおかしうつれ〴〵なりける人のわさとみえた

り　箋隙のある人のしたる物となり
またぶりに山たち花つくりてつらぬきそへたる杖(ツヱ)に
河柂梔方言曰江東謂木枝曰云々(椥杖イ)砂鴨(シヤア)二音和名末太布利　木の
枝に山たちはなをつくり花にして卯槌を杖につら
ぬけるなり
(浮舟)またふりぬ物にはあれと君かためなかき心にまつと
しらなん　またふりぬとはまたふれぬなり柂梔にそ
へたりまつとしらなんは私にそへたるなり
弄此歌の心大かた心得かたしまたふれぬといふ心
なり一禪義同し　まつとしらなんは松によそへたり
と云々所詮歌の心はかやうのうつちまたふりなと
やうの物はいまた手にもふれぬ物なれとも君をお
もふために行末とをくまつ心をいたすといふ心に
や　愚またふれぬ心の歌堀河院百首夏部に泉俊
頼「さらし井の木の下陰に行ふれは衣手さむし蟬
はなけとも　祕いまた手にもふれさると云心なり
堀川院百首俊頼泉の歌に「さらし井の木の下かけ
をゆきふれは衣手さむし蟬はなけとも　と云る此
心行觸るなりいまた手にもふれさるといふ心なり
わか君の御ためにとなり行すゑの(千代イ)年世をもまつと
なり松にそへたり云々箋
かの思ひわたる人のにやと　箋匂の浮舟のにやと覺
しよるゆゑに目とまるなり
かくい給ふへき文にもあらさめるを　祕大將の文か
とこそ思ひつれとなり
女君少將なとしていとほしくもありつるかな　祕中
君の女房たちなり　文を匂のみ給へることを云　中
君の女房少將なとゝの給ふなり
をさなき人のとりつらん　花わらはのこと也まへにち
ひさきわらはのとりつきたるといふなり
見給へましかはいかてかは　祕さふらふ人のいふな
り
此こは心ちなうさし過して侍り　猶わらはのことを此
おとな(さイ)のいふなり
あなかまをさなき人なはらたてそとの給ふ　祕中君
の制止給ふなり
こその冬人のまいゐらせたるわらはの　祕此わらは
のことをいへり　箋註にかけり
わか御かたにおはしまして　祕匂宮なり　箋常にお
はするかたなり

あまりなる人のかたみとて　箋大君の名殘とてもあまりなることとなり
かやうの人かくしおき　浮舟のことなり
おほしうることもありて　匂の色々案して此推量に大かたおとしつけてなり
御ふみのことにつけてつかひ給ふ大内記なる人の　花御文は作文なとのことなり大内記は式部少輔兼たる道貞と名のりするよし下にみえたり　祕式部少輔とみゆみちさたと名のりする者なり弄箋同
かの殿のしたしきたよりあるを　祕薫のかたになり　箋薫の家人に仲信かためには此大内記はむこなれはなり
しふともえりいてゝ　箋古人の詩集ともなり
右大將の宇治へいますること猶たえすや　箋薫のことを問給ふなり匂の大内記にとひ給ふ詞なり
いかめしくつくられて　箋大内記の宇治の寺のことを申なり
ふたんのさんまいたう　箋念佛法花の三昧なり
かよひ給ふことはこその秋比よりはありしよりもしはし〳〵　去年の秋は浮舟をすゑ給ひし比なり前よりも細々宇治へかよひ給ふとなり
女をなんかくしすゑさせ給へる　浮舟のことなり
京よりもいとしのひて　箋三條の宮よりも也　京よりも猶御心をそへらるゝよしなり
いかなるさいはひのさすかに心ほそくて　幸はありなから忍ひたるさま成を云也
いとうれしくもきゝつるかなと　祕匂の心なりたしかにきかさるかと問給ふなり箋
かしこにもとよりある尼そ　祕此ことを治定せんとてかく匂のわさとの給ふなり
あまはらうになん　祕大内記か詞也　箋辨は廊にすむとなり
この人はいまたてられたるになん　箋浮舟は新造の寝殿にすむなり
おかしきことかな何の心ありて　祕匂の御心也　私匂の詞也
猶いとけしきありて　箋薫の心をの給ふなり
左おとゝなと此人のあまり道心すゝみて　祕夕霧なり　箋薫の道心あるを夕霧のもとき給ふとなり
かの故郷に心をとゝめたるとなん　宇治の名殘を思

ふとはかり人の思ひしにさやうの女なとすへ給へ
る事よとなり
くまあるかまひにての給ひて　祕匂の薫をあさけり
ての給ふなり　箋うちむきたる好色よりは此さか
しかる薫の心かまへは結句事をたくみたる事よと
匂の給ふなり
この人はかの殿にいとむつましく　祕内記か族姓を
いへり
御心のうちにいかにして此人を見し人かとも　祕匂
の心なりまへに此宮にて見給ひし人かとみさため
はやとおほすなり箋同
なへてのよろしき人にはあらし　よろしきは中ほと
なる人なり薫のこれほと心とゝめてするおくほと
ならは普通にはあらしと心にくゝおほすなり
此わたりにはいかてうとからぬにはあらん　花此わ
たりは二條の君とうとからぬをあやしう思ひ給な
り　祕中君にしたしきはいかなる事にかとなり
弄浮舟の事を思ひめくらし給ふに中君のかたへし
たしきやうにみえたれはいかなる縁ならんうとく
もみえぬ人と思ひうたかひ給なり

心をかはしてかくし給へりけるも　中君の薫と同心
してかくしなし給へるを匂のねたく覺すとなり
たゝそのことをこの比はおほししみたり　宇治わた
りの事なり匂の心なり
のり弓むいえんなと過して　弄む月の比なり　河賭
弓正月十八日也　清和天皇貞觀二年正月十八日車
駕幸豊樂院觀賭射　同射　仁德天皇十二年七月高
麗國貢鐵楯鐵的八月集群臣及百寮令射高麗所献之
鐵之楯的諸人不能射通唯的之臣之祖楯人宿禰射鐵
的通焉時高麗客等見畏其射之勝巧共起以拜朝　天
智天皇九年正月詔士大夫等大射宮門内　延喜二年
三月廿二日同十七年三月廿日同廿二年二月九日延
長四年三月六日有殿上賭弓之由見御記
つかさめしなといひて人の心つくすめる　祕親王は
巡給にあつかりて人をこそすゝめ給ふ事はあれ我
身の昇進なとには心をもかけ給はさるとなり　箋
つかさめしは京官の除目をいふ秋ある事なり　春
の除目は縣召なり其内にも京官を任する事はある
なり是は正月のあかためしをいへり除目はいつれ
も官をなさるゝ事なれはかよはしていへるにこそ

さりなからあかためしをつかさめしとはいふとも
京官の除目をあかためしといふ事は有へからす又
連歌なとの付合に面白き了見有へしとそ申されし
この內記はのそむ事ありて　祕除目の時分なれはわ
か身の昇進の執奏をたのみ奉れるをりふしなり箋
いかて御心にいらんと思ふ比　弄宮の御心にいらん
とて中たちせし事不可然なり人のつねにある事也
心うへし
いとかたき事なりとも　箋匂の內記にの給ふなり
かしこまりてさふらふ　祕領狀申なり
かの宇治に住らん人ははやうほのかにみし人の　箋
浮舟をもとみし人との給ふ匂の詞なり二條院にて
の人とおとしつけての給ふなり
あなわつらはしとおもへと　箋內記か心なり
おはしまさんことはいとあらき山こえに　內記か詞
なり
ゐねの時にはおはしましつきなん　箋亥子の時なり
道のほとを申なり
たゝ御ともにさふらひ侍らんこそはそれもふかき心
は　箋人のしるへき事はいかにともしらす我は御供
に參るへきはかりなり
さきの案內はよくもしらすとなり　私人のしるま
しき事は御供にさふらふ人から成へしさりなから
それもふかき樣體はしらしと內記の申也
さかしむかしも一たひ二たひ　祕匂の詞也　むかし
中君へかよひ給ひし時なり
かうまてうちいて給へれは　箋匂の性を云あるまし
き事に覺しなからも是程になりてはとまらぬ性な
り是も好色にすゝみたる方なり
藏人よりかうふりえたり　誰ともみえす勘へし　出
雲權守時方なり此卷に左衞門大夫とある此人なり
と云々
大將はけふあすはよにおはせし　よにはよもといふ
詞なり　花鳥によもといふ事なりと云る尤吉云々
伊勢物語によにあふ事かたき女といふも同し詞と
一譯の御說なり是は非也と云々
內記によくあないきゝ給うて　內記は仲信かつてに
てよく薰の事を知るなり
いにしへをおほしいつ　匂の心に昔宇治へかよひ給
ひし事を覺し出るなり

心をあはせつゝいて(ゐイ)ありきし人のためにうしろめたきわさにもあるめれ(かなイ)　箋薫の匂宮へ中君を中たちせし時の事をさすか　花薫の匂宮へ宇治へつれたてまつりて中君に中たちせし事なり

さはいへとえし給はぬ　匂宮の好色にすゝみ給うて御行跡もかろきやうなれは京のうちにてさへさすかかやうの忍ひありきはえし給はぬをいふなり

物おそろしうやましけれと(はイ)　祕心やましきとなり弄河

いつしかいかならん　祕かくてしも行あはてはとなり

みあはすることもなくてかへらんこそ　箋匂の心にさすかあなたに此事の心しりの人なけれはいかゝあらんすらんと心中には色々おほしわつらふ也

かの殿の人にきゝとひた(けイ)れは(さイ)　箋大内記も案内をしらねとも薫の家人の案内よくしりたるものにとひきゝておきたるなり

我もさすかにまたみぬ御すまゐなれは　祕内記なり

まいりてまた人はおきて侍るへし　匂宮のたゝすみ給へるかた内記か參りて申詞なり

やをらのほりて　匂の緣へのほり給ふなり

いよすはさら〳〵となるも　箋伊與簾のあら〳〵しきなり　弄あたらしくてかりなる儀歟　私山里めきたる具なとゝ前にも東屋の巻にあり

木丁のかたひらうちかけておしやりたり　打とけ過たる體なり是も人の用意にかけり

物ぬふ人三四人(サウシニン)ゐたり　箋さうしにんとよまれたり

これかかほまつかのほかけに　祕二條院にて見給ひし人となり箋

右近となのりし若き人　弄浮舟の女房なり東屋に匂の事告し人なり　又云東屋巻に大輔か女の右近といひしことをおもひよそへ給歟又たいふか女のかたり侍りしを(さイ)宇治にていへり二條院の事を云なるへし又常陸にも右近有し人なり別人なり

ひたひつきいとあてやかに　弄勝字なり上らうしくすくれたる心なり　らうたきとはいとほしけありなつかつしき體なり中君と浮舟との事にあり

たいの御かたにいとようおほえて　祕中君なり君は浮舟なり中宮に似たるなり　箋

右近ものおるとて　弄折なりをるとはぬふ事をいふ
物をぬふとて折めをつくるなり
わたらせたまひなはとみにしもえかへりわたらせ給
はし　花京の母上の家にわたり給なはふとかへり給
ましき心なり　祕浮舟の母の具して石山へあすま
うてんとせし夜の事なり弄
殿はこのつかさめしのほと過て　薫は除目過てこそ
おはせめとなり
いらへもせす　箋浮舟のさまなり物思へるさまとな
り
をりしもはひかくれさせ給へるやうならんか　祕薫
の自然御出ありたるに出ちかひ給てはとなり
むかひたる人そそれはかうなんわたりぬると御せう
そこ聞え給へらんこそ　箋右近にむかひたる人なり
薫へかう〳〵の事と御案内ありてよからんと也
御物まうての後はやかてわたりおはしましねかし
花浮舟の石山へまうて給はんとする事なりこゝは
物さひしきやうなれとも心やすきなり彼故郷は中
中たひ心ちしてあしからんとなり
又あるは猶しはしかくてまちきこえさせ給はんそ

のとやかに　弄又ある女房のいひし詞なりとり
とりにいひたる體なり　祕今京へ出給ふ事は然へ
からす薫の京にむかひ給てのちこそよかるへけれ
となりかく人々さま〳〵にいへり箋
このおとゝのいときうにものし給ひ　花おとゝは母
上の事なりきうは急なり東屋のやとへ母上の姫君
をあはたゝしくむかへんとしたまふ事なり　祕此
母の心なり急なる人なり此めのとのまゝかいひな
しにやこの物かたりをいそきたるなり　弄めのと
のまゝかいひなしにや石山詣をいそかすといふな
り箋
なイ
あさてこのまゝをとゝめてたてまつらす成にけん
花まゝは姫君のめのとをいふ成へし　弄まゝとは
名なり箋　祕まゝはめのとの名なり此めのとを京
へ出したるによりて此さかしらをいひて母上をも
いひすゝめたるとなりこゝにとゝめておくへき物
をとなり箋弄　私云まゝは右近か母とみゆなとて
こゝにとゝめてたてまつらすはなへてやりけんと
いふなり
けにゝくき物ありきかしと　祕匂かの宮にての事を

思ひあはせ給ふなり　花二條院にて匂宮の手をつみ給ひし人をの給ふなり　弄匂宮の宮にて浮舟のさうしへ入たまひし時つとまほりいたりしめのとの事なりと思ひあはせ給ふなり

宮のうへこそいとめてたき　祕中君なり箋

わか君生れ給ひてのち　夕霧の大君さはかりいきほひあれとも中君にわか君出來てよりこなたの御おほえもましたるとなり

かゝるさかしら人とものおはせて　花六君のかたに御子のなきをいふなり　私此說如何　祕中君には母もめのともなくてひとり立身し給ふなりかやうのさかしらのなきしも中君のさいはゐとなり　弄中君のかたにはめのとなとのよろしからぬさかしら人なくてよきにやといへり

このたにまめやかに思ひ給ふ事かはらすは　花此殿は薰の大將を申なり　祕薰たにもねんころにし給はゝとなり

君すこしおきあかりて　祕浮舟なり箋

かの御事なかけてもいひそ　箋中君なり兄弟の間をないひくらへそとなり

何はかりのしぞくにかはあらん　河親族　花しぞくは伊勢物語にもある詞なり中君といかほとの親類なれはかやうにはかよひたるらんと匂の思ひ給ふ也　祕匂の御心なりしぞくは親族なり　弄いかなる親類なるらんとうたかふとなり　箋匂の浮舟と兄弟なる事をしらぬなり

はつかしけにあてなる所はかれはこよなく　祕かれは中君なり　弄あてなるは上らふしきなり

これはたゝらうたけにこまかなる所そ　祕なつかしき所のあるなり　箋浮舟なりこまかなるは浮舟の體なり

さはかりゆかしとおほしゝめたる　二條院にてほのかにみ給ひし時よりなり

猶まもり給へは　箋匂宮のゝそき給ふ心なり

つとめてのほとにもこれはぬひてん　箋明日の早朝なり

御車は口たけてそ　花母上の方よりのむかへの車なり

君もすこしおくに入て　箋浮舟なり

ねふたしと思ひけれはいとゝうねいりぬるけしきを

見給ひて　右近かさまなり
又せんやうもなけれは（てイ）　箋匂の心なり
あてなるしはふきと　弄上らうしきなり祕
箋薫そこ聞て右近かあけたるなり
あやしうおほえなき　祕右近か詞なり
物へわたり給へかなりとなかのふかいひつれは　祕
匂宮薫のまねをしてかくの給へり　花大藏大輔仲
信は薫の家人なり道定かしうとなり箋　弄見系圖
以下花に同祕同之　私云今立きゝ給へる事を匂の
薫のまねしてつきつきしくいひなし給ふなり
かいはなつ　格子のかけかねなり
道にていとわりなくおそろしき事のありつれは　祕
盗人にあひたりといふ心なり弄箋
あないみし　箋右近か恐怖したる詞なり
きたりとて人おとろかすなと　おはしたる事を隱密
をせよとなり
ほのかに似たる御こゑを　生得薫と宮の御聲似かよ
ひたるとなり
われもかくろへてみる　右近か心なり
香のかうはしき事もおとらす　箋匂はたきしめたる
香なり
なれかほにうちふし給へれは　箋薫のさまに悉皆も
てなしたるなり
御ともの人なとれいのこゝにはしらぬならひにて
祕薫の御ともの人はいつも辨尼のかたに行て侍る
なりこゝにはしらさるなり　弄薫の御供の人をも
例は浮舟の女房ともはしらて辨尼なとのかたにて
あへしらひしにや　箋薫の供の人は近き知行なと
へつかはす歟こゝにはしらねはけちめなしとなり
かゝる御ありさまを御らんししらぬよなと　祕今夜
の御出は深切なる御志といへり
さかしらかる人もあれと　さし過もとくやうの心な
り今夜の御出の事をとり〳〵にいふこゝろなり
いとつゝましかりし所にてたにわりなかりし　箋二
條院にての事なり
かのうへのおほさんこと　箋中君の事なり
たはやすくあひみさらむ事を覺すになき給ふ　浮舟
は思ひの外なることを思ひなけきてなくなり匂は又
たやすく逢みん事のかた（さイ）きを覺してなき給ふなり
いけるかきりのためこそ　河戀しなん後は何せん

いける日のためこそ人はみまくほしけれ　祕引歌
河に同箋同
いさ心ちなしと思はれぬへけれと　匂の右近にの給ふなり
ときかたは京へものして　花時方は宮の家司なり出雲權守とみえたり　祕匂の家司なり　弄出雲權守なり大夫也匂宮の人なり
いとあさましくあきれて　祕右近か心なりこゝにてはしめて匂宮とはしれり
心もなかりける夜のあやまち　右近の事をすこしも思ひよらぬ事を云也
かひあらし物からなめけ也　弄中々さわくともかひなき物ゆゑに無禮なるへしとなり　祕右近か心のさわくをしつめて思ひかへしたるとなり
あやしかりしをりにいとふかう　祕匂宮のかねて見給ひし時の事也弄
けふ御むかへにと侍しをいかにせさせ給はんとするにも　祕母の物まうてせさせんとてむかへの來るへきとなり　箋石山まうての事なり末にみえたりおしかへし右近か申詞なり

御心さしあらはのとかにもときこゆ　とてものかれぬ御契なれはせんかたなしけふは物詣にさし合侍れは御逗留も折あしゝかさねての事にと申なり
およすけてもいふかなと　祕匂の心なり　弄右近かよくことはり申を匂の心におほすさまなり
われは月ころ物思ひつるに　祕匂の詞なり　箋月比の物思ひに本性もうせはてたるよしをのたまふ也
すこしも身の事を思ひはゝからん人の　弄宮の切に思ひ給ふ事をいひしらせ給ふなり
御かへりにはけふ物いみなといへりし　祕母の方への返答を教へ給ふなり箋
たかためにも思へかし　箋匂と浮舟のためとなれはかくの給ふなり
こと事はかひなし　其外の分別はいらぬ事そと也
この人のよにしらす　箋浮舟なり匂の切におほすなり此浮舟の體夕顏上に似たる事多し命みしかゝるへき人はみなかくある歟やといへり
右近いてゝこのおとなふ人に　箋匂の御供の人なり
花音なふ（はイ）人は大内記をいふなり
なほかたわならんとおこさせ給へ　箋御供の人にい

ふなり　右近か分別なり匂の逗留あらん事をいひつたへてさりなから御供の人々も御逗留然るへからぬ事と申となり匂宮こそ本心なくてかく仰らる共かやうの事は御供の人々分別にあるへき事そといふなり

なめけなる事をきこえさする山かつも　祕おどしていへるなり　箋何の心をもしらぬ人に此ことなとを聞てはいかならんとなり

時かたとおほせらるゝは　祕右近御供の人の中にて時方を尋ねたるなり箋弄

さなんとつたふ　祕そは人のをしへたるなり弄箋　祕右近か御供の人の中にて時方はいつれそ宮の仰の趣かくの如しとつたへたるをさなんとつたふといふなり

わらひてかうかへ給ふ事とものおそろしけれは　河勘事　勘當の事なり弄　祕さま〳〵にかこちしかはにけてもゆかんとなりかうかへとは勘當の事なり弄　弄かうかへは勘當譴勘と云に同し人のあしき事かんかへたてゝせむるなり宮の京へかへれと仰にてなくとも右近かさま〳〵勘當するかおそろしけれはにけていなんするとなり

まめやかにはおろかならぬ御けしきをみたてまつれは　時方なとかやうにたはふれにいひてさて眞實には宮の大かたならぬ御けしきなれはたれも〳〵身をもをしますとなりよし〳〵御逗留ありたくば其分よとて皆々かくろへたる方へ行なり

とのはさるやうありて　私よへの道にてあやしき事ありし　祕薫といひなしておく也　箋ならへる(居るイ)やうにいひなしてをくなり

こはたの山はいとおそろしかなる　箋右近か傍輩のごたちかいふなり

あなかま〳〵けすなとの　又下々の人の聞てはと制する左近か詞なり

とのゝ御使のあらん時　箋かくて薫のおはするといふ所へ又薫より使の來りてはと思ふ右近か心なりさて泊瀬なとへ願をたつるなり

石山にけふまうてさせんとて　祕前の物へゆかんといへるは石山の事と訓釋していへり弄

さうじんしきよまはりて　精進　潔齋なり

夢みさわかしかりつゝ　祕夢見あしきとて物忌なと

かきて母君（女君イ）のみつからわたり給ふともけふはよせ
侍るましきとなり
御てうつなとまゐりたるさまは　祕浮舟に陪膳し給
へと右近申なり
まかなひめさましう　弄宇治の宮いまた事そろはぬ
によりてなり
そこにあらはせ給はゝと　弄浮舟にまつ手をあらひ
給へとなり　又云浮舟に御手水まゐらせ給へとな
り　箋匂へ右近は御手水をえ參らせぬ故に浮舟の
御手水を參らするなりそれもさすかにて浮舟も手
をあらひ給はゝわれももろともにと匂のゝ給ふ也
女いとさまよう心にくき人を　花是は薫の事なり
女は浮舟なり　祕心にくき人は薫なり弄
時のまもみさらんはしぬへしと　花是は匂宮の事な
り弄祕箋
まつかのうへの御心を　匂のうへ中君なり
しらぬを返々いと心うし　祕浮舟の名のりをゆかし
と思ひ給ふなり　箋浮舟の種姓をしらぬなり
あらんまゝにの給へ　花是よりは匂宮の詞也
其御いらへはたえてせす　箋浮舟の種姓を云ぬ也

なひきたるをかきりなう　浮舟の打とけたるやう
なるなり匂のらうたくおほすなり
むかへの人きたり　祕母（女イ）のかたよりのむかへなり
殿なんおはするといひたらんに　花薫のおはします
といはんとすれは京にさはかりの人おはしまさぬ
かくれあるましき程にさもえいはぬとなり　箋薫
のおはしましたると母のかたへいひやりたらは薫
の京におはするおはせぬ事かくれあるましけれは
いかゝと右近か思案するなり
この人々にもことにいひあはせす　弄右近か女房と
もにもいひあはせぬなり
よへよりけかれさせ給ひて　花月のさはりの事なり
弄月水の事といひなしたるなり　祕月のさはりの
いてきぬといひなしたるなり箋
夢見さわかしく　物忌といはんとてつくり事にいふ
なり
尼君にもけふは物いみにて　弄辨尼に此よしをいふ
なり辨尼をこゝへみせましきために物いみのよし
を次手にしらするなり
くれゆくはわひしうのみおほしいらるゝ　箋匂宮の

日もなかかれかしと覺すなりその人にひかれて浮
舟のみ心にもはかなう（さまイ）くれぬるとなり
さるはかのたいの御かたには　浮舟の中君には似て
おとりたるとなり
大との丶君のさかりににほひ給へる　六君にならへ
てはおよふましき人をたくひなく思ひ給ふなり
祕夕霧の六君よりはをとりぬへき浮舟を只今はた
くひなく思ひ給ふとなり弄箋
またしらすおかしとのみ　いまたかやうなるをはみ
ならはぬやうにさま（さまイ）○かはりておほすとなり
女は又大將とのをいときよけに　祕浮舟の匂をたく
ひなしとみだてまつるなり
すゝりひきよせて　祕匂宮なり
ゐなとを見所おほく　匂の手すさみなり
思ひもうつりぬへし　草子の地なり
男女もろ共にそひふしたるかたをかき給ひて　末に
此繪事あり（匂宮）
なかきよをたのめても猶かなしきはたゝあすしらぬ
命なりけり　箋たゝあすしらぬことはこゝをたちはな
れては命も有かたしとなり

いとかう思ふてそゆゝしけれ　私只あすしらぬ命と
よみ給て我なからゆゝし（にくイ）となり命みしかくは契も
長かるましき所をかへりみて匂のの給ふなり
よろつにた（ゝイ）はからんほと　花今より宇治かよひの事
をいふなり
つらかりし御さまを　祕二條院にての心なり花弄
箋中々たつねいてゝ物思ふとなり
返浮舟
こゝろをはなけかさらまし命のみさためなき世とお
もはましかは　花人の心も定なけれは命にかきら
ぬ心なり　祕命を思へは心なはいふましき事とな
りたゝあすしらぬ命とあるをうけて云へり
かはらんをはうらめしう　祕匂の心なり箋　私浮舟
の歌に命の定なきはかりにはあらす心もいかゝと
よみたるをもつて匂のかはらんをはうらめしう思
ふと覺すなり
いかなる人の心かはりをみならひて　箋誰ゆゑに思
ひしりたるそとなり
えいはぬことをかうの給ふこそと　祕浮舟のうらみ
たるなり
よさり京へつかはしたるたいふまいりて　祕大夫な

り出雲權守時方なり　弄見系圖　花夜に入てきたるをよさりといふ左衛門大夫時方といひて右近かしる人なり

きさいの宮よりも　祕時方か詞なり

左のおとゝもむつかりきこえ給うて　箋明石の中宮なり　箋夕霧なり　匂宮の御ありきをいましめ給ふなり

内なとにきこしめさん事も　箋主上なと聞しめしては夕霧の匂へ異見を申されぬと仰らるへしされは身の爲にも迷惑なるよしなり

ひんかし山にひしり御らんしにとなん　祕時方かやうに申つるとなり

すゝろなるけんそうの人をさへ　河顯證　花けさうは一には見處の人をいふにやそばあたりの人をけんそといふへし　弄見證なりそは成人をさへといふなり　祕見處の人なりかたはらそばあたりの人までとなり箋

ひしりの名をさへつけきこえさせ給てけれは　祕右近か詞なり　箋浮舟とそひおはするをひしりの處へといひなしたれはかくいへり

わたくしのつみもそれにて　箋ひしりの名にてうへわたくしのつみは殘らしと右近かたはふれにいふなり時方か女のつみふかしといひてそらことをさへするといふにあたれり

いかてならはせ給けん　祕かやうの御ありきはいかてならはせ給ふそとなり

いとかたしけなければたはかりきこえさせてまし　祕かねてしらせ給はゝよきやうにたはかりてまし物をとなりかたしけなければとは宮をうやまひたる心なり弄

まいりてさなんときこゆれは　祕右近が匂の御前に參りて也　箋京のことを時方の申たるやうに右近か匂へ申なり

けにいかならんと　中宮夕霧なとの事なり

殿上人なとにて　匂の淺官にてはやとなり

さるへき程とはいひなから　箋匂の心なり薫はちかき親睦なれは勿論の事なからとりわきむつましかりし中にかゝる心のへたていてきて行末いかならんとさすかに覺すなるへし

世のたとひにいふこともあれはまちとほなるわかお

こたりをもしらすうらみられ給はんをさへなむ思ふ
花我身の咎をしらて人のうへをはいふことなり薫のわかこたえをはしらす女をうらみ給ふへき事なり
祕薫のわか打すてヽおく事をはいはて浮舟の身にかヽる事のあるとかこち給ふへき事なり　弄身の上を忘る事歟世のならひわかあやまちをはおきて人のとかを云事あり其やうに薫のわかたえまをはいはて浮舟のうへにかヽる事ありとかこちやし給はんと匂宮の思ひ給ふなり　箋薫の我たえまをはいはて匂をうらみむとおほすなり

こヽならぬ所に　祕匂のいつかたへもとりかくさんと契るなり

袖の中にそこヽめ給へらんかし　河「あかさりし袖の中にや入にけん我玉しゐのなき心ちする　箋引歌河に同　草子地に推してかけり

匂宮 よにしらすまとふへきかな人しれぬ（さきにたつイ）なみたも袖もかきくらしつヽ　箋常の別よりも猶かたきあふ瀬なれはいへり

返浮舟 なみたをも程なき袖にせきかねていかにわかれをとむへき身そ　箋我かすならて程なき袖ゆゑは別をもえとヽめぬとなりしたひたる歌なり

風のをともあらましく霜ふかきあかつきに　正月の末か餘寒の時分なり

おのかきぬ〳〵もひやヽかになりたる心ちして　河古「しのヽめのほから〳〵と明行は己かきぬきぬなるぞわひしき人丸　箋引歌

御馬にのり給ふほと引かへすやうにあさましけれと　私定家卿こヽの心にてよめると云り　面かけのひかふるかたにかへりみる都の山は月ほそくして

この五位二人なん御馬のくちにはさふらひける　弄出雲權守と又一人歟　私大内記歟以上弄　祕大内記と時方と也箋

むかしも此道にのみこそ　箋中君へかよひ給ひしとなり

心うかりし御物かくしも　箋浮舟の文を匂の見給ひて問ひ給し時中君の誰とものたまはさりし事なり

心やすきかたに　二條院にて匂宮の別におはします方なり

たいにわたり給ぬ　箋中君のおはする對なり

いときよけにて　中君のさまなり
めつらしくおかしとみ給ひし人よりも　浮舟の事なりそれよりも中君はまさりたるなり
女君もゐていりたまひて　弄宮をあつかひ給ふなり匂宮の中君をもゐて入給ふなり
心ちこそいとあしけれ　祕宮の詞なり弄箋
いみしうあはれと見をいたてまつるとも　匂のはかなくならは中君をあはれと思ひおかんとなり
いととくかはりなん　箋中君の跡に殘りてやかて心のかはらんとなり薫の事を思ひての給ふなり
人のほいはかならすかなふなれはと　祕只今浮舟にあひ給ふ事にて思ひしり給へり中君と薫の事のうたかはしきなり　弄薫の中君にいひかゝつらひ給ふ事をえんし給ふなり匂宮の浮舟をつゐに詩あひ給ひしによて思ひしり給ふなり箋
けしからぬことをさへまめやかに　箋中君の心なり
かうきゝにくきことのもりきこえたらは　花中君と薫大將との間の事なり　祕中君の詞なり大將のきき給ひてはとなり
心うき身にすゝろなる事も　箋身の不省なることをいへり
まことにつらしと思ひきこゆる　箋匂宮の詞わか中君を實に疎略あらはいかゝ有へきとなり
人もありかたしなとゝかむるまてこそあれ　匂の中君への懇切は類もあらしとまてこそ人もいへるなり
人にはこよなう思ひおとし　箋薫には思ひおとし給へると匂の中君をうらむるなり
へたて給ふ御心のふかきを　祕浮舟の事をあかし給はさる事なり箋
すくせのおろかならてたつねよりたるそかし　匂の心中なり浮舟をなほさりならぬ契りあれはこそたつねあひつらんとなり
まめやかなるをいとほしう　祕中君の心なり薫との事人の虛言有へしとなり　私薫の事をまことしくうらみ涙くみなとし給ふを中君は浮舟の事をしらねは實に此事をの給ふとおとろきていらへんやうもなく心のうちに何かと思ひめくらし給ふなり
物はかなきさまにてみそめ給ひしに　祕或この嫁娶の儀はなくて薫のとりもち給ひし事かとなり　私

匂宮にも中君のかりそめなるやうにてあひ給へり
されは薫なとへもさやうに心かろからんとおしは
かりたまふよとくちをしくおほす心なり
すゝろなる人をしるへにて　弄匂と中君とあひ初し
時の事なり本式ならさりし事なり　私よしみもな
き薫なとのうしろみ給ふにまかせて有し事なりさ
れともうしろめたき心なくなと有しかは其心のを
ろかならぬほとを思ひしりてしたしきやうなりし
故に匂のかく覺しうたかひて身のおほえのおとる
なりと中君の思ふ心なり
かの人みつけたるとは　花浮舟君の事なり　祕匂は
浮舟をみつけ給てかへし給へるをさま〳〵にの給
ふをも中君はしり給はてあひしらひ給ふなり　箋
薫のことをまことしく人の申なしたるかと一段と
中君は恐怖なり　匂は浮舟の事の心にありてさま
さまにの給ふなり
ありやなしやをきかぬ間は　弄實否の事なり匂宮の
色みへてにくしイ
疑色はみえにくしと又匂宮に人のいかゞきこえけ
んその實否をきかてはゝつかしきと也　祕匂宮に
薫の事の實否きこえけん事たしかにきかてははつ
かしきとなり

あなたにわたり給ぬ　匂宮のわかおはするかたへわ
たり給ふなり
昨日のおほつかなきを　祕大宮よりの御使の詞也
私明石中宮の文の詞とみゆ
久しうもなりにたるを　祕二三日のへたても中宮の
御心は久しとなり　弄
夕つかた右大將參り給へりこなたにをとて　かほる
なりこなたは匂のつねにおはする方なり中君の方
にはあらす
なやましけにおはしますと　私薫の詞なり箋
宮にもいとおほつかなく　祕明石の中宮なり
みるからに心さわきの　祕匂の御心なり　箋心の鬼
なり
ひしりたつといひなからこよなかりける山ふし心
箋匂の浮舟の事をおほして薫のさしもひしりめけ
とも猶好色のましる事を思ひ給ふ心中なり
れいはさしもあらぬ事のつゐてにたに　祕草子地な
り
まめ人ともてなしなのり給ふをねたかり給うて　箋

薫の道心ありといふを匂のつねにの給ひつるとなりされは此浮舟をもちたる事なとをしり給たらはさま〳〵の給ふへきを御身にあやまちあれは心に覺してえの給はぬとなり

いとくるしけに見えたれはふひんなるわさかな　祕いとくるしけ薫の詞云々　私ふひんなるわさかなといふよりかほるの詞とみゆ

はつかしけなる人なりかし　祕匂の御心なり　私薫のさまをおほすなり

いかに思ひくらへけん　箋浮舟の薫に思ひくらへんことを匂の覺す心なり

たゝこの人を時のまわすれす　浮舟の事匂の心也

かしこにはいし山もとまりて　箋宇治のさまなり

御ふみにはいみしきことを　祕匂の御ふみなり

時かたとめしゝ大夫のすさの心もしらぬして　河從（ジウ）者　花左衞門大夫か從者して御文を右近か方へつかはしたるなり時方は其時の申次なり　私時方は名のりなり大夫は左衞門大夫なり時方か官なりそれを時方とめしゝ大夫とはかけるなり左衞門大夫時方といふなり　花鳥の義おほつかなき故に是をしるす也

右近かふるくしれりける人の殿の御ともにてたつね出たるさらかへりて　祕右近か料簡也右近かしる人の薫の御供にて來しとなりさらかへりて我に物をいふとなり弄　私右近かもと逢見し人となりさらかへるは更に返るなりさらにもとにかへりたる心なり

月もたゝぬ　祕正月もくるゝなり　弄箋

か（今イ）うおほしいらるれと　匂宮の御心にはおほしこかれなからさすかに宇治へおはする事のかたきとなり

大將とのすこしのとかになりぬる比　薫の宇治へわたり給ふなり　二月なるへし

てらにほとけなと（なイ）おかみ給ふ　薫のたて給へる御堂なり

夕つかたこゝにはしのひたれとこれはわりなくもやつし給はす　弄浮舟のすみ給ふかたへわたり給ふなり　箋忍ひたれと烏帽子直衣なとき給ふなり是はとは匂のしのひたりしになすらへていへり

女いかてみえたてまつらんと　箋浮舟の心中なり

あながちなりし人の御ありさま　箋匂の事を浮舟の思ひ出るなり
われはとしころみる人をもみな思ひかはりぬへき　花是は匂宮の事なり　弄匂宮のゝ給ひし事を思ひ出給ふなり　祕浮舟の心中なりこのころ匂宮は御心ちもわつらひ給ふときゝしはふかくちきり給ひし事なとを思ひ出るにいまかく大將のこゝへわたり給へるをさこそは御心にかゝりて思すらんとなり　私匂宮のまた此薫に浮舟のみえんを思やるも心うしと前にの給ひて我は年ころみなれし人をも思ひすてんなとゝありしを浮舟の思ひ出るなりさて此ころわつらひ給ふなるうへに薫に又浮舟のあふ事をきゝ給はゝいかにおほさんと心にかゝるとなり
又いかにきゝておほさん　弄又薫にあふ事を宮のおほさん事なり
この人はたいとけはひことに心ふかく　祕薫の體なり
戀しかなしとをりたゝねと　弄薫の體めてたき人なり有感

いふにはまさりていとあはれと　河「心には下行水のわきかへりいはて思ふそいふにまされる　箋引歌同
えんなるかたはさる物にて　弄薫の艶なるかたは宮にはおとりぬへけれともとなり私匂は色にそみたる心ふかく浮舟なとへもさ有けりとみゆ此薫艶なる所も勿論すくれたるとなりそのうへに行するゑなかくたのもしき所もありとなり弄の義如何
たのみぬへき心はへなとこよなうまさり給へり　祕匂宮よりはまさりたる也　箋心ふかくたのもしき所薫はまさりたるなり
思はすなるさまの心はへなと　祕匂宮の御事なり　箋薫は心はつかしかるへしとなり
あやしううつし心もなう　祕匂の事なり箋
この人にうしと思はれて　薫の事なり浮舟の心なり匂宮は打あたりて思ひいれられ給へは我も心のとまるやうなれともよく思へは有ましき事の又當座はかりにて實ならぬ所あるなり此薫はなかくたのみぬへき所のあれは此人にうとまれんはくるしかるへしとなり

月ころにこよなう物の心しり　箋薫は浮舟の心中をしらてたゝ物の心を思ひしり何となく心ふかく成たるなとゝみなしたる成へし

つくらする所やう〳〵よろしう　薫の詞也　祕京へわたさんとなり浮舟の物思へるさまなるをなくさめていへるなり

こゝよりはけちかき水に　祕宇治の宮は川ちかき所なれはなり　弄宇治宮も川はちかけれとも京の宿(末イ)にては水もなつかしくてすさましくはあるましきといふ心なり

花も見給ひつへし　庭の前栽なとなるへし

三條宮もちかきほとなり　箋薫のおはする故此つくる所に近きとなり

かの人のゝとかなるへき所　祕匂も京へうつすへしとなり

そなたになひくへきはあらすかしと　箋匂のかたへはならぬことかと浮舟の思ふなり

ありし御さまのおもかけにおほゆれは　匂の事なり　そなたへはなひかしと思ふからかなしきを我から心うやと浮舟の思ひしりてなくなり

御心はへのかゝらておいらかなりしこそ　私かく物思ひしみたるさまを見て薫のなくさめての給ふなり　箋浮舟の心は匂宮ゆゑ思ひみたれてすゝろになくをかほるはとたえをうらみてと思ひてかくのなふなりさて人のいひなしなとのあるかなとさまさまに薫の思ひあつかひ給ふなり

かうまてまいりくへき　薫の道のたやすからぬをの給ふなり

ついたちころのゆふづくよに　花藤裏葉巻にもある事なり　祕説々あれとも無用なり只上旬の月なるへし藤裏葉にも有　弄さま〳〵の儀は優ならす月のはしめの月夜なるへし尤幽玄なり二月初なり　河陰陽家に昨(眺イ)用とて晦日の日を用ことと有云々又眞言教にも金剛薩埵を晦合宿の月にたとへられたり晦日の月あらは朔日の月も勿論歟此事又祕説あり

をそこは過にしかたのあはれを覺しいて　箋薫は大君のさまを思ひいつるなり

女はいまよりそひたる身のうさを　箋浮舟の心匂宮の事なり薫も浮舟も心中に思ひあれとも心はこと

の外にかはるなり
山のかたはかすみへたてゝ　所のさま時節の景氣互の心中の情思かはるへし
さむきすさきにたてるかさゝきのすかたも　河蒼茫（范イ）霧雨之霽初零汀鷺立重疊烟嵐之斷處晩時僧歸　閑賦
すさきにたてるさきとかける古木もありこの句のこゝろによらは誠に可然歟能因歌枕にも烏をかささきといふとあり烏鵲一様の物なり然て和漢のならひかよはしていはんもさまての難にあらさる歟又たま〳〵さきといふことあれは用捨可在人心乎　花かさゝきと云はまへは鵲のからすなりしかれとも此物語には鷺をかさゝきといへりかさゝきのはしを繪なとにかくはからすをもかき又しらさきをもかくなり家隆卿歌「かさきのゝわたすやいつこ夕霜の雲井に白き峯のかけはし　此歌はかさゝきの色を白き物にたとへられたり所詮かよはして用へき事にこそ忘草を萱草ともいひ又忍ふ草の異名ともいふかことし　祕鷺とみえたりかさゝきといへる詞優なるにつきて云るなるへし　弄大かたは鵲なりこゝにては鷺とみえたりあやまりにては有へからす打きゝのやさしきによりてかけるなるへし幽玄の説にや　箋たゝ鷺なり説々におよはす
いさかゝらぬ人を　箋浮舟の大君に似たるをいへり
こひしき人によそへられたるも　祕をり〳〵の事もわすれかたきとなり
都なれゆくありさま　祕浮舟のさまなり箋　弄中ひたりし人のみやこめきたる心なり箋
もよほさるゝなみた　浮舟のさまなり薫のなくさめかねて歌をよみ給へるなり
薫宇治はしのなかき契はくちせしをあやふむかたにこころさはくな　祕契もくちましとなり　箋薫のとたえをうらむるとのみ思てなくさむる歌なりあやふむは踏の字の心もあるなり
いま見給ひてん　薫の詞行末を御らんせよとなり
返浮舟たえまのみよにはあやうき宇治橋をくちせぬものとなをたのめとや　祕とにもかくにも絶まあれはあやうしとなり　箋薫の心に應してよみたるなり
心やすきさまにて　浮舟をやかて都へうつろはせんとなり薫の心なり
いとようもおこなひつる　祕薫の心なり　箋浮舟の

さまをおほすなり
おほしいつる事ありしにまさりけり　弄浮舟のねひまさりしを歸りて覺しいつるなり
二月（キサラギ）の十日のほとにうちにふみつくらせ給　禁中に御作文有へしとなり
をりにあひたる物のしらへ　箋御遊の事なり時節に相應したる樂なるへし
宮の御こゑはいとめてたくて梅かえなと　匂宮也
すゝろなる事おほしいらるゝ　祕草子地なり　箋薫の好色にすゝみ給へる事を云也
この宮の御とのゐ所に　箋匂宮の禁中にての直廬なり
大將人に物の給はんとて　弄匂宮の御とのゐ所より出給ひしなり祕　箋薫の僮僕に物を宣ふ事なり
やみはあやなしとおほゆるにほひありさまにて　河「春の夜のやみはあやなし梅の花色こそみえねかやはかくるゝ　箋引歌同薫のさま也匂ひはむめにまかふなり又薫の體のみえぬをもあやなしと思よりにほひありさまとかけりおもしろし
衣かたしきこよひもや　河古「さ莚にころもかたしき今宵もやわれを待らん宇治のはしひめ　箋引歌同何をの給ふもあひそらしき所のあることなり　祕引歌同浮舟の事を思へるなり
こそしもこそイ
こと／＼もこそあれと　祕薫のきゝとかめ給ふなり薫も大かたには思ひ給はさるよとなり
宮はねたるやうにては御心さわく　箋匂也薫の口すさみを聞て御心のさわくなり
をろかにおもはぬなめり　匂の心に薫の浮舟をおろかには思はぬと覺すなり
かたしく袖をわれのみ思ひやると　箋匂の浮舟をわれはかり思ひやると思ひつるに薫もおもひ出たるよとなり
わひしくもあるかなかはかりなるもとつ人をおきて
河本人（モトツヒト）　古人（モトツヒト）萬葉　浮舟の薫をもちなから我には心うつしかたしと匂の心にねたみ覺す心なりもとつ人とは薫をさして云
つとめて露（雪イ）のいとたかうつもりたるに文たてまつり給はんとて　祕先夜題を給はりて明朝詩を奉り給ふとみえたり弄　箋翌朝なり詩を獻するなり
おまへに參り給へる

かの君もおなしほとにていまふたつみつまさるけちめにや　祕此年の事不審なり匂宮若菜巻に誕生あり然るを二三歳の兄といへり如何案之匂宮はあたあたしきかたの人なれはわさとわかくかきなせるなり是れ作物語のさまなり莊子には時代の相違したる人をも相對してかける其類なるへし弄同之　箋匂よりも後に薫は誕生なり爰には薫の年のましたるといへり是莊子の筆法なり薫の年おとりにてさへ世を思ひしりたるを匂のさま（もイ）御心のおさまらぬ故に年を下になしたるなり薫はよろつたらひたる故に年のまさるとかくなり云々

あてなる男のほんに　薫の事を云なり

みかとの御むこにてあかぬ事なしとそ　此段かほるの事をほめていへり

さえなとも　祕政道のかたなるへし

おほやけ〳〵しきかたも　祕さえは才かく文才なるへしおほやけ〳〵しきは政道有職のかたなるへし

かゝる事をもしいつらん　祕匂宮折ふしいかにしてかゝる詩をも作り出しけんとなり弄　箋匂宮の御詩のすくれたりと人の申すも御心にかゝらす何として詩をも作りしそと我なから不審に覺すとなり好色にすゝみたる御心をしるへし

かの人の御けしきにもいとゝおとろかれ給けれは　祕薫のころもかたしきなといひてさらにおろかに思ふとは見えさるとなり　私薫のおろかならす思ふかねたましくていよいよわりなくしのひあはすなり

たはかりておはしましたり　箋匂の又宇治へおはしたるなり

京にはともまつはかりのこりたる雪　花春の雪をは待許と詩にも作れり友まつ心なり　箋友まつはかりのはかりといふ字妙なり云々

まれの細道をわけ給ふ　箋雪ゆゑにせはき山道のありさまなり

いつかたもこと〳〵しかるへき　祕内記も式部少輔も皆儀式官とてこと〳〵しき官なり弄箋　祕此度の除目に式部少輔に成たるへしとなり　私此内記除目にいたはりのそむとは此式部少輔を望しにやこゝに式部少輔かけたるとゝあたらしくいへり　花大内記は詔書宣命位記なとをかくつかさなり式

部少輔は献策省試なとをつかさとる職なりいつれもこと〳〵しき職なり

つき〳〵しくひきあけなと　箋さしぬきのすそなとなり内記も身をすてゝ奉公するよしなり

おはせんとありつれと　匂よりかねて仰られたる成へし

あさましうあはれと君もおもへり　雪をしのきておはしたるを浮舟もあはれと思ひしなり

こよひはつゝましさもわすれぬへし　浮舟のいかになりはて給はんと右近は思へとも今宵は雪をしのきて匂のおはしたるに感したる心なるへし

おなしやうにむつましくおほえたるわかき人　祕侍従なり箋

心さまもあふなからぬ　花あふは奥なりあふなきは心あさきなり　私あふなからぬは心あさからぬなり

かの所せうにほふゝてわつらひぬへけれは（とイ）　たゝならは香の所せきもせんなるへけれと薫のにほひにまきらはすなり

夜のほとに立かへり給はんも中々なるへけれは　此暁にかへり給はんは名殘多かるへし又こゝに中一日くらし給はんも人めいかゝなれは川よりむかひに家をかまへて浮舟をゐておはしたるなりその事を時方に仰つけ給へるとなり

さきたてゝつかはしたりけるよふくるほとにまいれり　時方をは彼宿へさきにつかはしたれは夜更てここへ時方かへり参りたるなりさて川むかひへ舟にておはしたるなり

こはいかにし給ふことにかと　右近か心に浮舟をいつくへも只今ゐてかくし給ふかと思ふなり

わらはへの雪あそひしたる　ふるひわなゝく體なりたとへていへり

右近はこゝのうしろみに　箋留守にさふらひて人めをつくろふなり

ちひさき舟にのり給ひて　祕橋にても行へき道にやされと舟にては猶艶なるさまにかけるにや箋　弄宇治橋をわたるへき道とみえたるを舟にてと書るは道すからの體舟にて優なれはなり

つとつきていたかれたるもらうたしと覺す　浮舟のさまなり　匂の心なり

あり明の月すみのほりて水のおもてもくもりなきに
祕此詞にてみれは文つくりたまひしは二月の十日程なりこゝは有明の時分なれは程をへたるなり此雪のさま衣かたしきなといひし時の雪に似たりさてやかてのと（様イ）の外にみえたれと其間程をへたるへし
これなんたちはなのこしまと申て　河古「今もかも咲匂ふらんたち花のこしまかさきの山ふきの花
萬葉には橘島又小島とのくまになとよめり此所は皇子尊の在所也歌枕には河内國とあり如何　但七瀬の所々に大島橘の小島山城國と註せり
されたる常盤木のかけしけれり　箋たゝゆかみ物ふりたる木の體なり又引歌に　橘はみさへ花さへその葉さへ枝に霜おけましてときは木　此歌の心下にふくめり
かれみ給へいとはかなけれと　祕匂の詞なりつゐに霜雪にもうつるましきとなり
匂年ふともかはらんものかたちはなのこしまのさにちきる心は　弄こしまのさきに諸本同　常盤木の色なとを見たまひてかはらん色かとはよみ給へる成へし心はあらはなり年ふともかはらん物かたちはなの懇案に橘は昔をしのふつまと成物なりしかれは橘の名によせて此契年ふるともかはるましきといふ歟
女もめつらしからん道のやうにおほえて　祕女の身にはかやうの事はめつらしとなり　私朝夕なかめやりたる處なから近くてははしめなれはめつらしからん道のやうに覺えてとはかけり
返浮舟たちはなのこしまの色はかはらしをこのうきふねそよるへ（ゆくゑイ）しられぬ　私かの浮舟巻の名なり
たちはなのこしまは　黄ムこしまの云々此こしうき舟なといへるあたり吟味おもしろし　私はかなきさまなる歌なり夕顔上のうはの空にて影やたえなんといへるにかよひたるさまなり
をりから人のさま　箋匂の心なり面白き夜のさまと浮舟となり艶なるさまなり
いたきたまひてたすけられつゝ　祕匂のいたき給ひて又人にたすけられ給ふなり
時方かをちのいなはのかみ　此家の住なり時方か叔父因幡守か家となり

またいとあら〳〵しき　かりそめなる家のしかも半作りなるなり
かきのもとに雪村きえつゝ今もかきくもりてふる　山里のさまなり餘寒の時分なり
かろらかなるほどの御そともなり　祕狩衣なり
うちとけたるさまをいとはつかしく　浮舟の心なり
まはゆきまできよらなる人に　匂宮の事也
なつかしきほどなるしろきかきりを　なつかしきはきならしたる心なり浮舟のさまなり
つねに見たまふ人とてもかくまてうちとけたるすかたなとは　匂宮のつねにおはする六君中君なとうちとけたるとてもかやうのすかたはなしとなりやうかはりてそれ〳〵も匂の御心につくとなり
これさへかゝるをのこりなう　祕右近か外に人のしるをはゝかりたるなり　箋私侍從か事浮舟の心也
わかなもらすなよと　河古「いぬかみの床の山なるいさや河いさとこたへてわかなもらすな　匂宮の侍從にの給ふなり　箋引歌同
いとめてたしと思ひきこえたり　祕侍從か心なり　箋
時かたをしうと思ひて　箋此宿もりは時かたか叔父の因幡守か者なれは時かたをあかむるよしなり
こゑひきしらめ物かたりしをるを　宿もりの時かたへ物かたりするさまなり
いらへもえせす　時方は匂へはゝかり奉りて返答もえせぬなり宿もりは宮のおはしましたるをは知るへからす
いとおそろしううらなひたる物いみに　祕時かたかかく下知するなり　時かたかおもき物いみゆゑここにきたるよしを云
人もたえて心やすくかたらひくらし給ふ　箋浮舟匂宮のさまなり
かの人の物し給へりけんに　祕一日大將にもかくうちとけてむかひ給ひしかとかへりてねたけにおほすとなり　箋薫の事なり
二の宮をいとやんことなくて　祕薫のとなり　箋薫の事を浮舟といひさけんとて女二宮を寵愛したまふよしをかたり給ふなり
かのみゝとゝめ給ひしひとこと　私是をの給はぬは薫の浮舟へ懇切なるとしらせしとなり仍にくきといへり　花薫の衣かたしき今夜もやとすし給ひし

を云ふにや　祕草子地なり衣かたしきと薫のすし
給ひし事なり弄箋
いみしうかしつかるめるまらうとのぬしのきてなみ
えそ　箋時方に匂の仰なり　花時かたをしのふなり
祕時かたを此宿もりは主と思ひてかしつくを宮は
おかしと覺してたはふれての給ふなり　私さてな
みえそとはかろ／＼しく宮つかふさまなとを宿も
りにみえそとなり　弄時方を宿守の主とおもひて
かしつくをおかしと覺して宮につかへ奉るをなつ
かへそとされての給ふなり
この大夫とそ物かたりして　左衞門大夫時方なり
わかすむかたを見やり給へれは　箋浮舟のすみ給ふ
宮なり
山はかゝみをかけたるやうに　祕あけまきにもあり
おもしろき詞みる體なり　私月雪の體を四山如玉
なともいへり
あはれおほくそへてかたり給ふ　匂の深切に道のさ
まなとをいひなし給ふなり
河みねの雪汀の氷ふみわけてきみにそまとふ道はまと
はす　峯の雪汀の氷に勞苦したるみちは事の數なら
す浮舟を思ふ心の切なるをいひたてたるなり
こはたの里に馬はあれと　花君を思へはといふ心な
り　河「山城のこはたの里に馬はあれと君を思へ
はかちよりそ行箋引歌同
返浮舟ふりみたれ汀にこほるゆきよりも半天にてそわれは
けぬへき　祕浮舟のうたなり　箋汀にこほるはつ
もりたる雪なりわれはおちつかぬ心をいへり　祕
汀にふる雪は波にも消やすき物なれとも自然にこ
ほりて消ぬ事あり此うき舟もふりつもる程もなく
半天にて消ぬへしとなり身をたとへていへり「な
かそらにゆきもやられすおほつかなかすみはれせ
ぬしかのやまこえ
このなかそらをとかめ給ふ　花いつかたもとりはつ
して中やうの身となるべきとの給ふと聞なし給ひ
て宮のとかめ給ふ也　祕一かたならぬを匂のうら
み給ふなり　私匂の心はかくれかなと求てわかゝ
たへおとしつけたるにかく云をとかめ給ふなり
けにゝくゝもかきてけるかな　箋浮舟の心なり
さらてたにみるかひある　匂の御さまなり
御物いみふつかと　匂の御物忌のよし京の宮にても

仰らるゝなるへし

ごきゝぬにこうはいのおり物　花濃打のきぬなり　祕こきゝぬは紫のきぬなり　箋紅のきぬなり云々私紫然〔成イ〕へし

あはひおかしう　箋かさねなりかさねてきなしたるさまなり

しひらきたりしをあさやきたれはその裳をとり給て　河しひらはうは裳の事こゝに分明なり　弄侍從かしひらをかへたるを浮舟君にきせしなり　花しひらはうは裳なり褶の字なりその裳をとり給てこいへるはやかてうは裳の事なり　祕裳なり　箋あざやぐは鮮なるなり衣裳のよくなりたる體なり

御てうつまいら〔ゐイ〕せ給ふ　侍從か裳をとりてかりそめに浮舟にきせ給ひて匂宮へ御手水まいら〔ゐイ〕せ給ふこなり

姫宮にこれをたてまつりたらは　祕女一宮なり花

その程かの人にみえたらはと　匂の浮舟をゐてかくさん程薫に又あひ給ふなとちかはせなとし給ふをいらへもせぬとなり

めのまへにたに思ひうつらぬ　匂の直にの給ふ程さへ薫に又あはしとはさたかにいはぬをねたましくむねいたくおほすなり

うらみてもなきてもよろつにの給ひあかして　うらみてもなきてもいはんかたそなきかゝみにみゆるかげならすして　箋引歌同こと葉はかりされり云々

夜ふかくゐてかへり給ふ　箋又舟にて宇治へ歸るなり

いみしうおほす人は　匂のうらみての給ふなり浮舟のいみしうおほすとも薫は我ほと深切ならしと也

うなつきてゐたる　浮舟のさまなり

やかてこれよりわかれて　匂は妻戸によりすくに京へおはするなり

いとなやましう　是より匂宮の物おほすさまなり

御ふみたにこまかにはかきたまはす　祕浮舟への文なり人しけきゆゑなり

さかしきめのと　まゝといひし人の事浮舟のめのとなりかしこにもは宇治なり　弄乳母の女歟　又云常陸守か女の事少將妻事歟　祕此程はめのとはるすなりしか今かへりたるなり　箋此程はめのとの

留守にて匂宮の密通も心やすかりしなり此めのとあらは密通はなりかたかるへし人の敎なり
かへりきにけれは　弄産の事いまたしきにや歸り來りしなり
心やすくもみえす　弄浮舟も文を心やすく見給はぬなり　花匂宮の文をえ見ぬとなり
かくあやしきことすまゐを　宇治の宮いまたありつかぬさまを云
かのとのゝもてなし給はんさまを　箋薫のし給はんやうをまつなり母君の心也
ちかくわたしてんと　箋忍ひてなから京へ浮舟をわたし給はんとの事なり
わか心にもこれこそ有へき事に　箋浮舟の心なり
あなかちなる人の　箋匂の思ひいられ給へるさまのわかき心にしみ（うらみイ）たる成へし
いとゝしうおほしたえて　祕匂の御いてあらん樣もなしとなり
おやのかふこは所せき物にこそ　河たらちねのおやのかふこのまゆこもりいふせくもあるかいもにあはすて　祕いもにあはすての心なり　箋引歌同

弄いふせきといふ心なり所せきとは思ふやうならぬ心なり
匂
なかめやるそなたの雲もみえぬまて空さへくるゝ比のわひしさ　祕雨のうちを思ひやりてみるへし　箋空さへくるゝとは袖の涙にかけてといへり
ことにいとおもくなとはあらぬ　箋浮舟の性をいへり
いとかゝるを思ひまさりぬへけれと　祕匂宮へこそ心はひくへけれとなり箋
はしめよりちきり給ひしさまもさすかにかれは　祕薫なり
世中をしりにしはしめなれはにや　浮舟の心なり
かゝるうき事きゝつけて　匂宮にあひし事薫をは心ふかくてはつかしく思ふなり
いつしかと思ひまとふおやにも　浮舟の母のいつしか思ふまゝなる世ならんとまつをいふなり
かく心いられし給ふ人　祕匂宮なり箋
かのうへのおほさん事　花かのうへは中君の御事なり　祕たとひ寵ありとてもとなり
あやしかりし夕くれのしるへはかりにたに　弄匂の

二條院にて浮舟にちかつきより給ひし時の事なり　祕かくれなき世なりけれはと云まて中君の心なり

かの二條院にてほのかにの給ひしゆくえをたにもあなかちに尋ね給ひし御心なれは薫の京にすゑ給ふとても覺しめしやむ事は有ましきと也　私よろつかくれなき世なれはと云より跡へつゝけてみるへし匂のあなかちなる御心を思ふ浮舟の心也

ましてわかありさまのともかくもあらんを　弄薫の御方へわたりぬとも又いかに成ぬとも匂はよく尋きゝ（きイ）給ふへしと思ふなり女のかく思ふは心のますにて畢竟かほるの心をはゝかるなり

わか心にもさすかにきすありて　祕我身の匂の事をはわするましきとなり

かの人にうとまれ奉らん　祕薫の事也

かの殿より御つかひあり　薫よりなり

これかれとみるも　箋匂と薫との文なり

猶ことおほかりつるを　祕匂の文なり弄箋

なほうつりにけりなと　祕匂に思ひうつりぬるにやとみたてまつるなり

ことわりそかし　祕侍從か詞

殿の御かたちをたくひなしと　薫の事なり

きさいの宮にもまいりて　箋匂の御母后明石の中宮なり

うしろめたの御心のほとや　弄右近か侍從か心を云也

殿の御ありさまにまさり給ふ人は　箋右近か薫をほめていふなり

猶この御ことはみくるしきわさかな　匂と密通の事なり

心ひとつに思ひしよりは　祕侍從ともろともにいひかはせる事なり

のちの文には　箋薫の文なり

思ひなから日ころになる事　祕薫の文の詞也

おろかなるにやはなと　薫をおろかに覺すゆへにといふなり

薫 水まさるをちの里人いかならんはれぬなかめにかきくらすころ　祕宇治のわたりをいへり　箋なかめは長雨をもたせたり

白きしきしにたて文（みめなさにイ）　箋薫の文のすくすくしき體也

まつかれを人みぬ程にと　祕匂への御かへりをいそ

くなり
けふはえきこえましとはちらひて　祕あなたこなた文〈人イ〉の來るにはちらふ心ある歟

浮舟
里の名をわか身にしれは山城の宇治のわたりそいと住うき　弄里の名とは宇治と云心なり　又末の句にうきとよめりいとゝといひて感あり　祕里の名とは宇治をいへり喜撰か歌より出たりいとゝと云へる字妙なり里の名といひてうきはみえたるに又かさねてうきと云る感有なり此歌新拾遺題しらすむらさき式部とあり箋　里の名をわか身にしれは黄ム云々身のうさはいつくとてもかはる事はあるへからすされとも宇治といふ名をわか身に引かけたるやうなれはさらに住うしといへる歟仍畢竟おなしことなれとも少ゆひやうかはるにや
宮のかき給へりしゐを　祕男女をかきたまひし繪なり箋
なからへてあるましき事そと　浮舟の心匂との契に末とけましき事そと思ひなすなり
ほかにたえこもりて　薫にむかへられて匂に又逢みさらんも口をかしかるへしとなり

匂へ返浮舟
かきくらし晴せぬ峰のあま雲にうきて世をふる身をもなさはや　祕雨雲とみゆ　天雲いつれも用之云々　祕雨雲天雲兩說共に用之雲は行衛なき物なりさやうに我身をもなしたきとなり　箋あま雲は天雲なり此歌は雨雲にかるなり雲のごとく行衛もなく消たきとなり　私うきてよをふる身をもと云つゝきは雨雲のうきて世をふるかごとくに身をもなさはやといふ成へし如くといふ文字を中へいれてみるへき歟如何
ましりなんときこえたるを　河行舟のあとなきかたにましりなはたれかは水のあはとたにみん　花白雲のはれぬ雲ゐにましりなはいつれかそれと君を尋ねん　祕花鳥の引歌にはよくかなへり河海引歌はつゐには身をなけんと云心あれは浮舟の心によくかなへり二首共に用之弄同之
さりとも戀しと　箋匂の心なり浮舟の心をおしはかるなり
物思ひてゐたらんさま　箋浮舟の物思ふらんさまを匂の思ひやり給ふなり
まめ人はのとかに見給ひつゝ　祕薫なり箋

薫へ返し浮舟
つれ〳〵と身をしる雨のをやまねは袖さへいとゞ水かさまさりて　河古今かす〳〵に思ひ思はすとひかたみ身をしるあめはふりそまされる　祕薫への返歌なり　箋引歌河に同此歌の心を下にふくめり薫をかこちたるさまなり

女君に物かたりなとの給ひてのついてに　祕女二宮なり箋

なめしともやおほしめさんと　箋薫の詞女二宮をあなつり申とやおほさんと用捨なり

さすかにとしへぬる人　浮舟を女二宮よりもさきからもちたるやうにいひなし給ふなり　薫の妻子なとをもつましきと思ひし事なり

れいの人ならて過してんと　れいの人ならてはよのつねの人のやうならてと云なり

かくてみたてまつるにつけて　箋女二宮ゆへ世もそむきかたきといひなし給ふなり

ありと人にしらせさりし人のうへさへ　浮舟の事なり女二宮ゆゑ世の人のやうなる心のいてきて昔はかすまへさりし人をさへ思ひあつかふとなり

いかなる事に心おくへき　祕尤上臈しき御返答なり

箋弄殊勝の心なり

内になとあしさまにきこえさする人や侍らん　箋女二宮の御心はさることなれとも内裏なとへ人のあしさまに申なしてはとなり

さはかりのかすにたに　箋又薫の分別なり内裏なとへはきこしめし入へき人数ならぬと浮舟の事をいふなり

つくりたる所にわたしてんと　箋三條わたりなり

さうしはらすへき　箋ふすま障子なり

この内記かしる人のおや　弄大内記かしうとなり　箋大内記道定の父大藏大輔仲信也薫の家人なり

きゝつぎて宮にかくれなくきこえけり　箋きゝつたへてなり　匂宮へ此事かくれなしとなり

御随身とものの中に　御すい身にゐかくものとものある成へし

いとゞおほしさはきて　祕匂宮なり　箋薫の浮舟をむかへとらぬさきに匂のゐてかくさんと覺すなり

わか御めのとの　匂の御乳母なり

しもつかたにあるを　下京なるべし

だいじとおほしたるにかたしけなけれは　匂の御め

のとの心なりわりなく仰らるれは領狀申なり
これをまうけ給てすこし御心のとめ給　此家をかま
へ出給うて匂のすこし心やすくおほすなり
この月のつこもりころにくたるへければ　祕三月な
り　弄除目過て任におもむくなるへし箋
やかてその日　家あるしのくたる日則浮舟を彼家へ
うつさんとなり
こゝにもめのといとさかしけれは　箋浮舟のめのと
なりまゝなり
大將殿は卯月十日となん　薫へは卯月十日に浮舟を
わたさんとなり
さそふ水あらはとおもはす　河古わひぬれは身をう
き草のねをたえてさそふ水あらはいなんとそ思ふ
祕薫の方へしかとわたるへき人なれはさそふ水あ
らはいはん人にてはなしとなり　箋薫の方へもし
かと心のおちつかぬとなり
はゝの御もとにしはしわたりて　常陸介かあたりな
り是もまた浮舟の心中不定なる所みえたり
少將の女子うむへきほと　浮舟のいもと常陸か女な
り

はゝそうちわたり給へる　浮舟の母の宇治へ來たる
なり
めのといてきて殿より人々のさうそく　まゝかはゝ
にかたるなり薫よりの衣裳なとの事仰られたるさ
まを云なり
心ちよけなるを見給ふにも　浮舟の心中なり心ちよ
けなるはめのとかさまなり
けしからぬ事とも　祕匂よりのむかへ給はん事はい
とあるましき事となり　匂の事ゆゑいかなる事か
いてこんと思ひわつらふ浮舟の心中なり
あやにくにの給ふ人はた　花是は匂宮の御事なり
祕匂の御心にてはいつくまても尋給ふへしとなり
八重たつ山にこもるとも　河古白雲のやへたつ山（たえすたなひく歟）
の峯にたにすめはすみぬる世にこそ有けれ　白雲
のやへたつ山にこもるとも思ひたちなはたつねさ
らめや　後の歌の心歟　以上河箋　不及引歌匂の
事をいへり　私此引歌後の歌よく叶へり又是は匂
宮の浮舟への給ひおこせたるさまをいへり一旦う
き舟の匂へかくれたりともいつくまてもたつぬへ

しされとも外聞もいかゝとなりたゝ匂にうちなひきゐてかくされよとの給へるはされたるとなり

けふもの給へるを　祕匂より今日御文のあるよしはたしかになけれともさためて有けるなるへし　私此前の詞はけふの匂の御文のさまをいひのへたるなり

なとかくれいならす　浮舟の物思ふゆゑを母のしらぬなから母の詞なり

なやましけにせさせ給ふといへり　まゝか詞なるへき歟母にいひきかするさまなり

いかなる御心地そと思へと　祕自然懷姙なとにてかと思へとなり箋

いし山もとまりにきかしと　祕懷姙にはあるへからす月のさはりとて石山にもまいり給はされはとなり箋　弄浮舟のなやみ給ふを懷姙にやと母の思ひしかとも又月の事の有しによりて石山詣もとまりしはたゝならぬにてはなきにやといひしなり花　私云かくはあれとも月のさはりの事はしられぬ事なり匂宮のおはせしゆゑにつくり事にいひしなりかたはらいたけれはふしめなり　弄うき舟の事なり

私月のさはりなとの事なれはなるへし　箋又匂の御事なとをも思ひ出たるへし

有明の空を思ひいつるなみた　祕橘のこしまの時の事を思ひ出給ふなり箋

あま君よひいてゝ　箋辨尼なり

こひめ君の御ありさま　箋大君の事なり

さるへき事もおほしいれたりし　何事も心ふかくおほしとゝめしゆゑにはかなくうせ給ひしといふにやかゝる人のいのちなかゝらぬためしにいふにやとみゆ大君の事なり

おはしまささましかは　祕辨のいふなり故姫君のおはしまさましかはといふ也

宮のうへなとのやうに　箋中君の事なり

わかむすめはこと人かは　祕母の心なり浮舟もおなし事と思ふなり

思ふやうなるすくせのおはしはては　箋薫の心かはらすは中君におとらしと母の思ふなり

物をのみ思ひしけしきのすこしうちゆるひて　箋浮舟故に母の物をのみ思ひしを薫のかくておき給へは母の心のすこしゆるへるとなり

かくわたり給ひぬへかめれは　浮舟の京へ出たる事なり

こゝにまいりくる事かならすしもことさらにそ　祕京に浮舟の出給はゝことさらにこゝにまいる事ありかたしとなり　箋こゝは宇治なり

むかしの事もこゝろのとかに　八宮大君なとの事なり　祕弁か詞也　箋弁か身のいま〳〵しきと卑下するとなり

こまやかにみたてまつりきこえさせんも何かはと　大君なとの事を思へは弁か身をいま〳〵しく思ひて此浮舟にはさのみしたしくせぬよしをいふ弁か詞なり

うちすてゝわたらせ給ひ侍りなは　箋浮舟の京へわたり給はゝ弁か跡に殘らん事をいへり

かゝる御すまゐは心もとなくのみ　宇治の里の心ほそき事をいへり

よにしらすおも〳〵しくおはしますへかなる殿の　祕薫の事なりよくそ中たち申せしとなり　箋薫のなほさりならす實々しきをいふ

おほろけならしときこえおき侍にし　弄弁尼か媒せしはおほろけならしと思ひしによてなり

うきたる事にやは侍りけると　弄弁か思ひしやうなりうきたる事ならすといふなり

のちはしらねとたゝいまは　祕母の詞なり箋　私母の詞なれは卑下していへり

おほしはなれぬさまに　箋薫の浮舟へ懇（戀イ）なるへし

たゝ御しるへをなん思ひ出きこゆる　箋弁尼の中たちしたるをうれしく思ふとの母の詞なり

宮のうへのかたしけなくあはれに覺したりしに　箋中君のねんころにし給ひて浮舟を二條院におき給ひし事をいへり

つゝましき事なとの　箋浮舟の二條院にかくれすみし所へ匂宮のおはしたりし事なり其時實事はなし

中宮（空イ）に所せき御身なりと　是は浮舟をいつくにかおかんと母の思ひなけきし心を云なり

あま君うちわらひて　箋弁なり

この宮のいとさわかしきまて宮におはしますなれは　祕匂宮の事なり　箋弁か詞なり

心はせあらんわかき人　あた〳〵（はイ たイ）しからぬわかき女房なとはさふらひにくかるへしとなり

大かたはいさめてたき御ありさまなれと　匂宮の御
ありさまなり
さるすちの事にて　祕中君にはかゝる心なり弄
うへのなめしとおほさんなん　箋中君なり匂宮にな
ひき申ては中君のあしくおほさん事をいへり
たいふかむすめの　大輔君は中君か女房也前にあり
さりやましてと君はきゝふし給へり　君は浮舟なり
中君に宮つかふ女房なとの事をさへかくとり〳〵
に云る浮舟の匂宮にむかへられて京へおはしたら
んを中君のきゝ給ひてはと思ふ心也かやうの事に
もいよ〳〵身をすてんと思ひなり給へるなるへし
あなむくつけやみかとの御むすめをもちたてまつり
祕母の心なり女二宮をおきたてまつりなからかく
わかむすめをさしいたす事はおほけなき事となり
されとこれはかけはなれたる事なれは心やすしと
なり
されとよそ〳〵にてあしくもよくもあらんは　弄薫
も女二宮もち給へれとも他人の事なれはいかゝせ
んとなり
よからぬ事をひきいて　祕匂宮の御かたへよりたる
事はいさゝかもわつらはしとなり
みたてまつらさらまし　匂宮のかたへよりたる事な
とあらは母の心中にはかなし（がろ〳〵しくィ）思ふとも外聞いかゝ
なれは申うけたまはらしなと浮舟にいひきかする
なり
いひかはすことゝもを　母と辨とかいふ事なり
いと心きもゝつふれぬ　祕浮舟の心なり箋
猶わか身をうしなひてはや　浮舟のかやうの事とも
聞て思ひつゝくる心中なり
この水のおとのおそろしけに　かやうに浮舟の心は
思ひつゝくるをりしも川波なとのあらきなるへし
かゝらぬなかれもありかし　弄母の詞なり箋
よにすあらましき所にとし月を過したまふをあは
れとおほしぬへきわさになんなと母君したりかほに
いひゐたり　弄辨尼のかゝる所に年月を過しけるを
あはれみたる心したりかほなり此義不審　私年月
といふ此義ある歟　以上弄　祕辨尼のかゝる所に
年月を過しけるをあはれみたるこゝろしたりかほ
なりと云義ありいかゝ只是はわかむすめをひさし
くこゝに薫のうちすてゝおき給ひし事を母のいへ

るなるへし年月といふによりて別の義あれとたゝ久しくといはんためにとし月といふなるへし　私祕の義尤面白しうき舟のかゝる所に程へておき給はんは薫の御憐愍もあさきと思ふへきにされともけふあす京へむかへ給はんとあるはさこそあるへき事よと母のいふやう成をしたりかほなりとはいへり

むかしよりこの川のはやくおそろしき事を　此川にて人のあやまちしたる事をみな〳〵いふよしをかけり浮舟の事をかくへき用なり

さいつころわたし守かむまこのわらはさほさしはつしておち入　花日本紀云太山守皇子隨兎道河而沒歌云　千はや人うちのわたりに棹とりにはやけん人しわかもこにせん　祕おそろしき所といへり花鳥にみえたり

いたつらになる人おほかる　弄花にあり

君はさてもわか身のゆく衞もしらす　浮舟の心なりゆくゑもしらすとは身をなけん事なとを思へる成へし

たれも〳〵しはしこそ　薫匂なとなるへし

なからへて人わらへに　箋薫と匂宮との間に聞にくき事いてこんとなり　それにくらへては身をすてんは一旦の事なるへしと思ふなり存命してはその思ひたゆましきとなり

うちかへしいとかなし　これはおやのよろつに思ひいふ有さまをといへる詞へかけてみてしかるへき歟

ねたるやうにてつく〳〵と思ひみたり　浮舟の心中なり

なやましけにてやせ給へるをめのとにもいひて　浮舟のおとろへたるさまを母の乳母にいふなり

みたらし川に身そきせまほしけなるを　河戀せしと

みたらし川にせしみそき神はうけすもなりにけらしも　花戀ゆゑにかくなやむとかたへの人はしらぬと女君の心に思ひ給へるなり　祕匂宮の事ゆゑとなり　箋浮舟の心中なり戀せしと思ふは匂の事を思ふゆゑなり祭祓といふより思ひよれり　私此浮舟の事には形代の事なとあり戀しき瀬々のなてものなといへるよりかやうの事おほし出いつれも御祓河なと前表よろしからすしてつゐに身をなけ

んなと思ひよれる心にかけるなるへし
人すくなゝめり　花これより母君の詞なり　箋母のいひをくさまなり　祕京へわたさんにつけても人すくなにては人からをもえらふへきとなり
いまゝゐりはさゝめ給へ　箋いま參りの心しらぬなとを京へめしぐし給ふましきそとなり
さうしみこそ何事も　祕女二宮の御あたりをいへり　弄女二宮の御かたなとは上﨟にて物えんしもなほさり成ともよからぬ中となりてとは次々の人のよろしからぬ事し出しなんと心つかひせよとなり
わつらはしき事も　箋下々の人の中にあしき事もいてくるとなり
かいひそめてさる心し給へ　潜也いかにもしていてぬさまにて然るへしとなり一本にかくしひそめて　箋隱潜
かしこにわつらひ侍る人も　祕少將のめの子うむ事なり
いと物おもはしく　箋うき舟なり
又あひみてもこそと思へは　箋下に思ひさたむる事のあるゆゑなり

心ちのあやしう　祕浮舟の詞なり
しはしもまいりこまほしう　弄浮舟の詞なり母のかたへ行たきとなり箋祕
さなん思ひ侍れと　祕母の詞也
かしこもいと物さわかし　弄少將の子[妻のイ]うむをりの事なり
はかなき事なともえしやる[なイ]ましく　箋衣なとたちぬふやうの事もしか〳〵なるましきとなりせはくさわかしき所なれはなり　祕京へいて給ふいとなみをも母のかたにては人々もしあへかたきとなり
たけふのこふにうつろひ給ふとも　河みちのくちた[にイ]けふのこふにわれありとおやには申たれ心あひの風やさきんたちや　道口律弄催馬樂見河我はありとおやにまうしと云詞あれはいつくにおはします共とおやのいひたる詞なり　祕催馬樂道口の歌なりいつくにおはしますともまいるへしとなり　私勘催馬樂註云道口とは越前國をいふなり心あひの風は風の名なるへし或說云さきむだちはさといふは汝といふ心なりきんたちは公達なり萬葉に鶯の卯の中のほとゝきすさが父に似てさが母に似すと

いへりさはしや汝といふ詞なり或みちのくにと云
々　箋には陸奥とあり　心あひの風東風なり
しのひてはまゐりきなんを　浮舟の母のしのひては
参らんとなり
なほ〳〵しき身のほと　祕身のかすならさるなり箋
受領の妻なる事を母のなけきいふなり
との丶御ふみはけふもあり　箋薫よりの文なり
なやましときこえたりしを　箋浮舟の煩のやうなる
をの給へり
みつからと思ひ侍るを　祕文の詞なり
宮は昨日の御かへりもなかりしを　祕昨日文ありし
成へし母の愛にありしゆゑに返事をし給はぬなる
へし
いかにおはしたまふそかせのなひかんかたもうしろ
めたく　河うら風になひきにけりな里のあまのたく
もの煙心よわさは　弄鹽やくけふりの歌の心也
すまのあまの鹽やく煙風をいたみおもはぬかたに
たなひきにけり　私一かたにさたまり給へとなり
箋鹽やくけふり風をいたみを下にふくみたり
雨ふりし日きあひたりし御つかひとも　花なか雨の

此の事なり　祕まへのとおなし使なり
との丶みずゐじん　薫の隨身なり今の使者なり是か
匂よりの使をとかためたるなり
かの少輔か家にて　花少輔は式部少輔なり　祕大内
記なり箋　箋式部少輔か家にてなり　匂のしる人
の式部少輔大内記は兼官也此少輔は薫のかたの仲
信かむこなり
まうとはなにしにこ丶にはたひ〳〵まいるそと丶ふ
花宮の御使少輔はかもとにてつねにみる物なりま
うとは眞人なり人を稱する詞　薫の隨身の匂の使
をとかめたる詞なり
わたくしにとふらふへき　匂宮の使の陳したる詞な
り
わたくしの人にやえんなる文をはさしとらする　薫
の隨身のまたいふ詞也
けしきあるまうとかな　此けしきあるは何とやらん
不審なる心とみえたり
まことはこのかうの君の御ふみ　花かうの君は出雲
權守時方なり　祕時方なり　出雲權守の使となり
箋　弄出雲權守か文といへる歟云々時方しせん

にこゝへかよはんといるにや
ことたかひつゝ　陳したる詞の前後相違したるとなり
おの〳〵まゐりぬ　薫の隨身も匂の使もかへりたるを云
うと(かイ)〳〵しき物にて　秘此隨身なり箋　此隨身匂の使の不審さにともにあるわらはを匂の使に目つけにして殘したるなり
左(サ)ゐもんの大夫の家にやいると　花左衛門大夫は時方か家ぬしなり　弄左衛門大夫は則時方なり出雲權守を兼たるなるへし時方なり左衛門大夫にて出雲權守を兼たるなりふるき系圖あやまり有花鳥にも時方か家ぬしとあり古來まちかひたる事なれとわつらひなき事なり箋
宮にまいりて式部少輔になん御ふみはとらせ侍りつると云　匂宮なり式部少輔は大内記なり薫の隨身の目つけにおきたるわらはのかへりていふ詞なるべし
さまてたつねんものともをとりのけすはおもはす　薫の隨身よりも匂よりの御使は猶下﨟の者なれはをとりの下すといふ
とねりの人に見あらはされにけんぞくちをしきや　箋さまでたつねんものともといふよりこゝまて草子地なり
殿にまいりていま出給はんとする　秘六條院より薫の出給ふなり　私殿にまいりては薫の三條宮なるへし只今六條院へ參り給ふなり
六條院にきさいの宮の出させ給へる　箋明石中宮六條院へ出給へるなり
御ふみまいらする人に　箋宇治の御返事なり御隨身の手より人の取次て參らするなり
あやしきことの侍りつる　隨身の文とりつく人に云詞
何事ぞとゝひ給ふ　箋薫のとひ玉ふなり
この人のきかんもつゝましく　秘文をとりつぐ人なり　隨身の心なり用意あるなり
とのもしり見しり給ひて　秘子細あるべしと推し給ふ也薫の隨身が氣色を見知てかさねてとひ給はぬなり
宮のれいならすなやましけに　秘明石中宮なり箋

弄中宮の事也
宮たちもみなまいり給へり　今上の宮たち別して明石の中宮の御はらなるへし
かの内記は上官なれはおくれてそまゐれる　河上官は政官なり太政官の被官なる故なり上官とは充字に書奉るなり　祕政官にて詔書宣命なとの事にひまなし又式部少輔なれは公務にひまなき故に遅參するとなり箋　弄河海にみえたり
この御ふみたてまつる　祕宇治よりの返事なり
宮たいはん所に　箋宮は匂也　祕六條院の中なるへし明石中宮おはしますかたの臺盤所なるへし箋
大將の御まへのかたより　祕中宮の御前なり箋　箋大將は薫なり
せちにもおほすへかめる文のけしき　箋匂の心に入たる文の御らんしやうと薫の思ふなりせちは切なり
ひきあけて見給ふ　薫のたちどまりてみる折ふしも此文を匂のひらき給ふなり
くれなゐのうすやうにこまやかに　浮舟よりの返事のさまなり

おとゝもたちてとさまにおはすれは　祕夕霧なり　弄とさまは外の方へなり
この君はさうしより出給ふとて　河曹司　府曹司なり　弄薫なり　河海に曹司と云々障子歟　祕曹司といふ義あれとも障子用之
おとゝいて玉ふとうちしはふきて　箋匂の御らんする文を夕霧にみせしとて薫の匂宮をしはふきておとろかし申玉へるなりいつ〳〵までも用意ある人なり
おとろきて御ひもさし給ふ　花直衣の紐をはつして休息し給ふかおとゝを見給まひて紐をさし給へるなり　祕うちとけたるさまをひきつくろひたるなり　箋ひもはくひかみの事なり匂のおとろき給へるさまなり
とのもついゐ給ひて　箋夕霧なり
まかて侍ぬへし　祕夕霧の詞
御しやけの久しく　邪氣なり明石中宮の御煩のさまなり
おとゝは宮をさきにたてまつり給ひて　箋夕霧の匂

宮をつれ奉りて退出なり
あなたへわたり給ひぬ　弄夕霧のかたへなり　私夕霧のかたもおなし六條院の内なるへし
このとのはおくれて出給ふ　祕薫なり　六條院まてなれはおくれ給へり　私此義よし只跡より退出の義なり
随身けしきはみつるあやしとおほしけれと　箋宇治への使の人なり
御前なとおりて火ともすほとにすゐしんめしよす　薫の前駈なり火ともすは松明の事なり明石中宮より退出し給ふ時のさまなりこのひまに宇治への使の随身をめしよせてけしきはみつる事をとひ給ふなり　祕火なとともすまにとなり
けさかの宇治に　これより有つる事を随身の申詞なり
むらさきのうすやうにてさくらにつけたる文を　花櫻かさねはうら紫なれはうすやうの色もたよりあるにや
ことたがへつゝそらことのやうに　詞の前後參差したるやうなり

君あやしとおほして　祕薫なり箋
それは見給へす　随身のわれはみぬよしを申詞なり
下人の申つるはあかきしきしの　下人は目つけのわらはなり　箋浮舟より匂へ返事の紙の色なり
おほしあはするにたかふことなし　箋中宮の御かたにて匂の見給ひし文に薫の思ひ合せ給ふなり
さまてみせつらんをかと〳〵しとおほせと　随身の心はせをかと〳〵しと感し給ふ心はあれとたしかに人にしらせしとくはしくとひ給はすなほさりにておき給ふなりこれまたかをるの用意なり
道すから猶いとおそろしく　薫の匂の事を道すから思ふさまなり
ゐなかひたるあたりにてかやうのすちのまきれは　箋浮舟のかた田舎にてそたちたる人なれはよろつかやうのかたもつゝましく律儀ならんと心安くかをるの思ひ給ひしわか心をさなしとおほすなり　かやうのすちとは好色風流のかたなり
さてもしらぬあたりにこそ　是より薫の匂宮の事を薫の思ふ心なり
あやしきまてし給へし　箋中君を中たちし給ひし事

なり
ゐてありきたてまつりし道にしも（身イ）　これは宇治のかよひ給ふ事をいへり
たいの御方の事を　祕中君の事なり箋　中君へは薫の心かゝりなからさもなきを我心をもしとをほすなり
それはいまはしめて　箋中君は薫のそひふしをおほし大君もゆるし給へる人なれはかくいへり
たゝ心のうちのくまあらんは　祕内省不疚といへり
箋中君は前よりのむつひの體叉今も成へき事なれとも心中にくまあらんは口をしかるへしとの義にて薫は思ひつゝ過るよしなり
わかためもくるしかるへきにこそ思ひはゝかるもをこなるわさなりけり　くるしかるへきによりこそと句をきりてよむへししからねは末へよみくたすにてにをはつゝかすくるしかるへきによりこそと云下へ我か思ひなから遠慮すれといふ心をいれて見るへし思へは薫の心おくれたると我なから思ふ心なり
この頃かくなやましく　匂宮のこのころなやましくおはして御みまひの人なとしけきとなり
おはしやそめにげん　箋宇治へはや匂のかよひそめ給へるかとなり
はるかなるけさうの道　箋宇治へ遠き事なり
おはし所たつねられ給ふ日も　箋匂の尋られし事ありしを思ひ合するなり
むかしを覺し出るにもえおはせさりしほとのなけき
花匂の昔中君の御もとへかよひ給ひし時の事なり
箋中君へかよひ初給ひしにえおはせぬ時は匂宮のかやうになやましくし給ひしかともしかあるゆゑなりと思ひあはするなり
女のいたく物思ひたる　箋浮舟なりいつそや薫の宇治へおはせし時の事を思ひ出給ふなり
ありかたきものは人の心にもあるかな　弄よに人のありかたきとなり箋
らうたけにおほとか也とは　箋浮舟の心樣を云り
この宮の御くにては　河一具也一具の心なり
思ひもゆつりつへく　祕薫の匂へゆつりもすまほしく思ふなり
のく心ちし給へと　弄とほのくなとの心なり

やんことなく思ひはしめし人ならはこそあらめ　私
本臺なとにせんにこそきすとも思ふへけれとなり
箋　弄本たいなとにせんにこそすこしのきすもく
るしからめたゝさるものにては見ゆるしてんとな
り
かの宮かよひとり給てん人のためのちのいとほしき
をも　箋浮舟を薫のすておきたらは必匂宮のたつね
とり給はんとなり自他の行末のためなと御遠慮も
あるましき人そとなり
一品宮の御かたにひと二三人　弄匂宮のけさう人を
一品宮にさふらはせてみやつかはせ給たくひにや
浮舟をもし給はんとなり　細宮つかへ人のたくひ
なるへしとなり　箋匂宮の一腹の御あね一品宮に
思ひ人とも二三人とふらはせ給ふその類成へしと
なり
さていてたちたらんをみきかん　浮舟の事なり　細
さやうに一品宮にみやつかへに出たちたるをきゝ
てはをしかるへきとなり
けしきみまほしくて　細やうたいをみん爲なり
れいのすいじんめして　宇治へ使の隨身なり

みちさたのあそんは猶なかのふか家にかよふ　細薫
の詞なり　仲信は薫の家司なり弄　箋道貞は大内
記なり　仲信かむこなり
さなん侍る　隨身か御返答なり
宇治へはつねにやこの有けんをのこはやるらん　薫
の詞也有し文の使のをのこなり
みちさたも思ひかくらんかし　細わさとまきらはし
にかくの給ふなり道貞は内記なり　弄道さたは内
記か事なりかへりて心つかひなり
人にみえでをまかれ　忍ひてゆけとの給ふなり
せうかつねにこのとのゝあないし　式部少輔なり
道さたなり仲信かつてにて薫の御かたの事をとひ
きゝしを思ひ合すれと薫へは憚りてえ申さぬとな
り
君もけすにくはしう　薫の用意なり此隨身にもよく
たしかにしらせしとてくはしくはとひ給はぬとな
り
かしこには御つかひのれいよりしけきに　箋宇治な
り
物思ふ事さま〳〵なり　匂宮の事ゆゑ心しりたる人

は心くるしきなるへし

諸波こゆる比ともしらすすゑの松まつらんとのみおもひけるかな　花古「君をおきてあたし心をわかもたは末の松山波もこえなん　祕我をこそまつらんと思ひしはおこかましき事となり　私末の松山の本縁これを引くし

人にわらはせ給ふなと　祕宮をさしていへり　箋これを人にみせ給ふなとなり　孟此波こゆるの歌の心なとを人にわらはせ給ふなり宮の事を思ふ心なり

むねふたかりぬ　浮舟の心なり

所たかへのやうにみえ侍れは　おもしろくあひしらひたるなり

見給うてさすかにいたくもしたるかな　祕薫の興ありてしたると思ひ給ふなり

かけてもみおよはぬ心はへ　箋薫の我にこれほとのあひしらひをえ思ひよらしとおほすとなり

つひにわかみはけしからす　祕浮舟の心なり

なとて返したてまつらせ　箋文を返すはいま〳〵しき事と右近か云なり

ひかことあるやうに　浮舟の詞

あやしとみけれはみちにてあけてみたるなり是より草子地なり　箋右近か中にてあけて

よからすの右近かさまやなみつとはいはて　祕草子地なり文なとあけてみるはよからすのわさそとなり　箋右近かみたるとは申さてたゝかやうに申をり

物語に評してかけり

あないとほしくるしき御事ともにこそ　右近か詞なり

とのは物のけしき　薫の匂の事をしり給へるとなり

おもてさとあかみて物ものの給はす　箋浮舟の體なり

この人々のみ思ふらん　祕侍從と右近也

わか心にてありそめし浮舟の心中なり匂のたはかりておはせしこととなり

右近かあねのひたちにて　祕右近か常陸へつきてくたりし時の事なるへし弄

ほと〳〵につけてはたゝかくそかし　祕上も下もかゝる事ありとなり弄

女はいまのかたにいますこし心よせ　右近かあねも後の夫に心ひきたるなり

いまのをはころしてしそかし　先夫の後夫（なイ）を（のイ）殺したるとなり

さてわれもすみ侍らす　弄此事有しにより夫婦離別せるなり　先夫も右近か姉を離別したるなり

あたらつは物　弄常陸介か郎等か又さなくても國の兵歟　私今の夫なりころされたるなり

よきらうとう　弄後の夫を殺したる科によりて他國したる也右近か姉の本夫なり

かゝるあやまちしたる物を　後夫をころしたる先夫も國をはらはれたるなり

すへて女のたいへしきそとて　退々　弄右近かあねなり

まゝにいまもてひなき　花まゝはかの女のめのとを（あれのこさを）いふ（云イ）なりまゝとはめのとをいふにや　孟うき舟のめのとのおやなり　弄うき舟の君のめのとゝ云々右近かあねと親類にやまた右近かあねのめのとの事歟云々いつれにても　私此諸沙の義不審也まゝは浮舟君の乳母をいへり右近は浮舟のめのと子歟右近かあねはまゝか女なり右近も同しとみゆ

ゆゝしきついてに侍れと　此次にはいまへしき事なれともと云右近か詞なり

御命（イノチ）まてはあらす共人のほとへにつけて侍る事なりしぬるにまさるはちなることも　孟浮舟の命なとにことなることはなくともおとりたる耻辱もあることゝなり

宮も御心さしまさりてまめやかにたに　孟匂宮へ浮舟の心かひくと思ひて右近かかくいふなり

さはかりうへの思ひいたつき　孟うへとは浮舟の母をいへり箋

まゝかこの御いそきに　箋まゝは浮舟のめのと右近かいふ詞此いそきはかをるへうつろひ給ふ事なり

それよりこなたにと　箋薫へわたり給はぬさきと匂の丶給ふとなり

いまひとり　孟侍従なり弄箋

うたておそろしきまてな　侍従か詞さやうに理をせめてつよくな申されそと浮舟をいたはりて云詞なり

いてやいとかたしけなく　箋これよりは匂の事を侍従かいふなり

人のかくおほしいそくめりしかたに心もよらす　花

大將のむかへ給はんとて御めのとなとのいそく事
をいふなり　箋侍從は薫の方へ心よからぬなり
宮をいみしくめてきこゆる　侍從か匂宮をめてたく
思ふとなり
いさや右近はとてもかくても　又右近か心中をいふ
なり
大將殿の御さうの人々　御庄　薫の知行の人々なり
いみしきふてうの物ともにてひさるい　河不調　一
類ヒトルヰ　箋ふてう　イぶたう　私不調は物の調か
たき强々敷體也
うとねりといふ物のゆかりかけつゝ　河内舍人也
內舍人帶劔具兵仗武勇者也衆坂東榛也　弄闇云い
かやうなる人の官そや　一答內舍人とて侍の品な
り帶劔する官なり
うこんのたいふといふを　右近大夫也薫の家へなる
へし
よき人の御中とちは　箋句かをるの間の事なり
おのがばんにあたりていさゝかなることもあらせじ
なと　箋面々の番の時聊爾あらせしとてきひしかる
へしとなり

ありしよの御ありきは　祕ひとひの御ありきもあや
うかりしとなり匂の忍ひておはせし時の事なるへ
し
君なほわれを宮に心よせたてまつりたると　箋浮舟
の心匂宮へ心よせたると右近も侍從も思ふとなり
たゝ夢のやうにあきれて　祕匂宮の體をいふなり　弄
たのみきこえてとしころに成ぬる　箋薫の事なり薫
の心をそむかしと思ふ故にこそかく思ひもみたる
れとなり　弄薫の事也
よからぬ事いてきたらん時と　匂の何ともしてゐて
かくしなとし又匂宮をとのゐ人なとのみつけたら
はいかゝとなり
まろはいかてしなはや　浮舟の詞
かくうき事あるためしは　河忠臣不事二君貞女不更
二夫史記
かくなおほしめしそ　祕右近なり　箋右近かなくさ
むる詞なり　箋心やすくおほしめしなせとてこそ
むかしの事なとも御物かたり申つれとなり
おほしぬへき事をもさらぬかほに　浮舟の平生は大
やう過たる性を云

心いられをさせ給へは　箋句の事の後かく物思ひ給
ふさまもあらはにみゆるとなり
心しりたるかきり　右近侍從なとなり
かゝる人御らんせよ　いままゐり童なとをめのとの
浮舟へ見給へと申なり心ちいそくさまなり
物のけなとの　浮舟のなやましきをまゝかなけくな
り
殿よりはかのありし返事をたに　祕文の返事をかへ
されし後なり　私薫より後こゆる文をかへされてよ
り無音となり
このおとゝうどねりといふ物そきたる　箋右近か浮
舟に申しゝ内舍人なり
おきなのこゑかれさすかにけしきある　うとねりか
さまなり
女房に物とり申さんと　内舍人の女かたへ物申さん
となり
殿にめし侍りしかは　祕内舍人か申詞なり　殿はか
をるなり
ざうじともおほせられつるついてに　雜事共なり
かくておはしますほとに　浮舟の宇治におはする事
なり
そのあないとひきゝたらん　そのゐ人のしらぬ事は
あらしと薫の仰なとなり
なにかしは身のやまひおもく　内舍人か年老たるさ
まなるへし
月比おこたり　箋内舍人ことき物も上日を付て昇進
すと云々
さのこきひしやうのこと　河如然　非常事　祕さ
やうのことゝきなり　非常はよのつねならぬ事なり
ようゐしてさふらへ　是も薫の仰の趣なり
ふくろふのなかんよりもおそろし　河おそろしき山
の梟といふ世俗詞の事也　祕右近か心に梟をおそ
ろしき物にしてかくいへり　この内舍人か聲をい
へり　弄右近か心梟をおそろしき物に思ひたる女
心にていひたるなり女の心なり箋
いらへもやらて　右近か内舍人にはとかくの返答に
及はぬなり
さりやきこえさせしにたかはぬ　これは内舍人か申
つるさまを右近か浮舟へ申す詞なり
御せうそこも侍らぬよ　箋薫の文のなきをなけくな

り
めのとはほのうちきゝて　箋是は子細をはしらて盜人なとの用心にいとうれしきとよろこふなり
身のかはりそと　とのゐ人の代に下すなとたてまつるとなり
夜行をたにえせぬ　夜まはりなとの事なり
君はけにたゝいまあしうなりぬへき　浮舟の心なり
身をもてそこなひつと思ひしるなり
宮よりはいかに〳〵と　匂宮なり
こけのみたるゝわけなさを　河君にあはんその日はいつそ松の木のこけのみたれて物をこそ思へ　松羅の契といふ事なり夫婦のたとへなり　祕引歌河にあり弄　箋同
とてもかくてもひとかた〳〵に　浮舟のとかく思ひわつらふ心中なり
むかしはけさうする人のいつれとなきにおもひわつらひてたにこそ身をなくるためしもありけれ　河大和物語云むかしつのくにゝすむ女ありけりよはふ男二人あり一人はその國のうちにすむ男姓はむはらとなんいひけるいまひとりはいつみの國の人なりさうはちぬとなん云けるこの男とも年よはひかほかたち人のほとなとたゝおなしはかりそある心さしまさらんにこそあはせめとおもふに心さしのほとたゝ同しやうなりけれはもろともにきあひぬ物おこすれは同しやうにおこすいつれまさるといふやうもあらす女おもひわひぬこの人の心さしのおろかならはいつれにも〳〵あふましけれと是も彼も月日にそへて家のかとに立てよろつに心さしをみせてなきわふ物おこすれは是もかれもおなしやうにおこすとりいれねと是よりもかれよりもたえすをやありてかくみくるしく年月をへて人のなけきをもいたつきをも思ふにいとゝいとほしむとり〳〵にあひなは人のおもひもたえなんといふ女心にもさなんと思ふを人の心さしの同しやうなるにみわつらひぬるさらはいかゝすへきといふそのかみいく田川のつらにいてゝひらはりなとうちてゐたりけりかゝれはこのよはひ人ともをよひにやりておやのいふやうこのをさなき物なん思ひわつらひて侍るけふいかにまれ〳〵此ことを思ひさためんあるは遠きほとよりいまするもありあるはこ

こなからその身いたつきかきりなしこれはいさほしき事なりといふ時にいさかしこうよろこひあへり申さんにおもう給ふるやう此河にうきて侍る水鳥をい給へそれにいあて給はん人にたてまつらんといふにいさよき事なりといひているに一人はかしらのかた一人はをのかたをいつそのかみにいつれといふへくもあらぬに思ひわひて女　住わひぬわか身なけてんつの國の生田の川は名にこそ有けれとよみてこのひらはりは川にのそみてしたりけるにつふとおち入にけりおやあきれさわきてのゝしる程にこのよはふ人ふたりなからやかて同し所におち入ぬ　萬いにしへのさゝた男のつま戀しうなゐをとめのおくつかそこれ（きイ）　うなゐをとめは身なけし女なりさゝた男は請いし二人の男なりおくつかはおきつきといふ也おきは息なりつきは盡なりいきのつくる處なり　花萬葉巻第十六曰昔者有娘子字曰櫻兒也于時有二壯士共誂此娘而捐生格競貪死相敵於是娘子歔欷曰從古來于今未聞未見一女之身往適二門矣（且イ）方今壯士之意有難和平不如妾死相害永息爾乃尋入林中懸樹經死其兩壯士不敢哀傷（指イ）血涙漣襟矣各陳心緒作歌二首　春されはかさしにせんとわか思ひしさくらのはなはちりにけるかも（んイ）いもか名にかけたる櫻花さかはつねにやこひんいやさしのはに　或曰昔有三男同娉一女也娘子嘆息曰一女之身易滅如露三雄之志難平如石遂乃彷徨池上[illegible]　沈没水底於時其壯士等不勝哀頽之至各陳所思作歌三首　娘子字曰縵兒也　有三歌略之　祕花鳥には萬葉十六巻をひけり身をなけたる縵兒子なり大和物かたりにはいくたをさめつかの事に略說をくはへたり是も萬葉にみえたる事なり　花櫻子の耳なしの池に身をしつめし事なとなり萬葉十六にあり　箋河海　私此の大和物語花鳥の義いつれも用へき歟云々　古事ともはけさうする人のあまたあるにさへ身をすてし事共なり此浮舟はすてに二夫に逢し給へりされはけさうする人のありさまのいつれとなきに思ひわつらひてたにこそ身をなくるためしもありけれといへり　此浮舟はすてにあやまりあれはまして身をすてすしてはと思ふ心なり面白しわすれ草つみてん　箋引歌に及はすたゝおのつから程へはわすれんとなり　諸抄不載引歌

ありなからもてそこなひ人わらへなるさまにてさすらへんはまさる物思ひなるへし　弄此詞浮舟の心一かごある事なり有感　浮舟の身をすてたらんは母の一旦の物思ひなるへしとなりありなからとは存命の事なりなからへてこの事いてきたらはもてそこなひさすらへん浮舟のさまを母の思はん事はかきりもあるましきとなり

こめきおほとかにたを〱とみゆれと　祕大やうにけたかきかたは浮舟はなしとなり　弄巨なり大やうなるなり　世のありさまをひろくもしらぬ故にみかけよりも退屈の心なりとなり

おすかるへき事を　河おそかるへき事なり　おそ〱しき事なり浮舟はゐなかにてそたち給ひしによりてあら〱しくおそろしき事を思ひたち給ひしとなり身をなけんと思ひ給ふ事なり　祕あつまのかたにて生長なりし人なれは心もけなけ處となり身をなくへき事なり箋

むつかしきほくなと　河反古　箋句の文なるへし一たひにもしたゝめす　人の目にたつましくしたるなり

とうたいの火にやき　河燈臺也

物へわたり給ふへけれは　箋薫のかたへわたり給はん事なり

あはれなる御中に御心とゝめてかきかはし　侍從か詞匂宮との中の事也

さはかりめてたき御かみつかひ　箋句の文のさまなり　時々につけたる紙の色あひをいふなり　花色々の薄様をつかふ事なり

なにかむつかしくなかゝるましき　祕浮舟の詞也箋なやましけなる故のやうにいひなし給ふなり心中は身をなけんの心なり

人のさためもいとほしからん　匂宮の事なり

さかしらにこれをとりおき　さし過しさし出かましき様の心なり

心ほそきことを思ひてゆくには　身をなくる事も色々の事を思ひては又心にかゝりてなるましき事なりと思ふなり此處の心のよはさにつひには物にはとられたるなり

おやをおきてなくなる人はいとつみふかゝなる物を　河おやにさきたつは不孝の一なりと云り本文未勘

也　箋親にさきたつ事の罪なるよしをきゝしも心
にかゝるなり心ほそき事を思ひもてゆくといへり
修子の一なり
はつかあまりにもなりぬ　祕三月の廿日なり
かの家あるし廿八日にくたるへし　祕まへ〳〵に匂
宮京へわたすへしとて用意し給へるめのとの夫の
家の事なり　箋かの家あるし任國に趣くなり
宮はその夜かならすむかへんと　廿八日に任國にお
もむかはその夜そのまゝ浮舟をかの家へうつさん
と匂宮のの給ふなり
うたかひ給ふななとの給ふ　匂よりの文のさまなり
さてあるましきさまにておはしたらんに　祕うき舟
の心なり　箋匂のしのひておはしてはと思ふ浮舟
の心なり
いみしくなき給ふ　浮舟のさまなり
あか君かゝる御けしき　箋右近か詞この程はかやう
の體をも御煩にとりなすか終には人のみとかめん
とくるしかるなり
さるへきさまに　箋匂宮へ参らんと返事あれと右近
かいふなり

ちひさき御身ひとつは　祕右近か心に浮舟は匂の御
かたへ心かひくとみてかくいへり
とはかりためらひて　箋しはしなりなみたをおさへ
ていふなり浮舟のさまなり
かくのみいふこそ心うけれ　祕浮舟の詞なり　匂へ
心よせたるやうにいふと浮舟の給ふなり
いかなることをしいて給はんと　箋匂へ心のひくに
てはなしあるましき事とわれは思ふに匂宮はたの
みをかけ給へはいかなる不思議をかし出し給はむ
と思ふかわひしきをなけくとなり
かへりこともきこえ給はすなりぬ　匂へ浮舟の返事
し給はぬなり
宮かくのみなほうけひくけしきもなくて　匂宮の浮
舟の承引なきを色々におほすなり
かの人のあるへきさまに　箋匂の心にかをるのよく
いひこしらへたると推したまふなり
ことわりとおほす物から　薫のかたへ同心は勿論の
事なれとも匂の口をしくおほすなり
人々のいひしらする　さふらふ人なともあるましき
事にいひなしたるとおほすなり

むなしき空にみち　河わか戀はゆくへもしらすはて
もなし逢ふをかきりと思ふはかりそ　箋引歌河に
ありわか戀は云々を下にふくむなり
あしかきのかたをみるにれいならす　祕內々のかた
なり　箋匂の宇治へおはしてのさまなり前にやふ
りて入給ひし蘆垣なり
いさとげなり　花さと／＼しきなり　用意する心な
り　弄物のさとき心なり
京よりとみの御ふみ　いそきの文といふなり　とみ
といふ詞伊勢物語にありいそきたる事をとみとは
いふなり
うこんかすさの名を　右近か從者の名なり
さらにこよひはふようなり　花不用なりこよひは御
返事も有ましき心なり　祕今夜は中々御かへりあ
れとなり
宮なとかくもてはなるらん　匂のこゝろなり
ときかた入て　箋時方出雲權守なり
かと／＼しき人にて　祕時方なり　才覺ある人とい
ふなり
いかなるにかあらんかの殿の　祕侍從か詞なり　箋
薰より番をかたく仰付られたる比也と云なり
おまへにも物をのみ　浮舟の物思へるさまをかたる
なり
かゝる御ことのかたしけなさを　箋匂のかやうにか
たしけなく御懇切なるに逢たてまつらん事もかな
ひかたきやう成を舟も思ひなけくなるへしとなり
やかてさも御心つかひせさせ給はん夜　祕今夜はい
かにも便なし此たびわたらせ給はんときかねて案
內をうけたまはりてかまへ心みへしと申なり　弄
匂宮の京へむかへ給はんとさため給はんその夜と
云也　私弄の義猶然へしさも心つかひとは京へわ
たしたまはむ御心つかひの夜かねて案內を仰られ
よたはかりみんとなり
めのといさときこと　祕さとき事なり　箋內にもめ
のとのいさとくてたはかりにくきを云ふ
たいふおはします道の　祕時方なり　私左衛門大夫
なれはいへりはるはるとおはしてむなしくかへり
給はん事を思ひて侍從をぐしてゆかんとさそふな
りせめては匂宮へ侍從をなりともみせ奉らんと思
ふなり

いさわりなからん　箋侍従か詞なり
ささひたるころしたるいぬさもの　河犬吠村背閣譯
鳴織[illegible]姫[illegible]イ　白氏文集　守家一犬迎人吠　放野群牛
引[illegible]歸 [illegible] 說あり　花ささひたる里なれたるなり又さ
さ〳〵しき心にもかなへり　祕犬の聲のさときさ
いふ義あり但山ささひたるさ云義可然なり弄河
なほさく〳〵まゐりなんさいひさわかして　時かた
かいひそゝのかして侍従をくしてまゐるなり
かみわきよりかひこして　箋髪を脇の下より手にさ
りたる體なり
きぬのすそをとりて　侍従かきぬのすそを時かたか
さるなり
わかくつをはかせて　時かたか沓を侍従にはかせた
るなり
山かつのかきねのおさろむくらのかけにあふりさい
ふものを敷て　祕河内本むかはきさあり　弄あをり
むかはきさいふ本もありいつれにてもありなむ
河おさろむくらのかけにむかはきさいふ物をしき
て　花同　或本あをりさいふ物をさ云々行騰ムカ[illegible]
ハキ 泥障アヲリ　蔦すごもしきあをなにもてきうつ

はりにむかはきかけてやすむこのきみ　以上河海
花源氏一本あをりさ云ものをしきてさあり　大和
物語云草の中にあをりを敷て女を抱きてふせり
うつほ第一云かねまさの大將うつほ木にたつねき
てむかはきをときて[illegible]のうへにしきて女にあひた
ることあり　今案あをりむかはき兩本相違ありさ
いへさも物語の證據いつれも分明なれはあはせて
これを用ふへしたゝしうつほの物かたりかねまさ
の大將の事はその日北野の行幸なり隱[illegible]の人は狩
衣をきてむかはきゐふくろをつくるなり匂宮も宇
治へのかよひに狩衣をき給ふゆゑにむかはきをは
き給ふにやあをりは馬のくらにつくる物なれはこ
れ又ちかひ侍るへからすしちのはしかきしきのは
ねかき古來これをあはせもちゐたる準據なるへ
し
わか御心ちにもあやしきありさまかなかゝる道に
箋匂のわか身のうへをおほす心なり　祕かゝる道
は好色の道にさなり
心のよわき人にはましてﾠ侍従か事なり
いみしきあたをおにゝつくりたりさも　祕あたおに

に　弄同　祕いかなる怨敵鬼神なりともとなり又あたをおにゝといふ本ありこれ猶然るへき歟　心は鬼神はさしてわか身にあたをなさんの心なきも有へし我に怨敵の心あるうへにて鬼神のかたちあるともとなり　箋後義用　弄あたおにゝといふ本あり怨敵鬼神なりともとなり

たゝ一言もえきこえさすましきか　祕匂宮の詞也私人のいひなしかと覺しうたかふなり

有さまくはしくきこえて　こゝの體を侍從のくはしく申なり

さおぼしめさん日を　箋いつ〳〵とおほしめす日をの給へうき舟を匂へたはかりてまゐらせんといひしなり

かたしけなきことゝもを　匂宮の御事又浮舟の心中を侍從が察していふなり

身をすてゝも　祕侍從がわか身すてゝもとなり

われも人めをいみしく　匂宮も人めをつゝみ給へは各のとかそとはかり一方にうらみむやうもなしと覺すなり

弓ひきならし　宇治のとのゐ人のさまなり

ひあやうしなどいふも　花誰何火行とかきて火あやうしとよむなり夜行する聲なり　祕夜行のいふなり　箋巴陵醉尉謬誰何東坡

いつく（匂ニイ）にか身をはすてんと白雲のかゝらぬやまもなく〳〵ぞ行く　箋しら雲のかゝらぬ山はちとあさきなり諸抄にも義なしたゝあはれなるさまなるへし

さらはゝやとて　侍從をかへし入給ふさまなり　なく〳〵そかへりきたる　侍從かさまなり

右近はいひきりつるよし　祕右近はかなふましきよしを申せしよしをいひゐたるところなり箋　弄侍從がみやの御かたにむかひ（さきイ）たるあとは右近か匂宮のおはしたるを入奉らん事かなひかたしといひたると浮舟にかたりゐたる所へ又侍從がかへりてありさまかたるなり

君はいよ〳〵　浮舟の心なり

いりきてありつるさまかたる　箋侍從なり祕

かつはいかにみ侍らんと　侍從か心を浮舟の思ふなり

あやしからんまみを思へは　祕終夜なみたにあかしたるまみを恥たるなり箋

むごにふしたり　河無期　私過期もなくいねたるなり

物はかなけにおびうちかけなとして　花かけ帶也　祕弄浮舟なりうちかけ可然歟かけ帶なるへし　箋これはやう〳〵と起ての事なり

おやにさきたちなんつみ　箋身をすてん事を思ひさたむるなり

ありしゑをとりいて　箋匂宮の繪なり前に浮舟と二人ふしたる所をかき給へる事なり

よへひとことをたに　匂に夜へあはさりし事をふかくなけくなり

心のとかなるさまにて　祕薫の事をさま〳〵に思ひ出給ふなり　箋薫の事なり浮舟の心なり

うきさまにいひなす人も　祕なきのちにさま〳〵きかれん事の口をしきとなり　箋身すてたるをうきさまといひなす人もあらんすれともなからへて人わらはれならんよりはと入水をおもひさたむるとなり

心あさく人わらへ　祕死後の名はくるしからすとなり

浮なけきわひ身をはすつともなきかけにうき名なかさんことをこそ思へ　祕名の殘らんことの口をしとなり　箋身をすてたりともうき名は殘らんとなり此歌硯の下より後にみいてたるうたなりかけろふにそのいはれをかけり　以上箋

はらからのみにくやかなるも　常陸が子浮舟の一腹の弟なとなり

宮のうへを思ひいて　中君の事なり

人にみつけられすいてゆくへき　浮舟の心身なけんためなり

心ちもあしくみなたかひにたり　かやうの所へたよりて物のよりたるなり

あけたては川のかたを　河古「あけたてはせみのをりはへなきくらしよるは螢のもえこそまされ私不及引歌

ひつしのあゆみよりもほとなき心ちす　花けふもまたむまのかひこそふきつなれひつしのあゆみちかつきぬらん　河歩々近死地人命亦如此經文　屠所羊歩の事なり唐土には羊を飼置て食時にのそみて屠所へあひ〳〵して行て殺すなり歩にしたかひて死

地にちかつく無常の喩なり
宮はいみしき事ともを　祕匂宮よりの御文なり
いまさらに人やみんと　浮舟の心なり
浮舟からをたにうき世のなかにとゝめすはいつこをはか
ときみもうらみん　祕入水の心あり　箋うき世にと
とめぬ身ならはいつこをしるしに匂もうらみ給は
んそとなり　私しら雲の八重たつ山になとありそ
れは又人間なれはたつね給ふ事もあるへしこれは
からをうき世にとゝめしとなり　河古「うつせみは
からをみつゝもなくさめつ　ふかくさの山けふり
たにたて　後けふ過てしなまし物を夢にてもいつ
くをはかと君も潤まし　私不及引歌歟
かのとのもいまはのけしき　弄薫なり
いかになりけんとたれにもおほつかなくて　箋人に
しられすして身をうしなはんとの心おもしろし
ねぬる夜の夢に人のいむ（ひイ）といふ事なむ　河解夢書曰
夢見病死必死　祕河海にみえたり弄　箋夢にうき
舟の事をみて京より母の文おこせたるなり
おとろきなから　弄おとろきてやかて文をたてまつ
ると云心なり

ときく／＼たちよらせ給ふ人の御ゆかり　祕薫のかた
よりの事なり　箋薫の本たいつよくまします事を
いふさやうのかたからかやうになやましきおりは
いかならんと母の思ふなり
少將のかたの　箋浮舟の妹常陸か女産後か如何
いみしくいはれ侍りて　箋母のおろそかなるを常陸
か制し云なり
そのちかき寺　宇治の寺なり　阿闍梨の寺なり
そのれうのもの　誦經の料なり
文なとかきそへて　箋誦經の文と云々　私たゝその
守へ文をそへたる歟
かきりと思ふいのち　浮舟の心中に母の心をかなし
くおもふへしあはれなり
浮舟のちに又あひみん事を思はなんこの世の夢に心まと
はて　私今生にては逢まし來生を期するとなりおも
てはさはなくみえたるうたなり　箋表はやかて對
面あるへければさやうのゆめなと心にかけ給ふな
といさめたるなり裏は來生ならては逢かたしされ
は此世の夢にはしまよひ給ふなと又いさめたるな
り妙なる歌なり　祕此世は子の世の心もあるなり

すきやうのかねの風につきて　弄此詞其心あはれなるへしよく／＼みるへし近き寺の誦經の鐘なり

浮舟 かねのおとのたゆるひゝきにねをそへてわか世つきぬときみにつたへよ　箋是はその間になくならんと思ひて云り　祕弄箋なしたゝ何となくあはれなる歌なり

くわんすもてきたるにかきそへて　巻數　弄誦經して奉る巻數にかき給ひしにやと云なり

ものゝえたにゆひつけて　祕誦經の枝なるへし

めのとあやしく心はしりするかな　河古歌人にあはんつきのなきには思ひおきてむね走り火に心やけせり　心はしりとはむねのはしる同事なり　漢書高紀下曰上欲宿心動已上河　祕むなさわきのするなり　弄見河　箋めのとはまゝなり

ゆめもさわかしと　舟の母の夢なり

くるしときゝふし　祕浮舟の心なり　入水の心あれはなり　箋とのゐ人はさとくは忍ひかたけれはなり

さかしかるめのといとみにくゝおいなりて　祕めのとの様のさかしくあつかひ聞ゆれと我身なくなりなはいかゝならんすらんと老たるを見てあはれと思ひ給ふなり弄箋

世中にえありはつましきさまを　此事さとはなくて右近なとにほのめかしたきもなみたのおとろかされてさきたてはえいひはて給はぬとなり

かくのみ物をもおもほせは　右近か詞

物思ふ人の玉しひは　箋うき舟の玉しゐのうかれて母のゆめなともさわかしきならんとなり

いつかたへもおほしさたまりて　箋一方へ心次第に覺しさためよとなり

なへたるきぬをかほにおしあてゝふし給へりとなん　箋浮舟の體なりなみたにむせひたる體なり

岷江入楚第五十二　蜻蛉

廿五歳　大將　花鳥には廿三歳の春より秋までの事ありと云々

四月宇治姫君投身事

私云秘箋弄等に云浮舟君投身の翌朝より五月にうつりて秋になる薰廿六歳の事なり云々しからは浮舟の事は三月廿七八日の事と見えたり四月の事にてはあらさるへし

宮御使參宇治聞姫君失給之由歸京事

時方爲宮御使行向宇治事

逢侍從君事

母君來問子細事

車載故姫君裳等於向山燒上之表葬送事

大將殿七ヶ日參籠於石山給事

兵部卿宮歎思宇治事心地惱給事

大將訪參給事

蜻蛉式部卿宮薨大將著服事

大將以宇治姫君事語申兵部卿宮給事

五月大將献歌於兵部卿宮給事

自宮遣時方於宇治召右近君給事

右近不參仍侍從君參事

櫛筥裝束等爲侍從贈物事

大將殿渡宇治給事

右近君物語兵部卿宮通給始中終事

大將殿召律師示給彼追善法事之事

大將殿遣文於常陸母上事

使贈斑犀帶大刀等事

常陸守來母上所聞姫君失給之由大驚思事

四十九日佛事律師執行事

兵部卿宮銀壺納金送右近君事

二宮任式部卿給事

大將之念人一品宮之女房小宰相献文於大將事

明石中宮奉爲六條院并紫上被行八講事

大將自馬道方奉見一品宮事

女房共嘲來事

大將念申一品宮事

大將謂女二宮不似一品宮御方給事

大將參中宮見參給事

大將歸一品宮御方給事

一品宮渡中宮御方給事
一品宮女房大納言君與中宮御物語事
大將與小宰相君事
匂宮與宇治姬君事
自一品宮獻御文於女二宮給事
被遣繪物語事
芹河大將事
兵部卿宮又迎侍從物語給事
侍從參中宮祗候事
蜻蛉式部卿宮姬君迎取中宮御方給事
兵部卿宮心懸給事
大將參中宮給立寄一品宮與辨君中將君戲言事
中將君引箏大將戲給之事
大將引和琴事
蜻蛉式部卿宮姬君以西對爲御方事
大將參其方給事
年長女房出逢物言事

蜻蛉　巻名歌并詞にあり

河有と見て手には取れすみれは又行へも知す消し蜻蛉　私此歌の前の詞につく〳〵と思續けて詠給夕暮かけろふの物はかなけに思ひちかふをとあり　花巻の名は詞にも歌にも見えたり薫廿三歳の春より秋迄の事あり　弄巻の名歌に依りかけろふの事蜉蝣蜻蛉陽焔等イ此義有蜻蛉のやうなるものもあるにやこゝにては蜉蝣なとの飛たるを見給へるにや又草をかけろふと云事もあり云々　本草に蜻蜓蜻蛉の一名問云蜻蜓を云る歟一答蜻蛉と云虫なり蜓はとんばうなり又かけろふのもゆるは春の陽氣なり　祕巻名以歌并詞號之浮舟の終の翌日の事也五月にうつりて秋になるなり　薫廿六歳也弄箋かけろふの事蜻蛉陽焔等の說々ありこゝにては蜉蝣のことき虫をいふなりかけろふのもゆる春日とよめるは陽焔なり箋　箋此物語の巻名物はかなき物をおほくつけたり帚木空蟬夕皃槿其外不可勝計帚木にはしまりて夢浮橋に終たる樣なり

かしこには人々おはせぬをもとめさわけとかひなし　河彼カシコ　花浮舟の巻の末に姫君の我身をうしなはむと思ひ給へる事は見えたりまさしく身をなけ給へる事は又人のしらぬ事なれはしるすにおよはすその人のおはせぬ時にこそはしめてもとめさわき侍れ物語のつくりさまあり〳〵しくかきなしたるものかな　祕浮舟身をなけ給ひし跡の事なり　弄　箋浮舟をもとむる宇治の體なり

物かたりの姫君の人にぬすまれたらん　河古物語の今世につたはらぬおほし如然物歟　花住吉の物語に姫君の母のめのとの住の江にありけるかもとへうせていきける事をいふにや　弄濱松の物語といふにあり　祕濱松物語と云々河海說可然花鳥に住吉物語をひくそれは心かなはさる歟　箋濱松住吉にありと云々

くはしくもいひつゝけす　箋ふる物語にかけるとおなしさまなれはくはしくもかゝぬとなり作者の分別となり

京よりありしつかひの　花母君の使なりさきの巻にみえたり　祕母のかたより誦經させし夫なり箋

又人おこせたり　昨日の返事なかりしかはけふ又母

の人おこせたるなり
いかにきこえんとめのとよりはしめて　箋京への返事をしかねたるなり
さらにおもひうることなく　花何とも推量におよはぬなり思得るなり　花思ひやるかたなくとありおもひ得るなり　五音通也
かの心しれるとち　祕右近侍従なり
身をなけ給へるかとは　河古世の中のうきたひことに身をなけはふかき谷こそあさく成なめ
なく／＼このふみをあけたれは　祕母のかたよりけふ又きたる文なり　箋みな／＼の見るなり
覺束なさにまさろまれぬけにや　箋母の文の詞也
こよひは夢にたにうちとけても見えす　河奥入「戀しさを何につけてかなくさまむぬる夜なけれは夢にたにみす
物へわたらせ給はん事はちかくなれと　祕薫の御方へなり箋　弄薫の京へわたし給はんと定給ひし事なり近日の事成へけれとも猶心もとなく思へは母の方へ先むかへ奉らんとなり
こゝにむかへたてまつりてん　祕京の宿へ渡すへきとなり
けふは雨ふりぬへけれはなと　祕浮舟の入水せんと思ひ立し翌日なり手習巻に横川僧都にあひし時の雨なるへし
よへの御かへりをもあけて見て　祕母のかたへの返事なり　箋右近か見てなけくなり　花母の方への返事に後に又あひ見んこそをおもはなむ此世の夢に心まとはて　巻數にかきたる歌　鐘の音のたゆるひゝきにねをそへてわか世つきぬと君につたへよ
われになとかいさゝかの給ふことのなかりけむ　是より右近かなけきいふさまなり
あしすりといふことをしく　河伊勢物語　前勘　箋蹉跎（サタ）（アシスリ）土佐國にあしすりの観音とてあり則蹉（サ）跎（ダ）寺と號す
わかき子とものやうなり　幼稚なる子のことしとなり　稚の字わかきとよむ
いみしくおほしたる御けしき　箋是は浮舟の物をふかく思ひたりしとは見えしとなり
おとろ／＼しき事　身をなけ給へるとは大かた推量し

てかくいへり

いかさまにせん／＼とそ言れける　花「忘れんと思ふも物のかなしきをいかさまにしていかた様にせん

宮にもいされいならぬけしきありし御かへり　花女君歌　からをたにうき世中にとゝめすはいつこをはかと君もうらみん　祕いつこをはかと君もうらみむの返事せし事なり

あたなる心とのみふかくうたかひたれは　箋浮舟の匂をあた／＼しきと思ひしみつからおほす匂宮の心なり

御文もとりたてまつらす　匂の御文をも使のとりてかへるなり

くはしくもとはてまゐりぬ　匂宮の御使心しらぬ物にて大かた歸り參りたるとなり

夢とおほえていとあやしけれは　匂宮の心中なり

いたくわつらふとも　花うへのよへにはかにうせ給へるといふを使かくはしくもとはて歸參てしかしかと申侍しかは俄に死給へるをうせ給へるといふそと宮の心えさせ給ていたくわつらふともきかぬうへ昨日の御かへりもさりけなくありし物をとの給ふなり

昨日の御かへりことは　箋病死には不審なりと匂の思ふなり

おほしやるかたなけれは　何とも匂の分別し給ひかたきをいふ

時方いきてけしきみ　箋左衛門大夫出雲權守なり匂の御めのとの事なり

かの大將殿いかなる事か　箋薫の事なり時方か申詞なり

ろなう　河無論也

ことつくる事なくて　箋かこつけ事なくては行かたしとなり

さりとてはいとおほつかなくてや　又匂のゝ給ふ詞なり

いとほしき御けしきも　箋匂の切なる御心を時方か思ふ心なり

かやすき人はとくいきつきぬ　箋匂宮なとの宇治へおはする事のたやすからぬに對していへり

雨はすこしふりやみたれと　弄浮舟の身をなけしあくる口の雨なり此雨の口宇治院にて僧都の浮舟を

見付奉りし事同日成へし手習巻にみゆ
けすのさまにて　時方かこと〻（てらイ）つくることなくては
參りかたしといへるにかなへり
こよひやかておさめたてまつるなと　箋葬送の事也
さるはこよひはかりこそ　右近か詞今より後は時方
の來るましき事をいへり
いまひと所たにと　箋時方侍從をさして云也
いとあさましく覺しもあへぬ　侍從か時方にいふ詞
日ころも物覺したりつるさま　うき舟の物思へる事
なり
ひと夜いと心くるしと　花匂宮おはして物なともえ
の給はてむなしく侍從はかりにあひ給て歸り給ひ
し事上の巻に見えたり　祕一日あひたてまつらて
歸給ひし事なり箋
このけからひなと人のいみ侍る程過して　常の穢に
はかはりたれともこれも世間の人のいむなみにせ
んといふ心あり
めのとなるへし　祕時方か聞ての推量なり
むなしきからなたに　河言「うつせみはからをみつ〻
もなくさめつふか草の山けふりたにたて　私めの
とのなけきつ〻いふ詞
いつしかかひある御ありさま　祕薫のかたへ出京あ
るへき事なり箋　弄いつかなり
おに神もあか君をはえりやうしたてまつらし人のい
みしくをしむ人をばたい尺もかへし給ふなり　河宋
玉爲屈原作招魂詞云帝告巫陽曰有人在下我欲輔之
魂魄離散汝巫之　王逸楚詞章句帝謂天帝也巫陽神巫也　徐生欲老海南村帝
遣巫陽招我魂東坡　花梵天帝釋は人間をつかさとる
天なり帝釋は忉利天の王なり　或抄に宇治大納言
物語に浄藏貴所か善相公のうせたるを祈いかした
る事のあるをひけり又河海には宋玉か爲屈原に招
魂の詞をつくれる事をいへりいつれもこ〻の詞に
かなはす別に帝釋の人の死せるを返したる本緣有
へしかされて尋しるすへし　箋睒子（タンジヤヤウ）經ありと云々
睒子は天竺の長者の子の名なりと云々　經說の趣
尋注すへし　祕雨抄にあり又たゝおしはかりても
いふへし　弄見河花
人にまれ鬼にまれ（本書に此間四五行間あり）　祕人にても鬼にてもあれなり
箋花姫君のめのとあつま人なれはしたゝみていへ
ること葉なり

心えぬ事ともましるを　箋時方か心　花時方か思ふ
やうやかてこよひおさめたてまつらんといふかと
思へは又めのとのからをたにみぬとなけくこれを
心へぬ事のましるといふなり
猶の給へもし人のかくしきこへ給へるか　祕時方か
詞　箋時方か侍従にいふなり不審なる事のましる
ゆへありのまゝにの給へとなり
御身のかはりに　祕匂の御身のかはりなり
たかふことましらは　箋いま匂へ参りて申さむに後
に相違してはいかゝとなり
君たちにたいめんせよと　箋右近侍従にあへと匂の
仰られし事なり
女の道にまとひ給ふことは人のみかとにもあれと
河揚貴妃歸唐帝思　李夫人云〔去イ〕漢皇情順　箋婬亂に
身を損し道を失ふ事異朝にも聞及ひたる事なから
眼前に此匂宮のやうなる事はたくひあらしと時方
かいふなり
けにいとあはれなる御つかひに　祕侍従か詞箋
かくすともかくてれいならぬ　是は侍従か心中也れ
いならぬはよのつねならぬなりつるにはかくれあ
らしと思ふなり
なとかいさゝかにても人やかくい奉り給ふらんと
侍従か時方にいふ詞也
あるかきりまとひ侍らん　箋人のかくしたらんは心
しれる人ならては有くからす人々一同にさけくに
てさやうにてはなしと知給ふとなり
かのこのゝわつらはしけに　箋薫より渡こゆる頃と
もしらすとありし事也
はしめよりしりそめたりしかたにわたり給はんと
箋薫の事なり母めのとなとは匂の事をはしらぬな
り
この御ことをは人しれぬさまに　箋匂の事をは浮舟
の心中に心よせありしよしをいふなり
心と身をなくなし給へるやうなれは　浮舟の身をな
け給へる事をそれとなくいふなり
心のまとひにひか〳〵しく　箋侍従か心まとひなり
といひなをすなり　私是かめのとなとのさま〳〵
の事をいひてなけくをいふ歟
心えかたくおほして　祕時方か心なり
さらはのとかにまゐらん　時方か詞なり

いま御みつからも　箋句の御みつからもおはせんと
いふなり

あなかたしけな　侍従か詞なり

めてたき御すくせみゆへき　祕浮舟のためには過分なるへけれともとなり　箋なき跡を句なとのみつからさふらひにおはせんは浮舟の爲には面目なるへけれと忍びたりる事のあらはれんはいかゝなれは浮舟のためにしては句のおはしまさぬか然るべしとなり

こゝにはかくよつかすうせ給へるよし　花むなしきからのあるよしにて後の事をいさなむ事なり　私よつかすとは普通ならぬ心なりからもなくてうせ給へる事を云こゝにてはむなしきからのあるさまにいひなせとも後のきこえ物のけしきもいかゝと時方にちと心えさせたるやうにいひたるといふ心なり

雨のいみしかりつるまきれに　弄うせ給し翌日の雨(様イ)なり

めのまへになくなしたらん　箋眼前に死期を見るはよのつねの別なり　これはからをたにみぬを云句の事に思ひみたれたるを母のしらぬ故に身をなけんことゝは思ひよらぬなり

おにやくひつらん　河鬼はや一くちにくひてけり伊勢物語　花伊勢物語の鬼はや一くちにくひたりと云は堀川のおとゝ國經の大納言なとの二條后をとりかへしたてまつりし事をおにとはいへるなり伊勢物語の鬼は人をたとへていふまことの鬼にはあさす又江談に小松帝時仁和三年八月武德殿松原有鬼食人則大恠(怪イ)也同廿六日帝崩御是其徴也云々是は鬼の人をくふ例なり　弄花烏光孝御宇仁和三云々

きつねめく物やとりもていぬらん　花説文曰狐妖獸也鬼所乘(棄イ)也云々寛平年中備中國に賀陽良藤狐にさられて十三日倉の下に有し事あり

むかし物語のあやしきものゝたとひに　弄上の詞なり

おそろしと思ひきこゆるあたりに　花女二宮の御かたさまの御めのとやうの人なり　大將殿のむかへ給ふへしときゝてたはかり出してうしなひたるらんと思ふなり　祕女二宮の御あたりより人のたはかりていさなひ行かとなり弄箋

けすなとをうたかひいまゝゐりの心しらぬ　箋下すや今參なとのさやうのあたりより

世はなれたりとて　宇治の里の人はなれたる事なり

はかなき事もえせす　本ノマヽ花はりあらふ事なり

もとよりある人たに　箋新參ならぬ人さへ少々は京へ用をかなへに出るなり

なきかけにとかきすさみ給へる物の硯のしたにありけるを　河なけきわひ身をはすつともなきかけのうき名なかなんことをこそ思へと手習きみのよめり　祕なけきわひ身云々とよみ給ひし事なり　箋浮舟歌にあり　箋硯のしたはかけこの下の事歟只硯の石の下の事にても有へし

川のかたを見やりつゝ　身をなけ給へると思ふによりてなり侍從なとかこゝろなり

さてうせ給にけん人を　祕此事をくはしく母に申さてとなり

いつくにもく\いかなるかたに成給にけんと　箋薫や匂なり

忍ひたる事とても御心よりおこりて　祕浮舟の心より出來ぬる事にもあらすとなり

いとやさしきほとならぬを　河やさしきはいつかしきなり引歌あり略之　祕はつかしからぬ事となり

すこしあきらめさせ　箋母に事のよしを申さんとなり

いふ人もきえいり　箋右近侍從なとなるへしありのまゝにいひたるとはみえす

きゝ心ちもまとひ　母の心中なり

いとゝわれもおち入ぬへき　母のさまなり　何のかひ待らしとは右近か詞なるへし

ゆくへもしらぬおほ海の原にこそ　河日本紀に溟渤を大うみとよめり原とは大海うなはらなといふ義なり水原抄云かたのゝ物語にあり可勘

人のいひつたへん事はいとゝきゝにくしと　水底なとをさかしたらはとり出ぬ物ゆゑ外聞いかゝとなり

こゝィ かの人々ふたりして車よせさせて　侍從右近か車をよさせて葬送のかたきをする也　入水を人にしらせしとなり

おましともしイナシけちかくつかひ給ひし御調度共みなからぬききをき給へる御ふすまなと　河上曰孝武皇帝吾聞黃帝

不死今有塚何也或曰黄帝已仙上天群臣葬其衣冠史
記　葬衣衾事　舊事本紀第五饒速日尊稟天神御祖
詔乘天磐船而天降既神損去坐矣高皇産靈尊以爲哀
泣即使速飄命將上於天上處其神屍骸於天上斂竟矣
其饒速日尊以夢教於妻御炊屋姫云汝子如吾形見物
即授天璽瑞寶矣亦天羽々弓天羽々矢復神衣帯手貫
三物葬斂於登美白庭邑以此爲墓者也略記　日本紀
第七時日本武尊化白鳥從陵出指倭國而飛之群臣等
因以開其棺櫬而視之明衣空留屍骨無之然遂高翔上
天徒葬衣冠　衣衾を葬する是等例歟

めのと子の大とこそれかをちのあさり　弄浮舟のめ
のとこの大徳にや箋

ゆゝしとふしまろふ　箋もし浮舟の存生ならはと思
ふゆゑなり

たいふうとねりなと　祕宇治にさふらふとのゐ人内
舎人右近大夫所なり弄箋　花右近大夫なり東のと
のゐ人なり　箋内舎人員數はなき歟三百人ほとも
あるかと云々

御さうそうの事は殿にことのよしを　箋大夫内舎人
なとのいふなり殿は薫なり

法師のかきりしてやかす　季室八島姫の古事別にこ
れを註す人もなきを死人のあるよしにて葬たる例
なり

いさはかなくてけふりはてぬ　よのつねの烟さへ
なるに此烟はことさらにはかなかるへし

ゐ中人ともは中々かゝる事　常陸介かつかふ物とも
は皆東人なるかかくいふと也　花又宇治の里の人
のいふ事歟云々

れいのさほうなとある事とも　花入棺拾骨なとや
うの事共なり

かたへおはする人はことさらにかくなむ　花父母の
中にかた親ある人は京の人のならひにかくとりあ
へす後のわざをもするとゐ中人にいひきかするこ
なり弄　箋花鳥にかたおやある人とありいかゝか
たへとは兄弟あるの義なるへし

大將殿わたりにもからもなくうせ給へりと　祕人の
とりたるうたかひ有へしとなり箋

おなし御うたかひにて　薫匂は近きゆかりなれはし
はしこそ匂の浮舟をかくし給へるかとも薫のうた
かひ給はめやかてかくれなくていかになしたるそ

といよ〳〵薫のうたかはしくおほさんとなり
いき給ての御すくせはけたかく　浮舟の存生の果報
は。然（大にイ）へかりしかなき跡に（にイ）つたなき疑をおひ給は
ん事をいへり
けしきも見きゝつるにはくちかため　今朝とりみた
したるまぎれにかたはし知たるには口かためをす
るなり
有しさまをもきこえてん　薫へも事のさまをしつか
には申てんとなり
かなしささめぬへき　花薫のきゝ給ひて我身共をか
こち給はゝかなしさは次になるへき事なりと也
祕悲しさもさむる事いてきてはとなり
この人ふたりそふかく心のおにそひたれは　箋右近
侍徒なり心しりの人なれは薫をおそるゝ心あるな
り
入道の宮のなやみ給ひけれは石山にこもり給ひて
祕女三宮なり　箋女三宮のいのりに薫の石山にこ
もり給ふなり　但女三もこもり給ふにや　弄女三
宮のなやみ給ふなり薫も同しく參籠ある頃なり
いとゝかしこはおほつかなく　箋それゆゑ宇治へ不
通なりし故心もとなくおもふなり
御つかひのなきをうしと　箋宇治にはこれほとの事
に薫の御使のなきを外聞もあしく思ふとなり
その又の日またつとめて　浮舟のうせ給へる又次の
日なり其早朝といふなり
いみしき事はきくまゝにみつから　祕薫よりの御使
をいふなり　箋聞まゝにみつからおはすへけれと
もとなり
かゝる所に日をかきりて　石山參籠の事なり
よへの事は　祕葬送せし作法なり
かろらかなるさまに　箋冠禮元服事婚禮嫁娶事　大葬葬送
事也　禮記に出せり此三の禮は人間の一生の大事の
作法也然るに聊爾なる作法をいかゝとの給ふなり
こゝのためもからき　箋薫の御爲もあしきとなり
大藏大輔して　祕仲信なり
なみたにおほれたるをかことにて　こたへん方なき
まゝに涙にむせひてえいひやらぬさまにもてなす
なりかことはかこつけなり
殿は猶いとあへなく　祕薫の心なりとにかくに此宇
治の里のうらめしきとなり

おもはすなるすちのまきれに　匂宮の密通の事なり
たゆくよつかぬ　墮　箋物の懈怠ありすかやかなら
ぬ様の事なり
なやませ給ふあたりに　祕女三宮のわつらひ給ふあ
たりにはゝかりあれはなり箋　私女三宮石山にこ
もり給ふとみゆ
宮の御かたにもわたり給はす　祕女二宮の御かたな
り箋弄
こと〳〵しきほとにも侍らねとゆゝしきことを　浮
舟の事なりこと〳〵しく申へきほとのことにては
なしとなり
いま〳〵しうてなんとて　箋宮へはゝかりて参らぬ
と薫のの給ふなり
ありしさまかたちいとあいきやうつき　箋浮舟の事
を思ふ薫の心なり
かゝる事のすちに　箋女の道の事なり　大宮（君イ）や此浮
舟の事なり（ろイ）
さまことに心さしたりし身の　祕道心にすゝみたり
し事なり
思ひのほかにかくれいの人にて　弄よのつねの人の
やうになりてひしり心うせたるとなり　箋佛道の
ねかひはうせてよのつねにて過すゆゑに佛のにく
み給てかゝるにやと薫の我なから思ふとなり
佛のし給ふ方便は慈悲をもかくして　祕歎をもとゝ
して佛の方便にてかくあるかとなり箋　私かやう
の歎の道よりおのつから道心にすゝむ事つねの事
なりさやうならんとての佛の方便かとなり慈悲を
もかくしてとは思ふ人なとをうしなひて歎をさす
るは佛の慈悲にはあらぬやうなれと道心をすゝめ
ん方便にやとなり
かの宮はたまして二三日（フツカミカ）は　花是は匂宮のなけき給
ふ事をいへり箋
人にはたゝ御やまひのおもきと　匂宮はたゝつねの
御病のおもきよしにいひなし給ふとなり
いやめのけしき　箋匂の涙かちなるさまなり
いかなる事にかくおほしまとひ　誰ゆゑにかく物お
ほすそなとゝ實の御病ならぬ事をしりていふ人も
ありとなり
かの殿もいとよく　薫なり
よその文かよはしのみにては　箋文はかりにてはあら

し實事ありしよと薫の推量なり
さ發しぬへき　箋匂の心にかなはん人と浮舟の事を
薫のおほすなり
こかるゝむねもすこしさむる　箋薫の心なり匂の事
ゆゑに浮舟のあはれのすこしさむるとなり
宮の御とふらひに　弄匂宮のなやませ給ふ事なり
こと〳〵しきはならぬおもひにこもりゐて參らさら
んも　私浮舟の事もさしておもてたゝぬ事なれはさ
なり　祕匂宮御わつらひを薫の尋ね給はぬもいか
かとなり
式部卿宮ときこゆるもうせ給にけれは御をちのふく
にてうすにひなるも心のうちにあはれに思ひよそへ
られてなん　花かけろふの式部卿宮系圖にあり桐壺
の御門の御子なればかなる大將のをちにあたりて
輕服き給ふとなり弄同　祕八宮の兄なり源の弟な
りかけろふの式部卿宮なり系圖に見えたり薫の舅
なりかくわたくしの思ひのある折節此輕服の事出
來ぬるさまをかき出ぬる物語のつくりさま殊勝な
り古來の稱美なり箋
宮ふししつみてのみはあらぬ　弄眞實の違例にては

なしとなり
見え給はんもあいなく　箋匂の心の鬼に薫へつゝま
しくおほすなり
おとろ〳〵しき心ちにも侍らぬを　祕させる病にあ
らすとなり
うちにも宮にも　內は今上也宮は明石中宮なり
おしのこひまきらはし給ふとおほす涙のやかてとゝ
こほらすふりおつれは　涙痕不レ學ニ君恩斷ルヲ拭ニ却スレハ千
行ヲ更ニ萬行
かならすしもいかてか心えむ　箋匂の心なり浮舟の
事をかく歎くと薫は心得給はしとなり
たゝめゝしく心よわきとや　花詞上にもみえたりこ
めかしく又目に立心なり　祕いやめなる也女々し
くなり弄同
さりやたゝこの事をのみ　花是よりは薫の思ひ給ふ
事なり　祕薫の心なり　私薫ははやく浮舟の事と
心得たるなり
我をいかにおかしと　箋薫の心也　私匂の心に月頃
薫を心中におかしくこそおほしけめとなり
この君はかなしきは忘れ給へるを　花是よりは匂宮

の思ひ給ふ心なり　箋これは薫なり匂の事ゆゑ浮舟のかなしさは今も忘れたるとなり

こよなくもおろかなるを　祕匂宮の心なり　箋匂の心なり薫は匂の事ゆゑ浮舟のあはれのさめたるを匂のさはしり給はて大かたおろそかに思へるとおほすなり

そらとふ鳥のなきわたるに　河可怜病雀半夜驚人薄媚狂鷄三更唱曉遊仙窟

もし心をえたらんに　薫の心に匂の浮舟の事をかく思ふと推量したらんはいかゝとおほすなりそれにつけても薫のさりけなきをうらやましくも心にくくもあらす

物のあはれもしらぬ人にもあらす　箋薫は世のあはれ物の心をもわきまへたる人のかくなほさりなるをうら山しくも心にくゝもおほすなり匂のなけきを浮舟ゆゑと心得たらは心よわしと思はんとおほすなり

まきはしらはあはれなり　河「わきもこかきてはよりそふ眞木柱そもむつましやゆかりと思へは　祕引歌河にあり浮舟のかたみには薫はその人は有ましきとなり　花匂宮の心にまき柱たにかたみとなれはかなる大將を浮舟君のかたみとまもり給ふなり弄　箋是は薫をたとへたり浮舟ゆゑかをるをなつかしきととりたる引歌なりこれら是所なり弄

やう／＼よの物語り　世間の物語なるへし前は御わつらひの事成へし

いとこめてしもはあらしと　薫のうき舟の事しれるやうにかたはしいひ出んとなり

むかしより心にこめてしはしも聞えさせぬ　弄薫の詞匂宮との中の事なり箋

いまは中々の上らうになりて侍り　弄薫のことされてのたまふこと葉なり　花位たかくなれは身おもく成て人にも細々によりあはぬ事をいふへし　箋大將なとのこと／＼しきを云り　祕薫の詞也昔より心へたてさるとなり上らうとは薫の昇進なとしてなりのほりぬる事をみつからいへり

ましていとまなきさまにて　匂のことをいへり

とのゐなとにそのことゝなくては　御宿直なとの故なくては參りにくき故に疎遠なるなり

むかし御らんせし由さとに　祕是より宇治の事をい

ひ出し給へり　箋中君へかよひ給ひし時の事なり
はかなくてうせ給にし人　大君の事なり
おなしゆかりなる人　箋大君のゆかりなり浮舟の事をの給ふなり
おほえぬ所に侍り　常陸介かゐたりをいへり
人のそしりも侍りぬへかりしをり　祕女二宮を給りし時分となり箋
このあやしき所に
又かれもなにかしひとりをあひたのむ事もことになくや　祕匂のきく耳をいへり　箋浮舟の薫一人をたのむやうにはなかりけるなり　匂へあたりての詞なり
やんことなくもの〳〵しきすちには　箋祕に浮舟の心本臺なとにたのむへき心はなき人也されとたゝらうたしと見て過し也　弄浮舟の心たのもしけなきも本たいなとのやうに物々しく思ひさため給はぬ人なれはたゝらうたしと見て過しとなり箋
きこしめすやうも侍らんとて今そなきたまふ　箋うへは聞も及ひ給ふらんといふやうにて下にはよく御存知もあらんとあたりての詞なり

いとかうは見えたてまつらしと　薫の是ほとになけくとも匂へ見えたてまつらしと思ひしかともさすか涙のこほれたるとなり匂の事をしりて歎かぬよしを見えたてまつらんためなり
けしきのいさゝかみたりかほなるを　祕匂の詞なり匂の御耳あたるやうに申さるゝ事なり
いとあはれなる事にこそ　祕匂の詞也　私匂の心えなからつれなきかほにてあひしらひ給ふなり
いかにともきこゆへく　箋匂のとふらひ給ふへかりしかとも隱密のよしなれはうち過しよしなり
さるかたにても御らんせさせはやと　祕薫の詞なり匂にみせ奉りたかりしとなり　又御覧せられたる事も有へしとなり
おのつからさもや侍けん　弄浮舟を君も御らんしけんとねたみたまふこと葉なり箋同
宮にも參りかよふへきゆゑ　祕中君の御方へ也弄同　箋二條院に浮舟のありし事なり
そゝろなる世の事きこしめしいれ御耳おとろくも　箋御不例の時はむさとしたる世上の事なとの御耳おとろく事きゝ給ふはあしき事そとてかたりさし

給ふなり下の心は浮舟の事なとさのみ御心にかけ
られなと云やうにおもひていふ詞なり
いみしうもおほしたりつるかな　花是は薫の我かた
にかへり給うて匂宮の御事をの給ふ事也　祕薫の
心なり匂宮のなけき給ふさまなり
さすかにたかき人のすくせ　弄浮舟の事八宮の御子
なれはかくいふなり祕　私一生はかなきやうにて
過し人なれと薫匂なとに物を思はする事を高き宿
世とはいふなり　薫の心なり
たゝいまの世に　當代のみかと后別して匂宮を御寵
愛の事をいふ也
見給人とてもなのめならす　祕浮舟はたかき宿世と
なり大君中君なとをおきてこれに心をとゝめ給ふ
はとなり
この人をおほすゆかり　浮舟の事なり
われもかはかりにて時のみかとの御むすめをもちた
てまつり　祕薫の我身も女二の宮の外にかくのこと
くおもふはとなり
この人のらうたく　箋浮舟をいふなり
人ほくせきにあらされはみななさけあり　河人非木

石皆有情　不如不遇傾城色白氏文集　心非木石豈忘
深恩遊仙窟　仁王經曰初一念識異木石生得善生得惡
　伊勢物語にむかし男有けり女をとかくいふ事月
日へ（にイ）てけり石木にしあらねは心苦しとや思ひけん
箋人非木石皆有情これは李夫人の事を樂天の作れ
る詩なり漢武帝のなけき給ふ事をいへり物のあは
れの思ひさまされぬは木石にあらぬゆゑなり爰に
よく相當する歟云々
のちのしたゝめなともいとはかなく（かそイ）　祕葬送の聊爾
なるをいへり箋
宮にもいかゝきゝ給ふらん　箋匂宮なり
はゝのなほ〳〵しくてはゝ（はらからイ）かりあるはなと　花はら
からある人は跡にのこりたるおとゝいのため後の
わさなとこそそきてする事にいひつたへたると也
箋　弄兄弟のある人なれはこと〳〵しく葬の義な
とをせさるかとなりいみたる心なり　祕母かた受
領かたの人なれは世俗の事をいへるなり
なかこもりし給はんも　河長籠　花三十ケ日の穢に
ふるゝ事なり　ひんなしは無便なり
いきといきてたちかへらんも　花行とゆきての心な

り　私長こもりもいかゝとなり又立かへりにせん
もなと覺しわつらふなり宇治への事なり
月たちてけふそわたらましと　祕四月に成てなり浮
舟を京へ出さんとかねて思ひ給ひし日なり浮舟の
薫の方へわたらむ事は卯月十日に定られたるよし
まへにあり　弄四月になりてなりうき舟の身をな
けし事三月下旬なるへき歟三月廿八日に匂宮の京
へむかへんとの給ひし其近き日なるへし浮舟巻に
大將殿は卯月の十日となん定め給ける雨ふりやま
て日頃おほくふるころといへるなり又廿日あまり
にも成ぬかの家あるし廿八日にくたるへし宮はそ
の夜かならすむかへん三月廿八日なるへししから
は月立ての事にや手習巻にあつかふほとに四五月
も過ぬと云々同時成へし
わたらましと思ひいて給ふ日の夕くれいとものあは
れなり　河日も夕くれいと物あはれなりとあり引歌
から衣日も夕くれになる時はかへす〳〵そ人はこ
ひしき　私日の夕くれなり此歌引におよはす
おまへちかきたち花の　箋五月なるへしとあり　四
月とあり　私こゝの詞は物あはれなりといへる同
し時のやうにみゆ如何
やとにかよはゝほと
ときす我かくこふと啼てつけなん　箋古十六なき
人の云々かけてねにのみなくと云々
きたのみやにこゝにわたり給日なりけれは　祕二條
院に匂宮おはします時分なれはなり　花箋　弄薫
の三條より二條院の匂宮のかたへなり　こゝにわ
たり給日とは宮の六條院にも内にもつねにわたり
給によりてなり　私北の宮とは三條宮より二條院
は北にあたれはいへり
薫忍ひねや君もなくらんかひもなき志てのたをさに
こゝろかよはゝ　祕ほのめかしたる歌なり　箋郭公
をしてのたをさとて懐舊をもよほし愁涙をそふる
物なりその聲をきく人はわれと同し心に涙をもよ
ほし給かとなり浮舟の事をふくみて云り　河「い
くはくの田をつくれはか郭公してのたをさをあさ
な〳〵よふ時鳥は冥途より來る鳥也來て農耕をす
すむるなり過時不熟となく仍してのたをさをよふ
とよめるなり萬葉にはもと名なくとよめり（我名なよふ故なり）
又いにしへこふる鳥ともよめり　花拾　しての山こえ

てきつらんほとゝきす戀しき人のうへかたらなむ

伊勢

ふた所なかめ給ふ　祕中君と匂宮となり

けしきある文かなと　箋是は浮舟の事をかすめたる故なり

返句 たち花のかをるあたりは時鳥こゝろしてこそなくへかりけれ　祕ほのめかさるゝと思ひてよめるうたなりかく物思ふ所をは心してなくへきとなり　弄薫の歌に匂宮をかこちたる心ありされは此返歌心してこそ鳴へかりけれとありかゝる浮舟の事を思ひ給ふ折節なとは時鳥も心して鳴へしかく咎め給ふ人ありとの心なり　箋わか心をもて公界へわたして思ひ給ふ事をいへり

女君この事のけしきはみなみしり給てけり　箋中君の浮舟の事を推量したるとなり

はかなさのさま〱につけて　弄八宮あねみやこの事は此浮舟の事をくはへておもふなり

われひとり物思ひしらねは　弄姉宮の心ふかく又浮舟もかく思ひとり給しに中君のひとり殘りたるとなり箋

宮もかくれなき物から　浮舟の事を匂宮の中君へかたり給ふなり

すこしはとりなほしつゝ　すこしはよさまにかたり給ふとなり

かくし給ひしかつらかりし　箋中君の匂をうらむるなり

こと人よりはむつましく　祕兄弟をいへり　箋中君をゆかりそと匂の思ひ給ふゆゑなり

こと〱しくうるはしく　花六君の御かたにては人しけくうるさきことのみおほきをの給ふなり　祕六條院にましませはよろつにこと〱しくもて扱かひ給へは物むつかしくおほすとなり

ちゝおとゝせうとの君達　夕霧や又六君の兄弟の事をいふ

こゝにいと心やすくて　箋二條院中君のかたなり

いと夢のやうに　浮舟の事匂の心なり

れいの人々めして　花左衛門大夫時方なとなり　私大内記式部大輔道定世イ　出雲權守左衛門大夫　時方此二人なるへし

右近をむかへにつかはす　箋宇治へ右近を迎にやり

給ふなり
母君もさらにこの水の音　箋浮舟の母川のけしきを
みるもつらくて京にかへりたるなり
いりきたれは　祕匂の御使なり
こと〳〵しくにはかに立めくりしとのゐ人ともゝ見
とかめす　箋浮舟のおはせぬゆゑに番衆におろそか
なるなり
かきりのたひしもいれたてまつらす　祕右近なとの
心のうちに匂の御いての夜いさとかりしとのゐ人
なとの事を思ひ出たるなり
さるましき事をおもほしこかるゝ見くるしく　時方
なと心にわりなき事に匂のおほしこかるゝは然へ
からぬ事と思へと宇治へきてありしさまを思へは
又ことわりと思ひて心つよからぬと也　弄匂宮の
使にきたる人の心なり
舟にのり給ひし　箋橘の小島の時の事なり
かくの給はせて御つかひになん　時方か詞右近に參
り給へとの御使そとなり
いまさらに人もあやしと　箋右近か詞也
物になんと人にいひなさむも　箋物まゐりにかこつ
けん事なり
大夫(タイフ)もなきて　祕時方左衛門大夫なり　箋
物の心もしり侍らす　匂のなほさりならす心をまさ
はし給ふ事なれはつひには右近なとには行末久し
く心さしをはこふへきよし思ひしにかくむなしく
成給へはかひなしとなりいまよりは私の心さしも
ふかく成ぬへしとなり箋
君たちをも何かは　弄匂宮の使の詞なり女房達をも
つひにはつかうまつるへき事なりと思ひしかはい
そきてもさやうにもきこえさりしとなり箋
わたくしの心さしも中々ふかさまさりて　浮舟なく
成給ひて後は中々心さしふかくおもひきこへんと
なり中々の詞は浮舟のおはせしほとはもとよりの
事なりつひにはとたのみて油斷せしにかく成給ひ
て後は中々一すちにおもひきこゆるとなり
わさと御車なと　祕時方か詞なり
いまひとゝころにてもと　侍從か事なり
さはまゐり給へといへは　右近か侍從にさらは參り
給へといふなり
まして何事をかきこえさせん　祕侍從か詞也　右近

さへ申さんやうなしといへはまして侍従はとなり

御いみのほとにはいかてか　穢中にはいかてか参らんとなり

なやませ給ふ御ひゝきに　祕時方か詞なり

いみあへさせ給ふましき　匂宮の此物おもひふかくて憚りあへぬ御さまそとなり

こもらせ給てもこそは　箋浮舟のため着服もありたく思ひ給ふほとの御氣色そとなり

ありし御さまもいと戀しう　箋匂の御有さまを侍従か思ふ心なり

くろきゝぬとも　箋侍従か浮舟の服をきたるなり

裳はたゝいまわれよりかみなる人もなかりけれは　弄つかへん人おはせぬゆゑに裳をきる事なくて服の色にもなさぬなりされはうす色なるをもたせたり　祕浮舟にはなれぬれは仕へん人もなけれは裳は吉服のまゝにてあるなり箋　花うす色は吉服の時のうす紫なるへし

おはせましかはこの道にて(こそイ)　祕侍従か心なり浮舟の供をして出へき物をとなり箋

人しれす心よせ　侍従か匂宮へ心よせし事なり

宮はこの人まゐれりと　匂なりこの人は侍従なり

女君にはあまりうたてあれは　箋中君へは匂のの給はぬとなり

その夜なき給しさま　弄きぬをかほにおしあてゝなと出たりし時の事なり　箋身をなけしよの事也　私匂のおはして侍従はかりにあひて歸給ひしその夜の事歟但弄箋の義然へし

心つよきさまにおほしかくらん　箋かやうに身なとなけ給はん人とは思ひもよらさりしとなり仍平生の心持ゐ(用ひイ)をいへり

いといみしうさるへきにてともかくもあらましよりも　物なとふかく思ひてそれよりもむなしく成ことはよのつねなるへしいかて身をなけむとは思ひよれるそといふ

これをみつけてせきとめたらん　箋浮舟の身をなけつる所をみつけてとりとめたらはいかゝあらんと也今ある事のやうに匂のおほす心なり

御文をやきうしなひ給ひしなとに　弄此事の有さまを侍従か宮に語り申けるよし此詞にて見えたり

箋文なとうしなひ給ひしに心のつかさりけるを後

悔するなり
何はかりの物とも御らんせさりし人の　秘侍従か事なり
あなたもてはなるへくやはと　秘中君もよそ外ならずとなり箋
さふらはんにつけても物のみかなしからんを　中君につけて思ひいつることおほからんとなり
かの御れうにとて　秘浮舟の料なり
くしのはこひとよろひころもはこ一よろひ　河櫛筥一雙　衣箱也
たゝこの人におほせたる　秘おほせたるは此人に似合たる事なり箋弄　箋おほせたるは課の字なり云云似合たるを云
こまかにいまめかしく　秘くしのはこなとなり
かゝる御ふくに　秘御服の時分なれはもてわつらふなり
大將殿も猶いとおほつかなきに　箋薫の宇治へおはしたるなり
このちゝみこの御もとに　箋八宮の時薫のおはしそめし事なり

佛をしるへにて　箋こゝへ薫のおはしそめしは佛道修行のためのむつひなりしか姫君たちの事にかゝつらひてより佛の內證にちかひてかくそれゆゑ物を思ふ成へしとの薫の心なり
ありさまもはか〳〵しうもきかす　箋右近をめしていとゝ薫のの給ふ詞なり
あま君なともけしきはみ　秘辨の尼なり　箋辨もほの〳〵しりたる事なれは當座まきらはしてもかくれあらしとありしさまの事ともを申なり右近か心詞なり
あやしきことのすちにこそそらことも　秘匂の御ためにこそそらことをもせしかとなり
まめやかなる御けしきにさしむかひ　秘薫の實めなるにむかひたる事也　箋實々しき薫にむかひてはかねてたくみたるやうにもいはれぬとなり
ありしさまのこと　箋匂の事と云々身をなけし事歟
あさましうおほしかけぬ　秘入水の事なり　私前のありしさまの事とは身をなけし事なり又匂の事をも申たる事は末にみゆ
さらにあらしと　秘薫の不審に思ひ給へるなり

おとろ〳〵しき事は思ひたつへきに　箋浮舟の入水なとは思立ましきと薫の思ひ給ふなりされは此人人の心をあはせて匂宮なとのとりかくし給ふかと思へともそれもふかく思ひ歎き給ふほとのしるし又愛の人々の歎くさまもさは見えぬ事なり

つれなしつゝりて　花しらぬかほなる心なり

御ともにくしてうせたる人やあると　箋浮舟と一度にうせたる人やあるとそれを猶うたかはしくて猶右近にとひ給ふなり薫の詞也

我をおろかなりと　箋薫のおろかなるとは浮舟の思はしとなり

さるわさはし給はん(てんイ)　身をはなけ給はしと人のかくしたるかとうたかはしくて猶おしての給ふ詞なり

われなんえしんすましき　箋入水なとあらんとは思はぬと右近なとか心をさくりてなほかくの給ふなり

されはよとわつらはしくて　祕右近か詞心なり

おのつからきこしめしけむ(てイ)　右近か詞なり

おほすさまならておひいて給へりし　八宮の宇治にてこそ成長し給ふへき人のあつまの方へくたり給ひし事なとなり

世はなれたる御すまひ　此宇治の里なり

かくわたりおはしますを　箋薫のかよひ給ふ事を云也

もとよりの御身のなけきをそへ　祕薫に何事をもなくさみ給しなり

心のとかなるさまにて　箋三條宮へ薫のわたさんと有りし事なり

ことにいてゝはの給はねと　浮舟の心中にうれしく思ひし事なり

その御ほいかなふへき　祕京へ出し給ふへき事なり

つくは山もからうして心ゆきたる　祕母の事なり常陸か妻なれはなり　河浮舟君母の事なり常陸介が妻なれは當國の名所を云なり

心得ぬ御せうそこ　祕波こゆる比ともしらすの歌の事なり　箋右近か詞なり　花薫大將歌に波こゆる頃ともしらす云々此御せうそこを云なり

久しく御せうそこなとも侍らさりしに　箋薫のかきたえ音つれさりし事なり

思ひあつかひ給ふはゝ君の中々なる事の　箋是は薫

の義絶のやうなるを浮舟の思ひわひしさまを右近
かいふなり
いかなる事にかとまきれつる心もうせて　祕薫の心
なり　弄匂宮の事をねたみ思ひ給ひし心の事なり
心に身をもまかせす　薫の詞河に引歌あり不及之
けせうなるさまに　祕外様(トサマ)なるさまにし給ふと也
私見證むきなといふ心歟　箋狭小なり　私たゝ所
せき身といふ心歟
おろかにみなし給ひけんこそ　祕さては我をおろか
に思はれしよと也　弄浮舟の心をわくる方ありて
や薫をひたすらにたのまさりけんとなり　箋薫の
ねんころなるを浮舟の見しらさりしは別心ありし
ゆゑそとなり
いまはかくたにいはしと　祕薫の詞なり　箋なき人
のうへはいはんはいかゝなれともとなり
宮の御事よ　箋匂の密通の事なり
人の心をまとはし給ふ　匂宮は人の心をよくうつす
宮そとなり
つねにあひみたてまつらぬなけきに　箋浮舟の匂へ
心をうつしてつねにもあひみぬ物思ひに身をうし
なへると思ふと薫のの給ふなり
たしかにこそきゝ給うてけれ　右近か心なり
いと心うき事きこしめしけるにこそ　右近か詞さま
なりいひにくゝしたる體(テイ)なり
おのつからきこしめしけん　祕右近か詞なり
この宮のうへの御かたに　箋中君なり二條院に浮舟
の有し時の事なり
入おはしましたりし　匂の二條院にて浮舟へ忍ひよ
りし事なり
あやしく侍し所に　祕東屋へいてたるなり　箋三條
わたりの家なり
たゝこのきさらきはかりより　花正月に卯杖卯槌な
と中君の彼若君へ宇治より奉らせ給ひし其時より
匂宮はしり給へるなり
ひとたひふたゝひ　箋文の返事なり右近か用意あり
て申なすなり浮舟は返事もなかりしを右近なとか
そゝのかして返事一二度有つるとなり
かうそいはんかし　箋薫の心也これより外にいはん
やうはあらしとなり
宮をめつらしくあはれと　是より薫の心中にさまさ

まおもひつゝけ給ふ事なり
わか方をさすかにおろかには　箋薫の方をもおろかならす思ふ故にこそかく身をはすてけめとなり
いかてかかならすふかき谷をももとめ出ましと　河「世中のうきたひごとに身をなけはふかき谷こそあさくなりなめ箋　祕都なとにすまは入水なとの思ひよりはあるましきとなり　弄かゝる山里の川近き所ならすはおもひよるともたよりあらし物をとなり
此さとの名をたにえきくましき　宇治の里の名なり
大君（かたイ）以下の事に心をつくすとなり
人かくと（とイ）つけそめたりし　祕水になかす物なれはなり箋花
たゝわかあやまちにて　箋此浮舟をは我かもてそこなひたると薫のみつから身をせめて思ふなり
はゝの猶かろひたるほとにて　祕葬送なとかろ〳〵しくせしと思ひつるに此事をきゝてことわりと思ひ給ふなり
さはかりの人の子にては　母の爲に浮舟は過分なりし子そとなり

忍びたることはかならすしもえしらて　祕句の事なとはくはしくは母はしるましとなり
わかゆかりにいかなる事の　箋女二宮の御あたりよりいか成事か有けんと母の思はんと薫の推量也
けからひさいふ事は有ましけれと　現在此所にてうせぬ人なれはなりされとも人めはかりにけからひのあるやうにしなし給ふなり
御くるまのしちをめして　車の榻なり
薫われも又うき故郷をあれはてはたれやとり木の陰をしのはむ　箋薫の我さへ此所のうけれはうと〳〵しくならんなりされは誰かこゝを忍ふのもあらんとなり
あさり今はりしなりけり　箋前の阿闍梨の律師になりあかりたるなり
つみいとふかくなる　祕入水は自害のことか有れは也　箋殺生の准據なり　河如溺水之人急須偏救岸上之人何用濟爲觀經玄義又自殺者殺生之隨一也云々此故也
あらましかはと　浮舟存生ならはとなり
あま君にせうそこ　箋弁尼に薫のおとつれ給ふなり
ゆゝしき身をのみ云々うつふし〳〵て　河古今「世

をいさひ木の本毎に立よりてうつふしそめのあさのきぬ也　箋辨か返事なり誠に詞もあるましけれは出こぬもことわりなり
道すからとくむかへ取（スイ）　箋薫の思ひつゝけ給ふ心中なり
いつれのそこのうつせにましりにけん　河かたのゝ物語にありと云々水原抄にうつせはむなしき瀬なりうつせ貝なといへり　祕うつせはうつせ貝なり八雲御抄にも源氏をひかれたり　河海にはうつせはむなしき瀬とかゝれたりおほつかなし　弄うつせ貝なといふ心なり萬葉歌石川の貝にましりて
祕河海の説いかゝうつせはうつせ貝成へし箋
かの母君は京にこうむへき　箋常陸か女少將の北方なり
れいの家にもえいかす　弄けかれたりとて常陸か家にもゆかぬなり
又これもいかならんと　箋浮舟の事にそへて思ふなり
ゆゝしけれはえよらす　花いま〳〵しき身なれは子うみたる所へもえよらぬとなり箋

のこりの人々のうへをも　浮舟一人の事ゆゑ餘の子の上をは思はぬとなり
大將殿より御つかひ　箋薫より浮舟の母へ始て音つれ給歟
あさましき事はまつきこえんと　祕薫の文の詞也
箋此事は母の方へ先いふへき事そとなり
まいていかなるやみにか　河人のおやの心はやみにあられともおもふみちにまと（ヨイ）ひぬる哉　河薫の母の心を察しての給ふなり
過にしなこりとは　祕あひかはらす申かよはし給へとなり　箋浮舟のかたみとも薫をおほせとなり
かの大くらのたいふをそ　箋大藏大輔仲信なり弄
心のとかによろつをおもひつゝ　祕口にて御使にもの給へるなり　箋薫の本性急ならぬゆゑ浮舟へも心さしの切なりしやうには母の思ふましけれとも今より行するをも見給へおろそかならしと使しての給ふなり
をさなき人とも　箋常陸介か子ともなり　祕夢浮橋卷に小野へ使につかはされしわらはも此内なり
いたくしもいむましき　箋穢にも甲乙丙丁ありこれ

はことにふかゝるましき穢そとなり　祕御使をよひあけたるなり

いみしき事にしなれ侍らぬ　祕母の御返事なり

かゝるおほせ事見侍るへかりける　かやうの御消息なとをみるへきとて命のつれなかりしとなり

にやとなん　箋此巻にはなんとかきたる詞おほしとしころは心ほそきありさまを　祕宇治にすてゝおかれしとなり

かすならぬ身のおこたりに　母の數ならぬゆゑかやうに有しかは我身のとかそとなり

かたしけなき御ひとことを　祕京へわたしてんと也

里のちきりもいと心うく　花是も里の名もうらめしき心なり

さま〳〵にうれしき　母の事又子ともの事なと仰られたる事なり

たのみきこえさせ侍るへきにこそと思ひ給うるにつけても　箋薫の懇に仰らるゝにつけていよ〳〵浮舟の事に涙にくるゝとなり

かの君にたてまつらんと　祕浮舟にまゐらせて大將殿へ奉らんと心さしたる事なり　情を浮舟にたてまつらんと思ひしなり直に薫へ奉るへきにはあらさるなり

よきはんざいのおひ　河斑犀帶なり　祕斑犀なり花鳥にみえたり弄　斑犀帶四位五位の人常に用之公卿服者は烏犀帶諒闇には斑犀をさすなり箋いとすゝろなるわさかなと　祕只今はかやうのおくり物は無益となり　箋薫のの給ふなり　私むかしの人の心さしとは浮舟の事なり

自ら逢侍りたうびて　浮舟の母の仲信にあひしなり

なにイなとゆゑなとは　うき舟のゆかりなと申さんはかたしけなしたゝおもてむきなるさまにて子ともを參らせんとなり

まゐらせ侍りて　祕家禮申さすへしとなり　箋母の詞を御使の申なり

けにことなる事なきゆかりむつひ　箋常陸にむつひたらんは人のあしくいひなさんとの事なりされともそれは心くるしからぬ事そとさま〳〵了見しておほす薫の心なりさきへいひのへたるなり　祕常陸の子なとめさむは人きゝもいかゝと也薫のおもひやりふかき事殊勝なり

みかとにもさはかりの人のむすめ　祕浮舟か眞實常
陸介かむすめなりとも有へきにとなり　箋みかと
なとへも常陸ほとの品の物の女もみや仕するなり
それに御寵愛なとあらんもくるしからぬと思ひな
し給ふなり
湖月抄の卅六丁の左右入
あはれしる心は人に　黄ムきえつゝそふるとは薫へ
おとつれも申さぬとなり五文字にあはれしるとい
ふに誌の心をもたせてきえつゝなとゝいへる歟
同上
つねなしとこゝらよをみるうきをたに　わかつねな
らぬ世のことわりにならひても人のしるまてなけ
く事はなかりしかと浮舟の事はなけくといふ事を
たに書いひのこしたる歌にや猶可吟味なり
たゝ人はたあやしき女　河凡俗タヽヒト日本紀
かの守のむすめ　箋浮舟の實に常陸か女なりとても
くるしからぬ事なりまして八宮の御女なれはかく
いへり
猶このゆかりこそ　箋浮舟を薫ゆゑもてうしなひた
るとおもふ母の心に此ゆかりうれしきと思ふはか
りの恩を報せんとの心なり
かしこにはひたちのかみ立なからきて　浮舟の母の
はなれゐたる家へ常陸かたちなから行たるなり
をりしもかくてゐ給へる事　箋常陸か孫まうけたる
折しもなり
としころいつくになんおはすると　祕浮舟の在所な
り
めいほくありてしらせむ　箋浮舟の三條の宮へむか
へられておもたゝしき時常陸にかたらむと母のお
もひて過しとなり
よき人かしこくして　祕此常陸守權門上臈なとをは
こと〳〵しく思ふ心のある人と也箋同　弄常陸守
か事也よき人にてかしこしとなり　私弄の義如何
いてめてたき御さいはひを　箋常陸か浮舟の事をい
ふさまなり
おのれも殿人にて　箋常陸も薫へ家禮の事なり
わかき物ともの事おほせられたる　常陸か子ともの
事なり
ましておはせましかは　浮舟の存在の時かやうなら
はいかはかりうれしからんとの母の心にてふしま
ろふなり
守もいまなんうちなきける　浮舟のおはせし時は母

のこれにのみ心はるゝといひし今はしめて常陸か涙をこほすとなり
さるはおはせし世に中々かゝるたくひの人しも　祕薫の心なり浮舟の存生には母のかたへ文なともつかはされさるとなり
わかあやまちにてうしなひつるも　さイ　箋薫のあしくしなしてかやうに成たるとおほすゆゑに今こそ結句ゆかりをもたつね給へ存生ならはさも有ましきとなり
人のそしりねん頃にたつねしと　弄人のそしりをも尋ね給はしとなり　外聞をもさのみ遠慮せす母の心をなくさめんとなり
いかなりけん事にかと　祕何とむきに作善をもすへき事にかとなり　そイ　私是はまた浮舟の生死のたしかにしられぬ事を思ひておほすにや
とてもかくてもつみうましき　箋浮舟の身體はともかくもあれ此法事は浮舟のため罪うましき事そとなり　私浮舟の生死分明ならねとも罪にはならしと云心歟
かの律師の寺　祕此卷にて昇進するとみえたり

六十僧のふせなと　河六十僧六波羅密もしは六道にあてゝおこなはるゝなり　花三代實錄曰貞觀十五年七月五日辛未延六十僧於紫宸殿限以三日轉讀大般若經此外六十僧をめす例おほし皆大般若經講讀の爲なり又御中陰の佛事に六十僧請せらるゝ事定れる例なり七僧も六十僧の中にこれ有へし　祕つねは大般若を讀誦の時六十僧なり此法事もさやうの類にや箋　私花鳥の分然へし
はゝ君もきゐて　浮舟の母なり來居てなり
宮よりは右近かもとに　匂よりは右近かもとへ御心さし有也それを右近かわたくしの心さしのやうにしたるを人の不審したるとなり
とのゝ人ともむつましきかきり　箋薫の家人ともなり
ひたちのかみ來居て　箋常陸介か宇治へ來りて所えかほなるを薫の家人ともの不審するなり
もろこしのしらきのかきり　河唐（モロコシ）新羅（シラキ）
いとあやしかりけり　常陸介隨分と思へとけすしくひなびたる成へし
この御ほうしのしのひたるやうに　箋薫の忍ひてそ

とし給法事もけはひことなるなり常陸か隨分と思
ふは猶おとりたるとなり
宮のうへもす經し給ひ　箋中君よりの心さしなり
七僧(シチソウ)のまへの事　河七僧の前は僧食の事なり七僧法
會は四十九日におこなふなり講師讀師咒願三禮唄
散花堂達これを七僧といふなり
宮にかしこまりきこえて　祕女二宮にはゝかりてと
なり　箋みかとのおほしの給ふなり
ふたりの人の御心のうち　花匂宮と薫大將とふたり
なから浮舟のことをわすれ給はぬ事なり　祕匂薫
なり
ふりすかなしく　箋忘れかたき事なり
あやにくなりし御思ひのさかりにかきたえては　浮
舟の事を切に歎き給ひしさかりには匂宮はいつか
たへもかきたえ給て一段切なるやうなりし成へし
あたなる御心はなくさむやと　箋匂のあたなる心を
云はや浮舟の事もすこし思ひさましてその思ひの
なくさめになとゝいふ心のいてきてこゝろみ給ふ
あたりなともあるとなり
かの殿はかくとりもちて　箋薫の實々しき心をいふ

のこりの人をはくゝむとは常陸か子とも宇治にあ
りし女房なとのうへなるへし
いふかひなき事　浮舟の事の忘れかたき薫の心也
薫はのとかなるやうなれとも末とほる心あり匂の
心は切なるやうなれと末のとゝかぬ心有人の性を
みせてかけり
きさいの宮の御きやうふくのほと　祕式部卿宮薨し
給ゆゑの輕服なり前にあり六條院におはしますな
り　弄明石中宮の御をち式部卿宮のうせ給し事也
箋花同
二宮なん式部卿になり給にける　花匂宮の御このか
みなり式部卿の宮の闕に入給ふなり　弄明石中宮
腹の二宮の事かけろふの宮の闕なり箋　私此式部
卿宮二宮は遠々しくて明石中宮なとへも細々參り
給はぬとなり
この宮はさう〳〵しく　祕匂なり
一品の宮の御かた　匂宮一腹の御あね歟
よき人のかたちをもえまほに見給はぬおほかり
一品の宮のあまり物ふかきさまなり
大將殿のからうしていと忍ひて　からうしてとは一

品宮の御あたり物ふかきゆゑにいへり

小宰相の君といふ人の　花薫の忍ひてかよひ給ふ小宰相君も一品宮のめしつかふ人なり箋　弄一品宮の方の女房なり

おなしことをかきならすつまおと　私琴琵琶なとなるへし

この宮もとし頃いといたき物に　祕匂なり箋同　花匂宮も此人をたゝならす思給へる也いたきとはねたき心なり薫に心さしあさからぬをねたく思ひ給ていひさまたけまほしく思給ふなり　祕いたきとはつれなき人となり

いひやふり給へと　祕匂宮の小宰相に薫の事をいひやふり給ふなり　箋匂の薫をいひさくるなり

なこかさしもめつらしけなくはあらん　祕小宰相か心なり匂宮なれはとてなひかぬ人もなくてはと心をたて思へるなり　小宰相か心なり薫にならへてなとか匂宮にはなひき奉らんと思ふなり　私匂宮のあた／＼しく好色におはするになひかぬ人はまれなるゆゑにかくいへり

まめ人はすこし人よりことなりと　祕薫なり箋　花まめ人は薫なり小宰相の匂宮に心つよきを人にすくれたりと薫の思ひ給ふとなり浮舟の君の事に思ひよせ給ふなり

かく物おほしたるさまも　花薫の浮舟の事をなけき給ふをみしりて小宰相のきこえ侍るなり箋

小宰相君　あはれしる（人イ）心（心イ）は人におくれねとかすならぬ身にきゝつゝそふる　世のあはれは人におくれねとも數ならさる故にとはさるとなり

かへたらはとき（なイ）こえたり　弄後撰十九「草枕紅葉むしろにといへる近世に人の勘出し給しとなり　祕心は浮舟に我身をかへたらはとなりあしき物によき物をかへたらはといふ心なり引歌無之　正徹室町殿にて此物語を講讀の時引歌なきよしを申せしに慈照院殿の仰に後撰十九に草枕紅葉むしろにかへたらは心を摧く物ならましやと云る歌然るへきかとある招月尤可然無之よし（の由申し侍るとイ）申之云々箋　河浮舟の君の事を大將思ひ歎きたるをみて一品宮の小宰相君我身にかへたらはと云るなり若又有古歌歟猶可勘

物あはれなる夕くれ　かやうの事も折からによるへ

き事なり
返薫 つねなしとてゝら世を見るうき身たにひとのしるまてなけきやはする　祕世間の無常はよくしれとも人のしるへき程なけく事はなきによくおしはかりて尋たるをうれしきとなり　弄小宰相歌に薫をこひ奉るは心ありとなり人のしるはかりなけかぬにこ也　箋薫の我は平生無常を心にかくれともそれほとにはなけかぬとなり小宰相を思ふといふなり　私こゝら世を見るとは大君浮舟のことを心にもちていへる歟されとも人のしるはかりはなけかぬを心ありてよくおしはかりたまへりといふにや　祕青表紙にはつれなきとあり是可然歟世間をつれなく思ひなして居る我身なり天文二年十月及此沙汰私書本歟同之
このよろこひあはれなりし折から　花小宰相のさふらひの詞をよろこひ思ひ給ふとなり箋
いとはつかしけに物々しけにて　祕薫のさまなり平生けたかき人なとかとなり　弄薫の體なり小宰相か體といへる説あり不可然なり
かやうになとならし給はぬ人から　これほとのかろ〳〵しきふるまひをもなほさりにては薫のし給はぬ人となり　此人からもやんことなき小宰相なと祕弄にあり如何
人からもやんことなきに　祕弄に小宰相可然人と見えたりと云々　此義如何　私是も猶薫の事とみゆ
せはくほとなき遣戸口　箋小宰相つほねのさま也
見し人よりもこれは心にくき　花見し人とは浮舟君をいふなり　祕浮舟よりもなり弄箋同　私是も猶薫の事と見ゆ
なとてかく出たちけんさる物にて我もおいたらまし　花いてたちけんとは宮つかへにいたしたる事なりおいたらましとは我もとにおくへかりし物をの心也　祕宮つかへには出たるそとなり箋　弄心にくき人のなとかは宮つかへに出けんとなりおいたらましは薫の心に小宰相を思ひ人にてすゑ置たらんににくからぬ人なるをと思へり箋同
人しれぬすちはかけても見せ給はす　河薫のかく思ふすちをはぬしにもしらせ給はぬとなり　祕かけはなれてもてなし給へり　箋小宰相にみたれたる事はなきとなり　私只今思ひのほとなれはみたれ

たる事はなき成へし
はちすの花のさかりに御八かうせらる　花中宮の御八講なり　弄明石中宮のとり行はせ給ふなり六條院にての事なるへし箋　祕夏になるなり此物語色色の事をかきもてゆく心は此思ひやなくさむとあなたこなたへし給ふさまをみせたるなり　私此註此所には有へからす不審　箋明石中宮の源氏紫上なとの爲におこなひ給ふなり
五卷（ゴクワン）の日なとは　祕薪の行道なり　中日なり　提婆品の日なり
五日（イツカ）といふあさ座にはてゝ　花五日は結願の日なり
朝座はてゝやう／＼御裝束をもとのことくあらたむるを云なり　祕五日十座の御八講なり　箋結願の日は朝座はかりなり
みたうのかさりとりさけ　御堂の莊嚴をあらたむるなりとりさけ避なりとりのくるなり
北のひさしもさうしともはなち　寢殿の北面なり東は道場になる故に西にうつり給ふなり箋
にしのわたどのに姬君おはしけり　花一品の宮の御事也箋　弄一品宮の事六條院の內西の寢殿にて八講おこなはるゝにや
物きゝこうして　花こうは困なりこんの聲をこうと云物にきゝくたひれたる心なり
大將殿なほしきかへて　弄中宮御八講の後なり　祕八講は束帶なり直衣にあらため給ふなり　箋薰の體なり
けふまかつる僧の中に　八講の衆僧なるへし
つり殿のかたに　箋寢殿よりあなたへとほる道也
みなまかでぬれは　僧衆のはやとく退出したるなり
かくいふ宰相の君　弄小宰相事なり　前に小宰相のうはさをいひたれはかくいふといへり
さやうの人のゐたるけはひ　よのつねの女房なとのゐたるにはかはれるなり
はれ／＼しくしつらひ　こゝに一品の宮のかりにおはする時の事なり
ひを物のふたにおきてわるとて　花延喜主水司式曰凡供御氷者起四月一日盡九月卅日其四九月日別一駄以八顆爲駄准一石二斗五八月二駄四顆六七月三駄又曰凡供中宮氷者五八月日別四顆六七月六顆　今按氷物は六七月のあつき時は加增してもんとつ

かさより是をたてまつるなり今物語にいへるは中宮へたてまつれる氷なるへし　河仁德天皇六十二年甲戌五月此歲額田大中彥皇子獵二于闘鷄一時皇子自二山上一望レ之瞻二野中有一レ物其形如レ廬仍遣二使者一令レ視還來之曰窟也因喚闘鷄稻置大山主問レ之曰在二其野中一者何窟矣啓レ之曰氷室也皇子曰其藏如何亦索用焉曰堀二土丈餘一以レ草蓋二其上一敦敷二茅荻一取レ氷以置二其上一經二夏月一不泮其用即當熱月漬氷酒以用也皇子則將來其氷獻于御所天皇歡之自是以後每當季必藏氷至于春分散氷也

からきぬもかさみもきす（へしさ也イ）　弄あつき日なれはすこし無禮の體も有しにや

おまへとは見給はぬに（一品宮なり）　箋皆うちとけたる體なれは薫の心に女一宮おはするとはしり給はぬなり　花箋

しろきうすものゝ御そ　祕一品宮なり

にるへくもあらさりけりと　箋薫の心なり

おまへなる人はまことにつちなとの心ちそする　河廝（願イ）二前後左右一粉色如レ土長恨歌傳　箋　祕長恨歌傳に粉色如土とあり貴妃の前にては其外の宮女はみな土のことくみゆといへるなり

きなるひとへうす色なる裳　弄上らうしくみえたり

心さし給ふ小宰相成へし

扇うちつかひたるなとよういあらむやはと　祕是もをしへにかくなり女の扇なとつかふにも用意あるへき事そとなり箋

中々物あつかひにいとくるしけなり　花氷をわる人に小宰相君のいふ詞なり　祕氷をわる辛勞なると也　私氷をもてあそふはすゝしからん爲なるか氷をわるとて辛勞なるはかへりてあつかはしからんとなり

たゝさなからみ給へかし　祕氷をわりえさる間只此まゝにてと申なり　箋わらすにをけと小宰相君のいふなり

この心さしの人とはしりぬる　祕小宰相なり　箋今の扇つかひたるも此人歟

かしらにうちおきむねにさしあて　次々の人のさまなり

こと人は　祕ことなる人なり　私別の人なり

かみにつゝみて紙につゝみて持たるなり

おまへにもかくてまゐらせたれは　一品宮へも紙に

つゝみて奉らせたるとなり
いとうつくしき御手を　一品宮の御さまなり
しつくむつかし　手に持給へは氷のとくるさまなり
またいとちひさく　箋一品の宮のちひさくおはせし頃薫もをさなくて見たてまつりし事を思ひ出る也
れいのやすからす物おもはせんと　薫の心なり是故にや又物思はんとなり
とみのことにてあけなからをりにける　花とみの事はいそきたる事ありて障子をも引立すしてつほねへおりたるといふなり　箋下らう女の用意なきさまなり
まとひいる　これも同しくけしからぬさまなり
このなほしすかたを　箋薫なり
ふとたちさりて　箋かほるの用意なり
このおもと　箋まとひ来る人なり
左の大殿の君たちならむ　弄薫もうとかるへき人ならねともつねにみたれ給はぬ人にて人もはちきこえしによりてなり　祕夕霧の御子たちなるへしとなり
ひとへもはかまもすゝしなめりと　花薫のき給へる直衣すかたをいへり單も袴もすゝしなれはさやめかぬによりて聞つけ給はぬにやと思へり　祕すゝしなれは音もせさるなり
思ひこうしてをり　思ひ困してなりくるしく思ふ心也　祕此段女の心つかひを書なり小宰相かいひし詞又手ここにもてさわくさま一品宮の御詞又下﨟女房の我身のさまをもわすれて来りしこさまさま女のしなをかけり箋　弄人々の次第に品々見えたり女君はいふに及はすけたかく次に小宰相優にみゆ又かしらにうちおきなとさまあしきは其より次と見えたり又下らう女房のさわきてたゝ来にきたるいやしくみゆ四重にかきたり
かの人はやう〳〵ひしりになりし心を　祕薫なり一品宮に心をとめ給へるなり
一ふしたかへそめてさま〳〵なる　箋大君の事よりおこりて浮舟の事又小宰相まてこ今イ又一品宮をみたてまつりて薫の思ふ心なり
とし頃みたてまつらはやと　箋一品宮を見たてまつりて悔しきとなり
中々くるしくかひなかるへき　箋みそめたてまつり

し事なり
女みやの御かたち　花是に薫のあつかりの女二宮の
御事なり　祕女二宮なり
これよりかならすまさるへき事かは　箋一品宮女一
のかならす女二宮にまさらん事はなしと思ひなせ
ともさらに似給はぬとなり
あさましきまてあてにかほり　一品宮の御事を薫の
思ふ心なり
これよりうすき御そ　箋一品宮のうす物をき給ひし
かは女二宮にもきせたてまつりてみむとなり
あなたにまゐりて　弄女三宮の御方の女房になるへ
し　祕女三宮なり　薫の母入道女三宮なり
大貳にうす物のひとへの御そ　花一品宮のき給へる
御ひとへをまねひ給ふ故なり　箋大貳は薫の宮女
なり
さかりにおはしますをもてはやし給ふと　箋女二宮
を薫のもてはやすと女房共なとは思ふなり
れいの御ねんす　祕薫なり
の給ひつる御そ　白きうす物のひとへなり
なそこはたてまつらん　祕なに事にとなり　箋たて
まつるは進の字なり倚衣正進裂雲裂（方進雲花製）きせたてまつ
りぬとなり
人おほく見るをりなむすきたる物きたる　祕人のを
しへにかけり内々の出たちにはくるしからしとな
り箋
はうそくにおほゆる　花傍側なりもの〳〵しからぬ
すかたをいふなり
たゝいまはあへ侍なん　花あへはへは敢侍なり人の
みぬ所にては薄き單なともあへてき給へきにくる
しからぬこゝろなり
御はかまも昨日のおなし紅なり　花是も一品宮の御
したてをいふなり　箋一品宮の御さうそくのこと
くに女二宮にきせ見給ふなりされともおとれる成
へし　私一品宮紅の袴き給へるよし前にはしるさ
すこゝにて見えたり
御くしのおほさすそなとは　花御くしのおほくすそ
にたまりたるなさを云なり
ひめして人々にわらせ給ふ　箋是も女一宮を似せた
るなり　昨日女一宮一品の氷をもてあつかひ給ひ
しその次の日なり

とりてひとつたてまつりなとし給ふ　花これも小宰相君の氷を一品宮にたてまつりし事を思ひ出て薫のまねひ給へるなり
心のうちもおかし　箋薫の昨日の事を思ひいてゝかくのことくし給へる我から心中におかしきとなり
繪にかきて戀しき人見る人はなくやは有ける　祕李夫人の事なり　弄漢皇李夫人の事なと成へし　箋繪にかきてさへ見るためしのあるに是は御兄弟なれは似かよふへき事そとなり
昨日かやうにてわれましりゐ　一品宮の御方にてかやうならはやとなり
一品宮に御文はたてまつり給ふやと　弄一品宮の御文かきをゆかしく思ひ給ふ薫の心なり　祕薫の問ひ給ふなり
内にありし時うへのさの給ひしかは　祕女二宮の御詞なりうへは内裏の御事なり　私内は内裏うへは主上なり箋
たゝ人にならせ給ひにたりさて　箋薫の詞女二宮の薫に具し給ふ故におさして御せうそこなともなきかとなり

大みやの御まへにてうらみ　箋明石の中宮なり
いかゝうらみきこえん　祕女二宮の詞箋
げすになりにたりとて　箋薫の詞也　祕かく申へしとなり
おとろかしきこえぬ　女二宮からは卑下して音つれ申さぬと申へしとなり
大宮にまいり給ふ　薫の明石中宮へ参り給ふなり
れいの宮もおはしけり　花匂宮の事なり
ちやうしにふかくそめたるうす物のひとへ　河西宮左大臣六月比丁子染帷を着し給と舊紀に見えたり　花丁子そめのひとへ帷夏きる事河海に見えたり
こまやかなる直衣とは夏の直衣こき花田にそめたる心にやことし匂宮は廿五歳はかりに成給へるなり
女の御身なりのめてたかりしにもおとらす　箋匂宮を一品宮にくらへていふなり（女一）
おもやせたまへる　匂の物思ひ給ひし後なり
おほえたまへりと見るにも　祕匂宮女一宮によく似給へり
まつ戀しきを　箋薫の心一品宮を思ふ心なり

ゐをいとおほくもたせて　弄匂宮のもたせて中宮へ參り給ふなり　花匂宮の持參し給ふり
女房してあなたに　女一宮（一品イ）の御方へなり　花一品宮の御方へ御繪をまゐらせ給て中宮は宮に御見參あり大將もちかくまゐりより給ふとなり
われもわたらせ給ひぬ　匂宮なり　弄匂宮の繪を參らせらるゝ時なり大宮へ參らせらるゝなり女一宮の方へなり
大將もちかくまゐりより給て　祕中宮の御前なり
いにしへの御事　祕源氏紫上等の事なり
殘りたる繪見給ふついてに　一品宮へ參りたる繪の殘り成るへし
このさとにものし給みこの　花女二宮の御事なり上の詞に大宮の御まへにてうらみきこえむとありはたして申給へるなり　祕女二宮なり
姫君の御かたより御せうそこも侍らぬを　箋一品宮の御事なり
かやうの物とき〳〵物せさせ給はなむ　花繪なとをいふなり　祕繪草子なとなり箋　弄繪なとを女二宮へ參らせ給へとなり
なにかしかおろしてもてまからんはたみるかひも侍らしかし　祕薫の申おろしてつかはさは曲もなく思ひ給ふへしとなり箋　弄薫のもておはしなは女二宮曲もなくおもひ給ふへし　女一宮より參らせ給へかしとなり
なとてかすてきこえ給はん　祕中宮の御詞なり箋弄
ところ〳〵になり給ひし　おなし禁中故そことわり給ふなり
いまそゝのかしきこえむ　一品宮より御せうそこありとすゝめ申さむとの明石の中宮の御詞なり
それよりもなとかはと　箋女二宮からも何とて御音つれなきそとなり是も明石の御詞なり
かれよりはいかてかは・　祕薫の詞弄箋
もとよりかすまへさせ給はさらんをも　祕もとよりうと〳〵しくましますとも今はことにしたしく成給へる物をとなり　弄もとよりうとくわたらせ給ふ人也とも薫の室なれははなれぬゆかりによせてこそかすまへ給ふへきにとうらみ申給ふ也　私薫明石中宮は兄弟しかれはかく申給ふなり
さもきこえなれ給にけんをいますてさせ給はんはか

らき事　箋前は申かよひ給ひし御兄弟の今（すちイ）しもう
とき事を大宮へ薫のうらみ申給なり
すきはみたるけしきあるかとは　花一品宮を薫の思
ひかけたてまつり給とはしり給はぬなり　箋薫の
下心ありてかく申給ふを明石中宮はしり給はぬな
り
ひと夜の心さしの人にあはん　花小宰相君の事なり
秘
ありしわた殿もなくさめに見んかしと　＼　秘八講の時
の渡殿なり　弄八講の後女一宮み給ひし方の事
にしさまにおはするを　弄女一一品宮の御方へなり
けり
左の大殿の君たち　夕霧の御子たちなり
大かたにはまゐりなから　秘薫の詞なり
この大かたのけさむに入ことのかたく侍れは　弄女
一宮の物越にても薫に聞え給事なきを云と云々
箋弄の義如何内裏にても今日參仕の公卿たれかし
〳〵と奏するを見參と云是も其心に薫の申給へる
也一品宮なと物越にても逢給へきにあらす
いまよりはと思ひおこして　向後は細々參らむとの

事なり
ありつかすとわかき人々もそ思ふらん　弄かをるの
事　箋薫のこなたへうひ〳〵しきと夕霧の子たち
の思はんとなり
おひのきんたちのかたを　花夕霧左大臣の君達なり
秘夕霧の子たちなり
いまよりならはせ給こそ　秘女房達の詞なり
おかしき御かたのありさま　一品宮の女房なとまて
あり〳〵しきあたりそとなり
姫君はあなたにわたらせ給にけり　花一品宮は中宮
の御かたへわたらせ給へるなり　弄中宮の御かた
へなり
大宮大將のそなたにまいりつるかと思ひ給ふ　弄大
宮は中宮也　秘明石の中宮の女一宮へ申給ふ詞也
御ともにまゐりたる大納言君　秘姫君女一の御とも
なり
小宰相の君に物の給はんと　弄大納言といふ上らう
の申詞なり
まめ人のさすがに人に心とゝめ給て　秘明石中宮の
詞　私まめ人は薫なり

心ちおくれたらん人はくるしけれ　薫のはつかしけ
なる人なれば明石の中宮のかくおほすなり
こさい相なとはいとうしろやすし　明石中宮も小宰
相をは然るへき物におほすなるへし
此君をは猶はつかしく人もよういなくてみえさらむ
と　花中宮と薫大將と兄弟の事なり箋　私薫の心ふ
かき人なれは見え奉る人も心おくれてはいかゝと
おほすなり
人よりは心よせ給て　祕大納言君の詞　箋薫の小宰
相にはすこし心とゝむるとなり弄
れいのめなれたるすちには　箋心やすく夜なとあか
す事はなしとにや
宮をこそいとなさけなくおはしますと　花匂宮の御
事なりなさけなくおはしますとおもひて小宰相の
御いらへをつれなくみえたてまつるとなり　祕小
宰相匂宮へはつれなく見え奉るとなり　弄匂宮の
あまり方々にみたれ給ふをみて小宰相なともいら
へ申さぬ事なり箋
宮もわらはせ給うていとみくるしき御樣を　花此宮
は中宮を申なり箋同　弄見くるしきは匂宮の事也

はつかしや此人々もとの給　箋匂宮の好色を小宰相
なとの見知たる事をの給ふなり
いとあやしき事をこそ　祕大納言ありのまゝにかた
り申なり
なくなし給てし人は　箋浮舟の事をかたるなり　花匂
宮の御二條の北のかたの御おとうとなりけり
宮の北方の中君の御せうと浮舟君の事なり
ことはりなるへし　箋中宮と浮舟と別腹の事
常陸のさきの守なにかしかめはをはともはゝとも
箋常陸か妻を浮舟の母とも伯母ともいふとなり實
母を人のしらぬなり　花浮舟の祖母とも又母とも
人のいふとなり
宮こそいと忍ひて　箋浮舟に匂の密通の事なり
御むまなからたゝせ給ひつゝ　匂の侍從はかりに逢
てかへり給ひし時の事なり
女も宮をおもひきこえ　箋浮舟も匂に心よせたると
なり
宮もいとあさましとおほして　祕明石中宮なり花弄箋
弄中宮の御心なり
たれかさることはいふとよ　明石中宮の御詞なり

宇治の宮のそうのいのちみしかき事　箋八宮の一類の短命なるよしを薫の申給へるとなり
いさやげすはたしかならぬ事をも　祕大納言詞なり
かしこに侍ける下わらはのたゝこの頃宰相かさこにきてかたりしとなり常陸守かもとの下童なり宇治に有し下わらはなり　私此義可然歟以上弄　箋小宰相かもとなりさるたよりこそありけめ
　弄小宰相かもとにきてかたりしとなり
おそろ〳〵しくおそきやうなり　弄おそろしきなり
さらにかゝる事又まねふなといはせよ　花中宮の御詞なり又かたりなさなせそと制し給ふなり　祕中宮の詞箋同
御身をもてそこなひ　箋匂の御身もちをくるしく中宮のおほすなり
ひめ君の御かたより　箋女一一品宮なり
女二宮に御せうそこ　箋薫の女二宮なり
御手なとのいみしう　一品宮の御手跡なり
かくてこそみるへかりけれと　祕薫の心なり　箋かくて文を見るもうれしとなり
大宮もたてまつらせ給　明石中宮よりも女二宮へ繪をまゐらせらるゝとなり　弄女一宮より女二宮へまゐらせ給に中宮もおほしくはへてまゐらせ給ふなり
大將殿うちまさりておかしきも　祕薫より又まさりたる繪なとを奉らせ給へり箋弄同　箋薫よりまさりさまなるを女一宮へ奉らせ給ふなり
せり川の大將のとを君の女一宮思ひかけたる　薫大將の女一宮を思ひかけ奉れるによそへていへるなり　祕此物語今の世につたはらさるなり只今薫の心に思ひよそへられたる物語成へし　箋十君歟如何云々　弄此物語今の世につたはらさる事有ぬへし遠君(トウギミ)十君いつれにても大將の息とみゆ　河古物語なり　水原抄云遠君或又十君歟云々　此一帖行成卿自筆の本を見侍しかは芹川中將とありき悪心僧都の勸女往生義といふ物にいまめきの中將長井の侍從伏見の翁なと云古物語有といへり是皆今世に不傳此芹川の中將もさやうの類なり
いてゝ行たるかたをおかしうかきたる　弄戀ちにかよひなとせし事なるへし
しかはかりおほしなひく人のあらましかは　芹川の

大將の物語にある事成へし　弄物語の女一宮のなひきし事こそ有けめ

箋萩の葉に露吹むすふ秋風も夕そわきて身にはしみける　諸抄義なし

宮のしり給ふましきとうちわひたるなり　箋夕風のわきて身にしむをも女一

かきてもそへまほしく　女二宮より女一宮への御返事に給をそへてたてまつるとて此歌を薫のかきそへたく思ふとなり

物を思ひ〳〵のはてはむかしの人物し給はましかは

花あけまきの君の事なり　祕こにかくに大君なくなり給ゆゑにこそ浮舟の事もいてきつれとなり

弄物おもひかねても宇治の大君の事をまた思ひ出し給ふなり

時のみかとの御むすめを給ふとも　女二宮の事を思ふなり

わか心みたり給ふけるはしひめかなと　大君をさして宇治の橋姫といへり

宮のうへにとりかゝりて　祕中君の事なり箋

あさましくてうせにし人の　花是よりは浮舟君の事をいへり　祕浮舟なり

とゝこほる所なかりけるかろ〳〵しさ　箋浮舟の心かろき事なり

わかけしきれいならすと　箋波こゆる頃ともの歌とのゐ人なとの事なり

心やすくらうたきかたらひ人にて　箋心のおもしな本ノマヽとはなかりしなりたゝうちとけらうたかりし人そとなり

宮をもおもひきこえし女をもうしと思はし　祕匂宮をも浮舟をも恨みし只薫のおこたりそと也箋

心のとかにさまよくおはする人たに　祕草子地なり

薫のよろつ思ひしつめたる人たにとなり　箋薫の性を匂にくらへて云なり　祕に草子地といへる如何

かのかたみ形イにあかぬかなしさをも　箋匂の心なり浮舟の事なりかの影見の心なり

たいの御かたはかりこそ　箋中君なり

ふかくしもみなれ給はさりける　浮舟は別腹なりしうへなれ給はぬ兄弟なれはふかゝらぬなり

戀しやいみしやなとの給はん　箋匂宮の中君に對して浮舟を戀くかなしとはさすかの給ひにくしと也

めのとこの人ふたりなむ　箋浮舟のめのとなり　私右近と侍従とか事歟
侍従はよそ人なれと　祕めのと右近なとよりはうとき人なりし也弄　私右近は乳母子かとみゆ侍従はよのつねの官女なるとなり
うれしきせもやあると　箋浮舟のおはせし時は末たのもしかりしとなり　弄引歌
京になむあやしき所にこの程きてゐたりける　祕侍従宇治より出京したるなり弄　ゝ
かくてさふらへとの給へと　匂宮の御かたにさふらへと侍従のゝ給ふなり
御心はさる物にて人々のいはん事　箋侍従か詞匂の御心はくるしからす人はいかゝとなり
さる事のすちましりぬる　祕中君の兄弟にては又人のそねみもいかゝとなり浮舟のうはさなとにつけてきゝにくき事有へしと思ふなり
きさいの宮にまゐらんと　祕中君なり　箋明石中宮なり　花侍従は中君へ参りなんと中侍なり
いとよかなりさて人しれすおほしつかはんと　箋匂の御詞なり明石中宮へ参らん事然へし匂の母后なれはわれも侍従をめしつかはんとなり人しれすしたしくおほさんとなり
しかたよりもとめてまゐりぬ　箋侍従明石中宮へ参りたるなり
よろしく下らうなりと　箋侍従か事なり
大將殿もつねにまゐり給を　箋薫をみて侍従かあはれに思ひいつるなり
ものゝ姫君のみおほくまゐりつとひたる宮と人もいふを　然へき人品ともの此明石中宮にはおほく参り給ふとなり
やう／＼めとゝめて　箋侍従かやう／＼さふらひつくよしなり
なほみたてまつりし人に　祕浮舟なり　弄浮舟に似たる人もなしとなり
この春うせ給ぬる式部卿の御むすめ　弄かけろふの式部卿の事　花同　箋宮の姫君なり
せうとのむまのかみにて　祕継母兄弟なり　弄式部卿の北方のおとゝいの右馬頭といひし人なり
きこしめすたよりありて　明石中宮の聞しめしをよふなり

父宮のいみしうかしつき給ける　故式部卿宮の事明
石中宮の御心なり
心ほそくのみ思ひなけき給　式部卿宮の姫君の心な
り
たつねの給はする　箋明石中宮の尋ね給ふ事なり
御せうとの侍從もいひて　祕蜻蛉の式部卿の息の侍
從なり宮の君の兄弟なり　弄箋
宮イ姫君の御ぐにて　箋一品女一　宮のよき御ときそとな
り具は一具なり
宮の君なとうちいひて　祕拾遺のこと葉かきにもあ
り　河拾遺東三條院御四十九日のうちに子日いて
きたりけるに宮の君といひける人のもとにつかは
しける　右衞門督公任　誰により松をもひかんう
くひすの初音かひなきけふにも有哉
裳はかりひきかけ給ふそいとあはれ成ける　祕きぬ
を略したるなり父宮さしもてあつかひ給ひし物
をとなり　弄つかへ人のやうにて禮義に裳をき給
ふかはかりの詞心得かたし或云きぬなと不具の體
歟可尋　私云女のきぬに裳唐衣きたるは男のさう
そくしたると同し禮也これは平生きぬまてはき給

はすして裳はかりをは禮にきたる成へしこうちき
に裳をきたる體なり男の體にていはゝつねの小袖
に袴はかり着たる出立なり　箋式部卿宮おはせぬ
ゆへに裳はかりも引かけ給ふをあはれなること書也
兵部卿宮この君はかりや戀しき人に思ひよそへつへ
き　花宮の君を浮舟君に思ひよそへ給へり父みこも
はらからそかしなとの給へるなり　箋戀しき人は
浮舟なり
ちゝみこははらからそかし　祕浮舟といとこなり八
宮と式部卿宮兄弟なるをいへり箋
れいの御心は人をこひ給ふにつけても人ゆかしき
匂の好色をいふ浮舟の戀しきなくさめもはや此君
に心のうつるとなり
大將もとかしきまてもあるわさかな　箋匂の心を薫
のもとかしく思ふなり
昨日けふといふはかり春宮にやなとおほしわれにも
けしきはませ　花宮の君を父宮のいまたまし〳〵し
時春宮に奉らすは薫大將をとけしきはみ給ひし
事なり　祕此宮の君をまいらせんとありしなりか
く口おしきみやつかへに出したてたる事のおとろ

へをいへり弄　箋式部卿宮は姫君を春宮か薫へと
思ひ給ひしとなり
水のそこに身をしつめてももとかしからぬ事にこそ
花匂宮の御心のおほす事をいへり浮舟君の事に思
ひ出し給へるなり　祕浮舟の入水も仔細なきとな
り花鳥説いかゝ箋弄同
人よりは心よせ給へは　箋薫は宮の君のおとろへを
あはれに思ひて心よせ給ふ成へし
此院におはしますをは内よりもひろくおもしろく
祕六條院なり中宮女一宮なとわたらせ給ふ時の事
をいへり　弄中宮女一宮なとわたらせ給時の事を
いふ源氏の御後六條院に人々住給ふやうに以前の
巻にみゆ　箋中宮御輕服のほと此院におはする成
へし内裏にて中宮へのおはする御殿は此院よりは
せはかるへし
つねにしもさふらはぬ人ともゝ　時々の出入はかり
してさふらふ人も有なるへし
左大臣殿（ヒタリノオトヽ）昔の御けはひにおとらすそへて　箋夕霧の
光輝をいへり祕　弄夕霧のおとゝの事源氏の御時
にもおとらすとなり　私をとらすそへては源氏の

御時に猶事くはへてといふなり
いかめしく成わたる御そうなれは　箋源氏の一族の
御そうなれはなり
この宮れいの御心ならは　花匂宮の御事なり祕弄箋
私いまた物思ひに例ならぬ名殘あるなり
おひなほりし給かなと　箋浮舟の思ひの事をしらぬ
名殘あるなり
宮の君に本上（性イ）あらはれて　箋匂宮の本性の好色かあ
らはるゝとなり
すゝしく成ぬとて宮うちへまいり給なんとすれは
祕明石中宮御輕服過て内へ參給はんとなり　弄明
石中宮の事　祕内裏へ還御なり
秋のさかり紅葉の頃なとを　私秋のさかりは草花な
とか
この宮そかゝるすちは　祕匂なり箋　弄御遊の事な
り
朝夕（めイ）そなれても　祕匂の御さまなり
いま見んはつ花のさまし給へるを　箋引歌に及はす
匂のさまなり
いとさしも入たちなとし給はぬほとにて　箋薫は匂
のことくには入給はぬなり又生得も心はつかしけ

なる人ときこゆ
れいのふたところまいり給うて　匂也薫なり
かの侍従は物よりのそきたてまつるに　花侍従君大將の二所參り給へる事をのそきてわか浮舟君の事を思ひ出したるなり　箋浮舟につかへし侍従なり
いつかたにも〳〵よりて　匂へなりとも薫へ成とも浮舟のなからへおはせはめてたきさまならむと侍従かおもふなり
かのわたりの事　浮舟宇治の事かけてしらぬさまなるなり
心ひとつにあかすむねいたく　箋侍従か心ひとつなり
宮はうちの御物かたりなとこまやかにきこへ給へる
祕宇治の侍従にかたり給ふなり弄　箋匂なり宇治なり侍従とかたり給ふなりいま一所は薫なり　私諸抄に宇治の事を匂の侍従とかたり給とあり尤この詞に見るに不審あり匂薫はともに中宮の御前にさふらひ給ふなりそれをうちのはるかに侍従は物よりのそき御物かたりは内なり内裏邊の事を中宮の今六條院におはすれは匂宮のかたり申給なりそのうちに薫はたち出てわた殿の戸くちによりて女房なとゝ物かたりし給へは侍従は薫に見つけられしと立かくれたるなり匂宮は中宮の御前よりいまた立給はぬなり此義然へき歟
見つけられたてまつりし　祕侍従なり薫にかくれたるなり
御はてをもすくさて　弄浮舟の服の中の事也　箋一周忌をまたぬ心なり侍従は右近よりこゝろあさくみゆるなり
なにかしをそ女房はむつましくおほすへきや　箋薫の女房にの給ふなりひんかしのわた殿の戸口にての事なり
女たにかう心やすくは　祕薫の自稱なり我かことく心やすき人は女にも有ましきとなり　箋男々しく色めきたる心のなきとなり
さすかにさりぬへからむ事をしへ　箋女のしらぬ事なとをしへん事もまさるへしとなり
辨のおもとてなれたるおとな　祕女一宮の御方にさふらふ女房の中におとなひたる人なり弄
そもむつましく思ひきこゆへきゆゑなき人のはちき

こえ侍らぬにやは　祕そもとは詞の發端なり殊なるゆゑもなき物はそもむつましきかとなり弄「わきもこかきてはよりたつ眞木柱そもむつましや云々　此歌を河海にひけりかならす相叶さるへし此段は最心得にくき詞也そもとは詞なり薫をむつましく思ふへきゆゑのなき女房なとははちまゐらせたるも理なりといへり詞にはちきこえ侍らぬにやとあるはやはといふ心成へしはちたてまつらぬ事やは有［了イ］へきとなり［わる後違イ］　私此詞まことに心得にくしこれをそ見するにわかつまのなにかしをそ女房はむつましくおほすへきとあるをうけてそもむつましく思ひきこゆへき故のなき物かはちまゐらせぬにてはなしとなりさてそれは我身の事なり此次にはちまゐらせぬ理を云詞なり

物はさこそは中々侍けれ〻　祕世間の事は何もかくもそとなり箋　大かたさこそある事なれは女房とものいらへにくゝしたるを取合たる詞なり　花しる人にてもなきは中々はつかしくもなき事なり　私物の理はかならすしかく〵あるとなり末に理をいふなり

かならすそのゆゑたつねてうちとけ御らんせらるゝにしも侍らねと　祕只今辨か御いらへ申もかならすそのゆゑありてうちとけて物を申にてはなけれともと也弄　私さやうにうちとけ申へき事ともうちとくましき事とも思ひもわかぬと云辨か詞なりかはかりおもなくつくりそめてける身におはさらむもかたはらいたくてなんときこゆ　花おもなく面つれなき心なりかはかりの身にはちかゝやかんは中中身にあはぬといふ心なり箋　祕はつかしく思ひまゐらせぬにてはなけれともかくみやつかへ人なとの身にてあまりなる物はちは身に似合さる事なれはとなり箋　弄辨はかやうにおとなゝれはちもせす薫にあひしらひそめて又はちかゝやかんも辨か身におはぬやう成へしといへり　私此一段よくよく分別すへしそもむつましく思ひきこゆへきゆゑなき人のはちきこえ侍らぬにやとは辨なとかやうに年ふり薫の御心にもかゝるましきと思ふ物にはちまゐらせぬならむと也物は中々さこそは侍りけれとは必なま心のある人のはち思ふ世間のならひそとなりかならすそのゆゑ尋てうちとけ御らん

せらるゝにしも侍らねとゝは辨なとは打とくると
けぬと分別してかく御いらへなと申にてはなしと
なりかはかりおもなくつくりそめてける身におは
さらんもかたはらいたくてなんときこゆとはこれ
ほと年たけおもてつれなくしなしたる身のはちか
かやかんは身の程に相應せぬゆゑ何のかまひもな
く御いらなへともいふにや次の薫の詞にて猶了見
すへし　黄ムつくりそめてける身とはみさまもよ
からぬおいさらほひたる身のといふ心歟世話にみ
さまよきをつくりのよきかほなといふにおなしき
なり
はつへきゆゑあらしと思ひさため給てけるこそ　祕
薫の詞なり辨かはちさ（ならイ）るよしをいへるをかこちて
の給へり弄　箋薫の風流めかぬゆゑにはちぬかと
辨をかこちたる詞なり　弄薫にむつましからぬ人
のはち奉らぬにやは有へきなり辨も叉はつかしき
故にてはあらねともおもなく成たるによりてはち
きこえぬなり物はさこそはとはかゝる事も又あり
となりはつへきゆゑあらしとは薫の辨か恥きこえ
ぬと云詞をとかめ給たはふれなり

からきぬはぬきすゑしおしやりうちとけて手ならひ
しけるなるへし　祕辨かさまなり　弄女房ともの體
なり　私弄の義然るへし
心もとなき花の末々　秋の草々なるへし
木丁のあるにすへりかくれ　箋女房ともの薫をはつ
る體なり
薫をみなへしみたるゝ野へにましるとも露のあた名を
我にかけめや　河「女郎花おほかる野へにましりな
はあやなくあたの名をやたてなん　花女房ともの
おほくあつまるを薫のよみ給へるなり　わか實法
なるをいへり女にましるともあた名をはたて給そ
心やすくおもはてとの給へり　箋女の多き中にま
しるとも薫の好色ならぬ人なれはあた名をはえか
け給はしとよめるなり
心やすくはおほさて　弄薫の詞我は實人なれは女房
にましるともあた名をはたて給そ心やすくはおも
はてとの給へり
このさうしにうしろしたる人に見せ給へは　祕誰と
もなし中將君とてあなたにとほりし人かとなり弄
箋是は中將君なり薫は誰ともしらぬなり

返中將はなといへは名こそあたなれをみなへしなへての露にみたれやはする　祕花といふ名はあたなれとなへての人にははなひかしとなり　弄あまりにすくよかなる歌なり　弄此歌はあまりに實なり艶なる心なきにや　箋女の歌なれはをみなへしを身のうへにしていへり

かたそはなれとよしつきて　弄とりあへすかきたるをみ給へるはかりなれはかたそはと云

いまうのほりけるみちにふたけられて　祕まゐらんとせし人の薫に道をふたけられて居たるなるへし　箋

いとけさやかなるおきなことにくゝ侍りとて　河翁言　老人の詞なり　花としよりの事としてけさやかにはゝからぬをにくゝ思ひ給ふへけれともとて此歌をよめるなり　私此儀如何　祕花といへは名こそあたなれの歌あまりになさけなくいへりとて卑下して翁言ととりなすなり　弄翁言なり花といへはの歌を艶ならすと思ひて卑下して翁言にとりなすなり　箋今の返歌あまりくすみ過たると思ひて翁言にくしと辨かいひて又歌をよめるなり　私此辨か詞は薫の歌に露のあた名を我にかけめやなと實人なるよしその給ふを翁言にくしとてよみたる歌にやともみゆ如何

辨たひねして猶こゝろみよをみなへしさかりの色にうつりうつらす　この歌祕弄に義なし　箋此歌　辨か薫にいひかくるなりさらは旅ねしてこゝろみ給へかしなへての露にみたれやはすると實々しくいひたる人のなひく歟なひかぬ歟をとなり辨は薫の方人になりて返歌したる人をいひおとしたるやうによめり　私此歌薫の事を翁言にくゝ侍るといふにしてみれはさらはこゝに一夜旅ねして御らんせよその時露のあた名もたゝぬやうならはこそ薫もまことの實人とはみめ御詞はかりにては信用しかたしと辨かよめるにや如何女郎花のさかりの色にうつる歟うつらぬかといへるは薫の事をいへるやうにみゆ

さてのちさためきこえさせん　こゝろみて後ならては實は知かたしとなり

返薫やとかさは一夜はねなむ大かたの花にうつらぬこころなりとも　祕薫の歌なり　弄義なし　箋そなた

からとめ給は丶一夜はねむとなり薫の心は花に心うつらぬ實人なれともと讀り　私花にうつらぬ心も薫の丶給へる歌にてさかりの色にうつりうつらすといへるも薫の事ときこゆるにや愚案の趣もさのみ相違あるましくおほゆ後見の人しつかに了知して是非を定むへし

なにかはつかしめ給　花辨のおもとの返答なり　祕薫の歌をいへり女ともをはつかしめ給よとなり　弄薫の歌にやとかさはとよみ給へははつかしめ給ふといへり　箋薫の歌をにくむなり

大かたの野へのさかしらをこそ　箋辨かわかき物ならは身にうけては申ましきをとなり　祕辨か詞おもしろき書さまなり總しての事を申侍しとなり　弄辨か此詞おもしろし問答に事つきぬさのみ理を盡すへきならねは何となくさかしらを申まてなりといふ心なり花の事によせて野へのさかしらといへり尤優なり〱

はかなき事をた丶すこし　祕薫のありさまなり

心なしみちあけ侍りなんよ　祕薫の詞戸口にゐ給へはかくの給へり箋

わきてもかの御物はちの　祕女房ともの恥たるさまははつへき事のある折ふしにやとの給へり弄同　箋薫にすへりかくれうしろむきなとしたる人の事なり　花人の見るをはち給ふ事も有へしといひて立給ふをかの女たちのこりなからんと思ひやり給ふを心うしと思へるなりこれは匂宮の御事を薫の思ひやり給へる事なり　私此花鳥の義如何

おしなへてかくのこりなからんと　祕辨かいらへたる事を女房達のはちたるなり誰もかくこそ有へきと薫の思ひ給ふへきとなり

ひんかしのかうらんにおしか丶りて　薫のさまなり

中についてはらわたたふるは秋の天　河大底四時心總苦　就中腸斷是秋天　白樂天　箋いつも人の心に愁はあれとも秋は殊更なる心なり　私「いつはとは時はわかねと秋の夜そ物思ふことのかきりなりける　と云歌と可心得なり

ありつるきぬのおとなひしるき　弄さきに薫の物いひかはし給し人の事なり　箋薫へ歌の返しせし人なり

宮のあゆみおはしてこれよりあなたへまゐりくるは

たそと　匂宮なり中將君のとほるを問給ふなり
かの御かたの中將君と　花一品宮の女房たちなり弄
　祕女一宮一品の中將君なり箋
なをあやしのわさや　弄匂宮のとひ給ふにやかて女
房の名をこたへしを薫ゆかしけなしと思ひたまふ
なり
たれにかとかりそめにもうち思ふ人にやかてかくゆ
かしけなくきこゆる名さしよ　箋薫の此中將を誰に
かなとゆかしく思ふに此名さしを聞てあさく思ひ
なさるゝなり
この宮にはみなめなれて　祕匂へはたれも打とけめ
なれたるよとなり箋　弄薫の詞歟　私女房ともの
匂宮になれたてまつるをねたしの心なり
とりたちてあなかちなる御もてなしに　匂の好色に
御心のいる事をいふ
わかさもくちおしうこの御ゆかりには　花さもは詞
なり一品宮の御方に薫のうと〳〵しき事をみつか
らの給へり祕女一宮の御かたさまの事なり　弄わ
かさもは薫の事なり御ゆかりは女一宮の方さまの
事

ねたく心うくのみ　箋此御ゆかりは匂の事なり薫の
思ふ人を匂宮にとらるゝ事を思へり
れいの心いれてさはき給はんをかたらひとりてわか
おもひしやうに　花薫の思ひ給ふやうは一品宮の御
方に宮のわりなく思ひ給へらん人にかたらひつき
て御心をさはかして思ひしらせたてまつらはやと
思ひ給ふなり　祕薫の浮舟の事に心をつくさせ給
返報をしたきと思ひ給へり箋
まことに心はせあらむ人は　祕心ある女は多分は我
方によるへしとなり
されとかたらひ物かな　花論語曰難乎有恒述而第七
　祕人の心よろしきはかたき物となり
人の心はと思ふに　弄薫の心はつかしき人なるへし
たいの御かたの　花宇治の中君の事なり　弄匂宮の
　北方中君の事也
かの御ありさまをはふさはしからぬ物に　箋匂のあ
た〳〵しき御心をおもはしからす中君のおほすと
なり
いとひんなきむつひになりゆく大かたのおほへをは
くるしさ　花いとひんなきむつひとは薫の[illegible]事な

り　私薫とむつひは世上をはゝかる心は有なから
たのもしき方にはたよりそと中君の思ひ給事をい
ふなり　便なきむつひは密通なとの事をは堅固に
ある事成へし
猶さしはなちかたき物におほししりたるそありかた
く　祕中君の我にはかけはなれたるさまにて又たの
もしきかたには思ひ給へる事をいへり
さやうなる心はせある人こゝろの中に　祕一品宮か
たをさしていへり　私中宮の心はせのやうなるは
あらしとなり
いり立てみねはしらぬそかし　箋薫の中君の心をは
よく知てかく思ふなり　此あたりへはよく入たゝ
ねはしらぬとなり
ねさめかちにつれ〳〵なるをすこしはすきもならは
はや　薫の心也ちと好色をたてゝ心をなくさめはや
となり
いまは猶つきなし　浮舟の事なとにねさめかちなる
ほとにすきもならはゝやと思へと此物思ひの時分
風流めかんもつきなくおほゆるとなり薫の本性な
り

れいのにしのわた殿をありしならひに　花女一宮を
見たてまつりし時の事なり
祕女一宮の御方なり　弄此あたりをゆかしく思ひ
給ふ心なり
わさとおはしたるもあやし　薫のひるより中宮の御
かたにさふらひ給て夜に成てこなたへ通りたまふ
なり
ひめ宮(君イ)よるはあなたに　弄中宮の御方なり　箋一品
宮夜は中宮とひと所におはするなり
思ひかけぬによりおはして　箋思ひあへぬ時分薫の
こゝへおはしたるとなり
なとかくねたましかほにかきならし給　河故々將二
纎手時々弄二小絃一　耳聞猶氣絶眼見若爲憐遊仙窟
花遊仙窟に女のことひくをきゝていへるなり　祕
人にねたましく思はするやうに琴をひくとなり
眼に見ん時いかはかりかおもしろからむの心なり
此段皆遊仙窟にてかけり　弄遊仙窟の句見河　此心
を下におもひての給へり眼にみん時いかはかりお
もしろからんと云心はへなり女一宮の御事を心に
こめての給へり

すこしあけたるすだれ　箋士の居る所の簾をあくるは下を一二尺程まくなりこゝの女房おどろきなどせぬ體然へきなり

にるへきこのかみやは侍へきと　花是も遊仙窟の詞なり一品宮は女二宮の御このかみなりうす物のひとへきせ奉りて見給しなとはかたちの似給へる心なるへし　祕是も又遊仙窟なり花鳥には女二宮のこのかみとあり又の義は匂宮は女一宮の兄にてましませは女一宮を見奉らんと思ひ給はゝ匂宮をみ給へかしとなり箋　弄遊仙窟に氣調のいきさしは兄(コノカミ)のこさしと云詞にていらへたり心は匂宮の事を思へり一宮に似給へる匂宮の兄にていらせ給へると見給へりしなと云心なり

私弄箋然へき歟

中將のおとゝか　歌の返しせし人なるへし

まろこそ御はゝかたのをぢなれは　河容貌似ㇾ舅潘安仁之外甥　氣調如ㇾ兄崔季珪之小妹遊仙窟　花是も遊仙窟の心をとりてかけり薫大將は明石中宮の御弟なれは一品宮には母かたのをぢにあたれるなり　祕薫の詞女一宮の御をぢとなりこれも同しき句を用たり弄箋　箋潘安仁崔季珪ともに容貌のすくれたる人ともなり

れいのあなたに　祕中宮の御かたになり弄　箋薫の詞なり女一宮はいつものごとく中宮の御かたにこそおはすらめいかなる御なくさみかあると思ひ給ふなり

いつこにても何事をかはたゞかやうにてこそ　祕人人のいへるなり只かやうの御遊なと成へしとなり

箋　宮の女房ともなとはおどろき顔ならさりしをほめていへり

すゝろなるなけきのうち忘れてしつるも　箋薫の此事を思ふに打忘れて歎息の聲のしつるなりそれを人のあやしと思はんとまきらはかしに和琴を引也

たゝさなからかきならし　箋しらへもなほさぬなり

りちのしらへはあやしくおりにあふと　河呂は春律調は秋にかなひたる心なり　祕律は秋なり又女にとれはなり

弄又女は陰律なり

心いれたる人は　弄物の音に心いれたるなり

わか母宮もおとり給ふへき人かは　祕女三宮なり弄

箋薫の母宮の事を思ふなり

きさいはらときこゆはかりのへたてこそあれ　花入道女三宮は源氏宮の御腹なり一品宮は明石中宮の御はらなり　私源氏宮は先帝の姫君なれと后にはなり給はす明石源氏の御女なれと立后ありしかはかくいへり

みかと〳〵のおほしかしつきつるさま　秘女三宮の父みかと朱雀院女一宮は今上の御子なれはなり

こと〳〵ならさりけるを　ことごとなるへし別々にはあらすたゝ同事なれとも今の女一宮は后御もてなしのことなるとなり薫の心なり

あかしの浦は心にくかりける所かな　箋明石中宮の幸おはする事をいへり

わかすくせはいとやんことなし　薫の母宮の事より我身をもそのつらにならへて思ふはやんことなしさいへる歟

ましてならへてもちたてまつらはと　花女一宮女二宮をならへてもちたてまつらむ事は有かたからんと薫の思ひ給ふなり　秘女一宮を女二宮にならへてとなり

宮の君はこのにしのたい　弄玉かつらの君の住給しかたにや

これも又おなし人そかし　浮舟などに思ひくらへての事歟

みこのむかしこゝろよせ給し　秘式部卿宮薫にと思ひ給ひし物をとなり花箋

そなたへおはしぬ　箋宮の君のかたへ薫の行給ふなり

見つけているさまともゝかゝやかし　箋薫をみつけてはちてかくるゝさまなり　秘人にはちたる體なり

これそよのつねと　箋これは大かたの人のさまそとなりさきの女一宮の女房なとはおとろきかほならさりしをほめていへり

人しれぬ心よせなと(ミ)　秘薫の詞なり　私かやうの事は人の中ふるしたるらんを薫のうゐ〳〵しきさまにて人まねのやうならむもいかゝと思へはいかゝ申さんと思ひめくらさるゝをことより外にもとめらるゝとはいふなり

みな人きこえさせふるしつらんことを　花故宮の御

心むけはたれ〳〵もきゝふるし給ふらんを事あた
らしくまねひ給ふとなり　私此義如何
ことよりほかをもとめられ　河「思ふてふことより外
に又もかな君はかりをはわきてしのはむ箋祕　花
則古歌の詞をとりて思ふてふといふ心なり又心の
中は詞にもいはぬゆへにことよりほかをもとむる
といへるにや　祕心にふかく思ふ事は詞にはあら
はしかたきゆへに言の外にもとめしり給へとなり
弄　箋引歌河あり
君にもいひつたへすさかしらたちて　花宮の君にも
申さすおとなひたる人のまつさかしらたちて返歌
したるなり　箋薫をみつけてはちかくれたる人と
此さかしらたつ人と過不及のさまをかけり
いとおもほしかけさりし御ありさまに　祕内よりの
返事なり　箋宮の君のかくておはする事をいふな
り
故宮の思ひきこへ給へりし　薫なとむこにとらむと
有し事成へし
なイ
おり〳〵きこえさせ給なる御しりうこと　花しりう
ことは匂宮の君のうしろことにの給ふ事をかたる

なり　私花鳥の義如何　箋おり〳〵かほるのしり（たイ）
うことにもあはれ成事にの給ふをきゝて宮の君も
うれしくおほすといふなり
なみ〳〵の人めきて　河儕次つき〳〵の人めきてな
り　花薫の思ひ給ふ事なり　祕薫の心なりなみな
みの人のやうに人つてはかりなとゝなり弄箋
もとよりおほしすつましきすちよりも　祕薫の詞な
りよそならさるなり
いまはましてさるへき事につけても　箋女一宮のあ
たりなれはなり
うと〳〵しう人つてなとにて　箋人つてをとかめて
いへりうと〳〵しかるましき事とふくませての給
ふなり
けにと思ひさわきて　祕こゝにておとろきたるなり
箋さかしらめきたる人のさまに似合たり
君をひきゆるかすへかめれは　花是は女房の心に薫
のことはりをきこえ給ふをけにと思ひわきて宮の
君に此よしきこへて衣を引うこかしたるとなり
箋宮の君を俄に引うこかしてみつからあひしらは
せ申となり

松もむかしのとのみなかめらるゝにも　河「誰をかもしる人にせむ高砂の松もむかしの友ならなくに　花松もむかしとは昔忘れぬ人をいふ　祕今はしる人もなしと思ひしにとなり　私此義然へし

もとよりなとの給すちはまめやかにたのもしうこそ　花もとよりおほしすつましきすちと云薫の詞によれる詞なり　これは宮の君の返事なり　祕もとよりおほしすつましきといへる返答なり箋松もむかしの友ならねは誰をかもと思ひしに薫のかくの給ふはたのもしきとなり

人つてともなく　宮の君の直の返事なり

たゝなへてのかゝるすみかの人と思はゝいとおかしかるへきを　花かやうに宮つかへなともなくてひとりすみなとし給ふ人ならはをかしかるへきとなり　祕宮の君のいらへをし給へるさまのかろ〲しきをいへり大かたの人ならは仔細あるまし宮の君の御身のほとにてはいまかろ〲しきと也花鳥の心はいかゞと見へたり　弄宮の君のいらへ給ふ事なとかろ〲しとなり大かたの人ならはをかしとも見へぬへきを宮の君にていとおとなしからぬほとにはさし過したるとにや　箋かゝるすみかの人とはなみ〲の宮つかへ人の事なりこれは薫の申給事を宮君へも申さすして女房の返事したるをさし過たりと薫のおほして人つてなとにてもてなさせ給はゞうらみたる故に直に又返事の有しなりこれも女房のいひつくへき事なり是も過不及なり

かたちもいとなまめかしからんかしと　箋かたちも今やうのおかしきさまならんと薫のをしはかりなり

この人そ又れいのかの御心みたるへき　花匂宮の御事なり　祕匂宮はかならす御心みたるへしとなり　私此宮君のかろ〲しきにつけて匂の御心みたらんとなり薫の心なり

ありかたの世やと　祕十分なる人はなしとなり　弄宮の君の體をみ給ふにも十分なる事のかたきを思ひ給ふなり

これこそはかきりなき人のかしつきおほしたて給へる　弄宮の君をは父みこのかしつき人そかしとなり式部卿の一段かしつき給し君そとなり

又かはかりそおほくあるへき　弄たゞこれほどの人

こそ世にあれすくれたるは誰にもかたき物かなと
思ひ給ふ成へし
あやしかりける事はさるひしりの御あたりに　花是
よりは宇治のうはそくの宮の御女ともの事なり
祕大略皆隨分と思へる人も此宮の君のつらなる物
なるを八宮の君たちたくひなしとありかたきふし
に思給なり箋
このはかなしやかろ〳〵しやなと　花是は浮舟の事
なり　祕浮舟なり箋
ひとつゆかりをそ　箋八宮の一類なり
あやしくつらかりける契ともを　大君は心つよくて
過ぬ中君をはとりはつして後悔たり浮舟はかやう
になりし事ともなり
箋ありとみて手にはとられすみれはたま行衛もしらす
きへしかけろふ花ニアリ　六帖「たとへてもはかなき物はかけろ
ふのあるかなきかの世にこそ有けれ　箋歌心は世
間のさまを觀したるなり引歌あはれともうし云々
後花「あはれともうしともいはしかけろふの有か
なきかにけぬる世なれは祕　「ありと見てたのむ

にかたきかけろふのいつともしらぬ身とはしる
しる　今按かけろふに二の義あり一は陽焔を云春
陽氣の煙のやうにみゆるを云かけろふのもゆる春
日とよめるはこれなり一は蜻蛉と云虫なりはかな
くいのちみしかき物なり軒はにあそふなとよめる
は是なり此歌いつかたへもその心わたりてきこえ
侍りさりなから秋の時分は猶虫の心にかなへるに
や　以上花鳥　河陽焔　涅槃經云愛者熱時之炎焼
曰熱炎輪但有其名而無其實　華嚴經曰譬如春月時
衆生見炎氣愚者謂爲水又同經に野馬と多有「夏の
月光をましててる時は流るゝ水にかけろふそたつ
六帖「たとへてもはかなき物はかけろふのあるかなき
かの世にこそ有けれ　六帖「かけろふのそれかあらぬか
春雨のふるひとなれはみイ袖そぬれける　後「かけろふの
ほのめきつれは夕暮の露かとのみそ身をたとりけつイ
る　六帖「かけろふのさやにこそみめうは玉のよるの人
のは戀しかり鳧淮南子曰水蠆爲蛇蛉イ　列子曰蠛蠓生
行潦之上因雨生覩陽而死　かけろふは詩にも色々
にいひて一様ならす遊原又野馬なといへりされと

莊子にも野馬は塵埃（族イ）なりといひて天地の氣のごとくなる物なり或は陽炎ともいふこれも日の光に煙のやうにみゆるをいふなり或は又能因歌枕には春空にとぶ虫をいへるなり軒はにあそぶかけろふとは是歟以上河　もゆる春日とよめるは陽炎なり軒はにあそぶとははかなき虫なり夏の夜の月のひかり云々是は水の上に月のうつりちら〳〵と物の見ゆるやうなるをいふ又朽木の雨のしつくの陰氣に生してちら〳〵とみゆる物晴れはなくなる物あり是列子にいへる物なり是も虫なり春にはよらず

岷江入楚第五十四　手習

廿五歳　大將

花鳥には廿三歳の春より廿四歳の春までの事みえたり始のさしはかけろふの巻と同年の事なるへしと云々　私薫廿六七歳の事也かき出す所此巻もかけろふの始と同時也浮舟のうせたる翌朝の事をさしていへりさてかけろふの巻は廿六歳の三月の末より秋までの事なり此巻は廿六歳同時の事より廿七歳のまでの事をかけり

横川僧都母尼幷妹長谷詣歸路宿宇治院事

宇治院樹下有變化物事

近寄見之女也妹尼養生事此女則浮舟君也

宇治の仕人來りて僧都の所にて物語宇治姫君失給子細その御葬送の雜事ともつかうまつり侍るとて昨日はえまいり侍らさりしといふ然則此巻與蜻蛉始同時事也並ならは横の並と取へし但蜻蛉巻は一向に京の事宇治の事等をかけり手習巻は小野の尼のみつけて小野へゐて歸る事をいへり彼是たかひにしらさるによりて二巻に同時の事をかけり

設事二兩載件女各歸小野事

四五月間其女（之女古イ）惱給事

僧都妹尼母共聟中將訪横川僧都之次來小野事

中將自簾隙見此女事

一宿横川事

又之日中將來小野尼所事

中將念彼女事

八月十餘日中將小鷹狩次來小野事

中將吹笛事

尼君等合物音事

九月妹尼君又參長谷事

與少將君打碁事

中將來小野事

中將不意遣文於手習君事

横川僧都出京之次來小野母尼所事

手習姫君賴僧都出家事

中將又來返答姫君出家之由事

立歸又送文事

妹尼君自長谷下向事

横川僧都奉加持一品宮夜居之次中宮御物語事

語申宇治院變化物由來事
大將念人小宰相君在御前聞僧都物語事
僧都登山之次來小野事
中將來小野逢妹尼公事驚イ
中將自簾隙見手習君警惜事
廿六歲　大將
私花鳥には廿四歲の春とあり此年立には廿六歲と
注すれとも實說は廿七歲の春なり年立には一年の
相違あり花鳥には三年の相違ある也
春初小野住居事
大尼公之孫紀伊守來小野事
語大將殿與姫君由來事
手習君聞之給事
小宰相君以僧都物語告大將殿事
大將參山中堂之次欲訪横川事

手習　以詞爲巻名

河浮舟君身をなけし涙の川のはやき瀬にとあるより手習といふ詞巻の中(内イ)に四ヶ所あり野山の雪をなかめてもとある所にもれいのなくさみの手ならひをおこなひのひまにはし給ふといへり仍號手習君也　花詞をもて巻の名とせり薫大將廿三歳の春より廿四の春までの事みゑたりはしめの年はかけろふの巻と同年の事なるへし

祕巻名以詞號之手習と云詞曰所にあり薫廿六七歳(イナシ)の事也かけろふの巻の始と同時分也浮舟のうせて翌日の事也その年くれて次の年の春までの事也小野にありてより手習君といへり箋　弄巻名詞によれり手習したるよし所々にあり薫廿六七歳かけろふの巻の始と同時分なり浮舟のうせて後の翌日よりの事なり其年くれて次の年までの事也

箋手習の詞四所にあり其心あるへし未勘云々

その頃よ川になにかし僧都とかいひていとたふとき人すみけり八十(やそぢ)あまりのはゝ五十はかりのいもうとありけり　河比叡山三塔東塔西塔横川　なにかしの僧都は惠心僧都也遁世の後隱居横川谷仍號横川僧都母事妹安養尼事相似たり　花是は薫廿三歳はかりの事なれと其頃と云は大かた其時代をさして云へし横川になにかし僧都とは惠心院の源信僧都に思ひなそらへていへり此僧都は慈惠僧正の弟子にて横川にすみ給て顯密の敎をひろめ侍りいそちはかりの妹といふは安養尼といひし人にたとへたり世榮をいとひ往生せし人なり此物語に小野の尼といひて手習君をやしなひし人也　その頃とは先時代をさしてかけり僧都は惠心の僧都に比したる也河海にみえたり弄箋　傳記曰件僧都者大和國葛城下郡人父者占部正親母清原氏也母夢天人下授一男三女見畢覺後四人共可成聖人歟思之其後彼母令祈請子息於觀音長谷寺云々之處夢中僧來令與一珠見畢不久懷姙生男子即惠心僧都是也成人之後有事緣登山出家授戒修學之業既成論義決擇聞世被召公請預種々祿畢爲最初得物之間爲令悅令送其物於母之許母返報云吾所送之物敢不悅所願者偏遁世修道之營也云云即隨母命止諸緣隱居于横川谷修淨土之業寬弘元事五月廿四日任權大僧都同日辭表一期所修善根者

念佛二十倶胝反轉大乘經五萬五千五百卷奉念阿彌陀大呪百萬反尊勝陀羅尼卅萬反千手陀羅尼七十萬反佛眼不動光明眞言不違注進又所造書籍雖多其中往生要集三卷（集イ）一乘要決三卷殊勝也宋朝明聖等見往生要集權化所作稱美讃嘆寛弘二年十二月十日朝飲食如常淨身口無所痛捕佛御手絲念佛數百反如眠終給年七十六而已　大和物語云何はかりふかくもあらす世のつねのひえを山とはみるはかり也となんいひたりけるよかはといふ所に有なりけり以上河

ふるき願ありてはつせにまうてたりけり　花僧都の母君はつせにまうてたる也惠心僧都をはその母のはつせの觀音に祈請してまうけたる人也さるによりてふるき願ありてまうてたりといへるにや　祕源信僧都の母長谷の觀音の利生にて僧都を生したる事ありされははつさ（長谷イ）へまうてけるよせある也箋　弄源信僧都の母長谷の觀音の靈ありて源信を生する事ありきかゝる事にたより　あれははつせ（長谷イ）にまうてけるとかけるなるへし妹の事母の事なと彼是にかよはしてかけるなりいつくの古事もこと〳〵く相叶へきとは心うへからす

むつましくやんさなく思ふでしのあさり　祕僧都の弟子也母に具したる也箋

佛經（ホトケキヤウ）くやうする也　此弟子のあさりのしたる也

ならさかといふ山こえける　奈良坂は大和也

このあま君心ちあしく　箋僧都の母なり

うちのわたりにしりたりける人　宇治へ此阿闍梨な

　その知人の家なるへし

よかはにせうそこしたり　箋僧都へいひつかはす也

山こもりして里にいてくさ（かしイ）　箋千日の山こもり也

　河惠心僧都妹安養尼終焉之時者必可來會之由僧都契約云々而僧都千日山籠（而イ）之間自尼許示遣云老病少選能成了今一度對面大切（西イ）云々雖然限日數（學イ）之山籠難出洛可然者乘輿可來會而坂本之由返答解於下松邊相待之處輿已到來僧都進寄褰簾見之處尼上既逝去相共輿到清義房（修學院）清義先心經七卷讀之次以火界呪加持之惠心又奉念地藏則蘇生云々古事談

みちのそらにて　箋半途

いそき物し給へり　僧都の下山也

をしむへくもあらぬ人のさま　箋僧都の母の年より

たるを云
みつからも弟子の中にもけんあるかきり　箋みつからは僧都なり
かちしさわく　加持也加者佛三密也持者行者三業也三密を三業に持するを加持といふなり
みたけさうし〻侍るをいたうおいたまへる人の　花金峯山精進には後夜於庭山禮拜（前イ）金峯山百度と云
云　箋この家あるしみたけ精進するなり此わつらふ人死すれは精進のけかる〻なり
いとせばくむつかしうもあれは　箋此宿のさまなり
やう〱ゐてたてまつるへきを　將て也加持のしるしあるなり
なかゞみふたかりて　花古人釋云長神也云々而中神歟天一神有中央故なり帚木巻勘に付し之
れいすみ給ふ處は　花尼の里小野にあり　箋尼君のすむ小野の事なり
故朱雀院の御領にて宇治の院といひし所　平等院建立以前有宇治院所見可引勘　李部王記天暦元年十一月三日太上皇陽成院御宇宇治院遊獵山野又天慶八年十月十八日朱雀院　宇多帝　在宇治院文云宇治院

菅原生被留後院云々　今案朱雀院は寛平法皇を申也それを此物語の朱雀院にかきなせる也　秘平等院は朱雀院の御領とあれは別の所なり但宇多の御門の御管領（仁女イ）なれはなりさてかやうにかきなせるなり　弄平等院の事なり以前は六條院の御つたへといへり朱雀院の御領とかける（かけりイ）もさやうになりたる事にや　箋平等院不審也
はつせになんきのふ　秘院守は留守となり
やさもりのおきな　弄宇治院の留守の人はものまうでしてあやしき翁はかり殘りゐたる成へし　箋留守の翁なり
おはしまさはや　留守の翁のいふなり
ものまうでの人はつねにそやとり給　つねにさやうの人の宿をかることなり
いとよかなり　箋僧都の詞也
おほやけ所なれと　箋朱雀院の御領なれはなり
おろそかなるしつらひなとして　箋宇治院をこしらへて僧都のもとへむかへに來るなり　弄
このはつせにそひたるわかきとおなしやうなるいまひとり　箋はしめの尼君にそひたる法師と此弟子とな

り　弄同しやうなる法師と二人なり　箋今ひとり
は僧都のともして來るなり
物のゐたるすかた　人のふしたるやうなるなり
さやうの物しそくへきゐんをつくりて　花印をむす
ふをつくるといふなり　祕退くへき印を結ふなり
かしらのかみあらはふとりぬへき　河たとへは身の
毛たつ心なり唐人の詩に髮如竹なと作る心なり
祕法師なれはかくいへり身の毛たちたるなり俗人
の髮ある人ならはとなりおちたるさまなり
弄法師なれはかくかけり身の毛たちたる心なり箋
祕勘物云枕草子下うれしき物の所にいまそ御こし
出させ給めてたしとみえたてまつるに朝日はな
はなさしあかる程に木の葉のいとはなやかにか
かやきてみこしのかたひらの色つやなとさへそひ
いみしき御綱はりて出させ給ふ御輿のかたひらの
うちゆるきたるほとまことのかしらのけなと人のい
ふはさらにそらことならすと云々　花河海の說しか
るへからすこゝにいふ心はたとへは狐の女に變化
せるならはおのか頭を髮になしてふときかつらな
とにみすへきと云心にや樂府の古塚の狐の詩に頭

變雲鬟面變粧大尾曳作長紅裳といへり狐の女に變
するすかたを云り變雲鬟といふ心をもてかしらの
かみあらはふとりぬへき心ちするといへるなるへ
し　私諸抄此義を不用河海の說然へし
あふなきさまにて　奥なきなり思慮もなくふとより
たるさまなり
ひとりはまうてゝ　阿闍梨二人の內なり
きつねの人にへんけするとは　祕僧都の詞也　河水
鏡云欽明天皇御時美濃國に在男かほよき女をもと
むと（て欤）へ物へまかりしに野中に女にあひ侍りにき彼
を妻にして男子一人うめりかくて月日を過すに家
にある犬十二月十五日に子をうみておとなしく成
たるにかの女をみるたひにほゑのゝしれは女いみ
しくおちて男にころせといひけれときかさりきこ
の女よねしらくる女ともに物くはせんとてからう
すのやに入にき其の時此犬はしりきて妻の女をく
はんとす女えたへすして野干になりてまかきのう
へにのほりてをりけると也　帝王系圖云同御宇三
河國狐成人妻と云々　古塚有狐妖且老化爲婦人顏
色好頭變雲鬟面變粧大尾曳作長紅裳徐々行傍荒村

落日欲沒時人靜處或歎或悲啼白氏文集　夕顔卷註載之　以上河

花五通の中に神境通といふ事ありこれに妖通報通神通なといふ差別あり狐狸なとの人に變するをは妖通といふもと獸にてあるか希有に人にはくるは妖恠なり通といふなり又龍なとの雲にのりて空をかけるをは報通といふ過去の因行によりて龍とならはかゝる報をうへきによて果報の通といふなり聲聞菩薩佛なとの道をは神道といふ是は出世の修業によりてしかも神變不思議なる通なりそのうち二乘の通は菩薩にをよはす菩薩の通は佛に及はぬ道理の有へきなり

おりておはす　箋僧都なり

みづし所なとあるへかしき事とも　花御厨子所は食物を調する所なり公私共に稱する名なり　祕尼君のまうけするなり御つし所は食物を調る所なり箋

眞言をよみゐんをつくりて心みるにしるくや思ふらん　祕變化の物にあらすとみさたむるなり　弄法師の心に變化の物にあらぬよしをやう〳〵みしるなるへし　箋眞言印なとにもおちぬゆゑに人としるなり

ひさうのけしからぬ　非常なり

なにのさる人かこの院のうちにすて侍らん　死人なと此院の内に人はえすてじとこゝの物のいふ歟

きつねこたまやうの物のあさむきて　河樹神コタマ木神魑魅魍魎空谷響大日經　左傳註曰魑魅山林異氣所生爲人害者也　欺アサムク和名又詐云々

けがらひ有へき所にこそ　こゝは院の御領なれはかくいふなり

山ひこのこたふにも　河六帖「つれもなき人をこふとて山ひこのこたへするまて歎きつるかな　貫之

あやしのさまにひたいおしあけて　祕やともりなり箋ひたひをしあつるは皺のよりたる體云々　私額に手なとあてゝまかけさしたる體歟

こゝにはわかき女なとや　法師ともの宿守にいふ詞なり

こゝにもあらぬやつといふ　箋何ともなけにやとものいふなり

まゐり物の所に心よせたるなるへし　箋くひ物の事に心を入たるとなりやともりか事なり

天の下けんざおはしますに　箋僧都の事を云なり
天下第一の験者となり
こたまのおにや　花大木の下にゐたるゆゑに木玉の
鬼となつけたり
むかしありけん目もはなもなかりけるめおにゝやと
花宋の盤といふ繪物かたりなり文殊樓の目なし鬼
の事をかけり山法師なるによりてきゝつけたる事
をいへるなり　河文殊樓目無鬼與舊記に目鬼と號
す　祕目なし鬼の事也　箋抄にあり
いかきさうを人にみせんと　河辛イカシカラシ　花いか／＼し
しきといふかことしたけき心なり　祕いか／＼し
きなり　箋威勢なりいきほひをみするなり
なにゝまれ　何にてもあれなり
雨いたくふりぬへし　祕此雨則浮舟の入水の翌日な
り弄箋
かきのもとにこそいたさめ　箋垣の下なり軒の下の
心なり
池にをよくうを山になく鹿　箋池魚なりかゝるたく
ひの魚虫禽獸までも人のころすをみてたすけさら
んは出家法師の義にあらすとなり僧都の詞なり

おにゝも神にもりやうせられ　箋りやうは領なり
人におはれ　人に被逐たるなり　普門品にも或被惡
人逐といへりこれも横死なり藥師經に九の横死あ
り箋弄
人にはかりこたれても　詐ハカリコツ
よこさまのしに　花横死なり非分の死をいふなり藥
師經に九の横死を出せり　花人にたはかられたる
心也或本に　私云横死の事須彌四州の內北州の人
横死あるましき也必千年の齡有へし東南西三州の
人は此難あるへし殊に重恩を蒙りてしかもそれを
しらさる人かならす横死にあふへきと此事俱舍に
みゆる由或律僧の申しなり
つゐにしぬへくはいふかきりにあらす　箋自業自得
果の理なれはなり
この大とこして　前に物おちせぬといへる人なるへ
し
わつらひ給ふ人のあたりに　箋僧都の母の事也
めにみす／＼　花みる／＼なり
御車よせており給ふほといたくゝるしかり給ふとて

花尼君これまでは宇治院にうつり侍らぬなり　祕
尼君たちの來たるなり箋
物にけさられぬる　夕貌卷にあり
しか〳〵の事をなん六十にあまるとし　是は僧都の
詞なり
うちきくまゝにおのか寺にてみし夢ありき　花是は
妹の尼君の詞なり　祕妹の尼君なり寺とは泊瀬な
り弄
いそきてゆきてみるに　妹の尼君なり
たゝわかこひかなしむむすめのかへりおはしたる
花僧都の妹は右兵衛督といふ人の妻にて有しか女（娘イ）
をうしなひてかなしみのあまりに道心をおこして
尼になれるよしみえたり其女は中將といふ人の妻
にて有しなり
いかなりつらんとも有さまみぬ人は　祕はしめてみ
つけたる人は鬼や何そと思ひておりたるをいまは
女とみさためてはおそろしくも思はていたきいれ
たるなり弄箋
めをほのかにみあけたるに　箋浮舟のさまなり
かみなとの御ために經よみつゝいのる　神分護也

祕心經を神分とて加持のまへによむをいへり箋
よくてうしてとへと　箋物のけをよく調して事のさ
まをいはせよとなり
あなかま人にきかすな　祕僧都のいへるなり
わつらはしき事　箋いかなる人そと恐怖なり
さすかにとき〳〵めみあけなとしつゝ　花目を見上
なり　又見ひらくなり
あな心うやいみしくかなしと思ふ人の　花妹の尼の
ありしむすめのかはりにみんと思へるなり
中々なる事をや思はんと　箋浮舟のなくなりたらは
祕思ひのまさらんとなり
いきいてたりともあやしきふようの人　箋手習君の
詞也箋　河不用也
物の給ふをうれしと思ふに　箋妹の尼の詞也（にやイ）
かりの物にやとうたかふ　祕變化の物かとなり箋
河假色迷人猶苦是眞色迷人應過此白氏文集古樂府
二日はかりこもりゐて　弄院へわたりしより二日は
かりこや
ふたりの人を　祕母の大尼君と此女とをなり箋

そのわたりのけす　祕宇治也
故八宮の御むすめ右大將殿のかよひ給ひしか　箋浮舟の事をかたる事なり
その御さうそうのさうじとも　祕浮舟の葬送なり　河葬送　雜事也　弄浮舟を送し夜の事なり夜うせ給ふてあくる日の夜葬送せし其あくる日の詞なり
さやうの人の玉しゐを　箋此人を八宮の御女浮舟の魂にやと思ひよるとなり
よへみやられし目(火イ)はしかこ〳〵しきけしきも　祕車をやりてけしきはかりをし事なれはこと(火)〳〵しくもみえさるへしと也箋　弄葬送の目の事なり云々
きぬなとはかりやきけむはにや
大將殿は宮の御むすめもたまへりしは　大君の事なり　箋弄に浮舟の事をしらぬなり
姫宮をおきたてまつり給ふて　花是は女二宮の事をいふなり祕女二宮をいふ也箋
尼君よろしくなり給ひぬ　箋僧都の母なり
かたもあきぬれは　箋天一の方のあきたるなり
この人は猶よわけなり　浮舟なり
老人のり給へるには　僧都の母なり

この人をふせてかたはらにはひとりのりそひて　箋浮舟なり　祕今ひとりは妹の尼なり弄
ひえさかもとにをのといふ所にそ住給ひける　祕大原なり　箋大原も小野の內なり　河伊勢物語に小野にまうてたるにひえの山のふもとなれは雪いとたかし此小野は大原の山なり仍比叡坂本といふなり小野鄉の內大原村也布薩云物にあり皇太后宮大原に住給ふ云々　時人號小野皇太后宮云々大二條關白の女歡子尼に成て大原にすみ侍りしを時の人小野の皇后と號せり大原は小野鄉の內なり
夜ふけておはしつきぬ　祕病者なれは道にて逗留のあるなり
やう〳〵よろしく　箋僧都の母の本腹なり
もしたつねくる人もやあると　箋夢の浮橋の序にかけり
ゐなか人のすむあたりに　箋宇治のわたりにかゝる人はあらす物語の人の宇治院にとまりてわつらひ出したるを繼母なとすておきたるかとなり
川になかしてよといひし　浮舟のいまた人心ちなきさまなり

夢かたりもしいて丶　祕泊瀬にての尼君の夢なり箋

けしやくこと　祕護摩也邪氣には芥子を護摩の代に

たくなり　河邪氣祈詣し護摩壇に燒芥子事あり

箋加持病とて護摩には芥子をやくなり

四五月も過ぬ　祕音によむなり　弄卯月さ月の事也

ある佛京にいて給は丶こそ　花ある佛とは我ほとけ

なり僧都を云詞なり山こもりのちかひありとも京

へ出給はんこそあらめ坂もとまては何かくるしか

るへきとなり僧都をいへりこ丶まてとは此坂本ま

てはと云詞なり箋

いとあやしき事かな　僧都の詞なり

こふつきにけりと　河命業盡也

よろこひをがみて　妹の尼の僧都のおり給へるをよ

ろこふなり

わつらふ人はむつかしき事　物むさき不淨なる氣の

なきとなり

おほな〳〵なく〳〵　祕ねんころになり弄　箋妹の

尼の僧都にいふなり

みつけしよりめつらかなる人の　箋僧都の詞

人の御よそめいかな　河よそほひなり　弄境談なり

見河未詳　容面なり箋同

くざくのむくひにこそ　端正者自忍辱中來也　大集經文　花法華經隨喜功德品云面目悉端嚴爲人所喜見云々　祕戒行の功德なるへしとなり箋　箋花鳥にあり

もしさにやとき丶あはせらる丶　祕思ひより給ふ事のあるかとなり　箋誰ときこゆる事もなきかとなり

なにかはほつせの觀音の給へる　祕妹の尼の詞也

なにかそれえんにしたかひてこそ　祕佛も種なき事はあたへ給ましきとなり

たねなき事はいかてか　花法花經云佛種從緣起と云云　箋今案一切色心諸法之種子をは第八阿賴耶識含藏せりと染淨の緣にしたかひて現行して佛とも衆生ともなるものなりたとへは草木等の種の土地雨露の緣をかりて生長せるかことし種あれとも緣なければ現行せす菩薩の慈悲ましますといへ共その人の宿緣なければこれをみちひきたまふ緣となり侍るへからす泊瀬の觀音も小野の尼君にやしなはるへき因あるによりて浮舟の君をみちひき給ふ

増上縁となり給ふといへるなり以上花
おほやけのめしにたにしたかはす　箋公請にも應せす隠遁したる人なり
われむさんの法師にて　河無慙法師　花唯識論云何無慙不顧自法輕拒賢善爲性能障礙慙生長惡行爲業
やふるかいはおほからめと　河諸戒の中には麁强罪はおのつから止とも細隱罪はこと〳〵くにとゝめかたきものなく五戒八戒十戒等は麁强なり二百五十戒五百戒十無盡戒一切威儀戒等は細隱と云へきなり　祕戒法の中にやふる事多かれともとなり　弄河海の說しひて不用之戒をやふる事おほかれとといへりつねの詞なり　比丘は二百五十戒比丘尼は五百戒なり
女のすちにつけて　箋女犯の事也　花法花經安樂行品云又菩薩摩訶薩不應於女人身取能生欲想相而爲說法云々若爲女人說法不露齒笑不現胸臆乃至爲法猶不親近況復餘事
今さらにもときおはんはさるへきにこそ　祕今はたとひ名をたつともくるしからすとなり　箋それもさたまりたる事となり　私これは弟子ともの何かといふにつけての僧都の詞なり
よからぬ人ともの　祕又弟子共のいふなり花
いみしき事ともをちかひ給ふ　弄行者のものを祈るには平生の修習の行を此時の願にかけていのるなり箋弄
人にかりうつして　祕よりましなり弄
てうせられて　河調伏なり　箋とゝのへふするなり
むかしはおこなひせし法しのいさゝかなる世にうらみをとゝめて　祕紺青鬼の事をひけり　箋金峯山の行者紺青鬼補本紀僧正なとの事を下心にてかけり紀僧正眞濟は惠亮に佛法のおとりて魔界に入なり後に慈惠僧正の時に得脫して慈恩になりて生るゝなり云々　弄眞濟僧正の事見河さる事ありし例なとにや　河貞觀七年比染殿皇后爲天狗被惱猶羅數月所有驗僧侶無敢能降之者天狗放言云自非三世諸佛出現者誰降我亦知我名云々愛相應和尙應召參入兩三日祇候無有其驗還於本山奉封無動寺不動明王啓白事由愁恨祈請于時明王背而向西和尙隨坐西亦背而向東和尙又隨坐東亦背而向北向南和尙亦坐南流淚彈指稽首和尙白而言相應奉載明王更無他念而

今有何犯過相背如此乎願垂悲愍可告示云々前既合掌奉念明王本誓合眼之間非夢非覺明王亦云我依生生加護之本誓有難去之事令顯說其本緣昔紀僧正眞濟存生之日持戒明呪而今以邪執墮天狗道者惱皇后爲明王本誓護彼天狗者何以我呪難降彼天狗也以大威德呪加持者得結縛之便歟云々此告之後不堪感淚頭面接足禮拜恭敬後日依召復參任明王教誡之旨奉加持之間結縛天狗自今已後不可復來之由歸伏之後解脫畢則皇后復尋常云々　松月上人記或記云むかし染殿の皇后御なやみのとき金峯山より久修練行の行者まゐりて加持し奉る平愈の後本山にかへりて年來の行業を廻向して誓て鬼となれり紺青鬼といふつねに后をわつらはしたてまつりけるを智證大師ねんころに教誡し給ひけれは紺青鬼はちたる色有てその座にありなから灰のことくになりてきえにけりその後后もとのことくになり給けりと云々善相公の記にもみえたり大師の御事はなきにや此滋賀上人朝勳上人等如此事多之

よき女のあまたすみ給ひし　花宇治の優婆塞宮をいふなりかたへはうしなひてさはあけまきの大君の事なり　河大般若經如有女人端嚴巨若強夫所攝護者爲惡人之凌辱

かたへはうしなひてしに　箋大君なり

この人はこゝろと世をうらみ　箋浮舟なり

觀音とさまかうさまに　泊瀬の觀音の大悲を思ふへし

つきたる人物はかなきけにや　祕浮舟のよわきさまなり

さうしみの心ちは　祕浮舟なり花

ひとりみし人のかほはなくて　花宇治にてみし人のかほはひとりもなきとなり　浮舟君のやう／＼本性になりて思ひ侍るなり

つまとをはなちて　箋身をなけんとせし時の事を浮舟の心に思ひいてたるなり花

宮ときこえし人のし給ふと　花靈の人に現してみえけるを匂宮とみしとなり　祕匂宮そと思ひしとなり箋

ほいのこともせす　花如本意なり身をなけんとせし事なり　私入水の事なり箋なし

おほくの日ころもへにけり　祕六月の時分にもなる

へし弄

露はかりのゆをたに　箋浮舟の本心になりてから食事をも用すとなり

いかなれはかく　尼公のことはなり

うちはへぬるみ　花温氣なり　ぬるけの事なり　箋わつらひのかたはよくみゆるとなり

なく〳〵たゆむをりなく　尼公の思ひあつかふさまなり

心にはなほいかてしなんとそ　浮舟の心本意をもとけはやとなり

いとしうねくて　浮舟の死たく思へともこれほとにしていきたる命なれはつきなしとなり

いくやうもあるへきと　箋生る様もなり

五かいはかりをうけさせ奉る　箋五戒なり尼になすよしはかりなり

心もとなけれと　浮舟心尼になすよしはかりなるを心もとなしと云

なれ〳〵しき人の心にて　秘うき舟の心やはらかなる人となり　箋物をさはやかにいひあきらめぬやうの心なり

夢のやうなる人　浮舟の事尼公のむすめに思ひよそふるなり

うちやりたりつれといたくもみたれす　髪のうつくしきさまなり

一とせたらぬつくもかみ　河「百とせに一とせたらぬつくもかみわれをこふらし面かけにみゆ　箋業平中將としよりたる女にこひられてよめる歌の詞なりつくもかみは老人の髪海の藻をつくねたるにたとへたりこゝにはとしよりたる女とものおほかるをいふなり　秘老たる人たちはかりある所となり弄箋

天人（テンニン）のあまくたれる　箋竹取の事かくへき序なり

あやふき心ちすれと　天人なとにてこの人のうせ給ひてはとあやふきなり　秘此段悉皆竹取の翁のかくや姫をえたる時の心にてかけり

かはかりいみしく思ひきこゆるに　尼公の浮舟をうらみていふなり

いとはつかしと思ひて　浮舟の心なり

まへちかくおほきなる木の　もと住し宇治の宮のさまなるへし　箋榮花物語にかくのことくありと云

云
かくや姫をみつけたりけん竹とりの翁よりも　花上の詞にいみしき天人のあまくたれるをみたらんやうにかけりとあはせてかくや姫をはいひいたせるなり　祕かくや姫の物語の心なり萬葉の竹とりは心かはれり
いかなる物のひまに　箋ゆくへしらぬといふにつけてかくや姫のやうなる人にやふときえやせんすらんとなり
このあるしもあてなる人なりけり　花僧都の母君をいふなり弄
むすめのあま公はかんたちめの北のかたにて　箋僧都の妹なり浮舟を思ひあつかふ人なり　花小野の尼は右兵衛督の後室なり上にしるせり又ゆめのうき橋の巻にもみえたり
その人なくなり給うて　妹の尼の夫の事なり
よき君たちをむこにして　箋末にみえたる少將なり
こひわたる人のかたみに　箋むすめの事也かたみにうき舟をみるなり
ねひにたれと　箋尼公の事なり箋

昔の山さとよりは水の音もなこやかなり　祕宇治なり箋　花宇治川をはあらましきみづのおとゝいへり小野は音無の瀧といふへしなこやかは和の字なり
門田のいねかるとて　河伊勢物語云色このみなるをとこなかをかといふ所に家つくりてをりけりそこのとなりなりける宮はらにこともなき女とものゐなかなりけれは田からんとてをとこのありけるをみていみしのすき物のしわさやとて
ひたひきならすおとも
みしあつまちの　祕浮舟の心なり弄　花常陸國にての事なり箋
かの夕霧のみやす所のおはせし所よりは　花夕霧巻にある事なり　箋落葉の御所よりは猶奥そとなり詮にかけり　祕草子地なり在所の地形をいふなり思ひいてられてといふにて句をきりてみるへし
弄此詞は双紙の詞なるへし浮舟の事をいふ詞にはつゝかぬなり
山にかたかけたる家なれは　河山にかたかけてすむいほなと歌にもよめり　箋ひたひきならすの句に

かゝれり　弄此詞は又浮舟の心なるへし思ひいて
られてもと云詞につゝくへし隔句なとの心なるへ
し
少將の尼公　祕小野の尼につかへたる人なり弄
かゝるわさはし給ふなり　祕尼公浮舟に問なりあそ
ひかたの事なり
昔もあやしかりける　祕浮舟の詞なり　私浮舟の心
なり
さた過にける人の心をやる　花年よりたる尼公たち
の琴ひきあそふをいふなり
物はかなかりけれと　箋浮舟の身のうへを思ひしる
なり
てならひに　祕是より手習の君とはいへり
浮舟身をたけし涙の河のはやき瀬にしからみかけてたれ
かとゝめし　河菅家「なかれゆく我はみくつと成ぬとも君
しからみとなりてとゝめよ　箋誰かとゝめしとこ
ゝの事をいふなり
行末もうしろめたく　祕行末もうしろめたしとなり
浮舟われかくてうき世の中にめくるともたれかはしらん
月のみやこに　祕尤あはれなる歌なりとりあつめて

よろつの事を思ひたるさまなり
たゝおやいかにまとひ給けん　たゝいまは母君めの
との事右近なとを思ひいつるとなり
わかき人のかゝる山さとに　祕此山里にはわかき人
なともなしとなり
みしわたりにゆきかよひ　此京にある宮つかへ人の
來かよふ中にいひつたへて薫句なとのあたりへし
られてはといふかくしのふよしなり
たゝ侍從こもきとて　河上東門院のうへわらはにい
ぬきといふ物あり榮花物語にみえたり此物語の中
にもいぬきあてきなれきなとゝてありきは發語の心
なり又野宮歌合源順州世左こもきなとあり見順宗集
むかしみし都鳥にゝたることなし　河古「なにしおはゝ
いさことゝはん都鳥わか思ふ人はありやなしやと
花昔みし都の人といはんとて都鳥と詞をかされる
なり又わか思ふ人はありやなしやとゝはまほしけ
れと都鳥に似されはかひなき心なり　祕花月の説
尤殊勝なり箋　弄都の人に似たる人なしと云心な
り
世中にあらぬ所はこれにやあらんとそ　花拾八　よの中

にあらぬ處をえてしかなとし過にけるかたちかへ
さん　祕前に母と宇治にて贈答の事を思ひ出る也
別の引歌は無用なり箋　箋うき世にはあらぬ所を
もとめても君かさかりをみるよしもかな　浮舟の
母のよみし歌を思ひいてたるなり引歌尤惡なり
わつらはしかるへきゆゑある　浮舟の事なり事のわ
つらひある人にてはと尼君もかくすなり
ある人々にも　花そこにある人にもくはしき事はし
らせぬといふ心なり　祕尼公もかくしたるなり
むかしのむこ　箋尼公のうしなひし女のをとこなり
おさうとのせんしの君　弄中將のおさうとなり僧都
の弟子とみえたり
横川にかよふみちのたよりに　横川へは小野のかた
よりのほるなるへし
さきうちおひてあてやかなる男　花中將も小隨身を
めしくするによりて前の聲を發するなり　弄中將
もさきをおふなり近き頃までの事なり
しのひやかにておはせし人　祕浮舟の心に薫の事な
と思ひいてたり　弄手習君の心句の事なり箋
これもいとゝ心ほそき　弄宇治の山里に思ひあはせて
の詞なり
かきほにうゑおきたるなてしこ　箋なてしこはとく
よりさくへし女郎花桔梗は秋の初なれはさきはし
めたりといへり
色々のかりきぬすかた　中將のともの人々なり
君もおなしさうそく　弄中將もかりきぬをきたるな
り
とし廿七八のほと　中將の年齢なり　弄廿六七と有
本もありいつれにもありなん
心ちなからぬさま　箋心ちありといふなり
としころのつもりには　祕尼公の詞なり
心のうちあはれに過にしかたの事とも　箋中將の詞
也　中將の心なり過にしかたといふより中將の詞
なり　箋心のうちといふより中將の詞然へきなり
わすれかたきゆゑに過にし事ともおもほれぬとな
り
すみはなれかほなる　箋尼公の世はなれたるすまゐ
ゆゑにおのつから遁世なるとなり　弄尼きみとも
世に遠く住なしたれはおのつから中將のきたる事
もおこたるとなり

山こもりもうらやましく　惣別世をすてゝ山住もしたきとなり
つねに出たち侍るを　細々參りたく思ひて出たちにも友たちなとの同道ある故にこゝへえ立よらぬ事も侍るとなり
したひまとはさるゝ　祕同道すへきとて人々いさなへるとなり
けふはみなはふきすてゝ　河略ハフク省同　花とくより出たち侍るを友たち共のおなしくはわれもなとしたひ侍るにさまたけられてとかくうちすくし侍るけふはその人ともをはふきすてゝ出たちたるよしをかたらるなり
山こもりの御うらやみは　祕尼公の詞なり
いまやうたちたる御物まねは　箋それは人まねの山すみといふなり
むかしをおほしわすれぬ　箋むすめの事也　私此中將其後北方もあらしとみえたるそれを世になひかせ給はぬといふ此おくに藤中納言のもとへかよふとみゆれは小野尼も思ひわすれすとふらふ事をいふなるへし

人々にすゐはんなとやうのものくはせ　河水飯也
　祕ひめの飯といふものくはせ　ひめとも飯とも又ほしひとも
はすのみなとやうのもの　河蓮子（レンシノチヨソキ）にみゆ遊仙窟　祕蓮實なり　箋蓮肉なり　弄さかつきなり　河蓮子數盃（子）妾（妾イ）令酒松枝一曲試春歎白樂天　酒釣送盞推蓮枝燭涙黏盤疊蒲萄同　一說云水飯并盃をそへて出しけるなり菓子の中に藕實をくはへたる事いたく先蹤なきなり云々或云夏の會なれは藕實もなかるへきにあらす盃をはすのみといはんもあまりに上手めきたるなり　以上河
いふかひなく成にし人よりも　祕尼公の心なり中將をよそ人にせんかくちをしきとなり
なとわすれかたみをたに　祕わかむすめなともなかりし事なり　不及引歌たゝこのなかりし事なり此義然へし
とはすかたりもしいてつへし　祕此手習君の事なり
　箋浮舟の事をかたりもいつへきとなり弄
ひめ君はわれはわれと思ひいつる　祕姫君は浮舟なり尼公は昔のむすめの事をおもひ浮舟は又わか身

のむかしの事を思ひ出したるなり　箋匂なとの方をおもふなるへし
しろきひとへのいとなさけなくあさやきたるに　花あさやきたるはゝりたるをいふにや
はかまもひはた色にならひたるにやひかりもみえす
河檜皮色袴（ヒハダイロハカマ）　蘇芳とふしかねとにてそめたる物なり出家の人多分着之なり　花檜皮色は面蘇芳にくろみありうら花田をいふなり　秘尼の中にすみ給ふゆゑにくれなゐのはかまもひはた色なるへし箋くろきをきせたてまつりたれは　箋紅の色なからくろみたるなり
こは〳〵してくいてきたる　秘浮舟の衣裳のさまなり
故姫君のおはしたる心ちのみ　箋尼公のむかしの女なり
おなしくはむかしのさまにて　箋中將に此浮舟をあはせたきとなり
あないみしや　秘手習君の心なり
むかしの事思ひ出らるへき　さやうの事あらは結句匂宮なとの事の思ひ出られてあしからむとなり

少將といひし人　尼公のつかふ人なり
むかし見し人々は　尼公の女の有し時の事なり
つかうまつりなれにし　此少將のおもとの事也中將君になれにし人となり
かのらうのつまいりつるほとに　秘中將の廊のつまより入つる時の事なり　尼公の内へ入つる時手習君をみしなり　私中將の入つる時の義然へきなり
風のさわかしかりつる　秘雨のふりいつへきさまなり
なへてのさまには　箋浮舟をすたれのひまより中將のみたるなり
ひめ君の立いて給へりつる　弄手習の君の奥のかたへ立さり給ひし事なり　秘少將の心なり
昔人はこよなくおとり給へりし　箋尼公の女の事なり
過にし御事をわすれかたく　秘少將の詞なり　箋尼公の心に女をわすれかたきなり
おほえぬ人をえたてまつり給て　箋浮舟を尼公のえたる事なり
かゝる事こそはありけれと　秘中將の心なり　箋浮

舟の事なり
そのまゝにもいはす　少將のおもとのくはしくもこ
たへぬなり
雨もやみぬ日もくれぬへし　箋中將の供の人の云な
り
をみなへしをゝりて何にほふらん　河拾「こゝにしも
なに匂ふらんをみなへし人の物いひさかにくき世
に　祕手習君かゝる所にすみ給ふあやしきとなり
引歌河海弄　箋引歌有河海尼とものみある所をこ
こにしもといはんためなり
人の物いひを　祕人々のいへるなり箋　弄小野の人
々中將の人の物いひを思ひ給ふととりなしていら
ふるなり
きよけにもあらまほしくも　箋中將を人々のほむる
なり　かやうの人めつらしき故なり　むかしのや
うにて是も浮舟を中將に見せたきとなり
藤中納言の御もとには（あたりイ）　河鬚黑大臣息也　小野尼の
むこの中將只今此人の聟君たるにや　祕鬚黑の息
と云々又別人ともいへりいつれにてもなり箋　弄
中將のかよひし所なり河海に髭黑の息の事といへ

り又一人たるへきなり誰ともなき可然なり
おやの殿がちに　箋中將君のおやなり誰ともなし
物をのみおほしへたてたるなん　是よりは尼公の浮
舟にかたらふ詞なり　祕尼公手習君にいへる詞也
この五とせ六とせ時のまもわすれす　尼公の女五六
年さきにうせたるなるへし
思ひきこえ給ふへき人々　箋浮舟の親類その外した
しき人とも、世になき人と思ひ定めんなと今はか
くてあらんとおほせとなり
よろつの事さしあたりたるやうには　月日をふれは
眼前のやうにはなき物こそ故鄕を忘れさせんとて
いひなすなり
いとゝなみたくみて　故鄕人もやう〳〵思ひ忘れん
なといふにいよいよもよほされて浮舟のなみたく
み給ふなり　花是は浮舟君のありさまなり
へたてきこゆる心も侍らねと　祕手習君の詞親とて
たのむへき人もなけれは尼公はかりこそたのもし
くおもへとなり
ひたみちにこそむつましく　箋浮舟の尼公を思ふ心
なり

うちゐみてまもりゐ給つる　尼公のさまなり
ころたふときかきりに經なとよませて　中將の横川
にとまりてのさまなり
せんしの君こまかなる物語　祕中將の弟なり箋弄
をのにたちよりて　祕中將の詞なり
世をすてたれと　弄小野の尼公とものことをほめた
り
かみいとなかくおかしけなる　箋浮舟の事なり
おのつからめなれて　法師なとのあたりには似あは
ぬ心なり
せんしの君この春はつせにまうてゝ　禪師の君浮舟
の事のかたはしをかたるなり
あはれなりけることかなと　又中將の詞なり
むかし物かたりの心ちもするかな　祕住吉の物語な
とを思へるにや弄同祕私自余の抄にこれなしたゝ
大かたにむかし物かたりめきたるといふにや
又の日かへり給ふにも　中將のかへりさまに又小野
へたちよるなり是は浮舟の事下心にあるなるへし
いとゝいやめに尼公は物し給ふ　中將の又きたるに
もよほされてむすめの事を思ひ出るなり

しのひたるさまに物し給ふらんは　祕中將の詞也
私浮舟の事を思ふなり
わつらはしけれと　祕尼公の心なりわすれ（わつらはしイ）給ひとい
ふより尼公の詞なり
いとつゐふかくのみ　女の事の忘れかたきを云也
いかなるにかいと物思ひしけき　祕物思ひしけきは
物思ひしたるさまなり
うちつけ心ありて　祕うちつけは直の心なり　祕中
將の心なり
ましておほしよそふらんかたにつけては　祕昔の御
むすめに思ひよそへ給はゝとなり　（さイ）箋浮舟を御女
のかはりとおほさはもとのまゝ我物にみんといふ
中將の詞なり
中將 あたし野のかせになひくなをみなへしわれしめゆは
ん道遠くとも　祕あたなる風にはなひきそとなりあ
たし野は名所こへる義あれともたゝあたなりとい
ふ心しかるへし　京極黄門も名所の内に不載之と
云々可尋決書　河承暦の歌合にさかの野を過てあた
し野まて行けんもあちきなしといへり是名所なり
野宮歌合判云あたしのは名たかゝらぬにやあら

ん有所しれる人すくなしと云々清輔朝臣抄には名所集にみえたれとたゝあたなることによせていなりあたし心なといふ體なり

心にくきけつき給へる人　尼公中將の事をいふなり

いとあやしき手をは　浮舟のかくいひて返事せぬなり

きこえさせつるやうに　祕前に世にありて人にしられん事をくるしけに思ひてといへる事なり　私これは尼公のかきたる返事の詞とみゆ

返尼君 うつしうゑて思ひみたれぬをみなへしうき世をそむく草のいほりに　祕尼公のうたなり　箋浮舟をむかへんとのこゝろなり

こたみはさも有ぬへし　祕中將の心なり只今はことわりとなり　箋こたみは此度なりうちつけに返事なとせぬはことわりそと中將の思ふとなり

物思ふらんすち　浮舟の物思ふをあはれと中將のおもふなり

こ鷹かりのついてに　河萬「いはせ野に秋萩しのき駒なへてこ鷹狩たにせてやゝみなん　箋中將の小野へ行たるなり

れいの尼よびいてゝ　少將の尼なり

いらへ給ふへくもあらねは　浮舟の返答あるへきさまならぬなり

まつちの山の今なん見給ふる　尼公の詞なり　河「誰をかもまつちの山のをみなへし秋をちきれる人や有らし　小町　貫之集に題こたかゝり「秋の野にかりそくれぬる女郎花こよひはかりのやとはかさなん　花小町か歌こゝにかなへりよに女郎花の歌あり下の詞に秋をちきれるなと中將のいひ侍り　祕引歌河海誰をかも云々兩義あり一義は此尼公の浮舟の心もゆかさる事をはそはより中將に契る事も有へしとなり又の義は手習君の性しうねくしてと打とけて物もの給はさるは別にちぎれる人あるかと也此說可然かとなり　箋是は別の人に浮舟のちきれる事有なるへしとなり　弄祕の義に同し

たいめんし給へるにも　祕中將に尼公の對面なり

心くるしきさまにて　中將の詞なり

ゆるひ給ましき人々に　箋中將のおやたちの事なるへし

よに心ちよけなる人のうへはかくゝして　花苦した

る也　私屈したるなり　祕心ちよけなる人は我身にはふさはしからすとなり　弄此う許たまはる物思ひのあるさまなる人こそわか心に思よくかなひたれとなり　箋浮舟の物思ふを中將に一具なるといふなり　弄祕の義に同し手習の君の物ゝもひたるさまにかたらはんためなり

心ちよけならぬ（よからぬイ）御ねかひは　花尼君の返事祕つきなからぬさま　手習君のさま中將の一具となり

れいの人にてはあらし　手習君の尼にならんと云〻事なり　弄手習の君の事を云なり

のこりすくなきよはひの人たに　箋尼公の身のうへをいふなり　弄年老たる人たに世を今はとおもふきはゝ心ほそしとなり

世をこめたるさかりにては　花世こもれりといふ詞とおなしわかき人をいふなり　私行未遠しとなり

おやかりていふ　箋尼公の實の母めきていふなり

いりてもなさけなし〻　箋尼公の簾中へ入て手習の君にいふ詞なり

人に物きこゆらん　祕手習の心つよきさまなり　箋手習の詞なり

いつらあな心う秋をちきれるはすかし給ふにこそ　中將の詞なり　祕前の引歌をうけていへりわれをちきり給ふとの給しととりなしてかこちかゝるなり箋弄

中將
まつ虫の聲をたつねてきたれとも又荻（萩イ）はらの露にまとひぬ　祕松虫は尼公になしていへり我身をまたるると思ひて來つれはわかほのめかす人はつれなきゆゑにその露にまとふよしなり　箋分きつる野へよりもこゝの露はふかきとなり手習の君のなひかぬをいふなり

あないとおかし（いとほしイ）これをたになと　返歌をし給へと人人のそゝのかすなり

いらへをたにし給はねは　浮舟のさまなり

あま君はやうは　祕はやうとはわかき時となり　花はやうは昔の事なり

返尼公
秋の野の露分きたるかり衣むくらしけるやとにかこつな　祕野への露にてこそあるらめ此宿のつゆけきにはあるへからすとなり箋

わつらはしかり給ふと　むくらの宿のとかとかおほ

さんとわつらはしかるさなり
うちにも猶かく　祕手習君の心なり箋
世にあるとしられはしなるな　人にしらるゝ事をいとふなり
をとこ君をもあかす思ひ出つゝ　此中將の出入せん事を人々の思ふとなり
よのつねなるすちには　實事なとこそなくとも物こしのいらへなとはし給へといふなり　箋手習君の心中をはしらて中將をも何とかなとこの人々の思ふゆゑとり〱にかくいふなり
わかやくけしき　箋年よりたる人々の今めくをいふなり
かきりなくうき身なりけりと　祕手習君の心なり
鹿のなくねになと　河古「山さとは秋こそことにわひしけれ鹿のなくねにめをさましつゝ　祕引歌河に同し　箋同し
まことにこゝちなくは　箋こゝの人々の中將をほむるにつきてかくいへり手習君の心なり
過にしかたの　箋尼公のむすめの事を云中將の詞也
いまはしめてあはれとおほすへき人はたかたけなれは　手習君のあひ思ふましきさまをうらみたるなり　祕こゝへ來てはむかしの事思ひ出らるゝ也今此姫君は思ひすて給へははたしもなしとなり
みえぬ山ちにもえ思ひなすましう　河古「よのうきめ見えぬ山ちへいらんには思ふ人こそほたし也けれ　祕引歌同世のうきめみ(みえイ)ぬ山ちへいらんもやすき事となり　箋引歌同し中將の心也　弄世のうきめの歌を引といへり手習君のなひきなはほたしにもなるへきをさもあるましといへり云々　私此義いささか不審也案之に世のうきめみえぬ山ちへといひて此小野なとへ引こもらんと思へとも手習君のあひ思ふましき氣色なれは此小野を世のうきめみえぬ山ちにもえ思ひなすましといへるにや　箋思ふ人と思ひいらぬか山のほたしなく是はその山に思ふ人のあれ共そのおもふ人かあひおもはねはみえぬ山ちにもえい(思イ)ひなすましといへり尤妙なり〱
なとあたら夜を御らんしさしつる　河可惜(アタラ)(みゆに)日本紀「あたら夜の月と花とをおなしくは心しれらん人にみせはや　花萬葉にあたら夜は惜夜又新夜とかけりあたらしく惜しき夜の心なり

なにかをこなるさとも心み侍ぬれは　花歌の詞ある
へしいまたみ出し侍らす　祕引歌未勘歌なくては
心得たかきなり箋弄
おくふかけなるけはひも　中將の心なり浮舟のもて
はなれたるさまをあまりすさましと思ふなり
ふえのねさへあかす　花尼公の笛のねにめてゝ中將
をさむるとて歌をよめるなり　箋尼公の心なり
尼公
ふかき夜の月をあはれとみぬ人や山のは近き宿にと
まらぬ　祕前のあたら夜をといへる詞をうけたり
箋所のさゝ山の端近きを云中將の月をみすてゝか
へるをとゝめんとていへり下の心は尼公のよはひ
かたふきて山のはちかき心ありそれをあはれとは
御らんせぬかと云心あり
なまかたはなる事をかくなんの給ふといふ　祕手習
君のよめると尼公のいへるなり　弄ふかき夜のと
あるを尼公のよみたるをつかへ入のかくとつたへ
たるなりと云々　私祕の義おほつかなし弄の義然
るへきなり尼公のなほさりに打詠したるをつかへ
入のとりはやしていひつたへたるとみえたり
心ときめきして　箋中將の心なり尼公の中將を手習
君のかたへみちひかんとてかくよみてとゝむるか
と思ふとなり
返中將
山のはに入まて月をなかめみん閨のいたまもしるし
ありやと　祕ねやのいたまとはむねの思ひもはるゝ
やとなり
この大あま君　祕尼公の母なり此段物語の狂言にか
けり箋
むかしのことなともかけていはす　祕昔の尼公のむ
この中將なとゝいふことをもよくもわきまへさる
なり箋
思ひわかぬなるへし　草子の地なり
いてそのきんのことひき給へ　祕大尼君わかむすめ
の尼君にいへる詞なり弄
いつらくそたち　祕女房たちなりくそとは今の世に
もこそと人の名につけていへる詞なり弄箋　河古
來にいつらくそたちと句をきりたる僻事なりくそ
たちとは當時こそと云詞なり何こそなと云賤女の
通稱なり　古今作者にも屎とてあり貫之童名を内
教坊阿古屎といへり當時も邊土の下女に何くそと
いふ名あり此心なり　花うつほの物語にも此詞あ

り京くそたちもといへり童女の通稱なるへし今の
世にも何くそといふかことし五音通せる故なり
それなゝりと　中將の心にこれは尼君の女なりと推
したるなり弄
さためなき世そ　祕孫女此中將の室をはうしなひて
此老尼のなからへたるを不定の世とあはれに思ふ
なり箋
昔きゝ侍りしよりも　祕尼君中將の笛をほめたるな
り
山かせをのみ　祕いやしき耳ゆゑかとなり
いてやこれはひかことに　尼君の詞也琴はひかおほ
えのみならんと卑下するなり
いまやうはをさ〳〵なへての人の　弄むすめの尼の
琴ひくをきゝてなり琴のことは今の世にはひく人
もまれなれは中々めつらしと中將のきくなりいま
やうとは當世このまぬ事なり只當時と云心なり
花中將の思ふ心なり　祕中將尼君の琴を感したる
なり　河嗟々俗人耳好今不好古取以北窓琴日々生
塵土文集秦中吟
松風もいとよくもてはやす　河松風入夜琴百詠
よひまとひもせす　祕大尼君なり花　花老者のある
體なり
おうなはむかしあつまことを　弄嫗字なり老女の心
なり　祕老女の稱なり　私大尼君のみつからおう
なといふなりあつまは和琴なり
念佛よりほかのあたわさは　河萬事家生皆捨離専心
發願向西方
しのひやかにうちわらひて　花中將の體なり箋
あやしき事をも　花中將の詞なり
こくらくといふなる所には　箋極樂淨土之伎樂歌詠
の事をいふなり
きゝ侍らはやとすかせは　箋中將のきゝたきよしを
いふをすかすといへり
いとよしとおもひて　祕大尼の氣におひたるなり箋
とのもりのくそ　河さきにおなし主殿こそなり
とのもりの君といふなり箋　弄主殿のくそなり女
の名に官をよふ事つぬの事なり　問云とのもりの
とものみやつこ如何とのもみやつこ歟　一勘云と
のもりは主殿寮なりその被官の下部なとなりいつ
れの官にもとものみやつこはあり伴部ともかくな

り
いとほしくてまかせたり　大尼君のいふにまかせたるなり
たゝ今の笛のねをもたつねす　箋笛は盤渉調なりしをそれにもかまはす大尼君の和琴をは心のまゝにしらふるなり
こと物はこゑやめたるを　笛も琴もあはせさるをこの和琴にめつると大尼の思ふとなり　箋しらへの調子なとあしくてつけにくきゆゑに聲やめたる也
たけふちちり〳〵たりたななり　花是は笛のねのかくきこゆるなりそれを和琴に尼君のひきたるなり唱歌なとにおなし後拾遺「笛のねの春おもしろくきこゆるは花ちりたりとふけはなりけり　祕「笛のねを唱歌にするなりたけふちちり〳〵たり唱歌也 弄一本たりたんなちり〳〵笛の唱歌を和琴にうつしてひきたるなり一本にたりたんなちり〳〵たりたんな
ことはともわりなくふるめきたり　弄詞ともとは唱歌の事なり
いとおかしう今の世にきこえぬことは　中將の和琴をほむるなり　弄此詞も同上
月比ものし給へる姫君　手習の君なり
われしこそ（かしこにイ）　大尼君の自讃なり
笛のねいとおかしう　中將のかへる道にふく笛なり
よへはかた〳〵心みたれ　花中將の文のこと葉なり
祕中將 わすられぬむかしのことも笛竹のつらきふしにもねそなかれける　弄尼君の女の事を中將の思ひ出るなり　上句は尼君の女の事下句は手習君の事を思へり
おほしゝるはかり　祕手習君をいひなひかし給へとなり箋弄
しのはれぬへくは　祕我身のしのひかたきとなり
いさゝわひたるは　尼君なり弄
近尼君 ふえのねに昔のこともしのはれてかへりしほとも袖そぬれにし　昔のことは尼君の琴をひきし心もあるなり心はあらはなり
あやしく物思ひしらぬにや　祕前にもはゝかゝるあたわさなとはし給はすと大尼君のいひし事なり弄

私是は浮舟の心つれなき事をいふなり老人のこはすかたりは大尼君のいひしことなるへしかやうの情たちたるかたのなきといふことなり
めつらしからぬも　祕尼君の返事なれはなり草子地なり　箋手習君の返事ならぬを云
荻の葉にをさらぬほと〳〵つけてをとつれわたる　花後拾「おきのはに吹過て行秋風の又たか里におとろかすらん　今案これよりは浮舟君の心をいへるなり　箋不及引歌此中將の荻の葉に風のをとつるゝやうに細々文なとのあるをむつかしく思ふ手習の心なり時分秋なれはなり
人の心はあなかちなる　箋匂宮の事に思ひしりたるなり
思ひはなたすへきさまにとくなしたまひてよ　花尼になし給ひてよとなり箋
世中を思ひすつれは　手習の此世を思ひすてたるを云也
明くれのみもの　箋觀ミモノ　一字をよめり
戀しき人のうへも　箋尼君の女の事なり
かくあらぬ人なとも覺え給はぬ　此手習君をわかむすめのやうに覺えて他人とは思はれぬよしなり
かへり申たちて　箋賽カヘリマウシ　願はたしのやうになりかならす願をはたすにはあらす手習君をえたる悦申なり仍かへり申たつといへり
いさたまへ人やはしらん　箋尼君の手習をさそふなり
むかし母君めのとなとの　箋手習君の心なり　手習の母や乳母なとの事なり
たひ〳〵まうてさせしを　弄長谷の觀音をたのみつるかひもなしといへり上にしるす心なり或は佛の德をかうふり又はかくある事もあり可見之
いのちさへ心にかなはす　祕入水せんとせしも心にかなはすとなり我身には觀音の利生もなきをいへり　又は波浪不能沒のちかひもあらはれたるなるへし　弄身をなけんとせしも心にかなはす命さへなり　河古今「命たに心にかなふ物ならは何かわかれのかなしからまし　私不及引歌
心こはきさまには　觀音の手習に利生なき事なとはいはぬなり
物おちはさもし給ふへき　物にとられなとしたる人

なれはと尼君の思ふなり

浮舟(手習イ)
はかなくて世にふる川のうき瀬にはたつねもゆかし
二もとの杉　河古一はつせ河ふる川のへに年をへて
又も逢みん二もと有杉　孝花二もとの杉は匂宮薫大
將のふたりを思ひ出給ふにや又もあひみんといふ
歌によりて尼君のたはふれことにいひあてたるへ
し　祕河に引歌あり花鳥の義二本は薫匂をいふと
いへり此説はあまりなるなり心はたゝ年をふると
も杉の本へは二たひ行へからすとなり　箋かやう
にてなからへてもかひなきはうき瀬そとなり　そ
れならははつせへ參りても曲なしと也　花鳥に二
もとの杉は匂薫を思へるなり云々不用之但此説も
可然也云々以上箋　私二本の杉は泊瀬の事とはか
り大やうにみて可然なり

二もとは又も逢みきこえんと　弄はつせ河なる河の
へのうたにていへり箋　私花鳥の義强不可用之
いひあてたるに　尼君のたはふれことの事なり

返尼君
ふる川の杉のもとたちしらねとも　過にし人によそ
へてそみる　花尼君の返歌なり過にし人は小野尼君
のむすめの事をいへり　祕手習君誰にてもあれわ

か子のことくに思ふとなり　箋手習の心のうちは
しらねとも尼君はむかしのむすめによそへてみる
となり

ことなきいらへを　箋さしたる事なけれとゝなり

私草子地歟

しのひてといへと　祕泊瀬へ人々したひまゐるへし
となり

少將の尼左衞門　箋左衞門は尼にあらさるなりわら
はともに三人あるなり

たのもし人に思ふ人ひとり　手習の心詞たのもし人
は尼君なり

中將の御ふみあり　尼君のむこの中將なり　祕少將尼の詞な
くるしきまてもなかめさせ給かな
り　祕少將の尼左衞門なとかいふなり

いとあやしくこそはありしとはの給へる　碁の下手
にてありしよしなり　手習君の詞なり　祕まへの
詞にかゝるわさはし給なりつれ〳〵なるになとい
ふ昔もあやしかりける身にてさやうの事すへきほ
ともなかりにしかはいさゝかおかしき樣ならすと
もおもひ出にけるかなとありその心をうけたり

われはとおもひてせんせさせたてまつりたるに
花姫侍少將の尼と碁をうち給へり姫君に先せさせ
侍りしかまけにしかは手をなほしたるなり
いとこよなけれは　浮舟は少將の尼よりもことのほ
かにつよきなり
又てなほして　河手直し
尼うへとくかへらせ給はなん　箋碁のあひての云也
かの御碁そいとつよかりし　箋尼君の碁の事也
僧都の君　これは碁のよかりしなり
きせい大とこになりて　碁勢大德（肥前掾橘良利 法名寛蓮子）圍碁好
手也云々備前掾橘良利肥前國藤津郡大村人也出家
名寛蓮爲亭子院殿上法師亭子法皇山ふみし給ふ時
御ともしけるよし大和物語にのせ侍り碁の上手な
るによりて碁聖といへり延喜十三年五月三日碁聖
奉勅作碁式獻之云々抱朴子曰圍碁者世謂之碁聖故
嚴子卿馬綏明（浮イ）有碁聖之名也或書曰唐堯造碁而教其
子丹朱　一說曰不然碁出於戰國之時云々以上見河
海橘良利事也抄にみえたり花箋弄同
御五にはまけしかし　箋僧都の詞也御碁は尼君をさ
して云也

きせいか碁には　箋僧都をさしていふなり浮舟の碁
をほめていふなり
つゐに僧都なんふたつ　もと僧と尼とうち給ひて僧
都のふたつまけ給し事をいふなり
さた過たるあまひたひ　祕手習君の心なり
むつかしき事もしそめてける　箋碁をまたもうたん
といはん事を思ふなり
とき／＼はれ／＼しう　少將の尼の詞なるへし
玉にきすあらん　玷　河毛詩曰白珪之玷尙可磨也
玷（タマノキズ）　明月之珠不能無瑕　弄只玉のきすのやう
ならんとなり　箋河の說におよはすたゝ玉のきす
と心うへし
おもひいつる事おほくて　弄さま／＼の人を思ひ給
ふへし其心尤あはれなり
（手習君）こゝろには秋の夕をわかねともなかむる袖に露そみ
たるゝ　祕何事も分別せさる身なれともとなり　弄
卑下の心なり　秋の夕をも思ひわかぬ心なれとも
となりその事とさしてかなしき事はなけれとも袖
に露のみたるゝにて秋の夕をしるとなり
ひる文ありつる中將おはしたり　此事まへにはみえ

す
あなうたてこはなそと　手習の心なり
さもあまりにも　少將尼左衛門なとのいふなるへし
御心さしのほともあはれまさる　祕時節の感をおほしめせとなり弄箋
しみつかん事のやうに　祕物いふ事きゝたるはかり身のきすならしとなり
おはせぬよしをいへと　花女君一所とまり給へるよし使の人きゝたるなり　箋尼君と手習もはつせへ參り給ふといへともひる使のとひきゝて中將のよくしりたるなり
いとことおほくうらみて　箋中將のうらみてなり
中將 山ささの秋の夜ふかきあはれをもものおもふ人はおもひこそしれ　中將の歌なり　手習君物思ふ人なからあはれをしらすかほなるはいかゝとなり物思ふ人こそ思ひしるへき事をとなり落句おもしろき歌なり弄箋
御心もかよひぬへき　箋互に物思ひのある身そとなり
まきらはしきこゆへき　箋尼君おはせねは手習のかはりに返歌せん人なきをいへり
手習君 返 うきものと思ひもしらて過す身を物思ふ人と人はしりけり　祕思ひはもとよりあれともと卑下したり我身は何のわきまへもなきとなり弄　箋我身は木石の如くにして物のあはれもしらぬを人は物思ふと御らんするかとなり
いとあはれと　箋中將の心なり
いさゝか出給ふときこえうこかせ清とこの人々をわりなきまてうらみたまふ　此人々に手習君をきこえうこかせといひて中將のうらむるなり
おい人の御かたに入給ひにけり　花大尼君のかたへはひかくれたるなり　箋少將尼の返歌をいひつたふる間にはひかくれたるなり
かゝる所になかめ給ふらん　中將の詞也
あまり思ひしらぬ人よりもけに　なさけ〳〵しからんと思ふ人の大かたの人より心こはきを中將のいふ詞なり
こまかなる事はいかてかは　箋此人々の用意あるなり委細にはかたらぬなり
たゞしりきこえ給ふへき人の　花これはあま君のし

り給ふ人のうと〳〵しきさまなりしを初瀬にまう
て給ふみちにて宇治院にてたつねあひ給ふへきと
中將にかたるなり
うつぶしふしていもねられす　箋手習のさまなり
よひまとひは　大尼君なり
いひきしつゝ　箋老人とものさまなり
ひとつはしあやふがりて　河獨梁ヒトツハシ　此事
末勘　花此事因縁いまた勘得す猶可尋　祕本緣な
しとなり師說心はたゝ身をなけんとせし人のゆく
道に一橋のあやうさをみて道よりかへりたるとい
ふ事なり本說たしかならされと心かなへり可用之
箋弄同　此義何の書にみえたることはなし但此心
尤かなへり手習君もすてに身をなけんとて出し人
の不意に命ありて又老尼にやくはれんとおちたる
心にたとへたり此外は心えかたし
こもきともにい（ゐイ）ておはしつれと　花上にみえたり
姫君のもとにゐたるわらはの名なり弄　祕童の名
なり手習君のともにつれて大尼君の方へ行つれと
此中將にめてゝ又中將のおはする所へ行たるなり
箋

なさけなくうもれても　箋手習のつれなきを中將の
かへりし跡にて人々のいふなり
みなひとゝころに　祕少將の尼左衞門なとなり
しはふきにおほゝれて　河咳溺　大尼君のさまなり
いたちとかいふなる物　河鼬　祕まかけをさしたる
なり　箋いたちのまかけといふ事也河
おにのとりもてきけん　箋こ玉にとられたる事なり
其時は何事もしらさりしなり
むつかしともおそろしとも　箋むつかしとは中將の
事なりおそろしとは此大尼公なとのさまを云なり
しなましかはこれよりもおそろしけなる　花冥途に
て鬼なとにせめられん事なり　箋我と命をすつる
ものは罪ふかしといへは身をなけたらは必惡道へ
おちんと手習の思ふなり
おやときこえけん人の　祕これよりは手習君の一生
をいへり八宮をもみさる事なり
たまさかにたつねより　祕中君の事なり箋
さるかたに思ひさため　祕薰の事なり箋
宮をすこしもあはれと　祕匂宮なり　箋匂宮に身を
もてそこなはれたるとの後悔なり

こしまの色をためしに　祕橘のこ島は色もかはらし
をさよみ給ひし事なり　花匂宮歌「年ふともかは
らん物かたち花の小島かさきにちきる心は　箋こ
ゝにて手習君の思ひとる心あり
はしめよりうすきなからも　花これ薫大將の事なり
弄薫の實なるは匂の好色過たるには終にはまさる
心なり　祕薫なりをり〳〵に思ひ出るなり　箋帚
木のしなさためにも此心みえたり人の心もちゐを
をしへたり弄
このをかのをり　薫をはつれ〳〵實々しく思ひ出
ると也
きゝつけられたてまつらんはつかしさ　箋薫にしら
れんことはたれよりもはつかしとなり
後に小君して文をつかはしゝ時返事せぬは理そと
なり
この世にはありし御さまを　箋薫の事なり
猶わろの心や　箋手習の心なり心とわか心を制する
なり
心ひとつにかへさふ　河心の中に案しかへすなり
復也覆字也

からうして鳥のなくをきゝていとうれし母の御こゑ
をましてきゝたらんは　行基歌「山鳥のほろ〳〵と
なく聲きけは父かとそ思ふ母かとそ思ふ　今案夜
のあくるかうれしきをいふなり　箋花鳥に引歌あ
り行基歌近代不用之但此歌をひきたるかよきなり
是も夜のあくるかうれしきを父母にたとへたるな
りこれは人のつねの父母の事にいへり奇妙々々引
歌に及へからす鳥の音を聞て母を思ひ出たる尤あ
はれなり佛法をもきかすは長夜の闇にまよふへし
となり　私猶箋の義可然なり
ともにてわたるへき人も　こもきをいふなり　手習
につれてかへるへきこもきもあなたに居たるなり
かやうの人は家のうちをも一人はありくへからす
おまへにとく　箋手習なり粥をすゝむるなり
まかなひもいと心つきなく　箋陪膳なとの人のつき
つきしからぬなり
いとこちなし　箋無骨なるなり
僧都けふおりさせ給ふへし　小野へおはせんとなり
なとにはかには　祕こゝなる人の使に問ふなり
一品の宮の御物のけ　箋女一宮なり

このおとゝの四位少將　箋夕霧の息なり
きさいの宮の御ふみ　箋明石の中宮なり
はなやかにいひなす　祕僧都の面目なりといへり箋
はつかしくともあひて尼になし給てよと　祕手習君の心なり箋
さかしら人すくなくて　祕尼君長谷寺への留守なれはなり箋
心ちのいとあしくのみ　祕手習君此大尼君に申給ふなり
いむことうけ侍らん　箋俗なからも戒をうくる事あり
おやにいま一たひかうなから　箋かはらぬすかたを母にみせはやとなり手習の心なり
ほけ〳〵しくうちうなつく　祕大尼君領狀あるなり箋
かゝれてしもと　かしらおろしける日也　河「たらちねはかゝれとてしもうは玉のわか黒かみをなてすや有けん僧正遍照
祕箋引歌同し　私おやにいま一たひといふにかゝれり

まろなるかしらつき　祕圓項とは法師の事なり花箋
はゝの御かたに　祕僧都なり　箋母は大あま君なり
ひんかしの御かたは　祕尼君を東の御かたといふなるへし箋　弄むすめのあまの事
このおはせし人　祕手習君なり　僧都の詞なり
しかこゝにとまりて　大尼君の詞也
たちてこなたにいまして　祕僧都なり箋
こゝにやおはします　僧都の詞也
ゐさりよりて　手習君のさまなり
ふいにてみたてまつりそめしも　祕僧都の詞也　箋不意になり思ひかけぬなり
そのことゝなくて御ふみ　箋法師なとのさしたる用もなくて女(母イ)のもとへ文かよはしは似あはぬよしなり
世をそむき給へる人の　尼君たちの中に手習のおはしにくからん事をいへり
世中に侍らしと　祕手習君の返事なり　箋身をなけんとせし事なり
よろつに物をさせ給ける　尼君のねんころにし給ふ事をいへり

れいの人にてなからふへくも侍らぬ　女のかたちにてはあらしと思ふなり
またいと行さきとほけなる　祕僧都の詞也箋思ひ立て心をおこし給ふほとはつよくおほせと　弄箒木巻にもいへり　箋行さき遠き若き人の後悔の心あらはかへりて罪ふかゝるへしとなり
いとたい〳〵しき物になん　箋女の機はよく〳〵末のとほらぬ心なり退々しきにて可然なり
をさなく侍りしより　祕手習君の返事也　箋やとり木の巻にや母の手習を尼にやなさましなといひし事ありしなり
なくなるへきほとのやう〳〵ちかく　手習君の殘りすくなく心ほそきよしなり
あやしくかゝるかたち　祕僧都の心中なり
物のけもさこそいふなりしか　祕以前祈りし時の事なり弄　箋これはなくならはやとのみねかひ給ひしとは前にいへる事なり
あしき物のみつけそめたる　箋靈の事なり
三ほうのいとかしこく　箋物のけのかくおもはするにても又心よりおこりての給ともあしき事にはあらす出家の心さしをは三寶のほめ給ふ事なれは法師の身にてとかく申かへすへき事ならすと僧都の詞なり
御いむことはいとやすく　祕こゝより僧都の詞なり私とまれかくまれと云より僧都の詞とみゆ
きうなる事にて　祕公請にて急なる事なれはとなり　箋一品宮の御物のけ故なり
まかてんにつかうまつらん　歸路の時出家させ申さんとなり
かならすいひさまたけてんさ　手習君の心中なり七日過はかの尼君還向あるへしとなり尼君はつせより下向ならは必出家をさまたけんとおもひて手習君のいそくなり
みたりこゝちのあしかりしほとに　祕是よりはやうにてはといふまて心のうち也心ちつよくわつらふゆゑにてしたる分にて有へきかと心かまへをしたるなり
いとくるしく侍れは　祕是より手習の事（詞イ）なり
ひしり心にいと〳〵ほしく　僧都の心なり
夜やふけぬらん　祕おもしろきかきさまなり

うちやすみて內(ウチ)にはまいらん　箋休息して參內せん
となり
いとうれしく成ぬ　手習君の心也
はさみとりてくしのはこのふた
いつら大とこたち　祕僧都のよひいたすなり
はしめみつけたりしふたりなから　箋宇治院にて手
習を見つけし二人なり
けにいみしかりし　祕宇治にてみつけし人なれはな
り箋
うつし人にては世におはせんも　弄女房のかたちに
て世にへ給はん人もよろしからしとなり
木丁のかたひらのほころひより　箋髮をも木丁こし
にはさむと見ゆ
はさみをもてやすらひけり　箋はさみかぬるなり
少將の尼はせうとのあさり　祕僧都のつれ給ふ人を
あひしらへるなり　箋少將尼左衞門なとは兄弟し
る人なとをあひしらひて手習君の出家を知ぬ也
かゝる事なんと　箋ともきが少將尼に告けるなり
まとひてきてみるに　少將の尼なり
わか御うへのきぬ(ころもイ)けさなと　祕僧都の衣なり箋　弄
僧都の衣袈裟なり云々
おやの御かたおかみたてまつり給へと　父母のかた
を拜たる事あり
いつかたともしらぬ　祕妙なり　箋母のおはするか
たなりあはれなるさまなり
え忍ひあへ給はてなき給ひにける　箋手習君の様尤
あはれなり
あなあさましや　祕少將なとのいふなり
あふなき事(わさイ)は　奥なきなり遠慮なき心なり
うへかへりおはしては　箋尼きみなり
るてん三かい中　河流轉三界中恩愛不能斷棄恩入無
爲眞實報恩者　祕流轉三界中云々箋
たちはてゝし物を　花恩愛の道をいふなり　祕恩愛
不能斷といふをきゝて我身はおやなとをも思ひす
てゝし身と云なり　弄尤あはれなり　親にうけた
る身をいたつらに捨るは不孝なりこれをすてゝ無
爲にいるは又眞實の報恩そとなり親の行衞も親類
をもしらぬほとに恩愛はたちはてたる手習の心中
そとなり
ひたひは僧都そき給ふ　是戒師の儀式なり

かゝる御かたちやつし給うてくゐ給なゝと　箋僧都の出家の功能を説給へるなり箋　箋後悔なきやうにと出家の徳をほむるなり

こみにせさすへくもあらす　祕手習君の心なり　箋尼君たちなとの手習の出家の事をいひさまたけたるを留守の間にしたる事のうれしきとなり

これのみそいける佛の（ホユナシ）しるし有て　私佛の利生はこれのみ成就したるとなり　箋身をなけたらましかは出家の功徳はかなふましきなり身をなけ損したるかひは一日一夜の出家の功徳をもとけたるをうれしく思ふ手習の心なり

弄かねて佛をたのみしかはかひなかりし身を思ひ給ふてこれのみといへり

みな人々いてしつまりぬ　僧都なともはや出京しけるなるへし

心ほそき御すまひもしはしの事そ　皆人々の手習君にいふ詞なり

老おとろへたる人たに　人々のうへをさへといふなり

今はかきうと思ひはてられて　清　箋此て文字清濁両義なり　但清てよむへし云々

なほたゝ今は心やすく　祕手習の心なり

世にふへき物とは　現世の事の心にかゝらぬよしなり手習の心なり

つとめては猶さすかに人のゆるさぬ事　箋手習の心なり

おほされ（ライ）たるやうに　髪のすそのみたりかはしく（ソイ）なかれたるを云也

くらうしなしておはす　花おくふかくしなして人にみえぬ心なり箋　祕人々をはちたるなり　弄人をはちてくらくしておはするなり

ましてなつかしくことはるへき人さへ　箋心中に思ふ事をかくといはん人もなきとなり

手ならひをのみたけき事こ　箋手習と云事を書たる（手習君）三女なりたけき事とは至極の才（方イ）人となり

なき物に身をも人をも思ひつゝすてにし世をそさらにすてつる　祕手習君の一生なり（前にイ）身をも人をもなき物に思ひすてたるとなり　箋なき身をすてたる事なり　私身をも人をもとは手習のわか身をすつるから思ふへき人々をも思ひすてし心なるへし

かきりつるそかしと

又手習君かきりそこ思ひなりにし世中をかへす〳〵もそむきぬるかな　箋是も同し心そこ也　弄此兩首同心を讀給へり今はとかきりのあはれたかへ(たえイ)ぬをりなるへしされは詞にも同しすちの事をと書り尤哀也

おなしすちのことを　祕同心なる歌なり　箋詞のかはりたるはかりにて同心そとなり是は歌の等類の(末頭イ)分別になるへき事なり字の一字二字ちかひても心のかはりたるは等類とならす是は詞かはりても同心なり

かゝる事なといひてけり　祕いひやりたるなり　箋中將の方へ手習の尼になりたる事を云なり

思ひはなるゝなりけり　箋中將の心にいま思ひあはする也

たしかにみせよと　中將の少將の尼なとにかたらひしなるへし

たちかへり　箋やかて中將の使あるなり

中將きこえんかたなきは　祕文の詞なり

きし遠くこきはなるらんあま舟にのりおくれしといそかるゝ哉　祕此世の岸の心なり弄　私下句は中將も發心のいてきたるとにや

れいならすとりてみ給ふ　弄尼になり給へは中將の文をもはしめてみ給ふなり物のあはれなる折ふしとかや尼の身なれはくるしからて返事なともあるなり

返手習君こゝろこそうき世のきしをはなるれとゆくゑもしらぬあまのうき木を　うき木は舟なり世をすてはてたるを卑下して世をはすてたれとも猶さためなしとなり　弄うき木は舟なり　心はかりは岸遠くはなるれとも身は波にたゝよふ物をといへ(へる歟)りをとまりの歌は如此いふなと云々

てならひにし給へるを　箋手習とかける四つめなり

かきうつしてたにこそ　箋手習君の詞也

かきそこなひ　箋少將尼なとのいふなり

めつらしきにもいふかたなく　祕中將の心なり

物まうての人　箋尼君なりはつせより下向なり

かゝる身にてはすゝめきこえんこそ　祕尼君の詞なり　出家をこそすゝめん事なれともわかき身をいかゝとなり

けふあすともしりかたきに　尼君の行末みしかき事

を云なり
ふしまろひつゝ　尼君のなけくさまなり
まことのおやのやかてかくもなき物と　祕尤あはれなり　箋手習の尼になりたるを尼のなけくにつけて手習の行衞なくなりし時實母のなけきつらんさまをまつ思ひいてゝかなしきこなり手習の心中なり
いと物はかなくそ　尼君の詞なり
こうちきけさなと　河小袖　袈裟
ある人々も　此小野にある人々なり
かのてしのいひしもしるく　箋僧都なくては法驗あらしと弟子とものいひしことくといふなり
いよ／＼いとたうとき物に　祕案の內に僧都の驗をあらはし給へり
みすほうのへさせ　箋御修法を又七日ものへ行はせ給ふなり
よゐにさふらはせ給ふ　河夜居也　二間夜居なり
私一品宮の夜居にさふらふなり
さふらひこうしたる　困なり日比にくたひれたるなり

おなし御帳におはしまして　祕中宮と一品宮となり箋　弄中宮の女一宮一品宮とおなし帳におはしますなり　又云僧都めして同し座敷の御帳なるへし
むかしよりたのませ給ふ中にも　祕中宮の御詞なり
世中に久しく侍るましき　祕僧都の詞なり箋
ことしらいねん　箋今年來年なり僧都に似合たる詞なり
御物のけのしふねき事　箋明石中宮の御詞なり
いとあやしくけうの事　河希有事祕
かのみつけたりし事　祕僧都の浮舟をみつけたりし時の事をかたり給へり箋　弄手習君見ゝイつけし事を此卷のはしめにかきしかはこゝにかくす妙なり・
おところかさせ給ふ　中宮の寢入たる人ともをおこし給へるなり
大將のかたらひ給ふ宰相の君　弄うちとけてねさりしなるへし薫の思ひ人と前にみえたり
おちさせ給へる御けしき　中宮の御けしきをいかゝと僧都の思ひてくはしくも申さぬとなり
その女人（ニヨニン）　祕女人也箋
をのに侍つるあまとも　僧都の母や妹を云なり

出家（シツケ）の心さしふかきよし　手習君の尼になりし事也
なにかしかいもうと故衛門督か女　僧都の妹の尼の事を申なり系圖になし
うせにしをんなご　中將のもとの室尼君の女なり
かくなりにたれは　手習君尼に成たる事なり
この宰相君そ思ふ　箋ちと思ひ合する所のあるやうにて此宰相君のよく〳〵とへるなりかくて薫のきゝつたへ給へるなり
しらすともやかたらひ侍らん　祕僧都の詞なり宰相か詞にいまはしられ（せイ）ぬらんといひしにさもや有らんとこたへ給ふなり弄
さるさまにしたる　祕きはめて田舎人の中にもよき人あるとなり
りうの中よりほとけむまれ給はすはこそ　河龍女成佛の事なり花　箋龍女成佛の事なり俗性にも何にもよらぬといふなり女宮の御前なれは殊更に女人成佛の事を云又手習君も女人なれはなり
つみかろきさまの人　祕忍辱の端正なる人に生るゝとなり　箋貴人に生れてもかたちうるはしからぬは戒行不具の所あるへし賤しき人もかたちよきは又その戒行あるなるへしとなり
その比かのわたりに　祕浮舟の事なるへしと中宮の思ひより給へるなり箋
このおまへなる人も　花宰相君をいふなり弄
あね君のつたへに　祕二條院よりのつたへなり　大君も宇治にてうせ給へはさやうにてもあるへしと也　弄中君邊より聞しとなり小宰相か姉なり　箋あね君は浮舟君のあね中君をいふなり　私此三義一決せす案之祕の義可然なり八宮の孫の物はかなくて大君のうせし事を其類にて浮舟もはかなくうせしと聞たるとなりしからは御前の人とは必小宰相にかきるへからさるなり又あね君は中君をさして其邊よりのつてにて聞たるといはゝもし小宰相ゆかりあるなり又は小宰相のあね君二條院なとにさふらふたよりあるなり如何猶可決之
よくもあらぬかたきたちたる人もあるやうに　花かたきのやうなる人なり　祕自然かたきかましき事にてやと僧都もかくし給ふなり　箋浮舟のことの外思ふゆゑにかたきたちたる人やあると僧都の思ひてよくもあらはさぬとなり　弄まことに怨敵に

はあるへからすよからす思ふ人なとの事なるへし
宮はそれにもこそあれ　箋明石中宮なり　弄中宮の
御心なり浮舟かとおほしよれるなり
この人にもの給はすれと　祕小宰相なり箋
はつかしけなる人に　薫のさまなり明石中宮の御心
なり小宰相には仰られても直にはえの給はぬさな
り
ひめ君をこたり　箋女一宮の御もの〻け本復し給ふ
なり
かしこにかり給へれは　箋小野へ僧都のより給へる
なり
いみしくうらみて　尼君の僧都をかこつなり
の給ひもあはせす　尼君のかへり給はんをまちて談
合あるへき事そとなり
いまはた〻御おこなひを　手習へ僧都のいふ詞なり
はかなき物におほしとりたるも　祕すてに宇治にて
なき人と思ひし御身なれはなき物に思ひなし給ふ
もことわりとなり
いとはつかしくなんおほえける　弄手習君の世のこ
とわりを思ひとり給へりといふもはつかしく思ひ
給ふ心尤やさし　私物のけにとられなとしたるあ
りさまをうしと思ひとり給へるといふも浮舟の心
にははつかしきといふなり
御ほうぶくあたらしくし給へとて　箋是はた〻墨染
衣の事なり　僧都の詞手習君の出家の具の事なり
あやうす物きぬなと　祕僧都御布施にとり給へる物
なるへし　箋女一宮一品宮よりの御布施物なり
なにかしかはへらんかきりはつかうまつりてん　僧
都の手習君を見つかんとなり
世間の榮花にねかひまつはる〻　箋世上の榮花のは
かなきさまをいひしらするなり
このあらんいのちは葉のうすきかことしと　河陵園
妾云々　顔色如レ花命如二葉薄一將奈何　白氏文集第四　陵園妾
顔色如花命如葉薄とて君恩の薄き事にいへるを無
常のかたにとりなしていへる尤妙なり陵園妾にい
へるは命は葉のうすきかことしとは君思のうすき
事をいへりこ〻には命のあたなるによそへたるに
やとりかへていへる事なり　私凡陵園妾といへる
はもろこしには皇帝崩御の時その陵のかたはらに
宮つかへせし宮女をしてまもらしむる事をいふな

り猶以白氏文集可勘之
松門暁にいたりて月に徘徊す　松門暁到月徘徊 白氏文集
第四 陵園妾の陵をまもりてあるに此手習君のなり
のよく似たるとなり　箋松門は松の木のあるあた
りの門なるへし　弄徘徊すとは月のめくる心なり
陵園は宮女なりしか君恩にもあつからす後に陵園
の女となりてつかへたる人なり手習君の小野にす
み給ふに似たり　此の心は手習のかたちわかくし
てかやうの尼の中にゐ給ふは陵園妾に似たるとな
り
思ふやうにもいひきかせ　手習君の心なり心にかな
ひて僧都の詞を思ふなり
けふはひねもすにふく風　栢城盡日風蕭瑟 白氏文集 私
みなつきたる句なり
山ふしはかゝる日こそ　山臥(伏イ)の身ははけしき山風を(そイ)
も何とも思ふましきをけふはたへかたしとなりこ
れも栢城終日風蕭瑟の心にて此段悉皆陵園妾の心
にてかけり弄箋　弄栢城は栢樹のあるあたりなる
へし　弄出家なとすゝろには涙おとさぬ心なり
われも今は山ふしそかし　祕手習の心なりつゝとい

へる詞にて僧都ははやく山へのほり給とみるへし
ことわりにとまらぬ涙　箋僧都のゝ給へることしと
いふなり
はしのかたに立いてゝみれは　祕はしのもとにはあ
りて　階也と云々　私只端の方也　弄僧都ははや
かへりぬと見ゆ
はるかなるのきはよりかりきぬすかた色々に　夢浮
橋巻に谷の軒はとあり其意同なり
こなたのみちには　小野は東坂本横川への道なり
くろたにとかいふかた　河黒谷也　叡山にあり　箋
叡山に五ヶの別所とてあり黒谷もその一所也　私
是は山門より隠遁の所なり
かひなき事もいはんとて　手習君出家の事なり
もみちのいとおもしろく　箋紅葉なり
心地よけならん人を　祕ほこりかなる人ありては山
もあるまし此手習君のやうなる人ならてはとなり
いとまありてつれ／＼なる　祕中將の詞なり箋
立かへり旅ねもしつへき　箋紅葉をかことなり　私
昔聟にて有し時のやうに旅ねもしつへきといふ心
を立かへりと云なり　箋此義に同し

尼君
木枯の吹にし山のふもとにはたちかくるへき陰たに
そなき　聞手習もさまをかへたれは心はさめたまふ（ひイ）
そこなり　箋手習の出家の事なり　私木枯の吹に
しは尼君の實の女のうせにし事立かくるへき陰た
になしとは手習の出家の事をいへるなり如何
返中將
まつ人もあらしと思ふ山さとは木末をみつゝ猶そ過
うき　箋故鄕にまつ人のなき故かへりうきとなり
いふかひなき人の　箋手習の事なり
それをたにちきりしまるしに　箋少將の尼のぬ（さるへイ）たか
らんといひし事なり
うすにひ色のあや　箋うす墨色なり　私手習の出た
ちなり
すみたる色をきて　箋くすみたる色の心なり
かみはいつへの扇を　河冬着に有五重三重と云々
檜の三重かさねなとありしたくひなり　花さけ尼
の髮のふさ〳〵としたる扇をひろけたるやうなり
祕髮のそかれてすそのひろこりたるをいふなり
弄みしかき髮に似せ（をりめイ）たり　箋檜扇をうすやうにて
つゝむをめくりの五重あるなり
紐に心をいれて　箋手習のさまなり

うちみるこゝに　少將尼の心なり
心かけ給はん男　中將の心を察するなり
かけかねのもとにあきたるあな　箋引手の穴なり
いとかく思はすにこそ　箋中將の手習をよくみてお
とろきたるなり
わかしたらんあやまちのやうに　箋手習を中將のさ
りはつしたる事をみつからのあやまちのやうに後
悔するなり
けはひもきこえぬへければ　祕中將の事なり　中將
の穴よりのそきてつゝみもあへぬさまのきこえぬ
へし（やうイ）となりさて立のきたるなり
たつねぬ人ありけんや　これほとかたちよき人をう
しなひたる人のたつねぬはいかゝと思ふなり
その人かの人のむすめ　これほとのかたちしたる人
のうせたらは沙汰のあるへき事なるをと色々に思
ふ中將の心なり
かたらひとりてん　箋尼なりともむつひまほしくて
中將のかたらひとらんと思ふなり
よのつねのさまにはおほしはゝかる事も　祕中將の
詞なり　箋風流かたのむつひは手習のはゝかり給

ふ事も有へし尼になり給へは大かたのむつひはかりはくるしからぬ事なれはさやうにをしへなし給へと尼君に中將のいふ詞なり
きしかたのわすれかたく　祕故姫君のわすれかたみにとなり
又いまひとつ　祕兄弟のやうにもむつひたきとなり
いと行末心ほそく　祕尼君の詞手習の事を云也弄手習のわかくおはするに尼君の末のみしかゝらん事をかなしく思ふなり
あはれに思ふ給へらるへきさてなき給に　尼きみのさまなり
この尼きみもはなれぬ人なるへし　花中將の思ふ心なり此姫君も尼君とよそならぬ人なるへしとみえたる事を中將のあやしく思ふなり箋　祕中將の心に思ふなり
ゆく末の御うしろみは　祕中將の詞なり
いのちもしりかたく　中將の命の事なり
たつねきこえ給ふへき人は　手習をたつぬへき人はなきかと中將の疑ふなり
はゝかるへき事には侍らねと　大かたのむつひはかりといひし事なれは尋ぬる人ありとてもくるしからぬ事なれとゝいふなり
人にしらるへきさまにて世にへ給はゝ　祕尼の詞なり　尋常の女のかたちなとにておはせはたつぬる人もあるへしかやうに出家し給うへはさやうにもあらし又くるしからぬ事といふ心なり
いまはかゝるかたに　[illegible]後世の事のみを思へるさまなり
こなたにもせうそこし給へり　箋中將の手習へも消そこあるなり
中將 おほかの世をそむきける君なれといとふによせて身こそつらけれ　祕中將の歌なりもしは我身をいとひ給ふゆゑにかくそむき給ふかと思へはわか身もうらめしきとなり箋　私惣別浮世をいとひ給ふ御心とは聞たれとも中將をいとひ給ふにやと思へは我身さへつらきとなり同心なれと註之
ねんころにふかくきこえ給ふことなと　此せうそこの使の中將の懇なるさまをいふなり行するをうしろみんなとまていへる事なるへし
はらからとおほしなせ　猶中將の云る詞を使の云也

心ふかゝらん御物かたりなと　手習の大かたにの給へる返答なり心なき身といふなり
いとふにつけたるいらへは　中將の歌の下句の事也むつかしくてとりあはぬなり
思ひよらすあさましき　祕手習君の心なり　私匂宮なとの不意に忍ひより給ひし事なり
くちきなとのやうにて　河形固可レ使レ如ニ槁木一　古かたちこそ深山かくれの朽木なれ　祕死灰槁木のことくにて有へしとなり箋　箋死灰は火の消たる灰なり槁木は朽たる木なり
むすほゝれ物をのみ覺したりしも　出家せさりし程はいまた身をあやうく手習の思ひしか尼になりては心も定りて心もはれ〳〵しきとなり
雪ふかくふりつみ　箋小野は伊勢物語にも雪ふかきよしをかきし所なりひえの山のふもとなれは雪いとふかしなとあり
けに思ひやるかたなかりける　私古「白雪のふりてつもれる山里は住人さへや思ひきゆらん　此歌引ても可然哉
年もかへりぬ　祕薫廿七歲なり箋

水の音せぬさへ心ほそく　箋宇治はこほらぬ川音なりこゝはこほりて水の音のせぬもさひしきとなり
私小野の山川なとは音もさひしき物なり冬こほりて音のせぬも又さひしきといへるなり如何
君にそまとふの給ひし　祕匂の去年の春の事なり
箋匂の歌「嶺の雪汀の氷ふみ分て君にそまとふ道はまとはすこの歌の事河同
手習君
かきくらす野山の雪をなかめてもふりにしことそけふもかなしき　祕落句尤おもしろし箋　小野の體なり　箋けふもかなしき〳〵といへる一日の事にあらすけふもかなしき〳〵といふ心あり「百敷の大宮人はいとまあれや櫻かさしてけふもくらしつ此けふも此心なり
れいのなくさめのてならひ　手習五つめなり
われ世になくてとしへたゝりぬるを　箋これは浮舟の一周忌の佛事を薫のし給る事を人の物かたりする事あるをかゝんとての序なり浮舟は去年三月の事なれはかくいへり
思ひいつる人もあらんかしなと思ひ出る時もおほかり　弄匂薫母なとの事なるへし

わか菜をおろそかなるこに入れて　箋疎なる籠なり
そさうなる心なり　河寳方朝臣録の籠に若菜をい
れて圓融院にたてまつるとあり
尼君 山里の雪間のわかなつみはやし猶おひさきのたのま
るゝかな　祕姫君を祝したるなり
あなたへたてまつれ　箋尼君の手習君へわか菜を送
るなり
返手習君 雪ふかき野へのわかなも今よりは君かためにそとし
もつむへき　祕尼君のためはかりにとなり　箋若菜
つむ事は臣は君を祝し子は親を祝して災をのそか
んとてつむ事なり此手習君は尼君の外には祝せん
人なしとなり
さそおほすらんと　手習の心中さそ有つらんと尼君
の察して眞實あはれに思ふなり
みるかひあるへき　手習の出家し給はすはと思ふ也
春や昔のとこと花よりも　河古今「つきやあらぬ春
や昔の春ならぬ我身ひとつはもとの身にして　箋
引歌河に同し
あかさりし匂の　河拾「あかさりし君か匂の戀しさ
に梅の花をそけさはをりつる具平親王　祕匂にて
も薫にてもなり　弄匂宮に手習の心をしめしゆゑ
にやとなり　箋こと花よりも梅の香のむつましき
は薫なとに思ひしみたるゆゑかと手習のみつから
思ひしるとなり
こやにあかたてまつらせ給ふ　祕後夜也　後夜のお
こなひに閼伽奉るなり手習なり　箋閼伽たてまつ
る花瓶六あり六道を表するなり時節の花を瓶にく
はへてたてまつるをは時花といふなり
手習君 そてふれし人こそみえね花の香のそれかとまかふ春
の明ほの　薫なるへし又匂にても有へし
おほ尼君のうまこの紀伊守　箋系圖にみえぬ人なり
何事かこそおとゝし　祕一任の間にとなり箋　去年
去々年なり
ほけ〳〵しきけしき　祕大尼君ほけてかひなしと也
こなたに來て　祕尼君なり　弄大尼君ほけてかひな
けれは女の尼の方へ來るなり
こよなうこそひかみ給けれ　紀伊守か大尼君の事を
云詞なり
殘りなき御さまを　大尼の餘命いくはくもあらぬを
任國に程へたゝりてつねに見たてまつらぬ事を云

也
おやたち物し給はて　紀伊守父母なきなるへし
一こころをこそ御かはりに　箋大尼公をいふなり
ひたちの北のかたは　花常陸の北方は浮舟の君の母なりそれは紀伊守か妹なるへし　秘花鳥説浮舟の母とありいかゝこれは當時の常陸守なるへし箋
弄手習君のまゝ父の常陸にはあらす又常陸にてありける人の北方なるへし紀伊守か妹なり
さし月にそへても　秘尼君の詞なり音信もなきとなり
えまちつけ給ましき　秘大尼君ことの外老耄あるとなり　弄常陸の北方を大尼公の待つけかたしとなり箋　私此常陸守國にあるとみえたり
わかおやの名と　秘手習の心なり　常陸の北方といふに耳とまるなり
又いふやうまかりのほりて日ころに　國よりのほりては日ころへぬれと大やけ事しけくてこゝへ參る事のおそなはりたる事を紀伊守か云なり
まつ一とこころは一とせうせ給ひにき　是は宇治の大君なり

その御おとうと　手習君なり
ことしの春又うせ給にけれは　浮舟の事なり
その御はてのわさ　周忌の事なるへし
なにかしもかの女のさうそく　紀伊守みつから云詞なり女の裝束は法事の時布施物の料なり
一くたりてうし　一領調するなり受領に仰付る事なり此紀伊守も薫の家人なるへし
せさせ給てんや　尼君へあつか（らイ）へつくるなり
おらすへき物　秘織へき物なり
いかてかあはれならさらん　秘手習の心なり
おくにむかひて　箋手習のさまなり
ひしりのみこの御むすめはふたりと　秘八宮なり
兵部卿宮の北のかたは　中君の事也
この大將殿の御のちのはおとりはらなるへし　箋浮舟の事別腹と云也
いみしくかなしひ　薫の事をいふなり
はしめのはたいみしかりき　弄宇治のあね君の事を云箋
ほと／＼つけ（すイ）もし給つへ（ふイ）かりき　秘出家もし給ふへかりしと也　弄薫の事なりあね君の事をなけき給

し事なり箋

かのわたりのしたしき人　秘手習の心なり　箋薫へ紀伊守かしたしき人なるをむつかしくおそろしく思ふとなり

あやしくやうの物と　河同様の物といふ心也秘箋花やうの物といふ詞上の巻にもあまたありあやしくやうの物とはたゝあやしきさまの物といふ心なり様の字をはさまともいふなり　私河の義よし宇治にての薫のさまをかたるとなり

かしこにてしもうせ給ける事　大君も浮舟も宇治にてうせ給事をやうの物といふなり

いみしくなき給ひき　秘薫の浮舟を戀ひしたひ給ふとなり

うへにのほり給てはしらにかきつけ給ひし　弄川の邊より殿の上にのほり給ふなり

薫見し人は影もとまらぬ水のうへに落そふ涙いとゝせきあへす　箋浮舟の身をなけたるに治定してよみ給へり

たゝ氣しきにはいとあはれなる　箋薫のさまを云也

女はいみしくめてまつりぬへく　是は惣前世間の女をいふ

わかく侍し時よりいうにをはすと　秘我身はとりわき薫をたのみたてまつると也　弄紀伊守か詞也

世中の一の所も　秘攝政關白をいへり弄箋　河左大臣一上を一の所と云ふ也或一の人ともいふ也又執柄家一座宣故稱一人又謂一所

この殿をたのみきこえ　箋薫の事也

ことにふかき心もなけなる　秘手習の心なり　箋私ふかき心もなけなるとは紀伊守を手習の思ふ心也

光君ときこえけん故院の御ありさま　光源氏故六條院也

この御ぞうぞ　箋光源氏には及はすとも此御子孫ならては人のめてたてまつるもなしと也

右（左イ）の大いとのとの給へは　花右大臣と此殿といつれそといふ詞也玉かつらの巻に此君とゝある同詞つかひ也　秘薫と夕霧とはいつれそと云詞也弄箋

それはかたちもいとうるはしうきよらにしうとくにて　河宿德也　箋夕霧の事をいふ宿德は行跡正しく才能たらひたる人をいふ

をしへたらんやうに　手習の心にある事ををしへて

いはするやうなると也手習の聞ての心中也
あはれにもおかしくも　手習の心也
身の上もこの世のことゝもおほえす　我身の上の事を餘所事にかたるを聞て手習の心に此世の事とも思はれぬ也
忘れ給はぬにこそはと　祕手習の心なり箋　箋薫の忘れ給はぬを思ふ也
いとゝはゝ君の御心のうち　薫の浮舟を忘れかたくし給ふをみて母の思ひの彌々まさらんと思ふ也
いふかひなきさまをみえきこえたてまつらんは　箋出家のさまを薫へはしられじと也
かの人のいひつけし事なとそめいそく　紀伊守のいひつけし浮舟の周忌の法事の布施物のきぬをいそく也
うつくしくひねらせ給へは　花きぬひとへ（のイ）を見えをひねる事也
うたておほゆれは　手習のとふらひの料のきぬなれは也
尼君いそく事をうちすてゝ　手習の心ちあしといへる尼君はきぬのいそきにも忘れて思ひあつかふ也

くれなゐに櫻のおり物　布施の料のきぬの色なるへし
御まへにはかゝるをこそ　手習をいふ也
あま衣かはれる身にや有し世のかたみにそでをかけてしのはん　祕かゝる裝束をみて昔を思ひたる也下の心は此いとなみも我身の周忌佛事の料なれは昔を思ひいてゝいとあはれなると也　箋手習君の歌此心は尼に成てもかゝるさうそくをみて昔や忍はんと也下の心以下祕に同し
物のかくれなき世なりけれは　我身のありさまをもりきゝなとしてあまり物かへしなりと思ふへきにやとの手習の心也
過にしかたの事はたえて忘れ侍にしを　こゝに（すてにイ）ていさゝかほのめかしたる也
かやうなる事おほしいそくにつけてこそ　只きぬなとする事につけてと云義あり案之手習のまゝ父（は又イ）に受領なれはかやうの料のきぬなと調をすへき也仍かやうの事につきて御思ひ出たるさまゝ父のあたりの事をほのめかしたる詞なるへし
さりともおほし出る事は　祕尼君の詞也

よのつねの色あひ、尼君たちなれはよのつねの女のさうそくの色あひは手なれすと也
むかしの人あらましかは　祕我むすめを云り花箋
しかあつかひ聞え給はらん人（ひけんイ）　祕手習の母をいへり
めのまへになくなして　君公の女は眼前にてなくなりし人なり
猶いつこにあらん　弄母の子を思ふ心にてなき人をさへかく思ふ也　箋來世の生處をたにたつねたきと也
ゆく衞しらて思えきこえ　浮舟は行衞なくなり給へる人なれはいかに人々の思ひなけくらんと也
みしほとまてはひとりは物し給き　花浮舟の君の母の事也箋　祕手習の詞也箋
思ひいつるにつれて（けイ）　思ひ出るもうたてけれは申出ぬ也隔心にてはなしと也
大將はこのはてのわざなと　花浮舟君の一周忌のことふらひをし給ふ事也箋　祕三月の末なり
かうふりしたるは藏人になし　花元服したるをいふ也　弄元服の事也爵にはあらす　祕大略叙爵をかうふりといへる也されとこゝは元服の事也六位藏人とみえたり　私常陸介か子ともの事也
わかをつかさのぞうになし　河右近將監也薫大將故也　箋ぞうは將監也
わらはなるか中にきよけなる　箋夢浮橋の巻に薫の文もちて來りし童也
雨なとふりてしめやかなる夜　祕四月なり
きさいの宮へ參り給へり　薫の明石中宮へ參れる也
あやしき山さとに　薫の御物語也　宇治の事也
人のそしり侍しも　宇治なとへ細々おはするはかろかろしき事と也
たれも心のよるかたの事は　祕前の巻にも宇治なとにはとまり給事は本意ならす思給し也我心のひく事には誰もあやまるとなり
所のさかにや　花さかは悪の字也箋　祕大君浮舟のうせにしゆゑなり所詮宇治は道心をすゝむへき所なるとなり　弄所のさかにて宇治宮の心うき事共あるかとおもひ給ひしとなり
さいつころ物のたよりに　河近曾（サイツクロ）一昨日よりはさき也萬葉に　をとゝいのさいつころとあり　祕浮舟の周忌也弄

はかなき世のありさまとりかさね　箋大君の後浮舟の事を思ひての給ふ也
道心おこすへきつくりおきたりけるひしりのすみか　祕ひしりたちたる也　弄八宮の道心にすゝみ給ひしゆゑかと思ひ給ふなり
かのこさおほしいてゝ　祕僧都の申せし事也箋　私明石中宮の御心なり
そこはおそろしき物やすむらん　祕中宮の御詞也宇治の體なり
猶うちつゝきたるを覺しよるかと　大君浮舟の事打續きたる故はかりにかくの給ふかと薫の思ひ給ふ也箋弄　私中宮は木玉のとりたるを此浮舟人かと思ひよりての給ふを薫はしらねは只打つゝきうせたるにて覺しよりたるかと思ふよし也薫の心也
さも侍らん　薫の返事なり
うせ侍りにしさまもなんいとあやしく　浮舟の行衛なくなりしを思ふなり
猶かくしのふるすちを　祕中宮の用意ある御心なり
宮の物をのみ　箋匂宮の事を中宮の覺しいつるなり
くちいれにくき人のうへ　箋薫のかく忍ひ給ふにも

又匂宮の御事につけてもいひにくき事を中宮の覺してしひてはの給はぬと也
小宰相に忍ひて大將かの人の事を　箋薫のゝ給へるさまを明石中宮の宰相に忍ひやかに仰らるゝ也
それにもあらさらん物ゆゑに　もし別人のうへにてもありてはと覺してかたく仰出さぬと也
君そこと〳〵きゝあはせける　祕中宮の小宰相にの給ふなりこと〳〵くよく聞しとほりを薫に物語り申へしと也
かたはならん事はとりかくし　聞にくきやうなる事をはかくしていへとの給ふ也
のたまはす　箋中宮の小宰相にの給也
おまへにたにつゝませ給はん事　祕小宰相の詞也
箋中宮をさして申也
さま〳〵なる事により　弄匂薫とさま〳〵よからぬ事なるへし　祕中宮の御詞也
又まつはいとをしき事にあるやと　花此人をは匂宮もわりなく思ひ給し人なるを宮にはかくし給ひて（忍イ）大將にかたり給へはへたてたる樣なれは中宮はうち出かたく覺しめしたる心なり小宰相もやかてさ

心えておかしと思ひたるなり　秘匂宮の御事あれは也と推したる也花鳥說はいかゝ　弄匂宮の事思ひ給也　箋匂宮の事ある故にの給ぬると中宮の思はせての給ふを小宰相のやかて心得たる也
立よりて物かたりなとし給ついてに　秘薫の宰相のもとに立より給へる也箋
めつらかにあやしと　箋薫の心なり秘
宮の問せ給ひしこ　中宮の薫に問ひ給ひし事也弄箋
なさかの給はせはつましき　薫の心中に宮の行末まてかたり給はさりしをうらむる心あり
われも又はしめよりありしさまの事　又薫の思ひかへす心也我もありのまゝ申さゝりしかは中宮の御ことわりと思ふ心也
うつゝの人の中に　秘現在の人の事たに忍ひかたしましてなき跡の事はさま〳〵人もとりあつかふへしと也弄
この人にもさなん有しなと　小宰相にもそれならんと分明にいはぬ也
あやしと思ひし人の事に似てもありける哉　箋薫の遠慮し浮舟とはおとしつけぬ也
その人は猶あらんやと　薫の心に尋ねたくは思成へし
かの僧都の山より出し日　宰相の詞也浮舟出家の事也
所もかはらす　弄今かたるにも宇治の事なれは也箋浮舟のうせにし時分以下相當せる也薫の心に思ふ也
をりたちてたつねありかんも　秘薫の性殊勝也　弄上臈しき心也
かの宮も聞つけ給へらんに　秘匂宮也箋
思ひ入にけん道も　浮舟の出家をも匂はさまたけ給はんの也
さなの給ひそなときこえおき給けれはにや　秘匂宮明石中宮へ薫にはかくし給へと申されしかと也
箋匂のゝ給ひなして中宮の仰られさりしかと也
宮もかたらひ給ふにて　秘匂宮のかたらひ給けしきあらは我は一向にそらしらすにて有へしと也　弄薫の心なり　匂宮の猶手習の君にかゝつらひ給ははいみしく思ふともなき人と思ひなしてたゝやみなんと也

うつし人になりて末の世にはきなるいつみのほとり

河黄泉は冥途の名也　花うつし人はよのつねの人を云黄泉は日本紀に伊弉冊尊のよみつくにゝ入給ひつるを陽神のとふらひ給事みえたりそれを薫浮舟君の事に思ひよせ侍り我眞實の人に成てと也後世の縁を頼んて有なんと也前と一同に見るへし弄

箋今生にて心のかはりたる人なれは來生をとあきらんはましたると也　祕きなる泉は冥途なり其まゝうせたる人と思ふへしと也

猶の給はすやあらんと　箋中宮へ又啓したりとも此事有のまゝにはの給はしと思ひなからよき次(このイ)に薫の申給也

あさましくてうしなひ侍りぬと　薫の中宮へ浮舟の事を又申出る也

心とおとろ〳〵しくもてはなるゝ　祕浮舟の性(よしのイ)を申給也箋　思ひきりたるつよき所のあるましき性をいへり

人のかたり侍りしやうにては　花浮舟君心と身をなけんと思ひ侍らんことはよもと覺え侍り人のいふやうに物にけとられたる事はさもや侍りつらんと

薫の思ひ給ふ也

宮の御ことをいとはつかしけに　花匂宮の御事也弄

箋

かの事又さなんときゝつけ給はゝ　箋匂の此事を聞つけ給はゝ好色なるやうにおほさんほとにしらすかほにて過さんなとゝ匂の事をほのめかしたる也

僧都のかたりしに　中宮の御詞也

物おそろしかりし夜の　箋夜の事にて物おそろしくてよくもきかさりしとの給也

きこえんかたなかりける御心の　祕匂宮のすき〳〵しき事也弄

いとかろくうき物とのみ　箋好色ゆゑかろ〳〵しき名を匂のとり給へるは心うけれは何とてしらせ申さんそと也

心うくなんとの給はす　祕御おや心なり　弄中宮の匂宮の御事をかなしみ給御おや心也

いとおもき御心なれは　花大宮の御心のおも〳〵しきを薫の心に思ふ事也是より下はみな薫心をのへ侍る也　祕中宮の御事也口かろ〳〵なとおはしまさゝる也　箋中宮の御本性を薫の思ふ也

すむらん山さとはいつこにかあらん　箋薫の心也夢
浮橋の序也
月ことの八日にはかならすたふときわさ　毎月の八
日は六齋日の始也其うへ藥師の緣日なれは也
中堂(チウトウ)には時(トキ)々參り給けり　河根本中堂　延曆十七年
傳敎大師建立之本尊藥師如來者大師造立之其以後
梵天帝釋四天王忠仁公日光月光菩薩守治關白十二
神將御堂關白被造副之箋　つねに山へのほり給事
ありしかはそのついてにはとおほしけるなりさな
くてはわさとなとはおはしますましき御心也
横川におはさんと　僧都の坊へなり
かのせうとのわらはなる　祕常陸守か子也　箋浮舟
の同腹の弟子なるをいへり
その人々にはとみにしらせし　箋浮舟の母のかた也
祕母めのとなと也
ありさまにそしたかはん　箋樣體によらんと也
うちみん夢の心ちにもあはれをもくはへんとにや有
けん　祕まつうちみんにもあはれをそふへきたより
に此はらからを具して(のイ)行給へり有けんとよみきる
へし　弄浮舟の事をさま〴〵思ひ給心也先隱密す
へしとも思ひ給又此人の不思議の事ともは今尋ね
あひてうちみん時あはれをそへよとの契にやなと
案し給也又弟を具し給へる心にや　箋夢の字を書
たり心あるへしと也云々　私秘の義然へき也
さすかにその人とは見つけなから　祕自然おかしけ
なる人に具してありてはと也
かたちことなる人の中にて　箋尼君たちをいふ也
うき事をきゝつけたらん　箋秘の箋に同し
みちすからおほしみたれけるとや　箋薫の心中なり
中堂の道すから也

岷江入楚第五十五　夢浮橋

二十六歳　大將　花鳥には二十四歳の春より夏迄の事有と云々　私拜には薫二十七歳手習卷の末は春也此卷は夏の比とみゆ云々　祕には手習卷の末は二十七歳の五月過迄の事なるべし此卷は其末の夏なり

夏大將來橫川對面僧都物語事

大將問件女事給僧都委語所見及事

大將欲レ尋二小野一請二僧都一文事

常陸守子童爲二大將御供一僧都賜二文於此童一事

大將歸京又之日彼童令レ持レ文遣二小野一事（童は手習君の弟なり）

先是今朝自二僧都方一遣二消息於小野一事

童見參姫君奉二大將殿御文一事

姫君無二返事一童歸參事

夢浮橋　一名法師（ノリノシ）

河此物語の巻々の名桐壺より手習に至る迄は或詞の字を取て名付或歌の心を以て號せり然るに此巻を夢浮橋と題する事詞にも見えず歌にもなし古來の不審也凡夢の浮橋とつゞけたる事もなし是より始る歟夢のわたりの浮橋とある歌に付ていへる歟或說云手習君薫大將の文を見るまでもなくて返したるによりてふみ見ぬが故に浮橋といふ歟此巻に夢といふ事五ヶ所に有又（サイ）大將の歌におもはぬ山にふみ迷ふ哉とあるもまよふはたどる義也定かならぬ心によせて夢といへる歟云々此義淺薄也彼文を開き見て有しながらの御手にて紙の香などれいのよつかぬまでしみたりといへり大方此物語のおこる心ざしまたく色にふけり言をかざるにあらず只無常迅速の理をあかし盛者（生イ）必衰の趣をしらしめんが爲也今の題目を案ずるに先は夢と云は空しき心也有無の說法はいづれも夢に非ずといふ事なし涅槃經には生死無常猶如㆓昨夢㆒と說大圓覺經には始知衆生本來成佛生死涅槃猶如㆓昨夢㆒善男子如㆓昨夢㆒故當知生死及與涅槃無起無滅無來無去　文唯識論にも未得眞覺常處夢中故佛說解㆓生死長夜㆒と有内外の經書に此夢に付てさま〲義ありしるすにいとまあらず香山居士詞に言下忘言一時罪夢中說夢兩重虛と有も此心にや次に浮橋（ミト）といふは伊弉諾伊弉冊尊天の浮橋の上にして共の爲夫婦（マグハイシ）給ひて陰陽を定め洲國を生せし我が國の始也是皆男女のなからひよりおこれり彼漢家の風を移し俗を易る政も三百篇の中にも關雎麟趾の化より鵲巢騶虞の德に至る迄此夫婦の道を以て周公の風を述たり陰陽萬物を生ずる謂也詩序云關雎后妃德也風之始也所以風㆓化天下㆒而正㆓夫婦㆒焉故用㆓之鄉人㆒焉用㆓之邦國㆒焉といへりされば浮橋は生死のおこり煩惱の根元也夢とは世間出世の法は皆如㆓幻夢㆒也といふ心也無相の理也煩惱即菩提生死即涅槃の義此名にあらはれたり昨者已證の分すでにあきらかなる物歟次に諸經の說相皆序正流通の三段あり流通分に題名をあらはす常途の義也今此物語も終の巻を夢浮橋と號す別しては一巻の名惣じては一部の號なるべしたとへば光源氏物語といふがごとく或夢浮

橋物語第三十七法師ともいふべきか且は物語を光源氏と名付巻の數を此七帖に定むるも心城之三十七尊の光を思ひよそへたるにや　此巻の名師説如ㇾ此聊又以二愚案一加二潤色一了但再三案ㇾ之眞實の義は夢の一字の外に別の心なし浮橋は夢にひかれて出來たる詞也凡當流の義は諸事やすきを以て正説とする故也されば本歌の世中は夢の渡りの浮橋か打ちわたしつゝ物をこそ思へといへるも浮橋に別の義なし定家卿の春の夜の夢の浮橋とたえしての歌も同心也所詮作者の本意を推するに此物語は始にいふがごとく其趣莊子寓言に一同せり而彼莊周は胡蝶の夢に死生の變をあかせり是物化の謂也且有二大覺一而後知二其大夢一ともいへり漢家の寓言も百年の夢に化し和國の寓言も一部の夢に極る也華嚴經には知二一切佛一及與二我心一皆悉如ㇾ夢と説り古人云生死涅槃如二昨夢一天堂地獄逍遙自在　文莊子齊物論云方二其夢一也不ㇾ知二其夢一也夢之中又占二其夢一焉覺而後知二其夢一也且有二大覺一而後知二其大夢一也而愚者自以爲ㇾ覺（故竊ㇾ之焉イ）竊竊然知ㇾ之君乎牧乎固哉丘也與ㇾ汝皆夢也予謂二汝夢一亦夢也是其言也　其名爲二弔詭一萬世之後而一遇下大聖知二其解一者上是旦暮遇ㇾ之也昔者莊周夢爲二胡蝶一栩（栩イ）々然胡蝶也自二喩適ㇾ志與不ㇾ知ㇾ周也俄然覺則遽々然周也不ㇾ知周之夢爲二胡蝶一與胡蝶之夢爲周與二周與胡蝶一則心有ㇾ分矣此之謂二物化一　一名法の師　法の師を尋る道をしるべにておもはぬ山にふみ迷ふ哉　　私薫大將の歌なり以上河海分注之　此巻の名は歌にも詞にも見えざる事也一部の名目は四句に了簡してすでに釋り終りぬ浮橋は古歌の詞にて世中は夢のわたりの浮橋かとよめるをとりて夢浮橋と付たり其子細河海抄にいへる相違なく覺え侍り手習巻の終の詞にも打みん夢の心地にも哀をもくはへんとにや有けんと浮舟の事を薫の思ひ給ふ事にかき侍りとしはかをる二十四歳の春より夏迄の事見えたり　弄此巻薫二十七歳手習巻の末は春也此巻は夏の比とみゆ巻の名河海抄にくはしくみゆ夢の事經文に相叶歟金剛圓覺等云々抑此巻名の事凡夢と云心也浮橋に別の心なし世中はの歌より起れる歟又天浮橋の心もかよへり深意有べし此巻を號する事第一の義は手習君の一生の間さながら夢の如し或は隨與に成

りてくだるに具してゆき又は常陸に下り都にのぼりてもこなたかなたにうつろふ宇治にても物を思ひ身をなげし時より其の後小野に至る迄只夢のごとし扨薫の音信を聞て返事にも及ばずおぼつかなくて終にき夢の末もつゞかずして覺たるに似たり此義尤此巻名に相叶へり惣じては一部の物語の心も夢のごとし此號一部の名にあたれり又世間の萬物夢也經文書籍等に見えたりよく〳〵心をいたして見るべき事也夢の證文等略之覺悟せんにしたがひて說べき歟夢より悟べき事邯鄲驛夢の事天台には此經を處世如ニ大夢ニ云々莊周胡蝶事已上
弄花　祕薫廿七歳手習巻の末は五月比迄の事有へし此巻は其末の夏也　巻名事河海にくはしくみゆ夢の事經文等をひけり別しては一巻の名惣じては一部の名なるべしと云々　此巻にとりては手習君の一生さなから夢の如し或陸奥に下り常陸にわたり都にのぼりてもこなたかなたうつろひ宇治にても樣々の物思ひにて身をも失ひ小野に至る迄ことごとく夢の外にあらずといふ事なし又一部の名にてみれば桐壺の巻より源氏の君の一生の事幻巻にをさまり薫大將の一生は此巻にをさまれり盛者必衰の夢幻を古今にあらはして見せ侍る也夢浮橋とつゞきたる詞なきを題號におく事古來不審あり今案ずるに此物語は偏に莊子の筆法によれり然るに彼逍遙遊篇も逍遙とばかり有て遊の字はなし又次の齊物論も物とのみ云て齊の字はなき也いづれも心を以て號たる也此夢浮橋も夢といはん爲也夢ははるかに見ぬさかひにも行かへる道あり又橋は道もなき水の上にも道をなす心あるを以て名付侍るにや其心甚深なる者乎此巻はとりわき齊物論を以て書るにや齊物論は始に南郭子綦隱ル形如ニ橋木ニと云事よりしるして胡蝶の夢の事にて書とゞめたり此物語は手習巻の末にすべて朽木などのやうにて人に捨られてやみなんと書て此巻にて昔の事思ひ出れどさらに覺る事もなくあやしういかなりける夢にかとのみ心もえずなんと書侍る胡蝶の夢に周となれるかと書たる符合せるにや玄妙の事也以上祕
箋夢浮橋別名法師此事は桐壺巻に一名壺前栽とあり巻に軸を合せたる也此名別しては此巻の名惣じては一部の名の事祕の義に同じ手習の君一

生の間夢のごとくなる事也祕ニ同ジ此物語帝皇四代年紀七十年其間に書あらはしたる人々又夢也又源氏君譽をとり薫の世にめでられしも又かくの如し浮橋の二字の事逍遙院齊物論の事祕に同じ　引歌　世の中は夢のわたりの浮橋か云々諸抄に同じ　枳里訖王の十夢之事を引一說有あたらぬ事也不レ可レ用レ之其外諸抄の內被レ用分所々において朱をしもて合點畢　師說六夢の事を引かる仍て左に注し畢

列子　周穆王第三　覺有ニ八徵ー夢有ニ六候ー奚謂ニ八徵ー一曰故二曰爲三曰得四曰喪五曰哀六曰樂七曰生八曰死此者八徵形所レ接　八徵注略而不レ載レ之　奚謂ニ六候ー一曰正夢二曰蘁夢（靈イ）三曰思夢四曰寤夢五曰喜夢六曰懼夢此六者神所レ交也注六候之夢與ニ周禮ー同人心之中虛靈知覺事有ニ兆朕ー見ニ於夢ー者正也正夢先兆之夢也靈者夢中驚靈而覺者也思者因ニ所思ー而成レ夢也寤者時見覺時事也喜者因レ有レ所レ喜而夢也懼者因レ有レ所レ憂懼而夢也懼與レ靈ー不レ同周禮注中却無ニ分別ー此皆在ニ我之神ー爲レ之故曰神所レ交也交者交ニ於外境界ー也是周禮より出云々而隨ニ引得勘ー載レ之了　正夢　物に感動する所もなくて見る夢也孔子の周公を夢にみる類也云々　靈夢　傳說か事などなるべき歟　此物語には明石の入道が夢など成べし　思夢　思ひ寢の夢の心なり　葵上の夢には六條御息所の平生のかたちにもあらずおそろしく見えしなどなるべし　寤夢　うつゝの時の事を見る也　平生の云事有事を見る是也是則此物語一部の作樣なるべし　喜夢　よろこびの有て見る夢也　丁固生松之夢など成べし此物語蓬生卷にや常陸宮を晝寢の夢に末摘の見給うてもりてぬれたる所などをつくろひ給ひしに源氏のおはしたる事有しなど歟　懼夢　うれへ恐るゝ事有てみる夢也　源氏須磨の浦へうつろひ給ひて雨風の難有し夜桐壺の帝の朱雀院をにらみ給ひし夢などなるべし　案之此卷に夢のやう也といふ事を五所にかけり是六夢を心にあてゝ一つをば題號にゆづりて書殘せる成べしそれをしらせん爲に手習卷の末にうちみん夢のといふ事をかけりと云々

私此義天正二年二月八日此一部講談終の時に中し聞書の分あら〳〵しるしつくる所也猶此趣を以て委細に了簡すべし　已上箋の義なり

山におはしてれいせさせ給ふやうに經佛(キヤウホトケ)などくやう
せさせ給ふ　花月の八日山の中堂にて薫の經佛など
供養したまふなり手習卷にも見えたり　祕かをる
中堂へ參り給へり小野へ行給ふべき心ざしの有故
也　箋手習卷のつゞきなり
とし比御いのりなどにつけかたらひ　薫のとし比の
祈の師ぞと也僧都の事付語ふ歟
一品宮の御心地のほど　女一宮御物の氣の事手習卷
にみえたり
すぐれ給へるげむ　河驗
おも〳〵しう　祕僧都の心なり
もてさわぎ　僧都のけいめいする也
小野のわたりにしり給へるやどりや侍る　河小野徑(ワタリ)
此處(ワタリ)遊仙窟　箋かをるの僧都にとひ給ふことばな
り
しか侍り　祕僧都の返答なり
ことやうなる所になん　祕よの常ならず見ぐるしき
所と也
京にはか〳〵しきすみかも侍らぬうちに　弄はか
はかしき栖もなし又山へちかくすませんとの詞な
り
そのわたりにはたゞちかき比ほひまで人おほく　祕
薫の詞夕霧のかよひ給ひし御息所の住給ひしわた
りなれば也　夕霧のかよひ給ひし小野の邊とみゆ
其比迄は人多住しにや
いとうきたる心地もし侍り　又薫の詞治定ならぬ心
地すれどもと也
かの山里に知るべき人の　箋小野に浮舟のある事也
たしかにてこそはいかなるさまにてなどももらし聞
えめ　治定を聞定めて申さんとおもひつれどもとな
り　河洩聞(モラシキコエ)
御弟子に成ていむ事など　浮舟の僧都の弟子になり
て受戒せしと聞及び給ふとなりそれは實正かとな
り
こゝにうしなひたるやうにかごとかくる人なん　祕
薫のとがなるやうに人のいひかくるとなり私親な
ども有しと云詞にかゝれり　箋かをるを母などの
恨ると也かごとはかこつなり　花かごとかくるは
かこちかくる也
そうづされはよたゞ人に見えざりし　僧都浮舟の有

樣を思ひあはする也是より以下僧都の心中也
かろ〳〵しくはおぼされざりける人にこそ　薫の性
大かたにてはかやうに尋給はじと僧都の思ふと也
たちまちにかたちやつしてける　法師の役とはいひ
ながら餘遠慮もなくて聊爾に出家させさせたると僧
都の今思ひ當ると也
いらへ聞えんやう思ひまはさる　僧都の恐怖して返
答の樣を色々思案をめぐらすとなり
たしかに聞給へるにこそ　是より返答思案の樣也
中々あらがひかくさんに　清　後に聞えてはいかゞと也
とばかり思ひえて　とばかりは暫なり思案をめぐら
して只有のまゝに申さんとおもひ得たるなり
いかなる事にか侍りけん　うるイ　是より僧都の返答也
あやしみ思ひ給ふに人の御ことにやとて　浮舟の事
を速々不審したるよし也
はゝの尼のらうげにはかにおこりて　河老氣老病也
一云勞氣　細所勞の義しかるべし　箋老氣なり
まづあやしき事なんど　箋宇治院にて浮舟を見付し
時の事也
おやのしにかへるをばさしおきてもてあつかひなげ
き　消かへる露なといふ心にかよふへし　箋僧都の
母の事也僧都の妹の尼君のあつかひなげきたるを
いふなるべし
此人もなくなり給へる樣ながらさすがにいきはかよ
ひて　細うきふねの事也
たまどのに置たりけん人のたとひ　河定家卿云うつ
ぼの物語也と云々可ㇾ勘たまどのは殯殿也天稚彦
薨逝之後下照姫天に喪屋をつくりて殯すといへり
或說カリモカリ也續日本紀云大寶二年十二月辛酉日殯㆓南
殿㆒太上皇持統崩なと有　或又魂殿ともいふか禮
記には殯宮といへり聖德太子令㆓入定㆒給所を夢殿
といへるも同事也此事若呂后高祖后事をいへる歟彼
后の山陵を數百年の後赤眉の黨の寶をとらん
が爲に堀おこすに死人の形美麗にして如ㇾ
存仍赤眉の黨是にめでゝ千人犯之云々　後漢
書に見えたり唐土には死人の口に玉を含まし
めてうづみぬれば年をふれども形骸不㆓爛壞㆒
云々我朝にも上古は帝崩御の時玉をふくませ奉り
けり已上河海私不ㇾ用ㇾ之　花魂殿は山作所をいふ
也後漢書に呂太后の山陵をほりて赤眉の黨の犯し

たる事を河海等の諸抄に引りそれは爰にあたらぬ説也たまごのに置たりけん人のたとひといふはたとへば人の死せるをすでに入棺して火屋などに置たるがけうにしてよみかへりたる事の有べき也それを心にかけて求見るべき也　弄河海の説いづれも不レ叶にや入棺したる人の蘇生したる事也宇治の御子難波の御子仁徳天皇に逢奉りてものを宣ひし事相叶べき歟花鳥に有以上弄　祕花鳥にいへる然るべし又宇治の事なれば宇治稚子の棺にふしてうせ給ひにける事相叶べきと也宇治稚子の事花鳥橋姫巻にしるせり以上祕　箋魂殿なき人を置所也なき人の蘇生したる本説を勘ふべし又宇治稚子の事可レ引レ之　河海之説不レ可レ用レ之

をしむへきよはひならねど　僧都の母のとしたけてをしからぬといふなり　旅の空にてむなしくなさん事を思ひて様々見あつかひしと也

念佛をも心みだれず　河一心不亂阿彌陀經

てんくうこだまやうの物のあざむきゐてたてまつり

河天狗　歎将(アサムキヰテ)　黄帝伐二蚩尤一之時以二正月十五日一伐二斬之一其首者上爲二天狗一其身伏而成二地靈一本朝月令　以上河海　花天狗といふは星の名也本朝に用る所は天魔の類にいへり

京にゐて奉りても　京と云不審小野の事をいふか(へるかイ)

三月(ミツキ)ばかりはなき人にて　祕僧都のみつけたるは三月の末の事也前に秋に成てとあれば四五六の三月はなき人のごとく成し事也箋　弄みつきばかり也　私河說不レ用レ之　河此三月は訓歟音歟但いづれもいたく事たがひ侍るまじき也手習君うせにしは三月の事也浮舟巻に兵部卿宮此月つごもり比に迎へむとし給ふと有るは三月晦日歟大將は卯月の十日となんさだめけると有故也又僧都明石中宮に此三月に年老て侍る母の願有てはつせにまうでて侍りし中やとりにてと語申き又うま子の紀伊守小野の尼に逢ても故宮の御母(女イ)一所はひとゝせうせ給ひにきその御おとうと忍びてすゑ奉給へりけるをこぞの春又失給るにければさいへり然ば三月に身をなげんとせしを見付る事勿論也仍その月の中はなき人のやうなるといはんもその謂あるべし又手習巻にうちはへあつかふほどに四五月に過ぬと有是も四月五月歟又よつきいつゝき歟不審也

是は先の三月にしたがひて讀侍るべし三月はなき人のやうに其後一兩月猶おこたらねば前後四五ケ月也ける歟又三月中は死人のやうにて四月五月が程は猶煩ひける歟さりながら四五ケ月までなほなやみけるを僧都の祈やめけるにや三月より四五ケ月は六月七月の比にあたる歟心地おこたりて後に秋に成行ば空のけはひ哀なるを門田のいねかるとてといはん時節も叶にや又聟の中將我しめゆはんとよみてかへりて又のたび八月十日あまり小鷹狩のついでに來れりと見えたりされば三月にて有べしばかりの詞も其心歟

左衛門督の北のかた　僧都妹小野の尼也

かのさかもとにみづからおり侍りてごしん　箋護身(ゴシン)　河以前の惠心僧都千日の山籠の時西坂本まで下山せられける事を思ひていふ歟

猶此らうじたりける物　河靈　又領じたる物氣也

まことにすけせしめ奉りてしに侍　箋出家也　祕ありのまゝに申也

しろしめすべき事とは　箋薫御存知の人とはいかで推量せんとなり

おとなくて侍りつるになん　めづらしき事なれば物語にもせまほしかりつれ共物の聞え有てわづらはしき事せもこそと沙汰せざりしとなり

さてこそあれとほのきゝて　祕薫の心也　浮舟なりと治定し給へり　私内々も浮舟と推量したればこそかくまでも僧都には問給へれど也されど一定と彌聞定てはさしあたりて夢の心地すると也

夢の心地して　祕こゝにて始て夢の字あり　箋夢の始也必定浮舟と聞定てから更に夢の心地する也

かくまでみゆべき事かはと　薫の心よわき樣を僧都につゝむなり

かくおぼしける事を此世にはなき人とおなじやうになしたる　祕僧都の心也薫の愁傷をあやしとおもふなり　私薫の思ひあまり給へるさまを見て深切なることゝ僧都の思ふなりなき人とおなしやうにとは出家したる人は男女のむつび有まじければなくなりたるとおなじ人のやうに薫のおもひ給はんとなり

あやまちしたる心地して　箋僧都の我があやまちと出家の事を思ふなり

さきの世のちぎりなり　箋前業の所感にて物氣にも領せられたると也僧都に似合たる詞也藥師經にこけるにや業病鬼病四大病有業病は前業を感ずる病也鬼病は物の氣狐天狗などに領せらるゝ事也四大病は地水火風より起りたる風寒暑濕におかさるゝ病也前に藥師の事を書て此心いとよく相叶へり此浮舟を鬼病にして業病成べし

たかき家の子にこそ　族姓然るべき人にこそと浮舟の事を思ふ也

なま王かんとほりなどいふべき　祕薫の返答也　河生王家無等倫　八十之子孫日本紀王之子孫也　箋王孫といふべきにやあらんとて眞實をばの給はぬと也

わざと思ひし事にも　尋もとめてえたる人に非ずはかなくて見そめしこと〳〵しからぬやうに宣ふ也　薫の詞

おちあふるべききはとは　こと〴〵しききはの人にはあらねどまたかやうにかろ〴〵しき心あらんほどとは思ひ給はざりしと也

つみかろめてものすなれば　祕出家の事也　浮舟の出家の事なり

いと心やすくみづからは思ひ給へなりぬるを　箋薫は出家の事然るべしと思ふよし也僧都の恐怖したるを見しりてかくの給ふなるべし

つげしらせまほしく　薫の失ひたるやうに思ふほどに母にはしらせたきとなり

月比かくさせ給ふほいたがふやうに　小野の尼人にしらせしといひし本意にたがふへしと也薫の用意ふかし

かなしびにたへでとぶらひものしなど　箋此事をしりたらば母の小野へ尋ゆかんとなり

いとびんなきしるべとは　僧都の似合ぬしるべなれども小野へおはせよとなり

夢のやうなることゞもも　祕夢の字二箋

かた地をかへ世をそむき　祕僧都の心也

あやしき心はうせぬも　箋婬欲の心なり

つみえぬべきわざ　薫の昔のごとくいひより給てはいかゞ有んと也出家の後はいよ〳〵罪有べき事を思ふなり

まかりおりん事けふあすはさはり侍　祕僧都の返答也

月たちての程に　來月といふ歟隙次第に御案内を申
さんとなり
いさ心もとなけれど　薫の心待遠に思ひ給ふ也
かの御せうとのわらは御ともにてゐておはしたり
祕手習巻にうちみん夢の哀をそへんといひし人也
箋浮舟の弟なり
ことはらからともよりはかたちもきよげなるを常陸
が子どもの中にはかたちよしとなり
その人のちかきゆかり　箋浮舟の弟とはの給はぬ也
わらはをいふなり薫の詞なり
是をかつ〳〵ものせん　此童をつかひにやらんと也
御文一くだり給へ　箋僧都の文を給へ小野へしるべ
にせんと也
なにがし此しるべにてかならずつみえ侍りなん　此
事のしるべをせば破戒にならんとなり僧都の詞也
ことの有樣はくはしくとり申つ　前のことはありの
まゝにかたり申つ是よりは薫のみづからおはして
ともかくもし給へとありのまゝに申すなり
うちわらひて　祕かをるなり
つみえぬべきしるべと思ひなし給ふらんこそ　箋薫
の詞浮舟の出家し戒など受たる人を破らんと思ひ
給ふかと也
こゝにはぞくのかたちにて　河俗形也薫の我か身を
宣ふ也
おもふ心ざし深く侍るを　出家の素懷ある也
三條宮の心ぼそげにて　祕女三宮なり
たのもしげなき身ひとつを　祕薫の我身の事を宣ふ
也
おのづから位などいふ事もたかくなりて　弄官位お
もく成て發心をさまたげらるゝと歎給ふ心殊勝
也
またえならぬことも　世間にかくつらうよりかく成
は定れる事也
佛のせいし給ふかた　箋薫の身になる程は禁戒をた
もつと也
たゞいとほしきおやのおもひなどを　母の心を哀ぶ
と也薫の好色のかたならぬ事をことわり給ふ也
ふかゝりしかたの心ばへを　道心の深き事也
僧都もげにとうなづきて　僧都薫の心中を領納して
いよ〳〵佛法などいひきかせ申すなり

中やどりもいとよかりぬべけれど　薫の心小野の事
也
うはの空にてものしたらんこそ　猶未定なる心也
文かきてとらせ給　祕僧都の文なり　薫の好色なら
ぬ所を聞定て僧都の文遣したる心尤おもしろし
とき〳〵は山におはして　僧都の童にいふ詞也
すゞろなるやうにおぼすまじき　弄手習の弟のわら
はに僧都の宣ふなり手習の君をしり給へば也　祕
浮舟をも我が弟子にせし故にへだて給ふまじと也
此子は心もえねど　童は何事とも思ひわかぬ也文書
てとらせ又すゞろなるやうには覺すまじなどの給
ふ事共也
さかもとになれば御せんの人々すこし立あかれて
西坂下也あかれは分散（アカレ）　河小野へのあたりを忍び
やかにと也
しげりたる青葉の山にむかひて　河只青葉の山也名
所にあらず見二八雲御抄一　勘二付若菜卷一了　弄非
名所也名所には若狹近江等にあり　祕名所に非ず
夏木立なるべし箋　河六帖「もみぢする秋はきに
けり水鳥の青葉の山の色つくみれば

やり水の螢ばかりをむかし覺ゆる　浮舟の心宇治邊
の螢を思ひ出るなるべし
れいのはるかにみやらるゝ谷の軒端より　祕谷にあ
たりて見えたる軒端なり　箋中將の來りしを見や
りし軒端なり　私常にながめやる谷の入家の體也
猶河海等にしるされたり　河谷の軒端不レ審有に
よりて谷のきはとなほしたる本もあり今案也谷の
軒端とは谷の端也軒も家のはし也谷の戸共いふ谷
の戸の有べきにてはなしいづれも似せもの也山あ
ひなどよりみゆる所を谷の軒端といへる歟夕霧卷
にひさしの軒とあり手習卷にもはるかなる軒端と
有是又同じ風情也一說云はるかなる谷の軒端にあ
たりて近くみゆる心歟軒端の梅松などいふも軒に
木をうふる事はなけれども軒近き心なり　箋河海
に二の心を出し侍りかさねて案ずるに谷の軒端は
只谷に有家の軒端なるべしむかひの山を下る人の
軒のはづれよりみゆるといはんもたがひ侍るべか
らざるにや私花鳥の箋祕箋同じ尤然るべし
おほふともしたる火のごかならぬ光　薫の下山の
樣也　箋のごかならぬ光とは人の多きはかやうに

みゆる也　私のごかならぬとは松明のあまたして
あとさきに成などする體也寂蓮が歌に鵜飼舟高瀬さしこす程なれやむすぼゝれ行かゝり火の影といへるは川の高瀬を舟のこしかぬるとてやすらふ故に篝火の影のむすほゝるゝと讀る也此歌はしづかなる心也されども舟のやすらひたゞよふ故にむすぼゝるゝなり

ひるあなたに引ほし奉られたりつるかへり事に大將殿のおはしまして　祕尼君の詞也　祕引ほし海藻也
箋あなたとは僧都の坊なり

いとこの世とほく　薫の事をさへよくしらぬをいふ也浮舟の心なり

まことにさにやあらん　浮舟の心にさも有かと思ふ也

かゝる山路分おはせし時いとしるかりしずゐじんの聲も聞ゆ　弄宇治へ薫のおはせし事なり　祕浮舟の心なりうちつけに御隨身の聲もそれと思合せられたる也

むかしの事のかく思ひわすれぬも　浮舟のむかしをおもひわすれぬことをみづから心に懺悔するなり

あみた佛におもひまぎらはして　浮舟の念佛にまぎらはしぬる也おもしろき詞なり

横川にかよふ人のみなん　祕こゝのさまなり

かのとのは此子をやがてやらんと　薫のこのかへさに則せうとの童をやらんと覺しけれど供奉の人もいかゞ思はんとおもひさゞまり給ふ也尤用意深し

またの日ことさらにそ　翌日わざと童を小野へつかはし給ふ也

つねにつかはしゝ隨身　宇治へつかはしゝ事也　前にみえたり

人きかぬまによびよせ給て　祕常陸守が子也イニ事也
薫のわらはを召よするなり

あこがうせにしいもうとの顔はおぼゆや　河吾子(アコ)日本紀
河女をば姉をもいもうとゝいふ男をば弟をもせうとゝいふ也　祕浮舟の事也姉なれど女をばいもうとゝいへり　弄薫の詞也

はゝにはまだしきにいふな　浮舟の母にはやくしらせたらは驚さわぎて事ひろくならんと童に薫のくちかため給ふ也

そのおやの御思ひの　河御思　母の心のいとほしさに

こそ尋ねつれども不定なる事をばきかせじとなり
をさなき心地にもはらからはおほかれど　童の心也
兄弟多けれど浮舟は入宮の御女なればかたちのすぐれたる成べし
をゝとあらゝかに　弄涙のおつればあらくをゝといらへてまぎらはしけるあはれなり　花をゝは唯也いらふる聲也涙のまぎらはしもをゝとあらゝかにいらへたる也
かしこにはまだつとめて僧都の御もとより　箋僧都より翌朝早々使の有る様也小野へなり
よべ大將どのゝ御使にて小君やまうて給へりし　弄小君也　私文の詞也僧都は昨日のかへさに御つかひつかはされんと思ひし也
かへりておくし侍りて　河臆なり　祕迷惑せし心なるべし
姫君に聞え給へ　箋浮舟なり
けふあすすぐしてさぶらふべしと書給へり　薫へもけふあすいとまいると有し事成べし尼公への文なるべし
これは何事ぞと　尼君のおどろきたることは也

こなたへもてわたりて　心得ぬまゝに浮舟の君にみする也
おもてうちあかめてものゝ聞えの有にやと　浮舟君の様也人にしられぬると心ぐるしき也
物かくし之けると　尼君に此ほどかくしつる事也
猶の給はせよ　箋事の様をしらせ給へと尼君の詞也
事のよしをしらぬ事なれは尼君のおどろきあはてたる様也
山より僧都の御せうそこにてまゐりたる人なんあると　箋僧都の薫などの文を持て小君の來ること也
これこそはさはたしかなる御せうそこならめとて
今朝の僧都の文にてはことわり聞えざりし也然るに又僧都御文といへばこれにて心得らるべしとおもふ也
しなやかなるわらはの　小君也　河参差（シントシナヤカナ）白氏文集
わらうださしいでたれば　河藁座　圓座也　祕圓座なり
かやうにてはさぶらふまじくこそは僧都の給ひしかといへば　祕此童の詞也　浮舟と童と兄弟の事は薫のはじめていひしらせ給へと僧都のいへる心尤

用意有　箋簾外にてよそ〳〵しく有べき事ならずと僧都の丶給ひしとわらはのいふことばなり
入道の姫君の御かたに　浮舟をさしていへり僧都の文のあてどころなり
名かきたまへり　祕僧都の名なり　僧都の文のさま也たしかに書たる體なり
いとはしたなく覺えて　浮舟の心なり
つねにほこりかならず物し給ふ人がらなれどいとうたて心うしなどいひて僧都の御文をみれば　是は尼君の詞也さて文をも尼君のみるなり
けさこゝに大將殿の物し給ひて　祕文の詞弄箋同僧都の文は昨日横川にて書て童にとらせし文也されば今朝と云り
御有樣たづねとひ給に　箋薫のよく〳〵爰におはするをしりて問たまひしかば有のまゝに申たるとなり
かへりては佛のせめそふべき　箋薫の執心をとめたる情なくそむきたる事をかくいへり都て罪とならんと也
いかゞはせん　弄せんかたなしよしやなどいふ心也

もとの御契あやまち給はであいしふの罪をはるかし　箋此まゝにては薫の愛執はなるべからずもとの如くの契になり愛執の罪をはらせとなり
一日出家のくどくは　河心地觀經云若善男子及善女人發ニ阿耨多罪三藐三菩提心ニ一日一夜出家修道二百萬劫不ㇾ墮ニ惡趣ニ常生ニ善處ニ受ニ勝妙樂ニ遇ニ善識ニ永不ニ退轉ニ得値諸佛受菩提記坐金剛座成ニ正覺道ニ　箋一日一夜出家の功德さへばかりもなき事也浮舟はましてと也されば叉薫の心にしたがひ給へといふ心なり
猶たのませ給へ　薫ともとのごとく契給ふとも一たび出家のくどくはむなしかるべからずとたのませ給へとなり
こと〳〵には　祕毎事はまゐりて申べしと也　河こと〴〵くにはとあり悉なり
まがふべくもあらずかきあきらめ　箋浮舟の心に分明に見しる也されど何とも宣ふ事なければ尼君などは心得ぬ也
この君はたれにかおはすらん　箋童の事也浮舟の爲いかやうの人ぞと也尼君の詞とみえたり

すこし外ざまにむきて見給へば　河外様(トサマ)　箋浮舟の體なり
今はと世をおもひなりし　箋身をなげんとせし夕也
あやにくにおごりて　箋童のをさなかりし時の事也
うぢにもとき〳〵　箋宇治にも也祕
思ひ出るも夢のやうなり　祕夢の字三也箋
こと人々のうへは　箋薫などの事をばよそのやうに人のいふを聞也
すこしうちおぼえ給へる　祕浮舟に似たり箋　尼君の詞なるべし
なにか今は世に有物とも　浮舟の心中也　祕浮舟の詞と有いかゞ
とばかりためらひて　しばし涙をおさゆる心也
げにへだてありともおぼしなすらんか　花浮舟の君の尼君に語給ふ詞なり
物もいはれで　箋隔心とおぼすらんかく物もいはれぬと也
あさましかりけん有様　物にとられし時の事也それより本心もうせたまましひもたがひたるにや過にしかたの事皆忘れたると也

見しあたりの事にやと　紀伊守が物語に宇治の事を云し事也
其のちとざまかうざまに　紀伊守が物語を便りにして思ひ出んとすれども猶思ひ出られぬとなり
たゞ一人ものし給ひし　浮舟の母の事也
まだや世におはすらんと　祕かくのごとし
かの人もし世にものし給はゞ　祕母の事なり
此僧都のゝ給へる人　祕かをるの事なり箋
ひかことなりけりと　箋浮舟にはあらぬやうにいひなし給へと也
いとかたいことかな　花尼君の近答なり　祕尼君のいふなり
ひじりといふ中にもあまりくまなく　箋僧都は出家の中にも別して有のまゝなる人なれば殘りなく宣ひてんされば薫へかくし申さん事はかたい事也となり
なのめにかろ〳〵しき御ほどにも　箋薫の事也たゞ人などへいふやうにかくす事はならじと皆思ひいふ也
木丁たてゝいれたり　箋童(小君イ)を簾中へよび入る也

此子もさはぎゝつれど　河さは聞つれど也一説さは騒ぎ來つれどなり云々　祕さは聞つれど此説可レ用也一説さわぎ來つれども也　私薫の浮舟の事をいひしらせ給へる事をさは聞つれどゝ云也

また侍る御文　箋是は薫の文也前に有しは僧都の文也かをるの文をば直にわたすべきよしなり

おぼつかなく侍るこそと　木丁ごし成べし物などもの給はねばなるべし

ふしめにていへば　箋ちと無興したる様の體歟

そゝやあなうつくし　河驚破（ソソヤ）也　私童をほむるさまなり

御文御らんずべき人は　箋浮舟の事爰におはすると内よりいらへたるなり尼君歟

けそうの人なん　河顯證人　亦見所人　見證人也弄　箋見證人也あたりの人は心得がたき様體ぞといふ也花箋に同じ

猶の給はせよ　祕尼公のいふなり　私是は何としたる事ぞとの心をの給へと小君にいふなり

をさなき御ほどなれど　箋かやうの童などを此使と有はやうある事成べしとなり

おぼしへだてゝおぼ〳〵しく　箋童の詞也　祕たどたどしくなどいふやうのこと歟

此御文を人づてならで　花童の詞なり　箋かをるの御文なり

いとことはりなり　尼君の詞なり

木丁のもとにおしよせたれば　箋浮舟をおしよする也

こと人にはにぬ心地すれば　木丁ごしなれど浮舟のけはひしるきなり　わらはの心なり

たてまつりつ　直に浮舟へわたすなり

御かへりとく給はりて　わらはの詞なり

かくうと〳〵しきを　對面もなきを童の心うく思ふ也

ひきさきてみせ奉る　箋薫の御文を披て尼公の浮舟へみする也

ありしながらの御手にて　河（臭人）とりかへす物にもかなや世の中を有しながらの我身と思はん　箋薫の手の事也　不レ及二引歌一

かみの香などれいのよづかぬまで　紙の香なりあまりなるまでかうばしきをよづかぬといへり

ものめでのさし過人　祕草子地なり　少將の尼左衛
門などいふ人なるべし
さらにきこえんかたなく　かをるの文の詞也花箋
さま〴〵につみおもき御心をば僧都に思ひゆるし
匂の事又夫故身をなげんとせし事などなるべし僧
都にゆるして恨を殘さぬよし也匂宮などへ密通の
事母などをとゞめて入水せし事などをさま〴〵と
いへり僧都に思ひゆるしとは大悲大受苦など其人
の苦にかはる事有觀音大士などこれ也出家など有
し事もこもるべし薫などのかくねんごろにの給ふ
心をもしらずかほに形をやつし給ふは都てその身
の罪なるべしされどもそれをも僧都に對してゆる
すとのこゝろなるべき歟
あさましかりし世の夢がたりをだにも　祕夢四つめ
也箋
われながらもどかしき　祕我身さへもどかしましして
人はいかにおもふらんとなり　箋浮舟は薫をさや
うには思ふまじきと也
人めはいかにと　箋よそにしてみる人はいかにもど
かしからんと也

かきもやり給はず　文(フミ)のさまのしどろにみえたるな
るべし
薫法の師と尋る道をしるべにておもはぬ山にふみまど
ふ哉　祕法の師にのみこそ僧都をば賴むべきにかく
思ひかけざることにたのみたると也五文字との字
めづらしくおもしろき也箋　箋おもはぬ山はかね
て思ひもよらぬ心なり
この人は見やわすれ　箋わらはの事なり
ゆくへなき御かたみ　箋薫は浮舟のかたみにと思ふ
となり
かくつぶ〴〵と書給へるさまの　此文をみて浮舟の
おもふ心也
その人にもあらぬさまを　箋今の有さまを薫に見え
ん事ははしたなかるべしと今よりおもふ心なり
はれ〴〵しからぬ心は　浮舟の常に物よわき樣也
いとよつかぬ御ありさま　祕尼君の心なり
いかゞ聞えん　祕尼君のいへるなり
心地のかきみだるやうに　浮舟の詞なり
いかなりける夢にかと　夢五つめなり箋
すこししづまりてや此御文も　心をしづめてたが御

文ぞと思ひ出んと也御ふみ（けふはイ）はまづとりてかへり給
（イナシ）へるとなり
ひろげながら尼君にさしやり　文を尼のかたへやる
也
あまりけしからぬは見奉る人もつみさり所なかるべ
し　河心深き人をば罪得かましきといふなりされ
ば罪さるとはつみ淺きよし也　花つみはさが也さ
がをのがれんかたなき也河海の說如何覺え侍りき
私花の說然るべし
聞にくゝおぼゆ　浮舟の心也是はさぶらふ尼ども也
あるじぞ此君に　祕尼君なり　箋此君はわらはなり
ものゝけにやおはすらん　浮舟の事をいふ也
御かたちもこゝに　箋出家の事なり
心くるしき御事どもの　箋薰の念比に尋給ふ事なり
又聊爾に出家をさせたる事となり
日比もうちはへなやませ　箋浮舟のわづらひ也
かゝることゝもにおほしみたるゝにや　箋薰などの
尋給ふ故に浮舟の思ひみたるゝにやといふなり
わざとたてまつれさせ給へるしるしに何事をかは聞
えさせん　童の詞也返事のなきをいふなり

げになどいひて　尼君のいふなり
かくなんとうつしかたれど　祕童のいへる詞を寫し
て語る也　口うつしのやうなるべし
たゞかくおぼつかなき御有樣を　箋尼公の詞浮舟の
樣を有のまゝに申給へとなり
雲のはるかにへだゝらぬ　花（古）「逢事は雲ゐはるかにな
る神のおとに聞つゝ戀やわたらん　私花鳥引歌如
何箋　祕引歌未レ勘レ之心は横川は雲の八重立山と
いへれど此あたりはさまで深からぬ所なれば嵐は
はげしくともをり〳〵はとぶらひしたまへと小君
にいひたるなり
山かせ吹とも　祕山深くともと云一本有心は同じか
るべし　箋小野の體也引歌可レ有歟但不レ及二引歌一
事也　弄イ本山深くとも
すゞろにゐくらさんも　箋童の心なり　私浮舟の對
面なればすゞろにといへり
ゆかしき御有さま　箋浮舟を小君の思ふ心なり
心ゆかずなから　箋たゞ〳〵しく返事申べき樣もな
きを云也
いつしかとまちおはするに　祕薰なり

すさまじく中々なりと　箋かをるの心也

人のかくしすゑたるにやあらんと我御心のおもひよらぬくまなくおとしおき給へりしならひにとこそ　河落置也玉鬘巻におとしあふさすと有又あげまきの巻にもすてがたくおとしおき奉りけんと有此心なり　花おとしは人をなどす心にやかくしすゑたる人におこされて返事もし給はぬにやと我心ならひに思ひ給ふ也河海に落置といへるおぼつかなし　弄　薫のかくしすゑ置給ひしやうにや今人のおき奉るらんと思ひめぐらし給ふなり　祕花鳥の説いかゞもしかくすゑたる人有かと也薫の宇治にかくしすゑ給へるやうにして置奉るかと也　箋薫の推量なり祕の義に同し

本(ホン)にはべめる　三本逍遙の自筆に此詞は小書にてイとあり・　祕紫式部一部我身の書たるといふをしらせじとてむざ〳〵と夢や何やのやうに書て捄本にかやうの事有るといへる心なりかやうにして行末を限り見はてぬ夢のさま甚深微妙の趣句とみえたり　箋是は一部を我はかゝぬと式部が見せたる詞也本にあるを寫したるよし也但此詞有は異本也されば其此詞を讀たる吉也おとし置給へるならひにとそと有は書さしたる樣也本に侍るめるは一部の通りたるになる也云々師說にとそと書たるも末はおぼつかなし又本に侍めるも又末は殘るべし然らば本にはべめるとよみたるが吉也云々

奥入云　此愚本求二數多舊手跡三本一抽二彼是一用捨短慮所レ及雖レ有二琢磨之志一未レ及二九牛之一毛一非蛙之淺才寧及哉只可レ招二嘲哢一縱雖レ有二勘加事一又是不レ足レ言未レ及二尋得一以前依二不慮一此本披二露於遐邇一門々戶々寫預二誹謗一々々雖二後悔一無レ詮懲二前事一每卷奧所レ注二付僻案一切出爲二別紙一之間歌等多切失了旁難レ堪二恥辱一之外無レ他向後可レ停二止他見一（也イ）私云此奥書有二落字僻字等一求二證本一追可二紏正一之（非人ゑ門明靜）河海抄奥書云此抄一部二十卷手自令二校合一加二覆勘一了可レ爲二治定之證本一焉議同三司源判　抄出之作者善成公也　花鳥餘情奥書云愚應仁之亂初避二上都一暫寓二九條之坊一困斂之秋重赴二南京一纔卜二十弓之地一爾來已歷二五秋螢一空感二雙蓬鬢一遂倒之餘功夫之暇忘二白樂天世俗文字過玩一紫式部源氏物語之詞篇々通二至敎之命脉一句々貫二和歌之骨髓一於レ是每二觀覽一知二日新月盛一及二尋繹悟一今是昨非遂

抱河海之流盡眞源於心底破促花鳥使寫餘情於毫端也耳文明四年龍集壬辰除月上澣桃花居士七十一歳誌焉　弄花云文明第八仲夏初九入眼畢　從同年七月中旬迄落字上旬見合物語畢同九年二月重加點　私云年合點畧之肖柏追聞書初開之後十四年長享三年季春中八於種玉受庵主說合點了一答とは文明第九宗祇法師所々不審問題（等之イ）後成恩寺禪閣答也　一勘とは文明十二庚子季春肖柏尋申禪閣條々以彼自筆被注付勘載合點等也自桐壺至若菜下其外細碎同題等也以上兩問答花鳥未遂一覽之前歟仍彼抄之內不審等有之私今所寫之者件兩問答並追而聞書十卷悉一所書載之童稚之不審重說等雖無益先任本寫置者也　右肖柏老人聞書借請之六月廿七日立筆連々忿忙八月十七日終其功七冊調之靜加一見可淸書之抄物也永正七年記之在御判逍遙院也又云此抄云六月下旬立筆今日終書功調而爲七冊不可他見而已永正第七八月十七日三條西入道前內大臣（是も逍遙院也）三抄奧書此聞書旨趣注夢浮橋奧歟胸臆荒凉之談卒爾所注置不可漏脫之所能州刺史義總數奇深功之餘寄紙懇望之間不獲止書全部以附與之云々卷々予加一見了猶宜令取捨不可被出深窓之外而已　大永戊子夏五下旬候　老比丘御判（逍遙院內府也）　同重奧書云此抄胸臆之談公條卿（稱名院右府也）卒爾之聞書也遂先年能州刺史之聽寄紙懇望不獲止寫送之處不慮燹（之災イ）失却無念之由重而來命之間終書功々々一見外題染老筆穴賢々々可被禁他見而已　天文甲午曆冬至日　八旬老衲判同上　年立奧書云源氏物語年立一冊者故禪定閣下所製作也件正本應仁大亂於桃坊文庫爲白波被奪取畢爰經十年不慮感得之懌無物于取喩此一帖以彼眞本加書寫者也未流布世間雖無出窓外感數奇之志付囑左金吾訖深祕箱底莫令他見永正七載季夏中吉前博陸叟御判後成恩寺殿息一條殿冬良公也

此光源氏物語者本朝風俗翫之爲吟風弄月之捷徑矣余先是時々雖陪三光院內府講筵不能畢功於全部以爲遺憾焉而後謄寫河海花鳥餘情弄花等之諸抄然以其繁多而不便一覽雖校正之期於歸一在微臣之列未脫仕宦羅網南去北來無得閑暇空思而止而已矣茲焉也足軒主素

然老人以三余有二識荊之素一避レ迹皈二隱陋邦丹之後列一老人也種姓不凡才識高明寔一時名流也加旃（シカノミナラズ）親二炙三光内府一勤侍二講帷一究二此物語之奥旨一依レ之就二老人一求レ果二余素願一於レ是老人忽感二其志一考三之諸抄一纂者芟訛者正鈌者補互有二得失一者兩存レ之十稔之間雲篡露抄畢二五十帖一可レ謂二集大成一也余乃題以二岷江入楚一矣古云璺二泰山一硯二楚江一紙二乾坤一今併二案此抄一豈多讓哉此所謂入レ楚無レ底者老人之硯滴者也

時慶長第三歳在戊戌星夕之日誌焉

幽齋叟玄旨判

室松岩雄
保持照次　校
信田重並

明治四十三年九月廿五日印刷
明治四十三年九月廿九日發行

定價金參圓

編輯者　室松岩雄
發行者　三里半七
東京市麴町區飯田町五丁目八番地
印刷者　牧口駒三郎
東京市京橋區南鍛冶町五番地
印刷所　牧口印刷所
東京市京橋區南鍛冶町五番地

東京市麴町區飯田町五丁目八番地
發行所　國學院大學出版部

國學院大學出版部